

# Oracle® Application Server Portal

構成ガイド

10g (9.0.4)

部品番号 : B12344-02

2004 年 6 月

Oracle Application Server Portal 構成ガイド, 10g (9.0.4)

部品番号 : B12344-02

原本名 : Oracle Application Server Portal Configuration Guide, 10g (9.0.4)

原本部品番号 : B13675-01

原著者 : Peter Lubbers

原本協力者 : Arun Arat Tharakkal, Balaravikumar, Shanmugasundaram, Barry Hiern, Binodkumar Gupta, Chris van Es, Chung-Ho Chen, Darren McBurney, Dawn Tyler, Demetris Christou, Dmitry Nonkin, Eddy Chee, Eric Lee, Frank Rovitto, Greg Cook, Harry Wong, Helen Barnes, Jason Pepper, Joan Carter, John Bellemore, Madhu Muppagowni, Marcie Caccamo, Mark Clark, Mark Loper, Matthew Davidchuk, Michele Cyran, Mick Andrew, Nick Pounder, P.V. Dharan, Pascal Gibert, Paul Encarnacion, Paul Spencer, Peter Moskovits, Pravin Prabhakar, Pushkar Kapasi, Ramana Adusumilli, Ratna Bhavsar, Rob Giljum, Rod Ward, Rosie Harvey, Ross Clewley, Sachin.Parashar, Senthil Arunagirinathan, Sergiy Pechersky, Sunil Marya, Susan Highmoor, Tim Willard, Todd Vender, Venu Surakanti, Viswanath Dhulipala

Copyright © 2002, 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アSEMBル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する場合、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるとしてプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

---

---

# 目次

はじめに .....	xxi
対象読者 .....	xxii
このマニュアルの構成 .....	xxii
関連ドキュメント .....	xxv
マニュアルの表記規則 .....	xxvi

## 第 I 部 概念

### 1 OracleAS Portal のアーキテクチャについて

1.1 Oracle Application Server とは .....	1-2
1.1.1 Oracle Application Server のソリューションとコンポーネント .....	1-2
1.1.2 Oracle Application Server アーキテクチャの概要 .....	1-6
1.1.2.1 中間層コンポーネント .....	1-7
1.1.2.2 インフラストラクチャ・コンポーネント .....	1-10
1.2 OracleAS Portal のアーキテクチャについて .....	1-12
1.2.1 OracleAS Portal と他のコンポーネントとの統合 .....	1-12
1.2.2 要素を組み合せる方法 .....	1-15
1.2.2.1 OracleAS Portal でページが作成される方法 .....	1-15
1.2.2.2 OracleAS Portal での通信フロー .....	1-17
1.3 OracleAS Portal のキャッシュについて .....	1-21
1.3.1 OracleAS Web Cache について .....	1-22
1.3.2 Portal キャッシュについて .....	1-24
1.3.3 OracleAS Portal におけるキャッシュの失効化について .....	1-25
1.3.3.1 キャッシュ失効化のリソース要件 .....	1-26
1.3.3.2 キャッシュの失効化と複数の DAD .....	1-26
1.3.4 まとめ .....	1-27

### 2 Portal の計画

2.1 考慮すべき要点 .....	2-2
2.1.1 適切なトポロジの選択 .....	2-2

2.1.2	必要なハードウェア .....	2-2
2.1.3	パフォーマンスを最大にする方法 .....	2-3
2.1.4	Portal を拡張する方法 .....	2-4
2.1.5	Portal の可用性を向上させる方法 .....	2-4
2.1.6	Portal を保護する方法 .....	2-5
2.1.7	ハードウェアとソフトウェアを構成する方法 .....	2-5
2.1.7.1	単一のマシンの使用 .....	2-5
2.1.7.2	複数のマシンの使用 .....	2-6
2.1.8	構成の機能を向上させる方法 .....	2-11
2.1.8.1	ロード・バランス .....	2-11
2.1.8.2	フェイルオーバーと冗長性 .....	2-13
2.1.8.3	拡張性 .....	2-14
2.2	必要な作業 .....	2-15
2.2.1	Portal の計画 .....	2-16
2.2.2	OracleAS Portal のアップグレード .....	2-16
2.2.3	インストール前の要件の確認 .....	2-16
2.2.4	Oracle Application Server のインストール .....	2-17
2.2.5	インストール後の構成の実行 .....	2-17
2.2.6	拡張構成の実行 .....	2-17
2.2.7	OracleAS Portal の保護 .....	2-17
2.2.8	OracleAS Portal の監視 .....	2-18
2.2.9	OracleAS Portal のトラブルシューティング .....	2-18

## 第 II 部 インストールと基本構成

### 3 OracleAS Portal のインストール

3.1	インストール・プロセスの機能 .....	3-2
3.2	デフォルトでインストールされる内容 .....	3-8
3.3	インストール時とインストール後の OracleAS Portal の構成 .....	3-9

### 4 基本的な構成および管理の実行

4.1	OracleAS Portal の管理の開始 .....	4-2
4.1.1	OracleAS Portal の「管理」タブの使用 .....	4-2
4.1.2	その他の管理ツールの使用 .....	4-7
4.1.2.1	Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール .....	4-7



4.1.2.2	Portal 依存性設定ファイルおよびツール .....	4-8
4.1.2.3	OracleAS Portal Configuration Assistant .....	4-8
4.1.2.4	Portal のインストールと構成のスクリプト .....	4-8
4.2	OracleAS Portal に関する情報の検索 .....	4-9
4.2.1	ブラウザでの OracleAS Portal へのアクセス .....	4-9
4.2.2	OracleAS Portal のリリース番号の検索 .....	4-9
4.3	基本的なページ管理の実行 .....	4-10
4.3.1	デフォルト・ホーム・ページの設定 .....	4-10
4.3.1.1	システムのデフォルト・ホーム・ページの設定 .....	4-11
4.3.1.2	グループのデフォルト・ホーム・ページの設定 .....	4-11
4.3.1.3	ユーザーのデフォルト・ホーム・ページの設定 .....	4-12
4.3.2	システムのデフォルト・スタイルの設定 .....	4-13
4.3.3	個人用ページの作成 .....	4-14
4.3.3.1	新しいユーザーの個人用ページの自動作成 .....	4-14
4.3.3.2	既存ユーザーの個人用ページの作成 .....	4-15
4.3.4	アップロード・ファイルに割り当てる総容量の設定 .....	4-16
4.3.5	アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズの設定 .....	4-17
4.3.6	ページ・グループ割当ての変更 .....	4-18
4.3.7	エラー・メッセージ・ページの指定 .....	4-19
4.3.8	ユーザーのログアウト時に表示されるページの設定 .....	4-20
4.3.9	状況依存ヘルプ・リンクの削除 .....	4-21
4.4	自己登録の構成 .....	4-22
4.5	基本的な Portal 管理の実行 .....	4-24
4.5.1	OracleAS Portal インスタンスの完全な URL の簡略化 .....	4-24
4.5.2	OracleAS Portal ホーム・ページを使用するための Oracle HTTP Server の構成 .....	4-25
4.5.3	Portal DAD の構成 .....	4-26
4.5.4	Portal キャッシュの消去 .....	4-29
4.5.5	カスタム・イメージ・ディレクトリの使用 .....	4-30
4.6	OracleAS Portal でのモバイル・サポートの構成 .....	4-31
4.6.1	デフォルトでインストールされる内容 .....	4-31
4.6.2	OracleAS Portal でのモバイル設定の構成 .....	4-32
4.6.2.1	モバイル・アクセスの有効化 .....	4-33
4.6.2.2	モバイル・ページ・デザインの有効化 .....	4-34
4.6.2.3	モバイル応答のログ .....	4-35
4.6.3	モバイル設定の手動による再構成 .....	4-36
4.6.3.1	OracleAS Portal ホーム・ページ URL 参照の更新 .....	4-36

4.6.3.2	OracleAS Wireless Portal サービス URL 参照の更新 .....	4-37
4.7	ユーザー、グループおよびパスワードの管理 .....	4-38
4.8	ブラウザ設定の構成 .....	4-38
4.9	言語サポートの構成 .....	4-39
4.10	OracleAS PortalWebDAV の構成 .....	4-42
4.10.1	基本的な WebDAV 構成の実行 .....	4-43
4.10.2	WebDAV クライアントの設定 .....	4-45
4.10.3	WebDAV クライアントと SSL .....	4-45
4.10.4	OraDAV ドライバのバージョンの確認 .....	4-45
4.10.5	mod_oradav.so のバージョンの確認 .....	4-46
4.10.6	エラーの表示 .....	4-46

## 第 III 部 拡張構成

### 5 拡張構成の実行

5.1	OracleAS Portal ポートの変更 .....	5-2
5.2	SSL の構成 .....	5-2
5.3	ロード・バランス・ルーターを使用する複数の中間層の構成 .....	5-3
5.3.1	手順 1: 単一の Portal および Wireless 中間層 (M1) のインストール .....	5-6
5.3.2	手順 2: LBR を通じてアクセスされる M1 での OracleAS Portal の構成 .....	5-7
5.3.3	手順 3: OracleAS Portal が起動し実行中であることの確認 .....	5-13
5.3.4	手順 4: 新しい Portal および Wireless 中間層 (M2) のインストール .....	5-14
5.3.5	手順 5: 既存の Portal を実行するための新しい中間層 (M2) の構成 .....	5-17
5.3.6	手順 6: Portal ツールと Web プロバイダの構成 (オプション) .....	5-22
5.3.7	手順 7: OracleAS Web Cache でのセッション・バインドの有効化 .....	5-27
5.3.8	手順 8: 構成完了の確認 .....	5-28
5.4	仮想ホストの構成 .....	5-29
5.4.1	仮想ホストの作成 .....	5-32
5.4.1.1	www.xyz.com の仮想ホストの作成 .....	5-32
5.4.1.2	www.abc.com の仮想ホストの作成 .....	5-34
5.4.1.3	httpd.conf ファイルの確認 .....	5-34
5.4.1.4	仮想ホストが正しく構成されたことの確認 .....	5-36
5.4.2	OracleAS Web Cache の構成 .....	5-36
5.4.3	OracleAS Single Sign-On への OracleAS Portal の登録 .....	5-36
5.4.4	構成の確認 .....	5-38
5.5	プロキシ・サーバーを使用するための OracleAS Portal の構成 .....	5-38

5.6	逆プロキシ・サーバーの構成 .....	5-40
5.6.1	自己参照型 URL が機能することの確認 .....	5-42
5.6.2	内部サーバーへのループバックの構成 .....	5-43
5.6.3	OracleAS Portal の公開アドレスとプロトコルの指定 .....	5-44
5.6.4	生成済プロバイダとローカルでホストされた Web プロバイダの構成 .....	5-45
5.6.5	ドメイン名の登録 .....	5-46
5.6.6	構成の確認 .....	5-47
5.7	OracleAS Portal 内での OracleAS Web Cache のキャッシュ構成 .....	5-47
5.7.1	OracleAS Web Cache Manager へのアクセス .....	5-48
5.7.2	Application Server Control コンソールを使用した Web Cache 設定の構成 .....	5-49
5.7.3	OracleAS Portal を使用した Web Cache 設定の構成 .....	5-49
5.7.3.1	Web Cache 全体の消去 .....	5-50
5.7.3.2	特定ユーザーのキャッシュの消去 .....	5-50
5.7.3.3	失効化ベースのキャッシュの有効期間の設定 .....	5-51
5.7.3.4	特定 Portal オブジェクトのキャッシュの消去 .....	5-52
5.7.4	SQL*PLUS によるキャッシュ失効化キューの消去 .....	5-52
5.7.5	OracleAS Web Cache のログの評価 .....	5-53
5.7.6	OracleAS Web Cache 構成スクリプト .....	5-53
5.7.7	OracleAS Web Cache 構成のトラブルシューティング .....	5-54
5.8	中間層で使用されるインフラストラクチャ・サービスの変更 .....	5-54
5.9	OracleAS Wireless の構成 .....	5-55
5.10	OracleAS Portal スキーマのパスワードの変更 .....	5-55

## 6 OracleAS Portal の保護

6.1	OracleAS Portal のセキュリティについて .....	6-2
6.1.1	OracleAS Portal のセキュリティ・モデル .....	6-2
6.1.2	ユーザーのクラスとその権限 .....	6-6
6.1.2.1	OracleAS Portal のデフォルトの生成済ユーザー・アカウント .....	6-6
6.1.2.2	OracleAS Portal のデフォルトの生成済のグループ .....	6-7
6.1.3	保護されているリソース .....	6-10
6.1.3.1	グローバル権限 .....	6-10
6.1.3.2	オブジェクト権限 .....	6-17
6.1.3.3	Web プロバイダとプロバイダ・グループを作成および編集する権限 .....	6-22
6.1.3.4	ポートレット・リポジトリ内の URL/XML ポートレットを作成または編集する ための権限 .....	6-26
6.1.4	認可とアクセスの適用 .....	6-27

6.1.5	Oracle Application Server のセキュリティ・サービスの利用 .....	6-28
6.1.6	Oracle Identity Management Infrastructure の利用 .....	6-28
6.1.6.1	OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On の関係 .....	6-29
6.1.6.2	OracleAS Portal と Oracle Internet Directory の関係 .....	6-30
6.1.6.3	OracleAS Portal と Oracle Directory Integration Platform の関係 .....	6-45
6.1.6.4	OracleAS Portal と DAS の関係 .....	6-48
6.1.6.5	「ユーザー」ポートレット .....	6-51
6.1.6.6	「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレット .....	6-52
6.1.6.7	「グループ」ポートレット .....	6-53
6.1.6.8	「Portal グループ・プロファイル」ポートレット .....	6-54
6.1.6.9	DAS のパブリック・ロール .....	6-55
6.1.7	ポートレットのセキュリティ .....	6-62
6.1.7.1	認証 .....	6-62
6.1.7.2	認可 .....	6-63
6.1.7.3	通信セキュリティ .....	6-63
6.1.7.4	シングル・サインオン .....	6-64
6.1.7.5	アクセス制御リスト .....	6-70
6.1.7.6	プログラムによるポートレットのセキュリティ .....	6-71
6.1.7.7	OracleAS Portal のサーバー認証 .....	6-72
6.1.7.8	メッセージ認証 .....	6-73
6.1.7.9	HTTPS 通信 .....	6-74
6.1.7.10	SSL の構成 .....	6-75
6.1.8	「OmniPortlet」と「シンプル・パラメータ・フォーム」の保護 .....	6-76
6.1.9	Web クリップング・プロバイダの保護 .....	6-77
6.1.9.1	信頼できるサイトの証明書の追加 .....	6-77
6.1.9.2	Web クリップング・プロバイダの Oracle Advanced Security の構成 .....	6-78
6.1.10	携帯型 Portal アダプタの保護 .....	6-79
6.1.11	OraDAV の保護 .....	6-80
6.1.11.1	セッション Cookie の有効期限 .....	6-80
6.1.11.2	SSL と OraDAV .....	6-81
6.2	OracleAS Portal の OracleAS Security Framework の構成 .....	6-81
6.2.1	OracleAS Portal の OracleAS Security Framework オプションの構成 .....	6-81
6.2.2	OracleAS Portal の Oracle Identity Management オプションの構成 .....	6-81
6.2.2.1	適切な命名属性とニックネーム属性の設定 .....	6-81
6.2.2.2	Single Sign-On 管理の Portal 管理者の構成 .....	6-82
6.3	OracleAS Portal のセキュリティの構成 .....	6-82
6.3.1	OracleAS Portal のセキュリティ・オプションの構成 .....	6-83

6.3.2	OracleAS Security Framework のオプションの構成 .....	6-84
6.3.2.1	OracleAS Portal の SSL の構成 .....	6-85
6.3.2.2	Oracle Internet Directory への接続の保護 (オプション) .....	6-116
6.3.2.3	「グローバル設定」 ページの設定の変更 .....	6-117
6.3.2.4	インストール後のセキュリティのチェックリスト .....	6-119
6.3.3	データベースのセキュリティのための OracleAS Portal オプションの構成 .....	6-126

## 7 OracleAS Portal の監視と管理

7.1	Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールの使用 .....	7-2
7.1.1	履歴傾向の監視 .....	7-5
7.1.2	複数の Portal ターゲットからのメトリックの比較 .....	7-7
7.1.3	OracleAS Portal メトリックの通知の設定 .....	7-7
7.1.4	OracleAS Portal メトリックしきい値の設定 .....	7-8
7.1.5	最新アラートの表示 .....	7-9
7.1.6	アプリケーション・パフォーマンス監視のための Web アプリケーションの使用 .....	7-9
7.2	Application Server Control コンソールの使用 .....	7-10
7.2.1	Application Server Control コンソールへのアクセス .....	7-10
7.2.2	Application Server Control コンソールを使用した Portal の構成 .....	7-11
7.3	Application Server Control コンソールを使用した Portal の監視と管理 .....	7-12
7.3.1	一般 .....	7-14
7.3.2	Portal によって使用される OracleAS Metadata Repository .....	7-14
7.3.3	Portal の Web Cache 設定 .....	7-14
7.3.4	コンポーネント・ステータス .....	7-17
7.3.4.1	HTTP Server .....	7-17
7.3.4.2	mod_plsql サービス .....	7-17
7.3.4.3	Web Cache .....	7-20
7.3.4.4	Parallel Page Engine サービス .....	7-20
7.3.4.5	プロバイダ .....	7-21
7.3.4.6	Syndication Services .....	7-23
7.3.4.7	Ultra Search .....	7-23
7.3.5	重大度ステータス .....	7-24
7.3.6	関連リンク .....	7-24
7.3.7	「ログ」リンク .....	7-24
7.3.8	Oracle Enterprise Manager 10g への OracleAS Portal リンクの更新 .....	7-25
7.3.9	Oracle9iAS Portal リポジトリ (9.0.2) の監視の有効化 .....	7-26
7.4	OracleAS Portal Analytics の表示 .....	7-27

7.4.1	mod_plsql ログからの OracleAS Portal の動作レポート .....	7-27
7.4.2	Portal の動作ログの表からの OracleAS Portal 動作レポート .....	7-28
7.4.2.1	ログに記録されるイベント .....	7-28
7.4.2.2	ログに記録されるイベントの選択 .....	7-29
7.4.2.3	動作ログ・ビュー .....	7-31
7.4.2.4	動作ログのビューの外部的なアクセス .....	7-31
7.5	Oracle Application Server ポート情報の表示 .....	7-32

## 8 OracleAS Portal の検索機能の構成

8.1	OracleAS Portal の検索オプション .....	8-2
8.1.1	OracleAS Portal の検索 .....	8-2
8.1.2	Oracle Ultra Search .....	8-3
8.1.3	デフォルトの検索機能 .....	8-4
8.1.4	使用する検索オプションの決定 .....	8-7
8.1.5	Oracle Ultra Search と OracleAS Portal 検索の違い .....	8-8
8.1.6	構成情報の場所 .....	8-9
8.2	OracleAS Portal の検索オプションの構成 .....	8-10
8.2.1	OracleAS Portal 検索ポートレットの構成 .....	8-10
8.2.1.1	検索結果ページの選択 .....	8-10
8.2.1.2	ページに表示する検索結果の数の制限 .....	8-11
8.2.1.3	「拡張検索」リンクの選択（「基本 / カスタム検索」ポートレット） .....	8-12
8.2.1.4	インターネット検索エンジンの選択（「拡張 / カスタム検索」ポートレット） .....	8-14
8.2.2	OracleAS Portal での Oracle Text オプションの構成 .....	8-15
8.2.2.1	OracleAS Portal での Oracle Text の有効化と無効化 .....	8-15
8.2.2.2	Oracle Text 検索結果オプションの設定 .....	8-16
8.2.2.3	Oracle Text のベース URL の設定 .....	8-17
8.2.2.4	Oracle Text のプロキシ設定の構成 .....	8-17
8.2.3	OracleAS Portal での Oracle Ultra Search オプションの構成 .....	8-18
8.2.3.1	Oracle Ultra Search 管理ツールへのアクセス .....	8-18
8.2.3.2	コンテンツ・ソースとしての OracleAS Portal の登録 .....	8-18
8.2.3.3	OracleAS Portal への Ultra Search プロバイダの登録 .....	8-20
8.3	Oracle Text .....	8-21
8.3.1	Oracle Text を有効にした場合の OracleAS Portal 検索について .....	8-22
8.3.2	Oracle Text 前提条件 .....	8-22
8.3.3	Oracle Text 索引 .....	8-23
8.3.3.1	Oracle Text 索引の概要 .....	8-23

8.3.3.2	Oracle Text 索引の設定 .....	8-25
8.3.3.3	データストア・プロシージャ .....	8-25
8.3.3.4	OracleAS Portal スキーマへの CTXAPP ロールの付与 .....	8-26
8.3.3.5	多言語機能 (マルチレクサー) .....	8-26
8.3.3.6	STEM 検索 .....	8-27
8.3.4	Oracle Text 索引の作成および削除 .....	8-28
8.3.4.1	ctxcrind.sql を使用したすべての Oracle Text 索引の作成 .....	8-28
8.3.4.2	1 つの Oracle Text 索引の作成 .....	8-30
8.3.4.3	ctxdrind.sql を使用したすべての Oracle Text 索引の削除 .....	8-30
8.3.4.4	1 つの Oracle Text 索引の削除 .....	8-31
8.3.5	Oracle Text 索引の管理 .....	8-31
8.3.5.1	Oracle Text 索引の同期化 .....	8-32
8.3.5.2	索引の同期化のスケジューリング .....	8-32
8.3.5.3	Oracle Text 索引の同期化の頻度の決定 .....	8-33
8.3.5.4	すべての索引のコンテンツの同期化 .....	8-33
8.3.5.5	Oracle Text 索引の最適化 .....	8-34
8.3.5.6	索引の最適化のスケジューリング .....	8-35
8.3.5.7	最適化の間隔の選択 .....	8-35
8.3.6	URL コンテンツの索引作成と検索 .....	8-36
8.3.6.1	相対 URL .....	8-36
8.3.6.2	サポートされていない URL .....	8-38
8.3.6.3	サポートされている URL .....	8-38
8.3.6.4	URL の索引のプロキシ設定 .....	8-38
8.3.7	Oracle Text 索引の状態の表示 .....	8-40
8.3.8	Oracle Text の索引作成処理の監視 .....	8-41
8.3.8.1	start_log を使用した索引処理の監視 .....	8-41
8.3.8.2	logcrind.sql を使用した索引作成の監視 .....	8-42
8.3.9	索引作成エラーの表示 .....	8-43
8.3.10	索引作成エラーの OracleAS Portal 内のオブジェクトへの変換 .....	8-44
8.3.10.1	アイテムの索引作成エラー .....	8-44
8.3.10.2	ページの索引作成エラー .....	8-44
8.3.10.3	カテゴリ索引エラー .....	8-45
8.3.10.4	パースpekティブの索引作成のエラー .....	8-45
8.3.10.5	ドキュメント索引エラー .....	8-45
8.3.10.6	URL 索引エラー .....	8-46
8.3.11	一般的な索引作成エラー .....	8-46
8.3.11.1	一般的なドキュメント索引作成エラー .....	8-46

8.3.11.2	一般的な URL 索引作成エラー .....	8-47
8.3.12	ハングまたはクラッシュする索引作成への対処方法 .....	8-48
8.3.12.1	索引処理がハングしているかどうかの特定 .....	8-49
8.3.12.2	索引のハングおよびクラッシュの防止 .....	8-50
8.3.12.3	ドキュメントの絞込み処理のハングの防止 .....	8-52
8.3.12.4	手動でのドキュメント絞込み処理の実行 .....	8-53
8.3.13	Oracle Text のインストールの問題のトラブルシューティング .....	8-54
8.3.14	Oracle Database 10g にアップグレードするときに Oracle Text 索引をアップグレードする .....	8-54
8.4	Oracle Ultra Search .....	8-55
8.4.1	Oracle Ultra Search の概要 .....	8-55
8.4.1.1	Oracle Ultra Search について .....	8-55
8.4.1.2	Oracle Ultra Search のサンプル問合せアプリケーションについて .....	8-58
8.4.1.3	Oracle Ultra Search 管理ツールについて .....	8-60
8.4.2	Oracle Application Server Infrastructure の構成 .....	8-61
8.4.3	Oracle Ultra Search を使用するためのデータベースの構成 .....	8-61
8.4.4	Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントの構成 .....	8-62
8.4.4.1	data-sources.xml ファイルの編集 .....	8-62
8.4.4.2	ultrasearch.properties ファイルの編集 .....	8-64
8.4.4.3	OC4J_Portal インスタンスの再起動 .....	8-65
8.4.4.4	Oracle Ultra Search 管理ツールのテスト .....	8-65
8.4.4.5	Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションのテスト .....	8-66
8.4.5	リモート・クローラ・ホストの設定 .....	8-66
8.4.6	Oracle Ultra Search ポートレット・サンプル .....	8-66
8.4.6.1	パブリック・データの検索 .....	8-67
8.4.6.2	Oracle Ultra Search インスタンスへの接続 .....	8-67
8.4.6.3	制限事項 .....	8-68
8.4.6.4	ポートレット・サンプル・ファイル .....	8-68

## 9 OracleAS Portal のパフォーマンスの調整

9.1	サーバー・プロセス数の設定 .....	9-2
9.2	アイドル・プロセス数の設定 .....	9-3
9.3	PPE フェッチャ数の設定 .....	9-3
9.4	Oracle HTTP Server の調整 .....	9-6
9.5	パフォーマンス・レポートの生成 .....	9-8
9.6	ファイル・システム・キャッシュの調整によるキャッシュのパフォーマンス向上 .....	9-9



## 10 コンテンツのエクスポートとインポート

10.1	エクスポートとインポートの機能 .....	10-2
10.2	最も一般的な使用事例 .....	10-2
10.2.1	事例 1: 開発インスタンスと本稼働インスタンス間のインポートとエクスポート .....	10-3
10.2.2	事例 2: 複数の Portal インスタンス間での同一コンテンツの配置 .....	10-4
10.3	開始前に必要な確認事項 .....	10-4
10.3.1	システム要件 .....	10-5
10.3.2	コンテンツをエクスポートおよびインポートするための権限 .....	10-7
10.3.2.1	コンテンツをエクスポートするための権限 .....	10-7
10.3.2.2	コンテンツをインポートするための権限 .....	10-8
10.4	エクスポートの機能 .....	10-9
10.4.1	トランスポート・セットの作成 .....	10-9
10.4.2	データのエクスポート .....	10-14
10.4.3	大容量のページ・グループのエクスポート .....	10-22
10.5	インポートの機能 .....	10-24
10.5.1	ターゲット・システムでのスクリプトの実行 .....	10-24
10.5.2	データのインポート .....	10-26
10.6	トランスポート・セットの管理方法 .....	10-32
10.6.1	トランスポート・セットの編集 .....	10-33
10.6.2	トランスポート・セットの参照 .....	10-33
10.7	移行後のオブジェクトの動作 .....	10-35
10.8	推奨される最善の実施例 .....	10-45
10.8.1	ユーザーおよびグループの移行 .....	10-45
10.8.2	ページ・グループおよびコンポーネントの移行 .....	10-48
10.8.3	Web プロバイダの移行 .....	10-52
10.8.4	Portal DB プロバイダとコンポーネントの移行 .....	10-53
10.8.5	検索コンポーネントの移行 .....	10-54
10.8.5.1	「基本検索」および「拡張検索」ポータルレット .....	10-54
10.8.5.2	「カスタム検索」ポータルレット .....	10-54
10.8.6	外部アプリケーションの移行 .....	10-56
10.8.6.1	ユーザー数 .....	10-56
10.8.6.2	SSO エクスポートおよびインポート・ユーティリティ .....	10-57
10.8.7	データベース間での Portal の移行 .....	10-57

## 11 OracleAS Portal へのコンテンツのシンジケート

11.1	シンジケーション・ポートレット・プロバイダの登録 .....	11-3
11.2	コンテンツ・シンジケーションのための Portal の構成 .....	11-3
11.2.1	シンジケーション・チャンネルの管理ホーム・ページの作成 .....	11-3
11.2.2	宛先フォルダへの Portal 権限の設定 .....	11-4
11.3	シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットの使用 .....	11-4
11.4	拡張構成パラメータ .....	11-20
11.5	シンジケーション・チャンネルの管理のエラー・メッセージ .....	11-21

## 12 連携型 Portal アダプタの使用

12.1	連携型 Portal アダプタについて .....	12-2
12.1.1	概要 .....	12-2
12.1.2	データベース・プロバイダと Web プロバイダの違い .....	12-3
12.1.3	連携型 Portal アダプタの使用 .....	12-3
12.1.4	セキュリティの問題 .....	12-4
12.1.5	連携型 Portal アダプタに関連するポートレットの変更 .....	12-4
12.2	連携型 Portal アダプタを使用する環境の設定 .....	12-5
12.2.1	PlsqlSessionCookieName 値の確認 .....	12-5
12.2.2	HMAC を使用した連携型 Portal アダプタ・ユーザー認証 .....	12-7
12.2.3	Cookie ドメインの設定 .....	12-9
12.2.4	OracleAS Single Sign-On および Oracle Internet Directory Server の共有 .....	12-10
12.3	連携型 Portal アダプタを使用したプロバイダの登録 .....	12-11
12.4	連携型 Portal アダプタを使用したカスタム・ポートレットの作成 .....	12-12
12.4.1	相対リンク .....	12-12
12.4.2	カスタマイズ .....	12-12
12.5	連携型 Portal アダプタのトラブルシューティング .....	12-13

## 13 OracleAS Portal のトラブルシューティング

13.1	共通の問題 .....	13-2
13.1.1	OracleAS Portal にアクセスできない .....	13-2
13.1.2	OracleAS Single Sign-On にアクセスできない .....	13-5
13.1.3	カテゴリ / パースペクティブ・ページの作成の問題 .....	13-8
13.1.4	ヘルプの複数言語サポート .....	13-9
13.2	その他の問題 .....	13-9
13.2.1	動的 DNS 環境でのリモート Web プロバイダのタイムアウト .....	13-10

13.2.2	メモリーの使用量が多い操作が原因となる問題 .....	13-11
13.3	Portal 依存性設定ファイルの確認 .....	13-11
13.4	OracleAS Portal の問題の診断 .....	13-12
13.4.1	コンポーネントと診断出力 .....	13-15
13.4.1.1	Java Portal Developers Kit .....	13-15
13.4.1.2	mod_plsql .....	13-17
13.4.1.3	Parallel Page Engine .....	13-18
13.4.1.4	Oracle Application Server Portal Developer Kit .....	13-22
13.4.1.5	OracleAS Metadata Repository .....	13-25
13.4.1.6	OracleAS Web Cache .....	13-32
13.5	OracleAS Portal Diagnostics Assistant の使用 .....	13-33
13.6	Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用 .....	13-35
13.7	エクスポートおよびインポートのトラブルシューティング .....	13-37
13.8	検索機能のトラブルシューティング .....	13-37
13.8.1	多くのページ・グループまたは検索属性が選択されている場合の問題 .....	13-37
13.8.2	PL/SQL 属性を検索できない .....	13-38
13.8.3	Oracle Text のインストールの問題のトラブルシューティング .....	13-38
13.9	携帯型 Portal アダプタのトラブルシューティング .....	13-38
13.10	OracleAS Portal のエラー .....	13-39

## 第 IV 部 付録

### A Portal 依存性設定ファイルの使用

A.1	Portal 依存性設定ファイルの詳細 .....	A-2
A.1.1	名前と場所 .....	A-2
A.1.2	Portal 依存性設定ファイルの更新 .....	A-2
A.1.3	構成要素 .....	A-4
A.1.4	Portal 依存性設定ファイルのサンプル .....	A-9
A.1.5	Portal 依存性設定ファイル内でのインストール後のマッピング .....	A-10
A.1.6	Portal 依存性設定ファイルでの一般的な構成のマッピング .....	A-11
A.2	構成ツール .....	A-14
A.2.1	Portal 依存性設定ツール .....	A-14
A.2.2	Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール .....	A-16

## B OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用

B.1	ptlasst の使用 .....	B-2
B.2	ptlasst モード .....	B-3
B.2.1	PORTAL .....	B-4
B.2.2	MIDTIER .....	B-7
B.2.2.1	OID タイプ .....	B-11
B.2.2.2	SSO タイプ .....	B-12
B.2.2.3	WEBCACHE タイプ .....	B-14
B.2.2.4	OHS タイプ .....	B-14
B.2.2.5	ALL タイプ .....	B-15
B.2.2.6	DIPREG タイプ .....	B-16
B.2.2.7	DIPUNREG タイプ .....	B-17
B.2.3	LANGUAGE .....	B-18
B.2.4	SYSOBJECTS .....	B-23
B.2.5	DEINSTALL .....	B-25

## C OracleAS Portal のインストールおよび構成スクリプトの使用

C.1	OracleAS Web Cache 構成スクリプト .....	C-2
C.1.1	cachset.sql の使用 .....	C-2
C.1.2	cachjsub.sql を使用した失効メッセージの処理ジョブの管理 .....	C-2
C.2	Cookie 妥当性チェックの IP チェックの無効化 .....	C-4
C.3	secupoid.sql スクリプトの使用 .....	C-5
C.4	secjsdom.sql スクリプトの使用 .....	C-6
C.5	Portal セッション Cookie の構成 .....	C-7
C.5.1	Cookie の名前の構成 .....	C-7
C.5.2	Cookie の適用範囲の構成 .....	C-8
C.5.3	Cookie の保護 .....	C-9
C.6	セッション・クリーン・アップ・ジョブの管理 .....	C-10
C.7	実行時間とキャッシュの統計 .....	C-13
C.7.1	ポートレット統計 .....	C-15
C.7.1.1	ポートレットの実行時間情報 .....	C-15
C.7.1.2	ポートレットのキャッシュ情報 .....	C-15
C.7.2	ページ統計 .....	C-18
C.7.3	その他のサマリー統計 .....	C-19
C.8	cfgiasw スクリプトを使用したモバイルの構成 .....	C-20

C.9	ptlinvsw.sql スクリプトを使用した Portal コンテナのページの無効化 .....	C-21
-----	---	------

## D Parallel Page Engine の構成

D.1	Parallel Page Engine のパラメータの構成 .....	D-2
D.1.1	PPE 構成パラメータの設定 .....	D-2
D.1.2	Parallel Page Engine 構成の設定 .....	D-2

## E Oracle Application Server 構成ファイルの使用

E.1	Oracle HTTP Server 構成ファイル (httpd.conf) .....	E-2
E.2	Oracle データベース接続ファイル (tnsnames.ora) .....	E-2
E.3	Web Cache 構成ファイル .....	E-2
E.4	OracleAS Single Sign-On 構成表 .....	E-3
E.5	OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーション表 .....	E-4
E.6	ローカルの HOSTS ファイル .....	E-5
E.7	Oracle Enterprise Manager 10g の使用 .....	E-5

## F JavaServer Pages と OracleAS Portal との統合

F.1	JavaServer Pages 構成ファイルの使用 .....	F-2
F.1.1	JavaServer Pages 構成ファイルの内容 .....	F-2
F.1.1.1	<jps> タグ .....	F-3
F.1.1.2	<portal> タグ .....	F-3
F.1.1.3	<database> タグ .....	F-4
F.1.1.4	<url> タグ .....	F-4
F.1.1.5	<cookie> タグ .....	F-5
F.1.1.6	<pageGroups> タグ .....	F-5
F.1.1.7	<pageGroup> タグ .....	F-6
F.1.2	JavaServer Pages 構成ファイルの例 .....	F-7
F.1.3	JavaServer Pages 構成ファイルの場所 .....	F-8
F.1.4	外部 JavaServer Pages のログイン .....	F-8
F.2	外部通信のための JAZN ファイルの設定 .....	F-9
F.2.1	mod_osso の設定 .....	F-9
F.2.1.1	OracleAS Single Sign-On Server への Oracle HTTP Server の登録 .....	F-9
F.2.1.2	ディレクトリ・ファイルの作成 .....	F-10
F.2.1.3	Oracle HTTP osso.conf の実行 .....	F-10
F.2.1.4	httpd.conf ファイルからのコメントの削除 .....	F-10
F.2.1.5	Oracle HTTP Server の再起動 .....	F-10

F.2.2	JAZN の LDAP による設定 .....	F-11
-------	-------------------------	------

## G www\_context API の使用

G.1	プロシージャ .....	G-2
G.1.1	add_attribute_section .....	G-2
G.1.2	create_index .....	G-3
G.1.3	create_missing_indexes .....	G-4
G.1.4	create_prefs .....	G-4
G.1.5	createindex .....	G-5
G.1.6	drop_all_indexes .....	G-6
G.1.7	drop_index .....	G-6
G.1.8	drop_invalid_indexes .....	G-7
G.1.9	drop_prefs .....	G-7
G.1.10	dropindex .....	G-8
G.1.11	optimize .....	G-8
G.1.12	sync .....	G-9
G.1.13	touch_index(p_indexes wwsbr_array) .....	G-9
G.1.14	touch_index .....	G-10
G.2	定数 .....	G-10
G.2.1	索引名の定数 .....	G-10
G.2.2	索引作成に適さない URL の定数 .....	G-11
G.3	例外 .....	G-12

## H TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認

H.1	TEXTTEST を使用するケース .....	H-2
H.2	TEXTTEST の実行準備 .....	H-2
H.3	TEXTTEST の実行 .....	H-4
H.4	TEXTTEST 結果の詳細 .....	H-5
H.5	TEXTTEST の構成 .....	H-6
H.5.1	ドキュメント・テストの構成 .....	H-6
H.5.2	URL テストの構成 .....	H-7
H.5.3	URL テストとプロキシ .....	H-9
H.5.4	URL の索引作成テストで使用するプロキシの指定 .....	H-9
H.6	TEXTTEST テストの説明 .....	H-10
H.6.1	sys ユーザーとしてのデータベースへの接続 .....	H-10
H.6.2	textcase スキーマの作成 .....	H-10

H.6.3	textcase スキーマへの DBA ロールの付与 .....	H-11
H.6.4	textcase スキーマへの CTXAPP ロールの付与 .....	H-11
H.6.5	sys からの切断 .....	H-12
H.6.6	textcase スキーマへの接続 .....	H-12
H.6.7	textcase アイテムの関連表の作成 .....	H-12
H.6.8	アイテム表へのデータの移入 .....	H-13
H.6.9	ドキュメント表の作成 .....	H-13
H.6.10	ドキュメント表へのデータの移入 .....	H-13
H.6.11	URL 表の作成 .....	H-14
H.6.12	URL 表へのデータの移入 .....	H-14
H.6.13	Oracle Text データストア・プロシージャの作成 .....	H-14
H.6.14	Oracle Text プリファレンスの作成 .....	H-15
H.6.15	レクサー・プリファレンスの作成 .....	H-15
H.6.16	セクション・グループおよびゾーン・セクションの作成 .....	H-15
H.6.17	Oracle Text アイテム索引の作成 .....	H-16
H.6.18	Oracle Text ドキュメント索引の作成 .....	H-16
H.6.19	Oracle Text URL 索引の作成 .....	H-16
H.6.20	保留状態にするためのすべてのアイテム・コンテンツへのアクセス .....	H-17
H.6.21	保留状態にするためのすべてのドキュメント・コンテンツへのアクセス .....	H-17
H.6.22	保留状態にするためのすべての URL コンテンツへのアクセス .....	H-18
H.6.23	アイテム索引の同期化 .....	H-18
H.6.24	ドキュメント索引の同期化 .....	H-19
H.6.25	URL 索引の同期化 .....	H-19
H.6.26	ctxsys からのデータストア・プロシージャの削除 .....	H-20
H.6.27	textcase スキーマからの切断 .....	H-20
H.6.28	sys ユーザーとしての接続 .....	H-20
H.6.29	textcase スキーマの削除 .....	H-21
H.6.30	データベースからの切断 .....	H-21

## I Web クリップिंगの管理

I.1	Web クリップिंग・リポジトリの構成 .....	I-3
I.2	HTTP または HTTPS のプロキシ設定の構成 .....	I-4
I.2.1	Web クリップिंग・プロバイダ・テスト・ページを使用したプロキシ設定の構成 .....	I-4
I.2.2	手動でのプロキシの設定 .....	I-5
I.2.3	認可されていない外部 Web サイトからのコンテンツのクリップिंगの制限 .....	I-5

I.3	キャッシュの構成 .....	I-6
I.3.1	Web クリップिंग・プロバイダ・テスト・ページを使用したキャッシュの構成 .....	I-7
I.3.2	手動での Web Cache の構成 .....	I-8

## J 仮想プライベート Portal の設定と管理

J.1	ホスティングの概要 .....	J-2
J.1.1	ホスティングを使用する理由 .....	J-2
J.1.2	既知の制約 .....	J-3
J.2	仮想プライベート Portal で実行する手順の概要 .....	J-4
J.2.1	ホスティングの有効化 .....	J-4
J.2.2	ユーザーおよびグループの設定 .....	J-4
J.2.3	サブスクリバの追加 .....	J-5
J.2.4	サブスクリバの削除 .....	J-5
J.2.5	拡張機能 .....	J-5
J.2.6	インストール前のチェックリスト .....	J-6
J.2.7	Oracle Directory Manager の使用 .....	J-7
J.3	アウト・オブ・ボックスの Portal でのホスティングの有効化 .....	J-8
J.4	ASP のユーザーおよびグループ .....	J-11
J.4.1	ASP ユーザーおよびグループの設定 .....	J-12
J.4.2	制限事項 .....	J-15
J.5	サブスクリバの追加 .....	J-16
J.6	仮想プライベート Portal での詳細操作 .....	J-18
J.6.1	ASP ユーザーおよびグループの管理 .....	J-18
J.6.1.1	パスワード同期 .....	J-19
J.6.1.2	デルタ（構造の変更）同期 .....	J-19
J.6.1.3	完全同期 .....	J-20
J.6.2	サブスクリバの削除 .....	J-20
J.6.3	仮想プライベート Portal 内での WebDAV の使用 .....	J-21
J.6.4	仮想プライベート Portal による UltraSearch の使用 .....	J-22
J.6.5	仮想プライベート Portal 用の Directory Integration Platform の設定 .....	J-23
J.6.6	部分的に準備（下処理）されたサブスクリバ .....	J-24
J.7	制限事項 .....	J-25
J.7.1	スクリプト .....	J-25
J.7.2	ASP ユーザーおよびグループのサポート .....	J-25
J.7.3	サブスクリバの追加 .....	J-26



J.7.4	サブスクリバの削除 .....	J-26
J.8	スクリプトのパラメータ .....	J-26

## 索引



---

---

# はじめに

このガイドでは、Oracle Application Server Portal を構成する方法について説明します。これには、計画、アップグレード、インストール前の要件の確認、およびインストール後の作業の実行の方法が含まれています。また、このガイドでは、より高度な Portal の配置と、そのような配置に必要な拡張構成の実施方法についても説明します。最後に、監視とトラブルシューティングの情報も示します。

# 対象読者

このガイドは、次の2種類のユーザーを対象としています。

- OracleAS Portal の構成と保守に携わる OracleAS Portal 管理者
- OracleAS Portal が他の Oracle Application Server コンポーネントとともに動作するように構成する必要がある Oracle Application Server 管理者

# このマニュアルの構成

このガイドは、4つの部、13の章、10の付録、そして索引で構成されています。

## 第I部「概念」

この部には、OracleAS Portal アーキテクチャと、Portal の計画の立て方について説明している章が含まれています。

### 第1章「OracleAS Portal のアーキテクチャについて」

この章では、OracleAS Portal の概要を示し、Oracle Application Server アーキテクチャにどのように適合しているかについて説明します。

### 第2章「Portal の計画」

この章では、Portal の計画に関する概念的な情報を提供します。

## 第II部「インストールと基本構成」

この部には、インストールと基本構成について説明している章が含まれています。

### 第3章「OracleAS Portal のインストール」

この章では、インストール・プロセスについて説明します。

### 第4章「基本的な構成および管理の実行」

この章では、OracleAS Portal が Oracle Application Server の一部としてインストールされていると仮定し、インストールの完了後に実行できる基本的な作業について説明します。

## 第III部「拡張構成」

この部には、特別な構成について説明している章が含まれています。

### 第5章「拡張構成の実行」

この章では、中間層、プロキシ・サーバー、Oracle Application Server Web Cache および Oracle Application Server Single Sign-On の構成など、より高度な OracleAS Portal 構成および統合構成を行う方法について説明します。

## **第 6 章 「OracleAS Portal の保護」**

この章では、OracleAS Portal をセキュリティで保護する方法について説明します。

## **第 7 章 「OracleAS Portal の監視と管理」**

この章では、利用可能な監視ツールについてと、それらを使用して OracleAS Portal を監視する方法について説明します。

## **第 8 章 「OracleAS Portal の検索機能の構成」**

この章では、OracleAS Portal で作成されたページ・グループ内でテキスト検索を行うための Oracle Text の構成方法、および Oracle Ultra Search の設定方法と使用方法について説明します。

## **第 9 章 「OracleAS Portal のパフォーマンスの調整」**

この章では、OracleAS Portal 構成のパフォーマンスを調整する方法について説明します。

## **第 10 章 「コンテンツのエクスポートとインポート」**

この章では、インポートおよびエクスポートの機能を使用して Portal インストール間で Portal コンテンツを移行する方法について説明します。

## **第 11 章 「OracleAS Portal へのコンテンツのシンジケート」**

この章では、OracleAS Syndication Services を使用して OracleAS Portal にコンテンツをシンジケートする方法について説明します。

## **第 12 章 「連携型 Portal アダプタの使用」**

この章では、連携型 Portal アダプタの構成方法について説明します。

## **第 13 章 「OracleAS Portal のトラブルシューティング」**

この章では、OracleAS Portal のインストールや使用時に発生する可能性がある問題の解決方法について説明します。

## **第 IV 部 「付録」**

この部には付録が含まれています。

### **付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」**

この付録では、Portal 依存性設定ファイルの使用法に関する情報を提供します。このファイルには、OracleAS Portal とその依存コンポーネントの統合を構成するのに必要なすべての設定が含まれています。

## **付録 B 「OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用」**

この付録では、OracleAS Portal Configuration Assistant の使用方法と、OPCA を実行できる各モードのすべてのオプションについて説明します。

## **付録 C 「OracleAS Portal のインストールおよび 構成スクリプトの使用」**

この付録では、構成のカスタマイズに使用する各種スクリプトについての情報を提供します。

## **付録 D 「Parallel Page Engine の構成」**

この付録では、OracleAS Portal 中間層の一部である Parallel Page Engine (PPE) の構成に関する情報を提供します。PPE によって、ページ・メタデータの読み込み、ポートレット・コンテンツに対応するプロバイダのコール、プロバイダの応答の受入れ、指定されたページ・レイアウトに従った要求されたページの作成が行われます。

## **付録 E 「Oracle Application Server 構成ファイルの使用」**

この付録では、Oracle Application Server とその中間層コンポーネントの接続と動作に影響を及ぼす可能性のある構成ファイル、およびその接続先にある他のマシンについて説明します。

## **付録 F 「JavaServer Pages と OracleAS Portal との統合」**

この付録では、承認された JSP にのみアクセスを許可し、JSP によるポートレット・コンテンツへの認可されていないアクセスを防ぐことにより、OracleAS Portal を保護する方法を説明します。また、ログインが必要な保護された外部 JSP にアクセスできるようにするために必要な手順も説明します。

## **付録 G 「www\_context API の使用」**

この付録では、www\_context API について説明します。

## **付録 H 「TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認」**

この付録では、TEXTTEST ユーティリティを使用して Oracle Text の機能を確認する方法について説明します。

## **付録 I 「Web クリップिंगの管理」**

この付録では、Web クリップिंगの構成に関する手順について説明します。

## **付録 J 「仮想プライベート Portal の設定と管理」**

この付録では、仮想プライベート Portal (ホストされる Portal) を設定し、管理する手順について説明します。

## 関連ドキュメント

詳細は、OracleAS Portal ドキュメンテーション・セットの次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Application Server Portal リリース・ノート』
- 『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』



OracleAS Portal に関する詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) を参照してください。

---

---

**注意：** OracleAS Portal 関連用語の完全な用語集は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』にあります。

---

---

Oracle Application Server ドキュメンテーション・セットの次のマニュアルも有用です。

- 『Oracle Application Server 10g 概要』
- 『Oracle Application Server 10g セキュリティ・ガイド』
- 『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server Syndication Services 開発者および管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server 10g Oracle Application Server からの移行』

## マニュアルの表記規則

このマニュアルで使用される表記規則は、次のとおりです。

表記規則	意味
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。
大文字	大文字テキストは、プロシージャ名を示します。
<>	山カッコはユーザーが入力する情報を表します。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。
.	垂直の省略記号は、例に直接関係しない複数の行が省略されていることを示します。



# 第I部

---

## 概念

第1部の内容：

- 第1章「OracleAS Portal のアーキテクチャについて」
- 第2章「Portal の計画」



---

---

# OracleAS Portal のアーキテクチャについて

この章では、Oracle Application Server Portal の概要を示し、Oracle Application Server アーキテクチャにどのように適合しているかについて説明します。

この章の内容：

- 「[Oracle Application Server とは](#)」には、Oracle Application Server を構成するソリューションとコンポーネントに関する基本的な説明があり、OracleAS Portal とどのように連携して機能するのかをよりよく理解できます。
- 「[OracleAS Portal のアーキテクチャについて](#)」では、OracleAS Portal と Oracle Application Server の関連部分がどのように連携しているかについて説明します。
- 「[OracleAS Portal のキャッシュについて](#)」では、中規模から大規模の配置における可用性と拡張性を高めるために実装できるキャッシュの構成について説明します。

---

---

**注意：** OracleAS Portal はスタンドアロンではインストールできません。Oracle Application Server の一部としてインストールする必要があります。

---

---

## 1.1 Oracle Application Server とは

Oracle Application Server は、完全に業界標準に準拠したアプリケーション・サーバーで、Web サイト、J2EE アプリケーションおよび Web サービスを実行するための包括的な、完全に統合されたプラットフォームを提供します。これは、ビジネス・プロセスを改良して E-Business を実現する際に直面するすべての課題に対応します。

Oracle Application Server は、J2EE プラットフォーム、XML、および新しい Web サービスの標準を完全にサポートしています。Oracle Application Server を使用すると、ネットワーク・ブラウザやワイヤレス・デバイスからカスタマイズおよびアクセスが可能な企業ポータルを提供することによって、顧客や取引相手に対する情報アクセスを簡略化できます。また、ビジネス・プロセスを再定義し、アプリケーションとデータ・ソースを顧客または取引相手のものと統合することができます。リアルタイムのパーソナライズによって、顧客に合った操作環境を提供し、さらに顧客のナビゲーション、購買、評価および人口統計データにアクセスして相互に関連付けることが可能になります。

また、分散システムおよび多様なユーザー・コミュニティをすべて管理および監視するために、集中型の管理、セキュリティおよびディレクトリのフレームワークを実装できます。Oracle Application Server では、組込みの Web キャッシュ、ロード・バランスおよびクラスターリングの機能を使用して高速で拡張性のあるインターネット・アプリケーションを配置することにより、Web サイトのインフラストラクチャを最大化することができます。

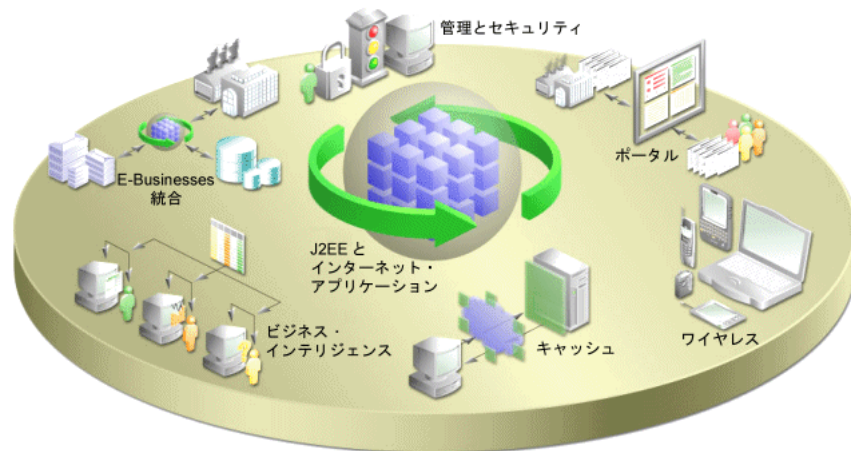
### 1.1.1 Oracle Application Server のソリューションとコンポーネント

Oracle Application Server は、実際には Oracle Application Server のソリューションのセットです。それぞれのソリューションには、1 つ以上のコンポーネントが含まれています。コンポーネントは、サービス、API またはアプリケーションになります。Oracle Application Server で提供しているソリューションは次のとおりです。

- [J2EE とインターネット・アプリケーション](#)
- [ポータル](#)
- [ワイヤレス](#)
- [ビジネス・インテリジェンス](#)
- [E-Businesses 統合](#)
- [可用性と拡張性](#)
- [キャッシュ](#)
- [管理とセキュリティ](#)

これらのソリューションはすべて、[図 1-1](#) に示すような拡張性があり可用性の高いインフラストラクチャに構築されています。

図 1-1 Oracle Application Server のソリューション



以降の項では、各ソリューションとそれに含まれるコンポーネントについて説明します。

## J2EE とインターネット・アプリケーション

Oracle Application Server は、最新の業界標準テクノロジーおよびプログラミング言語（J2EE API 仕様、XML、Web サービスなど）をサポートしている J2EE フレームワーク上にすべて構築されています。この包括的で柔軟性のあるフレームワークでは、なじみのあるプログラミング言語とテクノロジーを使用して、動的な Web サイト、ポータルおよびトランザクション・アプリケーションを設計、開発および配置することが可能です。また、Oracle Application Server には、任意の Web デバイスからインターネットを介して、認可されている関係者に対してビジネス機能を公開するための包括的な Web サービスも用意されています。

次の Oracle Application Server コンポーネントは、J2EE およびインターネット・アプリケーション・ソリューションを使用するために構成されています。

- Oracle HTTP Server
- Oracle Application Server Containers for J2EE
- Oracle Application Server TopLink
- Oracle Business Components for Java
- Oracle Application Server Web Services
- Oracle Application Server Forms Services
- Oracle XML Developer Kit
- Oracle PL/SQL

- Oracle Content Management Software Development Kit
- Oracle Application Server MapViewer

### ポータル

Oracle Application Server は、必要に応じて、わずかなプログラミングとメンテナンスのみで、アウト・オブ・ボックスのポータルを提供します。Oracle Application Server を使用すると、セルフサービスの統合された企業ポータルを構築、配置および保守することができます。Oracle Application Server によって、ウィザードベースの開発が可能になるだけでなく、拡張可能なフレームワーク上で Web サービスを配置、公開および使用することができます。

次の Oracle Application Server コンポーネントは、ポータル・ソリューションを使用するために構成されています。

- Oracle Application Server Portal
- Oracle Application Server Portal Developer Kit
- Oracle Ultra Search
- Oracle Application Server Syndication Services

### ワイヤレス

Oracle Application Server Wireless は、あらゆるデバイスへのコンテンツの配信、あらゆるプロトコルの使用、あらゆるワイヤレス・ネットワークでの動作を可能にすることにより、ワイヤレスの開発および配置を簡略化します。また、OracleAS Wireless には、ワイヤレス対応のアプリケーションおよびポータルを簡略化するワイヤレス・サービス（電子メールやロケーションベースのサービスなど）が含まれています。Oracle Application Server では、アプリケーション開発者は基盤となるワイヤレス・インフラストラクチャに依存しません。OracleAS Wireless は、中核となる Oracle Application Server Infrastructure 上に構築されており、XML と J2EE のオープン・スタンダード・サポートを利用して、高いパフォーマンスと拡張性のあるワイヤレス・インフラストラクチャを提供しています。

次の Oracle Application Server コンポーネントは、ワイヤレス・ソリューションを使用するために構成されています。

- Oracle Application Server Wireless

### ビジネス・インテリジェンス

Oracle Application Server は、包括的なパーソナライズおよびビジネス・インテリジェンスのサービスを提供します。Oracle Application Server のビジネス・インテリジェンス機能を使用すると、登録済と匿名の両方のビジターに対して、サイトの参照時にパーソナライズされたお薦めのコンテンツを動的に提供できます。つまり、標準の Web ブラウザを使用した動的な非定型の問い合わせによるレポート作成と分析の実行、拡張性がありセキュリティで保護されたプラットフォーム上で動的に生成された高品質なレポートの公開が可能になります。

次の Oracle Application Server コンポーネントは、ビジネス・インテリジェンス・ソリューションを使用するために構成されています。

- Oracle Application Server Reports Services
- Oracle Application Server Discoverer
- Oracle Application Server Personalization

## E-Businesses 統合

Oracle Application Server には、E-Business アプリケーションに対してコミュニケーションおよび統合を可能にする強力な機能が用意されています。Oracle Application Server を使用すると、エンタープライズ・アプリケーション、取引相手および Web サービスを統合して拡張性と管理性を強化し、Oracle 以外の多数のデータ・ソースに対してシームレスな問い合わせとトランザクションを提供できます。

次の Oracle Application Server コンポーネントは、E-Business 統合ソリューションを使用するために構成されています。

- Oracle Application Server InterConnect
- Oracle Application Server ProcessConnect

## 可用性と拡張性

Oracle Application Server には、柔軟な配置モデルが用意されており、これを使用して可用性および拡張性の高いシステムを構築できます。Oracle Application Server には、可用性および拡張性を改善するための様々なオプションと、フォルト・トレランス、停止検出およびフェイルオーバーを実装するための機能が用意されています。さらに Oracle Application Server は、コールド・フェイルオーバー・クラスタや Real Application Clusters (RAC) といった可用性の高いオプションをサポートしています。

## キャッシュ

Oracle Application Server Web Cache は、静的および動的に生成された Web コンテンツをキャッシュする独自の機能を備えた Web キャッシュ・ソリューションです。OracleAS Web Cache を使用すると、負荷の高い Web サイトのパフォーマンスと拡張性が大幅に改善されます。また、OracleAS Web Cache には、応答を一貫性があり予測可能なものにするための様々な機能が用意されています。これらの機能には、ページ・フラグメントのキャッシュ、ESI (Edge Side Includes) と JESI (Edge Side Includes for Java) のサポート、圧縮、動的なコンテンツ・アセンブリ、Web サーバーのロード・バランス、Web キャッシュのクラスタリング、フェイルオーバーなどがあります。

次の Oracle Application Server コンポーネントは、キャッシュ・ソリューションを使用するために構成されています。

- Oracle Application Server Web Cache

## 管理とセキュリティ

Oracle Application Server は、業界標準に基づく一連の管理機能を提供し、Web サイト管理のすべての局面を簡略化します。Oracle Application Server を使用すると、次のことが可能です。

- 暗号化された SSL (Secure Sockets Layer) 接続、ユーザーとクライアントの証明書ベースの認証、およびすべてのアプリケーションに対するシングル・サインオンを使用する。
- LDAP ディレクトリを実装し、ユーザー・アカウントに対して単一のリポジトリおよび管理環境を提供する。

次の Oracle Application Server コンポーネントは、管理およびセキュリティ・ソリューションを使用するために構成されています。

- Oracle Enterprise Manager 10g
- Oracle Application Server Single Sign-On
- Oracle Application Server Certificate Authority
- Oracle Application Server Java Authentication and Authorization Service
- Oracle Internet Directory
- OracleAS Infrastructure 10g

## 1.1.2 Oracle Application Server アーキテクチャの概要

Oracle Application Server のアーキテクチャは、次の 3 つの基本層で構成されています。

- クライアント層
- 中間層
- インフラストラクチャ層

Oracle Application Server アーキテクチャ全体についていくらか理解しておく、OracleAS Portal の構成がその構造にどのように適合しているかを完全に理解することができます。以降の項では、構成の計画を立てるときに必要な重要な概念と用語について説明します。

### クライアント層

ユーザーは、クライアント・コンピュータから中間層およびインフラストラクチャ層に接続して、情報公開のためのセルフサービス・ツールへのアクセス、アプリケーションの構築、コンテンツ管理の導入、および企業ポータル環境の管理を行います。

### 中間層

中間層、つまりアプリケーション・サーバー層とは、1 つの Oracle ホームにインストールされている Oracle Application Server コンポーネントのセットです。各企業では、1 つ以上の



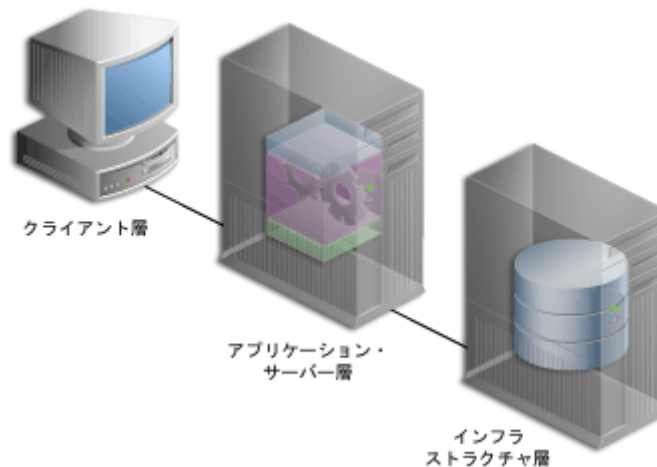
アプリケーション・サーバー・インストールを単一のホストに配置することも、複雑なインストールの場合は複数のホストに分散することもできます。

## インフラストラクチャ層

インフラストラクチャ・インストールは、ユーザーを認証し、アクセス制御情報を格納し、ユーザーが OracleAS Portal に対して保持している権限に基づいて必要なコンテンツをユーザーに渡すためのいくつかのコンポーネントで構成されています。中間層コンポーネントと同様に、インフラストラクチャ・コンポーネントを複数のホスト間に分散して、拡張性と高可用性を実現することができます。

図 1-2 は、Oracle Application Server アーキテクチャの 3 つの層を示しています。

図 1-2 Oracle Application Server アーキテクチャのコンポーネント



### 1.1.2.1 中間層コンポーネント

中間層は、Oracle Application Server アーキテクチャの一部であり、高速で信頼性のあるパフォーマンスを実現するためにインテリジェント・データ・キャッシュを使用して、クライアントからの要求の受入れ、要求の検証、コンテンツの提供などを実行するコンポーネントが含まれています。

OracleAS Portal では、中間層は、すべての Web 要求を適切なプロバイダに転送することによって処理しています。中間層は、Portal ページが作成される場所であり、Portal コンテンツのキャッシュが管理される場所でもあります。中間層には、他の Oracle Application Server コンポーネントに対する機能も用意されています。

次に、Oracle Application Server の中間層における OracleAS Portal の主要コンポーネントについて説明します。

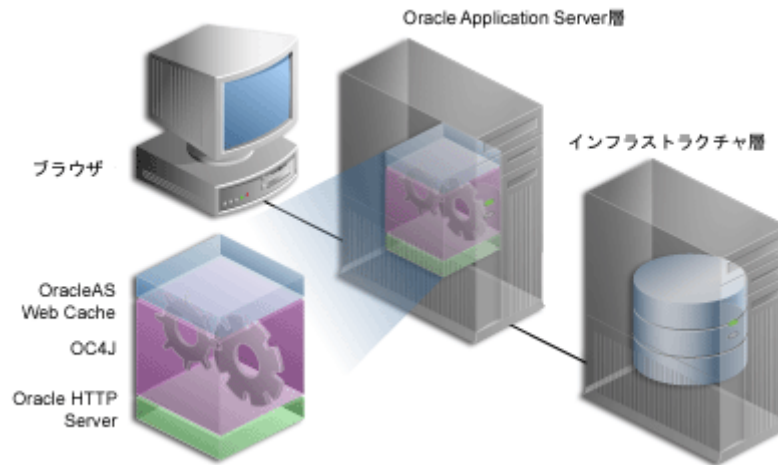
- **Oracle Application Server Containers for J2EE:** Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) は、高速かつ軽量で拡張性のある J2EE コンテナで、Java で記述されており、標準の Java Virtual Machine (JVM) で動作します。OracleAS Portal の Parallel Page Engine (PPE) は、Portal ページを作成するサーブレットで、Oracle Application Server Containers for J2EE で動作します。OC4J は、使い勝手をよくし、標準 API をサポートするために設計されました。

- **Oracle HTTP Server:** Oracle HTTP Server (OHS) は、Oracle Application Server がサポートするすべてのプログラミング言語およびテクノロジーの基盤となる配置プラットフォームです。Oracle HTTP Server は、OC4J の Web リスナー、Web 上で静的および動的なページとアプリケーションをホストするためのフレームワークを提供し、ロード・バランス、管理および構成を容易にする機能を備えています。

OracleAS Portal では、OHS は OracleAS Portal に対するすべての着信 HTTP リクエストを、PPE (Parallel Page Engine) サーブレットまたは `mod_plsql` に転送することによって処理します。PPE は、Portal ページを作成するサーブレットで、Oracle Application Server Containers for J2EE 内で動作します。`mod_plsql` は、Oracle Application Server データベース内にある PL/SQL プロシージャを実行し、HTTP レスポンスを生成することによって、Portal およびページ・メタデータにアクセスするために使用される OHS モジュールです。

- **Oracle Application Server Web Cache:** OracleAS Portal 独自のファイルベースのキャッシュと連携して、ページ定義およびコンテンツをメモリー内にキャッシュし、パフォーマンスを向上させます。OracleAS Portal は、Portal 全体の可用性、拡張性およびパフォーマンスを改善するために、OracleAS Web Cache と密接に統合されています。OracleAS Web Cache は、キャッシュ、圧縮およびアセンブリのテクノロジーを組み合わせ、静的および動的に生成された Portal コンテンツを迅速に配信します。

図 1-3 中間層コンポーネント



中間層インストールには、次の3つのタイプがあります。

1. **Oracle Application Server Containers for J2EE** と **OracleAS Web Cache**: 最も単純な構成で、Portal ソリューション・コンポーネントは含まれていません。
2. **OracleAS Portal** と **OracleAS Wireless**: Portal および Wireless ソリューションを、Oracle Application Server Containers for J2EE と OracleAS Web Cache によって提供されるソリューションに追加します。
3. **Business Intelligence and Forms**: OracleAS Portal などの中間層コンポーネントがすべて含まれています。

OracleAS Portal を使用するには、2 または 3 を選択します。

詳細は、次の項も参照してください。

- [2.1.7 項「ハードウェアとソフトウェアを構成する方法」](#)
- [5.3 項「ロード・バランス・ルーターを使用する複数の中間層の構成」](#)

### 1.1.2.2 インフラストラクチャ・コンポーネント

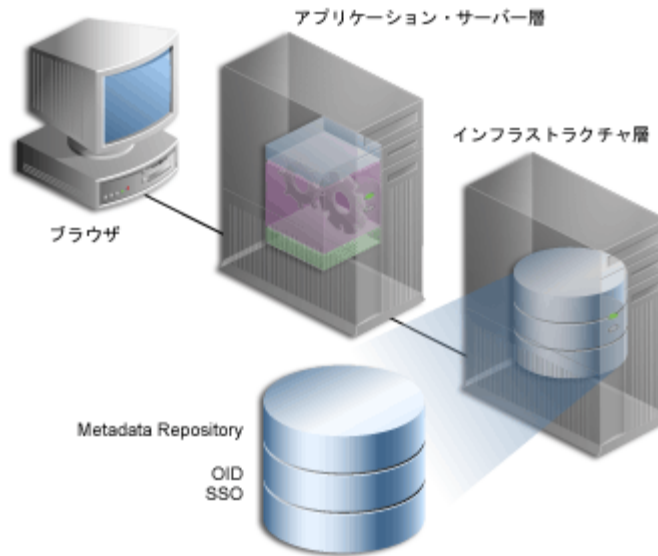
デフォルトでは、インフラストラクチャ層はすべての認証要求を処理し、Oracle Application Server Metadata Repository をホストします。これには、OracleAS Portal などのアプリケーション・サーバー・コンポーネント、およびインフラストラクチャの他の部分で使用されるスキーマとビジネス・ロジックが含まれています。

OracleAS Portal の中間層インストールには、インフラストラクチャ層が必要です。

Oracle Application Server Infrastructure には、次のものが含まれています。

- **Application Server Control コンソール**: Oracle Application Server 用のこの管理コンソールを使用すると、クラスターの管理、サービスの開始と停止、コンポーネントの有効化と無効化、ログとポートの参照、およびサーバーのリアルタイムの監視を行うことができます。
- **Oracle Internet Directory**: OracleAS Portal および他の Oracle 製品のユーザー証明書とグループ・メンバーシップを格納するための LDAP バージョン 3 に準拠したリポジトリ。
- **Oracle Application Server Single Sign-On (SSO)**: OracleAS Portal および他のアプリケーションの Oracle Internet Directory を使用してユーザー証明書を認証します。ユーザーは Web Portal に 1 回ログインするだけで、同じユーザー名とパスワードを使用して複数のアカウントとアプリケーションにアクセスできるようになります。
- **Oracle Application Server Metadata Repository**: このリポジトリは Oracle9i Database Server にインストールされており、Oracle Application Server コンポーネントの製品メタデータが含まれているスキーマのコレクションで構成されています。OracleAS Portal などの中間層コンポーネントの中には、このリポジトリに自身のメタデータを格納しているため、実行時にこのメタデータにアクセスする必要があるものがあります。

図 1-4 インフラストラクチャ層コンポーネント



これらのコンポーネントの複数のインスタンスを複数のサーバーにインストールし、ニーズに合わせてサーバーに接続することができます。OracleAS Portal の配置構成については、単一マシンへのすべてのコンポーネントのインストールから、OracleAS Portal を構成する要素が複数のサーバーに分散される複数層構成まで、様々なオプションを使用できます。

インフラストラクチャ・インストールには、次の3つのタイプがあります。

1. **Oracle Identity Management:** Oracle Identity Management のサービス (Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services、Oracle Directory Integration and Provisioning、OracleAS Certificate Authority) をインストールおよび構成します。
2. **OracleAS Metadata Repository:** OracleAS Metadata Repository が含まれている新しい Oracle9i Database Server をインストールし、OracleAS Portal、Oracle Internet Directory および OracleAS Single Sign-On を構成するデータベース・オブジェクトを格納します。
3. **Oracle Identity Management のコンポーネントと OracleAS Metadata Repository:** 前述の2つのインストール・タイプにあげたすべてのコンポーネントで構成されます。

---

---

**注意：** このガイドには、`ORACLE_HOME` という参照先が記載されていません。`ORACLE_HOME` は、Oracle ホームのフルパスを表し、参照する Oracle ホームを簡単に特定できる場合に使用しています。中間層、インフラストラクチャまたは OracleAS Metadata Repository の Oracle ホームを区別する必要があるプロシージャでは、次の表記規則が使用されます。

- `MID_TIER_ORACLE_HOME`。中間層の Oracle ホームのフルパスを表します。
  - `INFRA_ORACLE_HOME`。インフラストラクチャの Oracle ホームのフルパスを表します。
  - `METADATA_REP_ORACLE_HOME`。OracleAS Metadata Repository が含まれているインフラストラクチャ・ホームのフルパスを表します。
- 
- 

## 1.2 OracleAS Portal のアーキテクチャについて

配置チームが Web Portal を構築したら、次に、本稼働用の Web Portal を配置します。配置の成功は、遅延、エラーまたはサーバー停止がなく、エンド・ユーザーが適切な方法でコンテンツにアクセスできることを意味します。OracleAS Portal は、様々なマシンに様々な構成でインストールできるため、配置の成功は、最終的にはサイトの要件に合わせて Portal をどのように設定するか依存します。この項では、構成を計画する際に役立つ背景情報について説明します。

### 1.2.1 OracleAS Portal と他のコンポーネントとの統合

Oracle Application Server コンポーネントの中には、OracleAS Portal のポートレット・プロバイダ<sup>1</sup>として機能するものがあります。これは、様々なコンポーネントの情報を 1 つのポータル・ページに簡単に統合できることを意味しています。他のコンポーネントは、次に説明するような、OracleAS Portal にとって必須のサービスを提供します。

- **Oracle Application Server Reports Services:** OracleAS Portal には簡単なレポート作成機能があります。ただし、ユーザーのレポートがより複雑になるに従い、レポートを OracleAS Reports Services にインポートして、その機能を十分に活用したくなる可能性があります。OracleAS Reports Services レポートはすべてポートレットとして配置できます。

**関連項目：** 『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』

---

<sup>1</sup> ポートレットとして表現されるアプリケーションと情報ソースは、プロバイダを介して Portal と通信します。ポートレットはプロバイダを 1 つしか持つことができませんが、プロバイダは基盤となるアプリケーションまたは情報ソースを公開する 1 つ以上のポートレットを持つことができます。

- **Oracle Application Server Discoverer:** OracleAS Discoverer は、ポートレット・プロバイダとして、「ワークシート」ポートレットおよび「ワークブックのリスト」ポートレットを OracleAS Portal ユーザーに提供します。「ワークシート」ポートレットには、単一の Discoverer ワークシートの情報が含まれています。ポートレットには、この情報が表、グラフまたはその両方で表示されます。「ワークブックのリスト」ポートレットには、使用できるワークブックのリストが表示されます。

**関連項目：**

- 『Oracle Application Server Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』の「OracleAS Portal へのワークブックの公開」に、Discoverer ポートレットの追加方法が記載されています。
- 『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の「OracleAS Portal での OracleAS Discoverer の使用」に、OracleAS Discoverer のポートレット・プロバイダを OracleAS Portal に登録する方法が記載されています。
- **Oracle Application Server Syndication Services:** インターネット・サブスクリバに対して、あらゆるデータベース、レガシー・ファイル・システムまたはインターネット・コンテンツを配信し、すべてのネットワークでの標準を使用して、コンテンツを自動的に更新します。これにより、シンジケーションまたはコンテンツの自動交換のプロセスが簡略化されます。OracleAS Syndication Services は、あらゆるコンテンツを利用できるようにして、コンテンツの集約、シンジケーションおよび配布のための包括的なソリューションを提供します。コンテンツを OracleAS Portal にシンジケートする方法の詳細は、[第 11 章「OracleAS Portal へのコンテンツのシンジケート」](#)を参照してください。
- **Oracle Ultra Search:** OracleAS Portal に統合されています。Oracle Ultra Search を使用すると、OracleAS Portal ユーザーは、強力なマルチリポジトリ検索を Portal ページに追加できます。また、OracleAS Portal の独自のリポジトリのデータ収集機能およびパブリック・コンテンツの検索機能もあります。Oracle Ultra Search の詳細は、[第 8 章「OracleAS Portal の検索機能の構成」](#)を参照してください。
- **Oracle Application Server Wireless:** OracleAS Portal は、OracleAS Wireless と連携して、Portal ページ構造を大半のワイヤレス・デバイスの小さい画面に適した形式に自動的に変換します。ワイヤレス・デバイスでは、OracleAS Wireless の XML コンテンツを生成するポートレットのみを表示できます。

OracleAS Portal の開発者は、ページ設計ツールのセットにアクセスできます。これらは、ワイヤレスの操作環境を最適化する Portal ページを作成するときに役立ちます。開発者はこれらのツールを使用して、ワイヤレス・ユーザーに対して別個の Portal 構造を構築できます。ワイヤレス・ページと Portal ページで、ポートレット・インスタンスを共有することが可能です。これによってクライアントは、各ポートレットを再構成しなくても、ブラウザおよびワイヤレス・クライアント上のポートレットを再使用できるようになります。

詳細は、4.6 項「[OracleAS Portal](#) でのモバイル・サポートの構成」を参照してください。

- **Oracle Enterprise Manager 10g:** Oracle Enterprise Manager 10g には Application Server Control コンソールが用意されています。これは、監視、診断、および OracleAS Portal 固有の統合およびパフォーマンス設定の構成で使用できます。OracleAS Portal の監視については、第 7 章「[OracleAS Portal](#) の監視と管理」を参照してください。
  - **Oracle Application Server Forms Services:** Oracle Forms アプリケーションは、対話型のグラフィック・インタフェースと、データ検証の強力なサポートを組み合わせます。Forms の開発者は、強力なデータ操作機能によって短期間でアプリケーションを作成できます。OracleAS Forms Services は、Forms アプリケーションを Web 環境の Java クライアントに配置します。OracleAS Forms Services は、クラスのダウンロード、ネットワーク通信量、および Oracle データベースとの相互作用を自動的に最適化します。OracleAS Forms Services のアプリケーションは、OracleAS Single Sign-On によって保護されており、Oracle Application Server で提供される OracleAS Portal 環境からアクセスします。
  - **Oracle Application Server Single Sign-On:** OracleAS Single Sign-On は、Portal のパブリック以外の領域にアクセスしようとするユーザーを認証します。詳細は、6.1.6.1 項「[OracleAS Portal](#) と [OracleAS Single Sign-On](#) の関係」を参照してください。
  - **Oracle Internet Directory:** Oracle Internet Directory は、拡張性に富んだ Oracle の LDAP バージョン 3 のサービスで、Oracle の一般的なユーザー ID をホストします。OracleAS Portal は、ディレクトリに対して問合せを行い、ユーザーの権限、およびユーザーが Portal 内で何を表示し、実行できるかを確認します。特に、OracleAS Portal は、ディレクトリからユーザーのグループ・メンバーシップを取得して、ユーザーが何にアクセスし、変更できるのかを確認します。詳細は、6.1.6.2 項「[OracleAS Portal](#) と [Oracle Internet Directory](#) の関係」を参照してください。
  - **Oracle Delegated Administration Services:** OracleAS Portal は、Oracle Internet Directory に対してユーザーおよびグループの情報を問い合わせるだけでなく、ユーザーおよびグループの情報を追加および変更するためのユーザー・インタフェースをユーザーに提供する必要があります。ディレクトリ内の情報を変更するには、Oracle Delegated Administration Services のユーザー・インタフェースを使用します。OracleAS Portal は、ユーザーやグループを追加および変更する権限を持つユーザーに対して Oracle Delegated Administration Services へのリンクを提供します。詳細は、6.1.6.4 項「[OracleAS Portal](#) と [DAS](#) の関係」を参照してください。
- Oracle Directory Integration and Provisioning:** Oracle Directory Integration Platform は、OracleAS Portal がサブスクライブするなんらかのディレクトリ・イベント（ユーザーの削除など）が発生したときに OracleAS Portal に通知します。基本的に、Directory Integration Server は、OracleAS Portal において変更が必要なディレクトリで変更が行われたときに、OracleAS Portal に通知します。詳細は、6.1.6.3 項「[OracleAS Portal](#) と [Oracle Directory Integration Platform](#) の関係」を参照してください。
- **Oracle Application Server Metadata Repository:** OracleAS Metadata Repository は、クラスト内で使用できるインスタンスに関する情報を保持しています。これにより、すべ



での Oracle Application Server インスタンスが同じリポジトリを共有するため、クラスタを作成したり、クラスタ間でアプリケーションと状態情報を同期化したりするプロセスが簡略化されます。OracleAS Portal は OracleAS Metadata Repository 内のスキーマを使用して、Portal インスタンスを使用するように構成されているコンテンツとメタデータを格納および管理します。



Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com>) にあるホワイト・ペーパー『OracleAS Portal Architecture Overview』の情報も参照してください。

## 1.2.2 要素を組み合わせる方法

Portal はページのグループで構成されており、各ページは複数の領域に分割されています。領域は、特定のページの場所をページのアイテムおよびポートレットに割り当てる方法を指定します。

### 1.2.2.1 OracleAS Portal でページが作成される方法

ユーザーが OracleAS Portal ページを要求するたびに、そのページに対して選択されているポートレットおよびレイアウトに従って、ページは動的に作成および構成されます。ページを構成する要素は、通常、様々なソースから描画されます。たとえば、ページのレイアウト、外観およびユーザー・カスタマイズは、ページ・コンテンツから完全に分離され、すべてのページ定義の一部としてデータベースに格納されます。この情報は、中間層にキャッシュされる場合もあります。(ただし、フル・ページ・キャッシュが使用されている場合、ページはキャッシュから直接提供されるため、ページは作成されません。)

ページに表示されるポートレットは、XML、PL/SQL または Java で記述できます。PL/SQL ポートレットの場合、ソースは OracleAS Metadata Repository データベースです。このデータベースには、OracleAS Portal の現在のインスタンスがインストールされているデータベース、または連携型 Portal アダプタを介してアクセスされるリモート・サーバーに配置されている OracleAS Metadata Repository の他のデータベースを使用できます。Java で記述した場合、Web プロバイダは、ネットワーク（インターネットまたはイントラネット）からアクセス可能な任意の場所からポートレットを提供します。たとえば、次の両方のタイプのコンテンツを表示する Portal ページを作成できます。

- 外部 Web プロバイダのポートレット・コンテンツ
- OracleAS Metadata Repository にあるポートレットのコンテンツ

図 1-5 Portal ページの要求フロー

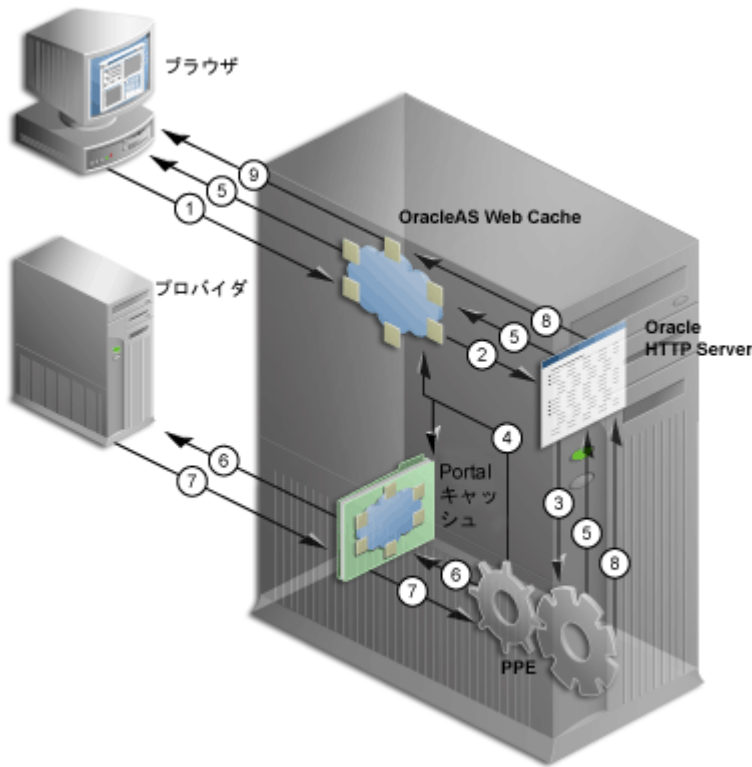


図 1-5 は、ページがどのように作成されるかを示しています。表示されているように、クライアントが OracleAS Portal ページを要求すると、Oracle Application Server の多数のコンポーネントが、要求の様々な部分に応答する必要があります。

1. クライアント・ブラウザが Portal ページを要求します。OracleAS Web Cache がこの要求を受け取ります。
2. OracleAS Web Cache は、要求を Oracle HTTP Server (OHS) に転送します。
3. OHS は、mod\_oc4j を介して Parallel Page Engine (PPE) に要求を送信します。
4. PPE が Portal ページ定義を受け取ります。ページ定義には、ページのポートレットとそのレイアウトに関する情報が含まれています。
  - a. 最初に、OracleAS Web Cache に定義の有効なキャッシュされたコピーがあるかどうかを確認します。

- b. 次に、Portal キャッシュに有効なキャッシュされたコピーがあるかどうかを確認します。
  - c. 最後に、定義のキャッシュされたコピーが存在しない場合、PPE は Portal リポジトリ内のデータからページ定義を生成します。Portal リポジトリは、OracleAS Metadata Repository またはカスタム・データベースにあります。
5. PPE がページ定義を解析します。ページ全体のキャッシュされたコピーが存在する場合は、OracleAS Web Cache を介してページがクライアント・ブラウザに返されます。このようなコピーが存在しない場合は、PPE が残りの手順で、キャッシュされたデータおよびキャッシュされていないデータからページを作成します。
  6. PPE はページ上の各ポートレットについて、Portal キャッシュにポートレット・コンテンツのキャッシュされたコピーが存在するかどうかを確認し、OracleAS Web Cache を介して適切なプロバイダに要求を転送します (図には示されていません)。
  7. 各プロバイダは、キャッシュされたポートレットを検証するか、またはポートレットへコンテンツを生成します。Web プロバイダは、HTTP/S を使用してこれを直接 PPE に直接返します。データベース (DB) プロバイダは、HTTP/S または SOAP を使用し、OracleAS Web Cache、Oracle HTTP Server および mod\_plsql を介して PPE に結果を返します。
  8. PPE は、コンテンツを 1 つのページに集めます。このページは OracleAS Web Cache に送信され、場合によってはキャッシュに格納されます。
  9. OracleAS Web Cache がクライアント・ブラウザに最終ページを返します。

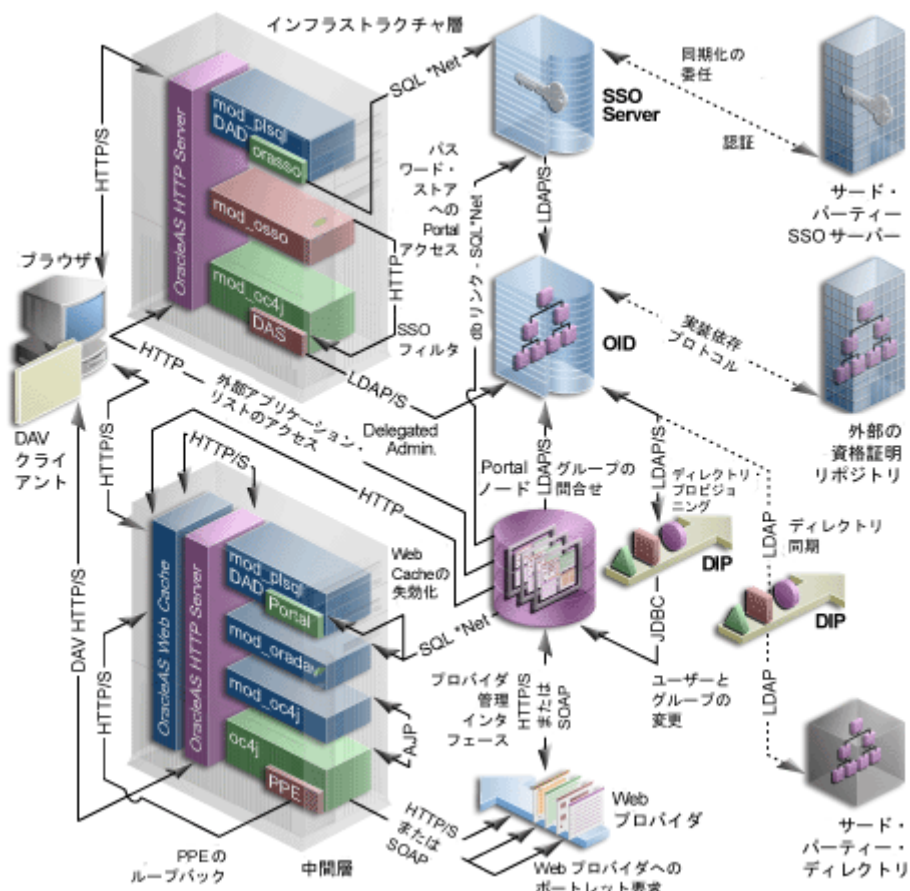
### 1.2.2.2 OracleAS Portal での通信フロー

OracleAS Portal は、複数の通信ポイントおよびプロトコルから構成される分散アーキテクチャを実装します。ファイアウォールとプロキシの導入を含む複雑な構成の場合は、通信ポイント、および OracleAS Portal の様々なコンポーネントを統合する方法を理解する必要があります。また、複数のサーバーに様々な機能を分散させるには、ノード間の通信で使用するネットワーク・プロトコルについて知っておく必要があります。

OracleAS Portal のアーキテクチャは、クライアント・ブラウザ (図の左端)、中間層サーバー (図の左下)、インフラストラクチャ・サーバーとリポジトリ (図の左上) の 3 つの基本層で構成されています。デフォルトのインストールではすべてのサーバーとリポジトリを同じホストに配置しますが、パフォーマンスと可用性を向上させるため、これらの機能は別のサーバーにインストールすることをお勧めします。

図 1-6 は、OracleAS Portal の様々なコンポーネントと Oracle Application Server 間の通信フローの詳細を示しています。

図 1-6 通信フローとプロトコル



次に、3つの層とそこで使用される通信プロトコルについて説明します。

- クライアント
- インフラストラクチャ層
- 中間層

## クライアント

- クライアントは、HTTP/S プロトコルを使用して、中間層の一部である OracleAS Portal に要求を送信します。クライアントと中間層の間では、ファイアウォールおよびプロキシの使用がサポートされています。
- ユーザーを認証する必要がある場合は、クライアント・ブラウザがインフラストラクチャ層の Oracle HTTP Server にリダイレクトされます。この接続は HTTP/S を使用し、ネットワーク環境におけるファイアウォールと逆プロキシの両方の実装をサポートしています。

## インフラストラクチャ層

インフラストラクチャ層は、Oracle HTTP Server、OracleAS Single Sign-On、Oracle Internet Directory および OracleAS Metadata Repository から構成されています。

- 要求したページで認証が必要な場合は、ユーザーはユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。この機能は、DAD と `mod_plsql` を組み合わせて、認証のために OracleAS Single Sign-On へリダイレクトすることによって実行されます。認証要求はすべて SQL\*Net プロトコルを使用してやり取りされます。
- OracleAS Single Sign-On は、LDAP/S を介して、Oracle Internet Directory を使用してユーザー証明書を検証します。証明書はディレクトリ内で見つかったものと照合され (LDAP 比較)、その結果が OracleAS Single Sign-On に返されます。認証に成功すると、OracleAS Single Sign-On によってシングル・サインオン Cookie が作成されます。ユーザーが認証され、適切な OracleAS Portal セッションが作成されると、ユーザーはページおよび他のオブジェクトにアクセスできるようになります。
- すべての Portal オブジェクトに対するアクセス制御リストは OracleAS Metadata Repository に保持されており、OracleAS Portal は LDAP/S 要求を使用して Oracle Internet Directory と通信して、ディレクトリ内に定義されている適切なユーザーおよびグループ・メンバーシップ情報を問い合わせます。ユーザーが最初に OracleAS Portal へログインすると、そのユーザーのグループ・メンバーシップが Portal ノードへコピーされ、その層にキャッシュされます。このプロセスによって、オブジェクトの権限をすばやく検索することができます。ユーザーのオブジェクトおよびページの権限がわかると、Parallel Page Engine は適切な情報からページを生成します。
- ユーザー・プロビジョニングはすべて Oracle Internet Directory に対して行われます。インフラストラクチャ層の HTTP Server と LDAP サーバー間のインタフェースは、Delegated Administration Services (DAS) サーブレットを介しています。DAS インタフェースは、LDAP/S プロトコルを使用して Oracle Internet Directory と通信します。

- OracleAS Single Sign-On モデルには、`mod_osso` が追加されており、これによって、OracleAS Single Sign-On 環境ですべての URL が保護されます。Delegated Administration Services サブレットへのコールは、`mod_osso` プラグインによって保護されます。これは、Oracle Internet Directory へのアクセスを提供する前に、ユーザーが正しく認証されていることを確認します。実際には、`mod_osso` は URL を絞り込み、ユーザーが事前に認証されている場合にのみ HTTP/S ベースの要求を転送します。
- Oracle Directory Integration Platform では、ローカルでキャッシュされた情報を Oracle Internet Directory での変更に合わせて自動的に最新の状態にしています。Oracle Directory Integration Platform は、ローカル・キャッシュと Oracle Internet Directory を常に同期化するだけでなく、同様に Oracle Internet Directory と外部のすべてのリポジトリを常に同期化しています。Oracle Directory Integration Platform は、LDAP/S を介して Oracle Internet Directory と通信します。

## 中間層

中間層は、OracleAS Web Cache、Oracle HTTP Server、Oracle Application Server Containers for J2EE およびその他の Oracle Application Server コンポーネントから構成されています。

---

**注意：** OracleAS Web Cache と Oracle HTTP Server は、拡張性と可用性を向上させるために、別のホストにインストールすることができます。

---

- OracleAS Web Cache を、中間層コンポーネントのフロントエンドに設定して、OracleAS Portal のスループットを最適化します。ブラウザからページ要求があると、OracleAS Web Cache はその URL を評価し、可能な場合はキャッシュから要求されたページを提供します。要求されたページが以前にキャッシュされていない場合、生成のためにその要求はオリジナル・サーバー（この場合は Oracle HTTP Server）に転送されます。OracleAS Web Cache は、Web アクセラレータとして、次のコンポーネントとの間で HTTP または HTTPS 通信を使用できるようにします。
  - クライアント・ブラウザ
  - 適切なオリジナル・サーバー
  - オリジナル・サーバーとクライアント・ブラウザの両方
- Parallel Page Engine (PPE) は、Oracle Application Server Containers for J2EE 内でサブレットとして動作します。サブレットに対する URL 要求は、Oracle HTTP Server のプラグインである `mod_oc4j` を介して転送されます。`mod_oc4j` は、業界標準に準拠したプラグインで、AJP (Apache Java Protocol) を使用して Oracle Application Server Containers for J2EE と通信します。
- PPE 自体は、HTTP/S ベースの通信を介して、データベース・プロバイダと Web プロバイダの両方に対して要求を行います。データベース・プロバイダに対するレンダリング要求は、Oracle HTTP Server への URL ループバックと `mod_plsql` を介して行われます。

が、Web プロバイダのコールは、HTTP/S を介して SOAP ベースのメッセージ・プロトコルを使用して行われます。

- Web プロバイダは、OracleAS Metadata Repository の情報が必要になると、HTTP/S を介して SOAP ベースのメッセージ・プロトコルを使用して、PDK によって適切なコールを行います。
- OracleAS Web Cache コンポーネントは、失効化ベースのキャッシュ法を使用します。要求された URL をキャッシュから提供できる場合は、指定された URL が失効するまで、その URL は正しいとみなされます。ユーザーが OracleAS Portal の操作環境をカスタマイズしている場合、またはユーザーの変更を使用するように構成されている権限の場合、OracleAS Portal は OracleAS Web Cache 内で該当するキャッシュ・オブジェクトを失効化します。これを行うために、OracleAS Portal は、OracleAS Web Cache の失効ポートに対して、OracleAS Metadata Repository から直接 HTTP/S ベースの要求を発行します。

## 1.3 OracleAS Portal のキャッシュについて

OracleAS Portal は、次の 3 つの方法を使用して Web ページとコンテンツをキャッシュします。

- 失効化ベースのキャッシュは、OracleAS Web Cache を使用して実行されます。更新を要求するイベントが発生するまで、アイテムはキャッシュに残ります。たとえば、ユーザーがアイテムを更新した場合、キャッシュを更新する必要があります。イベントに応答して、OracleAS Metadata Repository またはプロバイダは失効メッセージを OracleAS Web Cache に送信します。失効化されたアイテムに対する要求が次に発生したときに、そのアイテムはキャッシュ内で更新されます。失効化ベースのキャッシュに対して有効期間を設定できます。詳細は、[5.7.3.3 項「失効化ベースのキャッシュの有効期間の設定」](#)を参照してください。
- 妥当性チェック・ベースのキャッシュは、OracleAS Portal Cache を使用して実行されます。OracleAS Portal Cache 内のアイテムが使用される前に、Parallel Page Engine または `mod_plsql` は、OracleAS Metadata Repository またはプロバイダにアクセスして、キャッシュされたアイテムがまだ有効かどうかを確認します。
- 有効期限ベースのキャッシュも OracleAS Portal Cache を使用します。アイテムの保持期間には、アイテムがキャッシュ内で有効である期間を指定します。この期間が経過したら、更新が必要になります。有効期限ベースのキャッシュを使用するページは、ユーザーのブラウザでもキャッシュされる場合があります。

## 1.3.1 OracleAS Web Cache について

OracleAS Web Cache は、強力なサーバー・アクセラレータおよびロード・バランスのソリューションです。OracleAS Web Cache を使用するには、OracleAS Portal を実行する必要があります。OracleAS Web Cache には、インテリジェント・キャッシュ、ページ・アセンブリおよび圧縮の機能が用意されています。OracleAS Web Cache は、静的および動的な Web コンテンツを迅速に配信し、Oracle Application Server にロード・バランスおよびフェイルオーバーの機能を提供します。

中規模から大規模の配置の可用性と拡張性を高めるには、OracleAS Web Cache の複数のインスタンスをキャッシュ・クラスタのメンバーとして実行するように構成します。クラスタは、協調する OracleAS Web Cache インスタンスの集合で、連携して 1 つの論理キャッシュを提供します。キャッシュ・クラスタは、障害検出とフェイルオーバーを提供することにより、Web サイトの可用性を高めます。OracleAS Web Cache インスタンスで障害が発生すると、キャッシュ・クラスタの他のメンバーが障害を検出して、障害が発生したクラスタ・メンバーのキャッシュ・コンテンツの所有権を引き継ぎます。これは、要求を所有者のキャッシュ・ノードへ転送した後、要求を受け取るノードがコンテンツを保持しているために実現されます。

Web サイトのコンテンツを複数の OracleAS Web Cache サーバーに分散することで、より多くのコンテンツをキャッシュでき、より多くのクライアント接続をサポートできるため、Web サイトの容量を拡張できます。複数の要求が並行して実行されることにより、同時に処理される要求の数が増えるため、CPU の処理能力を高めることができます。

OracleAS Portal は、Web Cache のオリジナル・サーバーとして機能し、次の Web Cache 機能を利用します。

- 動的に生成されたユーザー固有のページおよびポートレットのコンテンツのキャッシュ
- ファイングレイン・キャッシュ制御
- 失効化ベースのキャッシュ
- レイヤー 7 のロード・バランスおよびフェイルオーバー検出
- パフォーマンス保証とサージ保護

Portal サイトの配置には、次の選択肢があります。

- **同じ場所:** Web Cache は、Portal 中間層と同じ物理サーバーで動作します。この構成は、中間層の拡張性が重要ではない、小規模でデータ量の少ないサイトに適しています。
- **専用:** Web Cache を、1 つ以上の Portal 中間層サーバーの前に位置する専用サーバーに配置します。通常は、専用の配置では他のサーバー・プロセスとのリソース競合のリスクがないため、同じ場所での配置よりも優れています。OracleAS Web Cache は一般的なハードウェアで十分に機能するため、専用の配置は、ハードウェアの費用の点では負担になりません。

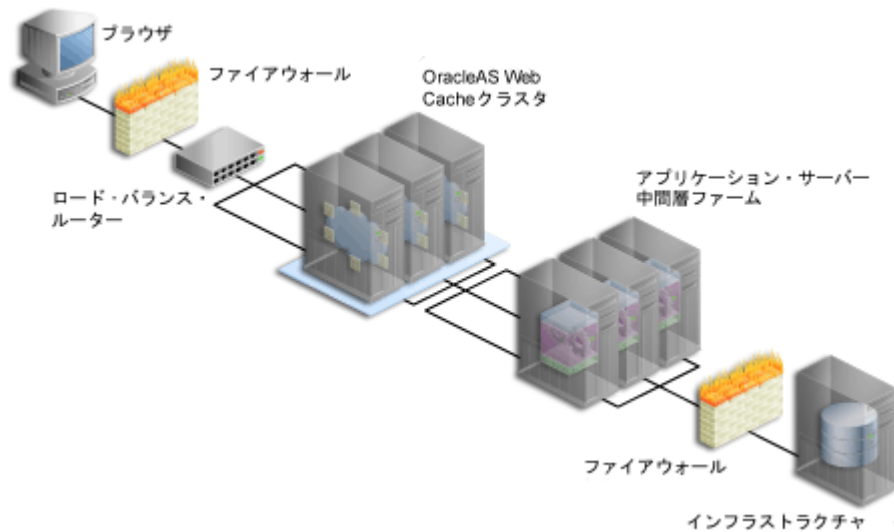
データ量が非常に多いサイトでシングル・ポイント障害を回避するために、ロード・バランス・ルーター (LBR) の背後に、OracleAS Web Cache を実行する複数のノードを配置することができます。OracleAS Portal を複数配置している場合は、各 Portal サイトで専用の



Web Cache サーバーを使用することができます。1つ以上のサイトで、1つの Web Cache サーバーを共有することもできます。同様に、プロバイダと Portal サイトで Web Cache を共有することも、プロバイダをホストしている Web サーバーの前に専用の Web Cache を配置することも可能です。OracleAS Web Cache の構成の詳細は、5.7 項「OracleAS Portal 内の OracleAS Web Cache のキャッシュ構成」を参照してください。

OracleAS Web Cache は、フェイルオーバーを提供するだけでなく、中間層に転送する負荷を均衡させます。また、逆プロキシとして機能することもできます。

図 1-7 中規模から大規模の Portal 構成への OracleAS Web Cache の追加



所有者ノードへ最初の要求があった後、コンテンツはすべてのインスタンスへキャッシュされます。図 1-7 では、LBR は着信要求を 3 つの OracleAS Web Cache インスタンスに配布しています。要求を受け取ったノードでオンデマンド・コンテンツを利用できない場合は、他のインスタンスでキャッシュされたコンテンツが調べられ、要求と一致するコンテンツがブラウザへ返されます。

OracleAS Web Cache のクラスタ機能を利用するには、各インスタンスをキャッシュ・クラスタのメンバーとして構成する必要があります。この設定では、OracleAS Web Cache インスタンスおよびそれと対応する中間層インスタンスとの間に 1 対 1 関係はありません。図 1-7 に示すように、OracleAS Web Cache 1 は中間層 1、2 および 3 の間でロード・バランスを行います。OracleAS Web Cache 2 および 3 も同様に行います。

**関連項目：**『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』



キャッシュとパフォーマンスに関する詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

## 1.3.2 Portal キャッシュについて

Portal キャッシュは、OracleAS Portal のページおよびポートレット用のファイル・システムベースのキャッシュです。Portal キャッシュでは、妥当性チェック・ベースのキャッシュおよび有効期限ベースのキャッシュがサポートされています。

Portal キャッシュは、次の 2 つの種類のキャッシュで構成されています。

### ■ Portal コンテンツ・キャッシュ

コンテンツ・キャッシュには、OracleAS Portal で生成された、ユーザーおよびシステム・レベルのコンテンツが含まれています。この中には、ページ・メタデータ、データベース・ポートレット、Web ポートレット、ドキュメント、スタイル・シートおよびフルページ・キャッシュが含まれています。

### ■ Portal セッション・キャッシュ

OracleAS Portal は、セッション Cookie を使用して、各 Portal ユーザーのセッションの詳細を保持します。このセッション Cookie は暗号化されており、この中にはデータベース・ユーザー名、軽量ユーザー名、セッションのグローバリゼーション・サポート特性などの重要な情報が含まれています。mod\_plsql が Portal の要求を実行するには、セッション Cookie からデータベース・ユーザー名を取得する必要があります。各ユーザーの要求でコストの高い復号化処理を避けるために、mod\_plsql はセッション Cookie をいったん復号化し、関連する詳細をローカル・ファイル・システムのセッション・キャッシュに置きます。

Portal コンテンツとセッション・キャッシュ・コンテンツは、ファイル・システム上にあります。通常は、`ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cache` にあり、`ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/cache.conf` ファイル内で構成されています。

セッション・キャッシュをよりパフォーマンスの高いファイル・システムに移動することによって、パフォーマンスを向上させることができます。これは、Windows および UNIX プラットフォームで一般的に使用できるメモリーベースのファイル・システムになります。Portal キャッシュのパフォーマンス向上の詳細は、[9.6 項「ファイル・システム・キャッシュの調整によるキャッシュのパフォーマンス向上」](#)を参照してください。

複数の中間層の構成では、共有ファイル・システム上の各中間層に対して Portal キャッシュを設定できます。これにより、各中間層はそれぞれのキャッシュからコンテンツを取得しないで、キャッシュされたコンテンツを共有できるようになります。

たとえば、ある中間層は、アイテムに対する要求を Portal キャッシュにキャッシュしてから処理します。通常、複数の中間層を持つ構成に対してロード・バランスを行うため、アイテムに対する次の要求は別の中間層で処理されます。各中間層の Portal キャッシュが共通のファイル・システム上で共有されている場合、この中間層はキャッシュされたコンテンツにアクセスできます。

Portal キャッシュを構成するための様々なパラメータがあります。

- キャッシュの場所
- 総キャッシュ・サイズ
- キャッシュ可能な最大ファイル・サイズ
- キャッシュされたファイルをキャッシュ・システムに保持できる最大時間
- キャッシュ記憶域の消去

**関連項目：**

- 『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』
- 『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「cache.conf」

### 1.3.3 OracleAS Portal におけるキャッシュの失効化について

OracleAS Portal は、OracleAS Web Cache と Portal キャッシュの 2 つのキャッシュ・システムを使用します。OracleAS Web Cache では、失効化ベースのキャッシュと有効期限ベースのキャッシュがサポートされています。Portal キャッシュでは、妥当性チェック・ベースのキャッシュと有効期限ベースのキャッシュがサポートされています。

キャッシュの失効化は、次の 2 つのグループに分類できます。

- **強い失効化**

強い失効化は、1 つのブラウザ要求が行われている間キューに入っており、OracleAS Portal の UI 処理が完了すると処理されます。この結果はすぐに表示されます。大半のページ編集およびすべてのポートレットのカスタマイズは、強い失効化として処理されます。

- **弱い失効化**

弱い失効化は、多数のブラウザ要求が行われている間キューに保持され、弱い失効化のデータベース・ジョブによって後で処理されます。ユーザーまたはグループにページに対する権限を付与するなど、セキュリティに関する変更は弱い失効化として処理されません。

### 1.3.3.1 キャッシュ失効化のリソース要件

次の理由から、キャッシュの失効化が大量に実行されると、システムの処理速度が低下する可能性があります。

- OracleAS Web Cache との通信

強い失効化または弱い失効化のどちらかが処理されるときに、失効メッセージを送信するために、OracleAS Web Cache の失効ポートで TCP/IP 接続が確立されます。

強い失効化の場合は、1つのブラウザ要求の中でキューに入れられたすべてのメッセージが、TCP/IP 接続を使用して OracleAS Web Cache へ送信されます。弱い失効化の場合は、弱い失効化ジョブに処理されるすべてのメッセージが、TCP/IP 接続を使用して OracleAS Web Cache へ送信されます。OracleAS Web Cache はこれらの失効メッセージを受信し、キャッシュされたデータを失効化しようとします。この負荷は、データ要求に応答する OracleAS Web Cache の能力に影響を与えることがあります。

- キャッシュ失効化キューの記憶域

強い失効化と弱い失効化の両メッセージは、OracleAS Metadata Repository のデータベース表内でキューに入れられます。キューのサイズが大きくなるにつれ、キューを保持するためのデータベース・リソースが、より多く必要になります。

- キャッシュ失効化キューの最適化

強い失効化または弱い失効メッセージの処理中に、キューの最適化によって、重複した、または不要な失効メッセージが削除されます。たとえば、ページ・グループが失効化される場合、ページ・グループ内の個々のページに対する失効メッセージは不要です。大量の失効メッセージがキューに入れられている場合は、最適化のプロセスに長時間かかることがあります。

### 1.3.3.2 キャッシュの失効化と複数の DAD

OracleAS Portal では、特定の Portal インスタンスの DAD に基づいた、OracleAS Web Cache 内にキャッシュされたデータの失効化がサポートされています。

OracleAS Web Cache へ送信される失効メッセージには、DAD 情報が含まれている必要があります。これは、OracleAS Web Cache 内にキャッシュされたデータがキャッシュ検索キーの1つとして URL を使用し、Portal データにアクセスするために使用される URL には DAD 名が含まれているからです。したがって、DAD 名が失効メッセージ内に明示的に含まれている必要があります。

---

---

**注意：** 複数の DAD を使用して単一の Portal インスタンスにアクセスすることはできません。

---

---

### 1.3.4 まとめ

以上で、Oracle Application Server のアーキテクチャ、OracleAS Portal がどのように適合しているか、および OracleAS Portal のキャッシュの機能についての基本的な説明を終わります。次は、[第 2 章「Portal の計画」](#)に進んでください。この章を読み終えると、インストールをどのように構成したらよいか分かるようになります。



---

---

## Portal の計画

この章では、Oracle Application Server Portal の計画、インストール、構成および管理に含まれるタスク・フローの詳細について説明します。この章を読むと、Portal を効果的に構築するのに必要なハードウェアおよびソフトウェアをどのように計画すればよいかを理解することができます。

この章の内容：

- 考慮すべき要点
- 必要な作業

---

---

**注意：** この章で使用される用語が不明な場合は、[第 1 章「OracleAS Portal のアーキテクチャについて」](#)を確認してください。

---

---

## 2.1 考慮すべき要点

Portal の構成を計画するには、システムで実現する目標を明確にすることが重要です。次の各項では、これらの重要な決定事項としてそれぞれ何が含まれるのかを確認します。

- 適切なトポロジの選択
- 必要なハードウェア
- パフォーマンスを最大にする方法
- Portal を拡張する方法
- Portal の可用性を向上させる方法
- Portal を保護する方法
- ハードウェアとソフトウェアを構成する方法
- 構成の機能を向上させる方法

### 2.1.1 適切なトポロジの選択

Oracle Application Server には、様々なトポロジ・オプションが用意されています。Oracle Application Server の推奨トポロジには、小規模で一般的な開発の実装から、大規模な企業全体の実装までが含まれています。

**関連項目：** Oracle Application Server 10g のドキュメント・ライブラリにある『Oracle Application Server 10g 概要』の推奨トポロジの概要

### 2.1.2 必要なハードウェア

Web Portal をサポートするサーバー、データベースおよびリソースは、特にピーク間隔では様々なユーザー通信量を処理する必要があります。

Web Portal と同様に、Portal を配置するのに必要なサーバーおよびデータベースの容量は、主に、予想されるユーザー要求の数によって決まります。1つのページをユーザーに表示するには、ユーザーがページの表示を許可されているかどうかの検証、ページに表示されるイメージのロード、ページの書式情報が含まれているスタイル・シートのコールなど、様々な処理が別個に必要な場合があります。

必要な容量の上限および下限は、ユーザーがどのように Portal を使用するかによって決まります。少なくとも、ユーザーが受け入れることができる応答時間と、業務時間中の平均負荷を満たすだけのサーバー容量が必要です。可能であれば、ユーザー業務のピーク間隔中に予想されるページ要求の量を満たすようにします。CPU、メモリー、I/O 容量、ネットワーク帯域幅などのハードウェア・リソースは、応答時間を短縮するための重要な要素です。OracleAS Portal は、多数のトランザクションを処理できるサーバー、またはサーバー・グループにインストールする必要があります。このようにしない場合は、応答時間が長くなる場合があります。



これは、データベースの場合も同じです。多数のアプリケーションが同じデータベース・リソースを競合する場合、Web Portal のパフォーマンスが低下する可能性があります。OracleAS Portal の複数のインスタンス（新しいページおよびポートレットの開発用の本稼働インスタンス、完成した Web Portal の配置用の別個のインスタンスなど）を同じデータベースにインストールすることができます。データベースが両方のインスタンスの要求を適切に処理できるかどうかを考慮する必要があります。

サーバーおよびデータベースの容量を追加すると、Web Portal のパフォーマンスは確実に向上しますが、資金を自由に投入できる場合を除き、十分なパフォーマンスと新しいハードウェアおよびソフトウェアを使用できるようにするためのコストとのバランスを保つ必要があります。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』

## 2.1.3 パフォーマンスを最大にする方法

応答時間は、ユーザー要求の受信から要求に対する応答の完了までの時間です。Web Portal は、最小のソフトウェアおよびハードウェア・オーバーヘッドを使用して、できるだけ早く応答する必要があります。パフォーマンスについては、次の点について考慮する必要があります。

### ■ 負荷を分散させる

Web Portal 上に大量の通信量が予想される場合は、独自の中間層インスタンスを持つ複数のサーバーに負荷を分散することができます。過剰な通信量によって 1 つのサーバーがオーバーロードした場合は、別のサーバーがオーバーフローを処理できます。詳細は、[2.1.8.1 項「ロード・バランス」](#)を参照してください。

### ■ 障害が発生しないようにする

OracleAS Portal 構成を分散すると、Web Portal でより多くのソフトウェア・リソースおよびハードウェア・リソースを利用できるため、単一マシン構成よりもパフォーマンスが向上します。追加のサーバーおよびソフトウェアを使用して、フェイルオーバーを用意することにより、システムの安定性を確保することができます。詳細は、[2.1.8.2 項「フェイルオーバーと冗長性」](#)を参照してください。

### ■ キャッシュ・クラスタを実装する

中規模から大規模の配置の可用性および拡張性を向上させるには、キャッシュ・クラスタを構成することができます。キャッシュ・クラスタは、障害検出とフェイルオーバーを提供することにより、Web サイトの可用性を高めめます。詳細は、[1.3 項「OracleAS Portal のキャッシュについて」](#)を参照してください。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』

## 2.1.4 Portal を拡張する方法

クラスタリングを行うと、単一ホストにおける1つのアプリケーション・サーバー・インスタンスの制約を受けずに、システムを拡張することができます。クラスタは、複数のホスト上に分散している複数のアプリケーション・サーバー・インスタンスを1つにまとめて、全体で1つのアプリケーション・グループとして機能するようにします。このように、クラスタリングを行うと、いずれかのハードウェアが容量に達した場合でも、同時に使用できるユーザーの数を増やすことが可能です。詳細は、[2.1.8.3 項「拡張性」](#) および [1.3 項「OracleAS Portal のキャッシュについて」](#) を参照してください。

## 2.1.5 Portal の可用性を向上させる方法

クラスタリングを行うと、単一のアプリケーション・サーバー・インスタンスを使用した場合よりもシステムの可用性を高めることができます。1つのアプリケーション・サーバー上の単一のインスタンスで稼働しているアプリケーションは、そのサーバーが稼働しているオペレーティング・システムとホストに依存しています。このような場合には、ホストが停止するとアプリケーションも使用できなくなるため、ホストはシングル・ポイント障害を引き起こします。

アプリケーション・サーバー・クラスタを使用すると、冗長性とバックアップが実現され、シングル・ポイント障害が発生しなくなるため、可用性が向上します。クライアントは、クラスタ内の任意のアプリケーション・サーバー・インスタンスへ要求を送信できるロード・バランサを介して、クラスタへアクセスします。1つのアプリケーション・サーバー・インスタンスが使用できない場合でも、どのインスタンスでも要求を処理できるため、ロード・バランサによって、残りのアプリケーション・サーバー・インスタンスへ要求が転送されます。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g 高可用性ガイド』

## 2.1.6 Portal を保護する方法

重要なデータは、すべてのユーザーが使用するコンテンツに影響を与えずに、セキュリティで保護する必要があります。

OracleAS Portal では、このような柔軟な方法で Web コンテンツへのアクセスを管理できるように、Oracle Application Server の他のコンポーネントと Oracle9i Database Server を活用して、Portal を強力に保護します。OracleAS Portal では、そのセキュリティ・モデルを実装するために、次のすべてのコンポーネントと対話します。

- Oracle Application Server Single Sign-On
- mod\_osso (SSL ベースの通信量を実装する Oracle HTTP Server のリスナー・モジュール)
- Oracle Application Server Web Cache
- Oracle Internet Directory
- Oracle Delegated Administration Services
- Oracle Directory Integration Platform

詳細は、第 6 章「[OracleAS Portal の保護](#)」を参照してください。

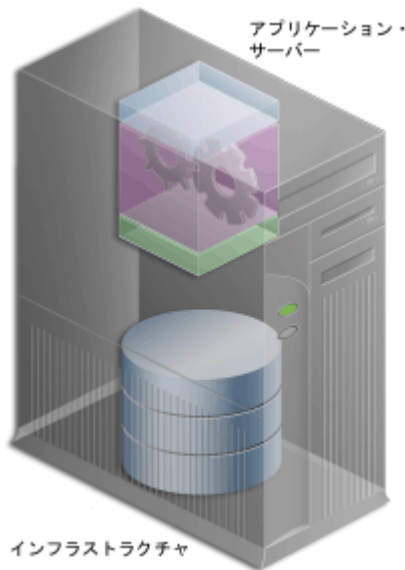
## 2.1.7 ハードウェアとソフトウェアを構成する方法

この項では、OracleAS Portal および Oracle Application Server の関連するすべてのコンポーネントを最適に使用するために、ハードウェアとソフトウェアのインストールをどのように構成するかについて説明します。ここでは、多数のユーザーにサービスを行う大規模なサイトの配置だけでなく、小規模な開発環境を設定するために、ハードウェアをどのように構成するかを説明します。

### 2.1.7.1 単一のマシンの使用

最も単純な構成では、すべてのコンポーネント（アプリケーション・サーバーとインフラストラクチャ）を、[図 2-1](#) に示すように 1 台のマシンにインストールします。実際には、1 つのデータベースをマシンに常駐させ、OracleAS Portal、Oracle Internet Directory および OracleAS Single Sign-On に個別のスキーマを格納することも可能です。

図 2-1 OracleAS Portal 単一マシン構成



この構成は、開発者が OracleAS Portal の宣言インターフェースを使用してページ、ポートレットおよびアプリケーションを構築する、小さな開発環境に適しています。また、完成した Web Portal の小規模な配置を簡単にサポートできます。より多くのコンテンツをより多くのユーザーに配信する大規模なサイトを配置する場合は、[図 2-1](#) に示すような単一のサーバーまたは単純な構成では不十分です。

### 2.1.7.2 複数のマシンの使用

単一マシン構成がニーズに合わない場合は、OracleAS Portal アーキテクチャの様々な要素を他のマシンに移動することを考慮する必要があります。原則として、環境が大きくなるほど、多数のサーバーが必要になり、各サーバーがより特化した処理を実行するように Web Portal を構成する必要があります。ハードウェアを追加すると、パフォーマンスが向上します。ソフトウェア・インスタンスを追加すると、冗長性が確保されます。

大規模な Web Portal サイトを構成する場合の配置オプションには、次の作業が必要です。

- [インフラストラクチャからの中間層の切離し](#)
- [既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール](#)
- [Oracle Identity Management の個別のインストール](#)
- [中間層インスタンスの追加](#)
- [中間層から OracleAS Web Cache を切り離れたインストール](#)

## ■ インフラストラクチャに対する高可用性の構成

配置した Web Portal の要件が実現されるまで、これらの作業を前述の順序で実行する必要があります。たとえば、サイトで通常の作業負荷のみを処理する場合は、最初に中間層をデータベースから切り離してから、Oracle Identity Management を別のサーバーに移動することを考えます。前述の構成作業をすべて実行する必要はありません。ただし、サイトが拡大するにつれ、前述した順序で基になる構成を拡張する必要があります。

---

---

**注意：** Web Portal をオンラインにする前に、小規模なテスト・システムで設定およびテストを行うことをお勧めします。これにより、最終的に使用するユーザーに影響を与えずに、実際の使用パターンに基づいて、役に立つ構成情報および調整情報を集めることができます。

---

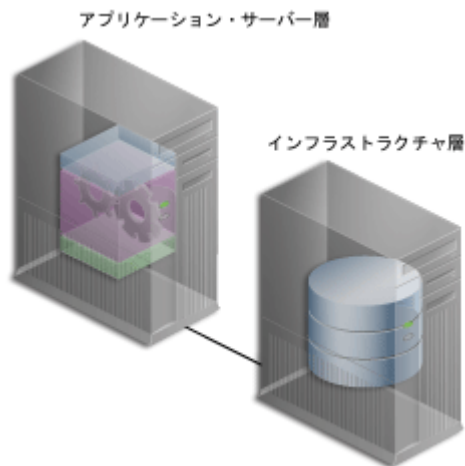
---

### 2.1.7.2.1 インフラストラクチャからの中間層の切離し

大規模なシステムを構成する際に最初に考慮すべきことは、[図 2-2](#) に示すように、中間層を別にインストールすることです。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』

#### 図 2-2 インフラストラクチャ層からの Oracle Application Server Middle-Tier の切離し



これにより、データベースと中間層は、I/O、メモリー、ディスク容量などのハードウェア・リソースの競合から解放されます。また、これらのコンポーネントを別個のマシンにインストールすると、パフォーマンスをより柔軟に調整できます。これは、Oracle Application Server Metadata Repository に多数のコンテンツを格納するようなサイトでは重要です。オペレーティング・システムなどに関する調整パラメータは、HTTP Server などの

中間層コンポーネントの調整パラメータとは別個になります。一方のパフォーマンス・パラメータを設定しても、もう一方のパフォーマンスが調整されない場合があります。

#### 2.1.7.2.2 既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

リリース 10g (9.0.4) では、Oracle Universal Installer は、OracleAS Metadata Repository で生成済の新しいデータベースをインストールすることも、既存のデータベース（カスタム・データベース）を使用することもできます。既存のデータベースを使用する場合は、新しい Oracle Application Server Repository Creation Assistant (REPCA) ツールを実行する必要があります。これは、既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository の内容を移入するためのもので、REPCA CD-ROM から使用することができます。これは、インストーラを実行して Oracle Application Server の他のコンポーネントをインストールする前に行います。

#### 2.1.7.2.3 Oracle Identity Management の個別のインストール

OracleAS Single Sign-On は、OracleAS Portal および他のアプリケーションの Oracle Internet Directory を使用してユーザー証明書を認証します。したがって、ユーザーは、1 つのユーザー名とパスワードを使用して Web Portal に 1 回ログインするだけで、複数のアカウントとアプリケーションにアクセスできるようになります。

配置された OracleAS Portal サイトにログインすると、そのユーザーは、その他の OracleAS Single Sign-On の安全なすべてのアプリケーションに、Portal 内のポータルからアクセスできます。

図 2-3 に示すように、Oracle Identity Management は、OracleAS Metadata Repository とは別のマシンに配置されています。OracleAS Portal の中間層の複数のインスタンスを含む、複数の Oracle 製品と連携するように、Oracle Identity Management の単一のインスタンスを構成することができます。

図 2-3 OracleAS Metadata Repository から切り離してインストールされた Oracle Identity Management

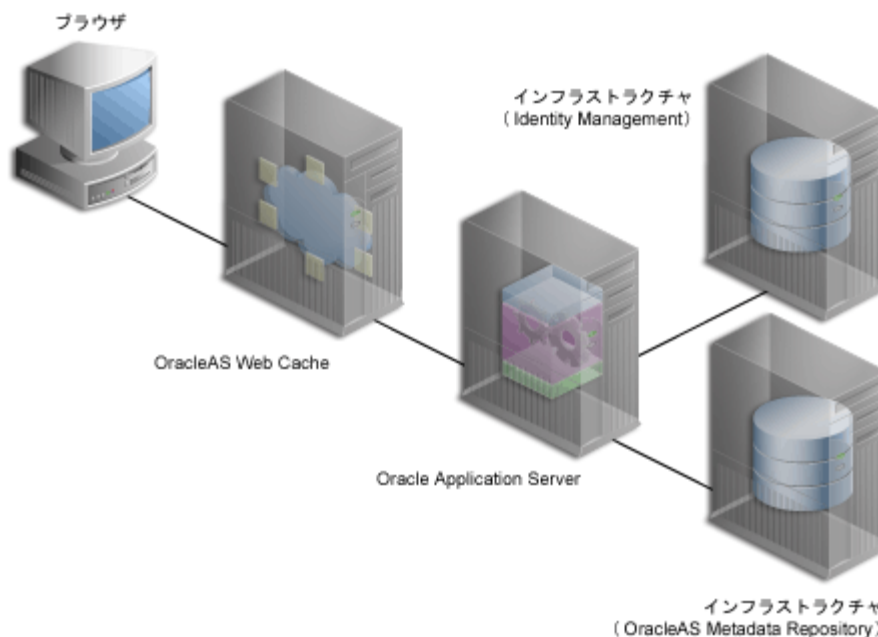


図 2-3 に示すシステムは、分散構成の例です。構成には、複数の中間層インスタンスをサポートすることが可能な、集中型の Oracle Identity Management サーバーが含まれます。Oracle Identity Management を独自のサーバーに移動すると、そのパフォーマンスをデータベースと中間層から切り離して調整できます。

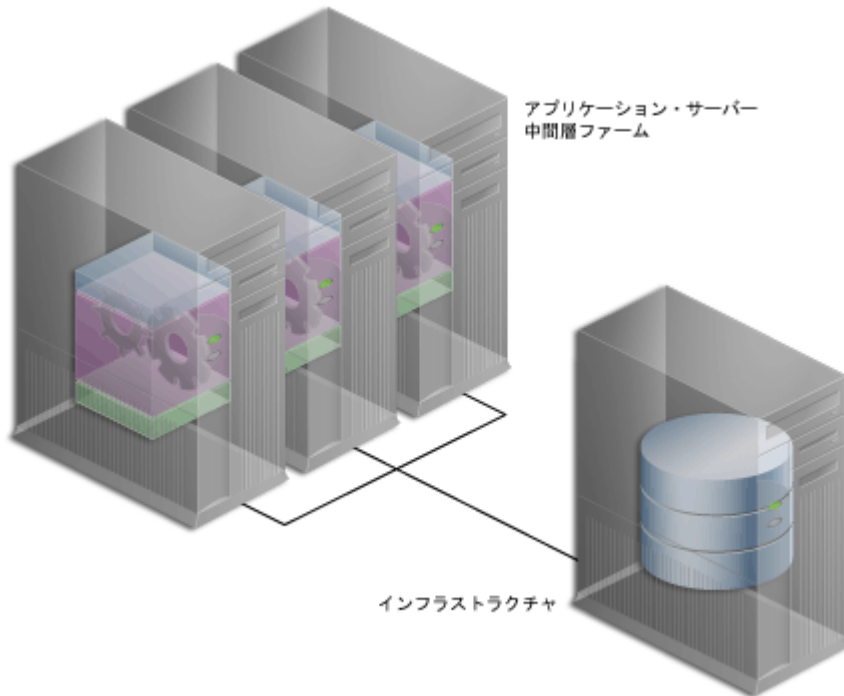
さらに、Oracle Identity Management を中間層インストールから切り離すことにより、分散システム全体の安定性が高まります。中間層がインストールされているマシンに障害が発生しても、Single Sign-On Server、およびログインの検証を Single Sign-On Server に依存するその他の中間層インスタンスは、影響を受けません。また、複数のセキュリティ・ポリシーを使用して、構成内の様々なマシンを管理できます。

**関連項目：** Oracle Application Server 10g のインストール・ガイド

#### 2.1.7.2.4 中間層インスタンスの追加

大規模な Web Portal を使用する場合は、冗長中間層インスタンス（同じ構成設定を持つインスタンス）を追加します。追加された中間層インスタンスは、[図 2-4](#) のようになります。各中間層インスタンスを独自のマシンにインストールすると、ハードウェア障害を切り離すことができます。

図 2-4 複数の中間層



中間層は Portal ページに対するユーザー要求をプロバイダに転送し、返されたコンテンツを使用してページを作成します。中間層インスタンスを OracleAS Portal 構成に追加すると、より多くのユーザー要求を処理できるようになり、Portal 全体のパフォーマンスが向上します。また、要求を転送する前に中間層が一部の処理を実行するため、ネットワークを通じたデータの送受信に要する時間が短縮されます。データベースとネットワーク・リソースがより効率的に使用されます。

#### 2.1.7.2.5 中間層から OracleAS Web Cache を切り離したインストール

OracleAS Web Cache サーバーを中間層から切り離して、データのキャッシュ率の向上、要求時間の短縮、中間層における負荷の軽減を実現することもできます。このようにすると、OracleAS Portal のパフォーマンスも向上します。



### 2.1.7.2.6 インフラストラクチャに対する高可用性の構成

Oracle Application Server 10g では、インフラストラクチャ用に Oracle 高可用性 (HA) のすべてのソリューション (コールド・フェイルオーバー・クラスタ、Data Guard、RAC など) がサポートされています。

関連項目：『Oracle Application Server 10g 高可用性ガイド』

## 2.1.8 構成の機能を向上させる方法

OracleAS Portal 構成を分散すると、Web Portal でより多くのソフトウェア・リソースおよびハードウェア・リソースを利用できるため、単一マシン構成よりもパフォーマンスが向上します。ただし、この他にも利点があります。追加のサーバーおよびソフトウェアを使用して、フェイルオーバーを用意することにより、システムの安定性を確保することができます。また、複数のサーバー間でロード・バランスを使用すれば、1日の間に発生する Web Portal の作業量の変動に対応することができます。さらに、より多くのユーザーをサポートするために、サーバーを分散構成に追加すれば、拡張性を高めることができます。

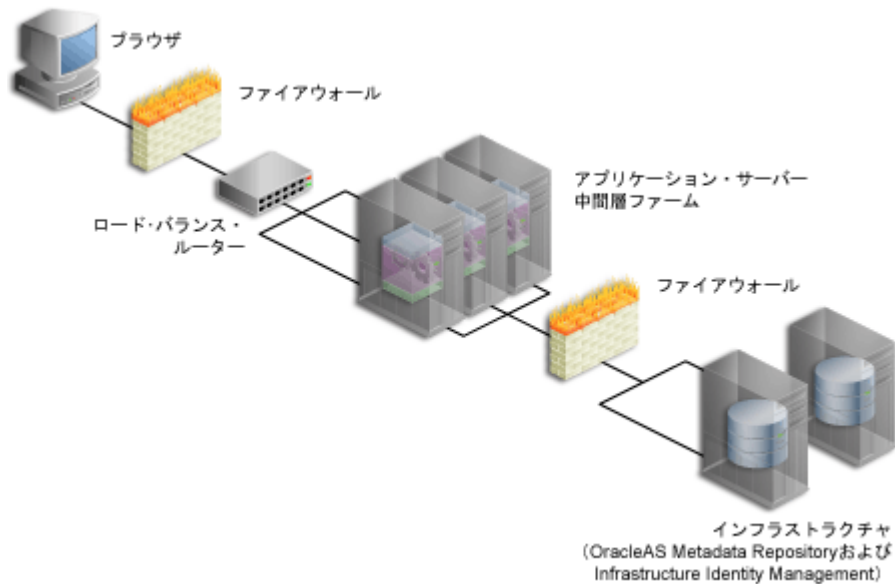
### 2.1.8.1 ロード・バランス

Web Portal 上に大量の通信量が予想される場合は、独自の中間層インスタンスを持つ複数のサーバーに負荷を分散することができます。過剰な通信量によって1つのサーバーがオーバーロードした場合は、別のサーバーがオーバーフローを処理できます。

Oracle Application Server は、着信要求を処理するサーバー・インスタンスのプーリングを利用して、独自のロード・バランス機能を提供します。1つのインスタンスが応答しない場合、要求は別のインスタンスに転送されます。これにより、配置されたサイトのユーザーは、コンテンツとアプリケーションを常に利用できるようになります。

非常に大規模なサイトの場合は、[図 2-5](#) に示すように、ロード・バランス・ルーター (LBR) を追加して、着信要求を中間層サーバーに分散することができます。LBR は、ネットワーク要求を多数のサーバーに配布する高速ネットワーク・デバイスです。ロード・バランス・ルーターは、各要求を特定の中間層サーバーに送信するかわりに、Portal ユーザーに公開アドレスを1つだけ提供します。

図 2-5 ロード・バランス・ルーターを使用する複数のサーバー構成



LBR を追加して、着信要求を中間層サーバーへ分散させる方法の詳細は、5.3 項「ロード・バランス・ルーターを使用する複数の中間層の構成」を参照してください。

たとえば、通信量の多い個人用サイト My.Oracle.com (MOC) で、LBR を使用して要求を振り分けるとします。負荷を分散するソフトウェア・ロジックは、個々の中間層サーバーに個別にインストールされるのではなく、LBR 自体に含まれています。このため、LBR を使用すると、お使いの構成の管理コストが低下します。MOC はイントラネットおよびエクストラネットの Web サイトです。MOC は、オラクル社のオンライン・サービスおよび外部プロバイダ (NASDAQ、Business Week など) のビジネス情報に対するカスタマイズ可能な単一エントリー・ポイントを、オラクル社の顧客および従業員に提供します。

LBR を追加すれば、負荷の変動にも対応できます。ユーザーはサイトにアクセスし、アプリケーションを使用して、特定のピーク間隔 (ほとんどのユーザーがログインして業務を開始する 9 AM ~ 10 AM など) に非常に高い頻度でコンテンツを要求することがあります。このような大量の通信量が発生する時間に、LBR は、ページ要求を様々な中間層インスタンスに分散して、迅速な応答を確保することができます。

ピーク負荷が定期的が発生する場合は、ピーク負荷要件に対応するための構成を検討します。ピーク負荷の頻度が低い場合は、ハードウェアの投資を追加しないで、ピーク間隔に応答時間の遅延が発生する状態で使用することもできます。

LBR 自体を構成してフェイルオーバーをサポートすることもできます。図 2-6 に示す My.Oracle.com の構成では、主ルーターに障害が発生した場合に利用できる、2 番目の LBR を追加することができます。

### 2.1.8.2 フェイルオーバーと冗長性

フェイルオーバーは、サーバーやデータベースなど、システムの一部に障害が発生したときにバックアップに切り替える能力です。たとえば、Oracle9i Database Server に障害が発生した場合は、バックアップに保存された状態情報を使用して、データベースが再起動されます。

冗長性は、同じ構成の複製マシンを用意する手法です。冗長マシンは、要求を十分に処理できる容量を用意し、障害およびエラーが発生した場合はバックアップを使用します。冗長性は、構成内のマシンの数を増やすことにより実装されます。1 台のサーバーがアクティブになっているときは、他のサーバーがそのサーバーの動作を監視して、障害が発生した場合に引き継ぎます。

図 2-6 に示すように、My Oracle.com は、他のサーバーで障害の原因となる問題が発生した場合に、引き継ぐことができる追加の中間層サーバーを使用して、フェイルオーバーを提供します。

---

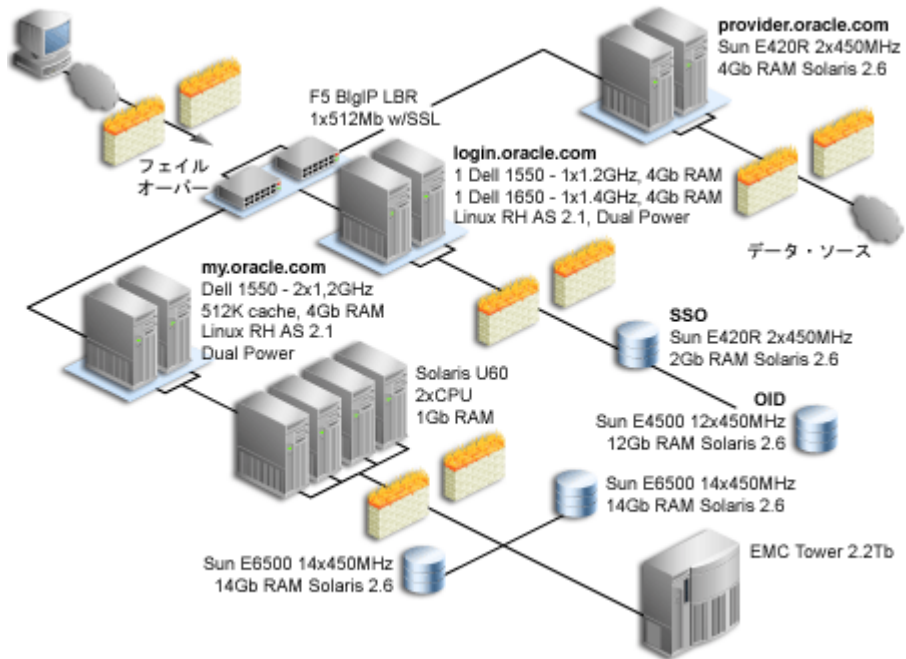
---

**注意：** 図 2-6 に示しているコンポーネントは、考えられる構成のひとつを表しています。オラクル社では、これらの特定のベンダーやコンポーネントを特にお勧めしたり支持しているわけではありません。

---

---

図 2-6 My Oracle.com の中間層の構成



冗長中間層インスタンスを設定するには、同じサーバー名およびサーバー・ポート・エントリ（サーバー名が `my.oracle.com`、ポートが 5000 など）で、元のインスタンスと各冗長インスタンスを構成します。

冗長性のかわりに、構成全体の余剰容量を使用してフェイルオーバーを提供することもできます。たとえば、75% の容量で稼働中の 4 台の中間層サーバーがあるとします。1 台のサーバーで障害が発生した場合、他の 3 台が 4 分の 1 の作業負荷を引き継ぐことができます（ $25\% \times 3 =$  障害が発生したサーバーの 75% の容量）。

### 2.1.8.3 拡張性

拡張性は、ユーザーの数とコンテンツの量が増えたときに、Web Portal がより多くの要求を処理する能力です。Portal がより多くの通信量を処理するときに、パフォーマンスの変化をユーザーに意識させないようにする必要があります。パフォーマンスの変化は、応答間隔とエラーの頻度によって判断されます。拡張性を目標とする場合は、他の構成に悪影響を与えることなく、必要に応じてデータベース容量とサーバーを追加できる柔軟な構成が必要です。

たとえば、My.Oracle.com（MOC）が設定された当初は、およそ 40,000 人の従業員が利用することを想定していました。ユーザー数は最終的に 150 万人まで拡大することが予測され

まず、そのほとんどは Oracle Technology Network (OTN) のユーザーで、各ユーザーには MOC アカウントが自動的に提供されます。

## 2.2 必要な作業

この項では、OracleAS Portal の計画、インストール、構成および管理に含まれるタスク・フローの詳細について説明します。

OracleAS Portal を適切に配置するためには、次の手順が必要です。

1. Portal の計画
2. OracleAS Portal のアップグレード (必要な場合)
3. インストール前の要件の確認
4. Oracle Application Server のインストール
5. インストール後の構成の実行 (基本的な構成および管理)
6. 拡張構成の実行
7. OracleAS Portal の保護
8. OracleAS Portal の監視
9. OracleAS Portal のトラブルシューティング



次の各項では、各手順について詳しく説明し、様々な参照先 (この構成ガイド、Oracle Application Server 10g の他のドキュメント・ライブラリ・ブック、テクニカル・ホワイト・ペーパーおよび Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) など) の詳細情報について説明します。

## 2.2.1 Portal の計画

OracleAS Portal を初めて使用する場合は、第 1 章「OracleAS Portal のアーキテクチャについて」を読むと、OracleAS Portal が Oracle Application Server のアーキテクチャにどのように適合するかを理解することができます。



次のホワイト・ペーパーも、この内容を理解するうえで役に立ちます。

- 『OracleAS Portal Architecture Overview』
- 『Planning Your OracleAS Portal Configuration』

これらのホワイト・ペーパーは、<http://otn.oracle.com/> の Oracle Technology Network で参照できます。

## 2.2.2 OracleAS Portal のアップグレード



OracleAS Portal の以前のリリースからのアップグレードに関する最新情報は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com/upgrades/>) を参照してください。アップグレードのページで、次のドキュメントを参照できます。

- 『Instructions for downloading the upgrade scripts』
- 「OracleAS Portal - Upgrading the Database Repository Release 3.0.9 to 9.0.4」 および 「OracleAS Portal - Upgrading the Database Repository Release 9.0.2 to 9.0.4」 のオンライン・マニュアル形式のガイド
- データベース移行ガイドや Oracle Application Server 移行ガイドなどの関連ドキュメントへのリンク

## 2.2.3 インストール前の要件の確認

インストールをスムーズに行うためには、すべての前提条件を満たしており、インストール前の手順がすべて実行されていることを確認する必要があります。Oracle Application Server 10g のインストール・ガイドには、Oracle Application Server の一般的な要件が記載されていますが、第 3 章「OracleAS Portal のインストール」には、Portal 特有の手順が説明されています。

## 2.2.4 Oracle Application Server のインストール

Oracle Application Server 10g のインストール・ガイドでは、OracleAS Portal を実行するのに必要な Oracle Application Server Middle-Tier および Infrastructure をインストールする手順を説明しています。詳細は、第 3 章「OracleAS Portal のインストール」を参照してください。

## 2.2.5 インストール後の構成の実行

第 4 章「基本的な構成および管理の実行」では、OracleAS Portal の管理者が実行できる、構成後の作業について説明しています。



詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の『Strategies for Administering Privileges in OracleAS Portal』を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

## 2.2.6 拡張構成の実行

第 III 部「拡張構成」は、Oracle Application Server の管理者を対象としています。第 5 章「拡張構成の実行」では、仮想ホスト、ロード・バランス・ルーター、プロキシ・サーバー、OracleAS Web Cache および OracleAS Single Sign-On の構成など、OracleAS Portal の拡張構成と統合構成を実行する方法を説明しています。他の章では、検索、インポートとエクスポート、シンジケーションなどの詳細について説明しています。

## 2.2.7 OracleAS Portal の保護

第 6 章「OracleAS Portal の保護」では、OracleAS Portal でセキュリティ機能を構成するための詳細情報を説明しています。

## 2.2.8 OracleAS Portal の監視

OracleAS Portal は、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールから監視することができます。また、パフォーマンスを監視する目的で、パフォーマンス・レポートを生成することもできます。

OracleAS Portal の監視の詳細は、第7章「[OracleAS Portal の監視と管理](#)」を参照してください。



次のトピックの詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

- ホワイト・ペーパー『[Tuning Oracle Net Services to optimize mod\\_plsql Database access times](#)』
- ホワイト・ペーパー『[Object Access Reporting from the Performance Logs in Oracle9iAS Portal](#)』

## 2.2.9 OracleAS Portal のトラブルシューティング

第13章「[OracleAS Portal のトラブルシューティング](#)」では、様々な問題およびエラーを解決および診断する方法について説明しています。

エラー・メッセージの詳細は、『[Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド](#)』を参照してください。



# 第II部

---

## インストールと基本構成

第2部の内容：

- 第3章「OracleAS Portal のインストール」
- 第4章「基本的な構成および管理の実行」



---

## OracleAS Portal のインストール

この章では、インストール・プロセスの概要を簡単に説明し、さらに Oracle Application Server 10g のインストール・ガイドで取り上げられていない、OracleAS Portal のインストールに関して知っておく必要のあるいくつかの事項についても説明します。

この章の内容：

- インストール・プロセスの機能
- デフォルトでインストールされる内容
- インストール時とインストール後の OracleAS Portal の構成



OracleAS Portal を以前のリリースからアップグレードする場合は、Portal Center のアップグレードに関するドキュメント (<http://portalcenter.oracle.com/upgrades/>) を参照してください。

## 3.1 インストール・プロセスの機能

OracleAS Portal をインストールするには、次の手順を実行します。

1. リリース・ノートやリリース・ノートの付録をよく読んで、インストールに影響がありそうな最新の変更がないかどうか確認します。
2. Oracle Application Server の要件を満たしていることを確認します。
3. トポロジを選択します。Oracle Application Server の柔軟性を示す、推奨されるトポロジについては、表 3-1 を参照してください。それぞれのトポロジでインフラストラクチャや中間層をインストールおよび構成する方法の詳細は、Oracle Application Server 10g のインストレーション・ガイドを参照してください。

表 3-1 推奨されるトポロジ

トポロジ	環境	インフラストラクチャが必要か？	Portal は含まれるか？
Java 開発者トポロジ	開発	いいえ	いいえ
Portal および Wireless 開発者トポロジ	開発	はい	はい
Forms、Reports および Discoverer 開発者トポロジ	開発	はい	いいえ
統合アーキテクトおよびプロセス・モデラー・トポロジ	開発	はい	いいえ
部門別トポロジ	配置	はい	はい
エンタープライズ・データセンター・トポロジ: J2EE アプリケーション	配置	はい	いいえ
エンタープライズ・データセンター・トポロジ: Portal、Wireless および Business Intelligence アプリケーション	配置	はい	はい
開発ライフ・サイクル・サポート・トポロジ	開発および配置	該当なし	いいえ
OracleAS Certificate Authority トポロジ	配置	はい	いいえ

4. Oracle Installer を使用して Oracle Application Server Infrastructure をインストールします。手順に従って、新しい Oracle9i Database Server で Infrastructure をインストールすることができます（その場合は、Oracle Application Server Metadata Repository を格納する必要があります）。あるいは、既存のデータベースに OracleAS Metadata

Repository をインストールすることもできます。この手順では、新しい Oracle Internet Directory もインストールされます。

---

**注意：** OracleAS Metadata Repository (OracleAS Portal スキーマを含む) を既存のデータベースにインストールする場合は、Oracle Application Server Repository Creation Assistant の CD-ROM から入手できる Oracle Application Server Repository Creation Assistant ツール (RepCA) を実行して、既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository を移入する必要があります。これは、インストーラを実行して Oracle Application Server の他のコンポーネントをインストールする前に行います。詳細は、Oracle Application Server 10g のインストールレーション・ガイドを参照してください。

---

Oracle Application Server 10g のインストールレーション・ガイドでは、Installer の起動方法、利用できるコマンドライン・オプションおよび手順について説明しています。複数の Oracle Application Server インスタンスが必要な場合は、Oracle Application Server のインスタンスごとに 1 回ずつインストーラを実行する必要があります。

5. 同様に Oracle Installer を使用して、Portal 中間層をインストールします。Oracle Application Server Middle-Tier にアプリケーション (OracleAS Portal を含む) を配置して実行します。中間層をインストールする手順についても、Oracle Application Server 10g のインストールレーション・ガイドで説明しています。

---

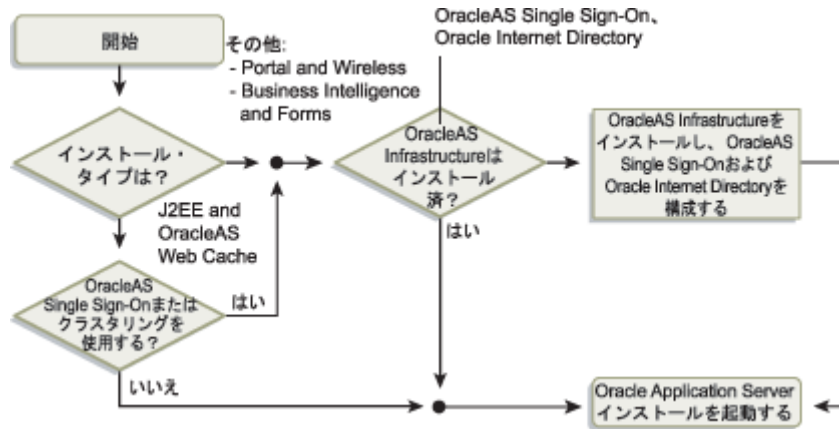
**注意：** Oracle Help for the Web を使用する、OracleAS Portal のオンライン・ヘルプでは、異なる言語でオンライン・ヘルプのユーザー・インタフェースを表示するため、いくつかのフォントを使用しています。適切なフォントをインストールするには、インストール時にオンライン・ヘルプの表示に使用する言語をすべて選択する必要があります。このためには、インストール時に「製品の言語」ボタンをクリックし、「インストールする製品の選択」画面で使用する言語を選択します。

また、Application Server Middle-Tier にインストールされる言語と Application Server Infrastructure にインストールされる言語が一致していることを確認して、「言語の設定」要求が OracleAS Single Sign-On Server に対して発行されたときに問題が発生しないようにする必要があります。詳細は、[B.2.3 項「LANGUAGE」](#)を参照してください。

すべての言語をインストールすると、中間層のインストールに要する時間が長くなります。

---

図 3-1 インストールの概要

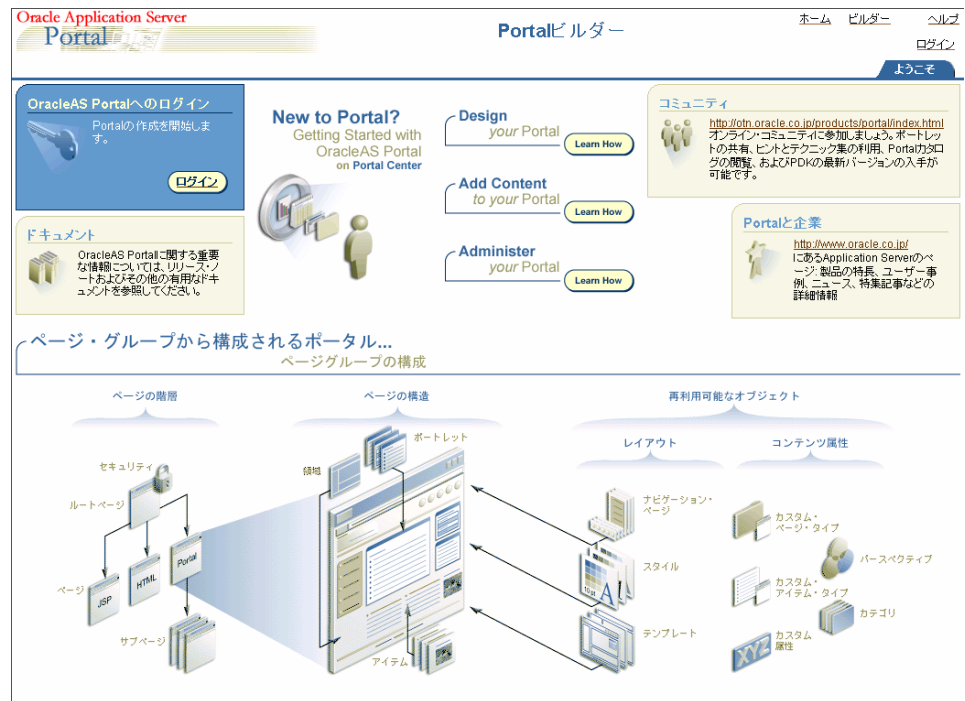


6. Oracle Application Server をインストールした後は、Oracle Application Server のページ (<http://hostname.domain:7777>、7777 はインストール時に使用されたデフォルトのポート番号) に移動します。ここで、ドキュメント・ライブラリの表示、クイック・ツアーの使用、およびいくつかのデモの実行を行うことができます。デモを実行する場合は、「デモ」タブをクリックし、ナビゲーション・パネルから「Portal and Wireless」を選択します。
7. お使いのブラウザで次の URL を入力して、OracleAS Portal にアクセスします。

`http://<hostname>:<portnumber>/pls/<dad>`

「Portal ビルダー」 ページは、[図 3-2](#) のように表示されます。

図 3-2 「Portal ビルダー」 ページ



OracleAS Portal へのアクセスに使用される URL の構成要素について、次の表で説明します。

表 3-2 Portal URL の説明

パラメータ	説明
hostname	<p>OracleAS Portal をインストールしてあるマシンを定義します。</p> <p>ホスト名と絶対ドメイン名の両方を入力してください。たとえば、host.domain.com のように入力します。</p> <p>この名前は、次の場所にある httpd.conf という構成ファイルの ServerName パラメータとも一致している必要があります。</p> <p>ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf</p>
port number	<p>OracleAS Portal のアクセス用に指定したポート番号を定義します。</p>

表 3-2 Portal URL の説明 (続き)

パラメータ	説明
pls	仮想パスを定義し、PL/SQL プロシージャに対する要求であることを指定します。PL/SQL プロシージャでは、その要求を mod_plsql に経路変更するよう Oracle HTTP Server に警告します。
dad	OracleAS Portal のインストール用に指定したデータベース・アクセス記述子 (DAD) を定義します。DAD には、データベースへの接続方法に関する情報が入っています。デフォルトでは、DAD は 'portal' です。

8. 右上端にある「ログイン」リンクをクリックします。

図 3-3 ログイン画面



9. `ias_admin` パスワードを使用して、Portal ユーザーとしてログインします。

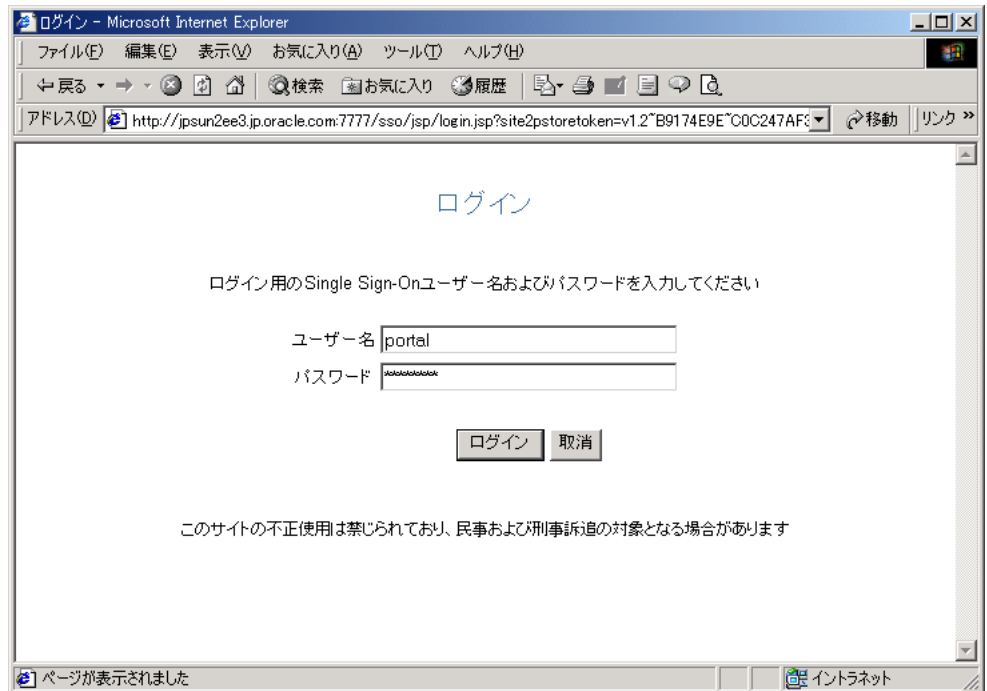
---

**注意：** Oracle Internet Directory のユーザーは、Application Server Metadata Repository の Portal スキーマに基づいて一度だけ作成されます。それ以降に、その Application Server Metadata Repository の Portal スキーマのサービスを使用する中間層をインストールしても、Oracle Internet Directory のユーザーは作成または更新されません。つまり、Portal ユーザーのパスワードは、その Application Server Metadata Repository のサービスを使用する最初の中間層の `ias_admin` パスワードになります。

---



図 3-4 サイン・イン画面



10. ログインによって OracleAS Portal が稼働中であることを確認したら、OracleAS Portal Diagnostic Assistant (PDA) を実行し、生成されたレポートを表示して、その他の確認を行うことができます。PDA の実行方法については、[13.5 項「OracleAS Portal Diagnostics Assistant の使用」](#)を参照してください。

## 3.2 デフォルトでインストールされる内容

OracleAS Portal をインストールすると、いくつかのデフォルトのデータベース・スキーマとユーザー・アカウントもインストールされます。これらのデフォルトについてよく理解しておくことをお勧めします。

- デフォルトのデータベース・スキーマは、第 6 章「OracleAS Portal の保護」の 6.3.1 項「OracleAS Portal のセキュリティ・オプションの構成」で説明します。

**関連項目：**『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』

- OracleAS Portal のデフォルトのユーザー・アカウントおよびグループは、6.1.2.1 項「OracleAS Portal のデフォルトの生成済ユーザー・アカウント」および 6.1.2.2 項「OracleAS Portal のデフォルトの生成済のグループ」で説明します。

Oracle Application Server 10g の OracleAS Metadata Repository コンポーネントをインストールすると、新しいデータベースが作成され、Oracle Application Server コンポーネントが使用するスキーマのコレクション（OracleAS Portal メタデータ・スキーマなど）がデータベースに移入されます。

この新しいデータベースの初期化パラメータは、アウト・オブ・ボックスの状態では、ユーザー数が少ない小規模な OracleAS Portal の構成に適しています。OracleAS Portal を使用する場合は、既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合の要件に基づいて、Oracle Application Server 10g のインストール・ガイドで指定されている設定を使用してデータベースの初期化パラメータを変更することをお勧めします。構成を変更する場合は、使用する構成の規模および OracleAS Portal を同時に使用するユーザーの数を基にして、初期化パラメータをさらに調整しなければならないことがあります。init.ora ファイルは、データベースの ORACLE\_HOME にあります。init.ora ファイルを変更する場合は、変更を有効にするためにデータベースを再起動する必要があります。

### 3.3 インストール時とインストール後の OracleAS Portal の構成

中間層 (OracleAS Portal を含む) のインストール時に、構成を行うかどうかを指定し、インストールの最後で OracleAS Portal を自動的に起動することができます。そのオプションを選択すると、Oracle Universal Installer (OUI) によって次の 2 つのフェーズで OracleAS Portal の構成が行われます。

1. OracleAS Portal 中間層の配置
2. OracleAS Metadata Repository での OracleAS Portal スキーマの構成

OracleAS Portal を構成しないで、後で構成する場合は、次のことを行う必要があります。

- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して、OracleAS Portal を中間層に配置します。詳細は、[7.2.2 項「Application Server Control コンソールを使用した Portal の構成」](#)を参照してください。
- Portal 依存性設定ファイルおよびツールを使用して、OracleAS Metadata Repository で OracleAS Portal スキーマの構成を行います。この手順を実行する必要があるのは、Application Server Control コンソールを使用している場合、デフォルトでは OracleAS Metadata Repository の構成が行われず、OracleAS Metadata Repository の既存の構成エントリが自動的に上書きされないからです。詳細は、[付録 A「Portal 依存性設定ファイルの使用」](#)を参照してください。

OracleAS Web Cache や Oracle Enterprise Manager 10g など、中間層コンポーネントのプロパティに関連した Portal 依存性設定ファイル (iasconfig.xml) に対して行われた変更を OracleAS Metadata Repository に更新することができます。

Portal では、ロード・バランス・ルーター (LBR) がそのフロントエンドとなるように設定されないかぎり、単一のリポジトリから 2 つの中間層の処理を行うことはできません。LBR を使用して OracleAS Portal を設定する手順については、[5.3 項「ロード・バランス・ルーターを使用する複数の中間層の構成」](#)を参照してください。

インフラストラクチャ・サービスをすでに使用しているファームに中間層を追加する場合は、配置中に既存の構成エントリが上書きされないようにする必要があります。この場合は、OracleAS Portal を構成しないで追加の中間層をインストールし、Application Server Control コンソールと Portal 依存性設定ファイルおよびツールを使用して OracleAS Portal を構成します。

---

---

**注意：** デフォルトでは、iasconfig.xml は `ORACLE_HOME/portal/conf` 内にあります。ネットワーク・ファイル・システムを介して Portal 依存性設定ファイルにアクセスできる場合は、複数のホスト間でファイルを共有できるので、ファイルを変更するたびに手でレプリケートする必要はありません。シンボリック・リンクをサポートするオペレーティング・システムでインストールを実行する場合は、共有ファイルを参照するこのメカニズムを使用することをお勧めします。ただし、ネットワークを介して Portal 依存性設定ファイルにアクセスできない場合は、サイトのトポロジの変更を反映してファイルを最新の状態に保つ必要があります。詳細は、[A.1.2 項「Portal 依存性設定ファイルの更新」](#)を参照してください。

---

---

Application Server Control コンソールを使用して OracleAS Portal を中間層に配置するには、[7.2.2 項「Application Server Control コンソールを使用した Portal の構成」](#)に概略を示した手順に従ってください。

この時点で、OracleAS Portal 中間層のコンポーネントが配置され、構成されます。DAD が作成され、Portal 依存性設定ファイル (iasconfig.xml) が更新されています。

Portal 依存性設定ファイル (iasconfig.xml) に対して行われた変更を OracleAS Metadata Repository に更新するには、次のように、ディレクトリ `ORACLE_HOME/portal/conf` にあるスクリプト `ptlconfig` を実行します。

```
ptlconfig -all -dad portal
```

追加の中間層は、拡張性を高めるために本稼働サイトに追加されることがよくあります。前述の 2 つのフェーズからなるプロセスでは、サイトを再起動しなくても中間層を追加できるという柔軟性があります。

---

## 基本的な構成および管理の実行

この章では、OracleAS Portal が Oracle Application Server の一部としてインストールされていると仮定し、インストールの完了後に Portal 管理者が実行できる基本的な作業について説明します。

この章の内容：

- OracleAS Portal の管理の開始
- OracleAS Portal に関する情報の検索
- 基本的なページ管理の実行
- 自己登録の構成
- 基本的な Portal 管理の実行
- OracleAS Portal でのモバイル・サポートの構成
- ユーザー、グループおよびパスワードの管理
- ブラウザ設定の構成
- 言語サポートの構成
- OracleAS PortalWebDAV の構成

## 4.1 OracleAS Portal の管理の開始

OracleAS Portal の基本構成は、OracleAS Portal の「管理」タブで実行できます。また、OracleAS Portal および関連するコンポーネントを構成するためのその他の管理ツールも用意されています。

この項では、様々な管理ツールを紹介します。

- OracleAS Portal の「管理」タブの使用
- その他の管理ツールの使用

### 4.1.1 OracleAS Portal の「管理」タブの使用

OracleAS Portal フレームワークには、監視および構成ツールへのアクセス、シングル・サインオン、ディレクトリ統合、キャッシュおよびセキュリティなどの管理サービスがあります。ユーザーとグループの管理、セキュリティと検索機能の設定、Portal とデータベースの管理に必要な多くの機能が、Portal ページでポートレットを介してアクセスする一連のダイアログ・ボックスに組み込まれています。

OracleAS Portal をインストールしたら、管理者としてログインし、様々な管理機能を実行する必要があります。

OracleAS Portal にログインすると、[図 4-1](#) のような「Portal ビルダー」ページが表示されます。

図 4-1 「Portal ビルダー」 ページ

Oracle Application Server  
Portal

Portalビルダー

ホーム ビルダー ナビゲータ ヘルプ  
編集 カスタマイズ アカウント情報 ログアウト

ようこそ 構築 管理

Oracle Portalへようこそ ORCLADMIN

**New to Portal?**  
Getting Started with OracleAS Portal on Portal Center

**Design**  
your Portal [Learn How](#)

**Add Content**  
to your Portal [Learn How](#)

**Administer**  
your Portal [Learn How](#)

**コミュニティ**  
<http://otn.oracle.co.jp/products/portal/index.html>  
オンライン・コミュニティに参加しましょう。ポートレットの共有、ヒントとテクニック集の利用、Portalからブログの閲覧、およびAPDKの最新バージョンの入手が可能です。

**Portalと企業**  
<http://www.oracle.co.jp/>  
にあるApplication Serverのページ、製品の特長、ユーザー事例、ニュース、特集記事などの詳細情報

ページ・グループから構成されるポータル...  
ページグループの構成

ページの階層

ページの構造

再利用可能なオブジェクト

レイアウト

コンテンツ属性

セキュリティ  
ルートページ  
ページ  
サブページ

ポータル

ポートレット

アイテム

ナビゲーション・ページ  
スタイル  
テンプレート

カスタム・ページ・タイプ  
カスタム・アイテム・タイプ  
カスタム属性

パスペクティブ  
カテゴリ

「管理」タブをクリックしてすべてのサブタブとポートレットを表示すると、Portal を管理しやすくなります。「管理」タブは、図 4-2 のように表示されます。

図 4-2 「Portal ビルダー」 ページの「管理」タブ

The screenshot shows the Oracle Application Server Portal Builder interface. At the top, there's a header with the Oracle logo and 'Portalビルダー'. A navigation bar includes 'ホーム', 'ビルダー', 'ナビゲータ', and 'ヘルプ'. Below this are links for '編集', 'カスタマイズ', 'アカウント情報', and 'ログアウト'. The main area has a 'Portal' tab selected, with sub-tabs for 'ポートレット' and 'データベース'. The 'サービス' (Services) sub-tab is active, showing various management options like 'グループ設定', 'ディレクトリ管理', 'ログ・レジストリ管理', '検索設定', 'Ultra Search管理', 'プロキシ設定', 'Web Cache管理', 'Portalサービスの監視', 'トランスポート・セットのエクスポート/インポート', and 'Oracle Reportsセキュリティ'. Other sub-tabs like 'SSO Server管理', 'ユーザー', 'ポートレット', 'データベース', 'トランスポート・セットのエクスポート/インポート', 'グループ', and 'Oracle Reportsセキュリティ' are also visible, each with its own set of management options.

「管理」タブ画面に次のようなサブタブが表示されます。

- 「Portal」: このサブタブでは、ユーザーとグループの作成、SSO Server の管理、さらに Oracle Internet Directory、Oracle Ultra Search、Oracle Application Server Web Cache、プロキシ設定などのサービスの管理を行うことができます。
- 「ポートレット」: このサブタブでは、ポートレット・リポジトリの表示、そのログ・ファイルの内容の更新、リモート・プロバイダとプロバイダ・グループの登録を行うことができます。
- 「データベース」: このサブタブでは、データベース・スキーマの作成と編集、データベース・ロールの作成と編集、さらにデータベース・パラメータ、メモリー使用量、データベース記憶域の詳細などのデータベース情報の監視を行うことができます。

## Portal

「ビルダー」ページの「管理」タブにあるこのサブタブには、表 4-1 に示すポートレットがあります。このサブタブは、「管理」タブをクリックするとデフォルトで表示されます。



表 4-1 「Portal」サブタブのポートレット

ポートレット名	可能な作業
サービス	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ デフォルト・ホーム・ページやデフォルト・スタイルなどを指定する。</li> <li>■ Oracle Internet Directory にあるユーザーとグループの管理や、ディレクトリ設定の構成を行う。</li> <li>■ ログ・レジストリを管理する。</li> <li>■ 基本検索と拡張検索の機能を構築する。</li> <li>■ プロキシ・サーバーの設定を指定する。</li> <li>■ OracleAS Portal とその依存コンポーネント (Oracle HTTP Server、mod_plsql サービス、Parallel Page Engine サービス、OracleAS Web Cache、OracleAS Metadata Repository、OracleAS Syndication Services、Oracle Ultra Search、プロバイダなど) のパフォーマンスを Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して管理および監視する。</li> </ul> <p>ログ・レジストリの管理と Portal のパフォーマンスの監視の詳細は、第 7 章「OracleAS Portal の監視と管理」を参照してください。</p>
SSO Server 管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ SSO Server の構成を編集する。</li> <li>■ パートナ・アプリケーションの構成情報を作成および編集する。</li> <li>■ 外部アプリケーションの構成情報を作成および編集する。</li> </ul> <p>詳細は、第 6 章「OracleAS Portal の保護」を参照してください。</p>
トランスポート・セットのエクスポート/インポート	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ トランスポート・セットをエクスポートする。</li> <li>■ トランスポート・セットをインポートする。</li> <li>■ トランスポート・セットについて、状態の参照、スクリプトのダウンロード、再使用または削除を行う。</li> </ul> <p>詳細は、第 10 章「コンテンツのエクスポートとインポート」を参照してください。</p>
ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 新しいユーザーを作成し、アカウント情報を指定する。</li> <li>■ ユーザーを編集または削除する。</li> </ul>
Portal ユーザー・プロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ユーザーの設定およびグローバル権限の情報を Portal に構築する。</li> </ul>

表 4-1 「Portal」サブタブのポートレット（続き）

ポートレット名	可能な作業
グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ グループを作成し、それにユーザーを割り当て、グループ管理者を指定する。</li> <li>■ グループを編集または削除する。</li> </ul>
Portal グループ・プロフィール	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ グループの設定および権限の情報を Portal に構築する。</li> </ul>

## ポートレット

「ビルダー」ページの「管理」タブにあるこのサブタブには、表 4-2 に示すポートレットがあります。

表 4-2 「ポートレット」サブタブのポートレット

ポートレット名	可能な作業
ポートレット・リポジトリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ローカルおよびリモートのすべてのポートレットを表示および更新する。</li> <li>■ リポジトリ内にあるすべてのポートレットに関する情報を更新する。</li> <li>■ ポートレット・リポジトリの更新ログを表示する。</li> </ul>
リモート・プロバイダ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ポートレット・リポジトリにプロバイダを追加する。</li> <li>■ プロバイダに関する構成およびアクセス情報を変更する。</li> </ul>
リモート・プロバイダ・グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 1つの URL で複数のプロバイダを登録する。</li> <li>■ プロバイダ・グループの登録を編集する。</li> </ul>

## データベース

「ビルダー」ページの「管理」タブにあるこのサブタブには、表 4-3 に示すポートレットがあります。

表 4-3 「データベース」サブタブのポートレット

ポートレット名	可能な作業
スキーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 新規データベース・スキーマの作成や、既存のスキーマの編集を行う。</li> </ul>
ロール	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 新規データベース・ロールの作成や、既存のロールの編集を行う。</li> </ul>
データベース情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 様々なデータベース関連の情報やパラメータを監視および表示する。</li> </ul>

表 4-3 「データベース」サブタブのポートレット (続き)

ポートレット名	可能な作業
データベースのメモリー使用量、トランザクションおよびロック	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ データベースのジョブを監視する。</li> <li>■ メモリー使用量とトランザクションのレポートとチャートを表示する。</li> <li>■ セッションおよびロックを監視する。</li> <li>■ 不要なユーザー・セッションを停止する。</li> </ul>
データベース記憶域	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ データベース記憶域に関連する様々な情報を監視および表示する。</li> </ul>

## 4.1.2 その他の管理ツールの使用

OracleAS Portal の「管理」タブを使用して実行できない管理タスクについては、次のいずれかのツールを使用する必要があります。

- [Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール](#)
- [Portal 依存性設定ファイルおよびツール](#)
- [OracleAS Portal Configuration Assistant](#)
- [Portal のインストールと構成のスクリプト](#)

### 4.1.2.1 Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールは、Oracle Application Server をインストールするときに組み込まれます。OracleAS Portal の観点からは、Oracle Application Server 用の管理コンソールとみなされます。Application Server Control コンソールによって、ユーザーは次の管理と構成の操作を実行できます。

- コンポーネントの有効化および無効化
- クラスタの管理
- サービスの開始および停止
- ログおよびポートの表示
- リアルタイム監視の実行
- Oracle Application Server Middle-Tier が使用するインフラストラクチャ・サービスの変更

Application Server Control コンソールのこれらの機能の詳細は、[第 7 章「OracleAS Portal の監視と管理」](#)を参照してください。

#### 4.1.2.2 Portal 依存性設定ファイルおよびツール

OracleAS Portal は、コンポーネントの Oracle Application Server Web Cache および Oracle Internet Directory に依存します。Oracle Application Server のインストール後に、これらのコンポーネントの微調整や構成を行う必要がある場合があります。

構成の変更を簡略化するために、OracleAS Portal には Portal 依存性設定ファイルが用意されています。このファイルには、依存するすべてのコンポーネントからの構成データが集中的に格納され、構成が変更されるとファイルの内容が更新されます。

次の目的に Portal 依存性設定ファイルを使用できます。

- OracleAS Portal インスタンスが使用する設定値の確認
- Oracle Application Server Metadata Repository 内の設定の更新

Portal 依存性設定ファイルの詳細は、[付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」](#) を参照してください。

#### 4.1.2.3 OracleAS Portal Configuration Assistant

OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) は、OracleAS Metadata Repository の OracleAS Portal スキーマのインストールおよび構成に使用する Java ベースの構成ツールです。OPCA の詳細は、[付録 B 「OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用」](#) を参照してください。

---

**注意：** 以前のリリースの OracleAS Portal で OPCA (ptlasst) の MIDTIER モードを使用して実行していた操作の多くは、Portal 依存性設定ファイルを使用して実行するようになりました。

---

#### 4.1.2.4 Portal のインストールと構成のスクリプト

様々なスクリプトが OracleAS Portal のインストール時に `ORACLE_HOME` にコピーされます。管理操作を実行するためにこれらのスクリプトが必要になることがあります。詳細は、[付録 C 「OracleAS Portal のインストールおよび構成スクリプトの使用」](#) を参照してください。

## 4.2 OracleAS Portal に関する情報の検索

この項の内容：

- [ブラウザでの OracleAS Portal へのアクセス](#)
- [OracleAS Portal のリリース番号の検索](#)

### 4.2.1 ブラウザでの OracleAS Portal へのアクセス

OracleAS Portal がインストールされたら、ブラウザで次の URL を入力してアクセスします。

```
http://<hostname>:<portnumber>/pls/<dad>
```

URL の構成要素の説明は、[表 3-2 「Portal URL の説明」](#) を参照してください。

#### 関連項目：

- [3.2 項「デフォルトでインストールされる内容」](#)
- 『Oracle Application Server 10g mod\_plsql ユーザーズ・ガイド』

### 4.2.2 OracleAS Portal のリリース番号の検索

Portal のリリース番号を調べるには、次の手順を実行します。

1. 「Portal ビルダー」で、「管理」タブをクリックします。
2. 「Portal」サブタブをクリックします。
3. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」リンクをクリックします。

OracleAS Portal のリリース番号がページの下部に表示されます。

## 4.3 基本的なページ管理の実行

この項の内容：

- デフォルト・ホーム・ページの設定
- システムのデフォルト・スタイルの設定
- 個人用ページの作成
- アップロード・ファイルに割り当てる総容量の設定
- アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズの設定
- ページ・グループ割当ての変更
- エラー・メッセージ・ページの指定
- ユーザーのログアウト時に表示されるページの設定
- 状況依存ヘルプ・リンクの削除

### 4.3.1 デフォルト・ホーム・ページの設定

ホーム・ページは、ユーザーが Oracle Portal にログインすると最初に表示されるページです。次のようなロジックが適用されます。

- ユーザーが個人用のホーム・ページを指定している場合は、ユーザーがログインするとそのページが表示されます。
- ユーザーは個人用のホーム・ページをまだ選択してないが、Portal 管理者がそのユーザーのために設定している場合は、そのユーザーに指定されているデフォルト・ホーム・ページが表示されます。
- ユーザーが個人用のホーム・ページを選択していない場合でも、デフォルトのグループに属していれば、そのグループに指定されたデフォルト・ホーム・ページが表示されます。
- ユーザーのデフォルト・グループのデフォルト・ホーム・ページがない場合は、システムのデフォルト・ホーム・ページが表示されます。

モバイルのサポートが有効になっている場合は、ユーザーがモバイル・デバイスから Portal にアクセスしたときに表示されるデフォルトのモバイル・ホーム・ページを指定できます。

---

---

**注意：** システム、グループまたはユーザーのデフォルト・ホーム・ページを定義するには、Portal 管理者であることが必要です。

---

---

### 4.3.1.1 システムのデフォルト・ホーム・ページの設定

ユーザーのデフォルト・グループのデフォルト・ホーム・ページがない場合は、システムのデフォルト・ホーム・ページが表示されます。

システムのデフォルト・ホーム・ページを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「デフォルト・ホームページ」フィールドの横の「ページをブラウズ」アイコンをクリックし、選択するページのリストを表示します。

---

---

**注意：** このフィールドには値を入力できません。ポップアップ・リストからいずれかを選択してください。

---

---

3. システムのデフォルト・ホーム・ページにするページの横の「戻りオブジェクト」をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

---

---

**注意：** システムのデフォルト・ホーム・ページが正しく設定されたことを確認するには、Portal からログアウトして再度ログインします。ログインしなおすと、指定したページがシステムのデフォルト・ホーム・ページになっています。

---

---

### 4.3.1.2 グループのデフォルト・ホーム・ページの設定

ユーザーが個人用のホーム・ページを選択していない場合でも、デフォルトのグループに属していれば、そのグループに指定されたデフォルト・ホーム・ページが表示されます。

グループのデフォルト・ホーム・ページを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「Portal グループ・プロファイル」ポートレットで、「名前」フィールドにデフォルト・ホーム・ページを割り当てるグループの名前を入力します。

デフォルトでは、「Portal グループ・プロファイル」ポートレットは「ビルダー」ページの「管理」タブにあります。

---

---

**注意：** グループ名が不明な場合は、「グループをブラウズ」アイコンをクリックし、表示されたリストから選択します。

---

---

2. 「編集」をクリックします。

3. 「デフォルト・ホームページ」フィールドの横の「ページをブラウズ」アイコンをクリックし、選択するページのリストを表示します。

---

---

**注意：** このフィールドには値を入力できません。ポップアップ・リストからいずれかを選択してください。

---

---

4. グループのデフォルト・ホーム・ページにするページの横の「戻りオブジェクト」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

---

---

**注意：** グループのデフォルト・ホーム・ページをシステムのデフォルト・ホーム・ページにリセットするには、「リセット」をクリックします。

---

---

#### 4.3.1.3 ユーザーのデフォルト・ホーム・ページの設定

ユーザーが個人用のホーム・ページをまだ選択しておらず、管理者がそのユーザーのために設定している場合は、そのユーザーに指定されているデフォルト・ホーム・ページが表示されます。

ユーザーのデフォルト・ホーム・ページを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「Portal グループ・プロファイル」ポートレットで、「名前」フィールドにデフォルト・ホーム・ページを割り当てるグループの名前を入力します。

デフォルトでは、「Portal グループ・プロファイル」ポートレットは「ビルダー」ページの「管理」タブにあります。

---

---

**注意：** ユーザー名が不明な場合は、「ユーザーをブラウズ」アイコンをクリックし、表示されたリストから選択します。

---

---

2. 「編集」をクリックします。
3. 「デフォルト・ホームページ」フィールドの横の「ページをブラウズ」アイコンをクリックし、選択するページのリストを表示します。

---

---

**注意：** このフィールドには値を入力できません。ポップアップ・リストからいずれかを選択してください。

---

---

4. ユーザーのデフォルト・ホーム・ページにするページの横の「戻りオブジェクト」をクリックします。



5. 「OK」をクリックします。

---

---

**注意：** ユーザーのデフォルト・ホーム・ページをシステムのデフォルト・ホーム・ページにリセットするには、「リセット」をクリックします。

---

---

## 4.3.2 システムのデフォルト・スタイルの設定

Portal 管理者は、システムのデフォルトとなるスタイルを選択する必要があります。

あるスタイルが削除されると、そのスタイルを使用していたすべてのページおよびアイテム領域は、ページ・グループのデフォルト・スタイルに戻ります。ページ・グループのデフォルト・スタイルが「<なし>」の場合は、すべてのページおよび領域がシステムのデフォルト・スタイルに戻ります。

---

---

**注意：** システムのデフォルト・スタイルを設定するには、Portal 管理者であることが必要です。

---

---

システムのデフォルト・スタイルを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「Portal ビルダー」で、「管理」タブをクリックします。
2. 「Portal」サブタブをクリックします。
3. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」リンクをクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
4. 「デフォルト・スタイル」セクションで、「表示名」リストからスタイルを選択します。

---

---

**注意：** リストには、「共有オブジェクト」ページ・グループのパブリック・スタイルがすべて含まれています。

---

---

5. 「OK」をクリックして Portal ビルダーに戻ります。

### 4.3.3 個人用ページの作成

個人用ページを使用すると、OracleAS Portal 内に、認可されたユーザーが自分のコンテンツを格納したり共有したりできる領域ができます。個人用ページは、「共有オブジェクト」ページ・グループにあり、ユーザー名のアルファベット順に並んでいます。

---

---

**注意：** ユーザーの個人用ページを作成するには、Portal 管理者であることが必要です。

---

---

この項の内容：

- 新しいユーザーの個人用ページの自動作成
- 既存ユーザーの個人用ページの作成

#### 4.3.3.1 新しいユーザーの個人用ページの自動作成

OracleAS Portal を構成して新しいユーザーの個人用ページを自動的に作成するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「メイン」タブが表示されていることを確認します。
3. 「新しいユーザーに個人用ページを作成する」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

新しいユーザーが初めてログインしたときに、そのユーザーに個人用ページが自動的に作成されます。

---

---

**注意：**

- 個人用ページは、新しいユーザーが初めてログインしたとき（つまり、ユーザーにユーザー・レコードが作成されたとき）に自動的に作成され、すでに存在するユーザーには作成されません。
  - 新しいユーザーを作成し、そのユーザーが初めてログインする前にプロフィールを編集すると、そのユーザーが初めてログインしたとき個人用ページは作成されません。これは、ユーザーのプロフィールを編集するとユーザー・レコードが作成され、そのユーザーがログインしたときに新しいユーザーとみなされないためです。
- 
-

### 4.3.3.2 既存ユーザーの個人用ページの作成

OracleAS Portal を構成して既存ユーザーの個人用ページを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレットで、
  - a. 「名前」フィールドに、個人用ページを作成するユーザーの名前を入力します。

---

---

**注意：** ユーザー名が不明な場合は、「ユーザーをブラウズ」アイコンをクリックし、表示されたリストから選択します。

---

---

- b. 「編集」をクリックします。

デフォルトでは、「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレットは「ビルダー」ページの「管理」タブにあります。

2. 「設定」タブが表示されていることを確認します。
3. 「個人用ページの作成」を選択します。

---

---

**注意：** このチェック・ボックスが表示されない場合、そのユーザーにはすでに個人用ページが作成されています。

---

---

4. 「OK」をクリックします。

---

---

**注意：**

- 個人用ページには、「共有オブジェクト」ページ・グループの「ナビゲータ」からアクセスできます。認可されたユーザーは「共有オブジェクト」ページ・グループの「個人用ページ」領域にドリルダウンできますが、自分の個人用ページまたはアクセス権限が付与されたページの個人用ページを表示することしかできません。
  - アルファベットで始まらないユーザー名の付いたユーザーの個人用ページは、「個人用ページ」の「その他」領域にあります。
  - 個人用ページは削除できません。
- 
-

## 4.3.4 アップロード・ファイルに割り当てる総容量の設定

ページ・グループにアップロードされたドキュメントを格納するために、データベース内に確保される容量を制限できます。1つのページ・グループに確保される容量を制限する場合は、[4.3.6 項「ページ・グループ割当ての変更」](#)を参照してください。

コンテンツ作成者がページ・グループにアップロードできる個別のファイルのサイズを制限することもできます。詳細は、[4.3.5 項「アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズの設定」](#)を参照してください。

ユーザーがファイルを Portal にアップロードするとき、アップロードは中間層で監視され、総容量または最大ファイル・サイズが制限を超過していないかが検出されます。これらの制限のいずれかを超過すると、アップロードは終了し、エラー・メッセージが表示されます。

---

---

**注意：** アップロード・ファイルに割り当てる総容量を設定するには、Portal 管理者であることが必要です。

---

---

アップロード・ファイルに割り当てる総容量を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「メイン」タブが表示されていることを確認します。
3. 「割り当てる総容量」ラジオ・グループで、「制限値」を選択してこの Portal のページ・グループにアップロードされるファイルを格納するために確保される総容量を制限します。
4. フィールドに、Portal 全体でアップロード・ファイル用に確保する最大容量を MB 単位で入力します。この制限に達すると、ユーザーは Portal 内のページ・グループにファイルをアップロードできなくなります。

---

---

**注意：**

- アップロード・ファイルに制限を設けない場合は、「制限なし」を選択します。
  - 「使用済み領域」フィールドに、この Portal のページ・グループにアップロードされたドキュメントが現在使用している容量が表示されます。
- 
- 

5. 「OK」をクリックします。

### 4.3.5 アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズの設定

Portal のページ・グループにアップロードできる個別のファイルのサイズを制限できます。

ページ・グループにアップロードされたドキュメントを格納するために、データベース内に確保される総容量を制限することもできます。詳細は、[4.3.4 項「アップロード・ファイルに割り当てる総容量の設定」](#)を参照してください。

ユーザーがファイルを Portal にアップロードするとき、アップロードは中間層で監視され、最大ファイル・サイズまたは Portal ファイル割当ての制限を超過していないかが検出されます。これらの制限のいずれかを超過すると、アップロードは終了し、エラー・メッセージが表示されます。

---

---

**注意：** アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズを設定するには、Portal 管理者であることが必要です。

---

---

アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「メイン」タブが表示されていることを確認します。
3. 「最大ファイル・サイズ」ラジオ・グループで、「制限値」を選択して Portal にアップロードされる個別のファイルの最大サイズを指定します。
4. フィールドに、Portal にアップロードされる個別のファイルの最大サイズを MB 単位で入力します。コンテンツ作成者がこのサイズを超えるファイルをアップロードしようとすると、エラーが表示されます。

---

---

**注意：** 最大ファイル・サイズを設けない場合は、「制限なし」を選択します。

---

---

5. 「OK」をクリックします。

### 4.3.6 ページ・グループ割当ての変更

アップロードされたドキュメントを格納するためにページ・グループ内に確保される容量を制限できます。

---

---

**注意：** ページ・グループ割当てを変更するには、次の権限の少なくとも1つを持っている必要があります。

- Portal 管理者
  - ページ・グループの「すべて管理」権限
  - すべてのページ・グループの「すべて管理」グローバル権限
- 
- 

ページ・グループ割当てを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「Portal ナビゲータ」 ページで、「ページ・グループ」 タブをクリックします。
2. 作業対象のページ・グループの横の「プロパティ」 をクリックします。
3. 「ページ・グループ割当て」 セクションで、「制限値」 を選択してアップロードされたドキュメントを格納するために確保される容量を制限します。
4. フィールドに、ページ・グループにおけるアップロードされたドキュメントのサイズ制限を MB 単位で入力します。この制限に達すると、ユーザーはページ・グループにドキュメントをアップロードできなくなります。

---

---

**注意：** アップロードするドキュメントに制限を設けない場合は、「制限なし」 を選択します。

---

---

5. 「OK」 をクリックします。

### 4.3.7 エラー・メッセージ・ページの指定

OracleAS Portal では、ユーザーに表示するエラー・メッセージ・ページを選択できます。デフォルトのシステム・エラー・ページを選択することも、カスタマイズした独自のエラー・ページを指定することもできます。

OracleAS Portal には、「サンプル・エラー・ページ」というエラー・メッセージ・ページが含まれており、Portal 内にある他のページの外観に合わせて編集できます。「サンプル・エラー・ページ」は「Portal 設計時」ページ・グループにあり、すべての診断情報を表示するポートレットが含まれています。また、独自のエラー・メッセージ・ページを任意のページ・グループに作成することもできます。これを行うには、「エラー・メッセージ」ポートレットをページに含め、キャッシュを無効にする必要があります。

---

---

**注意：** デフォルトでは、「エラー・メッセージ」ポートレットは、ポートレット・リポジトリの「管理ポートレット」ページにあります。

---

---

エラー・メッセージ・ページを指定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. 「エラー・ページ」セクションで、次のいずれかを選択します。

- 「システム・エラー・ページ」：システム・エラー・ページを使用してフルページのエラー・メッセージをユーザーに表示します。システム・エラー・ページには、すべての診断情報が自動的に含まれます。
- 「エラー・ページ」：独自のページを使用してフルページのエラー・メッセージをユーザーに表示します。「ページをブラウズ」アイコンをクリックし、使用するエラー・メッセージ・ページを選択します。

3. 「OK」をクリックします。

### 4.3.8 ユーザーのログアウト時に表示されるページの設定

ユーザーがログアウトした後に表示されるページを指定するには、パブリック（認証されていない）ユーザー用のデフォルト・ホーム・ページを設定します。

---

---

**注意：** デフォルト・ホーム・ページを定義するには、Portal 管理者である必要があります。

---

---

ユーザーのログアウト時に表示されるページを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「Portal ユーザー・プロフィール」ポートレットで、「名前」フィールドに「PUBLIC」と入力します。

デフォルトでは、「Portal ユーザー・プロフィール」ポートレットは「ビルダー」ページの「管理」タブにあります。

2. 「編集」をクリックします。
3. 「デフォルト・ホームページ」フィールドの横の「ページをブラウズ」アイコンをクリックし、選択するページのリストを表示します。

---

---

**注意：** このフィールドには値を入力できません。ポップアップ・リストからいずれかを選択してください。

---

---

4. ユーザーがログアウトするときに表示されるページの横の「戻りオブジェクト」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

---

---

**注意：** この設定を削除するには、「リセット」をクリックします。

---

---



### 4.3.9 状況依存ヘルプ・リンクの削除

SQL\*PLUS にアクセスできる場合は、OracleAS Portal のウィザード、ダイアログ・ボックス、アラートなどのバナーに表示される状況依存ヘルプ・リンクを非表示にすることができます。ウィザード、ダイアログ・ボックスおよびアラートの青いバー上の「?」アイコンを非表示にはできません。

この作業は UI からは実行できません。SQL\*PLUS からプログラムによって行う必要があります。

---

---

**注意：** Portal スキーマと Portal SSO スキーマの両方で、次の API コールを行う必要があります。

---

---

状況依存ヘルプ・アイコンを削除するには、次の手順を実行します。

1. SQL\*PLUS にアクセスします。
2. 次のように入力します。

```
exec wwui_api_body.set_display_help (wwui_api_body.DISPLAY_HELP_OFF);
```

状況依存ヘルプ・アイコンを元に戻すには、次の手順を実行します。

1. SQL\*PLUS にアクセスします。
2. 次のように入力します。

```
exec wwui_api_body.set_display_help (wwui_api_body.DISPLAY_HELP_ON);  
commit;
```

## 4.4 自己登録の構成

ユーザーが独自の Portal ユーザー・アカウントを作成できるようにするには、自己登録機能を設定する必要があります。このプロセスが終了すると自己登録リンクが「ログイン」ポートレットに表示されます。

アカウントが承認されるまでログインできないように、自己登録ユーザーに対する承認プロセスを設定することができます。アカウントが承認または拒否されると、ユーザーは電子メールによる通知を受けます。

自己登録ユーザーに対して承認を必要としない場合、ユーザーは登録後ただちに Portal にログインできます。

---

---

**注意：** 自己登録を設定するには、Portal 管理者であることが必要です。

---

---

自己登録を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「自己登録のオプション」セクションで、「自己登録を有効にする」を選択します。
3. 自己登録ユーザーが登録後ただちに Portal にログインできる場合は、「承認は必要ありません」を選択します。
4. 自己登録ユーザーが Portal にログインする前に承認を受ける必要がある場合は、「承認が必要です」を選択します。
  - a. 「構成」をクリックして承認プロセスを設定します。
  - b. 「受信者」フィールドに、自己登録ユーザーを承認するユーザーまたはグループの名前を入力します。

---

---

**注意：** 複数のユーザーまたはグループを区切るには、セミコロン (;) を使用します。承認ルーティングの各手順には、ユーザーとグループの両方を含めることができます。

---

---

- c. 「承認者のルーティング方法」ラジオ・グループで、次のように選択します。
  - 「一度に 1 人ずつ、全員の承認が必要」: 各ユーザーまたはグループに順番に通知し、すべてのユーザーまたはグループが自己登録ユーザーをログイン前に承認する必要がある場合。

- 「一度に全員、全員の承認が必要」:すべてのユーザーおよびグループに同時に通知し、すべてのユーザーまたはグループが自己登録ユーザーをログイン前に承認する必要がある場合。
  - 「一度に全員、1人のみの承認が必要」:すべてのユーザーおよびグループに同時に通知するが、1人のユーザーまたはグループ・メンバーだけが自己登録ユーザーをログイン前に承認する必要がある場合。
- d. 「手順を追加」をクリックします。
- e. a から d までの手順を繰り返し、承認プロセスに手順を追加します。

---

---

**注意:**

- このタブの他の設定を変更する必要はありません。この画面の他のタブの設定も同様です。
  - 承認連鎖の中の最終承認者は、PORTAL ADMINISTRATORS グループのメンバーで、Oracle Internet Directory に定義された電子メール・アドレスを持っている必要があります。
- 
- 

- f. 「OK」をクリックして「グローバル設定」画面に戻ります。
- g. 「電子メール (SMTP) ホスト」セクションで、電子メール・サーバーのホスト名とポートを入力し、アカウントが承認または拒否されたときに、自己登録ユーザーが電子メールによる通知を受けるようにします。
5. 「OK」をクリックします。
6. Portal のホーム・ページに移動します。
7. 編集モードに切り替えます。
8. Portal のホーム・ページに「ログイン」ポートレットがまだ含まれていない場合は、ページに「ログイン」ポートレットを追加します。
- デフォルトでは、「ログイン」ポートレットはポートレット・リポジトリの「管理」ページの「SSO/OID」ページにあります。
9. 「ログイン」ポートレットの横の「操作」アイコンをクリックします。
10. 「デフォルトの編集」をクリックします。
11. 「自己登録を有効にする」を選択します。
12. 「自己登録リンクのテキスト」フィールドに、Portal に登録するときにユーザーがクリックするテキストを入力します。
13. OracleAS Portal の自己登録画面を使用する場合は、「自己登録 URL」フィールドを空白のままにしておきます。

独自の自己登録画面を作成する場合は、このフィールドに URL を入力します。

14. 「OK」をクリックします。

## 4.5 基本的な Portal 管理の実行

この項の内容：

- [OracleAS Portal インスタンスの完全な URL の簡略化](#)
- [OracleAS Portal ホーム・ページを使用するための Oracle HTTP Server の構成](#)
- [Portal DAD の構成](#)
- [Portal キャッシュの消去](#)
- [カスタム・イメージ・ディレクトリの使用](#)

### 4.5.1 OracleAS Portal インスタンスの完全な URL の簡略化

Redirect ディレクティブを使用すると、OracleAS Portal のインストールによって作成された完全 URL をより覚えやすい（わかりやすい）URL に簡略化できます。このようにすると、エンド・ユーザーは単純な URL を入力するだけで OracleAS Portal にアクセスできます。

デフォルトでは、新たにインストールした OracleAS Portal の URL は次のように入力する必要があります。

```
http://<hostname>:<portnumber>/pls/<dad>
```

この URL を次のように簡略化できます。

```
http://<hostname>/<redirectpath>
```

1. Oracle HTTP Server 構成ファイル `httpd.conf` を開きます。このファイルは次のディレクトリにあります。

```
ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf
```

2. 次のようにリダイレクト・パスを入力します。

```
Redirect /<DADnamepath> http://<hostname>:<portnumber>/pls/<dad>
```

たとえば、次のようになります。

```
Redirect /portalhome http://mysite.oracle.com/pls/portal
```

この例では、エンド・ユーザーは次のように入力できます。

```
http://mysite.oracle.com/portalhome
```

たとえば、次のような完全な URL にアクセスできます。

`http://mysite.oracle.com/pls/portal`

---



---

**注意：**

- 例の `http://mysite.oracle.com/portalhome` では、デフォルト・ポート 80 を使用していると仮定しています。デフォルト・ポートを使用していない場合、ユーザーは `http://mysite.oracle.com:<port>/portalhome` のようにポート番号を指定して URL を入力する必要があります。
- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して `httpd.conf` ファイルを編集することもできます。

`httpd.conf` ファイルを手動で更新した場合は、次のように `ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl` を実行して、中間層で手動で行った構成の変更を同期化する必要があります。

```
dcmctl updateConfig -ct ohs
```

最後に、`ORACLE_HOME/opmn/bin` から次のコマンドを実行して Oracle HTTP Server を再起動します。

```
opmnctl restartproc type=ohs
```

---



---

## 4.5.2 OracleAS Portal ホーム・ページを使用するための Oracle HTTP Server の構成

OracleAS Portal ホーム・ページを Oracle HTTP Server のデフォルト・ホーム・ページに設定するには、次の手順を実行します。

1. `ORACLE_HOME/Apache/Apache/htdocs/` ディレクトリで、`index.html.html` ファイルおよび `index.html.<lang>` ファイルのバックアップ・コピーを作成します。`<lang>` は、言語コードです。たとえば、`index.html.en` は、英語の索引 HTML ファイルです。
2. `index.html.<lang>` ファイルの内容全体を次の HTML リダイレクト・コードで置き換えます。

```
<HTML>
<SCRIPT LANGUAGE=JavaScript>
document.location="http://host.domain:port/pls/portal"
</SCRIPT>
</HTML>
```

---

---

**注意：**

- OracleAS Portal をポート 80 で実行している場合は、ポート番号を指定しないでください。
  - 他の言語のサポートを計画している場合は、言語ごとに、リダイレクト・コードを含む言語固有の索引 HTML ファイルを用意する必要があります。
- 
- 

### 4.5.3 Portal DAD の構成

mod\_plsql により Web 上での PL/SQL ベースのアプリケーションの構築と配置がサポートされます。PL/SQL スタアド・プロシージャにより、データベース・テーブルからデータを取得し、Web ブラウザに表示するためのフォーマットされたデータと HTML コードを含む HTTP レスポンスを生成することができます。

データベース・アクセス記述子 (DAD) は、アプリケーションが HTTP リクエストを満たすために Oracle データベースに接続する方法を示す値のセットです。DAD の情報には、ユーザー名 (スキーマと権限も指定)、パスワード、接続文字列およびデータベースのグローバルバージョン・サポート言語が含まれます。

DAD には、一般的な DAD と Portal DAD の 2 種類があります。OracleAS Portal 中間層は、Portal DAD を使用して OracleAS Metadata Repository にアクセスします。Portal DAD については、この項で説明します。一般的な DAD の詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの mod\_plsql サービスのページから DAD 情報を構成します。図 4-3 を参照してください。

### 図 4-3 Application Server Control コンソール - DAD の構成

#### DADの作成: データベース接続

##### データベース・アクセス記述子(DAD)名

データベース・アクセス記述子の一意な名前です。名前には特殊文字や空白を含めることはできず、最大文字数は64文字です。

DAD名または位置

PortalのDAD名または位置の前には/pls/が付けられます。

##### データベース接続情報

ユーザー名

パスワード

接続文字列

接続文字列の書式

NLS言語

NLS言語はバックエンドのデータベースと同じである必要があります。

書式<NLS\_LANGUAGE><NLS\_TERRITORY><NLS\_CHARACTERSET>を使用してください。例: American\_America.UTF8。  
nls\_database\_parameters表に照合を行うことによって、これらの値を取得できます。

次の場所から mod\_plsql サービスのページにアクセスできます。

- Application Server Control コンソール: 次に説明があります。
- OracleAS Portal: サービス・ポートレット (「管理」タブ) で「Portal サービスの監視」を選択して Application Server Control コンソールにアクセスします。次に、「コンポーネント・ステータス」表から「mod\_plsql サービス」を選択します。

Application Server Control コンソールから Portal DAD を構成するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールに移動します。  
通常は、`http://<host>.<domain.com>:1812` です。詳細は、7.2 項「Application Server Control コンソールの使用」を参照してください。
2. DAD を追加する Application Server インスタンスに移動します。
3. 「システム・コンポーネント」表から「HTTP Server」を選択します。
4. 「管理」をクリックします。
5. 「PL/SQL のプロパティ」をクリックします。
6. 「DAD」セクションで、「作成」をクリックして新しい DAD を構成します。

「DAD」セクションから、既存の DAD を管理することもできます。既存の DAD を編集するには、「DAD 名」をクリックします。DAD を削除するには、DAD 名を選択し、「削除」をクリックします。

7. 「DAD タイプ」に「Portal」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「DAD 名または位置」には、デフォルト DAD へのパスを指定します。

---

**注意：** DAD 名には、非 ASCII 文字（マルチバイト文字など）を入力しないでください。

---

9. 次のデータベース接続情報を入力します（[図 4-3](#)を参照）。

- 「ユーザー名」：Oracle データベース・アカウントのユーザー名を入力します。
- 「パスワード」：Oracle データベース・アカウントのパスワードを入力します。パスワードは通常インストール時に設定しますが、このフィールドに新しいパスワードを入力して変更できます。

Oracle ユーザー名と Oracle パスワードのフィールドを空白のままにしておくと、ユーザーは最初にログインしたときにユーザー名とパスワードの入力を求められます。

- 「接続文字列」：データベースがリモートの場合は、接続文字列を入力します。次に、「接続文字列の書式」プロパティを使用して、入力した接続文字列の書式を指定します。

データベースがローカルの場合は、このフィールドを空白のままにします。

- 「接続文字列の書式」：「接続文字列」プロパティに使用する書式を指定します。

「接続文字列の書式」を指定しない場合、`mod_plsql` は接続文字列の書式が `SIDFormat (host:port:sid)` であるか、または `NetServiceNameFormat` として解決可能であるとみなします。この 2 つは、接続文字列内にコロン (:) があるかどうかで区別されます。

Real Application Clusters (RAC) などのデータベース・インストールには、LDAP で検索が行われるように、`NetServiceNameFormat` を使用して接続文字列を構成することをお勧めします。このようにすると、追加または削除されたデータベース・ノードを認識させるために各 Oracle Application Server Middle-Tier を個別に再構成しなくても、ノードを追加または削除できます。

- 「NLS 言語」：DAD 全体で使用する NLS（グローバル化・サポート）言語、つまりバックエンド・データベースのグローバル化・サポート言語を入力します。<NLS\_LANGUAGE>\_<NLS\_TERRITORY>.<NLS\_CHARACTERSET> という書式を使用します（`American_America.UTF8` など）。

これらの値を取得するには、次のように「`nls_database_parameters`」表に対して問い合わせます。



```
select value, parameter from nls_database_parameters where parameter in  
( 'NLS_LANGUAGE', 'NLS_TERRITORY', 'NLS_CHARACTERSET' );
```

10. 「OK」をクリックします。

11. Oracle HTTP Server を再起動します。

再起動すると、Oracle HTTP Server から新しい DAD にアクセスできるようになります。

## 4.5.4 Portal キャッシュの消去

Portal キャッシュ (OracleAS Portal ファイル・システム・キャッシュ) を消去する必要があります。たとえば、OracleAS Metadata Repository のキャラクタ・セットを変更する場合があります。このような場合、Portal キャッシュ内の既存の内容は、変更前のキャラクタ・セットを使用するために構成された内容であるため、無効になります。

Portal キャッシュを消去するには、次の手順を実行します。

1. Portal キャッシュのディレクトリに移動します。デフォルトのパスは、`ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cache` です。
2. このディレクトリの下すべてのファイルの再帰的削除を行います。たとえば、UNIX のプラットフォームでは、次のコマンドを発行します。

```
rm -rf *
```

---

---

**注意：** このコマンドを発行する前に、正しいディレクトリに移動していることを確認します。cache ディレクトリを削除しないでください。

---

---

## 4.5.5 カスタム・イメージ・ディレクトリの使用

OracleAS Portal のイメージ・ディレクトリ（デフォルトでは `ORACLE_HOME/portal/images`）に格納されているカスタム・イメージが失われるのを避けるために、独自のイメージ・ディレクトリを作成し、このディレクトリの適切な Oracle HTTP Server の別名を設定することをお勧めします。

たとえば、`ORACLE_HOME/portal/conf/portal.conf` ファイルに次のようなエントリを追加します。この変更を行うには、ローカルの Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールインスタンスを使用することをお勧めします。詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』または『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

```
Alias /mycompany/images/ "/opt/app/myportal/images/"
<Directory "/opt/app/myportal/images/">
    AllowOverride None
    Order allow,deny
    Allow from all
    ExpiresActive on
    ExpiresDefault A2592000
<Files *>
    Header set Surrogate-Control 'max-age=2592000'
</Files>
</Directory>
```

OracleAS Web Cache は、`.bmp`、`.gif`、`.png`、`.jpg` および `jpeg` ファイルをグローバルにキャッシュするようにあらかじめ構成されているため、特別な OracleAS Web Cache 構成を実行する必要はありません。

## 4.6 OracleAS Portal でのモバイル・サポートの構成

この項では、OracleAS Portal と Oracle Application Server Wireless が連携して動作するように構成する方法を説明します。OracleAS Portal ページはデスクトップ・ブラウザ、携帯電話、PDA など様々なデバイスで表示できます。OracleAS Portal では、OracleAS Wireless を使用して、ワイヤレス・デバイスからの要求を受信したり、Portal が提供するコンテンツを適切な形式に変換するためのワイヤレス機能を提供します。

この章の内容：

- デフォルトでインストールされる内容
- OracleAS Portal でのモバイル設定の構成
- モバイル設定の手動による再構成

### 4.6.1 デフォルトでインストールされる内容

OracleAS Portal の Oracle Application Server 標準インストールを行うと、次のように Oracle Application Server Wireless が Portal でのモバイル・サポートを構成します。

- モバイル・デバイスからインストール済の Portal へのアクセスを提供するマスター・サービスが作成されます。これは、Portal ホーム・ページの URL を参照します。Portal へのモバイル・アクセスは OracleAS Wireless が仲介しているため、OracleAS Portal のコンテンツにアクセスするために、モバイル・デバイスは OracleAS Wireless と通信する必要があります。
- OracleAS Wireless サービスの URL は OracleAS Portal を参照します。この OracleAS Wireless サービスにアクセスしたユーザーは、Portal のパブリック・ホーム・ページに転送されます。モバイル・ブラウザがホーム URL を経由して OracleAS Portal に接続すると、要求は OracleAS Wireless サービスにリダイレクトされます。

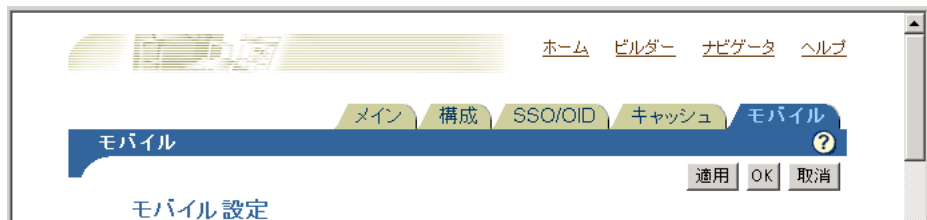
## 4.6.2 OracleAS Portal でのモバイル設定の構成

標準のデスクトップ・ブラウザで、これらのモバイル設定のほとんどを変更できます。

モバイル設定を変更するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「モバイル」タブをクリックします。

図 4-4 「グローバル設定」ページの「モバイル」タブ



ここでは、OracleAS Portal のモバイル・オプションを設定するためのすべてのオプションがあります。

---

**注意：** ホストされた環境では、各サブスクリバを個別に管理できます。ただし、OracleAS Wireless サービス URL 設定は例外です。OracleAS Portal がホスト・モードで動作している場合は（複数のサブスクリバを使用）、OracleAS Wireless サービス URL を変更するとすべてのサブスクリバが影響を受けるため、ホスト側の管理者がコマンドライン・スクリプトを使用して行う必要があります。

---

「モバイル設定」ページでは、次の操作を実行できます。

- モバイル・アクセスの有効化
- モバイル・ページ・デザインの有効化
- モバイル応答のログ

### 4.6.2.1 モバイル・アクセスの有効化

この設定は、OracleAS Wireless を介して接続して Portal ページを要求するモバイル・クライアントに対する OracleAS Portal の応答を管理します。

OracleAS Portal がモバイル要求に回答してページやポートレットを返せるようにする場合は、「モバイル」タブの「モバイル・アクセスを使用」オプションを選択する必要があります。このオプションを選択しないと、OracleAS Portal はモバイル要求に対してモバイルが有効になっていないことを伝えるメッセージで応答します。

モバイル・アクセスを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「モバイル」タブをクリックします。
3. 「モバイル・アクセスを使用」オプションを選択します。

図 4-5 モバイル・アクセスの有効化

#### モバイル設定

このチェックボックスを選択すると、Portalがモバイル・アクセス対応になります。モバイル・アクセスを利用するには、OracleAS 10g Wirelessを使用してPortalを正しく構成する必要があります。このチェックボックスの選択を解除すると、Portalでモバイル・サポートが無効になり、モバイル機器からPortalにアクセスできなくなります。

モバイル・アクセスを使用

4. 「OK」をクリックします。

モバイル要求に対する OracleAS Portal の応答に関する詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「Life Cycle of a Mobile Request」を参照してください。

モバイルに適した Portal ページが作成されると、モバイル・デバイスでのページの表示をプレビューするオプションがページ・エディタで使用できるようになります。「モバイル」タブの「モバイル・アクセスを使用」オプションを選択すると、ページ・エディタの「モバイル:プレビュー」オプションの表示が有効になります。

図 4-6 ページ・エディタの「モバイル:プレビュー」オプション



### 4.6.2.2 モバイル・ページ・デザインの有効化

このオプションでは、ページ設計者はモバイル・ページ・エディタを使用してページを作成および編集し、さらにモバイル・ホーム・ページを指定することができます。「モバイル」タイプのページは、通常モバイル・ページと呼ばれます。

モバイル・ページ・デザインを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「モバイル」タブをクリックします。
3. 「モバイル・ページ・デザインを有効にする」オプションを選択します。

#### 図 4-7 モバイル・ページ・デザインの有効化

モバイル設計ツールを使用したページの作成や編集、およびモバイル・ホーム・ページの指定をページ設計者に許可する場合、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスの選択を解除しても、モバイル機器から Portal にアクセスできますが、ページ設計者がモバイル機器専用のページを作成することはできません。

モバイル・ページ・デザインを有効にする

4. 「OK」をクリックします。

専用のモバイル・ページ・エディタに関する詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「Using the Mobile Page Editor」を参照してください。

さらに、このオプションを選択すると、次の画面に OracleAS Portal のモバイル・アクセス専用のホーム・ページを選択できる追加フィールドが表示されます。

- 「サービス」ポートレットの「グローバル設定」ページに表示される「メイン」タブ
- 「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレットの「設定」タブ
- 「Portal グループ・プロファイル」ポートレットの「設定」タブ
- 「アカウント情報」リンクを使用してアクセスする、「アカウント情報の編集」ページ



**注意：**

- モバイル・ページが作成されると、「モバイル・ページ・デザインを有効にする」オプションが選択されていなくても、モバイル・ページ・エディタでページを編集できます。
- 「モバイル・ページ・デザインを有効にする」オプションが選択されていない場合、ページ設計者は専用モバイル・ページを作成できません。ただし、このオプションが選択されている場合でも、OracleAS Portal は標準ページ（モバイル・ページ・エディタを使って設計されていないページ）のモバイル要求を引き続きサポートします。

**4.6.2.3 モバイル応答のログ**

この設定では、OracleAS Portal モバイル・ポートレットの応答のログを管理します。

モバイル応答のログを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. 「モバイル」タブをクリックします。
3. 「モバイル応答のログ」オプションを選択します。

**図 4-8 モバイル応答のログ****開発者の設定**

このチェック・ボックスを選択すると、モバイル・ポートレット・コンテンツのログ作成が有効になり、Portalの開発およびテストを目的として利用できるようになります。有効にすると、Portalは、ログイン中のユーザーからの要求に応答して、モバイル・ページへの挿入時にモバイル・ポートレットが生成するコンテンツのログを作成します。このオプションはパフォーマンスに影響を与えるため、開発中のPortalに対してのみ選択してください。このオプションを変更すると、キャッシュされたページの説明が無効になります。

モバイル応答のログ

4. 「OK」をクリックします。

次の条件をすべて満たしている場合は、ポートレット応答がログに記録されます。

- 「モバイル応答のログ」オプションが選択されている。
- 要求しているユーザーがログインしている。
- 要求がモバイル・デバイスからのものであるか、モバイル・ページへのものである。

詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「Provider Debugging Techniques: Using the Mobile Log Viewers」を参照してください。



---

---

**注意：**「モバイル応答のログ」オプションを有効または無効にすると、現在キャッシュされているページのデータはすべて無効となります。一般のアクセス用に OracleAS Portal を配置した後は、このオプションを頻繁に変更しないことをお勧めします。

---

---

## 4.6.3 モバイル設定の手動による再構成

Oracle Application Server の再構成によって Oracle Application Server Wireless サービスの URL または OracleAS Portal ホーム・ページの URL が変更された場合は、その変更内容を OracleAS Portal に格納されている情報、および OracleAS Portal を参照する OracleAS Wireless サービスの定義に反映する必要があります。OracleAS Wireless と OracleAS Portal を再構成して、両者間の通信に影響がないことを確認する必要があります。

OracleAS Wireless と OracleAS Portal を手動で再構成し、必要に応じて次の参照 URL の値を更新する必要があります。

- [OracleAS Portal ホーム・ページ URL 参照の更新](#)
- [OracleAS Wireless Portal サービス URL 参照の更新](#)

### 4.6.3.1 OracleAS Portal ホーム・ページ URL 参照の更新

OracleAS Portal ホーム・ページ URL は、OracleAS Wireless サービスの定義で参照するアドレスです。ホーム・ページ URL が変更された場合は、次の参照を更新する必要があります。

- [Oracle Application Server Wireless サービスの定義](#)
- [OracleAS Portal 自体への内部参照](#)

#### 4.6.3.1.1 Oracle Application Server Wireless サービスの定義

OracleAS Wireless Web ツールを使用して、Portal サービスの定義を更新します。OracleAS Portal を参照する OracleAS Wireless サービスの定義の「基本情報」セクションに表示される「URL」の値を編集します。このセクションには、OracleAS Wireless Web ツールの「サービス」タブからアクセスできます。Wireless ツールには次の URL でアクセスできます。

`http://<server>:<port>/mobile/`

**関連項目：**『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』

#### 4.6.3.1.2 OracleAS Portal 自体への内部参照

OracleAS Portal 自体のホーム・ページ URL への参照を変更するには、スクリプト `dfgiasw.csh` (UNIX) または `cfgiasw.cmd` (Windows) を使用して手動で値を更新します。このスクリプト・ファイルは次の場所にあります。



```
ORACLE_HOME/assistants/opca/cfgiasw.csh
```

スクリプトを実行するには、次のコマンドを使用します。

```
cfgiasw.csh -s portal -sp portal -c portal_db -h 'http://my_portal_server.com/pls/portal/portal.home'
```

前述の例は UNIX マシン固有のもので、cfgiasw スクリプトの詳細は、C.8 項「[cfgiasw スクリプトを使用したモバイルの構成](#)」を参照してください。

### 4.6.3.2 OracleAS Wireless Portal サービス URL 参照の更新

OracleAS Portal は、モバイル・デバイスへのアクセスを提供する手段として Oracle Application Server Wireless を使用します。このアクセスを提供するには、Portal が登録されている OracleAS Wireless サービスへの URL を OracleAS Portal が認識している必要があります。OracleAS Wireless サービス URL が変更された場合は、OracleAS Portal 内におけるその参照を更新する必要があります。この参照は次のいずれかの方法で更新できます。

- 「グローバル設定」ページを使用した OracleAS Wireless Portal サービス URL の指定
- [cfgiasw スクリプトを使用した OracleAS Wireless サービス URL 参照の更新](#)

#### 4.6.3.2.1 「グローバル設定」ページを使用した OracleAS Wireless Portal サービス URL の指定

OracleAS Wireless Portal サービス URL の値を更新するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「モバイル」タブをクリックします。
3. 「OracleAS 10g Wireless Portal サービス URL」フィールドに URL を入力します。

#### 図 4-9 OracleAS Wireless Portal サービス URL の指定

##### OracleAS 10g Wireless情報

Portalは、モバイル機器へのアクセスを提供する手段としてOracleAS 10g Wirelessを使用します。このアクセスを提供する場合、Portalが登録されたOracleAS 10g WirelessサービスへのURLを、Portalが認識している必要があります。

OracleAS 10g Wireless PortalサービスURL

このPortalに関する次の情報は、OracleAS 10g Wirelessサービスを手動で作成するとき、該当するPortalを表すために必要になります。

PortalホームページURL: <http://sgtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/portal.home>

Portal文字セット: UTF-8

4. 「OK」をクリックします。

OracleAS Portal が複数のサブスクリバで動作していない場合にのみ、「OracleAS 10g Wireless Portal サービス URL」の設定を変更できます。

「Portal ホーム・ページ URL」および「Portal 文字セット」は情報提供のためのフィールドです。OracleAS Portal が複数のサブスクリバで動作している場合は、ホスト側の管理者のみが「OracleAS 10g Wireless Portal サービス URL」の値を変更できます。

### 4.6.3.2 cfgiasw スクリプトを使用した OracleAS Wireless サービス URL 参照の更新

Oracle Application Server Wireless Portal サービス URL への OracleAS Portal の参照を変更する必要がある場合は、スクリプト `cfgiasw.csh` (UNIX) または `cfgiasw.cmd` (Windows) を使用して値を手動で設定できます。このスクリプト・ファイルは次の場所にあります。

```
ORACLE_HOME/assistants/opca/cfgiasw.csh
```

スクリプトを実行するには、次のコマンドを使用します。

```
cfgiasw.csh -s portal -sp portal -c portal_db -w 'http://my_iasw_server.com/ptg/rm?PAoid=12345'
```

前述の例は UNIX マシン固有のもので、`cfgiasw` スクリプトの詳細は、[C.8 項「cfgiasw スクリプトを使用したモバイルの構成」](#)を参照してください。

## 4.7 ユーザー、グループおよびパスワードの管理

ユーザー、グループおよびパスワードの管理の詳細は、[第 6 章「OracleAS Portal の保護」](#)を参照してください。

## 4.8 ブラウザ設定の構成

**関連項目：**『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』の「はじめに」、ブラウザの推奨事項に関する項

## 4.9 言語サポートの構成

OracleAS Portal は、様々な言語でアプリケーションの開発や配置が行えるように設計されています。OracleAS Portal は、Oracle Application Server Middle-Tier のインストール時に Oracle Universal Installer (OUI) で選択された言語で構成されます。構成される言語は、「言語の設定」ポートレットに表示されます。ブラウザの言語設定に対応する言語、または「言語の設定」ポートレットで選択した言語に対応する言語で OracleAS Portal を使用できません。インストール後に別の言語を構成する場合は、OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を LANGUAGE モードで使用する必要があります。

言語をインストールするには、OPCA を LANGUAGE モードで実行します。OracleAS Portal でサポートする言語ごとに、OPCA を実行する必要があります。詳細は、[B.2.3 項「LANGUAGE」](#)を参照してください。

次の例では、オランダ語の文字列を OracleAS Metadata Repository にロードします。

```
ptlasst.csh -mode LANGUAGE -lang nl -available
```

OPCA の LANGUAGE モードの使用方法の詳細は、[B.2.3 項「LANGUAGE」](#)を参照してください。

### 地域の使用の有効化

言語を OracleAS Portal にインストールすると、エンド・ユーザーは使用する言語を「言語の設定」ポートレットに表示される言語から選択できます。

OracleAS Portal のグローバリゼーション・サポートによって、特定の言語に使用する優先ロケールおよび地域を定義できます。たとえば、オーストラリアの英語、カナダのフランス語などです。

「言語の設定」ポートレットはデフォルトでは使用可能になっていないため、「Portal ビルダー」ページに追加する必要があります。

#### 「Portal ビルダー」ページへの「言語の設定」ポートレットの追加

「言語の設定」ポートレットを「Portal ビルダー」ページに追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Portal ビルダー」ページで「管理」タブをクリックします。
2. ページの上部にある「編集」をクリックします。
3. ポートレットを追加する列を選択し、その列の上にある「ポートレットの追加」アイコンをクリックします。
4. ポートレット・リポジトリで、「Portal コンテンツ・ツール」をクリックします。
5. 「使用可能なポートレット」領域で「言語の設定」をクリックし、「OK」をクリックします。

これで、「言語の設定」ポートレットが「Portal ビルダー」ページの「管理」タブ画面で使用可能になります。

---

**注意：** ページに「言語の設定」ポートレットを追加した後で別の言語をインストールすると、ページを表示したときに、その新しい言語が表示されません。これに対処するには、ポートレットを再登録します。

---

### 地域およびロケールの使用の有効化

地域およびロケールの使用を有効にするには、次の手順を実行します。

1. 「言語の設定」ポートレットの「デフォルトの編集」アイコンをクリックします。
2. 表示された「言語の設定ポートレット設定の編集」画面で、「地域の選択を有効にする」オプションを選択します。図 4-10 に「言語の設定ポートレット設定の編集」画面を示します。

図 4-10 「言語の設定ポートレット設定の編集」画面

ホーム ビルダー ナビゲータ

言語の設定ポートレット設定の編集

言語の設定ポートレット・パナー  
言語の設定ポートレットの名前をカスタマイズします。

パナー

言語の表示オプション  
1つの列内で複数の言語を縦に表示する場合は、このチェック・ボックスを選択します。言語を横に表示する場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。

言語を縦に表示

地域の選択を有効にする  
選択した言語の地理上の位置(地域)をユーザーが選択できるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。選択した地域により、日付書式や通貨記号などの設定が決まります。このチェック・ボックスの選択を解除すると、選択した言語で最も一般的な地域(デフォルト)に設定されます。

地域の選択を有効にする

適用 OK 取消

3. 「OK」をクリックします。

「地域の選択を有効にする」オプションを選択すると、登録された言語ごとに該当するロケールが表示されます。ロケールは、図 4-11 に示すように、「言語の設定」ポートレット内で言語の後に表示されます。

図 4-11 「言語の設定」ポータル



**関連項目：**『Oracle Application Server 10g グローバリゼーション・ガイド』

## 4.10 OracleAS PortalWebDAV の構成

WebDAV は、HTTP 1.1 のプロトコル拡張で、分散オーサリングおよびバージョン管理をサポートします。WebDAV を使用すると、インターネットを透過的な読み込みおよび書き込みメディアとして利用することができます。つまり、URL アドレスに基づいて、コンテンツをチェックアウトし、編集してからチェックインすることができます。標準の `mod_dav` 実装は、ファイルの読み込みおよび書き込みアクセスをサポートします。

OraDAV とは、`mod_oradav` モジュールを使用して利用できる機能のことです。`mod_oradav` モジュールは、Oracle モジュールの 1 つです。`mod_dav` の拡張実装として、Oracle HTTP Server に組み込まれています。`mod_oradav` モジュールは、ローカル・ファイルおよび Oracle データベースの読み込みと書き込みを実行できます。Oracle データベースには、OraDAV ドライバがインストールされている必要があります。OraDAV ドライバは、OracleAS Portal のインストール時にデフォルトでインストールされます。`mod_oradav` モジュールは OraDAV ドライバをコールして、WebDAV 動作をデータベース動作にマップします。この結果、WebDAV クライアントは、Oracle データベースに接続し、コンテンツの読み込みと書き込みを行い、様々なスキーマのドキュメントを問い合わせたりロックしたりできるようになります。

**関連項目：**『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

Oracle Application Server のインストール時に、Web ブラウザまたは WebDAV クライアントから Oracle データベースのコンテンツにアクセスできるように、必要な OraDAV パラメータに対して値が設定されます。デフォルト値が適切でない場合は、必要に応じてパラメータ値を変更できます。

WebDAV には、Portal DAD 構成ファイルに似た独自の構成ファイル (`ORACLE_HOME/Apache/oradav/conf/oradav.conf`) があります。このファイルには OraDAV パラメータが含まれており、`DAV` と `DAVParam` で始まります。これらのパラメータは、`<Location>` ディレクティブ内で指定されます。`oradav.conf` ファイルは、`include` 文の `httpd.conf` ファイルに組み込まれます。

**関連項目：**『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』

## 4.10.1 基本的な WebDAV 構成の実行

OracleAS Portal は、Oracle Application Server と一緒にインストールされます。インストールが完了したら、Portal スキーマを指す `<Location>` ディレクティブを使用して、`oradav.conf` ファイルを設定する必要があります。次の例では、`/dav_portal/portal` で OraDAV が有効になり、このディレクトリから Portal スキーマに接続されます。この結果、WebDAV クライアントを使用して、Portal データにアクセスできるようになります（正しい値が設定された場合）。

### 例 4-1 Portal アクセスのパラメータの構成

```
<Location /dav_portal/portal>
  DAV Oracle
  DAVParam ORACONNECT dbhost:dbport:dbsid
  DAVParam ORAUUSER portal_schema
  DAVParam ORAPASSWORD portal_schema_password
  DAVParam ORAPACKAGENAME portal_schema.wdav_api_driver
</Location>
```

デフォルトでは、OracleAS Portal DAV URL は次のようになります。

```
http://<hostname>:<port>/dav_portal/portal/
```

たとえば、次のようになります。

```
http://mysite.oracle.com:7777/dav_portal/portal
```

URL の `dav_portal` 部分は、WebDAV クライアントを介した Portal アクセスと `pls` 仮想ディレクトリを使用する Portal アクセスを区別するために使用される、仮想ディレクトリのデフォルト名です。必要に応じ、仮想ホストを構成して WebDAV アクセスに別の簡単な覚えやすい URL を指定することもできます。

Portal へのログインに使用するのと同じユーザー名とパスワードで、WebDAV クライアントの Portal に接続できます。Portal がホストされた環境にある場合、ユーザーは次のようにユーザー名に会社情報も追加する必要があります。

```
<username>@<company>
```

### 認証

WebDAV クライアントによっては、ユーザーに認証を複数回要求することがあります。これを回避するために、Portal 管理者は、`oradav.conf` ファイルに次の行を追加して Cookie オプションを有効にできます。

```
DAVParam ORACookieMaxAge <seconds>
```

`seconds` は、Cookie の有効期限（秒）です。

たとえば、値が 28800 の場合は 8 時間になり、一度ユーザーが WebDAV クライアントを介してログインすると、8 時間が経過するまで、ユーザー名とパスワードを求められません。

---

---

**注意：** Dreamweaver など、一部の WebDAV クライアントでは、Cookie がサポートされていません。そのため、Cookie オプションを有効にしても、ユーザーはパスワードを複数回求められることがあります。

---

---

SQL\*Net Advanced Security Option (ASO) を使用している場合は、次に示すように oradav.conf ファイルの ORACONNECT パラメータを ORASERVICE dbhost に置き換える必要があります。

```
<Location /dav_portal/portal>
  DAV Oracle
  DAVParam ORASERVICE dbhost
  DAVParam ORAUSER portal_schema
  DAVParam ORAPASSWORD portal_schema_password
  DAVParam ORAPACKAGENAME portal_schema.wdav_api_driver
  Options Indexes
</Location>
```

これにより、tnsnames.ora ファイルでデータベース・エイリアスを解決できるようになります。

---

---

**注意：**

- 新しい DAD を追加するときユーザー名とパスワードを指定しない場合、または SQL\*Plus を使用して Portal データベース・スキーマのユーザー名またはパスワードを変更する場合は、dads.conf ファイルと oradav.conf ファイルを手動で更新する必要があります。
  - oradav.conf ファイルに変更を加えたときは、HTTP Server を再起動して新しい設定を有効にする必要があります。
- 
-



## 4.10.2 WebDAV クライアントの設定

WebDAV クライアントを OracleAS Portal に接続するための設定に必要な手順はクライアントによって異なります。すべてのクライアントは最終的に URL を要求します。Portal DAV URL は、Web ブラウザで Portal にアクセスするとき使用する URL とよく似ており、次の書式を使用しています。

```
http://<hostname>:<port>/<dav_location>
```

WebDAV クライアントから OracleAS Portal に接続するとき問題が発生する場合は、『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』の「WebDAV の問題」を参照してください。

## 4.10.3 WebDAV クライアントと SSL

OraDAV では SSL (Secure Socket Layer) がサポートされていますが、一部の WebDAV クライアントではサポートされていません。詳細は、WebDAV クライアントのドキュメントを参照してください。

## 4.10.4 OraDAV ドライバのバージョンの確認

次の例に示すように、OraDAV ドライバのバージョンを Web ブラウザで確認できます。

```
http://<machine>:<port>/<dav_location>/~OraDAV-Version
```

次の例のように出力されます。

```
Version 1.0.3.2.3-0030  
Using Container Version 1.5
```

## 4.10.5 mod\_oradav.so のバージョンの確認

次に示すように、mod\_oradav.so のバージョンを確認するには、oversioncheck バイナリを実行し、mod\_oradav.so を引数に指定します。

```
ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/oversioncheck ORACLE_HOME/Apache/oradav/lib/mod_oradav.so
```

## 4.10.6 エラーの表示

ユーザーが WebDAV クライアントを使用して Portal 上で操作を実行するときに発生したエラーは、エラー・ログに記録されます。このエラー・ログは、OracleAS Portal 関連の WebDAV エラーが初めて発生したときに、ユーザーの個人用ページに、「マイ・エラー・ログ」というアイテムとして作成されます。これは、Web フォルダで表示される、操作の実行中にエラーが発生したというエラー・メッセージや、Cadaver で報告される HTTP エラー番号など、WebDAV クライアントで報告されるエラー・メッセージの解釈に非常に役立ちます。

エラーはすべて、Apache のエラー・ログ・ファイル (ORACLE\_HOME/Apache/Apache/logs) にも記録されるので、ユーザーが個人用ページを持っていない場合またはパブリック・ユーザーである場合でもエラーを調査できます。

Apache のエラー・ログ・ファイルで、より詳細なエラー報告を利用するには、oradav.conf ファイルに次のパラメータを追加します。

```
DAVParam ORATraceLevel 1
```

---

---

**注意：** oradav.conf ファイルを変更したときは常に、HTTP Server を再起動する必要があります。その方法の詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

また、他の OraDAV パラメータの詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の OraDAV 構成パラメータに関する項を参照してください。

---

---

### 注意：

- エラー・ログは切り捨てられず、非常に大きいファイルになる可能性があります。このファイルは定期的に削除することをお勧めします。次回エラーが発生したときに、新しいファイルが作成されます。
  - クライアント・コンピュータはファイル名の存在を確認するため、エラー・ログに「見つかりません」というメッセージが表示されることがあります。ファイルが存在しない場合は、エラー・ログに正しく 404 エラー・メッセージが表示されます。
- 
-

# 第III部

---

## 拡張構成

第3部の内容：

- 第5章「拡張構成の実行」
- 第6章「OracleAS Portal の保護」
- 第7章「OracleAS Portal の監視と管理」
- 第8章「OracleAS Portal の検索機能の構成」
- 第9章「OracleAS Portal のパフォーマンスの調整」
- 第10章「コンテンツのエクスポートとインポート」
- 第11章「OracleAS Portal へのコンテンツのシンジケート」
- 第12章「連携型 Portal アダプタの使用」
- 第13章「OracleAS Portal のトラブルシューティング」



---

## 拡張構成の実行

この章では、拡張構成に必要な構成について説明します。次のような構成を実行するには、4.1 項「[OracleAS Portal の管理の開始](#)」で説明している管理ツールに精通しておく必要があります。

この章の内容：

- [OracleAS Portal ポートの変更](#)
- [SSL の構成](#)
- [ロード・バランス・ルーターを使用する複数の中間層の構成](#)
- [仮想ホストの構成](#)
- [プロキシ・サーバーを使用するための OracleAS Portal の構成](#)
- [逆プロキシ・サーバーの構成](#)
- [OracleAS Portal 内での OracleAS Web Cache のキャッシュ構成](#)
- [中間層で使用されるインフラストラクチャ・サービスの変更](#)
- [OracleAS Wireless の構成](#)
- [OracleAS Portal スキーマのパスワードの変更](#)

## 5.1 OracleAS Portal ポートの変更

Oracle Application Server 内でポートを変更するための関連のプロシージャについては、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「ポート変更のプロシージャ」を参照してください。OracleAS Web Cache のポートを変更する場合は、[7.3.3 項「Portal の Web Cache 設定」](#)で説明しているように、「Portal の Web Cache 設定」画面で Portal が使用する OracleAS Web Cache の設定を指定する必要があります。

---

---

**注意：** 特定の Oracle Application Server インスタンスのコンポーネントで現在使用されているポートの一覧を表示するには、[7.5 項「Oracle Application Server ポート情報の表示」](#)で説明している手順を参照してください。

---

---

## 5.2 SSL の構成

OracleAS Portal では、多くの様々なコンポーネント（Parallel Page Engine、Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache など）を使用しますが、それらの各コンポーネントは HTTP 通信でクライアントまたはサーバーの役目を果たすことがあります。このため、OracleAS Portal の中間層にある各コンポーネントを、HTTPS プロトコルを使用するように個別に構成する必要があります。

SSL の構成方法については、[第 6 章「OracleAS Portal の保護」](#)で説明しています。次の各項で、OracleAS Portal で SSL を利用するための様々な構成オプションを説明します。

- [6.3.2.1.2 項「OracleAS Single Sign-On との SSL 接続」](#)
- [6.3.2.1.3 項「OracleAS Web Cache との SSL 接続」](#)
- [6.3.2.1.4 項「OracleAS Portal 全体にわたる SSL」](#)
- [6.3.2.1.5 項「Oracle Application Server 内での非 SSL による外部 SSL」](#)

## 5.3 ロード・バランス・ルーターを使用する複数の中間層の構成

この項では、同じ Oracle Application Server Metadata Repository にアクセスするためにフロントエンドとしてロード・バランス・ルーターが設定された複数の中間層環境で、OracleAS Portal を設定する方法を説明します。

ロード・バランス・ルーター（LBR）の目的は、クライアント層に公開アドレスを1つだけ提供し、LBRによって行われる要求の配信に基づいて、実際に要求を処理するサーバーのファームをフロントエンドに設定することです。LBR そのものは、非常に高速のネットワーク・デバイスであり、Web 要求を膨大な数の物理サーバーに配信できます。

ここで、図 5-1 に示すような複数の中間層構成を構成すると想定します。この例では、Portal と Wireless の中間層として、同じマシン上に OracleAS Web Cache が示されています。理論的には、これらは別のマシン上にあってもかまいません。

図 5-1 ロード・バランサを使用する複数の中間層の構成

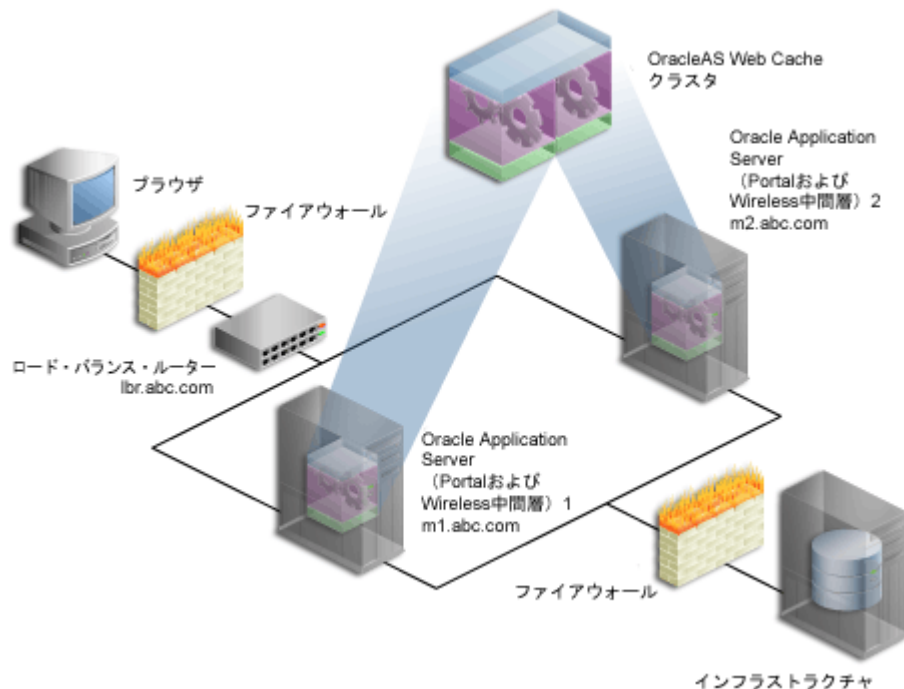


表 5-1 詳細情報

マシン	詳細
ロード・バランス・ルーター (LBR)	マシン名 : lbr.abc.com IP アドレス : L1.L1.L1.L1 リスニング・ポート : 80 失効ポート : 4001 (内部からのみアクセス可能)
Oracle Application Server (Portal および Wireless 中間層) 1 (M1)	マシン名 : m1.abc.com IP アドレス : M1.M1.M1.M1 Oracle HTTP Server リスニング・ポート : 7778 OracleAS Web Cache リスニング・ポート : 7777 OracleAS Web Cache 失効ポート : 4001 OracleAS Web Cache 管理用ポート : 4002
Oracle Application Server (Portal および Wireless 中間層) 2 (M2)	マシン名 : m2.abc.com IP アドレス : M2.M2.M2.M2 Oracle HTTP Server リスニング・ポート : 7778 OracleAS Web Cache リスニング・ポート : 7777 OracleAS Web Cache 失効ポート : 4001 OracleAS Web Cache 管理用ポート : 4002

**注意 :**

- この項で使用されている名前とポートは説明用の仮の値であり、実際の環境にあわせて置き換える必要があります。
- 特定の Oracle Application Server インスタンスのコンポーネントで現在使用されているポートの一覧を表示するには、[7.5 項「Oracle Application Server ポート情報の表示」](#)で説明している手順を参照してください。

OracleAS Portal を LBR 付きで構成する方法を理解するには、Portal 内部のアーキテクチャをもう少し理解することが大切です。

- ページ・メタデータの情報を要求するために、Portal 内の Parallel Page Engine (PPE) によって、Oracle Application Server Web Cache へのループバック接続が行われます。デフォルトの構成では、OracleAS Web Cache と OracleAS Portal の中間層は同じマシン上にあり、ループバックはローカルです。Oracle Application Server のフロントエンド



として LBR が設定されると、PPE からのすべてのループバック要求は、LBR を通じて OracleAS Web Cache への通知を開始します。OracleAS Portal の中間層と OracleAS Web Cache は同じマシン上、または同じサブネット上にあると想定します。この場合、追加の構成を行わないと、ソケット接続のコール中にループバック要求によってネットワークのハンドシェイク問題が発生します。

ループバックが正常に機能するためには、LBR 内に Network Address Translation (NAT) のバウンス・バック・ルールを設定する必要があります。このルールによって、ファイアウォールの内側から流入する要求のプロキシとして、LBR が構成されます。このようにすることで、応答がネットワーク上のソース・アドレスへ返信されてから、クライアントへ転送されます。

- OracleAS Portal を利用して、OracleAS Web Cache がそのコンテンツの多くをキャッシュすることができます。OracleAS Web Cache 内でキャッシュされたコンテンツが変更されると、OracleAS Portal によって、失効メッセージがデータベースから OracleAS Web Cache へ送信されます。OracleAS Portal では、1 つの Web Cache ノードにのみ、失効メッセージを送信できます。OracleAS Web Cache クラスタでは、Portal は、その OracleAS Web Cache メンバーに依存して、クラスタの他のメンバーのコンテンツを失効化します。Oracle Application Server のフロントエンドとして LBR が設定されている場合、LBR は、データベースからの失効化要求を受け入れてクラスタのメンバー間で負荷を均衡させるように構成されている必要があります。

---

**注意：** 図 5-1 に示すように、インフラストラクチャは LBR の内側にあります。インフラストラクチャは、1 台のホスト上に構成することも、複数のホストに分散させることも可能です。インフラストラクチャを適切に構成するために、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「拡張構成」を参照してください。

---

LBR をフロントエンドに設定した複数の中間層環境で OracleAS Portal を構成するには、次の手順を実行します。

- 手順 1: 単一の Portal および Wireless 中間層 (M1) のインストール
- 手順 2: LBR を通じてアクセスされる M1 での OracleAS Portal の構成
- 手順 3: OracleAS Portal が起動し実行中であることの確認
- 手順 4: 新しい Portal および Wireless 中間層 (M2) のインストール
- 手順 5: 既存の Portal を実行するための新しい中間層 (M2) の構成
- 手順 6: Portal ツールと Web プロバイダの構成 (オプション)
- 手順 7: OracleAS Web Cache でのセッション・バインドの有効化
- 手順 8: 構成完了の確認

### 5.3.1 手順 1: 単一の Portal および Wireless 中間層 (M1) のインストール

単一の Portal および Wireless アプリケーション・サーバー中間層をインストールし、インストールを確認します。これを行うには、次の手順を実行します。

1. 第3章「OracleAS Portal のインストール」に説明されている手順に従って、最初のマシン (M1) に Portal および Wireless Oracle Application Server 10g 中間層をインストールします。ここでは、既存の Oracle Application Server Infrastructure のサービスを使用することを想定しています。

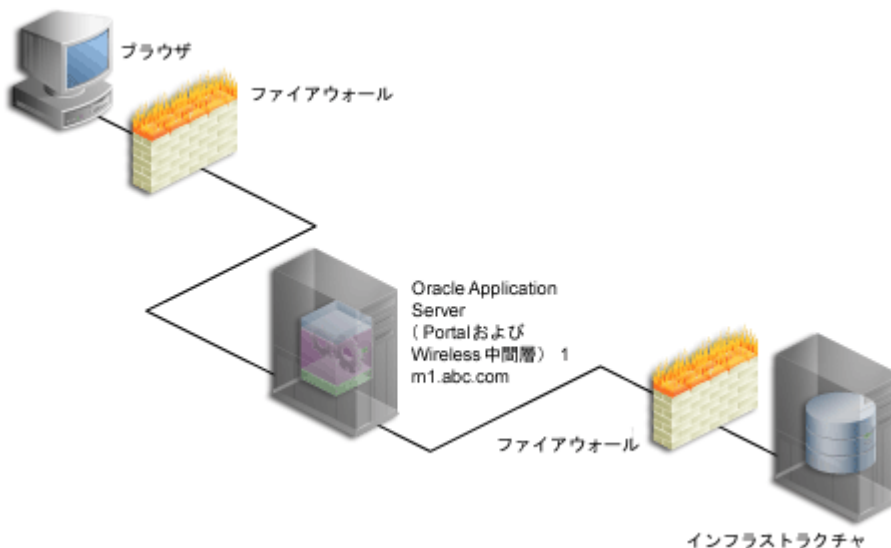
**関連項目：** Oracle Application Server 10g のインストール・ガイド

2. 次の場所にある OracleAS Portal ホーム・ページにアクセスできることを確認して、中間層が正常にインストールされていることを確認します。

<http://m1.abc.com:7777/pls/portal>

設定した構成は図 5-2 のようになります。詳細は表 5-1 に示されています。

図 5-2 OracleAS Portal 中間層のインストール



3. `ORACLE_HOME/portal/conf` 内にある `iasconfig.xml` ファイルにアクセスして、例 5-1 のような内容であることを確認します。

**例 5-1 最初の中間層インストール後の iasconfig.xml**

```

<IASConfig XSDVersion="1.0">
  <IASInstance Name="ias-1.m1.abc.com" Host="m1.abc.com" Version="9.0.4">
    <WebCacheComponent ListenPort="7777" AdminPort="4002" InvalidationPort="4001"
    InvalidationUsername="invalidator" InvalidationPassword="@Bd4D+TnaUYFTJebppI
    EqRc3/kleybcc70A==" SSLEnabled="false"/>
    <EMComponent ConsoleHTTTPort="1814" SSLEnabled="false"/>
  </IASInstance>
  <IASInstance Name="ias.infra.abc.com" Host="infra.abc.com" Version="9.0.4">
    <OIDComponent AdminPassword="@BVs2KPJEWCSa014n8lbTxUY=" PortSSLEnabled="true"
    LDAPPort="3060" AdminDN="cn=orcladmin"/>
  </IASInstance>
  <PortalInstance DADLocation="/pls/portal" SchemaUsername="portal"
  SchemaPassword="@Beyh8p2bOWELQCsA5zRtuYc=" ConnectString="cn=iasdb,cn=oraclecontext">
    <WebCacheDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-1.m1.abc.com"/>
    <OIDDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-1.m1.abc.com"/>
    <EMDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-1.m1.abc.com"/>
  </PortalInstance>
</IASConfig>

```

ここで、LBR を通じてアクセスされる OracleAS Portal を構成するために、次の手順に進みます。

**5.3.2 手順 2: LBR を通じてアクセスされる M1 での OracleAS Portal の構成**

ロード・バランス・ルーターを通じてアクセスされるように OracleAS Portal を構成するには、次の手順を実行します。

1. ポート 80 で要求を受け取り、これらの要求をマシン (m1.abc.com) 上で実行中の OracleAS Web Cache のポート 7777 へ転送するように、LBR (lbr.abc.com) を構成します。これを行うには、次の手順を実行します。
  - a. 個々のサーバーを追加できるグループ（プール）を LBR 上に設定します。
  - b. 必要なサーバーの IP アドレスとポート番号をグループに追加します。
  - c. ポート 80 でリスニングを行い、グループのメンバー間で負荷を均衡させる仮想サーバーを作成します。
  - d. LBR が、要求を転送するためにリスニングするポートを OracleAS Web Cache がリスニングしているポートへ変換することを確認します。

---

**注意：** グループと仮想サーバーを設定するには、LBR のドキュメントを参照してください。

---

2. 基盤となるコンポーネントが、LBR のホスト名 (lbr.abc.com) と LBR のポート番号 (80) に基づく URL を作成できるように、M1 で OracleAS Portal 中間層を構成して、

OracleAS Portal ページに描画される自己参照型 URL がブラウザで有効になるようにします。これを行うには、次の手順を実行します。

- a. 5.4.1.1 項「[www.xyz.com の仮想ホストの作成](#)」で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
  - 「アドレス」ページ（手順 9）で、仮想ホストの「サーバー名」フィールドに LBR のホスト名（lbr.abc.com）を指定します。
  - 手順 23 で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 80 を指定します。
- b. 5.4.1.1 項「[www.xyz.com の仮想ホストの作成](#)」で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して 2 番目の仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
  - 「アドレス」ページ（手順 9）で、仮想ホストの「サーバー名」フィールドに M1 のホスト名（m1.abc.com）を指定します。
  - 手順 23 で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 7777 を指定します。
  - Oracle HTTP Server の再起動を促すメッセージが表示されたら（手順 25）、「はい」をクリックします。
3. M1 で OracleAS Web Cache Manager を使用して、上の手順で作成した仮想ホスト・エントリ（lbr.abc.com）に対応させるサイトを次のように定義します。
  - a. 5.7.1 項「[OracleAS Web Cache Manager へのアクセス](#)」で説明しているように、M1 上で Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して OracleAS Web Cache Manager にアクセスします。
  - b. 「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」で「Site Definitions」をクリックします。
  - c. 「Add Site」をクリックします。
  - d. 「Add Site」ページで、「Host Name」に lbr.abc.com、「Port Number」に 80 を指定します。その他のフィールドはデフォルト値のままにします。
  - e. 「Submit」をクリックします。「Site Definitions」表に lbr.abc.com が表示されます。
4. M1 で OracleAS Web Cache Manager を使用し、サイトの lbr.abc.com を中間層の m1.abc.com にマップします。
  - a. ナビゲーション・フレームで、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」の「Site-to-Server Mapping」を選択します。
  - b. 「Site-to-Server Mapping」ページで表の最初のマッピングを選択し、「Insert Above」をクリックします。

- c. 「Create Site-to-Server Mapping」 ページで 「Select from Site definitions」 オプションを選択した後、上の手順で作成したサイト定義 (lbr.abc.com) を選択します。
- d. 「Select Application Web Servers」 セクションで、「Origin Server」 ページで指定したアプリケーション・サーバー M1 (m1.abc.com) を選択します。
- e. 「Submit」 をクリックします。
- f. ページの上部にある 「Apply Changes」 をクリックします。
- g. 「Cache Operations」 ページで 「Restart」 をクリックして、M1 上の Web Cache を再起動します。

サイトが正しくマップされたことを確認するために、「Site-to-Server Mapping」 ページに移動して、M1 がサイトの lbr.abc.com にマップされているかどうかを調べます。

5. m1.abc.com のマシンを構成して、LBR のホスト名が解決されて正しい IP アドレスが設定されるようにします。DNS の解決に委ねることも、次のようなエントリを /etc/hosts ファイル内に作成することもできます。

```
L1.L1.L1.L1 lbr.abc.com
```

ここでの L1.L1.L1.L1 は、LBR の IP アドレスです。これらの変更を行った後にシステムを再起動する必要はありません。

---



---

**注意：** /etc/hosts ファイルにはローカル・ホスト名が 127.0.0.1 を指し示すエントリがないことを確認してください。たとえば、次のようになります。

```
127.0.0.1 m1.abc.com
```

---



---

6. m1.abc.com で実行中の PPE から流入するループバック要求に対して、LBR が NAT バウンス・バックを実行するように構成します。このように構成しておく、PPE が OracleAS Web Cache へループバック要求を行うときに、エラーがないことが保証されます。

---



---

**注意：**

- NAT バウンス・バックは、個々の LBR で様々な設定されます。この設定方法は、お使いの LBR の構成ガイドを参照してください。
  - ログ・ファイルには、PPE (Parallel Page Engine) からのすべてのループバック要求のための NAT バウンス・バック・アドレスが含まれます。これらのアドレスによって、LBR を介して OracleAS Web Cache または Oracle HTTP Server へ要求が転送されます。
- 
-

7. 独立したポート（この例では 4001）上の OracleAS Metadata Repository から失効化要求を受け取って、ポート 4001 のマシン `m1.abc.com` で実行中の OracleAS Web Cache へその要求が転送されるように、LBR (`lbr.abc.com`) を構成します。

---

---

**注意：** LBR は、OracleAS Web Cache の失効ポートでリスニングする必要はありません。ポート・マッピング機能のない LBR では、ポート番号が OracleAS Web Cache の失効ポートと一致する必要があります。

---

---

- a. 個々のサーバーを追加できるグループ（プール）を LBR 上に設定します。
- b. 必要なサーバーの IP アドレスとポート番号をグループに追加します。
- c. ポート 4001 でリスニングを行い、グループのメンバー間で負荷を均衡させる仮想サーバーを作成します。
- d. LBR のポートが失効化要求をリスニングしており、OracleAS Web Cache の失効ポートと異なる場合、OracleAS Web Cache がリスニングしているポートへ要求を転送するために、LBR でリスニングしているポートを変換する必要があります。

---

---

**注意：**

- グループと仮想サーバーを設定するには、LBR のドキュメントを参照してください。
  - Oracle Application Server Infrastructure が別のファイアウォールの内側にある場合は、そこから LBR へ失効メッセージを送信できることを確認する必要があります。
- 
- 

---

---

**注意：** セキュリティ上の理由から、LBR の失効ポート（ポート 4001）はネットワーク内からのみアクセスできるようにしておくことが必要です。

---

---

8. 通常は `ORACLE_HOME/portal/conf` 内にある `iasconfig.xml` ファイルは、手動で編集する必要があります。ファイルをバックアップしてから編集することをお勧めします。このファイルは、OracleAS Portal にアクセスし、OracleAS Web Cache の失効化を実行するために、正しいファーム名、ホスト名およびポート情報が含まれるように更新する必要があります。例 5-2 を参照してください（すべての変更部分は下に太字で示しています）。

## 例 5-2 ファーム要素を含むように編集された iasconfig.xml ファイル

```

<IASConfig XSDVersion="1.0">

  <IASFarm Name="Farm-1.lbr.abc.com" Host="lbr.abc.com">
    <WebCacheComponent ListenPort="80" AdminPort="4002"
    InvalidationPort="4001" InvalidationUsername="invalidator"
    InvalidationPassword="welcome1" SSLEnabled="false"/>
  </IASFarm>

  <IASInstance Name="ias-1.m1.abc.com" Host="m1.abc.com" Version="9.0.4">
    <OIDComponent AdminPassword="@BVs2KPJEWc5a014n8lbTxUY="
    PortSSLEnabled="true" LDAPPort="3060" AdminDN="cn=orcladmin"/>
    <EMComponent ConsoleHTTPPort="1814" SSLEnabled="false"/>
  </IASInstance>

  <PortalInstance DADLocation="/pls/portal" SchemaUsername="portal"
  SchemaPassword="@Beyh8p2bOWELQCsa5zRtuYc="
  ConnectString="cn=iasdb,cn=oraclecontext">
    <WebCacheDependency ContainerType="IASFarm" Name="Farm-1.lbr.abc.com"/>
    <OIDDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-1.m1.abc.com"/>
    <EMDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-1.m1.abc.com"/>
  </PortalInstance>

</IASConfig>

```

- iasconfig.xml 構成ファイル内の任意の平文のパスワードを暗号化します。これを行うには、ORACLE\_HOME/portal/conf に移動して、次のコマンドを実行します。

```
ptlconfig -encrypt
```

---

**注意：** ptlconfig を使用するには、環境変数 ORACLE\_HOME を設定する必要があります。

---

- OracleAS Portal に URL の変更を登録します。OracleAS Portal にアクセスするために使用される新しい URL で LBR のホスト名とポートが使用されること、および OracleAS Web Cache の失効化 URL (OracleAS Web Cache のホスト名と失効ポート) が LBR のそれと一致していることを確認します。これを行うには、ORACLE\_HOME/portal/conf に移動して、次のコマンドを実行します。

```
ptlconfig -dad <portal_dadname> -wc -site
```

たとえば、次のようになります。

```
ptlconfig -dad portal -wc -site
```

11. パートナ・アプリケーションとして構成することにより、保護された要求を OracleAS Single Sign-On に登録します。スクリプト `ossoreg` を使用すると、この登録を行うことができます。`ossoreg` は、`MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib` の中間層にあります。

- a. `ossoreg` を実行できるように環境が次のように正しく構成されていることを確認します。

```
ORACLE_HOME=MID_TIER_ORACLE_HOME
LD_LIBRARY_PATH=ORACLE_HOME/lib
```

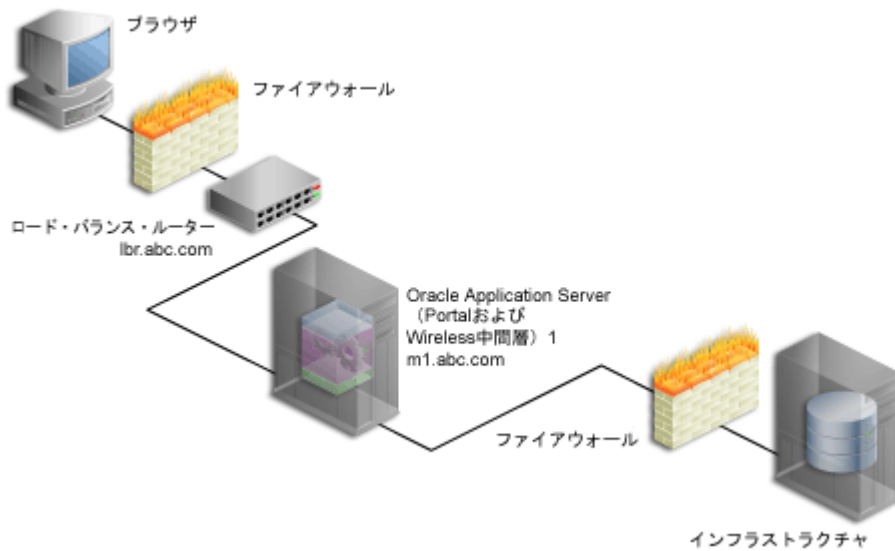
- b. `ossoreg` を実行します。次の例は、`ossoreg` の使用方法を示しています。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name lbr.abc.com
-mod_osso_url http://lbr.abc.com -config_mod_osso TRUE
-oracle_home_path MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Oracle/Oracle/conf/osso/osso.conf
-admin_info cn=orcladmin -virtualhost
```

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章にある `mod_osso` の登録に関する項を参照してください。

これらの手順の終了後は、設定した構成は図 5-3 のようになります。詳細は表 5-1 に示されています。

図 5-3 OracleAS Portal が LBR を通じてアクセスされている





### 5.3.3 手順 3: OracleAS Portal が起動し実行中であることの確認

次のテストを指定された順序で実行して、OracleAS Portal が起動し、実行中であることを確認します。1 つのテストに失敗した場合は、問題点の処置を行ってから次のテストに進んでください。OracleAS Web Cache、Oracle HTTP Server および LBR の構成とログを診断するには、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「診断ログ・ファイルの管理」を参照してください。

1. OracleAS Web Cache にキャッシュされた静的ファイルにアクセスすることにより、OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server に LBR を通じてアクセスできることをテストし、正常に機能することを確認します。たとえば、次の URL にアクセスできます。

```
http://lbr.abc.com/reInotes.htm
```

2. 次の URL にアクセスすることにより、LBR を通じて Oracle Application Server Metadata Repository に接続できることをテストします。

```
http://lbr.abc.com/pls/portal/http.p?cbuf=test
```

応答は "test" になります。このテストに成功することは、Oracle Application Server Middle-Tier が OracleAS Metadata Repository に接続できるということです。失敗した場合は、Oracle HTTP Server の `error_log` ファイルで要求の失敗に関する詳細を調べ、適切な処理を行います。

3. 次の手順を実行することにより、OracleAS Portal にアクセスできることをテストします。
  - a. `http://lbr.abc.com/pls/portal` にある OracleAS Portal のホーム・ページにアクセスします。アクセスできなかった場合は、`OC4J_Portal` インスタンスの `application.log` ファイルを調べ、エラーを探します。このエラーの最も一般的な原因は、PPE がループバック接続を行えないことです。これが機能するように、次のことを行います。
    - LBR 内で NAT が有効であることを確認します。
    - `m1.abc.com` 上の中間層が `lbr.abc.com` のアドレスを解決できることを確認します。これを行うには、`m1.abc.com` から次のコマンドを実行します。

```
ping lbr.abc.com
```
  - b. Portal のログイン・リンクをクリックします。これが機能しない場合は、以下のいずれかの理由である可能性があります。
    - インフラストラクチャの中間層が停止しているか、機能していません。詳細は、`INFRA_ORACLE_HOME` にある `OHS error_log` ファイルを調べてください。
    - OracleAS Portal に登録されたパートナー・アプリケーションの URL が正しくないか、OracleAS Single Sign-On が停止しています。

- c. Portal 内のリンクをいくつかクリックしてみます。
- d. コンテンツが OracleAS Web Cache にキャッシュされていることを確認します。これを行うには、5.7.1 項「OracleAS Web Cache Manager へのアクセス」で説明しているように、M1 上で OracleAS Web Cache Manager にアクセスします。

---

**注意：**「サービス」ポートレットにある「Web Cache 管理」リンクは、複数の中間層構成では機能しません。

---

「Monitoring」で「Popular Requests」をクリックします。「Filtered Documents」ドロップダウン・リストから「Cached」を選択し、「Update」をクリックします。OracleAS Portal にアクセスできた場合は、Portal のコンテンツが表示されます（たとえば、/pls/portal を含む URL）。Portal のコンテンツが何も表示されない場合は、別のブラウザを開き、OracleAS Portal にログインします。「Popular Requests」ページに戻り、「Update」をクリックして最新のページ・コンテンツを表示します。これで、検証用には十分なコンテンツが提供されます。

- e. OracleAS Portal で、ポートレットをページに追加するなどの単純なページ編集を行って、新しいコンテンツが表示されることを確認します。新しいコンテンツが正しく表示されない場合やエラーが発生する場合は、OracleAS Web Cache の失効化の構成に誤りがあります。

## 5.3.4 手順 4: 新しい Portal および Wireless 中間層 (M2) のインストール

M2 (m2.abc.com) 上で新しい Portal および Wireless の中間層をインストールするには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 IASCONFIG\_LOC が、マシン m1.abc.com 上で IASCONFIG\_LOC が指しているのと同じ場所を指すように設定します。iasconfig.xml ファイルによって、Web サイトのトポロジに含まれる任意のホストから Portal を構成できるようになります。環境変数は、理想的には共有ファイル・システム間でアクセス可能な場所を指す必要があります。これにより、別のマシンにインストールされていても、同じファイルを参照し、更新することができます。

インストールを開始する前に、2 番目の中間層で環境変数を設定する必要があります。構成ファイルのデフォルトの場所を上書きする場合は、たとえば次のようにして、環境変数 IASCONFIG\_LOC を、ファイルが格納されたディレクトリに設定する必要があります。

```
set IASCONFIG_LOC=/usr/local/ias904
```

---

---

**注意：** デフォルトでは、iasconfig.xml は `ORACLE_HOME/portal/conf` 内にあります。ネットワーク・ファイル・システムを介して Portal 依存性設定ファイルにアクセスできる場合は、複数のホスト間でファイルを共有できるので、ファイルを変更するたびに手動でレプリケートする必要はありません。シンボリック・リンクをサポートするオペレーティング・システムでインストールを実行する場合は、共有ファイルを参照するこのメカニズムを使用することをお勧めします。ただし、ネットワークを介して Portal 依存性設定ファイルにアクセスできない場合は、サイトのトポロジの変更を反映してファイルを最新の状態に保つ必要があります。詳細は、[A.1.2 項「Portal 依存性設定ファイルの更新」](#)を参照してください。

---

---

2. Oracle Universal Installer を実行して、Portal および Wireless Oracle Application Server 10g 中間層を 2 番目のマシン (M2) にインストールします。

---

---

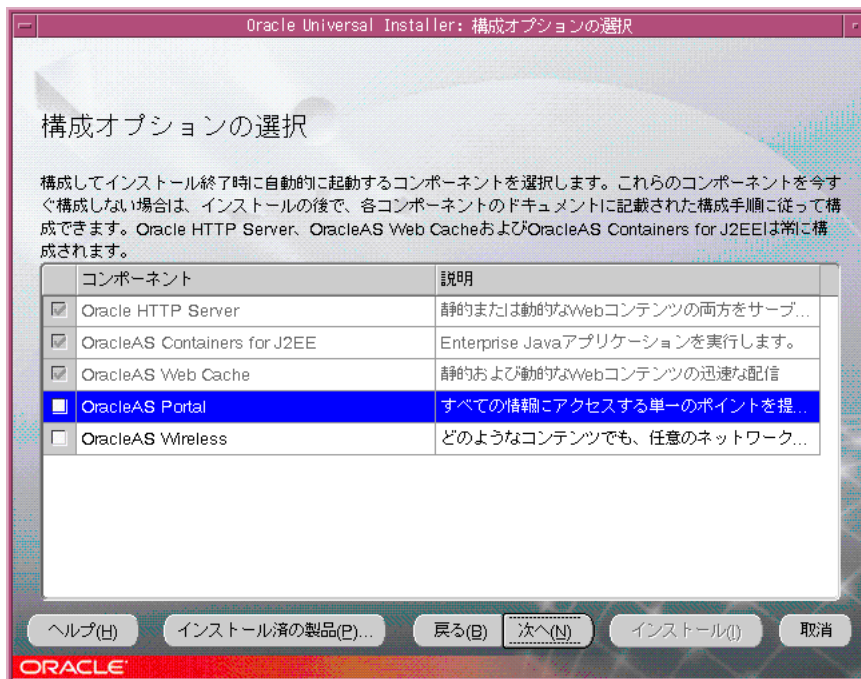
**注意：** 2 番目の中間層のインストールに同じ物理パスを使用することをお勧めします。このようにしておくと、1 つのマシンで構成の変更を行い、その変更内容を別のマシンへ転送するときに役立ちます。物理パスが他のマシンと異なると、ファイルのコピー後にパスの要素が正しいかどうかの確認を行うことが必要になります。

---

---

3. [図 5-4](#) に示したように、Oracle Application Server Middle-Tier のインストール中に、「構成オプションの選択」画面内の「OracleAS Portal」のチェックを外します。

図 5-4 「構成オプションの選択」画面




---

**注意：** 「構成オプションの選択」画面で「OracleAS Portal」を選択すると、OracleAS Portal 内の以前の構成エントリが上書きされます。詳細は、[3.3 項「インストール時とインストール後の OracleAS Portal の構成」](#)を参照してください。

---

- Application Server Control コンソールにアクセスして、「OracleAS Portal」を有効にします。詳細な手順は、[7.2.2 項「Application Server Control コンソールを使用した Portal の構成」](#)を参照してください。

---

**注意：** この操作によって OracleAS Portal の中間層コンポーネントが配置されますが、OracleAS Metadata Repository 内の情報は上書きされません。

---

- オプションで、Wireless ゲートウェイの URL をロード・バランスサのアドレスを使用して再登録します。詳細は、[5.9 項「OracleAS Wireless の構成」](#)を参照してください。

6. この新しいインストールが以前の構成に影響を与えることはありません。OracleAS Portal が M1 上で起動されて実行中であり、LBR を通じてアクセスできることを確認します。確認方法の詳細は、[5.3.3 項「手順 3: OracleAS Portal が起動し実行中であることの確認」](#)を参照してください。

### 5.3.5 手順 5: 既存の Portal を実行するための新しい中間層 (M2) の構成

既存の Portal を実行するには、次の手順をこの順序で実行して M2 を構成します。

1. 基盤となるコンポーネントが、LBR のホスト名 (lbr.abc.com) と LBR のポート番号 (80) に基づく URL を作成できるように、新しい OracleAS Portal 中間層を構成します。これを行うには、M2 上で Application Server Control コンソールを使用して、次の手順を実行します。
  - a. [5.4.1.1 項「www.xyz.com の仮想ホストの作成」](#)で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
    - 「アドレス」ページ (手順 9) で、仮想ホストの「サーバー名」フィールドに LBR のホスト名 (lbr.abc.com) を指定します。
    - 手順 23 で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 80 を指定します。
  - b. [5.4.1.1 項「www.xyz.com の仮想ホストの作成」](#)で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して 2 番目の仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
    - 「アドレス」ページ (手順 9) で、仮想ホストの「サーバー名」フィールドに M1 のホスト名 (m1.abc.com) を指定します。
    - 手順 23 で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 7777 を指定します。
    - Oracle HTTP Server の再起動を促すメッセージが表示されたら (手順 25)、「はい」をクリックします。
2. 中間層 M1 から中間層 M2 へ、OracleAS Portal の構成設定値をコピーします。まずファイルをバックアップすることをお勧めします。これを行うには、次の手順を実行します。
  - a. `ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/dads.conf` を M1 から M2 へコピーします。
  - b. `ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/cache.conf` を M1 から M2 へコピーします。
  - c. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portal/portal/WEB-INF/web.xml` を M1 から M2 へコピーします。
  - d. `ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf` を M1 から M2 へコピーします。

- e. M1 と M2 が異なる物理パスを使用してインストールされている場合は、ファイルのコピー後にパスの要素が正しいかどうかを確認する必要があります。
  - f. 5.3.4 項「手順 4: 新しい Portal および Wireless 中間層 (M2) のインストール」で IASCONFIG\_LOC を定義しなかった場合は、A.1.2 項「Portal 依存性設定ファイルの更新」で説明している手順に従って、M2 上の `iasconfig.xml` ファイルを更新する必要があります。
  - g. M2 で行われた手動による構成の変更を同期化するには、`ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl` から次のコマンドを実行します。  

```
dcmctl updateConfig
```
  - h. `ORACLE_HOME/opmn/bin` から次のコマンドを実行して、M2 上で OHS を再起動します。  

```
opmnctl restartproc type=ohs
```
3. `m2.abc.com` のマシンを構成して、LBR のホスト名が解決されて正しい IP アドレスが設定されるようにします。DNS の解決に委ねることも、次のようなエントリを `/etc/hosts` ファイル内に作成することもできます。
- ```
L1.L1.L1.L1 lbr.abc.com
```

---

**注意：** `/etc/hosts` ファイルにはローカル・ホスト名が `127.0.0.1` を指し示すエントリがないことを確認してください。たとえば、次のようになります。

```
127.0.0.1 m2.abc.com
```

---

- 4. OracleAS Web Cache がインストールされている中間層の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールから、M1 上の OracleAS Web Cache Manager にアクセスします。5.7.1 項「OracleAS Web Cache Manager へのアクセス」の説明を参照してください。
- 5. M1 で OracleAS Web Cache Manager を使用し、M2 の OracleAS Web Cache を M1 の OracleAS Web Cache クラスタに追加します。これを行うには、次の手順を実行します。
  - a. 「Properties」の「Clustering」をクリックします。
  - b. 「Clustering」ページの「Cluster Member」表で「Add」をクリックします。
  - c. 「Add Cache to Cluster」ページで、M2 に次の情報を指定して、この Web Cache クラスタに追加します。

| プロパティ                   | 値                   |
|-------------------------|---------------------|
| Host Name               | m2.abc.com          |
| Admin Port              | 4002                |
| Protocol for Admin Port | HTTP                |
| Cache Name              | m2.abc.com-WebCache |
| Capacity                | 30                  |

---

**注意:** 「Cache Name」プロパティの値には、任意の名前を指定できます。

---

- d. 「Submit」をクリックします。
- e. M2 上の OracleAS Web Cache がクラスタに追加されたことを確認するには、「Cluster Member」表内に m2.abc.com があるかどうかを調べます。

詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の「特殊な構成」のキャッシュ・クラスタの構成に関する項を参照してください。

6. M1 上の OracleAS Web Cache Manager を使用し、上の手順で作成した OracleAS Web Cache クラスタに、M2 を追加オリジナル・サーバーとして設定します。これを行うには、次の手順を実行します。
  - a. 「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」で「Origin Server」をクリックします。
  - b. 「Origin Server」ページの「Application Web Servers」表で「Add」をクリックします。
  - c. 「Add Application Web Server」ページで以下の情報を設定します。

| プロパティ              | 値          |
|--------------------|------------|
| Hostname           | m2.abc.com |
| Port               | 7778       |
| Routing            | ENABLED    |
| Capacity           | 100        |
| Failover Threshold | 5          |
| Ping URL           | /          |
| Ping Interval      | 10         |
| Protocol           | HTTP       |

---

---

**注意：**「Port」の値には、M2 の OHS リスニング・ポートを指定します。

---

---

- d. 「Submit」をクリックします。
  - e. オリジナル・サーバーが正しく追加されたことを確認するには、「Origin Server」表内に `m2.abc.com` があるかどうかを調べます。  
詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』のサイトのオリジナル・サーバーへのマッピングに関する項を参照してください。
7. 次の手順に従って、M1 で OracleAS Web Cache Manager を使用し、`lbr.abc.com` サイトを 2 つのオリジナル・サーバーの `m1.abc.com` と `m2.abc.com` にマップします。
    - a. ナビゲーション・フレームで、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」の「Site-to-Server Mapping」を選択します。
    - b. 「Site-to-Server Mapping」ページで表内の LBR サイトのマッピングを選択し、「Edit Selected」をクリックします。
    - c. 「Select Application Web Servers」セクションで、「Origin Server」ページで M2 に指定したアプリケーション Web サーバー (`m2.abc.com`) を選択します。
    - d. 「Submit」をクリックします。
    - e. サイトが正しくマップされたことを確認するには、「Site-to-Server Mapping」表で M1 と M2 の両方が `lbr.abc.com` のサイトに対応付けられているかどうかを調べます。  
詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』のサイトのオリジナル・サーバーへのマッピングに関する項を参照してください。
  8. 構成の変更を保存するには、ページの上部にある「Apply Changes」をクリックします。「Cache Operations」ページで次の手順を実行します。
    - a. 「Propagate」をクリックして、変更を M2 に伝播します。
    - b. 「Restart」をクリックして、M1 および M2 上の Web Cache を再起動します。
  9. 独立したポート（この例では 4001）上の OracleAS Metadata Repository から失効化要求を受け取って、ポート 4001 のマシン `m1.abc.com` とポート 4001 の `m2.abc.com` で実行中の OracleAS Web Cache へその要求が転送されるように、LBR (`lbr.abc.com`) を構成します。

---

---

**注意：** LBR は、OracleAS Web Cache の失効ポートでリスニングする必要はありません。ポート・マッピング機能のない LBR では、ポート番号が OracleAS Web Cache の失効ポートと一致する必要があります。

---

---



10. ポート 80 で要求を受け取り、マシン `m2.abc.com:7777` で実行中の OracleAS Web Cache と、`m1.abc.com:7777` で実行中の OracleAS Web Cache との間で負荷を均衡させるように、LBR (`lbr.abc.com`) を構成します。

---

---

**注意：** この手順を実行するには、LBR のドキュメントを参照してください。

---

---

11. `m2.abc.com` で実行中の OHS から流入するループバック要求のために NAT バウンス・バックを実行するように、LBR を構成します。詳細は、[5.3.2 項「手順 2: LBR を通じてアクセスされる M1 での OracleAS Portal の構成」](#)の項の[手順 6](#)を参照してください。  
これらの手順の終了後は、設定した構成は[図 5-1](#)のようになります。

---

---

**注意：** 中間層の追加は [5.3.4 項「手順 4: 新しい Portal および Wireless 中間層 \(M2\) のインストール」](#)に概略を示した手順に従い、各中間層については、[5.3.5 項「手順 5: 既存の Portal を実行するための新しい中間層 \(M2\) の構成」](#)を参照してください。

---

---

### 5.3.6 手順 6: Portal ツールと Web プロバイダの構成 (オプション)

Portal ツール (OmniPortlet および OracleAS Web Clipping) ・プロバイダ、およびローカルで構築された Web プロバイダとカスタムで構築された Web プロバイダが正常に機能していることを確認するには、中間層環境にさらに構成を追加する必要があります。

#### 複数の中間層環境での Portal ツール・プロバイダの構成

複数の中間層環境で Portal ツール (OmniPortlet および OracleAS Web Clipping) ・プロバイダを正常に機能させるには、次の手順を実行します。

1. OmniPortlet で共有の環境設定ストアを使用するように構成します。デフォルトの OmniPortlet プロバイダでは、ファイルベースの環境設定ストアが使用されます。これに対し、複数の中間層環境では、データベースの環境設定ストア (DBPreferenceStore) などの共有の環境設定ストアを使用する必要があります。Portal ツール・プロバイダで DBPreferenceStore を使用するように構成するには、次の手順を実行します。
  - a. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/jpdk/jpdk/doc/dbPreferenceStore` ディレクトリに移動します。たとえば、次のようになります。

```
cd ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/jpdk/jpdk/doc/dbPreferenceStore
```
  - b. PORTAL スキーマがインストールされているデータベースで、「DBPreferenceStore」表を所有するユーザーとして SQL\*Plus にログインします。表および索引の作成に必要な権限をこのユーザーが持っていることを確認してください。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus scott/tiger
```
  - c. SQL\*Plus で、`jpdk_preference_store2.sql` スクリプトを次のように実行します。

```
@jpdk_preference_store2
```
  - d. 以下のエントリをファイル `data-sources.xml` に追加します。このファイルは、`ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/config` ディレクトリにあります。

```
<data-source
  class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
  name="omniPortletprefStore"
  location="jdbc/UnPooledConnection"
  xa-location="jdbc/xa/XAConnection"
  ejb-location="jdbc/PooledConnection"
  connection-driver="oracle.jdbc.driver.OracleDriver"
  username="scott"
  password="tiger"
  url="jdbc:oracle:thin:@infra.host.com:1521:orcl"
```

```

    inactivity-timeout="30"
  />

```

- e. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4_Portal/applications/portalTools/omniPortlet/WEB-INF/providers/omniPortlet` ディレクトリにあるファイル `provider.xml` を編集します。編集するのは、太字で示されている `preferenceStore` タグです。

```

<provider class="oracle.webdb.reformlet.ReformletProvider">
  <vaultId>0</vaultId>
  <session>>true</session>
  <preferenceStore
class="oracle.portal.provider.v2.preference.DBPreferenceStore">
    <name>omniPortletprefStore</name>
    <connection>jdbc/PooledConnection</connection>
  </preferenceStore>

```

データベースの環境設定ストアの構成の詳細は、Portal Studio (<http://portalstudio.oracle.com>) にある「Installing the DBPreferenceStore Sample」 (<http://portalstudio.oracle.com/pls/ops/docs/FOLDER/COMMUNITY/PDK/jpdk/v2/doc/dbPreferenceStore/installing.db.preference.store.v2.html>) を参照してください。

2. HTTP プロキシ構成の設定、または OmniPortlet と OracleAS Web Clipping で使用されるリポジトリの設定を変更することもできます。Portal ツール・プロバイダのテスト・ページからアクセスして、Portal ツールの「プロバイダの編集」のページ (OmniPortlet および OracleAS Web Clipping) の設定を変更できます。テスト・ページは次の URL にあります。

- M1 上の OmniPortlet プロバイダのテスト・ページ:  
`http://m1.abc.com:7777/portalTools/omniPortlet/providers/omniPortlet`
- M1 上の Web クリップング・プロバイダのテスト・ページ:  
`http://m1.abc.com:7777/portalTools/webClipping/providers/webClipping`

詳細は、I.1 項「Web クリップング・リポジトリの構成」および I.2 項「HTTP または HTTPS のプロキシ設定の構成」を参照してください。

3. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portalTools/omniPortlet/WEB-INF/providers/omniPortlet/provider.xml` を M1 から M2 へコピーします。
4. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portalTools/webClipping/WEB-INF/providers/webClipping/provider.xml` を M1 から M2 へコピーします。

5. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/config/data-sources.xml` を M1 から M2 へコピーします。
6. 「ローカルで構築されたプロバイダ」の「ナビゲータ」にある「プロバイダ」タブで、OmniPortlet プロバイダの「登録の編集」をクリックします。次に、「接続」タブをクリックし、プロバイダ登録 URL の最初の部分を `http://m1.abc.com:7777/` から `http://lbr.abc.com/` に変更します。
7. 「ローカルで構築されたプロバイダ」の「ナビゲータ」にある「プロバイダ」タブで、OmniPortlet プロバイダの「登録の編集」をクリックします。次に、「接続」タブをクリックし、プロバイダ登録 URL の最初の部分を `http://m1.abc.com:7777/` から `http://lbr.abc.com/` に変更します。
8. 次の URL にあるテスト・ページにアクセスして、OmniPortlet と Web クリップング・プロバイダが LBR を通じて正常に動作することを確認します。
  - OmniPortlet プロバイダ:  
`http://lbr.abc.com:80/portalTools/omniPortlet/providers/omniPortlet`
  - Web クリップング・プロバイダ:  
`http://lbr.abc.com:80/portalTools/webClipping/providers/webClipping`

---

**注意：** OracleAS Web Clipping プロバイダまたは OmniPortlet の Web ページ・データソースを使用する場合は、OracleAS Web Cache でセッション・バインドを有効にする必要もあります。「[手順7: OracleAS Web Cache でのセッション・バインドの有効化](#)」の説明を参照してください。

---

## 複数の中間層環境でのローカルで構築された Web プロバイダの作成

ローカルで構築されたプロバイダとは、OracleAS Portal のインスタンス内部に定義されているプロバイダのことです。複数の中間層環境で正常に機能するローカルで構築された Web プロバイダを作成するには、次の手順を実行します。

1. URL `http://lbr.abc.com/pls/portal` で、LBR を通じて OracleAS Portal にアクセスします。
2. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。「構成」タブをクリックし、「デフォルト JPKD インスタンス」に対して、M1 中間層の URL である `http://m1.abc.com:7777/jpdk/servlet/soaprouter/` を指定します。
3. Web プロバイダを作成し、その下にポートレットを作成します。新しいプロバイダごとに `provider.xml` ファイルが作成されます。

4. 複数の中間層環境で、ローカルで構築された Web プロバイダを使用するには、以下のファイルを M2 へコピーする必要があります。
- `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portalTools/providerBuilder/WEB-INF/providers/<providerName>` ディレクトリを M1 から M2 へコピーします。
  - `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portalTools/providerBuilder/WEB-INF/deployment/<providerName>.properties` ファイルを M1 から M2 へコピーします。
  - `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portalTools/providerBuilder/WEB-INF/deployment_providerui/provideruiaccls.xml` ファイルを M1 から M2 へコピーします。
  - `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portalTools/providerBuilder/WEB-INF/deployment_providerui/providerstore.xml` 内の `<providerMap>` のエントリを M1 から M2 へコピーし、`<warDir>` 要素を M2 の `ORACLE_HOME` に適切な値に変更します (太字の部分)。
- ```
<providerMap name="MyProvider" baseLanguage="en">
  <displayName language="en" translation="myprovider"></displayName>
  <timeout>20</timeout>
  <timeoutMessage language="en" translation="Timed Out"></timeoutMessage>
  <loginFrequency>Never</loginFrequency>

<httpURL>http://lbr.abc.com:80/portalTools/builder/providers/MYPROVIDER</httpURL>
  <cookieDomain>abc.com</cookieDomain>
  <serviceId>MYPROVIDER</serviceId>
  <requireSessionData>false</requireSessionData>
  <httpAppType>Portal</httpAppType>
  <warDir>ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portalTools/providerBuilder/WEB-INF</warDir>
  <warFile>providerBuilder</warFile>
</providerMap>
```
- 「ローカルで構築されたプロバイダ」の「ナビゲータ」にある「プロバイダ」タブで、OmniPortlet プロバイダの「登録の編集」をクリックします。次に、「接続」タブをクリックし、プロバイダ登録 URL の最初の部分を `http://m1.abc.com:7777/` から `http://lbr.abc.com/` に変更します。
  - URL `http://lbr.abc.com:80/portalTools/builder/providers/<providerName>` にあるテスト・ページにアクセスして、Web プロバイダが LBR を通じて正常に動作することを確認します。
5. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サ

タブにあります。「構成」タブをクリックし、「デフォルト JPDK インスタンス」に対して、LBR の URL である

`http://lbr.abc.com:80/jpdk/servlet/soaprouter/` を指定します。

---

**注意：** ローカルで構築された Web プロバイダを再編集すると、前に説明したファイルの変更を他の中間層に手動でレプリケートする必要が生じます。ただし、中間層には LBR を通じてアクセスするので、どの中間層で変更が適用されるかを指定できません。新しい Web プロバイダを作成する場合は、上の手順を繰り返します。

---

### 複数の中間層環境でのカスタムで構築されたプロバイダの構成

カスタムで構築されたプロバイダとは、OracleAS Portal のインストールによってあらかじめ生成されたプロバイダ、および OracleAS Portal を使用して作成されたプロバイダを除く、任意で作成した Web プロバイダのことです。カスタムで構築されたプロバイダを構成するには、それを最初の間接層に配置し、M1 の URL

(`http://m1.abc.com:7777/<webApp>/providers/<providerName>`) を使用して OracleAS Portal に登録する必要があります。複数の中間層環境で機能するように構成するには、次の手順を実行します。

1. カスタムで構築されたプロバイダで共有の環境設定ストアを使用するように構成します。「複数の中間層環境での Portal ツール・プロバイダの構成」で説明している手順を参照してください。

データベースの環境設定ストアの構成の詳細は、Portal Studio

(`http://portalstudio.oracle.com`) にある「Installing the DBPreferenceStore Sample」

(`http://portalstudio.oracle.com/pls/ops/docs/FOLDER/COMMUNITY/PDK/jpdk/v2/doc/dbPreferenceStore/installing.db.preference.store.v2.html`) を参照してください。

2. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/<webApp>/WEB-INF/providers/<providerName>/provider.xml` を M1 から M2 へコピーします。
3. 「ローカルで構築されたプロバイダ」の「ナビゲータ」にある「プロバイダ」タブで、OmniPortlet プロバイダの「登録の編集」をクリックします。次に、「接続」タブをクリックし、プロバイダ登録 URL の最初の部分を `http://m1.abc.com:7777/` から `http://lbr.abc/` に変更します。
4. URL `http://lbr.abc.com:80/<webApp>/providers/<providerName>` にあるテスト・ページにアクセスして、カスタムで構築されたプロバイダが LBR を通じて正常に動作することを確認します。

### 5.3.7 手順 7: OracleAS Web Cache でのセッション・バインドの有効化

OracleAS Web Cache のセッション・バインド機能は、ユーザー・セッションを特定のオリジナル・サーバーにバインドして、状態を一定の期間保持するために使用されます。デフォルトの OracleAS Portal 中間層で実行されるほとんどすべてのコンポーネントはステートレスですが、セッション・バインドは次の 2 つの理由で必要になります。

- OracleAS Web Clipping ポートレットと OmniPortlet の Web ページ・データソースの両方で使用される Web クリップング・スタジオでは、状態を保持する HTTP セッションを使用するため、セッション・バインドを有効化する必要があります。Web クリップングの詳細は、付録 I 「Web クリップングの管理」を参照してください。
- セッション・バインドを有効化すると、すべてのユーザー要求が強制的に特定の OracleAS Portal 中間層に転送されるので、Portal キャッシュのヒット率が高まります。Portal キャッシュの詳細は、1.3.2 項 「Portal キャッシュについて」を参照してください。

---

**注意：** 複数の中間層がある場合、トポロジ内で LBR を構成しているかどうかにかかわらず、OracleAS Web Cache のセッション・バインドを有効化する必要があります。この構成の OracleAS Portal では、セッション・バインドを LBR に設定する必要はありません。

---

OracleAS Web Cache で Portal ユーザー・セッションを OracleAS Portal 中間層にバインドするには、次の手順を実行します。

1. M1 または M2 いずれかの OracleAS Web Cache Manager で、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」の「Session Binding」をクリックします。
2. 「Session Binding」ページで表内の LBR サイト名 (lbr.abc.com:80) を選択し、「Edit Selected」をクリックします。
3. 「Please select a session」リストのセッション値を「All Sessions」に変更します。「Inactivity Timeout」はデフォルトの設定のままにします。
4. 「Submit」をクリックして、新しい設定値をサイト lbr.abc.com:80 に適用します。
5. 「Session Binding Cookie」が無効になっている場合は、「Enable」をクリックします。
6. 構成の変更を保存するには、ページの上にある「Apply Changes」をクリックします。
7. 「Cache Operations」ページで「Propagate」をクリックして、変更を伝播します。
8. 「Restart」をクリックし、M1 および M2 上で OracleAS Web Cache を再起動します。

### 5.3.8 手順 8: 構成完了の確認

完了した構成が正常に機能していることを確認するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Web Cache に格納されたコンテンツを消去するには、次のように M1 および M2 を再起動します。
  - a. Application Server Control コンソールにアクセスします。通常は、`http://www.abc.com:1812` にあります。
  - b. M1 インスタンスをクリックします。
  - c. 「Restart All」をクリックします。
  - d. この手順を M2 について繰り返します。
2. 次の手順を実行して、OracleAS Portal に LBR を通じてアクセスできるかどうかをテストします。
  - a. `http://lbr.abc.com/pls/portal` にある OracleAS Portal のホーム・ページにアクセスします。
  - b. Portal のログイン・リンクをクリックします。
  - c. Portal 内のリンクをいくつかクリックしてみます。
  - d. コンテンツが OracleAS Web Cache にキャッシュされていることを確認します。これを行うには、[5.7.1 項「OracleAS Web Cache Manager へのアクセス」](#)で説明しているように、M1 上で OracleAS Web Cache Manager にアクセスします。  
「Monitoring」で「Popular Requests」をクリックします。「Filtered Documents」ドロップダウン・リストから「Cached」を選択し、「Update」をクリックします。OracleAS Portal にアクセスできた場合は、Portal のコンテンツが表示されます（たとえば、`/pls/portal` を含む URL）。

OracleAS Portal で、ポートレットをページに追加するなどの単純なページ編集を行って、新しいコンテンツが表示されることを確認します。新しいコンテンツが正しく表示されない場合やエラーが発生する場合は、OracleAS Web Cache の失効化の構成に誤りがあります。



## 5.4 仮想ホストの構成

Oracle HTTP Server (OHS) は、仮想ホストの構成をサポートしています。仮想ホストによって、1 台のマシンを任意の数の異なるサイトとして表すことができます。たとえば、1 台のマシンを、`www.abc.com` と `www.xyz.com` の両方で表すように構成できます。1 台のマシンを `my.oracle.com` と `oraclepartnernetnetwork.oracle.com` の両方で表すように構成することもできます。Oracle Application Server Portal を使用して仮想ホストを構成するには、Oracle HTTP Server 上で仮想ホストを設定する必要があります。その他に Oracle Application Server Web Cache と Oracle Application Server Single Sign-On の構成も必要です。

---

---

**注意：** 中間層のホスト名を変更するのみの場合は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「ネットワーク構成の変更」を参照してください。

---

---

サーバー名を `www.abc.com` とし、`http://www.abc.com:7779/pls/portal` の OracleAS Portal に接続することを想定します。中間層がインストールされるマシンの IP アドレスは、`196.12.67.8` です。

実際のサーバー名を使用して `http://www.abc.com:7779/pls/portal` にある OracleAS Portal にアクセスするだけでなく、仮想ホスト名を使用して `http://www.xyz.com:7779` にもアクセスすると想定します。この場合の両方の URL が、同じ IP アドレスを指します。

この例では、ポート 7779 が OracleAS Web Cache のリスニング・ポート、ポート 7778 が OHS のリスニング・ポートです。

また、OracleAS Single Sign-On は、IP アドレスが `123.45.67.8` の別のマシンにインストールされていて、`http://www.login.com:7777/pls/orasso` という URL でアクセスされると想定します。

---

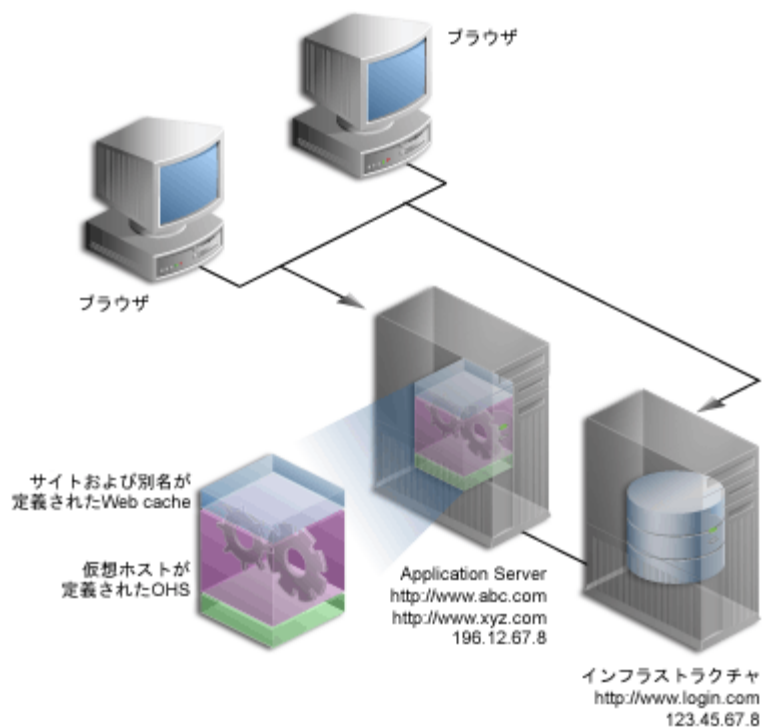
---

### 注意：

- この例の IP アドレスは、説明のためのみに使用しており、有効な IP アドレスであるとは限りません。
  - この項で使用されている名前とポートは説明用の仮の値であり、実際の環境にあわせて置き換える必要があります。
  - この項では、OracleAS Portal 中間層の仮想ホストの構成方法を説明するだけなので、OracleAS Single Sign-On のホスト名が変更されることはありません。OracleAS Single Sign-On のホスト名をカスタマイズする方法の詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「拡張構成」の章にある「プロキシ・サーバーを使用する Oracle Application Server Single Sign-On の配置」、および『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「ネットワーク構成の変更」を参照してください。
- 
- 

図 5-5 と Oracle Application Server が同じ中間層のマシンにありますが、この 2 つは別々のマシンにあってもかまいません。

図 5-5 仮想ホストの概要



---

**注意：** ドメイン名 `www.abc.com`、`www.xyz.com` および `www.login.com` は有効なドメイン名であり、`ping` を実行できることが必要です。

---

仮想ホストを構成するには、次の手順を示された順序で実行します。

1. 仮想ホストの作成
2. OracleAS Web Cache の構成
3. OracleAS Single Sign-On への OracleAS Portal の登録
4. 構成の確認

## 5.4.1 仮想ホストの作成

実際のサーバー名 `www.abc.com` の他に、`www.xyz.com` という名前の仮想ホスト用に、`httpd.conf` ファイル内に仮想ホストのエントリを作成する必要があります。仮想ホストを定義するには、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して、次の手順を実行します。

- [www.xyz.com](#) の仮想ホストの作成
- [www.abc.com](#) の仮想ホストの作成

この手順を終了した後に、次のことを実行します。

1. [httpd.conf](#) ファイルの確認
2. 仮想ホストが正しく構成されたことの確認

### 5.4.1.1 www.xyz.com の仮想ホストの作成

`www.xyz.com` の仮想ホストを作成するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールにアクセスします。
 

通常、Application Server Control コンソールは `http://www.xyz.com:1812` にあります。Application Server Control コンソールの使用方法の詳細は、[第7章「OracleAS Portal の監視と管理」](#)を参照してください。
2. OracleAS Portal がインストールされている中間層のリンクをクリックします。
3. 「HTTP\_Server」リンクをクリックします。
4. 「仮想ホスト」リンクをクリックします。
5. 「仮想ホスト」ページの「作成」ボタンをクリックします。
6. 「概要」ページで、「次へ」をクリックし、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して新しい仮想ホストを作成します。
7. 「一般」ページで、[表 5-2](#) に示す情報を指定します。

**表 5-2 仮想ホスト情報**

仮想ホスト情報	値
ドキュメント・ルート・ディレクトリ	<code>ORACLE_HOME/Apache/Apache/htdocs</code>
ディレクトリの索引	空白も可
サーバー管理者の電子メール	有効な電子メール・アドレス
仮想ホスト・タイプ	名前ベース

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「アドレス」ページで、使用する仮想ホストについての次の情報を「サーバー名」フィールドに入力します。  
  
`www.xyz.com`
10. 「メイン・サーバーのすべての IP アドレスをリスニング」オプションを選択します。
11. 「次へ」をクリックします。
12. 「ポート」ページで「特定のポートをリスニング」を選択し、ポートのドロップダウン・リストから **OHS** リスニング・ポート（この例では **7778**）を選択します。
13. 「次へ」をクリックします。
14. 「エラー・ログ」ページで、すべてのデフォルト値を選択します。
15. 「次へ」をクリックします。
16. 「サマリー」ページのサマリーを確認します。
17. 「完了」をクリックします。
18. Oracle HTTP Server の再起動を促すメッセージが表示されたら、「いいえ」をクリックします。
19. サーバー名 `www.xyz.com` が、表内に表示されることを確認します。
20. 「管理」リンクをクリックします。
21. 「拡張サーバー・プロパティ」をクリックします。
22. 「httpd.conf」を選択します。
23. 次に示すように、VirtualHost コンテナに Port および Rewrite ディレクティブを追加します（太字の部分）。  
  
`NameVirtualHost *:7778`  
  
`<VirtualHost *:7778>`  
`ServerName www.xyz.com`  
`Port 7779`  
`ServerAdmin you@your.address`  
`RewriteEngine On`  
`RewriteOptions inherit`  
`</VirtualHost>`
24. 「適用」をクリックします。
25. HTTP Server の再起動を促すメッセージが表示されたら、「いいえ」をクリックします。

### 5.4.1.2 www.abc.com の仮想ホストの作成

www.abc.com の仮想ホストを作成するには、次の手順を実行します。

1. 5.4.1.1 項「[www.xyz.com の仮想ホストの作成](#)」の手順 1～8 を実行します。
2. 「アドレス」ページ（手順 9）で、使用する仮想ホストについての次の情報を「サーバー名」フィールドに入力します。

```
www.abc.com
```

3. 5.4.1.1 項「[www.xyz.com の仮想ホストの作成](#)」の手順 10～24 を実行します。
4. Oracle HTTP Server の再起動を促すメッセージが表示されたら、「はい」をクリックします。

### 5.4.1.3 httpd.conf ファイルの確認

www.abc.com と www.xyz.com の仮想ホストを構成したら、次のように Application Server Control コンソールを使用して、httpd.conf ファイルを確認します。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールにアクセスします。
2. OracleAS Portal がインストールされているアプリケーション・サーバーのリンクをクリックします。
3. 「HTTP\_Server」リンクをクリックします。
4. 「管理」リンクをクリックします。
5. 「拡張サーバー・プロパティ」をクリックします。
6. 「httpd.conf」を選択します。

httpd.conf ファイルに次のような新しいセクションがあることを確認します。

```
NameVirtualHost *:7778

<VirtualHost *:7778>
  ServerName www.xyz.com
  Port 7779
  ServerAdmin you@your.address
  RewriteEngine On
  RewriteOptions inherit
</VirtualHost>

<VirtualHost *:7778>
  ServerName www.abc.com
  Port 7779
  ServerAdmin you@your.address
  RewriteEngine On
```

```
RewriteOptions inherit
</VirtualHost>
```

仮想ホストのエントリは `httpd.conf` ファイルの既存の内容によって様々に異なる場合がありますが、`www.abc.com` と `www.xyz.com` の両方の仮想ホストに対応する仮想ホストのエントリは必須です。

---

**注意：** `httpd.conf` ファイルは、手動で更新することもできます。このファイルは、上に示したような正しい `VirtualHost` ディレクティブを含めるために、手動で編集できます。

中間層で行われた手動による構成の変更を同期化するために、次のようにして、`ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl` を実行します。

```
dcmctl updateConfig -ct ohs
```

最後に、`ORACLE_HOME/opmn/bin` から次のコマンドを実行して Oracle HTTP Server を再起動します。

```
opmnctl restartproc type=ohs
```

---

**注意：** 使用するサイト名が DNS に登録されていない場合は、次のようにして、使用中のクライアント・マシンで `hosts` ファイルを更新する必要があります。

Windows の場合、このファイルは通常、`C:\WINNT\system32\drivers\etc` ディレクトリ内にあります。次の例は、Windows での `hosts` ファイルです。

```
# Copyright (c) 1993-1995 Microsoft Corp.
#
# This is a sample HOSTS file used by Microsoft TCP/IP
# for Windows NT/2000.
#
127.0.0.1 localhost
196.12.67.8 www.abc.com
196.12.67.8 www.xyz.com
```

UNIX の場合、このファイルは通常、`/etc/hosts` ディレクトリ内にあります。これらの変更を行った後にシステムを再起動する必要はありません。

---

#### 5.4.1.4 仮想ホストが正しく構成されたことの確認

次の URL にアクセスして、サーバー名と仮想ホストの両方が機能していることを確認します。

- `http://www.xyz.com:7779/pls/portal`
- `http://www.abc.com:7779/pls/portal`

### 5.4.2 OracleAS Web Cache の構成

`www.abc.com` サイトは、すでに OracleAS Web Cache 内に定義されています。これに加えて、複数の仮想ホストが OracleAS Metadata Repository に対して透過的になるように、OracleAS Web Cache 内にサイトの別名を作成する必要があります。`www.abc.com` はサイトとして設定されていますが、`www.xyz.com` はサイトの別名として定義しなければならないことに注意してください。このようにして、両方のサイト用にキャッシュされたコンテンツが、OracleAS Web Cache に送信される失効メッセージによって失効化されます。

**関連項目：** サイトの別名の設定方法は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

### 5.4.3 OracleAS Single Sign-On への OracleAS Portal の登録

Oracle Application Server Single Sign-On でシングル・サインオンが正常に機能するためには、URL に同じホスト名が指定されているパートナ・アプリケーションによって、SSO Server が必ず参照される必要があります。これは、Cookie がそれらを生成したホストのみに返されるからです。このため、前例では、OracleAS Single Sign-On は必ず `http://www.login.com` として参照される必要があります。つまり、`www.abc.com` と `www.xyz.com` をパートナ・アプリケーションとして登録する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. 次のように、OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を `-mode MIDTIER` および `-type SSO` を指定して実行することによって、`www.abc.com` のパートナ・アプリケーション・エントリを追加します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type SSO -host www.abc.com -port 7779 -sdad portal
```

2. MIDTIER モードの SSO タイプで OPCA を実行することによって、`www.xyz.com` のパートナ・アプリケーション・エントリを追加します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type SSO -host www.xyz.com -port 7779 -sdad portal
```

3. `www.abc.com` のパートナ・アプリケーションとして構成することにより、保護された要求を OracleAS Single Sign-On に登録します。スクリプト `ossoreg` を使用すると、この登録を行うことができます。`ossoreg` は、`MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib` の中間層にあります。



- a. `ossoreg` を実行できるように環境が次のように正しく構成されていることを確認します。

```
ORACLE_HOME=MID_TIER_ORACLE_HOME
LD_LIBRARY_PATH=ORACLE_HOME/lib
```

- b. `ossoreg` を実行します。次の例は、`ossoreg` の使用方法を示しています。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name www.abc.com
-mod_osso_url http://www.abc.com:7779 -config_mod_osso TRUE
-oracle_home_path MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf
-admin_info cn=orcladmin
```

4. `www.xyz.com` のパートナ・アプリケーションとして構成することにより、保護された要求を OracleAS Single Sign-On に登録します。このとき、次の例に示すように `ossoreg` の仮想ホスト・モードを使用します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name www.xyz.com
-mod_osso_url http://www.xyz.com:7779 -config_mod_osso TRUE -oracle_home_path
MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/osso_xyz.conf -admin_info
cn=orcladmin -virtualhost
```

`-config_file` パラメータが `osso_xyz.conf` ファイルを参照していることに注意してください。

5. `www.xyz.com` の仮想ホスト・コンテナを次のように編集する必要があります (太字の部分)。

```
<VirtualHost *:7778>
  ServerName www.xyz.com
  Port 7779
  ServerAdmin you@your.address
  RewriteEngine On
  RewriteOptions inherit
  OssosConfigFile MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/osso_xyz.conf
  OssosIpCheck off
</VirtualHost>
```

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第4章にある「`mod_osso` の登録」を参照してください。

## 5.4.4 構成の確認

仮想ホストが正しく設定されたことを確認するには、次のいずれかの URL を使用して OracleAS Portal に接続します。

- `http://www.abc.com:7779/pls/portal`
- `http://www.xyz.com:7779/pls/portal`

最初のログイン時に `http://www.login.com` のログイン画面が表示され、ログインに成功することを確認してください。他の仮想ホストからのこれ以降のログインでは、シングル・サインオンが機能してログイン証明書の入力が求められないはずです。

## 5.5 プロキシ・サーバーを使用するための OracleAS Portal の構成

ファイアウォールの外側のプロバイダおよび Web サイトへ接続するために、OracleAS Portal を構成してプロキシ・サーバーを使用することができます。

---

---

### 注意：

- Oracle Text では、URL のコンテンツの索引を作成するときに、プロキシ・サーバーの設定を使用します。詳細は、[8.3.6.4 項「URL の索引のプロキシ設定」](#)を参照してください。
  - プロキシ・サーバーを使用するために OracleAS Portal を構成するには、Portal 管理者であることが必要です。
- 
- 

プロキシ・サーバーを指定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「プロキシ設定」をクリックします。  
「サービス」ポートレットは「ビルダー」ページの「管理」タブにあります。
2. 「HTTP プロキシ・ホスト」フィールドで、`myproxy.mycompany.com` のように、ファイアウォールの外側のアプリケーションにアクセスするために使用する、HTTP プロキシ・サーバーのアドレスを入力します。プロキシ・サーバー名に接頭辞 `http://` は付けません。
3. 「ポート」フィールドに、プロキシ・サーバーのポート番号を入力します。値を指定しない場合のポート番号のデフォルトは、**80** です。

---

---

**注意：** プロキシのソフトウェアを実行するサーバーの名前とポート番号については、サーバー管理者に問い合せてください。

---

---

4. 「追加」をクリックします。

これで、Portal と Web プロバイダ間の接続のためにプロキシ・サーバーを使用することができます。また、このプロキシは、たとえば URL アイテムに指定された URL に接続するためなど、他の接続にも使用することができます。

5. 「プロキシの選択」セクションで、このような接続に使用するプロキシ・サーバーを選択します。非プロバイダ接続でプロキシ・サーバーを使用しない場合は、「なし」を選択します。
6. 「この文字で始まるドメインにプロキシ・サーバーを使用しない」フィールドに、プロキシ・サーバーを使用しないドメインを入力します。

---

---

**注意：** ドメインは、たとえば `.mycompany.com` のようにピリオド (.) で始まる必要があります。複数のドメインは、カンマ (,) で区切ります。

---

---

7. 「OK」をクリックします。



プロキシ・サーバーの設定方法に関連する詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) のホワイト・ペーパー『A Primer on Proxy Servers』を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

## 5.6 逆プロキシ・サーバーの構成

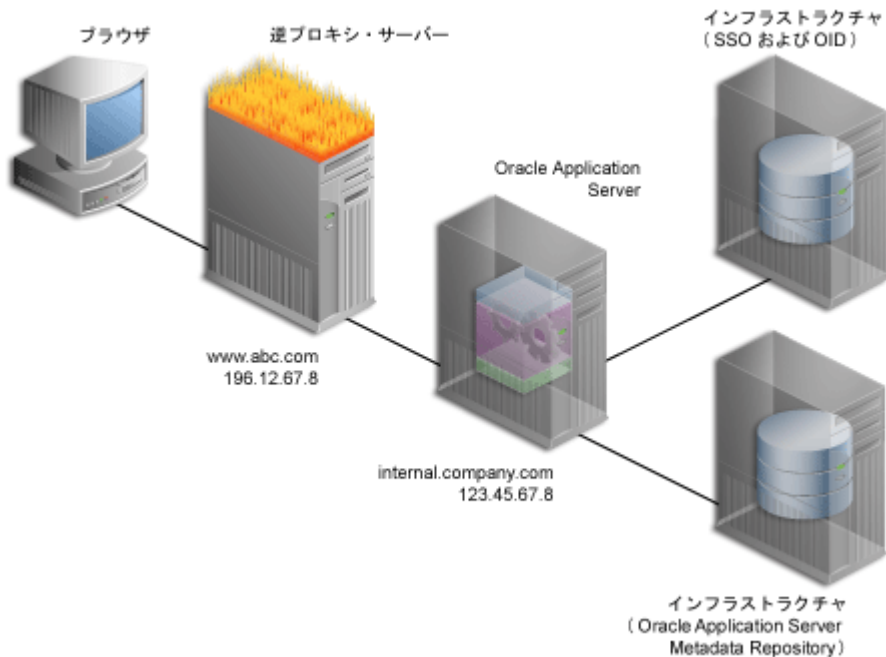
逆プロキシ・サーバーとは、ファイアウォール・アーキテクチャの一部として使用されるホスト処理の1つであり、内部のホストを外部とアクセスできるホストから切り離します。外部からの要求は、このプロキシを通して内部のサービスにアクセスします。一般に、プロキシ・サーバーはデュアルホーム・ホストの形式をとります。つまり、ネットワーク・インタフェース・カードを2つ備えたホストのことです。一方のインタフェースで外部のネットワークに接続し、もう一方のインタフェースで内部のネットワーク、つまりファイアウォールの非武装地帯（DMZ）に接続します。

図 5-6 に、プロキシ・サーバーによって公開されているホスト名を使用してサーバーにアクセスするブラウザのアーキテクチャを示します。その後、プロキシ・サーバーはファイアウォール内の実際のホストに要求を転送します。

この例では、逆プロキシ・サーバーと一緒に機能するように、OracleAS Single Sign-On Server が正しく構成されていると想定します。

**関連項目：**『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「プロキシ・サーバーを使用する Oracle Application Server Single Sign-On の配置」

図 5-6 逆プロキシ・サーバーの構成



この例では、次のことを前提としています。

プロパティ	値
外部サーバー名	www.abc.com
外部サーバー・ポート	80
OracleAS Web Cache のサーバー名 (内部サーバー)	internal.company.com
OracleAS Web Cache のリスニング・ポート (内部サーバー)	7777
OracleAS Web Cache の管理用ポート (内部サーバー)	4000
OracleAS Web Cache の失効ポート (内部サーバー)	4001

**注意：** この項で使用されている名前とポートは説明用の仮の値であり、実際の環境にあわせて置き換える必要があります。

図 5-6 に示したアーキテクチャで OracleAS Portal を構成するには、次の手順をこの順序で実行します。

- 自己参照型 URL が機能することの確認
- 内部サーバーへのループバックの構成
- OracleAS Portal の公開アドレスとプロトコルの指定
- 生成済プロバイダとローカルでホストされた Web プロバイダの構成
- ドメイン名の登録
- 構成の確認

## 5.6.1 自己参照型 URL が機能することの確認

中間層で ServerName ディレクティブが逆プロキシ・サーバーのサーバー名を指すように設定して、OracleAS Portal ページに描画される自己参照型 URL がブラウザで有効になるようにします。これを行うには、次の手順を実行します。

1. [5.4.1.1 項「www.xyz.com の仮想ホストの作成」](#) で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
  - 「アドレス」ページ（[手順 9](#)）で、「サーバー名」フィールドに `www.abc.com` を指定します。
  - [手順 23](#) で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 80 を指定します。
2. [5.4.1.1 項「www.xyz.com の仮想ホストの作成」](#) で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
  - 「アドレス」ページ（[手順 9](#)）で、「サーバー名」フィールドに `internal.company.com` を指定します。
  - [手順 23](#) で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 7777 を指定します。
  - Oracle HTTP Server の再起動を促すメッセージが表示されたら（[手順 25](#)）、「はい」をクリックします。

## 5.6.2 内部サーバーへのループバックの構成

パフォーマンスを向上させ、生成済プロバイダを確実に正しく機能させるには、通常は内部ネットワークでは表示できないドメイン名を解決するために、ローカルの HOSTS ファイルを使用する必要があります。このループバック接続の詳細は、[1.2.2.2 項「OracleAS Portal での通信フロー」](#)を参照してください。

たとえば、`internal.company.com` という Oracle Application Server ホストはそれ自体に要求を出しますが、要求している URL は `www.abc.com` を指しています。このため、そのマシンのローカルな HOSTS ファイルにホストのエントリを作成して、ファイアウォール内でこの名前が解決されるようにする必要があります。この例の HOSTS ファイルのエントリには、次の行を追加する必要があります。

```
# This is a sample HOSTS file used by Microsoft TCP/IP
# for Windows NT/2000.
127.0.0.1    localhost
123.45.67.8  www.abc.com
```

ローカルの HOSTS ファイルにこれらのエントリを追加しない場合は、Oracle Application Server ホストが、逆プロキシ (`www.abc.com`) を介してインターネットに要求を送り、インターネットからそれを戻すプロキシ・サーバーを認識するように設定するか、逆プロキシ・サーバーの内部インタフェースを `www.abc.com` に応答するように構成する必要があります。

---

---

**注意：** HP などの一部のプラットフォームでは、IP 名のマッピング用のソースに適用される検索順序を指示するファイルがあります。そのようなファイルがプラットフォームにある場合、前述の例を機能させるためには、IP マッピングについてチェックされるローカルの HOSTS ファイルが DNS サーバーの前に指定されていることを確認してください。

---

---

### 5.6.3 OracleAS Portal の公開アドレスとプロトコルの指定

通常、OracleAS Portal によって処理されるホスト名とポート番号は、OracleAS Web Cache のホスト名とポート番号です。これは、単純な構成では、ブラウザの要求が OracleAS Web Cache へ直接送られるためです。ただし、OracleAS Web Cache のフロントエンドとして逆プロキシ・サーバーがある構成では、定義されたホスト名とポート番号が、逆プロキシ・サーバーを表す必要があります。

この構成で、OracleAS Web Cache の失効メッセージが、逆プロキシ・サーバーではなく、OracleAS Web Cache ホストへ直接送信されるようにできます。公開されたホスト名が OracleAS Web Cache の失効化で使用されるホスト名と異なる場合は、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール内の「Portal の Web Cache 設定」ページ、または Portal 依存性設定ファイルを使用して、これらの設定を確立することはできません。

適切に構成するには、次の手順を実行します。

1. `-mode MIDTIER` と `-type OHS` を指定して、次のように OPCA (`ptlasst`) を実行します。

```
ptlasst.csh -i typical -mode MIDTIER -type OHS -sdad portal -host www.abc.com
-chost internal.company.com -port 80 -cport_i 4001 -cport_a 4000
```

2. パートナ・アプリケーションとして構成することにより、保護された要求を OracleAS Single Sign-On に登録します。スクリプト `ossoreg` を使用すると、この登録を行うことができます。`ossoreg` は、`MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib` の中間層にあります。

- a. `ossoreg` を実行できるように環境が次のように正しく構成されていることを確認します。

```
ORACLE_HOME=MID_TIER_ORACLE_HOME
LD_LIBRARY_PATH=ORACLE_HOME/lib
```

- b. 次の例は、`ossoreg` の使用方法を示しています。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name www.abc.com
-mod_osso_url http://www.abc.com -config_mod_osso TRUE
-oracle_home_path MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Http/conf/osso/osso.conf
-admin_info cn=orcladmin
```

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章にある「`mod_osso` の登録」を参照してください。

3. 外部から Oracle Enterprise Manager 10g にアクセスできないようにするには、OracleAS Portal で提供される Oracle Enterprise Manager 10g のリンク先が内部サーバーに戻るように変更する必要があります。これを行うには、次の例に示すように（通常、



MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/portal/conf ディレクトリ内にある) ptlconfig を実行します。

```
ptlconfig -dad portal -em
```

#### 関連項目：

- OPCA の使用方法の詳細は、付録 B 「OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用」を参照してください。
- 「Portal の Web Cache 設定」ページの詳細は、7.3.3 項「Portal の Web Cache 設定」を参照してください。
- Portal 依存性設定ファイルおよびツールの詳細は、付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」を参照してください。

## 5.6.4 生成済プロバイダとローカルでホストされた Web プロバイダの構成

生成済プロバイダ (WebClipping および OmniPortlet) とローカルでホストされた Web プロバイダを構成するには、次の手順を実行します。

1. 管理者 (たとえば、PORTAL) として OracleAS Portal にログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「ポートレット」サブタブをクリックします。
4. 「リモート・プロバイダ」ポートレットで、「名前」フィールドに WEBCLIPPING と入力します。「リモート・プロバイダ」ポートレットで、「名前」フィールドに WEBCLIPPING と入力します。
5. 「編集」をクリックします。
6. 「接続」タブをクリックします。
7. 「URL」フィールドで次の URL を

```
http://www.abc.com:80/portalTools/webClipping/providers/webClipping
```

以下のように変更します。

```
http://www.abc.com:7777/portalTools/webClipping/providers/webClipping
```

8. 「OK」をクリックして変更を確定します。
9. 手順 4～8 を繰り返します。ただし、以下の変更点があります。
  - 手順 4 で、WEBCLIPPING のかわりに OMNIPORTLET と入力します。
  - 手順 7 で、次の URL を

```
http://www.abc.com:80/portalTools/omniPortlet/providers/omniPortlet
```

以下のように変更します。

```
http://www.abc.com:7777/portalTools/omniPortlet/providers/omniPortlet
```

ローカルでホストされた Web プロバイダ (JPDK サンプル・プロバイダなど) を登録する場合、プロトコルに HTTP、ホスト名に `www.abc.com`、ポート番号に 7777 を使用して登録する必要があります。この制限は、ローカルでホストされた Web プロバイダ (つまり、OracleAS Portal と同じ中間層で稼働している Web プロバイダ) にもみ当てはまります。

たとえば、JPDK サンプル・プロバイダを登録するときは、次の URL を使用します。

```
http://www.abc.com:7777/jpdk/providers/sample
```

---

---

**注意：** 使用しているインフラストラクチャが OracleAS Portal 中間層とは別のマシンにある場合は、`/etc/host` ファイルに次の記述を追加する必要があります。

```
123.45.67.8 www.abc.com
```

ここで `w1.w1.w1.w1` は、OracleAS Web Cache のマシン (`internal.company.com`) の IP アドレスです。

---

---

### 5.6.5 ドメイン名の登録

IP アドレス 196.12.67.8 を使用して、インターネット上のドメイン・ネーム・サーバーに `www.abc.com` ドメイン名を登録します。

---

---

**注意：** OracleAS Portal が逆プロキシ・サーバーとともに機能するためには、逆プロキシ・サーバーが、クライアントから着信する Host HTTP リクエスト・ヘッダーを保存しておく必要があります。使用するプロキシ・サーバーで、これがデフォルトの設定でない場合は、逆プロキシの構成マニュアルを参照して設定します。たとえば、Apache 2.0 内で `mod_proxy` を使用中の場合は、`ProxyPreserveHost` ディレクティブを有効に設定する必要があります。

---

---

## 5.6.6 構成の確認

<http://www.abc.com/pls/portal> にある OracleAS Portal にアクセスして確認することができます。

---

---

**注意：**「サービス」ポータルにある「Web Cache 管理」リンクは、この新しい構成では機能しません。その代わりに、OracleAS Web Cache がインストールされた中間層の Application Server Control コンソールを使用して、OracleAS Web Cache Manager にアクセスできます。

---

---

## 5.7 OracleAS Portal 内での OracleAS Web Cache のキャッシュ構成

Oracle Application Server Web Cache には、キャッシュ、ページ・アセンブリおよび圧縮機能が備えられています。OracleAS Web Cache は、静的および動的な Web コンテンツを迅速に配信し、Oracle Application Server に対してロード・バランス機能およびフェイルオーバー機能を提供します。

この項では、OracleAS Web Cache を使用できるように OracleAS Portal を構成する方法について説明します。

この項の内容：

- [OracleAS Web Cache Manager へのアクセス](#)
- [Application Server Control コンソールを使用した Web Cache 設定の構成](#)
- [OracleAS Portal を使用した Web Cache 設定の構成](#)
- [SQL\\*PLUS によるキャッシュ失効化キューの消去](#)
- [OracleAS Web Cache のログの評価](#)
- [OracleAS Web Cache 構成スクリプト](#)
- [OracleAS Web Cache 構成のトラブルシューティング](#)

## 5.7.1 OracleAS Web Cache Manager へのアクセス

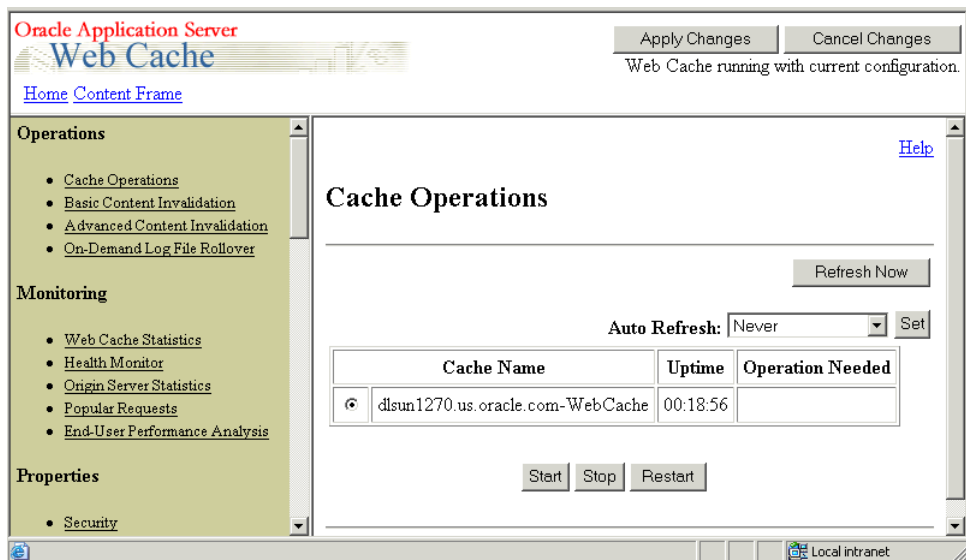
OracleAS Web Cache Manager は、構成と監視のオプションを組み合わせたグラフィカル・ユーザー・インタフェース・ツールで、OracleAS Web Cache とそこにコンテンツを保管する Web サイトを構成および管理するための統合環境を提供します。

OracleAS Web Cache Manager には、様々な方法でアクセスできます。

1. OracleAS Web Cache がインストールされた中間層の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールからは、次のようにアクセスします。
  - a. Application Server のホーム・ページで、システム・コンポーネントのリストから「Web Cache」を選択します。
  - b. 「Web Cache」ホーム・ページで「Web Cache 管理」をクリックします。
2. OracleAS Portal からは、次のようにアクセスします。
  - a. デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
  - b. 「サービス」ポートレットで「Web Cache 管理」リンクをクリックします。

OracleAS Web Cache 管理者のユーザー名とパスワード（通常、ias\_admin パスワード）を入力すると、[図 5-7](#) に示すように、OracleAS Web Cache Manager を使用できるようになります。

**図 5-7 OracleAS Web Cache Manager**



OracleAS Web Cache 管理マネージャの使用の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## 5.7.2 Application Server Control コンソールを使用した Web Cache 設定の構成

ホスト名や失効ポート番号など、OracleAS Portal で使用する OracleAS Web Cache 設定を構成するには、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用します。これらの設定値は、「Portal の Web Cache 設定」ページで構成できます。

Application Server Control コンソールを使用して、OracleAS Portal で使用される OracleAS Web Cache 設定を指定することができます。このページで OracleAS Web Cache のプロパティを設定すると、この中間層にある Portal 依存性設定ファイルが自動的に更新され、ptlconfig スクリプトが実行されます。

Application Server Control コンソール、特に「Portal の Web Cache 設定」ページのアクセス方法と使用方法の詳細は、7.3.3 項「Portal の Web Cache 設定」を参照してください。

## 5.7.3 OracleAS Portal を使用した Web Cache 設定の構成

OracleAS Portal のユーザー・インタフェースから、OracleAS Web Cache に関連する様々な構成タスクを実行することもできます。OracleAS Web Cache は、全体を消去することもユーザーごとに消去することもできます。

---

---

**注意：** キャッシュを消去すると、後続の要求がキャッシュ・ミスになり、キャッシュが再読み込みされるまで、Portal のパフォーマンスが低下することがあります。

---

---

ユーザーのグループ・メンバーシップが変更された場合は、そのユーザーのキャッシュ・エントリを削除して新しい権限を持てるようにするため、キャッシュを消去することができます。同様に、あるオブジェクトに対するユーザーまたはグループの権限を変更する場合も、そのオブジェクトのキャッシュ・エントリを消去することができます。

キャッシュ全体を消去したり、特定のユーザーのキャッシュを消去するには、Portal 管理者であることが必要です。特定の Portal オブジェクトのキャッシュを消去するには、そのオブジェクトに対して、少なくとも「管理」権限を持っている必要があります。

OracleAS Portal の OracleAS Web Cache 設定は、Portal の「グローバル設定」ページの「キャッシュ」タブを使用して構成することもできます。ただし、この方法はお勧めしません。iasconfig.xml ファイルが更新されるようにするには、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用してこれらの設定値を変更する必要があります。

「Portal Global Settings」ページを使用して OracleAS Web Cache のいずれかの設定を変更してしまった場合は、次の手順を実行して手動で iasconfig.xml ファイルを更新する必要があります。

1. `ORACLE_HOME/portal/conf/iasconfig.xml` を編集します。
2. 更新する Portal インスタンスの `WebCacheComponent` 要素を見つけ、必要に応じて `WebCacheComponent` のプロパティを変更します。
3. 次のスクリプトを実行して、新しい設定で Oracle Application Server Metadata Repository を更新します。

```
ORACLE_HOME/portal/conf/ptlconfig -dad <dad> -wc
```

次の各項で、OracleAS Portal を使用して実行できる処理について詳細に説明します。

- [Web Cache 全体の消去](#)
- [特定ユーザーのキャッシュの消去](#)
- [失効化ベースのキャッシュの有効期間の設定](#)
- [特定 Portal オブジェクトのキャッシュの消去](#)

### 5.7.3.1 Web Cache 全体の消去

Web Cache 全体を消去するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダール」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「キャッシュ」タブをクリックします。
3. 「Web Cache 全体を消去」を選択します。
4. 「適用」または「OK」をクリックして、キャッシュを消去します。

---

---

**注意：** これによってすべてのページ URL とスタイル・シートが消去されますが、Portal イメージは消去されません。

---

---

### 5.7.3.2 特定ユーザーのキャッシュの消去

特定のユーザーのためのキャッシュを消去するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダール」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「キャッシュ」タブをクリックします。
3. 「ユーザーのキャッシュを消去」フィールドに、キャッシュを消去するユーザーの名前を入力します。

---

---

**注意：** ユーザー名が不明な場合は、「ユーザーをブラウズ」アイコンをクリックし、表示されたリストから選択します。

---

---

4. 「適用」または「OK」をクリックして、特定のユーザーのキャッシュを消去します。

---

---

**注意：** ユーザーの Portal プロファイルを編集して、特定のユーザーのためのキャッシュを消去することもできます。

---

---

### 5.7.3.3 失効化ベースのキャッシュの有効期間の設定

失効化ベースのキャッシュでは、アイテムの編集などによりオブジェクトが変更されたことを OracleAS Web Cache に通知するメッセージを Portal またはプロバイダが送信すると、キャッシュ・エントリがページ（消去）されます。ただし、キャッシュ・エントリに対する有効期間を設定することもできます。キャッシュ・エントリは、OracleAS Web Cache が失効メッセージを受け取らない場合でも、この有効期間の最後に達するとページされます。

---

---

**注意：** 失効化ベースのキャッシュのエントリに有効期間を設定するには、Portal 管理者であることが必要です。

---

---

失効化ベースのキャッシュのエントリに有効期間を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. 「キャッシュ」タブをクリックします。
3. 「有効期間の最大値」フィールドに、キャッシュ・エントリがページされるまでにキャッシュ内に留まる最大時間（分単位）を入力します。
4. 「OK」をクリックします。

### 5.7.3.4 特定 Portal オブジェクトのキャッシュの消去

ページ・グループ、ページ、ページ・テンプレート、ポートレット・リポジトリ内のポートレット、Portal データベース・プロバイダおよび Portal データベース・プロバイダのコンポーネントに対応するキャッシュ・エントリを消去するには、次の手順を実行します。

1. 「ナビゲータ」内で、消去するオブジェクトまでドリルダウンします。
  - ページ・グループ、ページ、ページ・テンプレートの場合は、「プロパティ」をクリックし、「アクセス」タブをクリックします。
  - Portal データベース・プロバイダと Portal データベース・プロバイダのコンポーネントの場合は、「アクセス権限の付与」をクリックします。
  - ポートレットの場合は、「ポートレット・リポジトリ」ページ・グループの横の「ルート・ページの編集」をクリックし、目的のポートレットが含まれたページまでドリルダウンしてポートレットを編集し、「アクセス」タブをクリックします。
2. 「キャッシュの消去」をクリックします。
3. 「OK」をクリックします。

### 5.7.4 SQL\*PLUS によるキャッシュ失効化キューの消去

ユーザーが操作を行った結果、キャッシュ失効化キューが大きくなりすぎる場合があります。たとえば、大量のメンバーが属するグループへページに対するセキュリティ権限を繰り返し付与すると、付与するたびに、ユーザーごとにキュー内に弱い失効化が発生します。

弱い失効化は必要ではないこともありますが、OracleAS Portal がその必要性を判断できない場合があります。たとえば、ページに対するグループ権限が「表示」から「カスタマイズ (フル)」にアップグレードされても、グループのメンバーが誰もページを表示しない場合、失効化は不要です。ただし、誰がページを表示したかの記録は、Portal にありません。したがって、セキュリティの変更を使用するように構成された弱い失効化が続行します。

Portal 管理者は、Portal スキーマの所有者として SQL\*PLUS で次の問合せを実行し、キュー内の弱い失効化の回数を確認することができます。

```
select count(1) from wwutl_cache_inval_msg$ where process_type=2;
```

Portal 管理者は、Portal スキーマの所有者として SQL\*PLUS で次の問合せを実行し、キュー内の弱い、または強い失効化の合計回数を確認することができます。

```
select count(1) from wwutl_cache_inval_msg$;
```

この大きくなりすぎている可能性のある wwutl\_cache\_inval\_msg\$ 表内の行数は、ある程度までは、データベースを実行しているインフラストラクチャの速度に依存します。OracleAS Portal は OracleAS Web Cache の失効ポートと通信するので、通常は 50000 個のメッセージによって弱い失効化ジョブの速度が低下し、50000 個のメッセージを OracleAS Web Cache へ送信するとネットワークに負荷がかかります。



弱い失効化が不要であることが判明した場合、Portal 管理者は Portal スキーマの所有者として、SQL\*PLUS で次の問い合わせを実行することができます。

```
delete from wwutl_cache_inval_msg$ where process_type=2;
```

この問い合わせによって、弱い失効化がキューから削除されます。

弱い失効化が必要であってもそれが多すぎる場合、Portal 管理者は、次のコマンドを使用してキャッシュ失効化キューを消去することができます。

```
truncate table wwutl_cache_inval_msg$;
```

次に Portal 管理者は、5.7.3.1 項「Web Cache 全体の消去」で説明している Portal UI を通じてキャッシュ全体を消去する必要があります。

## 5.7.5 OracleAS Web Cache のログの評価

OracleAS Web Cache ログ・ファイルは通常、UNIX の場合は `ORACLE_HOME/webcache/logs`、Windows の場合は `ORACLE_HOME\webcache\logs` に格納されます。

次の2つのログ・ファイルがあります。

- access\_log ファイル
- event\_log ファイル

関連項目：『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』

## 5.7.6 OracleAS Web Cache 構成スクリプト

OracleAS Web Cache を使用できるように OracleAS Portal を構成するには様々な方法があり、構成を容易にするためのスクリプトがいくつか用意されています。これらのスクリプトの詳細は、C.1 項「OracleAS Web Cache 構成スクリプト」を参照してください。

付録 C 「OracleAS Portal のインストールおよび構成スクリプトの使用」で説明しているスクリプトは、次のとおりです。

- cachset.sql: OracleAS Web Cache のオン / オフを切り替えることができます。OracleAS Web Cache を完全に無効にすることもできます。
- cachjsub.sql: 失効メッセージ処理ジョブを管理できます。

## 5.7.7 OracleAS Web Cache 構成のトラブルシューティング

参照：『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』

## 5.8 中間層で使用されるインフラストラクチャ・サービスの変更

Oracle Application Server 10g では、中間層で使用されるインフラストラクチャ・サービス (Oracle Identity Management または OracleAS Metadata Repository) を変更することができます。この機能を使用すると、たとえば、中間層およびそのアプリケーションをテスト段階から本稼働用に移行することができます。OracleAS Portal で使用される OracleAS Metadata Repository を変更する場合は、テスト段階の OracleAS Metadata Repository に格納されたアプリケーション固有のデータを、本稼働環境の OracleAS Metadata Repository にも移動する必要があります。本稼働環境で追加のコンピュータが必要な場合は、インフラストラクチャ・サービスの変更が便利です。単一の手順で、中間層および配置済アプリケーションがすでにあるコンピュータを追加します。中間層インスタンスに使用されるインフラストラクチャ・サービスの変更方法は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

---

---

**注意：** デフォルトでは、OracleAS Portal の中間層は 1 つの Portal インスタンスで構成されます。このインスタンスの DAD 名と OracleAS Metadata Repository スキーマ名はどちらも portal です。このデフォルトの OracleAS Portal インスタンスのインフラストラクチャ・サービスは、上に説明した方法でのみ変更できます。

---

---

## 5.9 OracleAS Wireless の構成

中間層のインストール中に OracleAS Portal と一緒に Oracle Application Server Wireless が構成された場合、中間層インストールにより、OracleAS Wireless サービスに Portal が登録されます。複数の中間層インストールが実行される場合は、最後に設定された OracleAS Wireless サービスの URL が OracleAS Portal インスタンスに格納されます。OracleAS Wireless サービスとして選択した Oracle Application Server Middle-Tier で `portalRegistrar.sh` スクリプトを実行することにより、この URL を任意の OracleAS Wireless サービスの URL に変更できます。

UNIX の場合：

```
ORACLE_HOME/wireless/bin/internal/portalRegistrar.sh
```

Windows の場合：

```
ORACLE_HOME\wireless\bin\internal\portalRegistrar.bat
```

`portalRegistrar` スクリプトを実行する際に、次の引数を指定します。

- `admin_user` (通常は `orcladmin`)
- `url` (たとえば `http://lbr.abc.com`)

## 5.10 OracleAS Portal スキーマのパスワードの変更

OracleAS Portal スキーマのパスワードの変更については、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「管理者パスワードの管理」を参照してください。

---

---

**注意：** デフォルトでは、OracleAS Portal の中間層は 1 つの Portal インスタンスで構成されます。このインスタンスの DAD 名と OracleAS Metadata Repository スキーマ名はどちらも `portal` です。このデフォルトの OracleAS Portal インスタンスのスキーマ・パスワードは、上に説明した方法でのみ変更できます。

---

---



---

## OracleAS Portal の保護

Portal ソリューションの最も重要な側面の 1 つにセキュリティがあります。Web コンテンツへのユーザー・アクセスを制御したり、システムへの侵入者からサイトを保護したりできることがきわめて重要です。この章では、OracleAS Portal のセキュリティのアーキテクチャについて説明します。

この章の内容：

- [OracleAS Portal のセキュリティについて](#)
- [OracleAS Portal の OracleAS Security Framework の構成](#)
- [OracleAS Portal のセキュリティの構成](#)

### 関連項目：

- 『Oracle Application Server 10g セキュリティ・ガイド』
- 『Oracle Identity Management 概要および配置プランニング・ガイド』

## 6.1 OracleAS Portal のセキュリティについて

次の項では、OracleAS Portal のセキュリティの概要と、それが OracleAS Security Framework と連携してどのように機能するかについて説明します。

- OracleAS Portal のセキュリティ・モデル
- ユーザーのクラスとその権限
- 保護されているリソース
- 認可とアクセスの適用
- Oracle Application Server のセキュリティ・サービスの利用
- Oracle Identity Management Infrastructure の利用
- ポートレットのセキュリティ
- 「OmniPortlet」と「シンプル・パラメータ・フォーム」の保護
- Web クリップング・プロバイダの保護
- 連携型 Portal アダプタの保護
- OraDAV の保護

### 6.1.1 OracleAS Portal のセキュリティ・モデル

Web で利用できるコンテンツを作成するときは、たいてい、少なくともそのコンテンツの一部に対するアクセスを制限する必要があります。たとえば、サイトにあるすべてのドキュメントをすべてのユーザーが表示できるようにすることはまず考えられません。また、サイトにあるすべてのドキュメントをすべてのユーザーが変更できるようにすることもあまり考えられません。OracleAS Portal では、Web サイトの表示や変更ができるユーザーを完全に制御できる包括的なセキュリティ・モデルを提供しています。

ユーザーは、OracleAS Portal にログインしないと、コンテンツ作成者がパブリックとして作成したコンテンツしか閲覧できません。パブリック・コンテンツは、Portal オブジェクト（ページなど）の URL を知っていて、それが格納されているマシンに接続できるユーザーであれば誰でも閲覧できます。ユーザーは、パブリックとして作成されたオブジェクト（パブリック・ポートレットなど）のみを表示できます。オブジェクトにパブリック・コンテンツが含まれていない場合、ユーザーはそのオブジェクトへのアクセスを拒否されます。

Portal にログインしたユーザーは、そのユーザーのアクセス権限によって、コンテンツの表示および変更ができる場合もあれば、できない場合もあります。一般に、認証されたユーザーは、パブリック・ユーザーに比べて Portal 内で表示や、より多くの操作を実行できます。たとえば、認証されたユーザーは、パブリック・ユーザーが閲覧できないページ上のアイテムやポートレットを表示できます。また、認証されているユーザーは、パブリック・ユーザーだったら通常拒否される可能性のある、コンテンツの追加や編集、プロパティ、権限の変更などを行うことができます。Portal 内では、ユーザーやグループごとにオブジェクト（ページ、アイテムまたはポートレット）へのアクセスを制御することができます。つま

り、ページに対するアクセス権限を特定のユーザー名、ユーザー・グループ名またはその両方の組合せで付与できます。

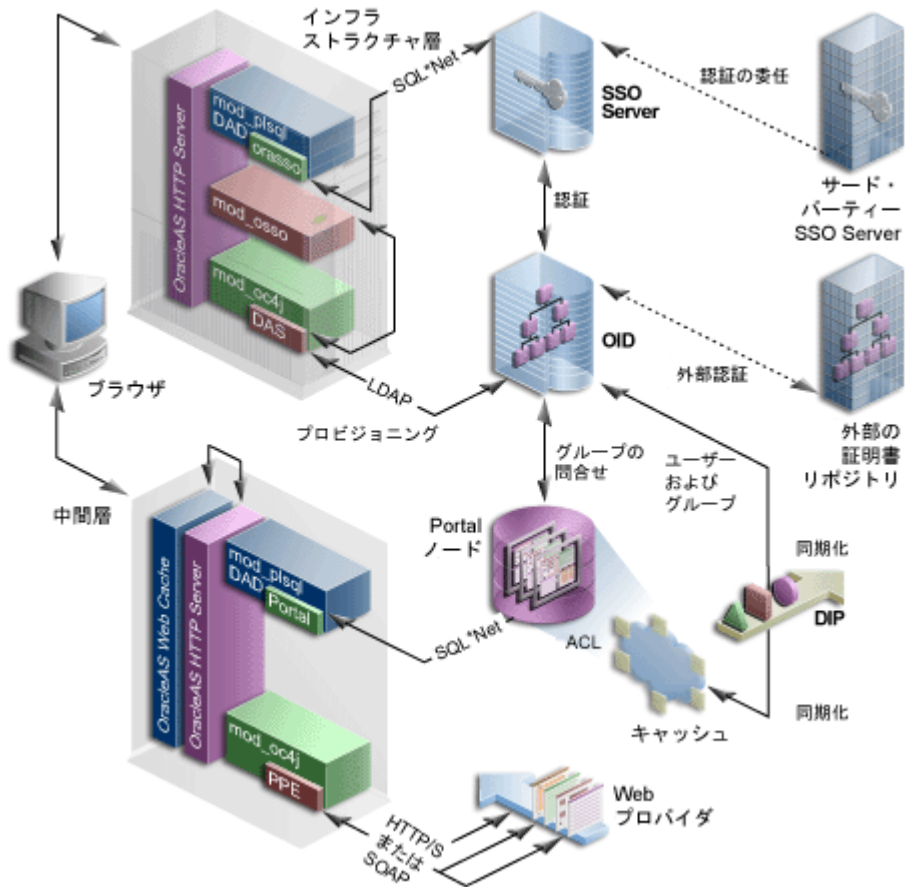
OracleAS Portal では、このような柔軟な方法で Web コンテンツへのアクセスを管理できるように、Oracle Application Server の他のコンポーネントと Oracle9i Database Server を活用して、Portal を強力に保護します。OracleAS Portal では、そのセキュリティ・モデルを実装するために、次のすべてのコンポーネントと対話します。

- Oracle Application Server Single Sign-On は、Portal のパブリック以外の領域にアクセスしようとするユーザーを認証します。
- mod\_osso は、OracleAS Single Sign-On への認証要求をリダイレクトする Oracle HTTP Server モジュールの 1 つです。
- OracleAS Web Cache は、OracleAS Portal によって作成されたページの処理に使用されるキャッシュです（要求を処理できない場合は、Oracle HTTP Server が代行します）。OracleAS Portal では、失効化キャッシュに基づいて、基となるページまたはメタデータが変更されると、キャッシュを失効化します。
- Oracle Internet Directory は、Oracle 固有の LDAP バージョン 3 のサービスで、ユーザー証明書とグループ・メンバーシップのリポジトリとして機能します。
- Oracle Internet Directory の Oracle Delegated Administration Services (DAS) は、ディレクトリの内部に格納される情報（ユーザーおよびグループ）を追加または更新します。
- Oracle Directory Integration Platform は、OracleAS Portal がサブスクリライブするなんらかのディレクトリ・イベント（ユーザーの削除など）が発生したときに OracleAS Portal に通知します。基本的に、Directory Integration Server は、OracleAS Portal において変更が必要なディレクトリで変更が行われたときに、OracleAS Portal に通知します。

## OracleAS Portal のアーキテクチャ

図 6-1 は、OracleAS Portal のセキュリティ・アーキテクチャのコンポーネントおよび関係を示しています。

図 6-1 OracleAS Portal のセキュリティ・アーキテクチャ



OracleAS Portal のアーキテクチャは、3つの基本層（クライアント・ブラウザ、中間層サーバー、およびインフラストラクチャ・サーバーとリポジトリ）で構成されています。デフォルトでは、Oracle Internet Directory と OracleAS Single Sign-On がインフラストラクチャのインストールの一部として同じホストにインストールされます。この層は、引き続き OracleAS Portal のインストールに使用されます。

デフォルトのインストールでは、3つのサーバーとリポジトリがすべて同じホストにインストールされますが、これらの機能を別々のサーバーにインストールすることをお勧めします。

9.0.2 より前のリリースを使用していた場合は、中間層とインフラストラクチャ層のコンポーネントが変更されていることに注意してください。DAD と mod\_plsql の組合せは、引き続きインフラストラクチャ層にありますが、Oracle Application Server Containers for J2EE



(OC4J) で動作する DAS により結合されました。同様に、中間層にある Parallel Page Engine も OC4J で動作します。

さらに、OracleAS Single Sign-On モデルが拡張されて mod\_osso が含まれるようになりました。これにより、URL を OracleAS Single Sign-On に関連付けることができます。アプリケーションがパートナ・アプリケーションとして作成されていなかった場合でも、mod\_osso を使用してサード・パーティのアプリケーションを OracleAS Single Sign-On に導入することをお勧めします。HTTP ヘッダーを読み取れるアプリケーションならば、OracleAS Single Sign-On 機能を自由に利用できます。

OracleAS Web Cache を、これらの中間層コンポーネントのフロントエンドに設定して、OracleAS Portal のスループットを最適化します。ブラウザからページ要求が送信されると、OracleAS Web Cache がそれを受理します。可能であれば、そのページがキャッシュから配信されます。可能でない場合、その要求は元の Oracle HTTP Server に送られます。

リリース 1.x と同様に、要求されたページがパブリック・ページではない場合、ユーザーはユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。この機能は、認証のために OracleAS Single Sign-On へリダイレクトされることによって実行されます。(このリリースでは、シングル・サインオンの DAD 名が orasso に変更されているので注意してください。)

リリース 1.x とは異なり、OracleAS Single Sign-On ではユーザー証明書を独自のスキーマの表と突き合せて照合しません。ユーザー証明書は、LDAP を介して Oracle Internet Directory で確認されます。証明書は、ディレクトリ内で見つかったものと照合され (LDAP 比較)、その結果が OracleAS Single Sign-On に返されます。認証に成功すると、OracleAS Single Sign-On によってシングル・サインオン Cookie が作成されます。

ユーザーが認証され、適切な OracleAS Portal セッションが作成されると、ページや他のオブジェクトにアクセスすることができます。ユーザーがアクセスに必要な権限を持つページやオブジェクトを特定する必要があります。リリース 1.x では、すべての Portal オブジェクトのアクセス制御リストは、OracleAS Portal リポジトリに保持されています。

リリース 2 の相違点は、すべてのユーザーおよびグループ・メンバーシップの情報が Oracle Internet Directory に格納されていることです。ユーザーが最初に OracleAS Portal へログインすると、そのユーザーのグループ・メンバーシップが Portal ノードへコピーされ、その層にキャッシュされます。このプロセスによって、オブジェクトの権限をすばやく検索することができます。ユーザーのオブジェクトやページの権限がわかると、Parallel Page Engine は適切な情報からページを生成できるようになります。

リリース 2 では、すべてのユーザー・プロビジョニングは、OracleAS Single Sign-On スキーマではなく、Oracle Internet Directory に対して行われます。中間層と LDAP サーバーとのインタフェースは、DAS サブレットです。DAS サブレットへのコールは、mod\_osso プラグインによって保護されます。これによって、Oracle Internet Directory へのアクセスを提供する前に、ユーザーが正しく認証されていることが確認されます。

セキュリティ・アーキテクチャの重要な機能の 1 つは、ローカルでキャッシュされたグループ・メンバーシップ・リストを Oracle Internet Directory と同期化する機能です。Oracle Directory Integration Platform では、ローカルでキャッシュされた情報を Oracle Internet Directory での変更に合わせて自動的に最新の状態にしています。

外部リポジトリと照合して認証を行う必要がある場合は、リリース 1.x の場合のように OracleAS Single Sign-On Server ではなく、Oracle Internet Directory によってこの手順が実行されます。Oracle Directory Integration Platform は、ローカル・キャッシュと Oracle Internet Directory を常に同期化するだけでなく、同様に Oracle Internet Directory と外部のすべてのリポジトリを常に同期化しています。

## 6.1.2 ユーザーのクラスとその権限

OracleAS Portal には、デフォルトでユーザー・アカウントおよびグループが多数用意されています。

- [OracleAS Portal のデフォルトの生成済ユーザー・アカウント](#)
- [OracleAS Portal のデフォルトの生成済のグループ](#)

### 6.1.2.1 OracleAS Portal のデフォルトの生成済ユーザー・アカウント

表 6-1 で、OracleAS Portal のインストール時にデフォルトで作成されるユーザー・アカウントについて説明します。

**表 6-1 デフォルトの OracleAS Portal ユーザー**

ユーザー	説明
PUBLIC	OracleAS Portal への認証されていないアクセスを識別するユーザー・アカウント。ユーザーがログインすると、ユーザー名が PUBLIC から、ユーザーが自分の認証に使用したユーザー名に変わります。オブジェクトをパブリックにするための明示的なチェック・ボックスを持たない個々のオブジェクトに対して Portal 権限を付与するときは、このユーザーが権限受領者とみなされて、認証されていないユーザーのためにそのオブジェクトへのアクセスが付与されます。
PORTAL	Portal のスーパー・ユーザー。標準インストールでは、ユーザー名は PORTAL です。このユーザー・アカウントには Portal 内で利用できるグローバル権限がすべて付与されるため、最上位の権限を持っています。
ORCLADMIN	portal と同様に、このアカウントには OracleAS Portal で最上位の権限が付与されます。このアカウントは、Oracle Application Server 管理者向けに作成され、Oracle Application Server のインストール時に指定されるパスワードを使用します。
PORTAL_ADMIN	権限のある OracleAS Portal ユーザー・アカウント。ユーザーが上位の権限を取得したり、データベース操作を実行したりする権限を除いた管理者権限が付与されます。このユーザーは、グループを編集したり、スキーマや共有オブジェクト上の権限を管理したりはできません。一般に、このアカウントはページを管理したり、ユーザー・アカウントを用意したりする管理者向けです。

### 6.1.2.2 OracleAS Portal のデフォルトの生成済のグループ

表 6-2 で、OracleAS Portal のインストール時にデフォルトで作成されるグループについて説明します。

**表 6-2 デフォルトの OracleAS Portal グループ**

グループ <sup>1</sup>	説明
AUTHENTICATED_USERS	<p>認証された、つまりログインしているユーザーを含むグループ。このグループの目的は、Portal にログインしているすべてのユーザーに与えるデフォルトの権限を割り当てる手段を提供することです。</p> <p>デフォルトでは、このグループには次の権限が付与されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ グループの作成</li> </ul> <p>このグループは、OracleDASCreateGroup のメンバーです。</p>
DBA	<p>Oracle Application Server の管理者向けに設定された高度な権限のあるグループ。Oracle Application Server の一部であるコンポーネントによって、コンポーネント固有のすべての権限がこのグループのメンバーに付与されます。</p> <p>DBA グループは、PORTAL_ADMINISTRATORS グループのメンバーです。</p> <p>このグループは、次の Oracle Application Server の権限グループのメンバーでもあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ OracleDASCreateUser</li> <li>■ OracleDASEditUser</li> <li>■ OracleDASDeleteUser</li> <li>■ OracleDASUserPriv</li> <li>■ OracleDASCreateGroup</li> <li>■ OracleDASEditGroup</li> <li>■ OracleDASDeleteGroup</li> <li>■ OracleDASGroupPriv</li> <li>■ OracleDASConfiguration</li> </ul>

表 6-2 デフォルトの OracleAS Portal グループ (続き)

グループ <sup>1</sup>	説明
PORTAL_ADMINISTRATORS	<p>OracleAS Portal 向けに設定された高度な権限のあるグループ。</p> <p>デフォルトでは、このグループには次の OracleAS Portal のグローバル権限が付与されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ すべてのページ・グループの管理</li> <li>■ すべてのページの管理</li> <li>■ すべてのスタイルの管理</li> <li>■ すべてのプロバイダの管理</li> <li>■ すべてのポートレットの管理</li> <li>■ すべてのアプリケーションの管理</li> <li>■ すべての Portal ユーザー・プロファイルの管理</li> <li>■ すべてのグループ・プロファイルの編集</li> <li>■ すべてのログの管理</li> <li>■ すべてのトランスポート・セットの実行</li> </ul> <p>このグループは、次の Oracle Application Server の権限グループのメンバーです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ OracleDASCreateUser</li> <li>■ OracleDASEditUser</li> <li>■ OracleDASDeleteUser</li> <li>■ OracleDASCreateGroup</li> <li>■ OracleDASConfiguration</li> </ul> <p>PORTAL_ADMINISTRATORS のメンバーには、OracleAS Single Sign-On の管理に必要な権限は付与されません。このグループのメンバーに OracleAS Single Sign-On を管理させる場合は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の説明に従って、それらの権限をこのグループのメンバーに付与する必要があります。</p>
PORTLET_PUBLISHERS	<p>Portal の他のユーザーにポートレットを公開する必要があるユーザー向けに設定された権限のあるグループ。</p> <p>デフォルトでは、このグループには次の OracleAS Portal のグローバル権限が付与されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ すべてのポートレットの公開</li> </ul>

表 6-2 デフォルトの OracleAS Portal グループ (続き)

グループ <sup>1</sup>	説明
PORTAL_DEVELOPERS	<p>ポータルレットを構築しているユーザー向けに設定された権限のあるグループ。</p> <p>デフォルトでは、このグループには次の OracleAS Portal のグローバル権限が付与されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ すべてのアプリケーションの作成</li> <li>■ すべての共有コンポーネントの管理</li> </ul> <p>PORTAL_DEVELOPERS にデータベース・プロバイダやデータベース・ポータルレットを作成させる場合は、スキーマを変更できるようにする権限 (すべてのスキーマに対する「データの変更」など) をこのグループに付与する必要があります。詳細は、表 6-5 を参照してください。</p>
RW_ADMINISTRATOR	<p>OracleAS Reports Services のレポート、プリンタ、カレンダーおよびサーバーを管理するユーザーのグループ。</p> <p>このグループにオブジェクト権限 (「管理」など) を割り当てる必要があります。</p>
RW_DEVELOPER	<p>OracleAS Reports Services のレポートを開発するユーザーのグループ。</p> <p>このグループにオブジェクト権限 (「実行」または「管理」など) を割り当てる必要があります。</p>
RW_POWER_USER	<p>OracleAS Reports Services のレポートを変更できるユーザーのグループ。</p> <p>このグループにオブジェクト権限 (「実行」または「管理」など) を割り当てる必要があります。</p>
RW_BASIC_USER	<p>OracleAS Reports Services のレポートを使用するユーザーのグループ。</p> <p>このグループにオブジェクト権限 (「実行」など) を割り当てる必要があります。</p>

<sup>1</sup> この表に示すグループはすべて、cn=<portal\_group\_container>,cn=Groups,dc=MyCompany,dc=com にあります。認証管理レムル名前は、システムがインストールされているサーバーのドメイン名によって決定されることに注意してください。たとえば、サーバーのドメイン名が oracle.com であった場合、デフォルトの認証管理レムル名は dc=oracle,dc=com となります。サーバーのドメイン名がわからない場合、Oracle Internet Directory ではデフォルトでインストール時に管理者が指定したドメインになります。OracleDASxxxx グループは、Oracle Internet Directory の権限グループで、cn=groups,cn=OracleContext,dc=MyCompany,dc=com 下にあります。これらのグループは、Oracle Internet Directory での操作 (ユーザーやグループ、およびそれらの権限の作成または編集) を実行する権限を付与します。

## 6.1.3 保護されているリソース

OracleAS Portal 内では、アクセスを制御するときの精度レベルを決定します。権限は、ユーザーまたはグループごとに、どのオブジェクトにも割り当てることができます。たとえば、Portal 内の各アイテムに対してユーザーごとにアクセス権限を割り当てることができますが、この方法ではコンテンツ作成者にかかなりの負担がかかります。

作成者の負担を減らす場合は、ページ・レベルでグループごとに権限を割り当て、所定のページに配置したすべてのアイテムが同様のセキュリティ要件を持つようにすることができます。この方法を使用すると、通常はアイテムが含まれるページを介してアイテムが受けるセキュリティで十分であるため、コンテンツ作成者はページよりも高いセキュリティを必要とするアイテムに対してのみ権限を割り当てる必要があります。

**関連項目：** 権限をモデル化する方法の詳細は、[6.1.6.9 項「DAS のパブリック・ロール」](#)を参照してください。



権限をモデル化する方法の詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com>) のホワイト・ペーパー「Strategies for Administering Privileges in OracleAS Portal Release 2」を参照してください。

### 6.1.3.1 グローバル権限

ユーザーまたはグループに特定のタイプのすべてのオブジェクトに対する一定レベルの権限を付与する場合は、グローバル権限を使用します。

---

---

**注意：** グローバル権限を付与されたユーザーには、多大な権限が与えられます。そのため、グローバル権限は本当にそれを必要としているユーザーまたはグループに対してのみ、十分に注意して付与する必要があります。グローバル権限は少数のユーザーに限定するようにしてください。

---

---

権限グループには、3つのタイプがあります。

- [表 6-3 「ページ・グループ権限」](#)
- [表 6-4 「Portal DB プロバイダ権限」](#)
- [表 6-5 「管理権限」](#)

表 6-3 ページ・グループ権限

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのページ・グループ	<p>「なし」: グローバル・ページ・グループ権限は一切付与されません。</p> <p>「すべて管理」: ページ・グループであらゆる作業を実行できます。この権限は、他のグローバル・ページ・グループ権限に含まれる他のすべての権限に優先します。たとえば、この権限ですべてのページを管理できます。</p> <p>「クラスの管理」: ページ・グループのカテゴリ、パースペクティブ、カスタム属性、カスタム・ページ・タイプまたはカスタム・アイテム・タイプを作成、編集および削除できます。</p> <p>「テンプレートの管理」: ページ・グループのページ・テンプレートを作成、編集および削除できます。すべてのページ・テンプレートへのアクセス権限を付与します。</p> <p>「スタイルの管理」: ページ・グループのスタイルを作成、編集および削除できます。</p> <p>「表示」: ページ・グループのすべてのページを表示できます。</p> <p>「新規作成」: ページ・グループを作成し、そのページ・グループにページ・グループ・オブジェクトを作成できます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成したページ・グループおよびページ・グループ・オブジェクトを編集および削除することもできます。<b>注意</b>: この権限を保持するユーザーは、既存のページ・グループにはオブジェクトを作成できません。</p>

表 6-3 ページ・グループ権限 (続き)

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのページ	<p>「なし」: グローバル・ページ権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: ページ・グループのページを作成、編集、カスタマイズまたは削除できます。ページ・グループのすべてのページへのアクセス権限を付与します。</p> <p>「コンテンツの管理」: ページ・グループのページのアイテム、ポートレットまたはタブの追加、編集、非表示、共有または削除を行うことができます。</p> <p>「承認付きアイテムの管理」: ページ・グループのページに新しいアイテムを作成できます。新しいアイテムは、指定された承認プロセスによって承認されるまで公開されません。この権限を持つユーザーまたはグループは、作成したアイテムを編集することもできます。この権限を持つユーザーは、ページにポートレットを追加することはできません。</p> <p>「スタイルの管理」: ページ・グループのページに、選択可能なスタイルまたは新しいスタイルを適用できます。新しいスタイルを作成、編集および削除できます。<b>注意</b>: ユーザー自身が作成したスタイルの編集のみを許可します (他のユーザーのスタイルの変更や削除はできません)。</p> <p>「ポートレットのカスタマイズ (フル)」: ページ・グループのページをカスタマイズして、ポートレットを追加、表示、非表示、削除、移動または再配置できます。ページをカスタマイズして、タブを表示、非表示、削除または再配置できます。または既存のタブ領域にタブを追加できます。ページ・グループのページをカスタマイズして、別のスタイルを使用することもできます。</p> <p>「ポートレットのカスタマイズ (追加のみ)」: ページ・グループのページをカスタマイズして、ポートレットの追加または既存のタブ領域にタブを追加できます。これらの権限を保持するユーザーまたはグループは、追加したポートレットを削除することもできます。ページ・グループのページをカスタマイズして、別のスタイルを使用することもできます。</p> <p>「ポートレットのカスタマイズ (非表示 - 表示)」: ページ・グループのページをカスタマイズして、ポートレットまたはタブを表示または非表示にできます。ページ・グループのページをカスタマイズして、別のスタイルを使用することもできます。ページ・グループのページにポートレットを配置できます。</p> <p>「カスタマイズ (スタイル)」: ページ・グループのページをカスタマイズして、別のスタイルを使用することもできます。</p> <p>「表示」: ページ・グループのすべてのページを表示できます。</p> <p>「新規作成」: ページ・グループにサブページを作成できます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成したサブページを編集および削除することもできます。<b>注意</b>: ページを作成するには、ページを作成するページ・グループのルート・ページの「管理」権限を保持している必要があります。</p>



表 6-3 ページ・グループ権限 (続き)

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのスタイル	<p>「なし」: グローバル・スタイル権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: ページ・グループのスタイルを作成、編集および削除できます。</p> <p>「表示」: ページ・グループのスタイルを表示できます。</p> <p>「公開」: ページ・グループのスタイルを他のユーザーが使用できるように公開できます。</p> <p>「新規作成」: ページ・グループにスタイルを作成できます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成したスタイルを編集および削除することもできます。</p>
すべてのプロバイダ	<p>「なし」: グローバル・プロバイダ権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: プロバイダを登録、編集および登録解除し、ポートレット・リポジトリを表示および更新することができます。プロバイダの編集権限を付与することもできます。</p> <p>「編集」: 登録されたプロバイダを編集できます。</p> <p>「公開」: プロバイダを登録および登録解除できます。</p> <p>「実行」: プロバイダのコンテンツを表示できます。</p> <p>「新規作成」: ポートレット・プロバイダを登録できます。ユーザー (またはグループ) が作成したプロバイダでは、ユーザーは「管理」権限を付与されます。したがって、ユーザーは作成した特定のプロバイダに対するすべての操作 (編集および登録解除を含む) を実行できます。</p>
すべてのポートレット	<p>「なし」: グローバル・ポートレット権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: プロバイダのポートレットを作成、編集または削除できます。</p> <p>「編集」: プロバイダのポートレットを編集できます。</p> <p>「実行」: プロバイダのポートレットを実行できます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、ポートレットにセキュリティが適用されている場合でも、すべてのポートレットを表示できます。ナビゲータには、すべてのポートレットに対する「表示」リンクが表示されます。</p> <p>「アクセス」: プロバイダのポートレットを表示できます。</p> <p>「公開」: ページ、ナビゲーション・ページまたは Portal DB プロバイダ・ポートレットを Portal に公開して、ページに追加できるようにします。</p>

表 6-4 Portal DB プロバイダ権限

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのアプリケーション	<p>「なし」: グローバル・アプリケーション権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: Portal DB プロバイダを編集、削除またはエクスポートできます。Portal DB プロバイダのポートレットを作成、編集、削除またはエクスポートできます。Portal DB プロバイダおよび Portal DB プロバイダのポートレットへのアクセス権限を付与します。</p> <p>「コンテンツの編集」: Portal DB プロバイダのポートレットを編集またはエクスポートできます。</p> <p>「ソースの表示」: パッケージの仕様部と本体を表示し、Portal DB プロバイダのポートレットを実行できます。ポートレットのソースを確認できるユーザーまたはグループを主な対象にしているため、その呼出し方法についての説明は省略します。</p> <p>「カスタマイズ」: Portal DB プロバイダのポートレットを実行およびカスタマイズできます。</p> <p>「実行」: Portal DB プロバイダのポートレットを実行できます。</p> <p>「新規作成」: Portal DB プロバイダを作成できます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成したプロバイダを編集、削除およびエクスポートできます。また、作成したプロバイダのポートレットを作成、編集、削除およびエクスポートできます。</p>
すべての共有コンポーネント	<p>「なし」: グローバル共有コンポーネント権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: Portal DB プロバイダの共有コンポーネントを作成、表示、コピー、編集、削除およびエクスポートできます。システム共有コンポーネントを表示およびコピーできます。非システム共有コンポーネントへのアクセス権限を付与します。</p> <p>「新規作成」: Portal DB プロバイダ内に共有コンポーネントを作成できます。システム共有コンポーネントを表示およびコピーできます。共有コンポーネントを表示できます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成した共有コンポーネントを表示、コピー、編集、削除およびエクスポートできます。</p>

表 6-5 管理権限

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのユーザー・プロフィール	<p>「なし」: グローバル・ユーザー・プロフィール権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: ユーザー・プロフィールを編集できます。他のユーザーおよびグループにこの権限を付与できます。</p> <p>「編集」: ユーザー・プロフィールを編集できます。</p>
すべてのグループ権限 (プロフィール)	<p>「なし」: グローバル・グループ・プロフィール権限は一切付与されません。</p> <p>管理グループ・プロフィールを編集できます。この権限を他のグループに付与できます。グループ・プロフィールの「権限」タブを使用すると、ユーザーはグループにこの権限を付与できます。「管理」権限によって「編集」権限が付与され、この権限を他のユーザーに付与できます。</p> <p>「編集」: Portal グループ・プロフィールを編集 (デフォルトのホーム・ページとデフォルトのモバイル・ホーム・ページを設定) できます。<b>注意</b>: グループの説明、メンバーシップおよび所有者を変更する権限は、Oracle Internet Directory のアクセス制御ポリシーで制御されます。このポリシーは、OracleDASEditGroup グループのメンバーシップにより管理されます。</p>

表 6-5 管理権限 (続き)

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのスキーマ	<p>「なし」: グローバル・スキーマ権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: スキーマを作成、編集および削除できます。スキーマへのアクセス権限を付与します。スキーマのデータベース・オブジェクトの作成、編集、削除および名前の変更ができます。表のデータまたはスキーマのビューの間合せ、削除および挿入を行うことができます。スキーマのファンクション、プロシージャ、パッケージまたはビューをコンパイルできます。スキーマのファンクション、プロシージャまたはパッケージを実行できます。すべてのスキーマのデータベース・オブジェクトへのアクセス権限を付与します。</p> <p>「データの変更」: スキーマを作成できます。表のデータまたはスキーマのビューの間合せ、削除および挿入を行うことができます。スキーマのファンクション、プロシージャ、パッケージまたはビューをコンパイルできます。スキーマのファンクション、プロシージャまたはパッケージを実行できます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成したスキーマの編集、削除およびアクセス権限の付与を行うことができます。</p> <p>「データの挿入」: スキーマを作成できます。表のデータまたはスキーマのビューの間合せおよび挿入を行うことができます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成したスキーマの編集、削除およびアクセス権限の付与を行うことができます。</p> <p>「データの表示」: スキーマを作成できます。表のデータまたはスキーマのビューに対する間合せを行うことができます。この権限を保持するユーザーまたはグループは、作成したスキーマの編集、削除およびアクセス権限の付与を行うことができます。</p> <p>「新規作成」: スキーマを作成できます。この権限を保持するユーザーは、作成したスキーマの編集、削除およびアクセス権限の付与も行うことができます。<b>注意</b>: ユーザーまたはグループが「ビルダー」ページの「データベースの管理」タブの「スキーマ」ポートレットにアクセスできるようにする場合は、DBA グループのメンバーにするか、または「データベースの管理」タブで「表示」権限を明示的に付与します。この権限を付与しなくても、ユーザーまたはグループはナビゲータを使用してスキーマにアクセスできます。</p>
すべてのログ	<p>「なし」: グローバル・ログ権限は一切付与されません。</p> <p>「管理」: ログを編集またはページ (消去) できます。この権限を他のユーザーに付与できます。</p> <p>「編集」: ログを編集またはページ (消去) できます。</p> <p>「表示」: ログを表示できます。</p>

表 6-5 管理権限 (続き)

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのトランスポート・セット	<p>「なし」: グローバル・トランスポート・セット権限は一切付与されません。</p> <p>「実行」: 共有ではないオブジェクトをエクスポート / インポートできます。</p> <p>「管理」: インポート・セットまたはエクスポート・セットを編集またはページ (消去) できます。この権限を他のユーザーに付与できます。</p>

### 6.1.3.2 オブジェクト権限

オブジェクトの「ページの編集」の「アクセス」タブを使用すると、OracleAS Portal 内の次のすべてのオブジェクトに対するアクセス権限をユーザーまたはグループに割り当てることができます。

表 6-6 OracleAS Portal オブジェクトと権限の制御

オブジェクトのタイプ	利用できる権限	権限の継承元
カレンダー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
チャート (SQL 問合せベース)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
チャート (ウィザード・ベース)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ

表 6-6 OracleAS Portal オブジェクトと権限の制御 (続き)

オブジェクトのタイプ	利用できる権限	権限の継承元
データ・コンポーネント	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
データ・コンポーネント・セル	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> </ul>	データ・コンポーネント
データベース・プロバイダ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ ソースの表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	該当なし
ドキュメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 所有</li> <li>■ 管理</li> <li>■ 表示のみ</li> </ul>	ページまたはアイテム
動的ページ・コンポーネント	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
フォーム <sup>1</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
フレーム・ドライバ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ

表 6-6 OracleAS Portal オブジェクトと権限の制御 (続き)

オブジェクトのタイプ	利用できる権限	権限の継承元
階層	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
イメージ・チャート	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
リンク	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
値リスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
メニュー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
OracleAS Reports Services プリ ンタ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ

表 6-6 OracleAS Portal オブジェクトと権限の制御 (続き)

オブジェクトのタイプ	利用できる権限	権限の継承元
OracleAS Reports Services レポート	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
OracleAS Reports Services サーバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
ページ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ コンテンツの管理</li> <li>■ 承認付きアイテムの管理</li> <li>■ スタイルの管理</li> <li>■ ポートレットのカスタマイズ (フル)</li> <li>■ ポートレットのカスタマイズ (追加のみ)</li> <li>■ ポートレットのカスタマイズ (非表示 - 表示)</li> <li>■ カスタマイズ (スタイル)</li> <li>■ 表示</li> </ul>	該当なし
ページ・グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ すべて管理</li> <li>■ クラスの管理</li> <li>■ テンプレートの管理</li> <li>■ スタイルの管理</li> <li>■ 表示</li> </ul>	該当なし
ページ・アイテム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 所有</li> <li>■ 管理</li> <li>■ 表示のみ</li> </ul>	ページ



表 6-6 OracleAS Portal オブジェクトと権限の制御 (続き)

オブジェクトのタイプ	利用できる権限	権限の継承元
ポートレット	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 実行</li> <li>■ アクセス</li> <li>■ 公開</li> </ul>	該当なし
プロバイダ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 公開</li> <li>■ 実行</li> </ul>	該当なし
例による問合せフォーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
レポート <sup>2</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ
スキーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 更新</li> <li>■ 挿入</li> <li>■ 表示</li> </ul>	該当なし
URL	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ

表 6-6 OracleAS Portal オブジェクトと権限の制御 (続き)

オブジェクトのタイプ	利用できる権限	権限の継承元
XML	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 管理</li> <li>■ 編集</li> <li>■ 表示</li> <li>■ カスタマイズ</li> <li>■ 実行</li> </ul>	データベース・プロバイダ

<sup>1</sup> フォームには多様なタイプ (ストアド・プロセスまたは表ベース、リリース 2 またはリリース 3 ベース、マスター / デイテール) がありますが、これらのタイプで利用できる権限や権限の継承元はすべて同じです。

<sup>2</sup> レポートには 2 つの異なるタイプ (SQL および表ベース) がありますが、これらのタイプで利用できる権限や権限の継承元はすべて同じです。

### 6.1.3.3 Web プロバイダとプロバイダ・グループを作成および編集する権限

ファイルを直接操作するかわりに、ユーザー・インタフェースを使用して Web プロバイダとプロバイダ・グループを作成および管理するには、管理ユーザーに適切な権限を付与する必要があります。この場合のアクセス制御リストの実装方法は、[6.1.3.1 項「グローバル権限」](#) および [6.1.3.2 項「オブジェクト権限」](#) で説明した OracleAS Portal リポジトリに常駐するオブジェクトの場合とは異なります。プロバイダ権限の付与は、XML ファイルで管理します。

---

**注意：** ここで説明する権限は、新しい Web プロバイダを開発するユーザーの権限で、プロバイダのユーザー・インタフェースから適用される認可を必要とします。これらの権限は、Web プロバイダを登録する場合には必要ありません。

---

Web プロバイダまたはプロバイダ・グループを作成、編集および削除するための権限を付与するには、次のファイルを手動で変更する必要があります。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_
Portal/applications/portalTools/providerBuilder/WEB-INF/deployment_
providerui/provideruiacls.xml
```

次にこのファイルの例を示します。

---

**注意：** この例のユーザー名 `any_provider_manage_user`、`any_provider_edit_user` などは、ユーザー名の例です。各権限のコードは、ユーザー名に示されている権限に対応しています。実際にユーザーに付与する場合は、`<user>` 要素の `name` 属性の値として、OracleAS Single Sign-On ユーザー名を指定します。

---

```
<providerui xmlns="http://www.oracle.com/portal/providerui/1.0">
  <objectType name="ALL_OBJECTS">
    <object name="ANY_PROVIDER" owner="providerui">
      <user name="any_provider_manager_user" privilege="500"/>
      <user name="any_provider_edit_user" privilege="400"/>
      <user name="any_provider_execute_user" privilege="300"/>
      <user name="any_provider_create_user" privilege="100"/>
    </object>
    <object name="ANY_PORTLET" owner="providerui">
      <user name="any_portlet_manage_user" privilege="500"/>
      <user name="any_portlet_edit_user" privilege="400"/>
      <user name="any_portlet_execute_user" privilege="300"/>
    </object>
  </objectType>
  <objectType name="PROVIDER">
    <object name="TEST_PROVIDER" owner="providerui">
      <user name="provider_manage_user" privilege="500"/>
      <user name="provider_edit_user" privilege="400"/>
      <user name="provider_execute_user" privilege="300"/>
    </object>
  </objectType>
  <objectType name="PORTLET">
    <object name="PORTLET_UNDER_TEST_PROVIDER" owner="TESTPROVIDER">
      <user name="portlet_manage_user" privilege="500"/>
      <user name="portlet_edit_user" privilege="400"/>
      <user name="portlet_execute_user" privilege="300"/>
    </object>
  </objectType>
</providerui>
```

このファイルを使用して、これから説明する次のタイプの権限を付与できます。

- [グローバル権限](#)
- [オブジェクト・レベルの権限](#)

### 6.1.3.3.1 グローバル権限

表 6-7 で、provideruiaccls.xml ファイルでユーザーに付与できるグローバル・オブジェクト・タイプおよび対応する権限コードについて説明します。ユーザーに権限を付与するときには、数値の権限コードを指定する必要があります。

表 6-7 provideruiaccls.xml のグローバル権限コード

オブジェクトのタイプ	利用できる権限
ANY_PROVIDER	<p>500 (管理) : プロバイダまたはプロバイダ・グループおよびそれらのポートレットを作成、編集または削除したり、開くことができます。</p> <p>400 (編集) : プロバイダまたはプロバイダ・グループを作成または編集したり、それらのポートレットを実行することができます。</p> <p>300 (実行) : プロバイダまたはプロバイダ・グループを開いたり、それらのポートレットを実行することができます。</p> <p>100 (作成) : プロバイダまたはプロバイダ・グループを作成できます。</p>
ANY_PORTLET	<p>500 (管理) : プロバイダのポートレットを編集、削除または実行できます。</p> <p>400 (編集) : プロバイダのポートレットを編集または実行できます。</p> <p>300 (実行) : プロバイダのポートレットを実行できます。</p>

特定のユーザーの権限を追加するには、たとえば次のように、適切なオブジェクト・タイプ・コンテナにエントリを追加します。

```
<objectType name="ALL_OBJECTS">
  <object name="ANY_PROVIDER" owner="providerui">
    <user name="jdoe" privilege="400"/>
    ...
  </object>
</objectType>
```

これらのグローバル権限では、objectType 名を ALL\_OBJECTS に設定し、オブジェクトの所有者を providerui に設定します。さらにオブジェクト名を、設定する権限付与のタイプに応じて ANY\_PROVIDER または ANY\_PORTLET に設定する必要があります。

次に、ユーザー名と権限を、権限受領者の OracleAS Single Sign-On ユーザー名および割り当てる権限コードに対応する値に設定します。このモデルでは、グループに権限を付与することはできません。ユーザーに直接付与する操作だけに対応しています。

### 6.1.3.3.2 オブジェクト・レベルの権限

表 6-8 では、ユーザーに付与できるオブジェクト・レベルの権限について説明します。オブジェクト・レベルの権限を付与されたユーザは、`provideruiacl.xml` XML ファイル内で特定のオブジェクト・インスタンスを参照できます。

**表 6-8 provideruiacl.xml のオブジェクト権限コード**

オブジェクトのタイプ	利用できる権限
PROVIDER	<p>500 (管理) : 指定されたプロバイダまたはプロバイダ・グループおよびそれらのポートレットを編集または削除したり、開くことができます。</p> <p>400 (編集) : 指定されたプロバイダまたはプロバイダ・グループを編集したり、それらのポートレットを実行することができます。</p> <p>300 (実行) : 指定されたプロバイダまたはプロバイダ・グループを開いたり、それらのポートレットを実行することができます。</p>
PORTLET	<p>500 (管理) : 指定されたプロバイダの指定されたポートレットを編集、削除または実行できます。</p> <p>400 (編集) : 指定されたプロバイダの指定されたポートレットを編集または実行できます。</p> <p>300 (実行) : 指定されたプロバイダの指定されたポートレットを実行できます。</p>

特定のユーザーの権限を追加するには、たとえば次のように、適切なオブジェクト・タイプ・コンテナにエントリを追加します。

```
<objectType name="PORTLET">
  <object name="PORTLET_UNDER_TEST_PROVIDER" owner="TESTPROVIDER">
    <user name="jdoe" privilege="400"/>
    ...
  </object>
</objectType>
```

オブジェクト・レベルの権限の場合、アクセス権を付与するオブジェクト・インスタンスに応じて、`objectType` 名を PROVIDER または PORTLET に設定します。オブジェクト名はそれぞれプロバイダ名またはポートレット名に設定します。オブジェクトの所有者については、プロバイダの場合は `providerui`、ポートレットの場合は関連付けられているプロバイダの名前を設定します。

表 6-9 に、これらのルールをまとめておきます。

**表 6-9 プロバイダとポートレットの属性値**

属性	プロバイダ・インスタンスの権限を付与する場合	ポートレット・インスタンスの権限を付与する場合
オブジェクト・タイプ名	PROVIDER	PORTLET
オブジェクト名	プロバイダ名またはプロバイダ・グループ名	ポートレット名
オブジェクトの所有者	providerui	プロバイダ名
ユーザー名	OracleAS Single Sign-On ユーザー名	OracleAS Single Sign-On ユーザー名
ユーザーの権限	権限コード	権限コード

#### 6.1.3.4 ポートレット・リポジトリ内の URL/XML ポートレットを作成または編集するための権限

ポートレット・リポジトリ内に URL および XML ポートレットを作成するには、ユーザーに権限を付与する必要があります。URL および XML ポートレットは、ポートレット・リポジトリの「ポートレット・ビルダー」ページから利用できます。アクセス権限を付与するには、次のファイルを手動で変更する必要があります。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/jpdk/jpdk/WEB-INF/
deployment_providerui/provideruiacls.xml
```

付与する権限は、前の 6.1.3.3 項「Web プロバイダとプロバイダ・グループを作成および編集する権限」で説明したものと同じです。

## 6.1.4 認可とアクセスの適用

ユーザーが OracleAS Portal へのログインを試みると、まず OracleAS Single Sign-On によって証明書がディレクトリと照合される必要があります。ID の照合が終わると、OracleAS Portal によってディレクトリに格納されているユーザーのアクセス権限がチェックされて、Portal 内で表示および使用できるオブジェクトが特定されます。

1. OracleAS Portal から、ユーザーが「ログイン」リンクをクリックして、ログインするよう要求します。
2. ログイン要求が認証のために OracleAS Single Sign-On に転送されます。
3. OracleAS Single Sign-On によってユーザー証明書がディレクトリに格納されている情報と照合されます。
4. 認証に成功すると、OracleAS Single Sign-On によってユーザーの SSO Cookie が作成されます。認証に成功しなかった場合、ユーザーはアクセスを拒否され、ユーザー名とパスワードの再入力のためにログイン・ページに戻されます。
5. ユーザー ID が確認されると、制御が OracleAS Portal に戻され、Portal セッション Cookie が作成されます。次に、OracleAS Portal はディレクトリに接続して、ユーザーのグループ・メンバーシップと権限を確認します。
6. そのセッションの間に、OracleAS Portal によってユーザーのメンバーシップと権限の情報がローカルにキャッシュされます。
7. ユーザーがページへのアクセスを試みると、OracleAS Portal によって次の確認が行われます。
  - ページがパブリックであるかどうかを確認します。パブリックであれば、ユーザーはそのページを表示できます。
  - そのページがパブリックでない場合は、OracleAS Portal によってローカルの権限表が照合されて、現行のユーザーにそのページを表示する権限があるかどうかを確認されます。ユーザーに表示する権限があれば、ユーザーはページを表示できます。
  - 現行のユーザーにページを直接表示する権限がない場合は、OracleAS Portal によって、キャッシュされているメンバーシップ情報と権限表が照合されて、ユーザーが属しているいずれかのグループにそのページを表示する権限があるかどうかを確認されます。ユーザーが属しているいずれかのグループにページを表示する権限があれば、ユーザーはページを表示できます。

---

---

**注意：** ユーザーの権限に影響を及ぼす変更が Oracle Internet Directory に対して行われた場合は、通知が送信され、そのユーザーに関するキャッシュされた情報が無効になります。このため、OracleAS Portal では、通知を受信するとすぐに、ユーザーの更新された権限を適用し始めます。

---

---

## 6.1.5 Oracle Application Server のセキュリティ・サービスの利用

OracleAS Portal では、次の方法で Oracle Application Server のセキュリティ・サービスを利用します。

- SSL 暗号化。HTTPS と SSL (Secure Socket Layer) を使用すると、クライアントとサーバーとの間に安全な接続を確立することができます。通信の両端で発行されるデジタル証明書によって、サーバーと通信の暗号化の妥当性が検証され、それらが脅かされていないことが確認されます。Oracle Application Server のセキュリティ・サービスを使用して OracleAS Portal の SSL 暗号化を実装することができます。
- JAZN。JAZN とは、Java Authentication および Authorization Service (JAAS) プロバイダの内部名です。JAAS は、アプリケーションがユーザーのアクセス制御を認証および適用できるようにする Java パッケージです。OracleAS Portal 内での JAZN の使用は、外部 JSP の認証に制限されています。

**関連項目：** 詳細は、次を参照してください。

- [6.3.2.1 項「OracleAS Portal の SSL の構成」](#)
- [F.2 項「外部通信のための JAZN ファイルの設定」](#)
- 『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』

## 6.1.6 Oracle Identity Management Infrastructure の利用

より包括的なセキュリティ・ソリューションを実現するために、OracleAS Portal では Oracle Identity Management Infrastructure に含まれている各種コンポーネントを利用します。

- [OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On の関係](#)
- [OracleAS Portal と Oracle Internet Directory の関係](#)
- [OracleAS Portal と Oracle Directory Integration Platform の関係](#)
- [OracleAS Portal と DAS の関係](#)

OracleAS Portal では、ユーザーやグループを作成するときにも、Oracle Identity Management を利用します。Portal のユーザーやグループの作成、およびグローバル権限や設定項目の設定に最もよく使用される方法では、次のポートレットが使用されます。

- 「ユーザー」ポートレット
- 「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレット
- 「グループ」ポートレット
- 「Portal グループ・プロファイル」ポートレット



**関連項目：**

- 『Oracle Identity Management 概要および配置プランニング・ガイド』
- 『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』

**6.1.6.1 OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On の関係**

6.1.4 項「認可とアクセスの適用」で説明したように、OracleAS Portal では OracleAS Single Sign-On を使用してユーザー認証を行います。

---

**注意：** OracleAS Portal リリース 3.0.9.8.4 以降は、OracleAS Single Sign-On リリース 9.0<sup>1</sup> と組み合わせて使用することができます。3.0.9.8.4 以前のリリースを OracleAS Single Sign-On 9.0 と組み合わせて使用することはできません。

---

<sup>1</sup> Oracle Application Server リリース 2 と一緒に出荷される OracleAS Single Sign-On のリリースを参照してください。

OracleAS Single Sign-On では、ユーザーのシングル・サインオン・セッションを管理しています。シングル・サインオン・セキュリティを OracleAS Portal で正しく機能させるには、次のタスクを実行する必要があります。

- OracleAS Portal を OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーションとして追加します。
- OracleAS Portal のエントリをパートナ・アプリケーションの有効な構成表に追加します。

これらの 2 つの構成手順は、Oracle Universal Installer によってインストール時に実行されます。インストール後に構成を変更する必要がある場合、次の方法を実行すれば変更できます。

- 7.2 項「Application Server Control コンソールの使用」で説明しているように Application Server Control コンソールを使用するか、付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」で説明している、Portal 依存性設定ツールを使用します。
- -mode MIDTIER -type SSO を指定して、Oracle Portal Configuration Assistant の ptlasst.csh (UNIX) または ptlasst.bat (MS Windows) を実行します。この手順によって、OracleAS Portal がパートナ・アプリケーションとして既存の OracleAS Single Sign-On インストールに追加されます。正しく機能させるには、OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On をあらかじめインストールし、それらの DAD を作成しておく必要があります。

ptlasst スクリプトとそのドキュメントは、MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/assistants にあります。

**関連項目：** 付録 B 「OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用」

### 6.1.6.2 OracleAS Portal と Oracle Internet Directory の関係

Oracle Internet Directory は、拡張性の高い Oracle 固有の LDAP バージョン 3 のサービスで、Oracle の一般的なユーザー ID をホストします。前の項で説明したように、OracleAS Portal は、ディレクトリに対して問合せを行い、ユーザーの権限、およびユーザーが Portal 内で何を表示し、実行できるのかを確認します。特に、OracleAS Portal は、ディレクトリからユーザーのグループ・メンバーシップを取得して、ユーザーが何にアクセスし、変更できるのかを確認します。

このモデルでは、OracleAS Portal に次のような Oracle Internet Directory との対話が必要となります。

- ディレクトリに格納されている OracleAS Portal 固有のエントリ
- ディレクトリに格納されているグループ属性
- ディレクトリに格納されているユーザー属性
- ディレクトリからのユーザーおよびグループ情報のキャッシュ
- DAS によるディレクトリからのユーザーとグループの値リストの生成

#### 6.1.6.2.1 OracleAS Portal の Oracle Internet Directory にあるディレクトリ・エントリ

セキュリティを正しく機能させるには、OracleAS Portal のディレクトリのディレクトリ情報ツリー (DIT) 構造内に次のエントリが必要です。

- **デフォルト・ユーザー・アカウント** (cn=PUBLIC, cn=PORTAL, cn=PORTAL\_ADMIN)。認証管理レームのユーザー・ベース (cn=Users, dc=MyCompany, dc=com<sup>1</sup>) に作成されます。PORTAL および PORTAL\_ADMIN のユーザーは、それぞれ DBA および PORTAL ADMINISTRATORS のグループに追加されます。PUBLIC ユーザーは、認証されていないユーザー用に作成されます。通常、PUBLIC ユーザー・エントリは、どのユーザーでもアクセスできる (制限されていない) Portal コンテンツを表示する権限を付与するためのものです。
- **グループ・コンテナ** (リリース 9.0.4:cn=schema\_name.yymmdd.hhmmi またはリリース 9.0.2.6:cn=portal.iasdb.server.mycompany.com)。認証管理レームのグループ・ベース (cn=Groups, dc=MyCompany, dc=com<sup>1</sup>) 内に作成されます。OracleAS Portal では、ディレクトリ内のどのグループも利用できますが、グループが OracleAS Portal グループ・コンテナ内にあると、より簡単にアクセスして値リストに表示することができます。

---

<sup>1</sup> デフォルトの認証管理レームの名前は、システムがインストールされているサーバーのドメイン名によって決定されます。たとえば、ドメイン・ネーム・サーバーが oracle であった場合、デフォルトの認証管理レーム名は dc=oracle, dc=com となります。ドメイン・ネーム・サーバーがわからない場合、ディレクトリによって割り当てられているデフォルト名は dc=Default Company, dc=com です。

OracleAS Portal のリリース 10g (9.0.4) では、グループ・コンテナの名前は OracleAS Portal の次の情報に基づいています。

- Portal スキーマ名
- OracleAS Portal がインフラストラクチャ・サービスの使用を開始した日時  
名前の書式は次のとおりです。

*schema\_name.yymmdd.hhmi*

OracleAS Portal のリリース 10g (9.0.4) では、グループ・コンテナの名前は OracleAS Portal の次の情報に基づいています。

- Portal スキーマ名
- データベース SID
- データベース・サーバーのホスト名

たとえば、スキーマ名が PORTAL、SID が iasdb、ホスト名が host1.abc.com である場合、グループ・コンテナの名前は cn=PORTAL.iasdb.host1.abc.com となります。

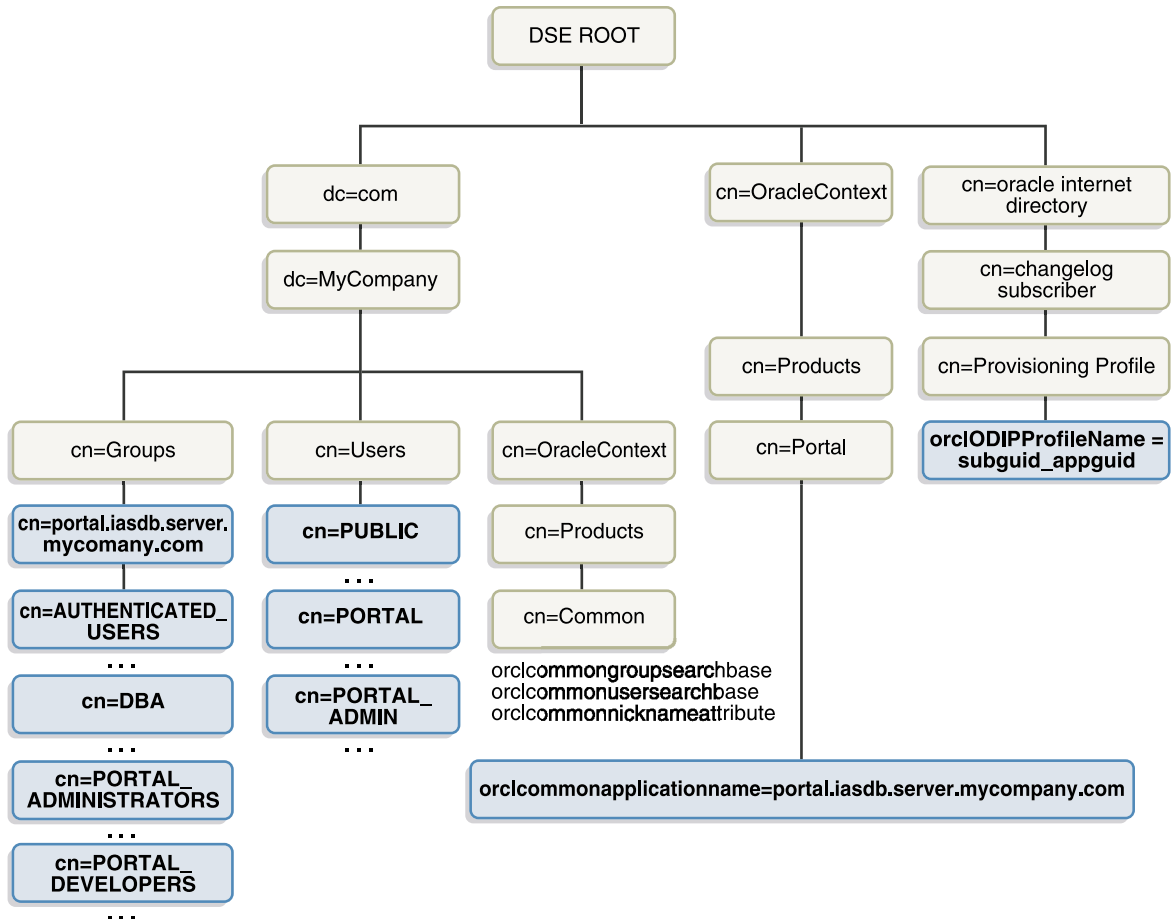
- **グループ。** ディレクトリの OracleAS Portal グループ・コンテナ内に作成されます。
  - cn=AUTHENTICATED\_USERS
  - cn=DBA
  - cn=PORTAL\_ADMINISTRATORS
  - cn=PORTAL\_DEVELOPERS
  - cn=PORTLET\_PUBLISHERS
  - cn=RW\_ADMINISTRATOR
  - cn=RW\_DEVELOPER
  - cn=RW\_POWER\_USER
  - cn=RW\_BASIC\_USER
- **アプリケーション・エンティティ** (orclApplicationCommonName=*application\_name*) がルート of Oracle Context (cn=Portal,cn=Products,cn=OracleContext) に作成されます。アプリケーションのパスワードはランダムに生成されます。OracleAS Portal では、ディレクトリへの問合せやディレクトリに対する操作 (ユーザーの追加など) をユーザーにかわって行う必要があるときに、このエンティティを使用してディレクトリにバインドします。OracleAS Portal がユーザーにかわってディレクトリにバインドするときは、プロキシ接続を使用してユーザーとして接続します。この方法により、ユーザーの認可制限がディレクトリによって正しく適用されていることが確認されます。OracleAS Portal のアプリケーション・エンティティは、ユーザーのプロキシ権限グループ (cn=UserProxyPrivilege,cn=Groups,cn=OracleContext) 内のメンバーシップによって、プロキシ接続を開始するための権限を取得します。リリース 9.0.4 では、アプ

リケーション・エンティティの名前は、スキーマと、OracleAS Portal がインフラストラクチャ・サービスの使用を開始した日時に基づいています。リリース 9.0.2.6 では、アプリケーション・エンティティの名前は、スキーマ、SID およびホスト名に基づいています。たとえば、スキーマ名が PORTAL、SID が iasdb、ホスト名が host1.abc.com である場合、アプリケーションの名前は  
orclApplicationCommonName=PORTAL.iasdb.host1.abc.com となります。

- **ディレクトリ同期サブスクリプション。** プロビジョニング・プロファイルのエントリは、ディレクトリ (cn=Provisioning Profile,cn=changelog subscriber,cn=oracle internet directory) のプロビジョニング・プロファイルに作成されます。このエントリは、ユーザーまたはグループの権限情報が変更されたときにディレクトリが OracleAS Portal に通知する必要があることを示します。このエントリによって、OracleAS Portal ではユーザーの認可とディレクトリに格納されている情報を同期化できます。

図 6-2 は、OracleAS Portal の情報がディレクトリの DIT 構造のどこにあるかを示しています。

図 6-2 OracleAS Portal の DIT 構造



#### 6.1.6.2.2 Oracle Internet Directory に格納されているユーザー属性

OracleAS Portal は、Oracle Application Server の他のすべてのコンポーネントと同様に、ディレクトリを使用して、ユーザー情報を格納しています。ディレクトリ内のユーザーはすべて、次のオブジェクト・クラスを使用して定義されます。

- inetOrgPerson オブジェクト・クラスには、Internet Engineering Task Force (IETF) の Request for Comments (RFC) 2798 番によって定義されているユーザー属性がすべて含まれています。

- orclUser および orclUserV2 オブジェクト・クラスには、Oracle 製品のその他の標準属性のセットが含まれています。

次の表は、Oracle Internet Directory に格納されている様々なユーザー属性を示しています。すべての属性のリストは、IETF RFC 2798 で入手できます。

**表 6-10 inetOrgPerson の属性**

inetOrgPerson (IETF) の属性	コメント
cn	ユーザーの共通名。 この属性は必須です。
employeeNumber	従業員の識別に使用される番号。
sn	姓。この属性は必須です。この属性を明示的に指定しない場合は、ユーザーのニックネームが使用されます。
givenName	名。
middleName	
displayName	優先名。
mail	電子メール・アドレス。
telephoneNumber	
homePhone	
mobile	
pager	
facsimileTelephoneNumber	
street	
l	オフィスの所在地 (市)。
st	オフィスの所在地 (州)。
postalCode	オフィスの郵便番号。
c	オフィスの所在地 (国)。
homePostalAddress	自宅の住所。
jpegPhoto	本人の画像。
o	組織。
title	

表 6-10 inetOrgPerson の属性 (続き)

inetOrgPerson (IETF) の属性	コメント
manager	従業員の監督者。
uid	ユーザー ID。
userPassword	
preferredLanguage	

表 6-11 orclUserV2 の属性

orclUserV2 の属性	コメント
orclIsVisible	ユーザーを管理者以外の全員に対して非表示にするかどうかを示すフラグ。
orclDisplayPersonalInfo	ユーザーの個人情報を管理者以外の全員に対して非表示にするかどうかを示すフラグ。
orclMaidenName	
orclDateOfBirth	
orclHireDate	
orclDefaultProfileGroup	本人のデフォルト・ユーザー・グループ。
orclActiveStartDate	アカウントが有効になった日付。
orclActiveEndDate	アカウントが終了した (または終了する) 日付。
orclTimeZone	
orclIsEnabled	ユーザー・アカウントがアクティブかどうかを示すフラグ。アクティブでない場合、ユーザーはログインできません。

以前のリリースの OracleAS Portal ユーザー・プロパティに精通しているユーザーのために、次の表では古いユーザー・プロパティを新しい Oracle Internet Directory 属性に対応付けしています。

表 6-12 OracleAS Portal ユーザー・プロパティと Oracle Internet Directory の対応付け

以前の OracleAS Portal ユーザー・プロパティ	inetOrgPerson または orclUserV2 の属性
ID	ID は、グローバル意識別子を使用して対応するディレクトリ・エントリにリンクされる OracleAS Portal のローカル属性であるため該当なし。

**表 6-12 OracleAS Portal ユーザー・プロパティと Oracle Internet Directory の対応付け (続き)**


---

**以前の OracleAS Portal ユーザー・プロパティ    inetOrgPerson または orclUserV2 の属性**


---

EMPNO	employeeNumber
LAST_NAME	sn
FIRST_NAME	givenName
MIDDLE_NAME	middleName
KNOWN_AS	displayName
EMAIL	mail
WORK_PHONE	telephoneNumber
HOME_PHONE	homePhone
MOBILE_PHONE	mobile
PAGER	pager
FAX	facsimileTelephoneNumber
OFFICE_ADDR(1,2,3)	street
OFFICE_CITY	l
OFFICE_STATE	st
OFFICE_ZIP	postalCode
OFFICE_COUNTRY	c
HOME_ADDR[1,2,3],CITY, STATE,ZIP,COUNTRY	homePostalAddress
IMAGE	jpegPhoto
ORGANIZATION	o
TITLE	title
MANAGER	manager
PASSWORD	userPassword
DISPLAY	orclIsVisible
DISPLAY_PERSONAL_INFO	orclDisplayPersonalInfo
NOTIFICATION_PREFERENCE	orclWorkflowNotificationPref

---



表 6-12 OracleAS Portal ユーザー・プロパティと Oracle Internet Directory の対応付け (続き)

以前の OracleAS Portal ユーザー・プロパティ	inetOrgPerson または orclUser2 の属性
USER_NAME	orclCommonNickNameAttribute。ユーザーの完全な Dn にかわって使用されるニックネームです。完全な Dn 属性は、かなり長い (cn=name,dc=domain,dc=com) ため、このニックネームを使用すると、ユーザーのログインが容易になります。詳細は、Oracle Internet Directory のドキュメントを参照してください。
MAIDEN_NAME	orclMaidenName
DATE_OF_BIRTH	orclDateOfBirth
HIREDATE	orclHireDate
SUBSCRIBER_ID	認証管理レルムの識別子は、ユーザーの認証管理レルム・ノードから取得されるため該当するものではありません。
DEFAULT_GROUP	orclDefaultProfileGroup

### 6.1.6.2.3 Oracle Internet Directory に格納されているグループ属性

OracleAS Portal は、Oracle Application Server の他のすべてのコンポーネントと同様に、ディレクトリを使用してグループ情報を格納しています。ディレクトリ内のグループはすべて、次のオブジェクト・クラスを使用して定義されます。

- groupOfUniqueNames オブジェクト・クラスには、IETF (RFC 2256) によって定義されているグループ属性がすべて含まれています。
- orclGroup オブジェクト・クラスには、OracleAS Portal のその他の標準属性のセットが含まれています。

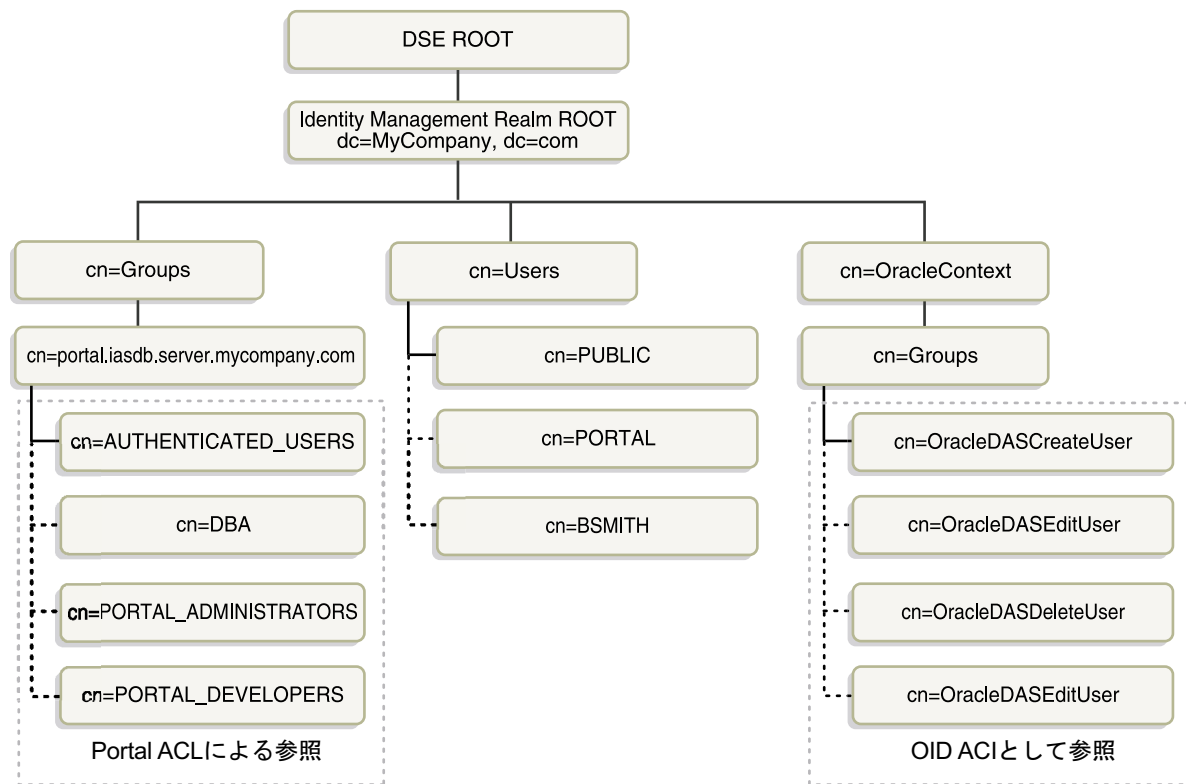
---

**注意：** OracleAS Portal リリース 3.x とは異なり、OracleAS Portal 9.x のグループの適用範囲を特定のページ・グループにはできません。

---

図 6-3 は、OracleAS Portal のグループ情報がディレクトリの DIT 構造のどこにあるかを示しています。

図 6-3 OracleAS Portal グループの DIT 構造



次の表は、Oracle Internet Directory に格納されている様々なグループ属性を示しています。

表 6-13 groupOfUniqueNames/groupOfNames の属性

groupOfUniqueNames/groupOfNames (IETF) の属性	コメント
cn	グループの共通名。「グループ」ポートレットの「グループの編集」フィールドのような場所に入力してグループを見つけることができます。

表 6-13 groupOfUniqueNames/groupOfNames の属性 (続き)

groupOfUniqueNames/groupOfNames (IETF) の属性	コメント
description	グループの説明。そのグループが表示されている値リストに表示されます。
uniqueMember	グループのすべてのメンバーの識別名 (DN) のリスト。メンバーの DN は、ユーザーまたは別のグループを表します。
owner	このグループを管理する権限を持っているすべてのユーザーおよびグループの DN のリスト。

表 6-14 orclGroup の属性

orclGroup の属性	コメント
orclGUID	このグループのグローバル一意識別子 (GUID)。
orclIsVisible	グループがパブリックかプライベートかを示すフラグ。プライベート・グループは、その所有者の値リストにしか表示されません。他のユーザーはそれらを表示できません。

以前のリリースの OracleAS Portal のグループ・プロパティに精通しているユーザーのために、次の表では古いグループ・プロパティを新しい Oracle Internet Directory 属性に対応付けています。

表 6-15 OracleAS Portal グループ・プロパティと Oracle Internet Directory の対応付け

以前の OracleAS Portal グループ・プロパティ	groupOfUniqueNames または orclGroup の属性
ID	グループのローカル ID。新しくローカルに格納された orclGUID でディレクトリ内の orclGUID と突き合わせが行われます。
HIDDEN_GROUP	orclIsVisible
SUBSCRIBER_ID	認証管理レム・ベースにあるグループ・エントリの場所 が認証管理レムを示しているため、サブスクリバ ID はもう必要ありません。
NAME	Cn
DESCRIPTION	Description
group membership	uniqueMember
OWNER	Owner

#### 6.1.6.2.4 OracleAS Portal での Oracle Internet Directory

パフォーマンスを向上させるために、OracleAS Portal では一部のディレクトリ情報をローカルにキャッシュします。特に、OracleAS Portal では次の情報をキャッシュします。

- OracleAS Portal のディレクトリ接続情報
- DAS の URL
- ディレクトリのポートレット（「ユーザー」および「グループ」ポートレットなど）に対する認可チェックのための特定の権限グループの orclGUID
- 一部の Oracle Context 情報
- ローカルで選択したグループの検索および作成ベース
- 各ユーザーのグループ・メンバーシップおよびデフォルト・グループ

OracleAS Portal によってキャッシュされる情報のほとんどは、ディレクトリ接続情報などの静的な情報です。OracleAS Portal では、グループ・メンバーシップやデフォルト・グループなどのより動的なアイテムの更新は、ディレクトリ同期プロビジョニング・エージェントに依存しています。OracleAS Portal では、ディレクトリ同期サブスクリプションがディレクトリ内で管理されていて、OracleAS Portal のセキュリティに影響する変更イベント（グループにユーザーを追加する、グループからユーザーを削除するなど）が発生した場合には、エージェントにフラグを設定して通知します。

#### 6.1.6.2.5 OracleAS Portal でのユーザーとグループの値リスト

「ユーザー」、「グループ」、「Portal ユーザー・プロファイル」、「Portal グループ・プロファイル」の各ポートレットには、ユーザーまたはグループの値リストが含まれています。これらの値リストには、ディレクトリに格納されている情報を設定する必要があります。デフォルトでは、値リストには OracleAS Portal の DIT 構造の OracleAS Portal グループ・コンテナに含まれるグループが表示されます。ただし、値リストからアクセスできるツリー内のグループであれば、どのグループでも参照することができます。

グループの値リストに表示されるグループは、それらを表示するユーザーの権限によって異なります。たとえば、ユーザーが「グループ」ポートレットから値リストを表示すると、そのユーザーが編集または削除できるグループのみがリストに表示されます。

ユーザーとグループの値リストを表示するときに、問題が発生することがあります。これらの問題は、次の 2 つの方法のどちらかを使用して解決できます。

- DAS の値リスト用の共通の JavaScript ドメインの定義
- OracleAS Portal 中間層に常駐する DAS の構成

#### DAS の値リスト用の共通の JavaScript ドメインの定義

ディレクトリと OracleAS Portal サーバーが異なるドメインに存在する場合は、ユーザーとグループの値リストを解決できるように、OracleAS Portal の JavaScript ドメインを明示的に構成する必要があります。たとえば、OracleAS Portal をインストールしたときに、DAS と異なる Oracle HTTP Server を使用するように構成したとします。この場合、共通のドメイ

ンを使用して、DAS によって表示される値リストの値を、OracleAS Portal によって表示されるページに転送できるようにする必要があります。

この状況で単一ドメインを作成するには、次の手順を実行します。

1. PORTAL として SQL\*Plus にログインします。
2. 次の SQL スクリプトを実行します。

```
secjsdom.sql <domain_name>
```

ここでの <domain\_name> は abc.com などです。

この手順を実行することにより、OracleAS Portal のディレクトリの値リストを Netscape または Microsoft Internet Explorer で実行できるようになります。secjsdom.sql の詳細は、C.4 項「secjsdom.sql スクリプトの使用」を参照してください。

**関連項目：** OracleAS Portal によるグループの検索範囲を決める方法については、6.3.2.3.4 項「グループ検索ベースの識別名 (DN)」を参照してください。

## OracleAS Portal 中間層に常駐する DAS の構成

前の「DAS の値リスト用の共通の JavaScript ドメインの定義」項で、secjsdom.sql を使用して、DAS の値リスト用に単一ドメインを作成する方法について説明しました。場合によっては、secjsdom.sql を使用して単一ドメインを作成するだけでは JavaScript のクロスドメイン・スクリプトの制限を解決できないことがあります。次のような場合には、DAS を OracleAS Portal の中間層に配置する必要があります。

- ユーザーが、Netscape 7 以上のバージョンまたは共通の JavaScript ドメインの設定オプションを適切に実装していないブラウザを使用している場合。
- 共通のホスト・ドメインを含まないホスト名を使用して仮想ホスティングを行っている場合。
- 共通のドメインを含まないブランド名入り URL を使用しているサブスクライバがいる場合。

JavaScript 内の共通ドメイン・ディレクティブを利用して、クロスドメイン・スクリプトとブラウザの制限の問題を回避するには、DAS ディレクトリを OracleAS Portal 中間層にインストールします。このようにすると、DAS を使用して値のリストを解決してから、OracleAS Portal のフォームにその値のリストを戻すことができます。この構成を実装するには、主に次の手順を実行します。

- DAS を OracleAS Portal の中間層に手動で配置して構成する
- secdaslc.sql を実行する

**DAS を OracleAS Portal の中間層に手動で配置して構成する**

1. `MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin` ディレクトリに移動します。
2. 次のコマンドを使用して新しいコンポーネントを作成します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl createcomponent -verbose -debug -ct oc4j  
-co OC4J_SECURITY
```

3. 次のコマンドを使用してコンポーネントを開始します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -verbose -debug -co OC4J_SECURITY
```

4. 次のコマンドを使用して、`oiddas.ear` ファイルを配置します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl deployApplication -debug -verbose  
-a oiddas -f ORACLE_HOME/ldap/das/oiddas.ear -co OC4J_SECURITY
```

5. 次の手順を実行して、環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` と `DISPLAY` を `opmn.xml` ファイルに追加します。

- a. `MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/conf` ディレクトリに移動し、テキスト・エディタで `opmn.xml` を開きます。
- b. `opmn.xml` の `OC4J_SECURITY` セクションに次の行を追加します。

UNIX 環境の場合

```
<environment>  
  <variable id="DISPLAY" value="localhost:0.0"/>  
  <variable id="LD_LIBRARY_PATH" value="MID_TIER_ORACLE_HOME/lib"/>  
</environment>
```

Windows 環境の場合 :

```
<environment>  
  <variable id="PATH" value="MID_TIER_ORACLE_HOME\bin"/>  
</environment>
```

ホスト名と `MID_TIER_ORACLE_HOME` を適切な値に置き換えます。 `opmn.xml` の `OC4J_SECURITY` セクション (MS Windows 環境) の例を示します。

```
<process-type id="OC4J_SECURITY" module-id="OC4J">  
  <environment>  
    <variable id="PATH" value="D:\oracle\bin"/>  
  </environment>  
  <module-data>  
    <category id="start-parameters">  
      .....  
      .....  
    </category>  
  </module-data>
```

```

<start timeout="3500" retry="2"/>
<stop timeout="120"/>
<restart timeout="720" retry="2"/>
<port id="ajp" range="3301-3400"/>
.....
.....
<process-set id="default_island" numprocs="1"/>
</process-type>

```

- c. *MID\_TIER\_ORACLE\_HOME*/dcm/bin ディレクトリに移動します。
- d. 次のコマンドを使用してリポジトリに変更を保存します。

```

MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateconfig -verbose -debug
-ct opmn

```
- e. 次のコマンドを使用して、OPMN を再起動します。

```

MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl restart -verbose -ct opmn

```
- f. 次のコマンドを使用して、OC4J\_SECURITY インスタンスを停止して開始します。

```

MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl stop -verbose -debug -ct oc4j
-co OC4J_SECURITY
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -verbose -debug -ct oc4j
-co OC4J_SECURITY

```
- g. Oracle Directory Manager を使用して、OracleAS Portal がインストールされていた Oracle Application Server インスタンスへの権限を設定および付与します。その DN エントリ (*orclApplicationCommonName=OracleAS\_instance\_name*, *cn=IAS Instances*, *cn=IAS*, *cn=Products*, *cn=OracleContext*) を、DAS アプリケーションの下に関連付けられている中間層が定義されているグループ・エントリに追加します。

これを行うには、次の手順を実行します。

  - Oracle Directory Manager を使用して、Oracle Internet Directory に接続します。
  - 次の場所から Oracle Application Server インスタンスの DN を取得します。

```

cn=IAS Instances,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext

```

---

**注意:** *cn=IAS Instances* コンテナには、複数の Oracle Application Server インスタンスが指定されている場合があります。構成する中間層を持っているものを選択する必要があります。

---

たとえば、次のようになります。

```
orclApplicationCommonName=OracleAS_instance_name,cn=IAS  
Instances,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext
```

- 前述のエントリを次のエントリの `uniquemember` 属性に追加します。

```
cn=Associated Mid-tiers,orclApplicationCommonName=DASApp,cn=DAS,  
cn=Products,cn=OracleContext
```

- 変更を適用し、Oracle Directory Manager を終了します。

- h. ブラウザに次の URL を入力して、DAS が実行されていることを確認します。

```
http://midtier_hostname:port_number/oiddas
```

`midtier_hostname` は Oracle HTTP Server が実行されているコンピュータの名前、`port_number` は対応する HTTP ポート番号です。この URL によって、DAS ホーム・ページが表示されます。

### secdaslc.sql を実行する

DAS を OracleAS Portal の中間層に手動で配置して構成したら、DAS の値リストのリンクを表示するときに、Oracle Internet Directory の DAS ベース URL 値を使用するのではなく、OracleAS Portal 中間層の URL として表示するように、OracleAS Portal を設定する必要があります。この手順は、`secdaslc.sql` を実行することによって行います。

---

---

**注意：** この手順を実行する前に、OracleAS Portal 中間層が Oracle Application Server Infrastructure ホーム・ディレクトリに適切に関連付けられている必要があります。

---

---

1. オペレーティング・システムのコマンド・プロンプトで、`MID_TIER_ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc` に移動し、現在の作業ディレクトリに設定します。
2. SQL\*Plus を使用して、PORTAL スキーマ・ユーザーとして OracleAS Portal インスタンスに接続し、次のコマンドを実行します。

```
@secdaslc.sql Y  
commit;  
exit;
```

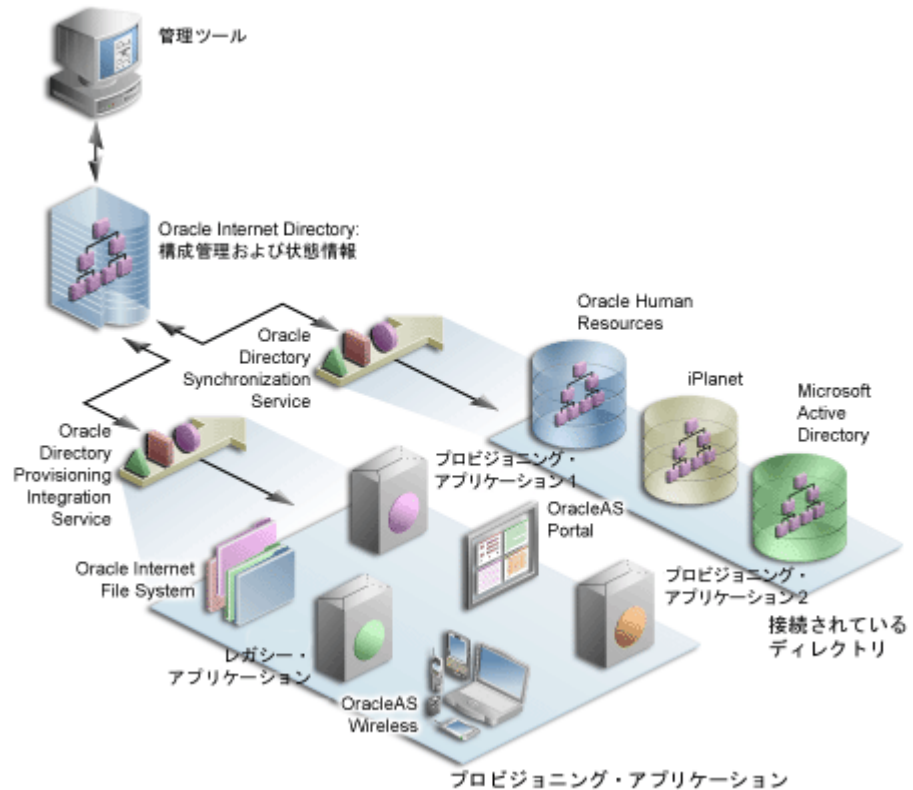
この時点で、OracleAS Portal は、OracleAS Portal 中間層から DAS の値リストを呼び出すように構成されています。他のすべての DAS 操作は、引き続き DAS のインフラストラクチャ・インスタンス上で呼び出されます。OracleAS Portal 中間層から呼び出した値リストには、クロスドメイン・スクリプトの問題は発生しません。



### 6.1.6.3 OracleAS Portal と Oracle Directory Integration Platform の関係

図 6-4 に示すように、Oracle Directory Integration Platform には、コンポーネントにユーザーやグループの変更イベントを通知して、ディレクトリを同期化するための重要なサービスがいくつかあります。

図 6-4 Oracle Directory Integration Platform の同期化



この図では、Oracle Internet Directory に対するフローに 2 つのパスがあります。最初のパスは、Oracle Directory Synchronization Service と呼ばれており、同期化の概念を示しています。この場合、Oracle Internet Directory は一部の外部ディレクトリまたはリポジトリへのゲートウェイとして機能します。同期化サービスでは、変更内容が Oracle Internet Directory とそれに接続されているディレクトリとの間で確実に調整されるようにします。いずれかのディレクトリで変更が行われるたびに、Oracle Internet Directory で通知が発行され、影響を受けるすべてのディレクトリに変更が適切に反映されるようにする必要があります。

2 番目のパスは、Oracle Directory Provisioning Integration Service と呼ばれており、プロビジョニングの概念を示しています。プロビジョニングでは、OracleAS Portal などのアプリケーションは特定のユーザーまたはグループ情報に対する変更をサブスクライブします。たとえば、管理者が DAS を使用してグループからユーザーを削除したとします。この変更の結果、そのユーザーは OracleAS Portal の特定のページにアクセスできなくなります。

Oracle Directory Integration Platform では、OracleAS Portal に、ローカル・キャッシュを更新するように通知して、ユーザーがアクセスできなくなったページにアクセスするのを速やかに防ぐ必要があります。

プロビジョニング・サービスの場合、OracleAS Portal などのコンポーネントは、ユーザーやグループ情報のローカル・キャッシュを Oracle Internet Directory の中央のユーザーやグループのリポジトリと同期化するために、プロビジョニング・イベント（グループの削除など）をサブスクライブします。変更イベントが発生すると、その変更イベントをサブスクライブするコンポーネントはすべて、Oracle Directory Integration Platform のディレクトリ同期プロビジョニング・エージェントによって通知されます。OracleAS Portal では、ディレクトリ内に Portal ディレクトリ同期サブスクリプションのフラグを設定して、サブスクライブされた変更イベントが実行されるたびに通知されるようにします。次の表 6-16 は、OracleAS Portal がサブスクライブするイベントとそれらのイベントが発生したときに実行される処理を示しています。

**表 6-16 OracleAS Portal によって処理されるディレクトリ同期イベント**

**サブスクライブされたイベント OracleAS Portal の処理**

USER DELETE	ローカルのユーザー・プロファイル・エントリが削除され、結果的にそのユーザーの権限も削除されます。このユーザーに関連付けられているページが OracleAS Web Cache で失効化されます。
USER MODIFY (orclDefaultProfileGroup)	ユーザーのデフォルト・グループがローカルのユーザー・プロファイルで変更されます。
GROUP DELETE	ローカルのグループ・プロファイルが削除され、結果的にこのグループに割り当てられている権限も削除されます。それに応じて、WWSEC_FLAT\$ 表が更新されます。
GROUP MODIFY (uniqueMember, member)	WWSEC_FLAT\$ 表が更新されて、OracleAS Portal に影響を及ぼすメンバーシップの変更が反映されます。  メンバーシップの変更に伴い、変更したグループに対してグループが追加または削除される場合は、追加または削除されたグループのユーザーに関連付けられているページが OracleAS Web Cache で失効化されます。この処理が行われるのは、セキュリティの変更がページに表示される内容やページそのもののアクセス権限に影響を及ぼすことがあるからです。

---

---

**注意：** OracleAS Portal では、ユーザーやグループの作成イベントをサブスクライブする必要はありません。新しいユーザーが初めてログインするか、新しいユーザーに初めていくつかの権限を割り当てることによって、そのユーザーが OracleAS Portal のアクセス制御リストで参照されると、ローカルのユーザー・プロファイルが自動的に作成されます。同様に、新しいグループが初めてアクセス制御リストで参照されると、ローカルのグループ・プロファイルが自動的に作成されます。

---

---

正しく機能させるには、次の要件に従って OracleAS Portal と Oracle Directory Integration Platform を統合する必要があります。

- Oracle Directory Integration Platform が動作していること。Oracle Directory Integration Platform を起動するには、oidctl コマンドを実行します。たとえば、次のようになります。

```
oidctl instance=1 server=odisrv flags="host=iasqa-ultra1.abc.com
port=4032" start
```

- サブスクリプション・プロファイルが Oracle Internet Directory 内に作成されていること。このプロファイルは通常、OracleAS Portal のインストール時に OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) によって作成されます。

**関連項目：** 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

#### 6.1.6.3.1 groupOfNames ベースのグループのサブスクリプション・プロファイルの更新

デフォルトでは、DAS によって Oracle Internet Directory 内に作成されたグループは、IETF オブジェクト・クラス groupOfUniqueNames を基にしています。ただし、現在はオブジェクト・クラス groupOfNames で作成されたグループの処理もサポートしています。Portal で、既存の Oracle Directory Integration Platform のサブスクリプション・プロファイルが Oracle Internet Directory (9.0.2 以降) に存在する場合は、groupOfUniqueNames を使用するグループに基づいてグループの変更や削除がサブスクライブされています。Oracle Internet Directory に格納されている既存のグループが groupOfNames オブジェクト・クラスを基にしている場合は、groupOfUniqueNames の他に groupOfNames を基にしたグループのイベントもサブスクライブするよう Oracle Directory Integration Platform のサブスクリプション・プロファイルを更新する必要があります。

サブスクリプション・プロファイルを変更する必要がある場合は、最初に次のコマンドを使用して古いサブスクリプション・プロファイルを削除することをお勧めします。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPUNREG
```

そして、次のコマンドを使用して新しいサブスクリプション・プロファイルを再作成します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPREG
```

古いプロファイルを削除して新しいプロファイルを起動することで変更ログに保留になっている変更が失われないように、これらの操作は停止時間または稼動していない時間帯にのみ行ってください。

Oracle Directory Integration Platform のサブスクリプション・プロファイルの作成と削除に使用する MIDTIER モードのタイプ DIPREG と DIPUNREG の詳細は、次のとおりです。

#### DIPREG

```
ptlasst.csh -i custom -mode MIDTIER -type DIPREG -s <portal_schema> -c <portal_
connect_string> -ldap_h <oid_host> -ldap_p <oid_port> -ldap_d <oid_admin_dn> -ldap_w
<oid_admin_password> -silent -verbose
```

#### DIPUNREG

```
ptlasst.csh -i custom -mode MIDTIER -type DIPUNREG -s <portal_schema> -c <portal_
connect_string> -ldap_h <oid_host> -ldap_p <oid_port> -ldap_d <oid_admin_dn> -ldap_w
<oid_admin_password> -silent -verbose
```

作成されたサブスクリプション・プロファイルは、両タイプのグループに対する変更と削除を正しくサブスクライブします。

### 6.1.6.4 OracleAS Portal と DAS の関係

OracleAS Portal では、ディレクトリに対してユーザーおよびグループ情報を問い合わせるだけでなく、ユーザーおよびグループ情報を追加および変更する方法をユーザーに提供する必要があります。ディレクトリ内の情報を変更するには、DAS を使用します。OracleAS Portal では、ユーザーやグループを追加および変更する権限を持つユーザーに対して委任管理サーバーへのリンクを提供します。

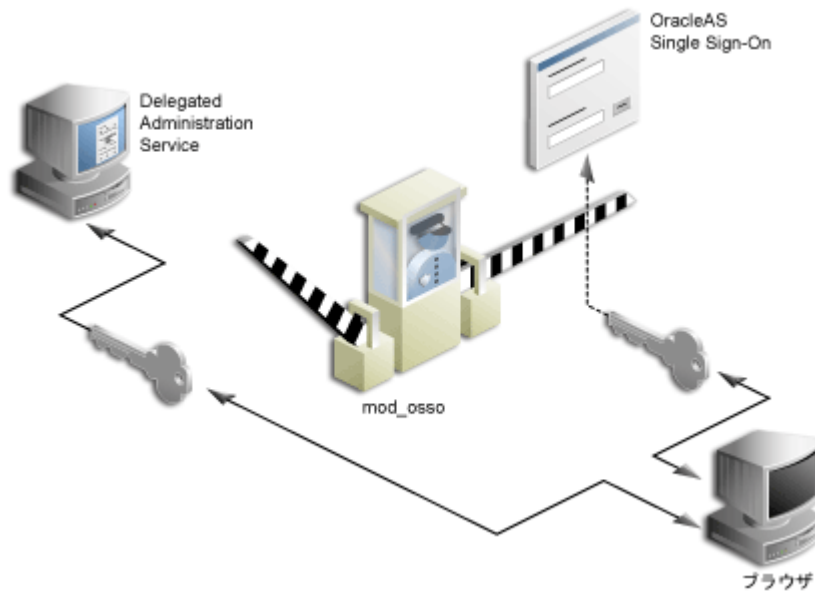
#### 6.1.6.4.1 Oracle Internet Directory に格納されている情報の作成と更新

DAS には、ディレクトリを更新するための包括的なインタフェースが用意されています。適切な権限を持っている認証されたユーザーは、OracleAS Portal の「管理」タブの「ユーザー」および「グループ」ポートレットを使用して委任管理サーバーにアクセスできます。これらのポートレットにアクセスするには、それぞれ OracleDASCreateUser および OracleDASCreateGroup グループのメンバーである必要があります。PORTAL および PORTAL\_ADMIN の各ユーザーは、デフォルトでこれらの両グループのメンバーになっています。AUTHENTICATED\_USERS もデフォルトでグループを作成できます。

#### 6.1.6.4.2 DAS、mod\_osso および OracleAS Single Sign-On の関係

mod\_osso は、HTTP サーバーを事実上パートナー・アプリケーションにすることによって、OracleAS Single Sign-On 環境の外側にある URL を保護します。DAS の機能であるシングル・サインオンは、mod\_osso を使用して OracleAS Single Sign-On セッションからユーザーの ID を取得することによって有効になります。

図 6-5 DAS、mod\_osso および OracleAS Single Sign-On の関係



mod\_osso は、Oracle HTTP Server のモジュールであり、パートナ・アプリケーションとして作成されています。mod\_osso を使用して、シングル・サインオン用のアプリケーション (OC4J アプリケーションを含む) を有効にすることができます。このためには、Oracle HTTP Server のディレクティブで mod\_osso を構成して、OC4J アプリケーションの URL へのアクセスを制限します。

DAS は、OC4J アプリケーションとして実装され、アクセスを試みるユーザーの認証は mod\_osso に依存しています。ユーザーが DAS のダイアログ (ユーザーまたはグループのリスト、「ユーザーの作成」フォームなど) にアクセスしようとする時、mod\_osso によってユーザーが認証されているかどうかを確認されます。mod\_osso では、認証を確認する以外の認可チェックは行いません。ユーザーが認証されていない場合は、mod\_osso (OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーション) によってユーザーの要求が OracleAS Single Sign-On にリダイレクトされます。OracleAS Single Sign-On では、次のいずれかを実行します。

- ユーザーが正しく認証されたことを示す Cookie を見つけ、認証済のトークンを mod\_osso に返信します。
- Cookie がまだ 1 つも作成されていない場合は、ユーザーを認証するためのログイン・ページを表示します。

正しく認証されたユーザーは、`mod_osso`によって、要求された DAS の URL にリダイレクトされます。これで、そのユーザーは DAS にアクセスできるようになり、通常は Oracle Internet Directory 内のアクセス制御項目に応じてユーザーの権限が適用されます。

## DAS の URL

OracleAS Portal のユーザー・セッションから DAS に送信された最初の要求は OracleAS Single Sign-On にリダイレクトされ、`mod_osso` がパートナー・アプリケーションとして DAS のかわりにユーザーの ID を確立します。OracleAS Single Sign-On は、要求された DAS の URL を含む URLC トークンを作成します。URLC トークンの長さは、Internet Explorer によって約 2K に制限されます。同様に、DAS の URL の長さも制限されます。OracleAS Portal は、DAS とシームレスに統合できるように、現在の Portal ページと Portal ホーム・ページの URL をこの DAS の URL 内に含めます。標準的な DAS の URL を示します。

```
http://myportal.us.abc.com:7777/oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppCreateGroupInfoAdmin?doneURL=https%3A%2F%2Fwebsvr.us.oracle.com%3A5001%2Fportal%2Fpage%3F_pageid%3D6%2C1%2C6_12%3A6_18%26_dad%3Dportal_9_0_2_6_7%26_schema%3DPORTAL_9_0_2_6_7&homeURL=https%3A%2F%2Fwebserver.us.abc.com%3A5001%2Fportal%2Fpage%3F_pageid%3D6%2C1%2C6_12%3A6_18%26_dad%3Dportal_9_0_2_6_7%26_schema%3DPORTAL_9_0_2_6_7&parentDN=cn%3Dportal_9_0_2_6_7.s901dev0.portalserver.us.abc.com%2Ccn%3Dgroups%2Cdc%3Dus%2Cdc%3Doracle%2Cdc%3Dcom&enablePA=true
```

この URL が URLC トークンに含まれている場合には、セキュリティ上の理由から暗号化されるため、トークンの長さが 2K のしきい値に達することが多くなります。この制限を超えた場合には、ブラウザにエラーが表示されることがあります。

URL のサイズは一定ではありません。ただし、DAS の操作を実行するときにブラウザ・エラーが表示される場合には、URL が 2K の制限を超えないようにするために、Portal URL の各構成部分のサイズが小さくなるように検討する必要があります。たとえば、ホスト名を 8 文字以下に制限し、DAD 名を 6 文字以下に制限します。

この問題が発生した場合には、DAS に最初にログインするときに、「サービス」ポートレットの「ディレクトリ管理」リンクなどの短い URL を使用してください。それ以降の DAS へのアクセスは、SSO へのリダイレクトが不要になるため、正常に実行されます。

### 6.1.6.5 「ユーザー」ポートレット

---

---

**注意：** OracleDASCreateUser、OracleDASEditUser または OracleDASDeleteUser 権限グループのメンバーであるユーザーのみが「ユーザー」ポートレットを表示することができます。新しいユーザーを作成するためのリンクは、OracleDASCreateUser グループのメンバーであるユーザーにのみ表示されます。

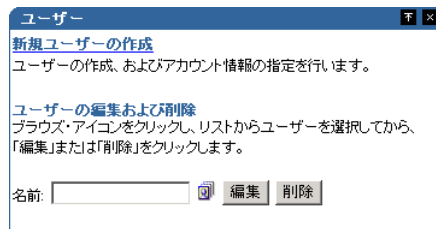
---

---

「管理」にある「Portal」タブの「ユーザー」ポートレットを使用すると、DAS を使用してユーザーを作成および更新することができます。新しいユーザーを作成するには、「ユーザー」ポートレットの「新規ユーザーの作成」リンクをクリックします。既存のユーザーの情報を更新するには、「名前」フィールドにそのユーザー名を入力するか、値リストからそれを選択して、「編集」をクリックします。ユーザーを削除するには、「名前」フィールドにそのユーザー名を入力するか、値リストからそれを選択して、「削除」をクリックします。

**関連項目：** 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

図 6-6 「ユーザー」ポートレット



### 6.1.6.6 「Portal ユーザー・プロフィール」ポートレット

---

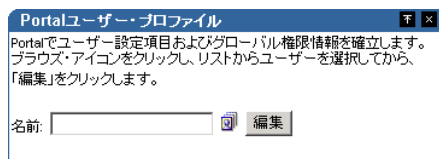
**注意：**「Portal ユーザー・プロフィール」ポートレットは、すべてのユーザー・プロフィールに対する「管理」または「編集」権限を持つユーザーのみが表示することができます。

---

特に Portal に関するグローバル・ユーザー権限や設定項目を設定する場合は、「Portal ユーザー・プロフィール」ポートレットを使用します。Portal に関するユーザーの設定項目や権限を更新するには、「名前」フィールドにそのユーザー名を入力するか、値リストからそれを選択します。ユーザーのプロフィールに対して、次のすべての設定を行うことができます。

- 設定項目
  - ユーザーが Portal にアクセスできるかどうか
  - ユーザーのデータベース・スキーマ名
  - ユーザーが個人用ページを持っているかどうか
  - ユーザーのデフォルト・ユーザー・グループ
  - ユーザーのデフォルトのホーム・ページ
  - ユーザーのデフォルト・スタイル
  - ユーザーの OracleAS Web Cache を消去するかどうか
- グローバル権限
  - ページ・グループ権限
  - Portal DB プロバイダ権限
  - 管理権限

図 6-7 「Portal ユーザー・プロフィール」ポートレット





### 6.1.6.7 「グループ」 ポートレット

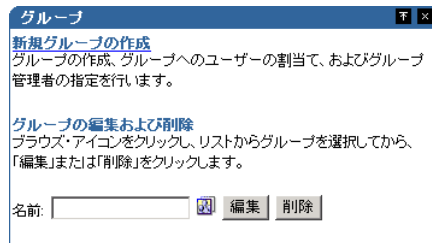
**注意：** どのユーザーも「グループ」ポートレットを表示できますが、新しいグループを作成するためのリンクは、OracleDASCreateGroup 権限グループのメンバーであるユーザーにのみ表示されます。ユーザーがグループを編集または削除できるのは、そのグループの所有者であるか、そのグループを編集または削除するための適切なアクセス制御情報（ACI）を持つグループのメンバーである場合のみです。次の権限グループは、Oracle Internet Directory に組み込まれています。

- OracleDASCreateGroup
- OracleDASEditGroup
- OracleDASDeleteGroup

「管理」にある「Portal」タブの「グループ」ポートレットを使用すると、DAS を使用してユーザー・グループを作成および更新することができます。新しいグループを作成するには、「グループ」ポートレットの「新規グループの作成」リンクをクリックします。既存のグループの情報を更新するには、「名前」フィールドにその名前を入力するか、値リストからそれを選択して、「編集」をクリックします。グループを削除するには、「名前」フィールドにそのグループ名を入力するか、値リストからそれを選択して、「削除」をクリックします。

**関連項目：** 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

図 6-8 「グループ」 ポートレット



### 6.1.6.8 「Portal グループ・プロファイル」 ポートレット

---

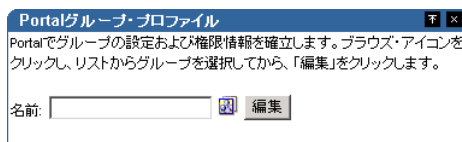
**注意：**「Portal グループ・プロファイル」ポートレットはすべてのユーザーに表示されますが、すべてのグループ・プロファイルに対する「管理」または「編集」権限を持つユーザー、またはグループの所有者のみがそのプロファイルを編集することができます。

---

特に Portal に関するグローバルなグループの設定項目や権限を設定する場合は、「Portal グループ・プロファイル」ポートレットを使用する必要があります。Portal に関するグループの設定項目や権限を更新するには、「名前」フィールドにそのグループ名を入力するか、値リストからそれを選択します。グループのプロファイルに対して、次のすべての設定を行うことができます。

- 設定項目
  - グループのデフォルトのホーム・ページ
  - グループのデフォルト・スタイル
- グローバル権限
  - ページ・グループ権限
  - Portal DB の権限
  - 管理権限

図 6-9 「Portal グループ・プロファイル」ポートレット

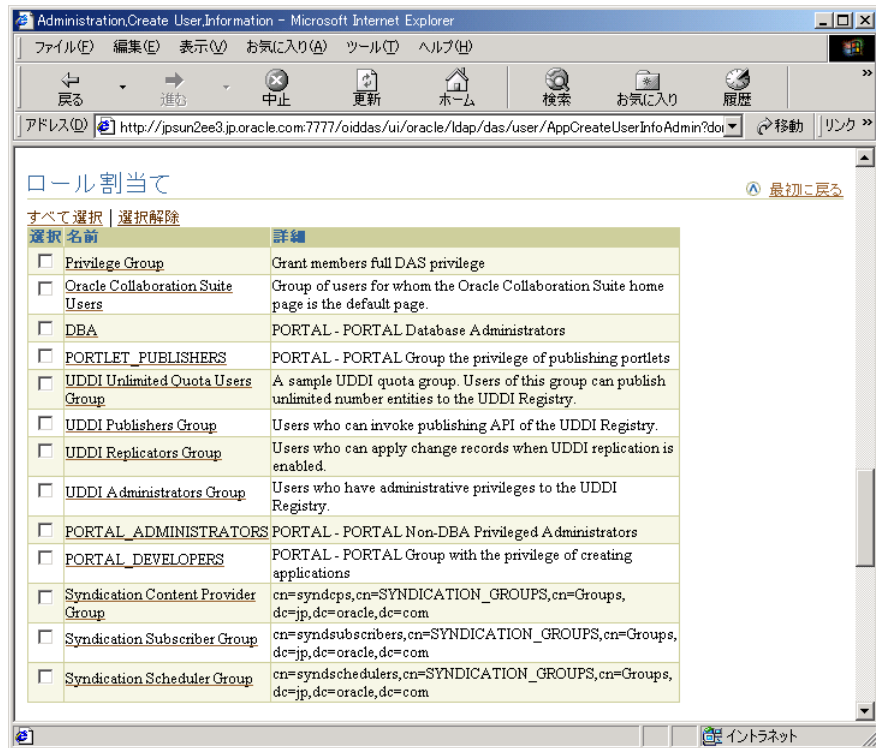


### 6.1.6.9 DAS のパブリック・ロール

通常は、ユーザーごとに詳細に権限を割り当てるよりも、DAS のロールを使用して権限を割り当てる方が効率的です。ユーザーの作成時は、「ユーザーの作成」ページの「ロール割当て」セクション（[図 6-10](#)）に注意してください。

**注意：** 9.0.4 より前のリリースでは、ロールはパブリック・グループと呼ばれていました。

図 6-10 OracleAS Portal の「ユーザーの作成」ページ



ロールには、非常に便利なメカニズムが備えられており、それによって同時に複数のユーザーを作成し、権限のセットを付与することができます。ロールのチェック・ボックスを特定のユーザーに対して選択しておく、そのユーザーには作成時に特定のロールが指定されず、管理者は、独自のロールを作成して、Oracle Internet Directory と OracleAS Portal の権限を組み合わせるそのロールに事前に割り当てることができます。

### 6.1.6.9.1 例：ユーザー管理者ロールの定義

ユーザー管理者として適切な権限を持つロールを作成するとします。このようなロールは、次の手順に従って作成できます。

#### 手順 1: グループを作成する

まず、通常の方法でグループを作成します。

1. 「Portal ビルダー」(設計時のページ)で、「管理」タブをクリックします(「管理」タブをまだクリックしていない場合)。
2. 「グループ」ポートレットの「新規グループの作成」をクリックします。次の図に示すような「グループの作成」ページが表示されます。

図 6-11 「グループの作成」ページ

The screenshot shows a web browser window titled "Create Group - Microsoft Internet Explorer". The address bar contains the URL: <http://ipsun2ee3.jp.oracle.com:7777/oiddas/ui/oracle/ldap/das/group/AppCreateGroupInfoAdmin?doneURL=>. The page content includes the "Internet Directory" logo and a blue header "グループの作成". Below the header are three tabs: "Owners", "メンバー", and "権限の割当て". There are "取消" (Cancel) and "送信" (Submit) buttons. The "基本情報" (Basic Information) section contains three required fields: "名前" (Name), "表示名" (Display Name), and "説明" (Description). Below these fields are radio buttons for "グループの可視性" (Group Visibility): "PUBLIC" (selected) and "プライベート" (Private). A checkbox is present for "グループに権限を付与します" (Grant permissions to the group). At the bottom, there is a link for "Owners" and a "最初に戻る" (Go Back) button.

3. 必須フィールド(アスタリスクで表示)を入力します。
4. 「グループの作成」ページで、「権限の割当て」をクリックしてそのセクションに移動し、次の図に示すように、次の権限を選択します。

- ユーザーの作成を許可
- ユーザーの編集を許可
- ユーザーの削除を許可

図 6-12 「グループの作成」ページの「権限の割当て」セクション



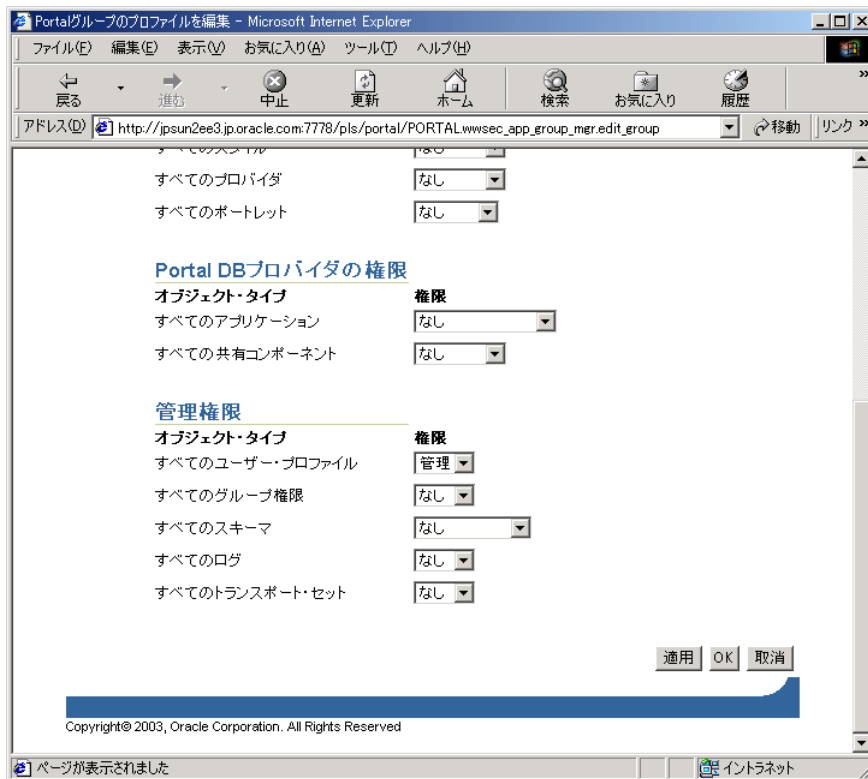
5. 「送信」をクリックします。

## 手順2: すべてのユーザー・プロファイルに対する「管理」権限を割り当てる

ユーザー管理者グループを作成したら、そのグループにすべてのユーザー・プロファイルに対する「管理」権限を割り当てる必要があります。この権限は、ユーザー管理のためにこのグループに割り当てる必要がある唯一のグローバル権限です。

1. 「Portal ビルダー」(設計時のページ)で、「管理」タブをクリックします(「管理」タブをまだクリックしていない場合)。
2. 「Portal グループ・プロファイル」ポートレットで、新しく作成したグループの名前を入力して、「編集」をクリックします。
3. 「権限」をクリックして、そのタブに移動します。
4. 次の図に示すように、「管理権限」セクションが表示されるまで下方にスクロールします。「すべてのユーザー・プロファイル」の横のリストから、「管理」を選択します。

図 6-13 グループのプロファイルの編集ページの「管理権限」セクション



5. 「OK」をクリックします。

### 手順 3: グループをロールにする

ユーザー管理者ロールを表すグループの作成が終わったので、そのグループをロールとして有効にし、「ユーザーの作成」ページのロールのリストに表示されるようにする必要があります。

1. 「Portal ビルダー」(設計時のページ) で、「管理」タブをクリックします(「管理」タブをまだクリックしていない場合)。
2. 「サービス」ポートレットで、「ディレクトリ管理」をクリックします。
3. 「構成」をクリックして、そのタブを表示します。
4. 「ユーザー・エントリ」をクリックします。
5. 次の図に示すように、ウィザードの手順 5「ロールの構成」が表示されるまで「次へ」をクリックします。
6. 「ロールの追加」をクリックして、新しいグループを選択し、それをロールのリストに追加します。

図 6-14 「ロールの構成」 ページ



- 「終了」をクリックします。これで、作成したグループが「ユーザーの作成」ページのロールのリストに表示されます。

#### 手順 4: 詳細な「権限の割当て」セクションを非表示にする

直接権限が割り当てられるのではなくロールが使用されるようにするには、「ユーザーの作成」ページの詳細な「権限の割当て」セクションを無効にします。この変更を実装するには、OracleAS Portal リポジトリ内の構成エントリを更新する必要があります。この設定によって、DAS では、OracleAS Portal の管理ページから呼び出されたときに、「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」ページに「権限の割当て」セクションが表示されなくなります。

- SQL\*Plus を介して PORTAL スキーマにログインします。



---

---

**注意：** PORTAL スキーマのパスワードは、Oracle Internet Directory に格納されています。このエントリは、管理者が「エントリ管理」にある次のパスの oidadmin ユーティリティを実行することによって表示されます。

```
OrclResourceName=PORTAL,orclReferenceName=iasdb.myhost.
au.oracle.com,cn=IAS Infrastructure
Databases,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext
```

---

---

2. 次のコマンドを実行して、das\_enable\_pa 変数を OracleAS Portal の Oracle Internet Directory 構成の環境設定ストア内に設定します。

```
$ sqlplus
...
Enter user-name: portal
Enter password:
...
SQL> set serverout on
SQL> exec wwsec_oid.set_preference_value('das_enable_pa', 'N');

PL/SQL procedure successfully completed.

SQL> commit;

Commit complete.

SQL> exit
...
```

3. 「ユーザー」ポートレットは OracleAS Web Cache だけでなく OracleAS Portal の中間層のファイル・システム・キャッシュにもキャッシュされるため、キャッシュされているポートレットを事前に失効化しておく必要があります。構成パラメータを更新すると、このポートレットの動作は変更されますが、パラメータを更新してもキャッシュは失効化されません。キャッシュされている「ユーザー」ポートレットを失効化するには、secupoid.sql を実行し、キャッシュを更新するためのオプションを指定します。

**関連項目：**『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』

## 手順 5: 変更内容を検証する

手順 1～4 を実行した後、「ユーザーの作成」ページを表示して、作成したユーザー管理者のグループがそこに表示されることを確認します。OracleAS Portal の他の管理ロールまたはグループがどのようにしてこのページの「ロール割当て」リストに事前に生成されているのか注意してください。

## 6.1.7 ポートレットのセキュリティ

ポートレットは、アプリケーションのウィンドウの役目を果たし、サマリー情報を表示したり、アプリケーションのすべての機能にアクセスする方法を提供したりします。ポートレットでは、アプリケーションの機能を Portal 内に直接公開したり、タスクを実行するためにアプリケーション自体にアクセスできる深いリンクを提供したりします。ポートレットでは情報を Web ページに表示できるように書式設定するため、基になるアプリケーションは OracleAS Portal と統合されるために Web 対応である必要はありません。

OracleAS Portal では、ポートレットはプロバイダによって管理されます。プロバイダとは、OracleAS Portal に登録されているアプリケーションのことです。OracleAS Portal では、次の 2 種類のプロバイダをサポートしています。

- Web プロバイダ
- データベース・プロバイダ

ポートレットのセキュリティは、次の 3 つの主な機能領域で構成されています。

- 認証: ユーザーがセキュリティで保護されている URL に初めてアクセスすると、そのユーザーの ID を確認する情報 (ユーザー名、パスワード、デジタル証明書など) を入力するよう要求されます。
- 認可: 認可とは、特定のユーザーがアプリケーションの一部にアクセスできるようにするプロセスのことです。アプリケーションには、誰でも自由にアクセスできる部分があれば、限られた何人かの認証済ユーザーのみがアクセスできる部分もあります。
- 通信セキュリティ: 通信セキュリティとは、OracleAS Portal がプロバイダとやり取りする通信 (メッセージなど) の認証性を確立するのに使用する方法のことです。高度にネットワーク化された環境では、通信が認証されたものであるかどうかを確認することがきわめて重要です。

Web プロバイダを確実に安全なものにするためには、これらの各領域でプロバイダが保護されていることを確認する必要があります。3 つの領域のうちの 1 つか 2 つのセキュリティ機能を実装しただけでは、プロバイダが安全であるとみなすことはできません。Web プロバイダの保護に力を注いだけ、プロバイダが公開するデータの機密性も高くなります。

### 6.1.7.1 認証

ユーザーが初めて OracleAS Portal にログインするときは、アクセスを許可される前に、ユーザーの ID を確認するためのパスワードを入力する必要があります。このログイン・プロセスは、OracleAS Single Sign-On によって管理されています。詳細は、[6.1.7.4 項「シングル・サインオン」](#)を参照してください。

### 6.1.7.2 認可

認可により、特定のユーザーがポートレットの表示または対話を行えるかどうか判断されます。認可チェックには、次の2種類があります。

- Portal のアクセス制御リスト : OracleAS Portal にログインすると、ユーザーは OracleAS Single Sign-On によって認証されます。認証されると、OracleAS Portal ではアクセス制御リスト (ACL) を使用して、ページやポートレットなどの Portal オブジェクトに対する権限をユーザーに付与します。操作の範囲は、単にオブジェクトを表示することから管理機能の実行にまで及びます。ある特定の権限が付与されているグループに属さないユーザーは、OracleAS Portal で、その権限に関連付けられている操作が実行できません。
- プログラムによるポートレットのセキュリティ : Portal Developer's Kit-Java には、特定のユーザーにポートレットの表示が認可されているかどうかを確認するためにコールされる API が含まれています。これらの API を使用して、Portal ACL のセキュリティを強化する認可ロジックを実装できます。

### 6.1.7.3 通信セキュリティ

認証と認可は、Web プロバイダを保護する重要なコンポーネントです。ただし、認証と認可ではプロバイダが受信したメッセージの認証性までは確認されないため、それだけでプロバイダへのアクセスを保護するには適していません。通信が保護されていないと、誰かが OracleAS Portal を装い、Web プロバイダをだまして機密情報を返信させる危険があります。

通信セキュリティは、OracleAS Portal と Web プロバイダとの通信を保護することに的を絞っています。これらの方法は、Portal データベースの内部で実行するデータベース・プロバイダには適用されません。通信セキュリティには、次の3つのタイプがあります。

- Portal サーバー認証では、受信メッセージが信頼できるホストから送信されたことを確認します。
- メッセージ認証では、受信メッセージが共有キーを使用してホストから送信されたことを確認します。
- メッセージの暗号化では、メッセージの内容を暗号化することによって保護します。

#### 6.1.7.3.1 Portal サーバー認証

Portal サーバー認証では、プロバイダへのアクセスを少数の認証されているマシンに制限します。この方法では、受信した HTTP メッセージの IP アドレスまたはホスト名を信頼できるホストのリストと比較します。IP アドレスまたはホスト名がリストにあれば、メッセージはプロバイダに渡されます。リストになければ、そのメッセージはプロバイダに達する前に拒否されます。

#### 6.1.7.3.2 メッセージ認証

メッセージ認証は、共有キーをベースとしたチェックサムをプロバイダのメッセージに追加することによって機能します。メッセージがプロバイダによって受信されると、予想されるチェックサムの値が計算され、その値が実際に受信された値と比較されることによって、

メッセージの認証性が確認されます。それらの値が同じであれば、メッセージは受け入れられます。それらの値が異なっていれば、メッセージは拒否されてその後の処理も行われません。チェックサムには、送信中にメッセージが不法に記録され、後で再送信される可能性を低くするためのタイムスタンプが含まれています。

### 6.1.7.3.3 メッセージの暗号化

メッセージの暗号化は、プロバイダと OracleAS Portal との通信に HTTPS プロトコルを使用することによって行われます。メッセージは強力に暗号化され、その中でデータが保護されます。暗号化は高度なセキュリティを確保できる一方で、必然的にパフォーマンスにも影響を及ぼします。

### 6.1.7.4 シングル・サインオン

ポートレットは、アプリケーションのウィンドウの役目を果たし、コンテンツのサマリーや、アプリケーションのすべての機能にアクセスする方法を表示します。ポートレットでは、アプリケーションの機能を Portal 内に直接公開したり、タスクを実行するためにアプリケーション自体にアクセスできる深いリンクを提供したりできます。

アプリケーションが機密でない（パブリックなど）場合は、ユーザーがそのアプリケーションを表示したり、そのアプリケーションやそれに関連付けられているポートレットを使用するのに認証は必要ありません。より制限のあるアプリケーションについては、それにアクセスしているユーザーを認証する必要があります。

- パートナ・アプリケーションでは、OracleAS Portal のユーザーと同じ認証ユーザーを共有しています。この場合、アプリケーションのユーザーと OracleAS Portal のユーザーは同じです。
- 外部アプリケーションでは、ユーザーの証明書に OracleAS Portal とは異なる認証メカニズムを使用し、通常は異なるリポジトリを使用します。アプリケーションのユーザー名が OracleAS Portal と同じである場合がありますが、外部アプリケーションでは独自のメカニズムによってユーザーを確認します。

#### 6.1.7.4.1 パートナ・アプリケーション

パートナ・アプリケーションでは、認証のために OracleAS Portal と同じ OracleAS Single Sign-On を共有しています。OracleAS Single Sign-On のインスタンスを共有すると、ユーザーが OracleAS Portal にすでにログインしているときは、再度ログインしなくてもその ID がパートナ・アプリケーションにアサートされることとなります。

パートナ・アプリケーションは、OracleAS Single Sign-On と密接に統合されています。ユーザーがパートナ・アプリケーションへのアクセスを試みると、パートナ・アプリケーションはそのユーザーの認証を OracleAS Single Sign-On に委任します。有効なユーザー名とパスワードによって一度認証されると、ユーザーは同じ OracleAS Single Sign-On インスタンスを共有している他のパートナ・アプリケーションにアクセスするときにユーザー名またはパスワードを入力する必要がありません。OracleAS Single Sign-On では、ユーザーが正常に認証されたことを確認し、認証が成功したことを他のパートナ・アプリケーションに示します。

パートナ・アプリケーションのプロバイダは、パートナ・アプリケーションのコンテンツを OracleAS Portal と統合するポートレットを公開します。パートナ・アプリケーションのプロバイダは、プロバイダにかわって OracleAS Portal にユーザーを認証してもらいます。この関係が可能なのは、OracleAS Portal 自体がパートナ・アプリケーションであるからです。

パートナ・アプリケーションのプロバイダは、それ自体で認証を行うことができないため、この方法で OracleAS Portal にユーザーを認証してもらう必要があります。ユーザーを直接認証するには、プロバイダがブラウザを OracleAS Single Sign-On にリダイレクトし、成功 URL と失敗 URL を提供する必要があります。この方法は、プロバイダのアーキテクチャが原因で実行できません。その主な理由は、認証が OracleAS Portal からプロバイダへの API コールを受けて行われるからです。認証に際し、OracleAS Single Sign-On で `initSession()/dologin()` メソッドを同様にコールして、通常の処理を行うことができません。

パートナ・アプリケーションでのユーザーの認証は、従来型のアプリケーションとは異なります。パートナ・アプリケーションは、ユーザー認証を OracleAS Single Sign-On に委任します。ユーザーが認証されていない場合、OracleAS Single Sign-On では、ユーザーにユーザー名とパスワードを入力するよう要求するログイン・ページが表示されます。ログイン・ページでは、ユーザー名とパスワードが OracleAS Single Sign-On に送り返されます。

認証に成功すると、OracleAS Single Sign-On ではユーザーに関する情報が含まれる特別な Cookie が作成されます。セキュリティのために、OracleAS Single Sign-On では Cookie の内容を暗号化します。Cookie は、ユーザーのブラウザに送り返されますが、OracleAS Single Sign-On のみがそれにアクセスできるように適用範囲が設定されます。Cookie は他のリスターには渡されません。Cookie の作成後、OracleAS Single Sign-On は Web ブラウザをパートナ・アプリケーションによって指定された成功 URL にリダイレクトします。この時点で、パートナ・アプリケーションによって、後でセッションを再確立するのに必要な情報が含まれるアプリケーションのセッション Cookie が作成されます。この内容は、Single Sign-On SDK を使用して暗号化されることがあります。パートナ・アプリケーションへの次の要求が作成されると、パートナ・アプリケーションのセッション Cookie の存在が検出され、それによりユーザーがすでに認証済であることが確認されます。

ユーザーが後で別のパートナ・アプリケーションにアクセスすると、そのアプリケーションはアプリケーション固有のセッション Cookie を検索します。Cookie が見つからない場合は、前に説明したように、アプリケーションは要求を OracleAS Single Sign-On にリダイレクトします。今度は、OracleAS Single Sign-On がユーザーの OracleAS Single Sign-On Cookie の存在を検出します。この Cookie はユーザーがすでに認証されていることを示しているため、OracleAS Single Sign-On では、ユーザーに証明書の再入力を要求せずに、ブラウザを 2 番目のパートナ・アプリケーションの成功 URL にリダイレクトします。この時点で、パートナ・アプリケーションでは、そのアプリケーション固有のセッション Cookie が作成されます。アプリケーションのセッション Cookie を保護するために、その内容が [Single Sign-On SDK](#) を使用して暗号化されることがあります。

## 利点

- OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On を最も密接に統合できます。
- ユーザーは OracleAS Single Sign-On を最も有効に利用できます。
- Portal とプロバイダの間でユーザー名やパスワードを送信しないため、最も安全な形式で統合を行うことができます。
- アプリケーションと Portal は同じユーザー・リポジトリを共有しているため、ユーザーの管理が軽減されます。

## 不利な点

- アプリケーションのユーザー・コミュニティが Portal のユーザー・コミュニティのサブセットである可能性があっても、アプリケーションは OracleAS Portal と同じユーザー・リポジトリを共有する必要があります。この小さな問題には、そのアプリケーションをアプリケーションのユーザー・コミュニティに公開する Portal ページへのアクセスを制限することによって対処できます。
- アプリケーションを 1 つ以上の OracleAS Single Sign-On と密接に統合できるのは、それらが同じユーザー・リポジトリを共有している場合のみです。

## 実装テクニック

次のいずれかのメカニズムを使用して、アプリケーションをパートナ・アプリケーションにします。

- **mod\_osso** は、汎用目的の Oracle HTTP Server モジュールで、OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーションです。一度構成すると、URL へのアクセスを制限し、OracleAS Single Sign-On へのリダイレクトや Cookie の作成などの処理を行います。アプリケーションの URL が mod\_osso によって保護されている場合、そのアプリケーションは事実上パートナ・アプリケーションとなります。
- **Single Sign-On SDK** は、アプリケーションがパートナ・アプリケーションになるために使用できるパッケージのグループです。これらのパッケージをコールする Java ラッパー・クラスもいくつかあるため、Java で作成されたアプリケーションからそれらをコールすることもできます。

### mod\_osso

mod\_osso は、汎用目的の Oracle HTTP Server モジュールで、OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーションです。このモジュールでは、OracleAS Single Sign-On を使用して認証を行います。このモジュールでは、Oracle HTTP Server と OracleAS Single Sign-On の間の Cookie の通信や処理をすべて行います。mod\_osso が Web アプリケーションの URL を保護するように構成されている場合、そのアプリケーションは事実上パートナ・アプリケーションとなります。

OracleAS Portal もパートナ・アプリケーションであり、OracleAS Single Sign-On を使用してユーザーを認証します。OracleAS Portal と mod\_osso が同じ OracleAS Single Sign-On イ

インスタンスを使用するという前提で、ユーザーはいずれか一方にログインすることによって、Web アプリケーションにも OracleAS Portal にもアクセスできます。つまり、一度のログインのみで、Web アプリケーションと OracleAS Portal の両方にアクセスできるようになります。

### 利点

- mod\_osso は、設定が簡単です。
- アプリケーションにコードを追加する必要がありません。
- mod\_osso は、パートナ・アプリケーションの Cookie を作成し、Cookie の処理をすべて行います。
- mod\_osso は、パートナ・アプリケーション、およびパートナ・アプリケーションのプロバイダからの深いリンクを保護します。

### 不利な点

- mod\_osso は、Web アプリケーションでしか使用できません。

### Single Sign-On SDK

Single Sign-On SDK を使用すると、プログラマはアプリケーションを OracleAS Single Sign-On と統合することができます。この SDK は、アプリケーションがユーザーの認証を行うときに OracleAS Single Sign-On と通信する多くのデータベース・パッケージで構成されます。これらのパッケージでは、アプリケーションをパートナ・アプリケーションにします。また、情報を暗号化、復号化するメソッドも含まれており、アプリケーションの Cookie に格納されている情報を保護するのに使用されます。Single Sign-On SDK には、PL/SQL パッケージに対する Java クラス・ラッパーもあり、Java アプリケーションをパートナ・アプリケーションにも外部アプリケーションにもすることができます。

OracleAS Portal はパートナ・アプリケーションであり、OracleAS Single Sign-On を使用してユーザーを認証します。OracleAS Portal と Single Sign-On SDK が同じ OracleAS Single Sign-On インスタンスを使用するように構成されているという前提で、ユーザーはいずれか一方にログインすることによって、OracleAS Portal にも Web アプリケーションにもアクセスできます。つまり、一度のログインのみで、Web アプリケーションと OracleAS Portal の両方にアクセスできるようになります。

### 利点

- Single Sign-On SDK は、パートナ・アプリケーションと外部アプリケーションのいずれも作成できます。
- Single Sign-On SDK は、Cookie を暗号化および復号化するユーティリティを提供します。

### 不利な点

- Single Sign-ON SDK のメソッドでは、アプリケーションのコードを変更する必要があります。
- Java または PL/SQL と簡単に統合できるテクノロジーを使用してアプリケーションを作成する必要があります。
- パートナ・アプリケーションの Cookie が見つからず、ユーザーを認証する必要がある場合は、保護する必要があるパートナ・アプリケーションへのすべてのエントリ・ポイントで Single Sign-On SDK をコールする必要があります。

#### 6.1.7.4.2 外部アプリケーション

外部アプリケーションとは、OracleAS Portal とは異なる認証メカニズムを使用するアプリケーションのことです。このアプリケーションでは、OracleAS Portal によって使用されるのとは異なる OracleAS Single Sign-On インスタンスを使用することも、他の認証方法を使用することもできます。どちらの場合も、OracleAS Single Sign-On では、ユーザー名のマッピング、パスワード、ユーザーの認証に必要な証明書などを各外部アプリケーションに格納します。OracleAS Portal にすでにログインしているユーザーは、ユーザー名やパスワードを入力しなくても外部アプリケーションにログインできます。

独自のユーザー認証を管理しているアプリケーションは、外部アプリケーションとして登録することにより、OracleAS Single Sign-On と柔軟に統合することができます。Oracle Application Server Portal Developer Kit (PDF) を使用して外部アプリケーションをプロバイダとして公開すれば、ページのポートレットからアクセスできます。外部アプリケーションのプロバイダは、Web プロバイダでのみ利用できます。

**関連項目：**「外部アプリケーション」ポートレットの詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

以前に認証されたユーザーが初めて外部アプリケーションにアクセスするとき、OracleAS Single Sign-On では外部アプリケーションを使用してユーザーの認証を試みます。この認証は、そのアプリケーションの登録情報、ユーザーのユーザー名とパスワードを結合する HTTP リクエストを送信することによって行われます。ユーザーがまだその外部アプリケーションのユーザー名とパスワードを登録していない場合、OracleAS Single Sign-On では認証要求を作成する前に、ユーザーに必要な情報を入力するよう要求します。ユーザーが外部アプリケーションのユーザー名とパスワードを入力すると、OracleAS Single Sign-On では新しいユーザー名とパスワードがユーザーの OracleAS Portal のユーザー名にマップされ、それらが格納されます。次回ユーザーが外部アプリケーションにアクセスする必要があるときは、格納されている証明書が使用されます。



## 利点

- 多数の Portal との統合が可能です。優先 Portal がある場合は、アプリケーションをその Portal のパートナ・アプリケーションとして統合し、他の Portal の外部アプリケーションとして統合できます。
- ユーザーはシングル・サインオンを利用することができます。ただし、ユーザーは異なるユーザー名やパスワードを管理する必要があります。さらに、外部アプリケーションのユーザー名のマッピングも管理する必要があります。
- 複数の Portal との統合を、それらのユーザー・リポジトリやシングル・サインオンのメカニズムに関係なく行うことができます。

## 不利な点

- 外部アプリケーションは、Portal と同じユーザー・リポジトリを共有しません。このため、ユーザー情報の管理がさらに必要となります。
- ユーザー名とパスワードが平文でプロバイダに送信されます。この方法は、パートナ・アプリケーションほど安全ではありません。
- Java または PL/SQL と簡単に統合できるテクノロジーを使用してアプリケーションを作成する必要があります。

### 6.1.7.4.3 アプリケーションによる認証を行わない

この場合、プロバイダは要求を送信する Portal を信頼します。プロバイダは、ユーザーがログインしているかどうかや Portal ユーザー名を確認することはできますが、アプリケーションではユーザーの認証は行いません。

## 利点

- この形式の統合は最も簡単かつ短時間で実装できます。

## 不利な点

- OracleAS Portal との統合が最も弱くなります。

### 6.1.7.5 アクセス制御リスト

OracleAS Portal にログインすると、OracleAS Single Sign-On によってユーザーの認証が行われます。次に、OracleAS Portal で、アクセス制御リスト (ACL) を使用して、ユーザーに各コンテンツ (プロバイダやポートレットなど) の表示が認可されているかどうかを確認されます。ある特定の権限が付与されているグループに属さないユーザーは、OracleAS Portal で、その権限に関連付けられている操作が実行できません。

ACL は、次のように管理されます。

- 権限は、それらが付与されているオブジェクトに対して実行できる操作を定義します。「管理」、「実行」、「アクセス」、「公開」などのいくつかの権限を付与できます。これらの権限のいずれかを設定すると、ユーザーはポートレットにアクセスできます。
- ユーザーとその権限は、ビルダーの「管理」タブにある「Portal」タブで管理されます。
- グループ内のグループ・メンバーシップとそのグループに付与されている権限は、ビルダーの「管理」タブにある「Portal」タブで管理されます。ユーザー・グループに付与されている権限は、そのグループのすべてのメンバーによって継承されます。
- プロバイダに権限を付与できます。デフォルトでは、それらの権限はプロバイダとそのプロバイダ内のすべてのポートレットに適用されます。プロバイダの ACL は、ナビゲータの「プロバイダ」タブで管理されます。
- ポートレットの権限によって、ポートレットのプロバイダに設定された権限を上書きできます。ポートレットの ACL は、ナビゲータの「プロバイダ」タブで管理されます。「プロバイダ」の「開く」をクリックすると、プロバイダのポートレットを管理するためのページが表示されます。

#### 6.1.7.5.1 利点

- ACL は、Portal オブジェクトを保護するための、簡単で、しかも非常に強力なメカニズムを備えています。
- ユーザーやグループは集中管理されているため、グループのメンバーシップの変更に伴って ACL を変更する必要はありません。

#### 6.1.7.5.2 不利な点

ACL は、プロバイダまたはポートレットのレベルで適用されます。ポートレットが置かれている Portal ページによって、ポートレットのセキュリティ・ルールを変更することはできません。

### 6.1.7.6 プログラムによるポートレットのセキュリティ

プロバイダ内部にポートレットのセキュリティ・メソッドを実装して、特定のユーザーがポートレット・インスタンスにアクセスできるかどうかを確認できます。これらのセキュリティ・メソッドは、ポートレット・レベルで機能します。つまり、各ポートレットに独自のユーザー・アクセス制御を適用することができます。プロバイダでアクセス制御メソッドを実装することにより、ユーザーの証明書が認可ロジックに通った場合にのみコンテンツがポートレットから取得されます。プロバイダでポートレットのセキュリティ・メソッドを実装しない場合は、偽名や認証されていない名前であっても、すべてのユーザー名が通ります。

プロバイダでは、次の2つのポートレットのセキュリティ・メソッドを実装できます。

- ポートレットのリストを取得する。
- ポートレットのアクセスを確認する。

これらのメソッドでは、認可レベルに関する次の情報にアクセスできます。

- 強い認証は、ユーザーが現行の OracleAS Portal セッションで OracleAS Single Sign-On によって認証されたこと、つまり有効なユーザー名とパスワードを使用して OracleAS Portal にログインし、そのセッションでポートレットをコールしたことを示します。
- 弱い認証は、ユーザーが以前に強力な認証を受けており、OracleAS Portal セッションがアクティブではないページに戻り、表示できることを示します。ユーザーのブラウザからの永続的な Cookie によって、以前のセッションでユーザーが有効なユーザー名とパスワードでログインしたことが示されます。
- パブリックは、ユーザーが現行の OracleAS Portal セッションのコンテキスト内でログインしておらず、そのような状態が以前に存在したことを示す永続的な Cookie もないことを示します。

ポートレットは、次に示す OracleAS Portal のユーザー権限やグループ・メンバーシップにもアクセスできます。

- ユーザーのデフォルト・グループ
- ユーザーまたはグループの権限
- すべてのグループで利用できる最高のユーザー権限
- ユーザーがアクセスできるオブジェクト

#### 6.1.7.6.1 利点

ポートレットのセキュリティ・メソッドを使用すると、ユーザーの認可レベルによって異なる出力をポートレットで作成することができます。

### 6.1.7.6.2 不利な点

セキュリティ・マネージャのほとんどの実装では、認可レベルまたは受信メッセージに含まれている他のなんらかのユーザー固有の要素が使用されます。この種の確認は、OracleAS Portal を装うエンティティによって無視されることがあります。

### 6.1.7.7 OracleAS Portal のサーバー認証

プロバイダへの認可されていないアクセスを回避できる方法の 1 つは、サーバー・レベルでプロバイダへのアクセスを既知のクライアント・マシンに制限することです。この方法は、サービス拒否攻撃に対する防御にある程度役に立ちます。

Oracle HTTP Server では、ホスト名または IP アドレスを基にした `httpd.conf` ファイル内のディレクティブを許可または拒否できます。識別子としてホスト名を使用すると、サーバーはドメイン・ネーム・サーバーでそれらを見つける必要があります。各要求の処理に対してオーバーヘッドが発生します。IP アドレスを使用すると、このような余分のオーバーヘッドが発生しなくて済みますが、IP アドレスは警告なしに変更される可能性があります。

#### 6.1.7.7.1 利点

- この方法では、信頼できるホストのみがプロバイダにアクセスできます。
- アクセスの制限を簡単に設定することができます。

#### 6.1.7.7.2 不利な点

- OracleAS Web Cache には IP アドレスのチェック機能がありません。プロバイダの手前に OracleAS Web Cache がある場合は、どのホストのクライアントも OracleAS Web Cache に表示要求を送信できます。
- この方法を回避するには、偽の IP アドレスとホスト名が含まれるメッセージをプロバイダに送信します。この方法は、慎重に実行する必要があります。リターン・メッセージでは、コピーされた IP アドレスをマシンに送信しますが、その IP アドレスによって引き続き問題が発生する可能性があるからです。

### 6.1.7.8 メッセージ認証

Oracle Application Server Portal Developer Kit (PDK) では、メッセージ認証をサポートして、指定されたプロバイダ・インスタンスまたはプロバイダ・インスタンスのグループへのアクセスを制限します。プロバイダは、Portal とプロバイダの管理者のみが知っている秘密共有キーに登録されます。

OracleAS Portal インスタンスでは、Hashed Message Authentication Code (HMAC) アルゴリズムを使用して計算されたデジタル署名が各メッセージとともにプロバイダに送信されます。プロバイダは、共有キーの独自のコピーで署名を確認することによって、メッセージを認証することができます。このテクニックは、プロバイダとの SSL 通信でクライアント証明書かわりに使用することができます。

OracleAS Portal インスタンスでは、ユーザー情報、共有キーおよびタイムスタンプを基にして署名が計算されます。署名とタイムスタンプは、SOAP メッセージの一部として送信されます。タイムスタンプは、UTC (協定世界時、グリニッジ標準時の学術名) を基にしているため、異なるタイム・ゾーンのコンピュータ間のメッセージに使用することができます。

プロバイダがこのメッセージを受信すると、その署名の独自のコピーを作成します。署名が合致すると、メッセージのタイムスタンプを現在の時刻と比較します。2 つの時刻の差が許容値の範囲内にある場合は、メッセージは本物とみなされ、その結果、処理されます。

1 つのプロバイダ・インスタンスで複数の共有キーをサポートすることはできません。複数のキーを使用すると、プロバイダを共有している複数のクライアントが同じキーを使用した場合にセキュリティや管理上の問題が発生する可能性があります。たとえば、共有キーのコピーの 1 つがなんらかの方法で侵害された場合、プロバイダの管理者は新しいキーを作成して、それをすべてのクライアントに配布し、クライアントはそのプロバイダ定義を更新する必要があります。この問題を回避するには、異なるプロバイダ・サービスを配置して、サービスごとに一意の共有キーを指定します。各プロバイダ・サービスには独自のデプロイ・プロパティ・ファイルがあるため、各サービスは他のサービスとは無関係に構成されます。同じプロバイダ・アダプタ内に複数のプロバイダ・サービスを配置することによるオーバーヘッドは比較的小さいものです。

プロバイダの手前に OracleAS Web Cache がない場合、プロバイダ・セッションの存続期間中に同じ署名 Cookie が使用されるということは、パフォーマンスと、要求を認証することによって得られるセキュリティの間で妥協する必要があることを意味します。署名 Cookie の値は、最初の SOAP 要求によってプロバイダとのセッションが確立された後に 1 回のみ計算されます。プロバイダ・セッションのタイムアウトが短いほど、署名が計算される頻度が多くなり、不正な表示要求に対するセキュリティが高まります。ただし、セッションの確立に必要な SOAP 要求により時間がかかります。

OracleAS Web Cache を使用して表示要求の応答をキャッシュするプロバイダでも、同様の妥協が必要です。キャッシュされたコンテンツは、受信要求に、キャッシュされたコンテンツを取得するための署名 Cookie が含まれているという点で安全ですが、長期間にわたってコンテンツをキャッシュすると、プロバイダは不正な表示要求に対して無防備になります。

署名要素では、メッセージの傍受や再送信に対する保護は行われますが、メッセージ・コンテンツの傍受や読取りを防ぐための処理は何も行われません。しかも、メッセージは平文で

送信されます。メッセージの内容が認可されていない者に読み取られるのが心配な場合は、メッセージ認証を SSL と組み合わせて使用する必要があります。

#### 6.1.7.8.1 利点

メッセージ認証では、プロバイダによって受信されたメッセージが正当な OracleAS Portal インスタンスから送信されたものであることが保証されます。

#### 6.1.7.8.2 不利な点

- プロバイダが複数の OracleAS Portal インスタンスを処理する場合は、メッセージ認証によって管理上の問題が発生する可能性があります。
- セッションのタイムアウトを短くすることでメッセージ認証のセキュリティを非常に高くした場合は、パフォーマンス上の影響があります。

### 6.1.7.9 HTTPS 通信

OracleAS Portal とプロバイダとの通常の通信には、TCP をトランスポート・レイヤーとして使用し、データを平文で送信する HTTP というネットワーク・プロトコルが使用されます。認可されていないエージェントが、傍受したメッセージを読む可能性があります。HTTPS は、TCP の上位にある特別なセキュリティ・レイヤー (SSL) を使用して、クライアントとサーバーとの通信を保護します。

SSL を使用して通信を受け入れる各エンティティ (OracleAS Web Cache インスタンスなど) は、自由に利用できる公開鍵と、エンティティのみが知っている秘密鍵を持っています。エンティティに送信されるメッセージはすべて、そのエンティティの公開鍵で暗号化されます。公開鍵で暗号化されたメッセージは、秘密鍵によってのみ復号化できるため、メッセージが傍受された場合でも復号化はできません。

証明書は通信の署名に使用され、それによって公開鍵が実際に正しいエントリに属していることが保証されます。このような証明書は、認証局 (CA) として知られる信頼できるサーブド・パーティ (Verisign 社など) によって発行されます。この証明書には、エンティティの名前、公開鍵およびその他のセキュリティ資格証明が含まれています。これは、サーバーの ID を確認するために SSL 通信のサーバー側にインストールされます。クライアントの ID を確認するためにクライアントの証明書をクライアントにインストールすることもできますが、この機能ではまだ OracleAS Portal がサポートされていません。かわりにメッセージ認証を使用できます。

Oracle Wallet Manager は、公開鍵のセキュリティ資格証明の管理に使用されるアプリケーションです。これは、公開鍵 / 秘密鍵のペアの作成、CA への証明書要求の作成およびサーバーでの証明書のインストールに使用されます。

### 6.1.7.10 SSL の構成

プロバイダを OracleAS Portal インスタンスから登録するときは、URL を 1 つのみ入力します。HTTP または HTTPS を使用できますが、両方を組み合わせての使用はできません。

SSL メッセージの受信に使用される各サーバーの各ポートには、サーバー側の証明書がインストールされている必要があります。つまり、OracleAS Web Cache インスタンス（存在する場合）が Web プロバイダとプロバイダをホストするサーバーの手前にある必要があります。サーバー・ポートにインストールされている証明書によって、2 地点間の通信が暗号化されることが保証されますが、メッセージのソースは認証されません。信頼できる OracleAS Portal インスタンスとプロバイダとの通信を完全に保護するには、メッセージ認証もあわせて使用する必要があります。

#### 関連項目：

- 6.3.2.1 項「OracleAS Portal の SSL の構成」
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』

#### 6.1.7.10.1 利点

- SSL により、ポートレットのコンテンツが暗号化されます。

#### 6.1.7.10.2 不利な点

- 暗号化は、OracleAS Portal のパフォーマンスに影響を与えます。
- 暗号化を使用する場合は、一部のコンテンツがパブリックであっても、プロバイダのすべてのポートレットで HTTPS を使用する必要があります。

Web プロバイダのセキュリティに関する詳細は、次の文書を参照してください。

- 『Overview of Provider Security』
- 『Overview of Password Authenticated Applications』

これらの文書は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) にあります。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。



## 6.1.8 「OmniPortlet」と「シンプル・パラメータ・フォーム」の保護

「OmniPortlet」と「シンプル・パラメータ・フォーム」は、ポートレット・リポジトリの「ポートレット・ビルダー」にあります。デフォルトでは、ページを作成する権限を持つユーザーであれば、これらのポートレットをページに追加したり、それらを定義したりすることができます。また、ページに対する表示権限のみを持つユーザーは、OmniPortletの定義またはシンプル・パラメータ・フォームの定義をクリックすることによって、これらのポートレットを定義できます。

この種のアクセスを制御する場合は、権限チェックをアクティブにします。次の手順を実行すると、「アクセス」タブからユーザーまたはユーザー・グループに付与された権限に応じてこれらのポートレットの表示が変わります。ポートレットに対してなんらかの操作を実行するには、ユーザーまたはユーザー・グループに少なくとも「実行」権限が必要です。

1. OracleAS Portal にログインします。
2. 「ナビゲータ」リンクをクリックします。
3. 「ポートレット・リポジトリ」ページ・グループをクリックします。
4. 「ページ」をクリックします。
5. 「ポートレット・ビルダー」ページの横の「編集」をクリックします。
6. ページの左上にあるページの「アクセス」をクリックします。
7. 「アイテム・レベルのセキュリティを有効にする」を選択します。
8. 「OK」をクリックします。
9. 「OmniPortlet」の横の「アイテムの編集」アイコンをクリックします。
10. 「アクセス」タブをクリックします。
11. 「ポートレットのアクセス権限を設定」を選択します。
12. 「適用」をクリックし、そのページの「アクセス権限の付与」および「アクセス権限の変更」セクションの表示内容を書き留めます。
13. 「アクセス権限の付与」セクションを使用して、ユーザーおよびグループに必要な権限を割り当てます。
14. 「OK」をクリックします。
15. 「シンプル・パラメータ・フォーム」についても、手順9～14を繰り返します。



## 6.1.9 Web クリッピング・プロバイダの保護

付録 I 「Web クリッピングの管理」では、Web クリッピング・プロバイダを使用する前に実行する必要がある管理タスクについて説明します。次の項では、Web クリッピング・プロバイダによって信頼できるサイトにアクセスし、それ自体とデータベース間のチャンネルを暗号化できるようにするために必要ないくつかのセキュリティ構成オプションについて説明します。

- 信頼できるサイトの証明書の追加
- Web クリッピング・プロバイダの Oracle Advanced Security の構成

### 6.1.9.1 信頼できるサイトの証明書の追加

ユーザーが安全なサイトへ移動した場合、保護情報を求めると、その Web サイトは、通常、自身の身元を示す証明書をユーザーに返します。ユーザーが証明書を受け取ると、その証明書はブラウザの信頼できる証明書のリスト内に置かれるので、ブラウザとそのサーバーとの間で安全なチャンネルを開くことができます。Web ブラウザと同様に、Web クリッピング・プロバイダは外部 Web サイトに対して HTTP クライアントとして機能します。Web クリッピング・プロバイダが信頼できるサイトを追跡できるように、このようなサイトの証明書を格納するファイル (ca-bundle.crt) が使用されます。

出荷される ca-bundle.txt は、Oracle Wallet Manager からの信頼できるサーバー証明書ファイルをエクスポートしたものです。Oracle Wallet Manager 内のデフォルトの信頼できるサーバー証明書は、Web 上に存在するすべてのサーバー証明書を網羅するものではありません。このため、ユーザーが HTTPS を使用して安全なサーバーに移動しているときに、Web クリッピング・スタジオ内で、SSL のハンド・シェイク・フォームに失敗したという例外が発生することがあります。この問題を解決するには、参照された新しい信頼できるサイトを使用して ca-bundle.crt ファイルを拡張する必要があります。Portal 管理者として、次の手順に従って、出荷された ca-bundle.crt ファイルを拡張する必要があります。

1. ブラウザ (Internet Explorer を推奨) を使用して、参照できても信頼できる証明書ファイルにない外部の各 HTTPS Web サイトから、BASE64 形式でルート・サーバーの証明書をダウンロードします。
2. Oracle Wallet Manager を使用して、各証明書をインポートします。
3. 信頼できるサーバー証明書をファイルにエクスポートして、ca-bundle.crt ファイルをそのファイルで置き換えます。

Oracle Wallet Manager の詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com>) の Oracle9i リリース 2 (9.2) ドキュメント・セクションにある『Oracle Advanced Security Administrator's Guide』の第 17 章「Using Oracle Wallet Manager」を参照してください。



### 6.1.9.2 Web クリップング・プロバイダの Oracle Advanced Security の構成

Web クリップング・プロバイダでは、中間層のプロバイダ自身と Web クリップング・リポジトリのホストであるデータベース間のチャネルを保護し暗号化する、Oracle Advanced Security Option (ASO) を使用することができます。ASO は Oracle Application Server Enterprise Edition で、または Standard Edition への追加オプションとしてのみ利用できる機能なので、デフォルトでは、この機能は無効になっています。この機能を有効にするには、次の場所にある Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページに移動する必要があります。

`http://<host>:<port>/portalTools/webClipping/providers/webClipping`

「プロバイダ構成」セクションの「設定」列の下に、「Web クリップング・リポジトリ」フィールドがあります。「操作」列内の対応する「編集」リンクをクリックします。プロバイダの編集: Web クリップング・ページの「リポジトリ設定」セクションで、「詳細セキュリティ・オプション」フィールド内の有効 (保護されたデータベース接続) オプションを選択します。次に「OK」をクリックして設定を保存し、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページに戻ります。

さらに、`sqlnet.ora` ファイル内に次の ASO 構成パラメータを設定して、Web クリップング・プロバイダと、Web クリップング・リポジトリのホストとして動作するデータベース間で確立されるデータベース接続で ASO が使用されるようにします。使用する値リストについては、『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』を参照してください。考えられるすべてのパラメータの組合せについて詳しく説明しています。

- `SQLNET.AUTHENTICATION_SERVICES`: このパラメータは、ASO とのデータベース接続を行う際にサポートされている認証方法を選択するのに使用します。このパラメータの設定の詳細は、『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』を参照してください。
- `SQLNET.CRYPTO_SEED`: このパラメータは、暗号化シード値 (FIPS 140-1 設定) を指し、ASO とのデータベース接続を行う際に使用します。

このパラメータの設定の詳細は、『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』を参照してください。

---

---

**注意:** 最初の構成、つまりデータベース・パラメータがすでに設定されている状態の後にこれらのパラメータを設定する場合は、データベース接続がすでに開いているとみなされます。ASO を有効にすると、データベースへのすべての接続が影響を受けるため、ASO を使用する場合は、Web クリップング・プロバイダが含まれている OC4J インスタンスを再起動して、現在のすべての接続をリセットすることをお勧めします。ASO を無効にするときも、この作業が必要です。

---

---

## 6.1.10 連携型 Portal アダプタの保護

連携型 Portal アダプタは、OracleAS Portal のコンポーネントで、Portal インスタンスが Web ポートレット・インタフェースを介してポートレットを共有できるようにするために使用します。たとえば、ユーザーがある Portal インスタンスで、ソースが別の Portal インスタンスに存在するポートレットを含むページを表示するとします。リモート Portal の連携型 Portal アダプタがポートレットの要求を受信すると、リモート Portal でそのユーザーのセッションが開始されます。これで、ポートレットがユーザーによってリモート Portal インスタンスから実行できるようになります。このシナリオには、セキュリティ上、次の 2 つの意味があります。

- 連携型 Portal アダプタは、リモート Portal でそのユーザーのセッションを作成する必要があるため、2 つの Portal インスタンスが同じ **Single Sign-On Server** を共有するのが最善の方法です。そうしない場合、連携型 Portal アダプタがユーザーをリモート Portal インスタンスにログインさせようとしたときに名前の重複が起こる可能性があります。
- 連携型 Portal アダプタは、受信した SOAP メッセージを基にしてプライベート Portal セッションを作成するため、セキュリティ上のリスクとなる可能性があります。メッセージ認証コードを使用して、連携型 Portal アダプタによって受信されたメッセージが信頼できるソースから送信されたものであることを確認する必要があります。

**関連項目：** 第 12 章「連携型 Portal アダプタの使用」



詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「How to Add Remote Portlets Using the Federated Portal Adapter」を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

## 6.1.11 OraDAV の保護

WebDAV (World Wide Web Distributed Authoring and Versioning) は、Web 上でコラボレーションでオーサリングを行うための IETF の標準です。WebDAV では、インターネット上で互いに離れた位置にいるユーザー間で共同で編集やファイル管理を行うのに役立つ HTTP の拡張のセットを定義しています。

OraDAV (WebDAV を Oracle に実装したもの) は、Oracle HTTP Server が WebDAV のクライアントと通信するのに使用するメカニズムです。OraDAV を使用すると、ユーザーはその WebDAV クライアントを使用して OracleAS Portal に接続できます。セキュリティについては、WebDAV を介して OracleAS Portal にアクセスする場合は、次の 2 つのセキュリティ問題を考慮する必要があります。

- OraDAV の OracleAS Portal セッション Cookie の有効期限
- SSL と OraDAV

### 6.1.11.1 セッション Cookie の有効期限

OraDAV の構成パラメータ、ORACookieMaxAge は、DAV クライアントが Cookie を保持する時間を秒単位で指定します。デフォルト値は、28800 (8 時間) です。

ORACookieMaxAge は、Oracle Enterprise Manager で変更することも、`MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/oradav/conf` にある `oradav.conf` ファイルで直接編集することもできます。このファイルを手動で変更する場合は、その変更を動的構成管理と同期化する必要があります。構成ファイルを変更したら、Oracle HTTP Server を再起動して、変更を実行時システムに反映させる必要があります。

```
cd MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin
./dcmctl shell
- dcmctl> updateConfig -ct ohs
```

dcmctl シェルを終了した後は、`MID_TIER_ORACLE_HOME\opmn\bin` から次のコマンドを実行して、Oracle HTTP Server を再起動します。

```
opmnctl restartproc type=ohs
```

---

**注意：** すべての WebDAV クライアントが Cookie を使用するわけではありません。HTTP Basic 認証を使用して各要求に対する認証を行うクライアントもあります。クライアントでは、WebDAV クライアント・セッションの接続期間中、ユーザー名とパスワードを記録するように選択できるため、ユーザーに対して証明書の入力を 1 度要求するだけで済みます。ただし、どちらの場合も、この動作によって OracleAS Portal からの応答時間が長くなります。これは、そのようなクライアントからの要求はすべて認証する必要があるため、Oracle Internet Directory との通信が余分に必要となるからです。

---

関連項目：『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

### 6.1.11.2 SSL と OraDAV

SSLを使用した OraDAVによる OracleAS Portal へのアクセスは、Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2) では認定されていません。リリース 2 (9.0.4) では、SSL アクセスが認定されています。

## 6.2 OracleAS Portal の OracleAS Security Framework の構成

この項では、次の考慮事項について説明します。

- [OracleAS Portal の OracleAS Security Framework オプションの構成](#)
- [OracleAS Portal の Oracle Identity Management オプションの構成](#)

### 6.2.1 OracleAS Portal の OracleAS Security Framework オプションの構成

OracleAS Security Framework の構成時における OracleAS Portal での主な考慮事項は、SSL を正しく構成する方法です。OracleAS Portal での SSL の構成の詳細は、[6.3.2.1 項「OracleAS Portal の SSL の構成」](#)を参照してください。

### 6.2.2 OracleAS Portal の Oracle Identity Management オプションの構成

OracleAS Portal のセキュリティを構成するときは、Oracle Identity Management に関連する次のトピックについて考慮する必要があります。

- [適切な命名属性とニックネーム属性の設定](#)
- [Single Sign-On 管理の Portal 管理者の構成](#)

#### 6.2.2.1 適切な命名属性とニックネーム属性の設定

Oracle Identity Management Infrastructure のディレクトリ情報ツリー構造と Oracle Context パラメータの設定を決めるときは、命名属性とニックネーム属性を異なる値にするように考慮する必要があります。命名属性は、エントリの識別名の最初の属性として使用されます。対照的に、ニックネーム属性は OracleAS Single Sign-On のユーザー名を保持します。

OracleAS Portal で、Oracle Internet Directory 内のニックネーム属性の値を変更することによってユーザーの名前を正しく変更されるようにするには、ニックネーム属性が命名属性と異なっている必要があります。この 2 つを分けておくことにより、Oracle Internet Directory 内のユーザーのエントリの識別名は、ニックネーム属性の値が変わっても変更されません。

関連項目：『Oracle Identity Management 概要および配置プランニング・ガイド』

### 6.2.2.2 Single Sign-On 管理の Portal 管理者の構成

以前のリリースの OracleAS Portal では、スーパー・ユーザー（PORTAL）は OracleAS Single Sign-On の管理を行うことができました。OracleAS Portal リリース 9.0.4 では、OracleAS Single Sign-On のアウト・オブ・ボックスの管理機能を実行する権限は削除されています。この変更の理由は、エンタープライズ設定では OracleAS Portal の管理者が Oracle Internet Directory や OracleAS Single Sign-On の管理を行う権限を持つことが必ずしも適切であるとは限らないからです。前の項で説明したように、集中型 Oracle Identity Management Infrastructure の管理者と部門別の OracleAS Portal の管理者のロールについて言えば、OracleAS Portal の管理者が OracleAS Single Sign-On の管理を行う権限を持つことが適切でない場合があります。

OracleAS Portal アカウントで OracleAS Single Sign-On の管理を行えるようにする場合は、そのユーザーにその権限を明示的に付与する必要があります。この手順は、認証管理レームごとに実行することも、ルートの Oracle Context レベルで実行することもできます。

#### 関連項目：

- 『Oracle Identity Management 概要および配置プランニング・ガイド』
- 『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』

## 6.3 OracleAS Portal のセキュリティの構成

この項では、OracleAS Portal の構成上の考慮事項について説明します。

- [OracleAS Portal のセキュリティ・オプションの構成](#)
- [OracleAS Security Framework のオプションの構成](#)
- [データベースのセキュリティのための OracleAS Portal オプションの構成](#)

### 6.3.1 OracleAS Portal のセキュリティ・オプションの構成

OracleAS Portal をインストールすると、インストール・プロセスによって、知っておく必要のあるデフォルトのスキーマがいくつかインストールされます。

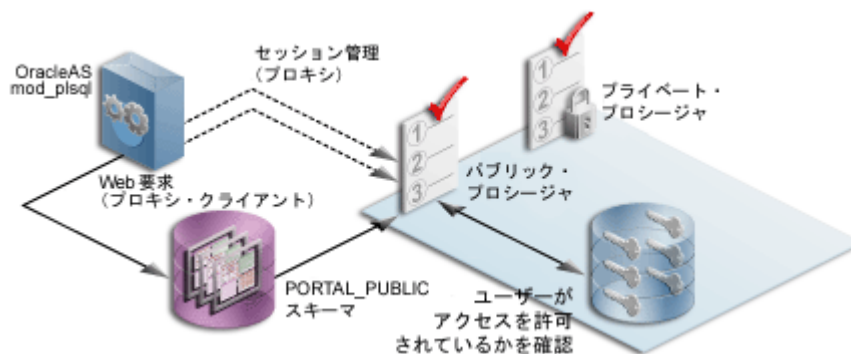
#### OracleAS Portal のデフォルト・スキーマ

表 6-17 で、OracleAS Portal のインストール時にデフォルトで作成されるスキーマについて説明します。

表 6-17 OracleAS Portal のデフォルト・スキーマ

スキーマ	Description
PORTAL	<p>OracleAS Portal のデータベース・オブジェクトとコードを含んでいます。このスキーマは、<code>mod_plsql</code> が、対応する DAD で提供される証明書を通じてデータベースに接続するのに使用されるプロキシ・ユーザー・アカウントも表しています。</p> <p>Web で要求されたプロシージャを実行するために、<code>mod_plsql</code> は N 層認証を使用して軽量ユーザー・アカウントが割り当てられているスキーマ（デフォルトでは <code>PORTAL_PUBLIC</code>）に接続します。図 6-15 に示すように、Portal ユーザーのデータベースへのアクセスは、単一のスキーマ・ユーザーを介して行われます。デフォルトでは、このエントリには <code>portal.iasdb.hostdomain.com</code> のような名前が付けられます。</p> <p>OracleAS Portal の標準インストールにおけるこのスキーマのデフォルト名は、<code>PORTAL</code> です。これに別の名前を付ける場合は、カスタム・インストールを実行する必要があります。</p>
PORTAL_PUBLIC	<p>すべての軽量ユーザーがデフォルトでマップされるスキーマです。Web 経由でパブリックにアクセスできるすべてのプロシージャを実行する権限が <code>PUBLIC</code> に付与されます。これにより、これらのプロシージャがこのスキーマを介してアクセスできるようになります。</p> <p>OracleAS Portal の標準インストールでは、このスキーマには <code>PORTAL_PUBLIC</code> という名前が付けられます。これに別の名前を付ける場合は、カスタム・インストールを実行する必要があります。</p>
PORTAL_DEMO	<p>デモ・コードを保持するために作成されます。このスキーマのインストールはオプションです。</p>
PORTAL_APP	<p>外部 JSP アプリケーションの認証に使用されます。</p>

図 6-15 ユーザー・プロキシによる N 層認証



関連項目：『Oracle Application Server 10g mod\_plsql ユーザーズ・ガイド』

### 6.3.2 OracleAS Security Framework のオプションの構成

OracleAS Portal を構成するときは、OracleAS Security Framework を利用する次のオプションを考慮する必要があります。

- [OracleAS Portal の SSL の構成](#)
- [Oracle Internet Directory への接続の保護 \(オプション\)](#)
- [「グローバル設定」ページの設定の変更](#)
- [インストール後のセキュリティのチェックリスト](#)



### 6.3.2.1 OracleAS Portal の SSL の構成

以下の項では、OracleAS Portal の最も一般的な SSL 構成の概要と、それらを実装するために必要な手順について説明します。

- [SSL の構成の概要](#)
- [OracleAS Single Sign-On との SSL 接続](#)
- [OracleAS Web Cache との SSL 接続](#)
- [OracleAS Portal 全体にわたる SSL](#)
- [Oracle Application Server 内での非 SSL による外部 SSL](#)

#### 6.3.2.1.1 SSL の構成の概要

OracleAS Portal では、多くの様々なコンポーネント（Parallel Page Engine、Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache など）を使用しますが、それらの各コンポーネントは HTTP 通信でクライアントまたはサーバーの役目を果たすことがあります。このため、OracleAS Portal の中間層にある各コンポーネントを、HTTP ではなく HTTPS のプロトコルに対して個別に構成する必要があります。

OracleAS Portal との対話には、個別のネットワーク・ホップがいくつか必要です。次のとおりです。

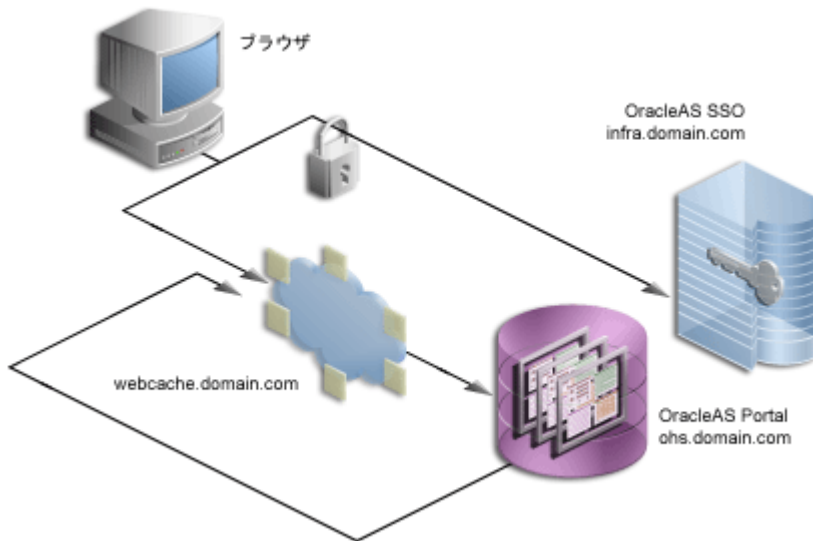
- クライアント・ブラウザと OracleAS Web Cache の間
- OracleAS Web Cache と Oracle HTTP Server の間
- クライアント・ブラウザと、OracleAS Single Sign-On/Oracle Internet Directory（またはインフラストラクチャ）層の Oracle HTTP Server の間
- 中間層の Parallel Page Engine（PPE）と OracleAS Web Cache またはフロントエンドの逆プロキシの間のループバック
- OracleAS Portal インフラストラクチャと Oracle Internet Directory の間

### SSL 使用上の制限

部分的 SSL 構成モードのときは、内部 JSP と外部 JSP は Parallel Page Engine と一緒に使用できません。これらは、OracleAS Portal 全体で SSL を使用している場合またはロード・バランス・ルーターを使用して外部的に SSL を実装している場合に使用できます。JSP を使用するときは、[6.3.2.1.2 項「OracleAS Single Sign-On との SSL 接続」](#)、[6.3.2.1.4 項「OracleAS Portal 全体にわたる SSL」](#) および [6.3.2.1.5 項「Oracle Application Server 内での非 SSL による外部 SSL」](#) で説明する SSL 構成を使用する必要があります。

## 6.3.2.1.2 OracleAS Single Sign-On との SSL 接続

図 6-16 OracleAS Single Sign-On との保護された接続 OracleAS Single Sign-On



接続を SSL で保護する必要があるとすれば、それはブラウザと OracleAS Single Sign-On の間の接続です。ブラウザと OracleAS Single Sign-On の間での送信中は、SSL によってパスワードが保護される必要があります。最低レベルのセキュリティでも、このオプションを使用してインストールを構成する必要があります。この後のすべての SSL の構成では、SSL が OracleAS Single Sign-On に対応するように構成されているものとします。

このオプションを構成するときには、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 9 章「拡張構成」の SSL の有効化に関する項を参照してください。逆プロキシ・サーバーの背後に OracleAS Single Sign-On を構成する場合は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 9 章「拡張構成」のプロキシ・サーバーを使用する OracleAS Single Sign-On の配置に関する項を参照してください。

---

**注意：** 前述の SSL 構成では、OracleAS Single Sign-On 中間層パートナー・アプリケーションを再登録する必要があります。この OracleAS Single Sign-On 中間層パートナー・アプリケーションはまだ非 SSL なので、非 SSL として登録する必要があります。つまり、`mod_osso` を再登録するときには、`ossoreg.jar` の `mod_osso_url` パラメータとして OracleAS Single Sign-On 中間層の非 SSL URL を指定する必要があります。

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章「`mod_osso` の登録」を参照してください。

---

『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の手順に従って OracleAS Single Sign-On 上で SSL を有効にしたら、次の OracleAS Portal の構成作業を完了する必要があります。

## OracleAS Portal パートナ・アプリケーションの再登録

OracleAS Single Sign-On 上で SSL を有効にしたら、これ以降に認証を要求したときに各パートナ・アプリケーションが更新済の SSL ログイン URL を取得できるように、すべての OracleAS Single Sign-On パートナ・アプリケーションを再登録する必要があります。

OracleAS Portal パートナ・アプリケーションを再登録するには、OracleAS Portal 中間層上で `ptlasst.csh` を使用して OPCA を起動します。MS Windows の場合は、`ptlasst.bat` を使用します。

たとえば、次のようになります。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -i typical -mode MIDTIER -type SSO  
-host portal_site_name -port portal_site_port
```

各項目の説明

`portal_site_name` は、Portal 中間層の `hostname.domain` です。

`portal_site_port` は、ブラウザに指定されている OracleAS Web Cache のリスニング・ポートまたは逆プロキシのリスニング・ポートです。

---

**注意：** OracleAS Portal に複数の仮想ホストを構成している場合は、前述のコマンドを使用して各仮想ホストを個別に再登録する必要があります。  
`portal_site_name` は、仮想ホストごとに置き換えてください。

---

## OracleAS Single Sign-On の問合せパスの URL の設定

OracleAS Portal では、UTL\_HTTP パッケージを使用して、データベースから HTTP コールを介して特定の情報にアクセスするための OracleAS Single Sign-On の URL 接頭辞を管理しています。これらのコールは、HTTPS ではなく HTTP を介して行う必要があります。このため、OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On が HTTPS を使用するように構成されても、これらのインタフェースをサポートするために OracleAS Single Sign-On の HTTP ポートにもアクセスする必要があります。このインタフェースを介して行われるコールは、次の理由で欠かすことができません。

- 外部アプリケーションのリストを取得して、「外部アプリケーション」ポートレットのカスタマイズができるようにします。
- OracleAS Single Sign-On のユーザー名を外部アプリケーションのユーザー名にマップします。

この URL 接頭辞（OracleAS Single Sign-On の問合せパスの URL）を設定するには、次の手順を実行します。

1. Portal 管理者として OracleAS Portal にログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「Portal」タブをクリックします。
4. 「サービス」ポートレットの「グローバル設定」をクリックします。
5. 「SSO/OID」タブをクリックします。
6. 「SSO Server 設定」の「問合せパスの URL 接頭辞」を編集します。たとえば、次のような OracleAS Single Sign-On の URL を入力します。

```
http://infra.domain.com:7777/pls/orasso
```

## Oracle Internet Directory 内の DAS URL ベース・エントリの条件に応じた更新

インフラストラクチャ層の Oracle HTTP Server の SSL を有効にしたら、インフラストラクチャ層の `mod_osso` を含むすべてのパートナー・アプリケーションを再登録する必要があります。DAS にアクセスするときに、非 SSL モードまたは SSL モードを選択できます。DAS のベース URL は、Oracle Internet Directory に格納されます。このベース URL を基にして、他のアプリケーションから DAS 機能に接続するときに表示される URL が決まります。

SSL モードで DAS にアクセスする場合は、`mod_osso` を再登録するときに、`ossoreg.jar` の `mod_osso_url` パラメータとして SSL URL を指定する必要があります。詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章「`mod_osso` の登録」を参照してください。

SSL モードで DAS にアクセスする場合は、その設定を行うために、Oracle Internet Directory 内の `cn=OracleContext,cn=Products,cn=DAS,cn=OperationURLs` エントリの `orcldasurlbase` 属性を更新する必要があります。この属性値は、OracleAS Portal によって、後続の DAS の URL の生成に使用されます。この手順は、インフラストラクチャ層の Oracle HTTP Server も HTTPS ポートでリスニングしていることを前提とします。

1. この手順では、Oracle Directory Manager（統合管理ツール：Windows の場合は Oracle Directory Manager、UNIX の場合は `INFRA_ORACLE_HOME/bin/oidadmin`）を使用する必要があります。Oracle Directory Manager を実行し、`cn=orcladmin` としてログインします。
2. 「エントリ管理」で `cn=OracleContext>cn=Products>cn=DAS>cn=OperationURLs` へ移動します。
3. `orcldasurlbase` エントリを更新して、HTTPS ポート（`https://infrahost:port`）がインフラストラクチャ層で使われるように反映させます。

Oracle Internet Directory でエントリを更新したら、OracleAS Portal キャッシュを更新する必要があります。ここには、関連する Oracle Internet Directory 情報が保管されています。

1. 管理者権限を持つユーザーとして OracleAS Portal にログインします。
2. 「ビルダー」に移動します。
3. 「管理」タブをクリックします。
4. 「Portal」タブから、「グローバル設定」を開き、「SSO/OID」タブに移動します。
5. ページの一番下までスクロールします。
6. 「OID パラメータ用キャッシュの更新」を選択します。
7. 「適用」をクリックします。
8. 「DAS ホスト名」フィールドの適切な値でページが更新されます。

### Oracle HTTP Server パートナ・アプリケーションの再登録

次に、パートナ・アプリケーションとして OracleAS Single Sign-On を構成することにより、保護された要求を登録する必要があります。スクリプト `ossoreg` を使用すると、この登録を行うことができます。`ossoreg` は、中間層の `MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib` にあります。

1. `ossoreg` を実行できるように環境が次のように正しく構成されていることを確認します。

```
ORACLE_HOME=MID_TIER_ORACLE_HOME
LD_LIBRARY_PATH=ORACLE_HOME/lib
```

2. `ossoreg` を実行します。次の例は、`ossoreg` の使用方法を示しています。

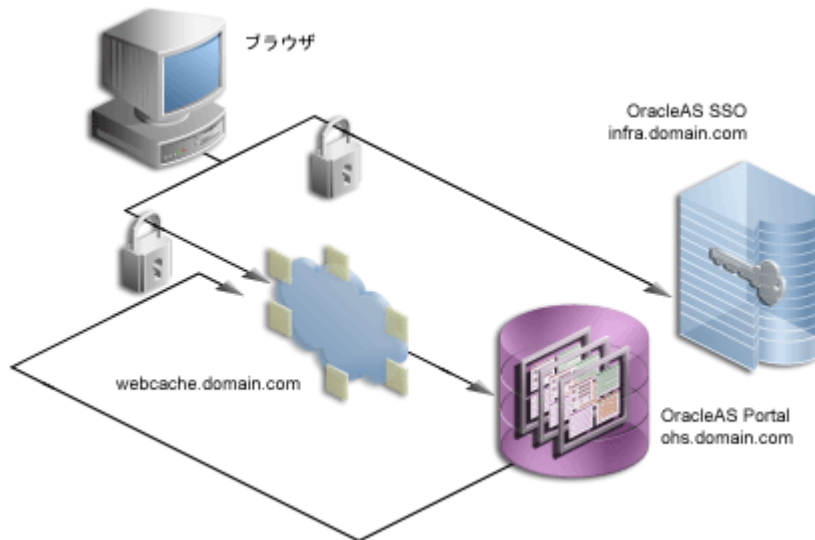
```
MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name abc.com -mod_osso_url
http://www.abc.com:7777 -config_mod_osso TRUE -oracle_home_path
MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf
-admin_info cn=orcladmin
```

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第4章の「mod\_osso の登録」を参照してください。

OracleAS Single Sign-On との SSL 通信の構成が完了しました。

### 6.3.2.1.3 OracleAS Web Cache との SSL 接続

図 6-17 OracleAS Web Cache との保護された接続



OracleAS Single Sign-On の通信を保護したら、次に OracleAS Portal の玄関口に相当する OracleAS Web Cache との通信を保護します。この構成では、OracleAS Web Cache は、パフォーマンスを向上させるために、HTTP を使用して要求を Oracle HTTP Server (OracleAS Portal の中間層の役目を果たす) に転送できます。同様に、OracleAS Web Cache にループバックされるポートレット・コンテンツに対する Parallel Page Engine の要求でも、HTTP を使用してコンテンツを要求できます。

## Wallet の作成

OracleAS Portal の各種コンポーネントでは、Oracle Wallet Manager を使用して安全な通信のための証明書を格納しています。このプロセスの最初の手順は、認証局 (Verisign 社、GTE CyberTrust 社など) から証明書を取得することです。

## 証明書の取得

適切な署名機関からデジタル証明書を取得するために、サーバーを一意に識別する証明書要求 (CR) を署名機関に送信します。

1. 中間層の `MID_TIER_ORACLE_HOME` にある Oracle Wallet Manager を開きます。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトから「owm」と入力します。Windows の場合は、「スタート」メニューから「Oracle Wallet Manager」を起動します。
2. 「Wallet」 > 「新規作成」を選択します。

UNIX の場合、Wallet はデフォルトで次の場所に格納されます。

```
/etc/ORACLE/WALLETS/<Account Name creating the Wallet>
```

MS Windows の場合、Wallet はデフォルトで次の場所に格納されます。

```
¥Documents And Settings¥<Account Name creating the Wallet>¥ORACLE¥WALLETS
```

3. Wallet のパスワードを作成します。
4. 「はい」をクリックして、CR を作成するオプションを受け入れます。
5. 「証明書要求」ダイアログ（次の図）にサーバーを一意に識別するための詳細を入力します。共通名の値としてサーバー名（www.abc.com など）を入力します。

図 6-18 「証明書要求」ダイアログ

6. 「OK」をクリックします。証明書要求が正常に作成されたことが通知されます。Wallet ナビゲータの「証明書」ノードが「要求済み」に変わります。
7. この Wallet を次のように、適切なディレクトリに保存します。  

```
MID_TIER_ORACLE_HOME\webcache\wallets\portalssl
```
8. 選択した認証局（CA）に CR を送信します。

### 切取りと貼付け

CA によっては、証明書要求を切り取って Web ページに貼り付けたり、引き続きサイトにアップロードできるように CR をファイルにエクスポートしたりすることが必要な場合もあります。

1. Wallet ナビゲータの「証明書」ノードを選択します。

2. 「証明書要求」フィールドの証明書のテキストを強調表示します。BEGIN/END NEW CERTIFICATE REQUEST 行が含まれていることを確認してください。
3. CA の Web サイトにある「証明書要求」フィールドにコピーして貼り付けます。

### 証明書要求のエクスポート

証明書要求をエクスポートするには、次の手順を実行します。

1. 「操作」>「証明書要求のエクスポート」を選択します。
2. CR ファイルの名前と場所を選択します。CR のエクスポートが正常に行われたことを示すステータス行メッセージが表示されます。
3. エクスポートした CR は、CA の Web サイトにアップロードできます。

### 信頼できる証明書の管理

CA による要求の処理が終わると、ユーザー証明書が電子メールの本文、または指定の Web ページからダウンロードされたシンプル・ファイルとしてユーザーに転送されます。試用版のルート証明書を使用している場合、または Oracle Wallet Manager に現在インストールされていない CA を選択した場合は、まず CA の信頼できる証明書をインポートしてから、サーバー固有のユーザー証明書をインポートしてください。

### 信頼できる証明書のインポート（必要な場合）

信頼できる証明書をインポートするには、次の手順を実行します。

1. 「操作」>「信頼できる証明書のインポート」を選択します。
2. CA に基づいて、「証明書の貼付け」または「証明書を含むファイルを選択してください」を選択します。
3. 適切な証明書ファイルを選択するか、電子メールの本文を貼り付けます。Oracle Wallet Manager では、64 ベースのエンコードされたルート証明書を想定しています。64 ベースのエンコードされたルート証明書がない場合は、「[信頼できる証明書の書式の変更（必要な場合）](#)」に説明されている手順を実行する必要があります。
4. 「OK」をクリックします。

証明書が正常にインポートされたことを示すステータス行メッセージが表示されます。サーバー固有のユーザー証明書をインポートすると、ツリー構造内の証明書ノードにも「待機中」と表示されます。

### 信頼できる証明書の書式の変更（必要な場合）

証明書のインポートに失敗した場合は、その証明書の書式が Oracle Wallet Manager でサポートされていない可能性があります。この場合は、その証明書をサポートされている書式に変換してからインポートする必要があります。これを最も簡単に行うには、ブラウザ内にある証明書のインポート / エクスポート・ウィザードを使用します。次の手順は、Microsoft Internet Explorer のブラウザを使用した場合です。



1. Microsoft Internet Explorer で、「ツール」>「インターネット オプション」を選択します。
2. 「コンテンツ」タブをクリックします。
3. 「証明書」をクリックします。
4. 「信頼されたルート証明機関」タブをクリックします。
5. 「インポート」をクリックし、ウィザードに従って証明書をインポートします。
6. 新しくインポートされた証明書をリストで強調表示します。
7. 「エクスポート」をクリックし、ウィザードに従って「エクスポート ファイルの形式」ページに進みます。
8. 「Base 64 encoded X.509」を選択します。
9. 「次へ」をクリックして、証明書のファイル名を入力します。
10. 「次へ」をクリックします。
11. 「完了」をクリックします。
12. Oracle Wallet Manager で、「操作」>「信頼できる証明書のインポート」を選択します。

信頼できるルート証明書が Oracle Wallet Manager に正常にインポートされたら、サーバー固有のユーザー証明書をインポートすることができます。

### サーバーのユーザー証明書のインポート

サーバーのユーザー証明書をインポートするには、次の手順を実行します。

1. 「操作」>「ユーザー証明書のインポート」を選択します。
2. CA に基づいて、「証明書の貼付け」または「証明書を含むファイルを選択してください」を選択します。
3. 適切な証明書ファイルを選択するか、電子メールの本文を貼り付けます。
4. 「OK」をクリックします。

ユーザー証明書が正常にインポートされたことを示すステータス行メッセージが表示されます。

証明書のインポートが終了したら、自動ログイン機能を有効にして Wallet を保存することが重要です。この手順が必要なのは、プロセスが開始されて OracleAS Web Cache が Wallet にアクセスしても、Wallet のパスワードは OracleAS Web Cache によって保持されないためです。このプロパティが設定されていないと、OracleAS Web Cache を SSL モードで実行した場合にすぐにシャットダウンします。

1. Oracle Wallet Manager のリストでインポートした信頼できる証明書を選択します。
2. 「Wallet」>「自動ログイン」を選択します（まだ選択していない場合）。

3. 「Wallet」 > 「保存」を選択します。

## OracleAS Web Cache の保護

次の項では、OracleAS Web Cache が SSL 接続を許可するように構成する方法について説明します。

---

---

**注意：** OracleAS Web Cache の設定（「リスニング・ポート」など）を変更すると、OracleAS Portal URL が変更されることがあります。この構成を行う場合には、モバイル設定を手動で更新する必要があります。詳細は、[C.8 項「cfgiaw スクリプトを使用したモバイルの構成」](#)を参照してください。

---

---

### OracleAS Web Cache の SSL ポートの構成

1. OracleAS Web Cache の管理ページで、「Ports」セクションの「Listening Ports」リンクをクリックします。
2. SSL ポートを追加するには、「Add」をクリックし、次の情報を入力します。
  - 「IP Address」：ANY
  - 「Port Number」：Web Cache がリスニングする SSL ポート
  - 「Protocol」：HTTPS
  - 「Require Client-Side Certificate」：いいえ（選択しない）
  - 「Wallet」：SSL サーバー証明書が含まれる Oracle Wallet ディレクトリのパス
3. 「Submit」をクリックします。

前述の手順の詳細は、次を参照してください。前述の手順の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第 8 章「特殊な構成」のタスク 3: キャッシュ用の HTTPS Operations Ports の構成に関する項を参照してください。

### 公開された SSL ホスト名およびポートのサイトを定義する

デフォルトでは SSL は構成されていないため、OracleAS Web Cache がキャッシュする SSL ベースのサイトの定義を追加する必要があります。

1. OracleAS Web Cache の管理ページで、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」の「Site Definitions」をクリックします。
2. ブラウザに表示されているホスト名を「Host Name」として、サイトを定義します。

ロード・バランサ・デバイスまたは逆プロキシを使用する構成の場合は、ロード・バランサまたは逆プロキシ・サーバーの名前になります。OracleAS Web Cache がブラウザ要求を受け取る構成の場合は、OracleAS Web Cache のホスト名になります。
3. ブラウザ要求に指定されている HTTPS ポートを「Port」に設定します。

4. 次のサイト情報を入力します。
  - 「HTTPS Only Prefix」：空白のままにします
  - 「Client-Side Certificate」：不要
  - 「Default Site」：はい
  - 「Create Alias from Site Name with/without www」：いいえ
5. 「Submit」をクリックします。
6. デフォルトの非 SSL サイトなど、変更後の構成では使用できなくなるすべてのサイトを削除します。

前述の手順の詳細は、次を参照してください。

- 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第8章「特殊な構成」のタスク 4: キャッシュ用の HTTPS Requests のサイトの作成に関する項
- 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第7章「基本設定と構成」のサイト定義の作成に関する項

### 構成内の各ポートへのサイトの別名の追加

いくつかの異なるホスト名またはポート、あるいはその両方にコンテンツがキャッシュされているときに、それらが実際には同じ論理コンテンツを参照している場合には、サイトの別名が必要になります。たとえば、PPE があるポートレットの要求を作成したときに、このポートレットが非 SSL ポート上で要求されているが、メイン・サイトが SSL モードでアクセスされる場合には、別名のエントリが必要になります。これにより、SSL を使用するサイトからアクセスされるコンテンツと非 SSL モードでアクセスされるコンテンツが、等しいと見なされます。このようにした場合には、そのコンテンツを失効化するために失効化要求を送信すると、どちらのモードの URL でキャッシュされている場合でもコンテンツが失効化されます。

この OracleAS Web Cache SSL サイトについて、非 SSL OracleAS Web Cache リスニング・ポート用の別名を作成する必要があります。サイトの別名を作成するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Web Cache 管理ページから「Site Definitions」ページに戻り、新しく追加したサイトを選択し、「Add Alias」をクリックします。
2. このサイトを入力したときに使用したホスト名を入力し、PPE が OracleAS Web Cache からポートレットを要求するときに使用する非 SSL ポートを指定します。「Apply Changes」をクリックします。
3. 必要な追加を行ってからサーバーを再起動します。

前述の手順の詳細については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第7章「基本設定と構成」のサイト定義の作成に関する項を参照してください。

### 新しいサイトの「Site-to-Server Mapping」のオリジナル・サーバーへの追加

新しいサイト定義と関連する別名を追加したら、新しく定義したサイトの「Site-to-Server Mapping」をオリジナル・サーバーに追加する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. ドロップダウン・リストからマッピングするサイトを選択します。
2. コンテンツ要求をルーティングするオリジナル・サーバーを選択します。

前述の手順の詳細については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第7章「基本設定と構成」のサイトのオリジナル・サーバーへのマッピングに関する項を参照してください。

### Parallel Page Engine の保護

この構成では、ポートレットを要求するときに HTTP 要求を使用するように、PPE を構成する必要があります。以下の項では、この目的のために部分的 SSL PPE 構成を実装する方法について説明します。

1. 中間層の OC4J\_PORTAL インスタンスに関連付けられている web.xml ファイルを開きます。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME\j2ee\OC4J_Portal\applications\portal\  
portal\WEB-INF\web.xml
```

2. web.xml 内に追加した <init-param> ブロックに useScheme および usePort を追加します。useScheme http は PPE のループバックに HTTP プロトコルが使用されることを示し、usePort はこれらの非 SSL のループバックで使用されるポートを示します。usePort に指定する HTTP ポートは、OracleAS Web Cache 非 SSL HTTP ポートでなければなりません。たとえば、次のようになります。

```
<servlet>  
<servlet-name>page</servlet-name>  
  <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>  
  <init-param>  
    <param-name>useScheme</param-name>  
    <param-value>http</param-value>  
  </init-param>  
  <init-param>  
    <param-name>usePort</param-name>  
    <param-value>7777</param-value>  
  </init-param>  
</servlet>
```

3. (オプション) PPE で特定の証明書のみを信頼するようにする場合は、web.xml 内に追加した <init-param> ブロックに x509certfile を追加します。たとえば、次のようになります。

```
<servlet>
```

```

<servlet-name>page</servlet-name>
  <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>
  <init-param>
    <param-name>x509certfile</param-name>
    <param-value>C:\mySSLconfig\trustedCerts.txt</param-value>
  </init-param>
</servlet>

```

---

**注意：** x509certfile を実装しないと、PPE ではすべての SSL 証明書を信頼します。

---

## Oracle HTTP Server パートナ・アプリケーションの再登録

次に、パートナ・アプリケーションとして OracleAS Single Sign-On を構成することにより、保護された要求を登録する必要があります。スクリプト `ossoreg` を使用すると、この登録を行うことができます。`ossoreg` は、中間層の `MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib` にあります。

1. `ossoreg` を実行できるように環境が次のように正しく構成されていることを確認します。

```

ORACLE_HOME=MID_TIER_ORACLE_HOME
LD_LIBRARY_PATH=ORACLE_HOME/lib

```

2. `ossoreg` を実行します。次の例は、`ossoreg` の使用方法を示しています。

```

MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name abc.com -mod_osso_url
https://www.abc.com:4443 -config_mod_osso TRUE -oracle_home_path
MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Oracle/Oracle/conf/osso/osso.conf
-admin_info cn=orcladmin

```

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章の「`mod_osso` の登録」を参照してください。

OracleAS Web Cache との SSL 通信の構成が完了しました。

## OracleAS Portal の公開アドレスとプロトコルの指定

変更した SSL のポートを使用して OracleAS Portal の公開アドレスを指定するには、次の手順に従って、Oracle Enterprise Manager を使用する必要があります。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールに移動します。
2. OracleAS Portal の中間層で実行している Oracle Application Server を含むスタンドアロン・インスタンスをクリックします。

3. OracleAS Portal のシステム・コンポーネントをクリックします。
4. 「管理」で、「Portal の Web キャッシュ設定」をクリックします。
5. 「リスニング・ポート」に、OracleAS Web Cache SSL ポート番号を入力します。
6. 「リスニング・ポート SSL 使用可能」には、「はい」を選択します。
7. 「OK」をクリックします。OracleAS Portal のリポジトリがこの設定で更新され、Oracle Enterprise Manager 10g のターゲット・インスタンスがその URL テストに HTTPS を使用するように更新されます。

後で HTTP に切り替えることにする場合は、これと同じ手順を実行して、「リスニング・ポート SSL 使用可能」を「いいえ」に戻します。

---

---

**注意：** この手順によって、iasconfig.xml ファイル内の設定が更新されます。

---

---

**関連項目：** iasconfig.xml の詳細は、[付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」](#)を参照してください。

8. `MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf` ファイルを次のように編集します。
  - a. Port ディレクティブに 4443 を指定します。
  - b. ファイルの最後に次の行を追加します。

```
SimulateHttps On
```

SimulateHttps ディレクティブを有効にするには、SimulateHttps ディレクティブの前に次のいずれかのディレクティブを追加することによって、Oracle HTTP Server に `mod_certheaders` をロードする必要があります。

UNIX の場合：

```
LoadModule certheaders_module libexec/mod_certheaders.so
```

MS Windows の場合：

```
LoadModule certheaders_module modules\ApacheModuleCertHeaders.dll
```

詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の第 8 章「Oracle HTTP Server のモジュール」の `mod_certheaders` に関する項を参照してください。

- c. ファイルを保存します。
9. 次のコマンドを実行して、手動による構成の変更を同期化します。

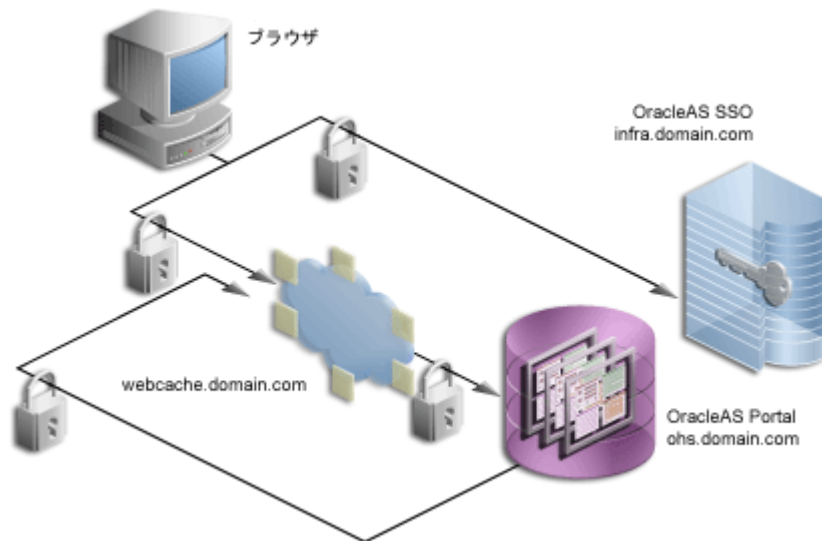
```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateconfig
```

10. Oracle Application Server インスタンスを再起動します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall  
MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

#### 6.3.2.1.4 OracleAS Portal 全体にわたる SSL

図 6-19 システム全体にわたって保護された接続



最大限のセキュリティを必要とするインストールに対しては、システム全体にわたって SSL を構成することができます。この構成では、PPE から OracleAS Web Cache へのループバックで Wallet が使用され、PPE と Web プロバイダとのホップで証明書が Wallet を介さずに直接使用されます。

---

**注意：** 6.3.2.1.3 項「OracleAS Web Cache との SSL 接続」で説明した手順をすでに実行している場合は、OracleAS Portal 全体に SSL を構成する前に、適用したすべての変更を元に戻す必要があります。

---

## Wallet の作成

OracleAS Web Cache と Oracle HTTP Server が同じマシン上にある場合は、リスナーとオリジナル・サーバー（および OracleAS Web Cache で利用できる他のすべてポート）との間で 1 つの Wallet を共有できます。反対に、ポートごとに特定の Wallet を作成することもできます。この場合は、2 つのサーバーまたはポートは前述の同じ Wallet を共有しています。

Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache が別のマシン上にある場合など、状況によっては Oracle HTTP Server 用に別の Wallet を作成する必要があります。この場合は、6-90 ページの「[Wallet の作成](#)」の手順を参照して、Oracle HTTP Server 用の Wallet を作成します。

デフォルトでは、Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache は同じマシン上にあり、これらの間で Wallet を共有できます。

## Oracle HTTP Server の保護

HTTPS ベースの通信を受け入れるために、Oracle HTTP Server を OracleAS Web Cache のオリジナル・サーバーとして構成する必要があります。Oracle HTTP Server は、`mod_ssl` を使用することによって SSL を実装します。そのため、HTTPS を使用するための構成は非常に簡単です。

---

**注意：** Oracle HTTP Server のデフォルトのインストールでは、デモ用の証明書を使用して基本的な SSL が実装されます。本稼働で使用するには、6-90 ページの「[Wallet の作成](#)」の手順に従って、認証局からサーバー証明書を取得する必要があります。

---

Oracle HTTP Server の SSL の構成は、`ssl.conf` 内に定義されます。このファイルは、直接編集することも、Oracle Enterprise Manager の「管理」ページ内の該当する Oracle Application Server インスタンスの「Oracle HTTP Server」ノードにある「拡張サーバー・プロパティ」ページを使用して編集することもできます。このファイルを手動で編集する場合は、次のオプションを指定して `dcmctl` ユーティリティを実行し、このファイルが DCM リポジトリと同期化されるようにすることをお勧めします。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig -ct ohs
```

1. `MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf` に格納されている `ssl.conf` を開きます。
2. 次のディレクティブを検索し、その値を次のように変更します。



表 6-18 ssl.conf の Wallet エントリ

デフォルトのエントリ	更新されたエントリ
SSLWallet file: <i>MID_TIER_ORACLE_HOME</i> / Apache/Apache/conf/ ssl.wlt/default	SSLWallet file: /Directory where the wallet has been saved
SSLWalletPassword .... (hashed out)	SSLWalletPassword password used when creating the wallet

3. *MID\_TIER\_ORACLE\_HOME*/Apache/Apache/conf にある *ssl.conf* で、SSL 通信用のデフォルトの仮想ホストに割当て済みの SSL ポート番号が正しく指定されていることを確認します。

---

**注意：** HTTPS を介して通信するように OracleAS Portal を設定する場合は、一般的に、中間層とインフラストラクチャ層の両方がこのモードで動作するように構成します。外部アプリケーションの情報を得るために OracleAS Single Sign-On と通信するには、OracleAS Portal のインフラストラクチャ層で HTTP ポートを開いたままにしておく必要があります。このコールは、UTL\_HTTP パッケージを使用してリポジトリから直接行われます。

---

4. *MID\_TIER\_ORACLE\_HOME*/opmn/conf/opmn.xml 内で Oracle HTTP Server の起動モードが *ssl-enabled* に設定されていることを確認します。たとえば、次のようになります。

```
<ias-component id="HTTP_Server">
  <process-type id="HTTP_Server" module-id="OHS">
    <module-data>
      <category id="start-parameters">
        <data id="start-mode" value="ssl-enabled"/>
      </category>
    </module-data>
    <process-set id="HTTP_Server" numprocs="1"/>
  </process-type>
</ias-component>
```

## OracleAS Web Cache の保護

以下の項では、OracleAS Web Cache が SSL 接続を許可し、SSL 要求を SSL 対応のオリジナル・サーバーに転送するように構成する方法について説明します。

---

---

**注意：** OracleAS Web Cache の設定（「リスニング・ポート」など）を変更すると、OracleAS Portal URL が変更されることがあります。この構成を行う場合には、モバイル設定を手動で更新する必要があります。詳細は、[C.8 項「cfgiaw スクリプトを使用したモバイルの構成」](#)を参照してください。

---

---

### OracleAS Web Cache SSL ポートの構成

1. OracleAS Web Cache の管理ページで、「Ports」セクションの「Listening Ports」リンクをクリックします。
2. SSL ポートを追加するには、「Add...」をクリックし、次の情報を入力します。
  - 「IP Address」：ANY
  - 「Port Number」：Web Cache がリスニングする SSL ポート
  - 「Protocol」：HTTPS
  - 「Require Client-Side Certificate」：いいえ（選択しない）
  - 「Wallet」：SSL サーバー証明書のパス
3. 「Submit」をクリックします。

前述の手順の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第 8 章「特殊な構成」のタスク 3: キャッシュ用の HTTPS Operations Ports の構成に関する項を参照してください。

### SSL オリジナル・サーバーの追加

SSL オリジナル・サーバーを追加するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Web Cache の管理ページで、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」の下にある「Origin Server」をクリックします。
2. 「Add...」をクリックして、SSL オリジナル・サーバーを追加します。
3. 次の情報を入力します。
  - 「Host Name」：Oracle HTTP Server が実行されているマシンの物理ホスト名
  - 「Port」：Oracle HTTP Server の SSL ポート
  - 「Routing」：有効
  - 「Capacity」：100

「Failover Threshold」: 5

「Ping URL」: /

「Ping Interval」: 10

「Protocol」: HTTPS

4. 「Submit」をクリックします。

前述の手順の詳細は、次を参照してください。前述の手順の詳細については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第7章「基本設定と構成」のタスク 9: オリジナル・サーバーの構成、ロード・バランスおよびフェイルオーバーの設定に関する項を参照してください。

#### 公開された SSL ホスト名およびポートのサイトを定義する

デフォルトでは SSL は構成されていないため、OracleAS Web Cache がキャッシュする SSL ベースのサイトの定義を追加する必要があります。

1. OracleAS Web Cache の管理ページで、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」の下にある「Site Definitions」をクリックします。
2. ブラウザに表示されているホスト名（OracleAS Web Cache ホスト名）を「Host Name」として、サイトを定義します。
3. ブラウザ要求に指定されている HTTPS ポート（OracleAS Web Cache の SSL リスニング・ポート）を「Port」に設定します。

4. 次のサイト情報を入力します。

「HTTPS Only Prefix」: 空白のままにします

「Client-Side Certificate」: 不要

「Default Site」: はい

「Create Alias from Site Name with/without www」: いいえ

5. 「Submit」をクリックします。
6. 変更後の構成では使用できなくなるすべてのサイトを削除します。

前述の手順の詳細は、次を参照してください。

- 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第8章「特殊な構成」のタスク 4: キャッシュ用の HTTPS Requests のサイトの作成に関する項
- 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第7章「基本設定と構成」のサイト定義の作成に関する項

### 新しいサイトの「Site-to-Server Mapping」をオリジナル・サーバーに追加する

新しいサイト定義を追加したら、新しく定義したサイトの「Site-to-Server Mapping」をオリジナル・サーバーに追加する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

1. ドロップダウン・リストからマッピングするサイト（SSL ポートを使用する OracleAS Web Cache サイト）を選択します。
2. コンテンツ要求をルーティング先するオリジナル・サーバー（OracleAS Portal SSL ポートを持つサーバー）を選択します。

前述の手順の詳細については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第7章「基本設定と構成」のサイトのオリジナル・サーバーへのマッピングに関する項を参照してください。

### Parallel Page Engine の保護

この構成では、要求が HTTPS を介して OracleAS Web Cache に送信され、同様に PPE が HTTPS を介してループバックするときに、全体を通して SSL が使用されます。サーバーでは、その証明書とともに送信される連鎖を指定します。この連鎖が有効で、自己署名のルート証明書を得る場合、トラスト・ポイントがまだそれにロードされていないという前提では、その証明書が信頼できるかどうか確認しなくても有効となります。

この構成を実装するには、OracleAS Portal 中間層で次の手順を実行します。

1. `ssl.conf` ファイルを開きます。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/ssl.conf
```

2. SSLWallet および SSLWalletPassword を追加します。たとえば、次のようになります。

```
SSLWallet file:/usr/local/adeviews/webdb/webdb_3000_ias902PW/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default
SSLWalletPassword serverWalletPassword
```

---

---

**注意：** 前の SSLWalletPassword の例では、パスワードを平文として示しています。多くの場合、パスワードは `iasobf` ユーティリティを使用して暗号化することができます。

---

---

**関連項目：** SSLWallet、SSLWalletPassword および `httpd.conf` の詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

3. 中間層の OC4J\_PORTAL インスタンスに関連付けられている `web.xml` ファイルを開きます。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME\j2ee\OC4J_Portal\applications\portal\portal\WEB-INF\web.xml
```

4. web.xml 内に追加した <init-param> ブロックに httpsports を追加します。これは、OracleAS Web Cache の HTTPS リスニング・ポートを指しています。たとえば、次のようになります。

```
<servlet>
<servlet-name>page</servlet-name>
  <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>
  <init-param>
    <param-name>httpsports</param-name>
    <param-value>4443</param-value>
  </init-param>
</servlet>
```

---

---

**注意：** 現在の web.xml ファイルに useScheme および usePort ディレクティブが含まれている場合は、それらを削除する必要があります。システム全体に SSL を構成している場合には、httpsports ディレクティブのみを使用する必要があります。

---

---

5. (オプション) PPE で特定の証明書のみを信頼するようにする場合は、web.xml 内に追加した <init-param> ブロックに x509certfile を追加します。たとえば、次のようになります。

```
<servlet>
<servlet-name>page</servlet-name>
  <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>
  <init-param>
    <param-name>x509certfile</param-name>
    <param-value>C:\mySSLconfig\trustedCerts.txt</param-value>
  </init-param>
</servlet>
```

---

---

**注意：** x509certfile を実装しないと、PPE ではすべての SSL 証明書を信頼します。

---

---

## イベント・サーブレットの保護

OracleAS Portal のスマート・ページ機能を使用すると、「イベント」および「ページ」パラメータを公開して、ポートレット同士で情報のやり取りが可能になります。イベント・サーブレットは、Parallel Page Engine 自体と同じコンテナで実行され、この機能を実装します。イベント・サーブレットでは、ユーザーとの対話で生じる適切なアクション URL も作成する必要がありますため、ページの作成に使用されるプロトコルに関する情報も必要となります。HTTPS の使用を指定するのに必要なパラメータは、ページ・サーブレットに使用されるものと同じです。

1. 中間層の OC4J\_PORTAL インスタンスに関連付けられている web.xml ファイルを開きます。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME\j2ee\OC4J_Portal\applications\portal\portal\WEB-INF\web.xml
```

2. <init-param> ブロックをこのファイルに追加して、HTTPS を使用しているポートを指定します。このブロックは、OracleAS Web Cache の HTTPS リスニング・ポートを指しています。

```
<servlet>
<servlet-name>event</servlet-name>
  <servlet-class>oracle.webdb.event.EventServlet</servlet-class>
  <init-param>
    <param-name>httpsports</param-name>
    <param-value>4443</param-value>
  </init-param>
</servlet>
```

## OracleAS Portal の公開アドレスとプロトコルの指定

変更された SSL 用のポートを使用して OracleAS Portal の公開アドレスを指定するには、次の手順に従って、Oracle Enterprise Manager を使用する必要があります。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールに移動します。
2. OracleAS Portal の中間層で実行している Oracle Application Server を含むスタンドアロン・インスタンスをクリックします。
3. OracleAS Portal のシステム・コンポーネントをクリックします。
4. 「管理」で、「Portal の Web キャッシュ設定」をクリックします。
5. 「リスニング・ポート SSL 使用可能」には、「はい」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。OracleAS Portal のリポジトリがこの設定で更新され、Oracle Enterprise Manager 10g のターゲット・インスタンスがその URL テストに HTTPS を使用するように更新されます。

後で HTTP に切り替えることにする場合は、これと同じ手順を実行して、「リスニング・ポート SSL 使用可能」を「いいえ」に戻します。

---



---

**注意：** この手順によって、iasconfig.xml ファイル内の設定が更新されます。

---



---

**関連項目：** iasconfig.xml の詳細は、付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」を参照してください。

## Oracle HTTP Server パートナ・アプリケーションの再登録

次に、パートナ・アプリケーションとして OracleAS Single Sign-On を構成することにより、保護された要求を登録する必要があります。スクリプト ossoreg を使用すると、この登録を行うことができます。ossoreg は、中間層の `MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib` にあります。

1. ossoreg を実行できるように環境が次のように正しく構成されていることを確認します。

```
ORACLE_HOME=MID_TIER_ORACLE_HOME
LD_LIBRARY_PATH=ORACLE_HOME/lib
```

2. ossoreg を実行します。次の例は、ossoreg の使用方法を示しています。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name abc.com -mod_osso_url
https://www.abc.com:4443 -config_mod_osso TRUE -oracle_home_path
MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf
-admin_info cn=orcladmin
```

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章の「mod\_osso の登録」を参照してください。

## 連携型 Portal アダプタと SSL の関連付け

連携型 Portal アダプタでは、Oracle HTTP Server のリライト規則を使用してプロバイダを登録するための URL を簡略化します。デフォルトでは、これらのリライト規則は HTTP 通信にのみ指定されます。

1. これらのリライト規則を portal.conf から Oracle HTTP Server の構成ファイルにコピーします。portal.conf に含まれているリライト規則は次のとおりです。

```
# Portal PL/SQL Adapter URL Simplification
RewriteEngine on
# This is to match '/adapter/<dad_name>/<schema_name>' and an optional trailing
 '/'
RewriteRule ^/adapter/(.+)/([^\s/]+)/?$ /pls/$1/!$2.wmpro_app_adapter.process_
request [PT]
# This is to match '/adapter/<dad_name>' and an optional trailing '/'
```

```
RewriteRule ^/adapter/([^\+]?)? /pls/$1/!$1.wvpro_app_adapter.process_request
[PT]
```

次のように、これらと同じ規則を Oracle HTTP Server ファイルの仮想ホストのセクションに追加する必要があります。

```
## SSL Virtual Host Context
##
#
# NOTE: this value should match the SSL Listen directive set previously in this
# file otherwise your virtual host will not respond to SSL requests.
#
<VirtualHost _default_:3011>
# General setup for the virtual host
  DocumentRoot /usr/local/adeviews/webdb/webdb_3000_
ias902PW/Apache/Apache/htdocs
  ServerName host1.abc.com
  ServerAdmin you@your.address
  ErrorLog /usr/local/adeviews/webdb/webdb_3000_
ias902PW/Apache/Apache/logs/error_log
  TransferLog "/usr/local/adeviews/webdb/webdb_3000_
ias902PW/Apache/Apache/logs/access_log"
  Port 3001
  SSLEngine on
  SSLCipherSuite
SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5:SSL_RSA_WITH_RC4_128_SHA:SSL_RSA_WITH_3DES_EDE_CBC_
SHA:SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA:SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5:S

SL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA
  SSLWallet file:/usr/local/adeviews/webdb/webdb_3000_
ias902PW/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default

  <Files ~ "\.(cgi|shtml)$">
    SSLOptions +StdEnvVars
  </Files>
  <Directory /usr/local/adeviews/webdb/webdb_3000_
ias902PW/Apache/Apache/cgi-bin>
    SSLOptions +StdEnvVars
  </Directory>

  SetEnvIf User-Agent ".*MSIE.*" nokeepalive ssl-unclean-shutdown
  CustomLog /usr/local/adeviews/webdb/webdb_3000_
ias902PW/Apache/Apache/logs/ssl_request_log "%t %h %{SSL_PROTOCOL}x
%{SSL_CIPHER}x \"%r\" %b"

  RewriteEngine on
  # This is to match '/adapter/<dad_name>/<schema_name>' and an optional
```



```

trailing '/'
RewriteRule ^/adapter/(.+)/([^\/]*)/?$ /pls/$1!/$2.wwpro_app_
adapter.process_request [PT]
# This is to match '/adapter/<dad_name>' and an optional trailing '/'
RewriteRule ^/adapter/([^\/]*)/?$ /pls/$1!/$1.wwpro_app_adapter.process_
request [PT]

</VirtualHost>

```

2. 次のコマンドを実行して、手動による構成の変更を同期化します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateconfig
```

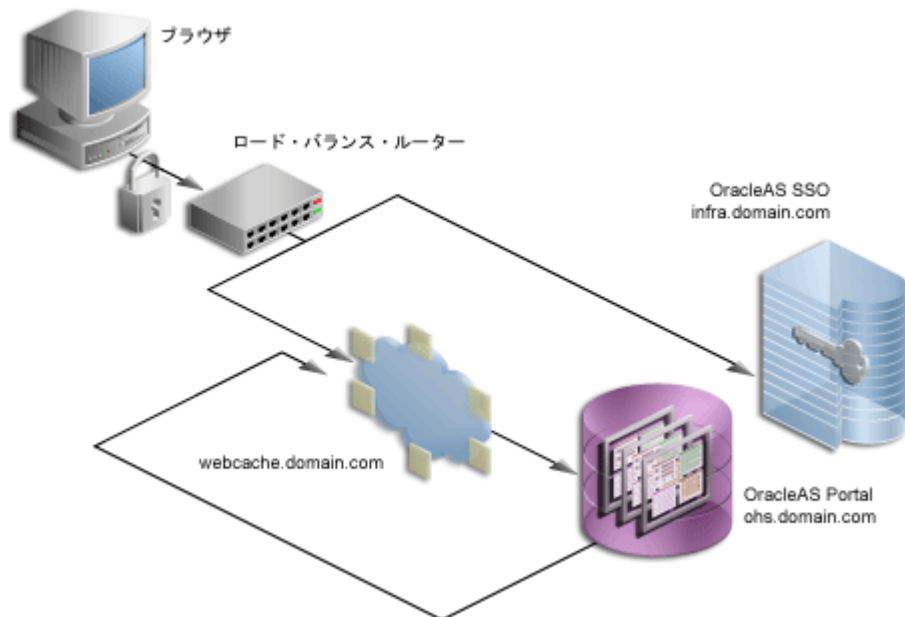
3. Oracle Application Server インスタンスを再起動します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

OracleAS Portal 全体への SSL 通信の構成が完了しました。

### 6.3.2.1.5 Oracle Application Server 内での非 SSL による外部 SSL

図 6-20 外部 SSL のみ



前の構成では、Oracle Application Server 内の通信が SSL を介して保護されるように OracleAS Portal を構成する方法について説明しました。場合によっては、サイトは SSL URL を介して外部とアクセスできるが、Oracle Application Server は内部的に非 SSL モードで実行するように OracleAS Portal を設定する場合があります。後者のシナリオでは、ロード・バランサまたは SSL アクセラレータを使用して SSL から非 SSL への変換を行う必要があります。この項では、ロード・バランサまたは逆プロキシ・サーバーのアクセラレータで SSL の変換を行う場合に使用する手順について説明します。

このオプションでは、OracleAS Security Framework の SSL 機能は使用されませんが、そのかわり、SSL の接続ポイントを提供するのに外部コンポーネントが使用されます。これらの外部アクセラレータは、ロード・バランサや逆プロキシ・サーバーと組み合わせることができます。Oracle Application Server を使用すると、これらの外部装置で SSL を提供するように構成できるため、最良のパフォーマンスを得るために Oracle Application Server 内部で HTTP を使用できるようになります。

この手順では、次のことを前提としています。

- 使用するロード・バランサが `lbr.abc.com` で実行されており、サイトのアクセスに使用されるロード・バランサのポートが 443 であること。
- OracleAS Web Cache がマシンの `w1.abc.com` で実行されており、そのリスニング・ポートが 7777、管理用ポートが 4000 であり、失効メッセージがポート 4001 に送信されること。
- Oracle HTTP Server がマシンの `m1.abc.com` で実行されており、そのポートが 7778 であること。

---

---

**注意：** 通常の構成では、`w1.abc.com` と `m1.abc.com` は同じマシン上にありますが、説明のために、ここではそれらを分けています。

---

---

**関連項目：** 詳細は、次を参照してください。

- [5.6 項「逆プロキシ・サーバーの構成」](#)
  - [5.3 項「ロード・バランサ・ルーターを使用する複数の中間層の構成」](#)
1. 基になるコンポーネントがロード・バランサのホスト名 (`lbr.abc.com`) とポート (443) に基づく URL を作成できるように、OracleAS Portal の中間層を構成します。これを行うには、次の手順を実行します。
    - a. [5.4.1.1 項「`www.xyz.com` の仮想ホストの作成」](#) で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
      - 「アドレス」ページ (手順 9) で、仮想ホストの「サーバー名」フィールドに LBR のホスト名 (`lbr.abc.com`) を指定します。

- 手順 23 で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 443 を指定します。同じ VirtualHost コンテナに、次の行を追加します。

```
SimulateHttps On
```

SimulateHttps ディレクティブを有効にするには、SimulateHttps ディレクティブの前に次のいずれかのディレクティブを追加することによって、Oracle HTTP Server に mod\_certheaders をロードする必要があります。

UNIX の場合：

```
LoadModule certheaders_module libexec/mod_certheaders.so
```

MS Windows の場合：

```
LoadModule certheaders_module modules¥ApacheModuleCertHeaders.dll
```

詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の第 8 章「Oracle HTTP Server のモジュール」の mod\_certheaders に関する項を参照してください。

- b. 5.4.1.1 項「[www.xyz.com の仮想ホストの作成](#)」で説明しているように、「仮想ホストの作成」ウィザードを使用して 2 番目の仮想ホストを定義します。ただし、以下の変更点があります。
  - 「アドレス」ページ（手順 9）で、仮想ホストの「サーバー名」フィールドにホスト名 (m1.abc.com) を指定します。
  - 手順 23 で、VirtualHost コンテナの Port ディレクティブに 7777 を指定します。
  - Oracle HTTP Server の再起動を促すメッセージが表示されたら（手順 26）、「はい」をクリックします。

2. Parallel Page Engine がサイトで使用されるものとは異なるプロトコルとポートを使用してループバックを試みるように構成します。

- a. MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_Portal/applications/portal/portal/WEB-INF/web.xml のページ・サーブレットのセクションに対して次の変更を行います。

```
<servlet>
<servlet-name>page</servlet-name>
  <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>
    <init-param>
      <param-name>useScheme</param-name>
      <param-value>http</param-value>
    </init-param>
    <init-param>
      <param-name>usePort</param-name>
      <param-value>7777</param-value>
    </init-param>
```

```
</servlet>
```

- b. 次のコマンドを実行して、手動による構成の変更を同期化します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateconfig
```

- c. Oracle Application Server インスタンスを再起動します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall  
MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

3. ロード・バランサのホスト名が OracleAS Web Cache を実行しているマシンの IP アドレスに解決されるようにマシンの `m1.abc.com` を構成します。DNS の解決に委ねることも、次のようなエントリを `/etc/hosts` ファイル内に作成することもできます。

```
w1.w1.w1.w1 lbr.abc.com
```

---

---

**注意：** OracleAS Web Cache がローカルの場合は、`w1.w1.w1.w1` のかわりに `127.0.0.1` を使用できます。

---

---

この変更を前の手順と組み合わせると、Parallel Page Engine はローカルで OracleAS Web Cache にループバックします。

4. MIDTIER-type OHS モードで OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を実行し、OracleAS Web Cache のホスト名とポートではなく、LBR のホスト名とポートで、新しい URL を OracleAS Portal に登録します。UNIX の場合は、`ptlasst.csh` を使用して OPCA を起動します。MS Windows の場合は、`ptlasst.bat` を使用します。

たとえば、次のようになります。

```
ptlasst.csh -i typical -mode MIDTIER -type OHS -sdad portal  
-host lbr.abc.com -chost w1.abc.com -port 443 -cport_i 4001 -cport_a 4000  
-wc_i_pwd welcome1 -ssl
```

5. 外部から Oracle Enterprise Manager にアクセスできないようにするには、OracleAS Portal で提供される Oracle Enterprise Manager のリンク先が内部サーバーに戻るように変更する必要があります。これを行うには、次の例に示すように（通常、`MID_TIER_ORACLE_HOME/portal/conf` ディレクトリ内にある）`ptlconfig` を実行します。

```
ptlconfig -dad portal -em
```

6. OracleAS Web Cache の管理ページで、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」の「Site Definitions」をクリックします。
7. 「Add Site」をクリックします。

8. 次のサイト情報を入力します。
  - 「Host Name」: 公開されたホスト名と外部 SSL アクセラレータ・デバイスまたは逆プロキシ・サーバーの絶対ドメイン
  - 「Port Number」: SSL ポート番号 (デフォルトの SSL ポートの 443 など)
  - 「HTTPS Only Prefix」: 空白のままにします。
  - 「Client-Side Certificate」: 不要
  - 「Default Site」: はい
  - 「Create Alias from Site Name with/without www」: いいえ

前述の構成手順の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

9. OracleAS Web Cache の別名を設定します。Parallel Page Engine が OracleAS Web Cache にループバックし、OracleAS Web Cache がロード・バランサとは異なるポートでリスニングしている構成では、ループバック・コンテンツが `lbr.abc.com:7777` という URL キーでキャッシュされます。一方、OracleAS Portal では書式が `lbr.abc.com:443` の URL を失効化する失効化要求を送信します。この矛盾に対処するには、OracleAS Web Cache 内に別名を設定して、その別名に `lbr.abc.com:7777` と `lbr.abc.com:443` が同じであることを認識させ、一方に対する失効化要求によって他方に対する要求も失効化され、キャッシュされたコンテンツもこの別名を基にして利用されるようにする必要があります。
  - a. Oracle Application Server Web Cache の管理ページに移動し、管理者としてログインします。
  - b. 「Site Definitions」をクリックします。
  - c. 「Select」列で、別名が追加されるサイトに対応するラジオ・ボタン (この場合は `lbr.abc.com`) を選択します。
  - d. 「Add Alias」をクリックします。
  - e. 表示されたウィンドウで、ホスト名として `lbr.abc.com` を入力し、ポートとして `7777` を入力します。ここで `7777` は、Parallel Page Engine の `web.xml` 構成ファイルの中にある `usePort` の値です。
  - f. 「Submit」をクリックします。
10. 新しいサイト定義を追加したら、新しく定義したサイトの「Site-to-Server Mapping」をオリジナル・サーバーに追加する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。
  - a. ナビゲーション・フレームの「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」で、「Site-to-Server Mapping」をクリックします。
  - b. 「Site-to-Server Mapping」ページで、表内の最初のマッピングを選択し、「Insert Above」をクリックします。

- c. 「Edit/Add Site-to-Server Mapping」 ページで 「Select from Site definitions」 オプションを選択した後、上の手順で作成したサイト定義 (lbr.abc.com) を選択します。
- d. 「Select Application Web Servers」 セクションで、「Origin Server」 ページで指定したアプリケーション・サーバー (m1.abc.com) を選択します。
- e. 「Submit」 をクリックします。
- f. ページの上部にある 「Apply Changes」 をクリックします。
- g. 「Cache Operations」 ページで、「Restart」 をクリックし、Web Cache を再起動します。  
サイトが正しくマップされたことを確認するために、「Site-to-Server Mapping」 ページに移動して、m1.abc.com がサイトの lbr.abc.com にマップされているかどうかを調べます。

前述の手順の詳細については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第7章「基本設定と構成」のサイトのオリジナル・サーバーへのマッピングに関する項を参照してください。

11. ロード・バランサ (lbr.abc.com) が、ポート 443 の要求を受け入れ、それらをマシン w1.abc.com で動作している OracleAS Web Cache のポート (7777) に転送し、同時に HTTPS リクエストを HTTP に変換するように構成します。

---

**注意：** この構成が Web プロバイダにどのように影響するかの詳細は、[5.3.6 項「手順 6: Portal ツールと Web プロバイダの構成 \(オプション\)」](#)を参照してください。

---

## 生成済プロバイダ (Web クリップングおよび OmniPortlet) とローカルでホストされた Web プロバイダの構成

1. 管理者 (たとえば、PORTAL) として OracleAS Portal にログインします。
2. 「管理」 タブをクリックします。
3. 「ポートレット」 サブタブをクリックします。
4. 「リモート・プロバイダ」 ポートレットで、「名前」 フィールドに 「WEBCLIPPING」 と入力します。
5. 「編集」 をクリックします。
6. 「接続」 タブをクリックします。
7. 「URL」 フィールドで次の URL を

`https://lbr.abc.com:443/portalTools/webClipping/providers/webClipping`

次のように変更します。

```
http://lbr.abc.com:7777/portalTools/webClipping/providers/webClipping
```

8. 「OK」をクリックして変更を確定します。
9. 手順4～8を繰り返します。ただし、以下の変更点があります。
  - 手順4で、WEBCLIPPINGのかわりにOMNIPORTLETと入力します。
  - 手順7で、次のURLを

```
https://lbr.abc.com:443/portalTools/omniPortlet/providers/omniPortlet
```

次のように変更します。

```
http://lbr.abc.com:7777/portalTools/omniPortlet/providers/omniPortlet
```

ローカルでホストされた Web プロバイダ (JPDK サンプル・プロバイダなど) を登録する場合、プロトコルに HTTP、ホスト名に lbr.abc.com、ポート番号に 7777 を使用して登録する必要があります。この制限は、ローカルでホストされた Web プロバイダ (つまり、OracleAS Portal と同じ中間層で稼動している Web プロバイダ) にもみ当てはまります。

たとえば、JPDK サンプル・プロバイダを登録するときは、次の URL を使用します。

```
http://lbr.abc.com:7777/jpdk/providers/sample
```

---

**注意：** 使用しているインフラストラクチャが OracleAS Portal 中間層とは別のマシンにある場合は、/etc/host ファイルに次の記述を追加する必要があります。

```
w1.w1.w1.w1 lbr.abc.com
```

ここで w1.w1.w1.w1 は、OracleAS Web Cache の IP アドレスです。

---

## Oracle HTTP Server パートナ・アプリケーションの再登録

次に、パートナ・アプリケーションとして OracleAS Single Sign-On を構成することにより、保護された要求を登録する必要があります。スクリプト ossoreg を使用すると、この登録を行うことができます。ossoreg は、中間層の MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/sso/lib にあります。

1. ossoreg を実行できるように環境が次のように正しく構成されていることを確認します。

```
ORACLE_HOME=MID_TIER_ORACLE_HOME
LD_LIBRARY_PATH=ORACLE_HOME/lib
```

2. ossoreg を実行します。次の例は、ossoreg の使用方法を示しています。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar
MID_TIER_ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name lbr.abc.com
-mod_osso_url https://lbr.abc.com -config_mod_osso TRUE
-oracle_home_path MID_TIER_ORACLE_HOME -u install_user -config_file
MID_TIER_ORACLE_HOME/Oracle/Oracle/conf/osso/osso.conf
-admin_info cn=orcladmin
```

詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第4章「mod\_osso の登録」を参照してください。

### 6.3.2.2 Oracle Internet Directory への接続の保護（オプション）

6.3.2.1 項「OracleAS Portal の SSL の構成」では、主に HTTP ベースのネットワーク・ホップについて説明しました。しかし、Oracle Internet Directory 自体へのネットワーク接続（LDAP ベースの通信）も保護できます。この場合は、Oracle Internet Directory が LDAP over SSL (LDAPS) を使用するよう構成されている必要があります。Oracle Internet Directory を LDAPS 用に構成する方法の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Internet Directory で SLL が使用されるように構成したら、OracleAS Portal リポジトリを更新して、LDAP サーバーで新しいポートが使用されるようにする必要があります。この手順を実行するには、`MID_TIER_ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc`にある SQL スクリプト (`secupoid.sql`) を実行します。このスクリプトを使用すると、次の Oracle Internet Directory 関連のパラメータを設定できます。

- ディレクトリのホスト名
- ディレクトリ・ポート
- アプリケーション・ディレクトリのパスワード
- SSL 設定

このスクリプトを実行すると、現在の設定が表示され、それに応じてその設定を変更できます。この場合は、次の設定を行います。

```
use_ssl_to_connect_to_ldap=Y
```

このスクリプトによって OracleAS Portal の Oracle Internet Directory キャッシュを自動的に更新するオプションが表示されます。

---

---

**注意：** リリース 10g (9.0.4) では、インストール後に LDAPS を実装する必要はなく、オプションで、LDAPS を使用して OracleAS Portal をインストールできます。

---

---



### 6.3.2.3 「グローバル設定」 ページの設定の変更

OracleAS Portal をインストールし、6.3.2.4 項「インストール後のセキュリティのチェックリスト」にある適切なタスクを実行したら、OracleAS Portal の「グローバル設定」ページでセキュリティに関連する次のすべての設定を変更できます。

- Oracle Internet Directory パラメータのキャッシュ
- Oracle Directory Integration Platform の同期化
- グループ検索ベースの識別名 (DN)
- グループ作成ベースの識別名 (DN)

#### 6.3.2.3.1 Oracle Internet Directory パラメータのキャッシュ

6.1.6 項「Oracle Identity Management Infrastructure の利用」で説明したように、OracleAS Portal ではディレクトリからの情報のキャッシュを管理しています。「グローバル設定」ページで、このキャッシュをディレクトリからの更新済の情報で更新できます。「OID パラメータ用キャッシュの更新」では、ディレクトリからの最新のパラメータ値でキャッシュがただちに更新されます。キャッシュされた情報は比較的静的な情報であるため、キャッシュを頻繁に更新する必要はありません。

#### 6.3.2.3.2 Oracle Directory Integration Platform の同期化

OracleAS Portal ではグループ・メンバーシップの情報をキャッシュするため、ディレクトリでその情報が変更されたらキャッシュが更新されるメカニズムを必要とします。Directory Integration Server では、OracleAS Portal に反映する必要がある変更がディレクトリで行われるたびに OracleAS Portal に通知します。「グローバル設定」では、次の設定を行うことができます。

- 「ディレクトリ同期の有効化」: 関連する変更がディレクトリで行われたときに Directory Integration Server が OracleAS Portal に通知するかどうかを定義します。この設定を選択しないと、Directory Integration Server によってサブスクライブされたイベントが OracleAS Portal に通知されません。
- 「イベント通知の送信頻度 (秒)」: 関連する変更を OracleAS Portal に通知するために Directory Integration Server によってイベント通知が送信される時間間隔を定義します。この設定は、「ディレクトリ同期の有効化」が選択されている場合にのみ利用できます。

Oracle Directory Integration and Provisioning サーバーが実行していて、OracleAS Portal を使用できるように構成されているときは、Oracle Internet Directory でグループ・メンバーシップが変更されると、OracleAS Portal で弱いキャッシュの失効化が行われます。

**関連項目：**

- 1.3.3 項「OracleAS Portal におけるキャッシュの失効化について」
- 5.7 項「OracleAS Portal 内での OracleAS Web Cache のキャッシュ構成」
- 6.1.6.3 項「OracleAS Portal と Oracle Directory Integration Platform の関係」

次に、グループ・メンバーシップのキャッシュの失効化の例を示します。

- ユーザーをグループに追加すると、Oracle Directory Integration and Provisioning サーバーではその変更を OracleAS Portal に通知します。そうすると OracleAS Portal では、弱い失効化ジョブによって処理される弱い失効メッセージを 1 つ発行します。これは、このユーザーが持っている新しい権限が、表示できるデータに影響を与える可能性があるからです。
- グループ *\_A* をグループ *\_B* に追加すると、Oracle Directory Integration and Provisioning サーバーではその変更を OracleAS Portal に通知します。そうすると OracleAS Portal では、グループ *\_A* の各ユーザーに弱い失効メッセージを発行します。これは、グループ *\_A* のユーザーが持っている新しい権限が、表示できるデータに影響を与える可能性があるからです。

**6.3.2.3.3 グループ作成ベースの識別名 (DN)**

OracleAS Portal では、ディレクトリ内のユーザー・グループの情報を管理しています。「グループ」ポートレットを使用してグループを作成すると、それらは LDAP のディレクトリ情報ツリー (DIT) のノードの下に作成されます。ノードは、その識別名 (DN) によって識別されます。このため、OracleAS Portal では、どのノードにグループを作成するかを指定する必要があります。

「グループ作成ベース DN」は、OracleAS Portal で管理するユーザー・グループが含まれているノードの DN です。たとえば、次のようになります。

```
cn=pt1_schema_name.031009.0430,cn=Groups,dc=MyCompany,dc=com
```

この設定は、特に OracleAS Portal を既存の DIT と対話できるようにする場合に使用します。

**6.3.2.3.4 グループ検索ベースの識別名 (DN)**

どのノードにグループを作成するかを定義する必要があるのと同様に、OracleAS Portal でどのノードで既存のグループを検索するのかも定義する必要があります。たとえば、「グループ」ポートレットにグループの値リストが表示されているときに OracleAS Portal でどこを検索するかを指定する必要があります。

「ローカル・グループ検索ベース DN」は、OracleAS Portal で管理するユーザー・グループが含まれているノードの DN です。たとえば、次のようになります。

```
cn=pt1_schema_name.031009.0430,cn=Groups,dc=MyCompany,dc=com
```

この設定は、特に OracleAS Portal を既存の DIT と対話できるようにする場合に使用します。

### 6.3.2.4 インストール後のセキュリティのチェックリスト

OracleAS Portal をインストールした後は、次の手順を実行してセキュリティの構成を行うことを考慮する必要があります。

- [mod\\_plsql 設定の構成](#)
- [軽量の OracleAS Portal ユーザーのパスワードの保護](#)
- [不要なオブジェクトの削除](#)
- [デフォルトで生成済の権限の確認](#)
- [プロバイダのコンポーネントへのパブリック・アクセスの取消し](#)
- [管理ページへのアクセス制御](#)
- [PL/SQL パッケージの保護](#)
- [SSL と「ログイン」ポर्टレットの使用の考慮](#)
- [Oracle Internet Directory 接続での LDAP over SSL の使用の考慮](#)
- [アプリケーション・エンティティのパスワードの変更](#)

#### 6.3.2.4.1 mod\_plsql 設定の構成

mod\_plsql 設定の構成は、次の手順に従って、OracleAS Portal からアクセスできる Oracle Enterprise Manager で行います。

1. OracleAS Portal 設計時ページのページで、「管理」タブをクリックします。
2. 「Portal」タブをクリックします（まだ選択していない場合）。
3. 「サービス」ポर्टレットで、「Portal サービスの監視」をクリックします。
4. 「コンポーネント」のリストで、「mod\_plsql サービス」をクリックします。
5. 「DAD」セクションで、PORTAL DAD を編集し、対応するデータベース・ユーザーのパスワードを変更します。
6. 必要のない DAD をすべて削除します。たとえば、SAMPLE\_DAD は不要です。
7. 作成中の Portal 用に新しい DAD を追加し、デフォルトの名前または場所を設定します。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g mod\_plsql ユーザーズ・ガイド』

#### 6.3.2.4.2 軽量の OracleAS Portal ユーザーのパスワードの保護

悪意のユーザーがデフォルト・ユーザーのパスワードを探ろうとすると、アカウントがロックされます。このロックはサーバーから解除することができますが、管理上、デフォルト・ユーザー・アカウントに依存しないことをお勧めします。これらのアカウントのパスワードを保護するには、次の手順を実行します。

1. 次のすべてのデフォルト・ユーザーのデフォルトのパスワードをただちに変更します。
  - PORTAL
  - PORTAL\_ADMIN
  - PUBLIC
2. デフォルト・ユーザーと同じアクセス権を使用して新しい軽量の管理者アカウントを作成し、OracleAS Single Sign-On のデフォルト・ユーザーのアカウントの終了日付を設定します。または、デフォルト・ユーザーの「ユーザーの編集」ページの「ユーザーにログインを許可する」設定の選択を解除することもできます。
3. デフォルト・ユーザーのログインを無効にするか、パスワードを変更したら、デフォルトのパスワードを使ってデフォルト・ユーザーとして Portal にログインし、変更が正しく行われたことを確認します。

#### 6.3.2.4.3 不要なオブジェクトの削除

ユーザーが廃止されたページや不要なページから Portal に入るのを防ぐには、使用していないオブジェクトを OracleAS Portal およびデータベース環境から削除する必要があります。たとえば、次のようになります。

- 使用していないページ・グループを削除します。
- 使用していない OracleAS Portal プロバイダを削除します。

#### 6.3.2.4.4 デフォルトで生成済の権限の確認

OracleAS Portal がインストールされると、表 6-2 に示してある生成済のグループに、それらのロールで通常必要とされる権限のセットが用意されます。これらの最初の権限のセットを確認して、それらがセキュリティ・ポリシーと矛盾していないことを確認する必要があります。

ユーザーまたはグループは、次のいずれかのソースから権限を取得することができます。

- OracleAS Portal のアクセス制御エントリ
- Oracle Internet Directory の権限グループ

OracleAS Portal のアクセス制御エントリから付与された権限を編集するには、「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレットまたは「Portal グループ・プロファイル」ポートレットの「管理」タブからユーザーまたはグループのプロファイルを編集します。「ユーザー・プロファイル」または「グループ・プロファイル」ダイアログの「権限」タブをクリックします。このリストから権限を取り消すことも、割り当てることもできます。

Oracle Internet Directory の権限グループから付与された権限を編集するには、Oracle Internet Directory で「ユーザー」ポートレットまたは「グループ」ポートレットを使用してユーザーまたはグループを編集します。Oracle Internet Directory で「権限の割当て」リストの横のチェックマークを付けたり、外したりして、適切な権限を付与したり、取り消したりします。

AUTHENTICATED\_USERS グループに付与された権限は、OracleAS Single Sign-On を通じて OracleAS Portal にログインしたすべてのユーザーに、認証に成功した時点で与えられます。これは、ログインしたすべてのユーザーを対象にデフォルトの権限で作成するグループです。

たとえば、認証されているユーザーがグループを作成できないようにする場合は、「グループ」ポートレットから AUTHENTICATED\_USERS グループを編集し、「権限の割当て」にある「グループの作成を許可」の横のチェックマークを外します。

#### 6.3.2.4.5 プロバイダのコンポーネントへのパブリック・アクセスの取消し

場合によっては、OracleAS Portal プロバイダのコンポーネントで、アプリケーション表のレコードを表示するか、変更するかをユーザーが選択できます。セキュリティを強化するには、不要な場合、このようなコンポーネントからのパブリック・アクセスを取り消す必要があります。また、メニュー・オプションに対して特定のアクセス権を持つメニュー・コンポーネントを使用して、アプリケーション・アクセスをより厳しく制御することもできます。

#### 6.3.2.4.6 管理ページへのアクセス制御

管理インタフェースにアクセスしてはならないユーザーが管理ページに入るのを防ぐには、次のページ・グループとそれらに含まれているページに対するアクセス権を制御する必要があります。

- 「企業ページ」。OracleAS Portal のホーム・ページが含まれているページ・グループです。
- 「Portal 設計時ページ」。「ビルダー」ページと「ナビゲータ」ページが含まれているページ・グループです。
- ポートレット・リポジトリ。

前述のページ・グループへのアクセスを制御するには、次の手順を実行します。

1. 「ナビゲータ」で、「ページ・グループ」をクリックします。
2. アクセス設定を変更するページ・グループの横の「プロパティの編集」をクリックします。
3. 「アクセス」タブをクリックします。
4. `MANAGE ALL` を特定のユーザーまたは特定のグループに付与します。たとえば、`DBA`、`PORTAL_ADMINISTRATORS`、`PORTAL_DEVELOPERS`、独自のグループなどです。
5. 終了したら、「OK」をクリックします。

これらのページ・グループの個々の管理ページへのアクセスを制御するには、次の手順を実行します。

1. 「ナビゲータ」で、「ページ・グループ」をクリックします。
2. アクセス設定を変更するページが含まれているページ・グループの横の「コンテンツ」をクリックします。
3. 「ページ」をクリックします。
4. アクセス設定を変更するページの横の「プロパティ」をクリックします。
5. 「アクセス」タブをクリックします。
6. `MANAGE ALL` を特定のユーザーまたは特定のグループに付与します。たとえば、`DBA`、`PORTAL_ADMINISTRATORS`、`PORTAL_DEVELOPERS`、独自のグループなどです。
7. 終了したら、「OK」をクリックします。

---

**注意：**「ビルダー」ページは、Portal 設計時ページというページ・グループのルート・ページです。そのアクセス設定を変更するには、Portal 設計時ページ・グループの横の「ルート・ページの編集」をクリックする必要があります。

---

#### 6.3.2.4.7 PL/SQL パッケージの保護

データベース内で `PUBLIC` に付与されている PL/SQL プロシージャの実行を保護する必要があります。これらのプロシージャでは、Web ブラウザを介して実行されるときにセキュリティ・ホールが発生します。たとえば、`dbms_*` パッケージのいくつかのプロシージャでは、機密情報にアクセスすることができます。`dads.conf` と呼ばれる `mod_plsql` 構成ファイルに含まれている `PlsqlExclusionList` ディレクティブを使用して、保護するパッケージを指定することができます。

---

**注意：** 以前のリリースでは、監視パッケージ (`wwmon_*`) も保護する必要がありました。リリース 9.0.4 以降では、これらのパッケージは削除されたため、保護する必要はなくなりました。

---

最高のセキュリティを確保するには、DAD ごとに `PlsqlExclusionList` ディレクティブで次のシステムのデフォルト設定を指定します。

```
PlsqlExclusionList sys.*
PlsqlExclusionList dbms_*
PlsqlExclusionList utl_*
PlsqlExclusionList owa_util.*
```

#### 6.3.2.4.8 SSL と「ログイン」ポートレットの使用の考慮

インターネットを通じて送信されるパスワードを保護するには、Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用して、OracleAS Portal が HTTPS で実行されるように構成します。ただし、SSL を有効または無効にするには、Portal 管理者権限が必要です。

#### 「ログイン」ポートレットとログイン・ページ

Portal では、「ログイン」ポートレットをページ（通常はホーム・ページ）に配置することができます。ユーザーがログインしていない場合は、このポートレットに、ユーザー名とパスワードのフィールド、およびログイン・ボタンが表示されます。ユーザーがログインしている場合は、ログアウト・リンクが表示されます。このポートレットを使用すると、専用のログイン・ページに移動しなくても、簡単にログインすることができます。このポートレットは、OracleAS Portal ページのレイアウト・スタイルでも表示されます。

ただし、このポートレットを使用する場合は、それが表示されているページが SSL で暗号化されていることを確認する必要があります。サイト全体で SSL 暗号化を行うと、それには多くのリソースが必要とされるため、パフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。さらに、「ログイン」ポートレットはセキュリティ上のリスクを招きます。ログイン画面は、ユーザーがログインしていない場合に表示されるため、表示されないようにすることはできません。したがって、パスワードに SSL 暗号化を行う場合は、「ログイン」ポートレットを使用しないでください。この制限を適用するには、「ポートレット・リポジトリ」で「ログイン」ポートレットに対するアクセス権を削除する必要があります。

#### 6.3.2.4.9 Oracle Internet Directory 接続での LDAP over SSL の使用の考慮

デフォルトでは、OracleAS Portal は、ディレクトリに接続するときに、SSL を使用しない LDAP を使用します。ディレクトリ・サーバーが SSL ポートに対応している場合は、LDAP over SSL (LDAPS) を使用するように OracleAS Portal を構成できます。

**関連項目：**『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

ディレクトリへの接続に SSL を使用するように OracleAS Portal を構成するには、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc`にある `/portal/admin/plsql/wwc` スクリプトを実行する必要があります。このスクリプトにより、ディレクトリに関連する次の OracleAS Portal 構成パラメータを変更できます。

- ディレクトリのホスト名
- ディレクトリ・ポート
- アプリケーション・ディレクトリのパスワード
- SSL 設定

OracleAS Portal をインストールすると、ディレクトリ・サーバーを使用するように自動的に構成されます。ただし、SSL を使用するかどうかなど、インストール後に一部の設定を変更することができます。ディレクトリの SSL 接続を変更するには、PORTAL スキーマの

secupoid.sql スクリプトを実行して、LDAP ポートのかわりに LDAPS ポートを指定すると、SSL を使用するように指定されます。

## secupoid.sql スクリプトの実行

この項では、SQL\*Plus から secupoid.sql を実行した例を示します。

この例では、LDAP をポート 389 で実行するようにディレクトリを初期構成しています。次に LDAPS ポートを 636 上で有効にします。サーバー名は変わらないため、以前の値を保持したまま、ポートを更新し、SSL を使用することを指定するために「Use SSL?」に対して「Y」を設定します。このスクリプトを実行すると、現行の構成が表示され、変更可能な構成を置き換えることができます。スクリプトの実行後に、OracleAS Portal のディレクトリ・キャッシュを更新することもできます。SSL を有効にしても、OracleAS Portal によってキャッシュされたディレクトリ情報は変更されません。このため、通常はこうした状況でキャッシュを更新する必要はありません。

```
SQL> @secupoid
Current Configuration
-----
OID Host: oid.domain.com
OID Port: 389
Application DN:
orclApplicationCommonName=PORTAL,cn=Portal,cn=Products,cn=OracleContext
Application Password: 3E8C2D1B87CB61011757239C5AA9B390
Use SSL? N
```

PL/SQL procedure successfully completed.

```
Updating OID Configuration Entries
Press [Enter] to retain the current value for each parameter
For SSL Connection to LDAP, specify "Y"es or "N"o
-----
Enter value for oid_host:
Enter value for oid_port: 636
Enter value for app_password:
Enter value for use_ssl_to_connect_to_ldap: Y
Enter value for refresh_with_new_settings: N
```

PL/SQL procedure successfully completed.

No errors.

このスクリプトの実行後に、OracleAS Portal はディレクトリが LDAPS を使用するように構成されます。



#### 6.3.2.4.10 アプリケーション・エンティティのパスワードの変更

OracleAS Portal では、ユーザーのパスワードをディレクトリに渡しません。OracleAS Single Sign-On のみで、この処理が行われます。ただし、OracleAS Portal は、そのアプリケーション・エンティティとパスワードを使用して、ディレクトリに対する認証を行います。

アプリケーション・エンティティのパスワードを変更する場合は、まずコマンドライン・ユーティリティまたは Oracle Directory Manager を使用して、ディレクトリ内にあるそのエントリを変更する必要があります。ディレクトリでアプリケーション・エントリを見つけるには、`secupoid.sql` スクリプトによって報告される DN が必要です。デフォルトでは、OracleAS Portal のアプリケーション・エントリは次のとおりです。

```
orclApplicationCommonName=PORTAL,cn=Portal,cn=Products,cn=OracleContext
```

パスワードを変更するには、アプリケーション・エントリの `userPassword` 属性に新しいパスワードを設定します。

ディレクトリでパスワードを変更したら、PORTAL スキーマの `secupoid.sql` スクリプトを実行し、そこでも新しいパスワードを指定します。このスクリプトを実行すると、OracleAS Portal でパスワードを暗号化し、ディレクトリに接続する必要があるときに取り出せるように格納しておくことができます。

`secupoid.sql` スクリプトの詳細は、C.3 項「[secupoid.sql スクリプトの使用](#)」を参照してください。

**関連項目：** アプリケーション・エンティティの詳細は、6.1.6.2.1 項「[OracleAS Portal の Oracle Internet Directory にあるディレクトリ・エントリ](#)」を参照してください。

### 6.3.3 データベースのセキュリティのための OracleAS Portal オプションの構成

ファイングレイン・アクセス・コントロールと保護アプリケーション・コンテキストがあれば、新しい局面でデータベース内のデータを保護することができます。

ファイングレイン・アクセス・コントロールは、仮想プライベート・データベースまたは行レベルのセキュリティと呼ばれることもあります。Oracle9i Database Server のファイングレイン・アクセス・コントロールは、実行時に、データベース表やビューに対して発行されるあらゆる SQL の問合せに条件 (WHERE 句) を動的にアタッチする機能です。この機能を使用すると、実行時にプロシージャで問合せを変更できます。問合せを実行しているユーザー、問合せを実行している場所、問合せを実行している日時などを調べ、それらの状況をふまえて条件を作成することができます。アプリケーション・コンテキストを使用すると、安全に情報を環境 (ユーザーが保持するアプリケーション・ロールなど) に追加したり、プロシージャや条件の中でもそれにアクセスしたりできます。

ファイングレイン・アクセス・コントロールの例として、異なるグループのユーザーが表示できる行を特定するセキュリティ・ポリシーを設けることができます。セキュリティ・ポリシーでは、ログインしているユーザーやそのユーザーが属しているグループに基づいて条件を作成します。

ファイングレイン・アクセス・コントロールやアプリケーション・コンテキストに関する詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) のテクニカル・ノート『How to Implement Fine Grained Access Controls and Secure Application Contexts』を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。



---

---

## OracleAS Portal の監視と管理

この章では、利用可能な監視および管理のツールについてと、そのようなツールを使用して OracleAS Portal を監視および管理する方法を説明します。

Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールまたは Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールから、OracleAS Portal を監視および管理することができます。また、OracleAS Portal のパフォーマンスを監視し、OracleAS Portal のアクセス特性を分析するために、OracleAS Portal Analytics を表示することができます。

**関連項目：** OracleAS Portal の監視と管理の詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「Portal Administrator Zone」を参照してください。

この章の内容：

- [Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールの使用](#)
- [Application Server Control コンソールの使用](#)
- [Application Server Control コンソールを使用した Portal の監視と管理](#)
- [OracleAS Portal Analytics の表示](#)
- [Oracle Application Server ポート情報の表示](#)

## 7.1 Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールの使用

Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールは、Oracle Management Service、Oracle Management Agent および Oracle Management Repository で構成される完全なエンタープライズ管理フレームワークです。Grid Control コンソールでは、次のことが可能です。

- 環境内のターゲットの管理
- 履歴傾向の監視
- アラートの構成
- 診断の表示
- アプリケーション・パフォーマンスの監視
- エンタープライズ構成の管理

---

---

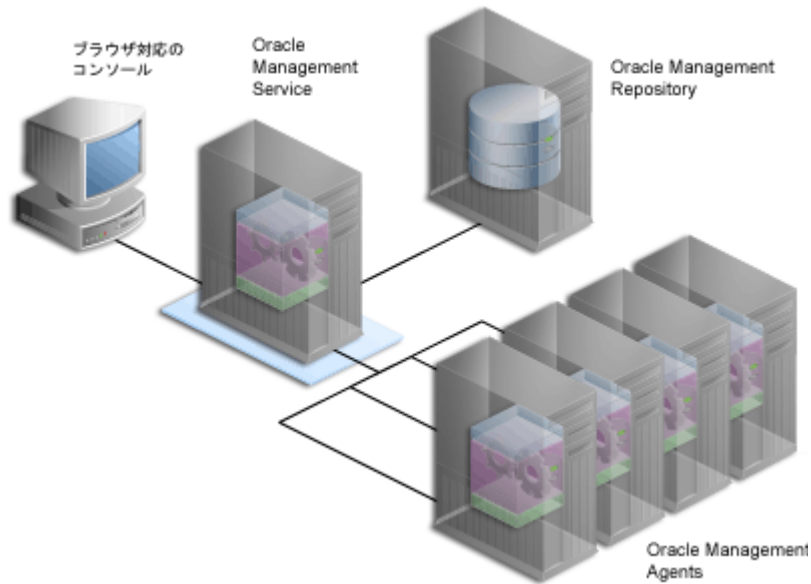
**注意：** 詳細は、『Oracle Enterprise Manager Grid Control インストールガイド』を参照してください。

---

---

Oracle Enterprise Manager 10g では、堅牢で信頼性が高く、グローバルに拡張性があり、現在のインターネット対応環境内で導入と運用がしやすい Web ベースのアーキテクチャが使用されています。このアーキテクチャ（[図 7-1](#) を参照）では、統合された 4 つのソフトウェア・コンポーネントが使用されます。そのうちの 3 つ、Oracle Management Service、Oracle Management Repository および Oracle Management Agent は内部で動作して、管理データの収集、編成およびルーティングを行います。ブラウザ対応のコンソールでは、Web ベースのユーザー・インターフェースが提供されるので、標準的な Web ブラウザから情報を管理できます。

図 7-1 Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールコンポーネントの概要



Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールは、Oracle Application Server と一緒に出荷されますが、個別にインストールする必要があります。OracleAS Portal の場合、Grid Control コンソールは、監視および履歴傾向の追跡には使用できますが、構成には使用できません。

通常、Grid Control コンソールへは、<http://<hostname>:7777/em/> の URL に移動することにより、アクセスできます。その後、監視対象の OracleAS Portal ターゲットへのアクセス権限を持つ有効な Grid Control コンソールのユーザー名とパスワードの組合せを使用してログインする必要があります。

正常にログインすると、Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールのホーム・ページが表示されます。

アプリケーション・サーバー・レベルまでドリルダウンするには、「ターゲット」タブをクリックしてから、「Application Server」サブタブをクリックします。利用可能なアプリケーション・サーバーのリストから、監視するアプリケーション・サーバーを選択します。これにより、選択したアプリケーション・サーバーのホーム・ページが表示されます。

**注意：** 各種の Oracle Application Server コンポーネントのホーム・ページの下部にある「関連リンク」セクションで「管理」リンクをクリックして Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールに移動し、監視および管理タスクを実行できます。Application Server Control コンソールに移動するときは、ias\_admin ユーザーとしてログインするよう要求されます。

アプリケーション・サーバーのホーム・ページでは、表示された任意のコンポーネントをクリックして、詳細情報を取得できます。たとえば、「Portal」コンポーネントがリスト表示されている場合、それをクリックすると、図 7-2 に示すような OracleAS Portal ターゲット・ページが表示されます。

図 7-2 Grid Control コンソール - Portal ターゲット・ページ



Portal ターゲット・ページでは、可用性の情報に加えて、ホーム・ページの平均ダウンロード時間をチャートで監視できます。

Grid Control コンソールは、次のことに役立ちます。

- 履歴傾向の監視

- OracleAS Portal メトリックの通知の設定
- OracleAS Portal メトリックしきい値の設定
- 最新アラートの表示
- 複数の Portal ターゲットからのメトリックの比較
- アプリケーション・パフォーマンス監視のための Web アプリケーションの使用

## 7.1.1 履歴傾向の監視

Grid Control コンソールでは、特定の期間に収集された様々な OracleAS Portal メトリックを確認できます。収集されるメトリックの範囲は、Management Agent のインストール時にデフォルトで構成されます。

図 7-3 は、監視可能な OracleAS Portal メトリックの種類のリストを示しています。

図 7-3 Grid Control コンソール - OracleAS Portal メトリック

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Grid Control

ホーム ターゲット デプロイ アラート ジョブ 管理システム

設定(管理) 設定(環境) ヘルプ ログアウト

ホスト Database Application Server Webアプリケーション グループ 全ターゲット

Portal: as904bjpsun2ee3jp.oracle.com\_Portal:portal > すべてのメトリック

すべてのメトリック

ターゲットから収集した時刻 2004/05/12 16:03:29

すべて開く | すべて閉じる

メトリック	しきい値	収集のステータス
▼ as904bjpsun2ee3jp.oracle.com_Portal:portal		
▶ Database Instance	なし	収集されていません
▶ Database Portlet Metrics	なし	収集されていません
▶ Database Providers Metrics	一部	最新収集時刻2004/05/12 14:38:58
▶ General Page Engine Metrics	一部	最新収集時刻2004/05/12 14:33:26
▶ Page Engine Response Code Metrics	なし	最新収集時刻2004/05/12 14:33:26
▶ Portal Homepage Metric	すべて	最新収集時刻2004/05/12 15:40:41
▶ Portal Metadata Repository Version Metric	なし	収集されていません
▶ Response Metric	すべて	最新収集時刻2004/05/12 15:24:46
▶ Syndication Server Status Metric	すべて	最新収集時刻2004/05/12 14:32:48
▶ Top Level Monitoring Status Metric	なし	収集されていません
▶ Ultra Search Status Metric	すべて	最新収集時刻2004/05/12 14:33:27
▶ Web Portlet Metrics	なし	収集されていません
▶ Web Providers Metrics	一部	収集されていません

関連リンク

[メトリックの管理](#)

ホーム | ターゲット | デプロイ | アラート | ジョブ | 管理システム | 設定(管理) | 設定(環境) | ヘルプ | ログアウト  
Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.  
Oracle Enterprise Managerのバージョン情報

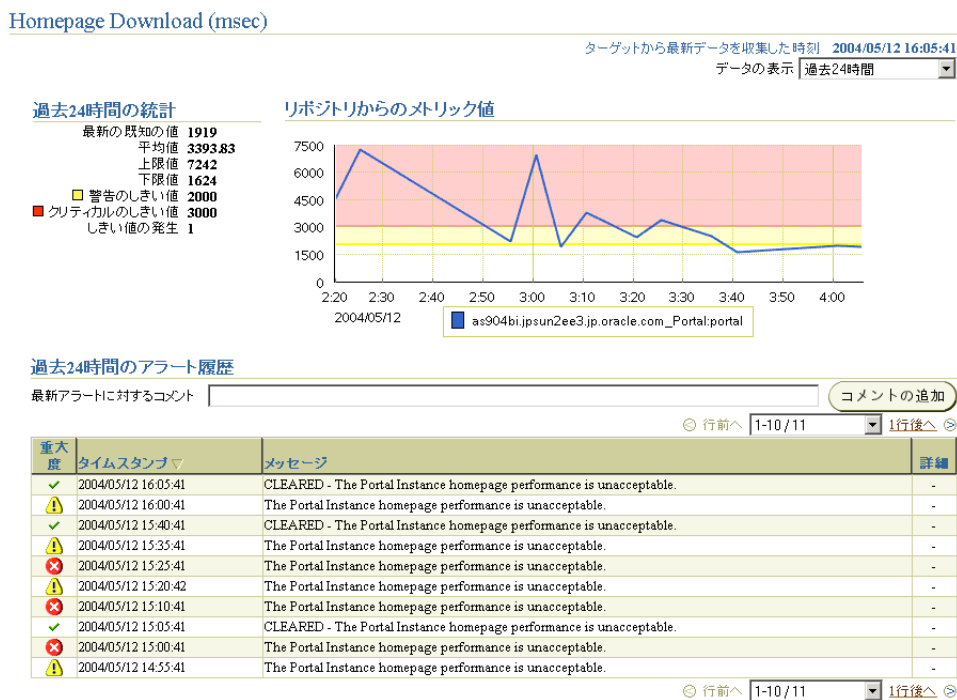
OracleAS Portal メトリックを使用して、履歴傾向を監視できます。たとえば、過去 31 日間のサイトの実行状況を確認するには、次の手順を実行します。

1. Grid Control コンソールのホーム・ページに移動します。

2. 「ターゲット」タブをクリックしてから、「Application Server」タブをクリックします。
3. 目的のアプリケーション・サーバーを選択します。
4. 「コンポーネント」表から、「Portal」ターゲットを選択します。
5. 「すべてのメトリック」リンクをクリックします。
6. Portal ホームページ・メトリック・ノードを展開します。
7. 「ホームページのダウンロード（ミリ秒）」メトリックをクリックします。

デフォルトでは、このメトリックについて過去 24 時間の間に収集されたすべてのデータが表に示されます。図 7-4 に表示される情報の例を示します。

図 7-4 Grid Control コンソール - OracleAS Portal メトリック情報



8. 期間を 31 日に変更するには、右上端にある「データの表示」ドロップダウン・リストから「過去 31 日間」を選択します。

**注意：** 詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概要』を参照してください。




## 7.1.2 複数の Portal ターゲットからのメトリックの比較

OracleAS Portal メトリック（現在選択されているメトリック）の詳細を別の OracleAS Portal ターゲットの同じメトリックの詳細と比較できます。

たとえば、portal1 の「ホームページのダウンロード（ミリ秒）」メトリックを portal2 と portal3 の「ホームページのダウンロード（ミリ秒）」メトリックと比較できます。比較は、「メトリック値履歴」チャートに描画されます。

メトリックを比較するには、次の手順を実行します。

1.  7-3 に示したように、OracleAS Portal メトリック・ページに移動します。
2. 目的のメトリック・ノードを展開し、関連するメトリックのリンクをクリックします。
3. 右上端にある「データの表示」ドロップダウン・リストから、このメトリックの分析に適した期間を選択します。
4. 「関連リンク」セクションの「ターゲットの比較」リンクをクリックします。
5. 比較する OracleAS Portal ターゲットを選択し、それらを「選択したターゲット」リスト・ボックスに移動して、「OK」をクリックします。

比較は、「メトリック値履歴」チャートに描画されます。

## 7.1.3 OracleAS Portal メトリックの通知の設定

Grid Control コンソールでは、あらかじめ設定したしきい値を特定のメトリックが超えたことを知らせる通知アラートを設定できます。

1. Oracle Enterprise Manager 10g 管理者が、送信メール・サーバー、スクリプト（オペレーティング・システム・コマンドまたは PL/SQL）または SNMP トラップの通知方法を少なくとも 1 つ以上設定していることを確認します。
  1. 右上端にある「設定」リンクをクリックします。
  2. 「通知方法」をクリックします。
2. 通知方法があれば、通知ルールを設定します。
  1. 右上端にある「設定」リンクをクリックします。
  2. 「通知ルール」リンクをクリックします。

このページから、通知ルールを作成し、Oracle Enterprise Manager 10g で通知を受信するターゲットと状態を選択できます。

---

---

**注意：** 詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概要』を参照してください。

---

---

## 7.1.4 OracleAS Portal メトリックしきい値の設定

Grid Control コンソールでは、OracleAS Portal メトリックしきい値を定義および調整できます。しきい値は、監視対象のメトリック値と比較される境界値です。警告のしきい値を指定して、監視対象の値がそのしきい値を超えたときに警告アラートが生成されるようにすることができます。アラートによって近い将来起こる問題が通知されるため、適切に処理することができます。

メトリックしきい値の編集は、組織の監視のニーズにあわせてしきい値を追加または変更できるため便利です。しきい値を定義するときは、多くの不要なアラートが生成されないような値を選択します。

OracleAS Portal に関連するメトリックを編集するには、[図 7-2](#) に示したような OracleAS Portal ターゲット・ページの下部にあるメトリックの管理リンクをクリックします。メトリックの管理ページに表示されるメトリックは、Oracle で提供されるデフォルトのメトリックまたは変更可能なしきい値を持つメトリックのいずれかです。[図 7-5](#) に例を示します。

**注意：** 詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概要』を参照してください。

**図 7-5 Grid Control コンソール - OracleAS Portal メトリックしきい値の編集**

Oracle Enterprise Manager 10g  
Grid Control

ホーム ターゲット デプロイ アラート ジョブ 管理システム

ホスト Database Application Server Webアプリケーション グループ 全ターゲット

Portal: as904bi.jp.sun2ee3.jp.oracle.com\_Portal-portal > メトリックの管理

メトリックの管理

しきい値 [メトリック・ベースライン](#)

しきい値の編集 現在のターゲットからのしきい値のコピー

保留中の変更: 0

メトリック	比較演算子	警告のしきい値	クリティカル のしきい値	レスポンス処理
Database Provider Portlets Average Time (msec)	>	4000	4500	
Database Provider Portlets Maximum Time (msec)	>	6000	10000	
Database Provider Status	=		DOWN	
Homepage Download (msec)	>	2000	3000	
Percentage of Database Provider HTTP 500 Response codes	>	10	15	
Percentage of Requests Timing Out in the Page Engine Queue	>	10	15	
Percentage of Web Provider HTTP 500 Response codes	>	10	15	
Status	=		0	
Syndication Server Status	=		0	
Ultra Search Status	=		0	
Web Provider Portlets Average Time (msec)	>	4000	4500	
Web Provider Portlets Maximum Time (msec)	>	6000	10000	
Web Provider Status	=		DOWN	

関連リンク

保留中の変更 過去の変更

しきい値 [メトリック・ベースライン](#)

## 7.1.5 最新アラートの表示

OracleAS Portal ターゲット・ページの「アラート」および「ホスト・アラート」セクション (図 7-2 を参照) には、最新アラートのリストが表示されます。

可用性またはパフォーマンスの問題を通知するアラートが生成されたときは、Grid Control コンソールで、アラートをトリガーしたメトリックの詳細を確認できます。これには、メトリックの過去 1 週間または 1 か月の傾向を示す履歴値の情報も含まれます。

## 7.1.6 アプリケーション・パフォーマンス監視のための Web アプリケーションの使用

Grid Control コンソールでは、OracleAS Portal サイトのアプリケーション・パフォーマンス監視に Web アプリケーション機能を使用できます。エンド・ユーザー・レスポンス時間や代理トランザクションのパフォーマンスを監視できます。複数のターゲットを、OracleAS Portal アプリケーションの配置に対応する 1 つの Web アプリケーション・グループにまとめることができます。たとえば、データベースと OracleAS Portal で使用される OracleAS Single Sign-On ターゲットを同じ Web アプリケーション・グループに追加できます。

- **エンド・ユーザー・レスポンス時間の監視** : Web アプリケーションのプロパティで指定されたアプリケーション・ホームページに基づくすべての URL が監視されます。特に重要な URL は、URL 監視リストで識別できます。
- **代理トランザクションの監視** : 記録されたアプリケーション・アクティビティ (トランザクション) が、クライアント・ロボット (ビーコン) によって一定の間隔で再生されます。アプリケーションの可用性は、選択したビーコンによって再生される、選択した代理トランザクション・サブセットの可用性として定義されます。

---

---

**注意:** 詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概要』を参照してください。

---

---

## 7.2 Application Server Control コンソールの使用

Application Server Control コンソールは、Oracle Application Server をインストールするときに含まれます。OracleAS Portal の観点からは、Oracle Application Server 用の管理コンソールとみなされます。Application Server Control コンソールによって、ユーザーは次の管理作業と構成の操作を実行することができます。

- コンポーネントの有効化および無効化
- クラスタの管理
- サービスの開始および停止
- ログおよびポートの表示
- リアルタイム監視の実行
- Oracle Application Server Middle-Tier が使用するインフラストラクチャ・サービスの変更

この項の内容：

- [Application Server Control コンソールへのアクセス](#)
- [Application Server Control コンソールを使用した Portal の構成](#)

### 7.2.1 Application Server Control コンソールへのアクセス

お使いの Web ブラウザで次の URL を入力して、Application Server Control コンソールにアクセスできます。

```
http://<hostname>:<port>
```

たとえば、`http://mgmthost.company.com:1810` のようになります。ポートは通常 1810 ですが、Application Server Control コンソールに指定できるポートの範囲は、この値より 1 ずつ増分できます。

スタンドアロンのアプリケーション・サーバー・インスタンスが複数ある場合、Application Server Control コンソールの開始ページは、Oracle Application Server ファーム・ホーム・ページです。インスタンスの 1 つをクリックすると、Oracle Application Server インスタンス・ホーム・ページが表示されます。このページには、システム・コンポーネントの表が含まれています。この表から、監視および管理の目的で、アプリケーション・サーバーの各コンポーネントのホーム・ページを表示することができます。

OracleAS Portal が構成されている場合は、「Portal:<Portal スキーマ名 >」がこの表に表示されます。デフォルトの Portal スキーマ名は、portal です。

## 7.2.2 Application Server Control コンソールを使用した Portal の構成

「Portal:portal」が「システム・コンポーネント」表に表示されていない場合、Portal はまだ構成されていません。Oracle Application Server コンポーネントをインストールし、まだ構成していない場合は、「システム・コンポーネント」表の上に「コンポーネントの構成」ボタンが表示されます。

---

---

**注意：** チェック・ボックスで選択したコンポーネントのみを開始または停止することができます。

---

---

次の手順を実行して、OracleAS Portal を構成します。

1. Oracle Application Server ホーム・ページで、「コンポーネントの構成」ボタンをクリックします。
2. 「コンポーネントの選択」ドロップダウン・リストから、「Portal」を選択します。
3. 「パスワード」フィールドに、Oracle Application Server インスタンスの管理パスワードを入力します。
4. 「終了」をクリックします。

---

---

**注意：** デフォルトでは、OracleAS Portal の中間層は1つの Portal インスタンスで構成されます。このインスタンスの DAD 名と OracleAS Metadata Repository スキーマ名はどちらも portal です。「システム・コンポーネント」表に「Portal:portal」がすでに表示されている場合は、「コンポーネントの構成」ボタンを使用して、指定された中間層に追加の OracleAS Portal インスタンスの構成はできません。

---

---

## 7.3 Application Server Control コンソールを使用した Portal の監視と管理

OracleAS Portal を監視および管理するには、Oracle Application Server インスタンス・ホーム・ページにあるシステム・コンポーネントのリスト内の「Portal:<Portal スキーマ名>」をクリックします。デフォルトの Portal スキーマ名は、portal です。OC4J:Portal は Portal サブレットのコンテナであり、監視する実際の Portal サブレットではありません。

図 7-6 は、表示される OracleAS Portal 監視のメイン・ページを示しています。

このページは、OracleAS Portal から直接アクセスすることもできます。「Portal ビルダー」ページの「管理」タブをクリックし、次に「Portal」サブタブにある「Portal サービスの監視」をクリックします。

---

**注意：** ポートやプロトコルなど、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの詳細が変更された場合は、OracleAS Portal によって提供されるリンクを更新する必要があります。そうしないと動作しません。詳細は、[7.3.8 項「Oracle Enterprise Manager 10g への OracleAS Portal リンクの更新」](#)を参照してください。

---

図 7-6 Application Server Control コンソール - メインの OracleAS Portal 監視ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ログ 設定(環境) ヘルプ

Application Server: as904bi.ipsun2ee3.jp.oracle.com > Portal:portal

Portal:portal

最終更新時刻 2004/05/11 17:07:38

**一般**

状態	稼働中
時間当たりの平均ページ・リクエスト	277
ホームページ・ダウンロード(秒)	1.789
監視サービス	稼働中

**Portalによって使用されるOracleAS Metadata Repository**

状態	稼働中
名前	asdb
起動時間	2004/04/20 14:49:07
データベースのバージョン	9.0.1.5.0
リポジトリ・バージョン	9.0.4.0.99

**コンポーネント・ステータス**

Portalによって使用されるOracleASコンポーネント。

コンポーネント	稼働中/停止中
HTTP Server	↑
mod_plsqlサービス	↑
Web Cache	↑
Parallel Page Engineサービス	↑
ブローカイダ	🔍
Syndication Services	↑
Ultra Search	↑

**重大度ステータス**

重大度ステータスを示すためにPortalによって使用されるOracleASコンポーネント。

コンポーネント	重大度
mod_plsqlサービス	✓
Parallel Page Engineサービス	✓

OK ✓ 警告 ⚠ 致命的 ✗ 不明 🔍

**管理**

[PortalのWeb Cache設定](#)

**関連リンク**

[Portalエンド・ユーザー・デフォルト・ホームページ](#)

図 7-6 に示すように、メインの OracleAS Portal 監視ページには、次のような様々なセクションとリンクが含まれています。

- 「一般」
- 「Portal によって使用される OracleAS Metadata Repository」
- 「Portal の Web Cache 設定」 ページ
- 「コンポーネント・ステータス」
- 「重大度ステータス」
- 「関連リンク」
- 「ログ」 リンク

### 7.3.1 一般

このセクションを使用して、OracleAS Portal インスタンスの一般の状態、つまり現在稼働中か停止中かを表示します。

時間当たりのページ要求の平均数の他、現行のホーム・ページのダウンロード速度も表示できます。さらに、監視サービスが起動および稼働中であるかどうかも確認できます。

### 7.3.2 Portal によって使用される OracleAS Metadata Repository

このセクションを使用して、OracleAS Metadata Repository 関連のメトリックが表示されます。これは、OracleAS Portal スキーマが含まれているリポジトリです。

「OracleAS Metadata Repository」が含まれたデータベースが稼働中かどうかと、そのデータベースのリリース番号、データベース名および OracleAS Metadata Repository のリリース番号も表示されます。

### 7.3.3 Portal の Web Cache 設定

Application Server Control コンソールから、OracleAS Portal が使用する必要がある OracleAS Web Cache 設定を指定することができます。このページで OracleAS Web Cache のプロパティを設定すると、この中間層にある Portal 依存性設定ファイルが自動的に更新され、ptlconfig スクリプトが実行されます。詳細は、[付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」](#)を参照してください。

「管理」の下の「Portal の Web Cache 設定」リンクをクリックすると、[図 7-7](#) で示している「Portal の Web Cache 設定」ページが表示されます。

---

---

**注意：** OracleAS Web Cache の設定（リスニング・ポートなど）を変更すると、OracleAS Portal URL を変更できます。これを行った場合、モバイル設定を更新する必要があります。詳細は、[付録 C.8 「cfgiasw スクリプトを使用したモバイルの構成」](#)を参照してください。

---

---



図 7-7 Application Server Control コンソール - Oracle Application Server Web Cache 設定

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ログ 設定(環境) ヘルプ

Application Server: as904bi.jp.sun2ee3.jp.oracle.com > Portal:portal > PortalのWeb Cache設定

### PortalのWeb Cache設定

Portalが使用するOracle Web Cache設定を指定します。

ホスト	<input type="text" value="jpsun2ee3.jp.oracle.com"/>
リスニング・ポート	<input type="text" value="7778"/>
リスニング・ポートSSL使用可能	<input type="text" value="いいえ"/>
管理用ポート	<input type="text" value="4000"/>
無効化用ポート	<input type="text" value="4001"/>
無効化用ユーザー名	<input type="text" value="invalidator"/>
無効化用ユーザー・パスワード	<input type="password" value="XXXXXXXXXX"/>
パスワードの確認	<input type="password" value="XXXXXXXXXX"/>

**重要**

ここでWeb Cacheプロパティを設定すると、プロパティに対するPortalのベースクティブが変更されますが、実際のWeb Cache構成プロパティは変更されません。Web Cache管理画面で適切なWeb Cacheリスニング・ポートの変更を行い、HTTPサーバー管理画面でWeb Cacheリスニング・ポートと一致するようにHTTPサーバーポートデレクティブを更新してください。

「Portal の Web Cache 設定」 ページで、表 7-1 で詳しく説明する設定値を変更できます。

表 7-1 Portal の Web Cache 設定

設定	説明
ホスト	OracleAS Web Cache に使用されるホスト名。 abc.company.com など。
リスニング・ポート	OracleAS Web Cache がリスニングするポート。7778 など。
リスニング・ポート SSL 使用可能	OracleAS Web Cache が SSL 対応かどうかを示します。有効な値は、「はい」および「いいえ」です。
管理用ポート	OracleAS Web Cache の管理用ポート。4000 など。
無効化用ポート	失効メッセージの送信先である OracleAS Web Cache の失効ポート。4001 など。
無効化用ユーザー名	失効メッセージを送信するのに使用されるユーザー名。 invalidator または administrator のいずれかです。
無効化用ユーザー・パスワード	失効パスワード。デフォルトは invalidator です。
パスワードの確認	前に指定したパスワードをもう一度入力します。

---

---

**注意：** OracleAS Web Cache のプロパティを設定すると、これらプロパティの Portal のパースペクティブは変更されますが、実際の OracleAS Web Cache 構成プロパティは変更されません。適切な OracleAS Web Cache 構成ページに対して、対応する変更を行う必要があります。OracleAS Web Cache の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

通常、OracleAS Portal によって処理されるホスト名とポート番号は、OracleAS Web Cache のホスト名とポート番号です。これは、単純な構成では、ブラウザの要求が OracleAS Web Cache へ直接送られるためです。ただし、ロード・バランス・ルーター (LBR)、または OracleAS Web Cache のフロントエンドに設定された逆プロキシ・サーバーがある構成では、このページに定義されたホスト名とポート番号は、LBR または逆プロキシ・サーバーのものを反映している必要があります。

この構成で、OracleAS Web Cache の失効メッセージが、LBR または逆プロキシ・サーバーではなく、OracleAS Web Cache ホストに直接送信されるようにできます。公開されたホスト名が OracleAS Web Cache の失効化で使用されるホスト名と異なる場合は、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの「Portal の Web Cache 設定」ページを使用して、これらの設定を確立することができません。そのかわりに、MIDTIER モードで `-type OHS` を指定し、`host` パラメータを使用して LBR または逆プロキシ・サーバーのホスト名を指定し、`-chost` パラメータで OracleAS Web Cache のホスト名を定義して、OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を使用する必要があります。

---

---

次の例では、「Portal の Web Cache 設定」ページを使用して、OracleAS Portal が別のホストの OracleAS Web Cache を使用するように構成しています。

#### **例 7-1 例：別のホストの OracleAS Web Cache を使用するための OracleAS Portal の構成**

OracleAS Portal の中間層がインストールされているのとは別のホストで OracleAS Web Cache を使用するように OracleAS Portal を構成するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Portal がインストールされている中間層で、Application Server Control コンソールにアクセスします。
2. 構成する Portal インスタンスを選択します。通常これは、Portal:portal です。
3. 「Portal の Web Cache 設定」を選択します。
4. 「ホスト」プロパティを新しいホスト名に更新し、その他のプロパティも必要に応じて変更します。
5. 「OK」をクリックします。

## 7.3.4 コンポーネント・ステータス

OracleAS Portal が使用する Oracle Application Server コンポーネントとその状態が一覧表示されます。また、個々の Oracle Application Server コンポーネントについて、より詳しい情報へドリルダウンすることもできます。表示されるコンポーネントは、次のとおりです。

- [HTTP Server](#)
- [mod\\_plsql サービス](#)
- [Web Cache](#)
- [Parallel Page Engine サービス](#)
- [プロバイダ](#)
- [Syndication Services](#)
- [Ultra Search](#)

パフォーマンス上の理由から、重要でないメトリック・データ、つまり応答以外のメトリックは、Application Server Control コンソールのメトリックのキャッシュによって収集されるため、多少古い場合があります。最新のメトリック・データを表示するには、ページの左上端にある「更新」リンクをクリックします。

### 7.3.4.1 HTTP Server

「HTTP\_Server」リンクをクリックすると、Oracle HTTP Server ホーム・ページが表示されます。このホーム・ページが、Oracle HTTP Server の単一インスタンスを管理するための開始位置です。たとえば、ここから Oracle HTTP Server を再起動することができます。

### 7.3.4.2 mod\_plsql サービス

「mod\_plsql サービス」をクリックすると、[図 7-8](#) に示す mod\_plsql サービス・ホーム・ページが表示されます。このホーム・ページから、mod\_plsql に関連した設定とメトリックを監視するだけでなく、構成することもできます。

Grid Control コンソールでは mod\_plsql サービスの監視のみが可能ですが、Application Server Control コンソールでは実際の構成も行うことができます。

図 7-8 Application Server Control コンソール - mod\_plsql サービスの監視ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ログ 設定(環境) ヘルプ

ファーム > Application Server m21ebi.sgtcnsun03.cn.oracle.com > Portal:portal > mod\_plsqlサービス

▼ キャッシュ ▼ DADs ▼ エラーおよびレスポンス・コード

---

## mod\_plsqlサービス

最終更新時刻 2003/08/05 5:33:52

### 一般

モジュールをロード  
時間当たりの平均リクエスト **はい**  
**128**

### HTTPレスポンス・コード

レスポンス成功 **✓ (100.0%)**

HTTPレスポンスおよびエラー・コード	%	数値
200 - リクエスト成功	73.4	102
300 - リダイレクト成功	26.6	37
400 - リクエストを完了できずに失敗	0.0	0
500 - サーバー・エラーのために失敗	0.0	0
合計	100	139

このページ内の次のサブセクションによって、mod\_plsql サービスを監視および構成することができます。

#### ■ 一般

mod\_plsql モジュールがメモリーに正常にロードされたかどうかが表示されます。また、mod\_plsql サービスの起動後に時間当たりで受け取ったリクエスト数も示されます。

#### ■ HTTP レスポンス・コード

HTTP のレスポンス・コードおよびエラー・コードが表示されます。各レスポンス・コードに対応して、リクエスト数およびこのリクエスト数が全体に占める割合が表示されます。

#### ■ キャッシュ

図 7-9 に示したように、「キャッシュ設定」が表示されます。このセクションには、キャッシュされたコンテンツのリクエスト数と、キャッシュがヒットした割合およびミスした割合が表示されます。キャッシュ・ミスの場合は、ミスの原因がコンテンツの失効か、または新しいコンテンツが追加されたためかが示されます。ミスの割合が高い場合は、キャッシュを調整することができます。

このページでキャッシュの構成設定を更新するには、「構成」をクリックします。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g mod\_plsql ユーザーズ・ガイド』

図 7-9 Application Server Control コンソール - キャッシュ設定

キャッシュ Ⓜ 最初に戻る

---

キャッシュ

	セッション・キャッシュ	コンテンツ・キャッシュ
キャッシュ動作	稼働中	稼働中
起動してからのリクエスト数	135	30
キャッシュ・ヒット	39.3%	90%
キャッシュ・ミス(新規)	60%	0%
キャッシュ・ミス(失効)	0.7%	10%

キャッシュ設定

キャッシュ	On
キャッシュ・ディレクトリ	/private/nli/ora9ias/Apache/modplsql/cache
総キャッシュ・サイズ(MB)	20
キャッシュ可能ファイルの最大サイズ(byte)	1048576
消去時刻[frequency] [hh:mm]	土曜 23:00
キャッシュ・ファイルの最長保存期間(日)	30

構成

## ■ DAD

既存 DAD の状態が表示されます。データベース・アクセス記述子 (DAD) は、アプリケーションが HTTP リクエストを満たすために Oracle データベースに接続する方法を示す値のセットです。またここで、DAD を作成、編集および削除することもできます。[4.5.3 項「Portal DAD の構成」](#)も参照してください。

## ■ エラーおよびレスポンス・コード

HTTP エラーと SQL エラーのページへのリンクがあります。次の詳細情報を入手することができます。

- mod\_plsql によって返された HTTP レスポンス・コードの分析
- mod\_plsql で最近発生した 10 個の SQL エラー
- エラーのタイプ別にグループ化した、mod\_plsql で発生した SQL エラー

### 7.3.4.3 Web Cache

「Web Cache」リンクをクリックすると、OracleAS Web Cache ホーム・ページが表示されます。このページを使用して、キャッシュの状態、リソースの使用率、キャッシュの効率性など、OracleAS Web Cache の全体的なパフォーマンスの統計を収集します。このページ内の次のセクションによって、Oracle Application Server Web Cache の設定を監視および構成することができます。

- 「一般」：OracleAS Web Cache の現在の状態が表示されます。
- 「アクティビティ」：キャッシュのリソースおよびパフォーマンス情報が表示されます。
- 「パフォーマンス」：キャッシュ全体のパフォーマンスの監視、「オリジナル・サーバー」の状態とパフォーマンスの監視、およびキャッシュが起動されてから最も多いリクエストの表示が可能です。
- 「管理」：OracleAS Web Cache Manager の URL (http://web\_cache\_hostname:admin\_port/webcacheadmin) にアクセスできるようにします。

### 7.3.4.4 Parallel Page Engine サービス

「Parallel Page Engine サービス」リンクをクリックすると、[図 7-10](#) に示す Parallel Page Engine (PPE) の監視ページが表示されます。このページから、次のような詳細な PPE 統計を入手することができます。

- ポートレット・レスポンス・コード
- ページ・レベルのキャッシュ
- OC4J Portal コンテナの状態
- PPE 要求キューの統計

**関連項目：** PPE の詳細は、[付録 D 「Parallel Page Engine の構成」](#) を参照してください。

図 7-10 Application Server Control コンソール - Parallel Page Engine サービスの監視ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ログ 設定(環境) ヘルプ

ホーム > Application Server: m21ebi.sgtcnun03.cn.oracle.com > Portal:portal > Parallel Page Engineサービス

Parallel Page Engineサービス

最終更新時刻 2003/08/05 5:50:36

**一般**

状態 **稼働中**  
 起動時間 2003/08/03 2:28:40  
 OC4Jインスタンス [OC4J\\_Portal](#)

**ポートレット・レスポンス・コード**

レスポンス成功 **✓ (100%)**  
 解決したリダイレクト **0%**

HTTPレスポンスおよびエラー・コード	%	数値
200 - リクエスト成功	100	863
300 - 解決できなかったリダイレクト	0	0
400 - リクエストを完了できず失敗	0	0
500 - サーバー・エラーのために失敗	0	0
合計	100	863

**状態**

**コンテンツ・キュー**

キューの長さ: 現在 **0**  
 キューの長さ: 最大 **5**  
 キューの長さ: 平均 **1.0**  
 キューに入っている平均時間(ms) **1.8**  
 キューでタイムアウトしたリクエスト **0%**

**キャッシング**

ページの総リクエスト数 **1622**  
 キャッシュ有効ページの総リクエスト数 **7**  
 キャッシュ有効ページのヒット数 **57.1%**

### 7.3.4.5 プロバイダ

「プロバイダ」をクリックすると、図 7-11 に示すプロバイダの監視ページが表示されます。このページから、Application Server Control コンソール内の PPE によって要求されたプロバイダとポートレットの、パフォーマンス、状態、HTTP レスポンス・コード（ポートレットのみ）の概要を知ることができます。

---

**注意：** パフォーマンス上の理由から、「コンポーネント・ステータス」表（図 7-6 を参照）に示されるプロバイダの「稼働中 / 停止中」値は、常に「不明」に設定されます。

---

図 7-11 Application Server Control コンソール - プロバイダの監視ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ログ 設定(環境) ヘルプ

ホーム > Application Server: m21ebi.sgtcnsun03.cn.oracle.com > Portal:portal > プロバイダ  
プロバイダ

最終更新時刻 2003/11/20 18:07:07

タイプ	リクエスト・プロバイダ	リクエスト	平均時間(秒)	最大時間(秒)	パフォーマンス	状態	
Web		2	10	8.125	28.898	✓	↑
データベース		6	1748	0.672	16.290	✓	↑

パフォーマンス

Webプロバイダ

名前	Portal名	リクエスト	平均時間(秒)	最大時間(秒)	キャッシュ・ヒット	パフォーマンス	オンライン	状態
OMNIPORTLET	portal	7	9.994	28.898	0	✗	↑	↑
WEBCIPPING	portal	3	3.764	9.124	0	✓	↑	↑

データベース・プロバイダ

名前	Portal名	リクエスト	平均時間(秒)	最大時間(秒)	キャッシュ・ヒット	パフォーマンス	オンライン	状態
PORTAL_CONTENT_AREA	portal	85	2.127	16.290	0	✓	↑	↑
LOGIN_SERVER	portal	718	1.058	11.909	0	✓	↑	↑
COMMUNITYPROVIDER	portal	1	0.976	0.976	0	✓	↑	↑
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY	portal	58	0.491	6.755	0	✓	↑	↑
ORACLE_PORTAL	portal	857	0.232	13.991	0	✓	↑	↑
ORACLE_REPORTS_SECURITY	portal	29	0.211	4.067	27	✓	↑	↑

「プロバイダ」ページでは、Web プロバイダとデータベース・プロバイダが区別されます。表示されたプロバイダをクリックして、プロバイダが所有する個々のポートレットについての詳細なデータを表示できます。

監視できるメトリックは、次のとおりです。

- 「平均時間 (秒)」: ポートレットをリクエストするための平均レスポンス時間。
- 「最大時間 (秒)」: ポートレットをリクエストするための最大レスポンス時間。
- 「リクエスト」: このプロバイダによってサービスされたリクエストの数。
- 「キャッシュ・ヒット」: キャッシュがアクセスされた回数。
- 「オンライン」: プロバイダが現在オンラインかどうかを示します。
- 「パフォーマンス」: プロバイダが予想どおりに実行されているかどうかを示します。
- 「状態」: 特定のプロバイダが稼働中かまたは停止中かを示します。



### 7.3.4.6 Syndication Services

「Syndication Services」リンクをクリックすると、Oracle Application Server Syndication Services の監視ページが表示されます。このページから、シンジケーション関係の確立（オファーと「サブスクリプション」）、配信ルールに基づくコンテンツの転送（契約）および結果分析（アクセス・ログ）を自動化する Oracle Application Server Syndication Services を管理することができます。

次の管理オプションが、このページで利用できます。

- 「オファー管理」：コンテンツ・プロバイダからのオファーおよび関連付けられたオファー契約を表示、選択、作成および管理します。
- 「コンテンツ・プロバイダ」：コンテンツ・プロバイダを登録および管理し、コンテンツ・プロバイダに所属する外部コンテンツ・リポジトリへのインタフェースを提供するコンテンツ・プロバイダ・コネクタを表示します。
- 「サブスクリプション」：受け入れられたオファー契約と承認申請の状態を表示および管理し、失効または終了した承認申請を消去します。
- 「システム・プロパティ」：ログにアクセスし、ドメイン情報を編集し、スケジューラのプロパティを編集し、HTTP/S および SMTP トランスポートのプロパティを編集できるようにします。
- 「アクセス・ログ」：Oracle Application Server Syndication Services へのすべてのユーザー・アクセス・レコードを表示および管理します。

詳細は、[第 11 章「OracleAS Portal へのコンテンツのシンジケート」](#)を参照してください。

### 7.3.4.7 Ultra Search

「Ultra Search」リンクをクリックすると、「Oracle Ultra Search 管理」ページが表示されます。このページから、Oracle Ultra Search を構成することができます。詳細は、[第 8 章「OracleAS Portal の検索機能の構成」](#)を参照してください。

## 7.3.5 重大度ステータス

OracleAS Portal が使用する Oracle Application Server コンポーネントが一覧表示され、重大度ステータスが表示されます。表 7-2 で、報告される重大度ステータスのレベルについて説明します。

---

---

**注意：** 重大度レベルのしきい値は、targets.xml 内に設定されます。

---

---

**表 7-2 重大度レベルのステータスの説明**

アイテム	説明
OK	コンポーネントは正常に実行されています。
警告	コンポーネントに問題があります。
致命的	コンポーネントに重大な問題があります。
不明	コンポーネントが停止しているので、ステータスを示すのに十分な情報がありません。

## 7.3.6 関連リンク

監視中の OracleAS Portal のホーム・ページへ移動するための「Portal エンド・ユーザー・デフォルト・ホームページ」リンクが含まれています。

## 7.3.7 「ログ」リンク

ログ・ファイルを使用して詳細な診断を実行するには、「ログ」リンクをクリックします。Application Server Control コンソール内では、各 Oracle Application Server コンポーネントのホーム・ページの一番上と一番下にこのリンクがあります。

**関連項目：** 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』

## 7.3.8 Oracle Enterprise Manager 10g への OracleAS Portal リンクの更新

OracleAS Portal には、Portal を監視および管理するための Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールへのリンクが用意されています。「Portal サービスの監視」リンクにアクセスするには、OracleAS Portal の「管理」タブをクリックし、「サービス」ポートレットを見つけます。

ポートやプロトコルなど、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの詳細が変更された場合は、OracleAS Portal によって提供されるリンクを更新する必要があります。そうしないと動作しません。

これを行うには、次の手順を実行します。

1. Portal 中間層にある `iasconfig.xml` ファイルを編集します。

これは通常、`ORACLE_HOME/portal/conf` にあります。詳細は、付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」を参照してください。

2. 必要に応じて、Portal インスタンスの EMComponent 要素を更新します。
3. 次のスクリプトを実行して、新しい設定で Oracle Application Server Metadata Repository を更新します。

```
ORACLE_HOME/portal/conf/ptlconfig -dad <dad> -em
```

4. OracleAS Web Cache のキャッシュを消去して、OracleAS Portal つまり「サービス」ポートレットに、更新されたリンクを表示します。

「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックし、「キャッシュ」タブをクリックして、「Web Cache 全体を消去」を選択します。

### 7.3.9 Oracle9iAS Portal リポジトリ (9.0.2) の監視の有効化

Oracle Application Server 10g (9.0.4) の中間層では、Oracle9iAS Portal リポジトリのリリース 9.0.2 を使用できます。Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールでこのリリースの Oracle9iAS Portal を監視できるようにするには、インストール後にいくつかの追加手順を実行する必要があります。

これを実行しないと、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールで、Oracle9iAS Portal のリリース情報と Oracle9iAS Portal Metadata Repository の情報 (データベースのリリースと開始時刻) にアクセスできません。また、Oracle HTTP Server ログに、パッケージの欠落エラー (WWC\_MONITORING) が表示されます。

1. SQL\*Plus で、SYS として接続します。
2. 中間層の Oracle ホームの `<upgrade_directory>/wwc/` にあるスクリプト `cfgvr902.sql` を実行します。

引数として、`<portal schema name>` を使用します。

このスクリプトは、Oracle9iAS Portal リポジトリ (9.0.2) が接続されている Oracle Application Server (9.0.4) の中間層にのみあります。スクリプトは、インフラストラクチャを実行している Oracle ホームにはありません。

たとえば、Oracle9iAS Portal リポジトリ (9.0.2) のスキーマ名が `portal` で、中間層が `/homes/portalMid904/` から実行されている場合は、次のように入力します。

```
/homes/portalMid904/portal/admin/plsql/wwc/cfgvr902.sql portal
```

3. エラーがない場合は、`portal` スキーマへの接続時に、次の権限付与を実行します。
  - a. SQL\*Plus で、PORTAL として接続します。
  - b. 次のように入力して、新しい WWC\_MONITORING パッケージから監視コンポーネントにアクセスできるようにします。

```
grant execute on WWC_MONITORING to PUBLIC;
```

## 7.4 OracleAS Portal Analytics の表示

OracleAS Portal Analytics には、次のものが含まれます。

- パフォーマンス・レポート
- 動作レポート

### 7.4.1 mod\_plsql ログからの OracleAS Portal の動作レポート

利用できるのは、mod\_plsql のパフォーマンス・ログ・サービスによって収集されたデータに対して実行された OracleAS Portal 動作レポートのセットです。このログ・サービスを実装する方法の完全な説明は、9.5 項「パフォーマンス・レポートの生成」を参照してください。これらのレポートによって次のような情報が返されます。

- 日ごとのピークのログイン時間
- 1日に Portal が受け入れたログイン数
- ポートレットの実行時間
- 最も低速なポートレット
- 1日に Portal が受け取った合計ヒット数
- 最も使用頻度の高いポートレットと低いポートレット
- ユーザーに表示されたページまたはポートレットの頻度
- 1日にログインした個別ユーザー数
- アクセスされたポートレット数
- 1日に受け取ったページごとのヒット数
- 1日に受け取ったポートレットごとのヒット数
- IP アドレスまたはホスト名別の情報の分析

その他の詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) にあるテクニカル・ノート『Object Access Reporting from the Performance Logs in OracleAS Portal』を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。



## 7.4.2 Portal の動作ログの表からの OracleAS Portal 動作レポート

OracleAS Portal 内でのオブジェクトおよび動作をログ記録し、データ分析用のレポートを生成することができます。たとえば、OracleAS Portal ユーザーが特定のページを作成、編集または削除するたびに、動作ログの表にエントリを追加することができます。

認可されたユーザーは誰でも、OracleAS Portal のログ・レジストリ・レコードを表示することができます。ただし、Portal 管理者のみが、ログに記録される情報を設定することができます。詳細は、7.4.2.2 項「ログに記録されるイベントの選択」を参照してください。

---

**注意：** OracleAS Web Cache を OracleAS Portal アーキテクチャ内に導入することによって、OracleAS Portal の動作ログの表内に記録される動作のいくつかが不正確になっています。このような動作には、表示、実行（レポート、チャートおよび階層）、および表示設定があります。ログに記録されたその他のすべての動作は引き続き正確であるため、動作ログの表とビューは、OracleAS Metadata Repository 内にあります。

---

### 7.4.2.1 ログに記録されるイベント

表 7-3 に、様々な Portal オブジェクトについてログに記録されるイベントをまとめます。

**表 7-3 OracleAS Portal オブジェクトについてログに記録されるイベント**

Portal オブジェクト	イベント
ページ	作成、編集、削除、カスタマイズ
アイテム	作成、編集、削除、移動、チェックアウト、チェックイン
アプリケーション・コンポーネント	作成、編集、削除、実行（レポート、チャート、階層を除く）、コピー、エクスポート、名前の変更、生成、アクセス制御、管理、挿入、更新、保存
ポートレット	ページへの追加、ページからの削除
ポートレット・インスタンス	非表示、カスタマイズ
検索	検索

---

**注意：** 作成、編集、削除などのユーザーおよびグループの操作は Oracle Internet Directory によってログに記録され、ログが有効であれば、Oracle Directory Manager から表示することができます。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

---

## 7.4.2.2 ログに記録されるイベントの選択

ログ・レジストリ・レコードに記録されるイベントは、選択することができます。

1. 「サービス」ポータルで、「ログ・レジストリ管理」をクリックします。

**注意：** デフォルトでは、「サービス」ポータルは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

「ログ・レジストリの管理」ページは、[図 7-12](#) のように表示されます。

図 7-12 「ログ・レジストリの管理」ページ

ログ・レジストリ・レコードの新規追加

ログ・レジストリに新規レコードを追加します。ログ・レジストリ内の1つ以上のレコードに一致するログ・リクエストのみが、動作ログの表に挿入されます。%(パーセント)記号は、すべての文字に一致するワイルドカードです。

ログ・レジストリ・レコードの編集/削除

既存のログ・レジストリ・レコードを変更または削除します。

編集	削除	ドメイン	サブドメイン	名前	操作	ユーザー名	ブラウザ	言語
		%	page	%	create	%	%	%
		%	portlet	%	customize	%	%	%

Copyright © 2003, Oracle Corporation. All Rights Reserved

[図 7-12](#) には、2つのログ要求が表示されています。ポータルがカスタマイズされるたびに動作ログにエントリが作成されるものと、ページが作成されるたびにエントリが作成されるものです。すべてのリクエストをログに記録する場合は、各フィールドで「%」を選択します。

2. 次のうちの1つを実行してください。

「ログ・レジストリ・レコードの新規追加」をクリックして、新しいログ・レジストリ・レコードを作成し、ログ基準を指定します。

または

既存のログ・レジストリ・レコードのログ基準を編集します。これを行うには、次の手順を実行します。





- a. 「編集」アイコンをクリックして、既存のログ・レジストリ・レコードのログ基準を変更します（「編集」アイコンは、「ログ・レジストリ・レコードの編集 / 削除」の下にあります）。

図 7-13 に示すような、「ログ・レジストリ・レコードの編集」ページが表示されます。

### 図 7-13 「ログ・レジストリ・レコードの編集」ページ

#### ログ・レジストリ・レコードの編集

ドメイン、サブドメイン、名前、操作、ユーザー名、ブラウザおよび言語を入力します。このレコードに一致するログ記録は、すべて動作ログ表のエントリ内へ記録されます。ワイルドカード値%(パーセント)は、任意の値を表すのに使用されます。

ドメイン	<input type="text" value="%"/>	
サブドメイン	<input type="text" value="%"/>	
名前	<input type="text" value="%"/>	
ユーザー名	<input type="text" value="%"/>	
操作	<input type="text" value="%"/>	
ブラウザ	<input type="text" value="%"/>	
言語	<input type="text" value="%"/>	

- b. 「サブ・ドメイン」リストから、ログに記録するオブジェクトを選択します。表 7-3 は有効なオブジェクトが示されています。
- c. 「操作」リストから、ログに記録する操作（またはイベント）を選択します。表 7-3 は有効な操作が示されています。
- d. 必要に応じて他のログ基準も指定します。
- e. 「OK」をクリックします。



### 7.4.2.3 動作ログ・ビュー

wwlog\_\* という名前のいくつかの動作ログのビューが利用できます。これらのビューは、OracleAS Portal がインストールされたスキーマ内にあります。これらのビューは公開できますが、各ログはオブジェクトのセキュリティに従って保護されています。たとえば、ページについての情報は、ユーザーがアクセス権限を持っているページについてのみ利用できません。

表 7-4 に、すべての動作ログのビューと説明を示します。必要な場合には、これらのビューに基づいた簡潔な OracleAS Portal DB プロバイダのレポートおよびチャートを作成することができます。

表 7-4 動作ログ・ビュー

ログ・ビュー	説明
wwlog_portal_admin_logs	すべてのログ（ユーザーが Portal 管理者の場合にのみレコードがあります）
wwlog_user_logs	現在のユーザーによって作成されたすべてのログ
wwlog_all_portlet_logs	現在のユーザーが表示できるページ上のポートレット・インスタンス
wwlog_all_document_logs	現在のユーザーが表示できるドキュメント
wwlog_all_search_logs	現在のユーザーが表示できる検索
wwlog_all_item_logs	現在のユーザーが表示できるアイテム
wwlog_all_component_logs	現在のユーザーが表示できるコンポーネント
wwlog_all_object_logs	前述のすべてのビューを含むサマリー・ビュー

### 7.4.2.4 動作ログのビューの外部的なアクセス

SQL\*Plus、OracleAS Reports Services などを使用して、OracleAS Portal ブラウザ対応のインタフェース以外から、動作ログのビュー内の情報にアクセスすることもできます。これを行うには、**wwctx\_api.set\_context** API を使用して、次のようにデータベース・セッション用に最初に Portal のセキュリティ・コンテキストを設定する必要があります。

```
wwctx_api.set_context (
  p_user_name => 'portal_username',
  p_password  => 'portal_pw'
);
```

## 7.5 Oracle Application Server ポート情報の表示

Application Server Control コンソールでは、Application Server の「ポート」ページに、特定の Oracle Application Server インスタンスのコンポーネントによって現在使用されているすべてのポートが表示されます。このページは、各種アプリケーション・サーバー・コンポーネント間のポートの競合のトラブルシューティングを行うときに重要になります。

可能なときは常に、Application Server Control コンソールに、適切な Oracle Enterprise Manager 10g 構成ページへのリンクが表示されます。ここで、コンポーネントのポート設定を変更できます。

Application Server の「ポート」ページにアクセスするには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールにアクセスします。詳細は、[7.2.1 項「Application Server Control コンソールへのアクセス」](#)を参照してください。  
スタンドアロンのアプリケーション・サーバー・インスタンスが複数ある場合、Application Server Control コンソールの開始ページは、Oracle Application Server ファーム・ホーム・ページです。
2. インスタンスの 1 つをクリックして、Oracle Application Server インスタンス・ホーム・ページを表示します。
3. アプリケーション・サーバー名の下にある「ポート」リンクをクリックして、[図 7-14](#)に示すような、Application Server の「ポート」ページを表示します。

図 7-14 Oracle Application Server の「ポート」ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ログ 設定(探検) ヘルプ

ファーム > Application Server: as904inf.jpsun2ee3.jp.oracle.com

Application Server: as904inf.jpsun2ee3.jp.oracle.com

ホーム J2EEアプリケーション ポート Infrastructure

ページ更新時刻[2004/05/11 17:54:17 JST]

「使用中のポート」列は、ポートが定義されていない、またはコンポーネントが稼働していない場合は空です。Enterprise Managerを使用してポートを構成できる場合は、「構成」列にアイコンが表示されます。それ以外の場合は、コンポーネントドキュメントを参照してください。ポートの変更方法にかかわらず、ポート値を変更する前にポート依存性を考慮する必要があります。詳細情報: [OracleASのポート依存性情報](#)

コンポーネント	タイプ	使用中のポート	推奨されるポート範囲	構成
DCM Object Cache	Cache Discovery Port		7100-7199	
home	AJP		3301-3400	
home	RMI		3201-3300	
home	JMS		3701-3800	
Log Loader	Management		44000-44099	
OC4J_SECURITY	RMI	3203	3201-3300	
OC4J_SECURITY	JMS	3703	3701-3800	
OC4J_SECURITY	AJP	3303	3301-3400	

ポートの管理の詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「ポートの管理」の章を参照してください。



---

## OracleAS Portal の検索機能の構成

この章では、OracleAS Portal での検索機能の設定方法について説明します。これには、Oracle Text の設定方法も含まれます。

この章の内容：

- [OracleAS Portal の検索オプション](#)
- [OracleAS Portal の検索オプションの構成](#)
- [Oracle Text](#)
- [Oracle Ultra Search](#)

## 8.1 OracleAS Portal の検索オプション

OracleAS Portal は、必要に応じてカスタマイズできる強力な検索機能を提供します。堅牢な組込みの検索ポートレットにより、ポートレット・リポジトリ、Portal ページおよび外部サイトの検索を実行できます。

さらに、HTML、XML、PDF、ワープロ書式、スプレッドシート書式、プレゼンテーション書式、その他の一般的なビジネス書式などを含む、100 種類を超えるドキュメント・タイプを検索できます。

この項では、OracleAS Portal で利用できる検索オプション、および最適なオプションを選択する方法について説明します。

- [OracleAS Portal の検索](#)
- [Oracle Ultra Search](#)
- [デフォルトの検索機能](#)
- [使用する検索オプションの決定](#)
- [Oracle Ultra Search と OracleAS Portal 検索の違い](#)
- [構成情報の場所](#)

### 8.1.1 OracleAS Portal の検索

OracleAS Portal には、OracleAS Portal リポジトリ内に格納、管理されているコンテンツを検索するための組込み機能のセットがあります。これらの機能は、様々な方法で構成できる次の 4 つの検索ポートレットに組み込まれています。

- 「基本検索」: このポートレットでは、簡単なキーワード検索が可能です。
- 「拡張検索」: このポートレットでは、複数の属性値の演算子を含む、より詳細な検索条件を入力できます。
- 「カスタム検索」: このポートレットは、任意にカスタマイズでき、結果を適切に表示する定義済みの検索など、ニーズに合わせた検索ポートレットを設計できます。
- 「保存された検索」: このポートレットでは、保存された検索を繰り返すことができます。

この形式の検索では、OracleAS Portal リポジトリ内のコンテンツ（表示名、キーワード、説明、その他の類似属性など）に関連付けられたメタデータに索引が作成されます。

---

**注意：** 次のメタデータの索引が作成されます。アイテム属性（表示名、説明、キーワード、作成者）、ページ属性（表示名、説明、キーワード）、カテゴリおよびパースペクティブ属性（表示名、説明）。

---

OracleAS Portal リポジトリ内のコンテンツの全テキスト索引作成する必要がある場合は、Oracle Text を有効にすることによってこれらの検索機能を拡張できます。

### Oracle Text (オプション)

Oracle Text を使用して、OracleAS Portal の検索機能を拡張できます。Oracle Text を有効にすると、すべてのテキスト・タイプの属性に加えて次のコンテンツにも索引が作成されます。

- **ファイル**: バイナリ形式のファイルは、Oracle Text で絞込みできるファイル形式であれば、索引を作成できます。
- **URL (URL 属性内の)** が指定する **Web ページ**: コンテンツはプレーン・テキストまたは HTML である必要があります。

## 8.1.2 Oracle Ultra Search

Oracle Ultra Search は、OracleAS Portal リポジトリなど、様々なコンテンツ・リポジトリおよびデータ・ソースに対するエンタープライズ検索機能を提供する Oracle Text 上に構築されたアプリケーションです。Oracle Ultra Search は、OracleAS Portal にインストールされ、使用できるように事前に構成されています。また OracleAS Portal ページに埋め込むことのできる検索ポートレットが含まれています。

このポートレットから、ユーザーが検索文字列を入力して検索を行うと、構成されたすべてのデータ・ソースのコンテンツが含まれる 1 つの結果セットが返されます。OracleAS Portal がデータ・ソースの 1 つとして構成されていると、検索はパブリックの OracleAS Portal コンテンツのみを返します。

### 8.1.3 デフォルトの検索機能

OracleAS Portal の標準インストールの後、すぐに OracleAS Portal の検索機能を使用できます。追加の構成をせずに、組み込みの OracleAS Portal 検索ポートレットのいずれかをページに配置し、Portal コンテンツの検索に使用できます。

インストール時に、Oracle Text の索引が作成され、同期化されると、OracleAS Portal で Oracle Text の検索が有効になります。ただし、新しいまたは変更されたコンテンツ（アイテム、ページ、カテゴリ、パースペクティブ）は、Oracle Text の索引が再び同期化されるまで、検索結果として返されないことに注意する必要があります。Oracle Text の索引を同期化するか、または定期的な同期化スケジュールを設定するには、[8.3.5.1 項「Oracle Text 索引の同期化」](#) および [8.3.5.2 項「索引の同期化のスケジューリング」](#) を参照してください。

---

**注意：** Oracle Text で提供される追加機能を使用しない場合は、この機能を無効にできます。[8.2.2.1 項「OracleAS Portal での Oracle Text の有効化と無効化」](#) を参照してください。

---

表 8-1 は、その他のデフォルトの検索設定を示しています。これらの値の変更方法の詳細は、[8.2.1 項「OracleAS Portal 検索ポートレットの構成」](#) を参照してください。

**表 8-1 デフォルトの検索設定**

検索設定オプション	デフォルト
基本検索ポートレットおよび基本検索ボックス・アイテム	基本検索結果ページ
拡張検索、カスタム検索および保存された検索ポートレット	検索結果ページ
拡張検索リンク	拡張検索ページ
「インターネット検索エンジン」リンク	なし
ページに表示するヒット件数	20

次の図は、デフォルトの検索ポートレットおよびページを示しています。

**図 8-1 OracleAS Portal の「基本検索」ポートレット**





図 8-2 OracleAS Portal の基本検索結果ページ

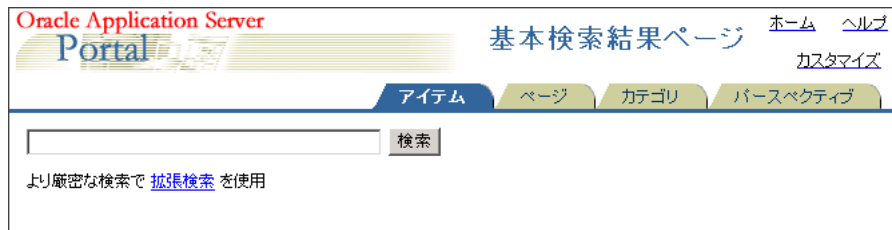


図 8-3 OracleAS Portal の「拡張検索」ポートレット

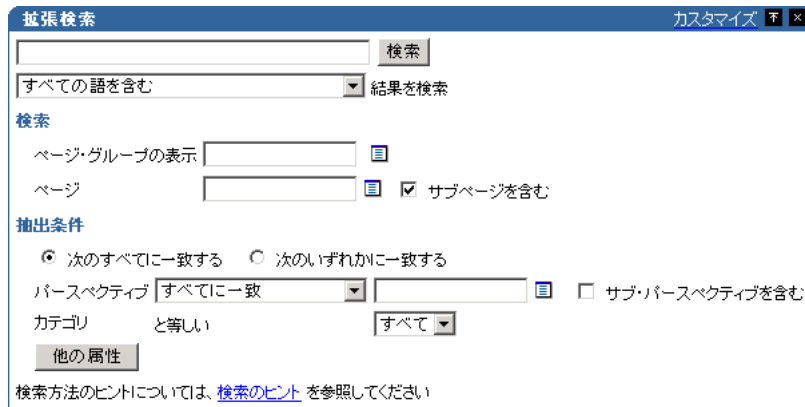


図 8-4 OracleAS Portal の「カスタム検索」ポートレット

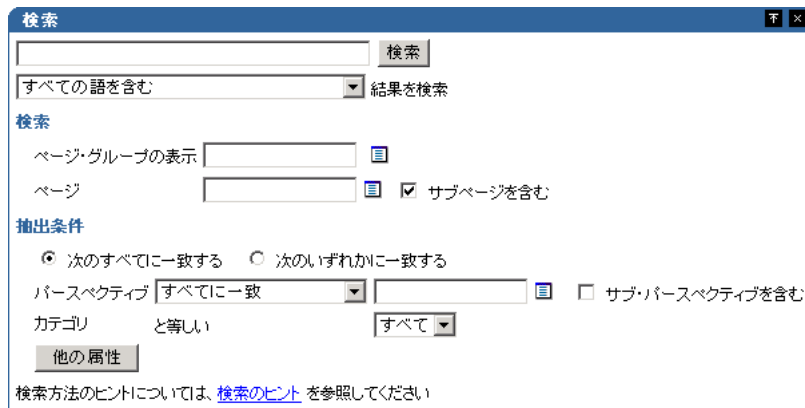


図 8-5 OracleAS Portal の検索結果ページ

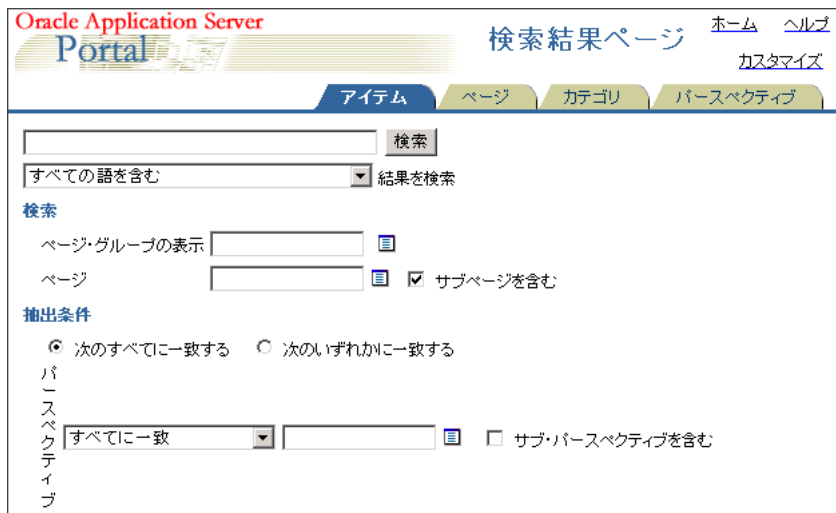


図 8-6 OracleAS Portal の「保存された検索」ポートレット

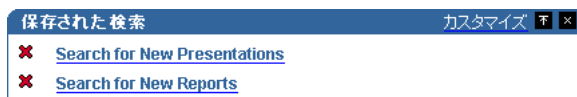


図 8-7 Oracle Ultra Search ポートレット



## 8.1.4 使用する検索オプションの決定

OracleAS Portal 内での検索の構成方法の選択は、検索の目的を慎重に検討し、Portal コンテンツについて理解することから始まります。主な考慮事項の一部を次に示します。

- 検索の範囲： Portal の検索から返される結果を、OracleAS Portal リポジトリ内で管理されるコンテンツに制限するのか、それともその他のリポジトリからの結果を返すようにするのか。
- 検索のレベル： ドキュメント・コンテンツの全テキストの索引作成が必要なのか、それともメタデータのみ索引作成で十分なのか。
- コンテンツのセキュリティ・ポリシーと Portal ユーザー・プロファイル： 検索は、主にパブリック・コンテンツを検索するパブリックの認証されていないユーザーを対象にするのか、それともコンテンツに対して様々なレベルのアクセス権限を持つ個々のユーザーを対象にするのか。
- 拡張検索機能： 結果を関連性に基づいて整列し、ドキュメントのテーマと要旨、および Oracle Text のその他の機能を表示する機能をユーザーに提供することが重要かどうか。
- 管理： 索引、データ・ソースなどの管理および維持にどのぐらいの時間を費やすことができるか。

表 8-2 を使用して、検索要件を満たす最適な検索構成を選択します。

**表 8-2 OracleAS Portal の検索オプション**

	OracleAS Portal (Oracle Text が無効)	OracleAS Portal (Oracle Text が有効)	Oracle Ultra Search
検索の範囲	OracleAS Portal リポジトリのみ。	OracleAS Portal リポジトリのみ。	OracleAS Portal リポジトリおよびその他のリポジトリ。
検索のレベル	OracleAS Portal メタデータのみ。	全テキスト索引。	全テキスト索引。 OracleAS Portal の場合、パブリック・コンテンツのみ。
コンテンツのセキュリティとユーザー・プロファイル	検索結果に安全なパブリック・コンテンツを返す。	検索結果に安全なパブリック・コンテンツを返す。	パブリック・コンテンツのみを返す。
拡張検索機能	なし。	あり。	あり。
管理	最小限。	全テキスト索引を維持する。	全テキスト索引を維持し、データ・ソースを構成する。

## 8.1.5 Oracle Ultra Search と OracleAS Portal 検索の違い

この項では、Oracle Ultra Search と OracleAS Portal 検索の主な違いを中心に説明します。

- Oracle Ultra Search はパブリック・コンテンツのみを収集する

OracleAS Portal は、Oracle Ultra Search にファイル・システムとして認識されるので、フォルダ内のコンテンツを表示するには、そのフォルダをパブリックにする必要があります。パブリックでないフォルダのコンテンツは、そのサブフォルダ階層のコンテンツを含めて収集されません。コンテンツを作成してパブリックにしても、そのコンテンツを含むすべてのフォルダがパブリックになっている場合のみ、索引が作成されます。

- Oracle Ultra Search はページとアイテムを1つのリストとして返す

Oracle Ultra Search は、OracleAS Portal のページとアイテムを、メタデータとコンテンツを含むリソースとして認識します。言い換えれば、収集して索引を作成し、検索結果を返し、視覚的に表現する対象となります。つまり、Oracle Ultra Search は、ページとアイテムの両方を含む検索結果のリストを返すことができます。OracleAS Portal 検索は、データのタイプ（ページ、アイテム、カテゴリおよびパースペクティブ）を区別して検索するため、一度に1つのタイプのデータのみを検索できます。Oracle Ultra Search の場合は、カテゴリとパースペクティブを検索可能なエンティティとして区別しないため、特定のパースペクティブまたはカテゴリを含むアイテムとページを（OracleAS Portal 検索と同様に）検索できます。

- Oracle Ultra Search は、メタデータ以外に表示されているページのコンテンツを検索する

OracleAS Portal 検索は、ページとアイテムのメタデータを検索します。Oracle Ultra Search クローラは、表示されているコンテンツに加えてメタデータを対象にします。つまり、Oracle Ultra Search は、OracleAS Portal 検索が結果を返さないときでも、結果を返すことができます。

- OracleAS Portal 検索ではいくつかのアイテム・タイプが除外される

OracleAS Portal 検索は、次のベース・アイテム・タイプのアイテムのみを返すことができます。

- <なし>（ベース・アイテム・タイプがない）
- ベース・ファイル
- ベース URL
- ベース・テキスト
- ベース PL/SQL
- ベース・ページ・リンク
- ベース・イメージ
- ベース・イメージ・マップ

#### – シンプル・ポートレット・インスタンス

Oracle Ultra Search は、ベース・アイテム・タイプに関係なく、アイテムがページに表示されるときアイテム・タイプ表現に基づいて、索引を作成します。ページの解釈に基づいて索引が作成されるためです。つまり、バナー、テンプレート・アイテム、ログイン/ログアウトのリンクなど、ページ上のすべての静的コンテンツと動的コンテンツの索引が、Oracle Ultra Search によって作成されます。

#### ■ Oracle Text とスコア計算システム

Oracle Ultra Search と OracleAS Portal 検索は、どちらも Oracle Text を使用してコンテンツの索引を作成しますが、その実装方法は異なります。さらに、Oracle Ultra Search は、OracleAS Portal 検索と異なるスコア計算システムを使用します。特に、タイトル・セクション内での検索文字列のヒット数は、ドキュメント・コンテンツ内でのヒット数よりも高く計算されます。このカスタマイズ方法の詳細については、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』を参照してください。OracleAS Portal 検索は、すべてのメタデータとコンテンツを同じ重みと見なします。

## 8.1.6 構成情報の場所

### OracleAS Portal 検索ポートレット

- OracleAS Portal で使用する OracleAS Portal 検索ポートレットを構成するには、[8.2.1 項「OracleAS Portal 検索ポートレットの構成」](#)を参照してください。

OracleAS Portal のページに検索機能を追加するための、これらの検索ポートレットの使用方法の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### Oracle Text

- OracleAS Portal で使用する Oracle Text を有効化、無効化および構成するには、[8.2.2 項「OracleAS Portal での Oracle Text オプションの構成」](#)を参照してください。
- Oracle Text、Oracle Text 索引の管理方法およびトラブルシューティングの情報の詳細は、[8.3 項「Oracle Text」](#)を参照してください。
- Oracle Text がインストールされ、正常に動作していることを確認するには、[付録 H「TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認」](#)を参照してください。

### Oracle Ultra Search

- Oracle Ultra Search を設定し、OracleAS Portal で「Ultra Search」ポートレットを利用できるようにするには、[8.2.3 項「OracleAS Portal での Oracle Ultra Search オプションの構成」](#)を参照してください。
- Oracle Ultra Search の詳細は、[8.4 項「Oracle Ultra Search」](#)を参照してください。

## 8.2 OracleAS Portal の検索オプションの構成

OracleAS Portal の検索機能は、デフォルトでインストールされるので、すぐに検索機能を使用できます。初期のデフォルトについては、[8.1.3 項「デフォルトの検索機能」](#)で説明しています。

この項では、Portal 管理者がすべての検索ポートレットに影響する次の検索機能を構成する方法について説明します。

- [OracleAS Portal 検索ポートレットの構成](#)
- [OracleAS Portal での Oracle Text オプションの構成](#)
- [OracleAS Portal での Oracle Ultra Search オプションの構成](#)

### 8.2.1 OracleAS Portal 検索ポートレットの構成

この項では、すべての OracleAS Portal 検索ポートレットに影響する次の検索機能を構成する方法について説明します。

- [検索結果ページの選択](#)
- [ページに表示する検索結果の数の制限](#)
- [「拡張検索」リンクの選択（「基本 / カスタム検索」ポートレット）](#)
- [インターネット検索エンジンの選択（「拡張 / カスタム検索」ポートレット）](#)

#### 8.2.1.1 検索結果ページの選択

次のものからの検索結果の表示に使用するページを決定できます。

- 「基本検索」ポートレットおよび「基本検索」ボックス・アイテム
- 「拡張検索」、「カスタム検索」および「保存された検索」ポートレット

新しい検索結果ページを選択すると、新しい検索ポートレットと既存の検索ポートレットの両方に適用されます。

---

**注意：** ページ・キャッシュが有効になっている場合でも、既存の検索ポートレットに変更がすぐに表示されないことがあります。すべての検索ポートレットのキャッシュは、24 時間ごとに自動的に消去されます。これらのキャッシュは、OracleAS Web CacheManager（「サービス」ポートレットの「OracleAS Web Cache 管理」リンクからアクセスできます）を使用して、手動で消去することもできます。

---

必要に応じて、特定の「カスタム検索」ポートレットの設定を上書きできます。「検索結果を表示する場所を指定してください」オプションが「デフォルト検索結果ページ」に設定されている場合は、「カスタム検索」ポートレットはここで指定された結果ページのみを使用

します。「カスタム検索」ポータルレット・オプションの設定方法の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

検索ポータルレットの検索結果ページを指定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポータルレットで、「検索設定」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポータルレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. 「基本検索ポータルレットおよび基本検索ボックス・アイテム」の「検索結果ページ」セクションで、適切な検索結果ページを選択します。

検索ポータルレットを含む任意の Portal ページを選択できます。検索ポータルレットのないページを選択した場合、結果は表示されません。デフォルトは、「基本検索結果ページ」です。

3. 「拡張検索、カスタム検索および保存された検索ポータルレット」に、適切な検索結果ページを選択します。

検索ポータルレットを含む任意の Portal ページを選択できます。検索ポータルレットのないページを選択した場合、結果は表示されません。デフォルトは、「検索結果ページ」です。

4. 「OK」を選択します。

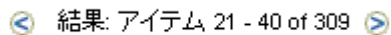
選択したページが後で削除されると、関連する「ページ」フィールドは空になります。別のページを選択し、「OK」をクリックします。「取消」をクリックすると、検索操作後に「ページが見つかりません。」というエラーが表示されます。

### 8.2.1.2 ページに表示する検索結果の数の制限

すべての検索結果ページに表示する検索結果の数を制限できます。この制限は、「基本検索」、「拡張検索」および「カスタム検索」ポータルレットからの結果に適用されます。

検索によって返される結果の数がこの数を超える場合、検索結果ページには、すべての結果が表示できるように「次へ」および「前へ」アイコンが表示されます。図 8-8 を参照してください。

図 8-8 検索ポータルレットの「ページに表示するヒット件数」の設定



たとえば、「ページに表示するヒット件数」に 10 を指定した場合、最初の 10 件の結果が最初の検索結果ページに表示され、次の 10 件の結果が次のページに表示されます。

---

---

**注意：** 制限を変更した場合、新しい値は既存の検索ポートレットではなく、新しい検索ポートレットにのみ影響します。

---

---

すべてのページの検索結果の数を指定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「検索設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 「検索のプロパティ」セクションの「ページに表示するヒット件数」に、1 ページに表示する検索結果の数を入力します。
3. 「OK」をクリックします。

個々の「基本検索」または「拡張検索」ポートレットに対してこの値の変更はできません。

必要に応じて、「カスタム検索」ポートレットの設定を上書きできます。「次へ」および「前へ」アイコンを非表示にすることもできます。「カスタム検索」ポートレット・オプションの設定方法の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 8.2.1.3 「拡張検索」リンクの選択（「基本/カスタム検索」ポートレット）

「拡張検索」リンクは「基本検索」ポートレットに表示されます。通常、拡張検索では、追加の検索条件を指定できます。図 8-9 を参照してください。

#### 図 8-9 「基本/カスタム検索」ポートレット上の「拡張検索」リンク

より厳密な検索で [拡張検索](#) を使用

「拡張検索」リンクは、外部サイト、別の Portal ページ、または OracleAS Portal 内のパッケージ・コールヘリンクできます。

オプションとして、このリンクを「カスタム検索」ポートレットに表示できます。「カスタム検索」ポートレット・オプションの設定方法の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

すべての「基本/カスタム検索」ポートレット・インスタンスに対して、「拡張検索リンク」のリンク先を指定できます。新しい「拡張検索リンク」を指定すると、「拡張検索」リンクが表示される新規および既存の検索ポートレットの両方に適用されます。



---

---

**注意：** ページ・キャッシュが有効になっている場合でも、既存の検索ポータルレットに変更がすぐに表示されないことがあります。すべての検索ポータルレットのキャッシュは、24 時間ごとに自動的に消去されます。これらのキャッシュは、OracleAS Web CacheManager（「サービス」ポータルレットの「OracleAS Web Cache 管理」リンクからアクセスできます）を使用して、手動で消去することもできます。

---

---

「拡張検索」リンクの詳細を入力するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポータルレットで、「検索設定」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポータルレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. 「拡張検索リンク」セクションで、次のいずれかを実行します。

- 「拡張検索」のリンク先ページを指定する。

デフォルトは、組込みの OracleAS Portal 「拡張検索」ポータルレットが含まれる「拡張検索ページ」です。ただし、拡張検索オプションが表示される任意の Portal ページを選択することができ、ページにいずれかの OracleAS Portal の検索ポータルレットが含まれている必要はありません。たとえば、拡張検索オプションが含まれる JSP ページが Portal 内にある場合は、そのページを使用できます。

選択したページが後で削除されると、このフィールドは空になります。別のページを選択し、「OK」をクリックします。「取消」をクリックしても、すべての「拡張検索」リンクは削除されたページを指定したままになります。

- 「拡張検索」リンクの URL を指定する。

使用する URL を入力します。Portal 全体で拡張検索に使用するカスタマイズした検索エンジンを作成した場合は、ここにそのリンクを指定できます。

絶対 URL または相対 URL を指定できます。たとえば、<http://www.myfavoritesearchengine.com> を指定すると、このインターネット検索サイトへのリンクが直接作成されます。

相対 URL（つまり、Portal パッケージ）を入力する場合は、ここで指定した値は Portal スキーマ URL に追加されるため、その結果、Portal パッケージがコールされます。指定した値が '/' で始まるかどうかによって、次のように値が追加されます。

/ で始まる値を指定すると、URL は次のようになります。

```
http://<webserver>:<port>/<value>
```

値のみを指定すると、URL は次のようになります。

```
http://<webserver>:<port>/pls/<dad>/<value>
```

3. 「OK」を選択します。

### 8.2.1.4 インターネット検索エンジンの選択（「拡張 / カスタム検索」ポートレット）

インターネット検索エンジン・リンクは、「拡張検索」ポートレットに表示されます。したがって、ユーザーが OracleAS Portal を検索したときに必要な情報を見つけることができなかった場合は、インターネット検索エンジンを使用して検索対象を広げることができます。[図 8-10](#) を参照してください。

#### 図 8-10 「拡張 / カスタム検索」ポートレット上のインターネット検索エンジン・リンク

インターネット検索で [YAHOO](#) を使用

オプションとして、このリンクを「カスタム検索」ポートレットに表示できます。「カスタム検索」ポートレット・オプションの設定方法の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

インターネット検索エンジンの URL、およびユーザーがインターネット検索エンジンにアクセスするためにクリックするリンク・テキストを設定すると、インターネット検索リンクを表示するすべての新規および既存の「拡張 / カスタム検索」ポートレット・インスタンスに適用されます。

---

**注意：** ページ・キャッシュが有効になっている場合でも、既存の検索ポートレットに変更がすぐに表示されないことがあります。すべての検索ポートレットのキャッシュは、24 時間ごとに自動的に消去されます。これらのキャッシュは、OracleAS Web CacheManager（「サービス」ポートレットの「OracleAS Web Cache 管理」リンクからアクセスできます）を使用して、手動で消去することもできます。

---

1. 「サービス」ポートレットで、「検索設定」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. 「インターネット検索エンジン」セクションの「URL」に、インターネット検索エンジンの URL を入力します。たとえば、「<http://www.yahoo.com>」と入力します。

URL は完全な形式で、関連パラメータをすべて含んでいる必要があります。

3. 「リンク・テキスト」に、ユーザーがインターネット検索エンジンにアクセスするためにクリックするテキストを入力します。たとえば、次のようになります。YAHOO

「YAHOO」と入力した場合は、「拡張検索」ポートレット、またはオプションで「カスタム検索」ポートレットにリンクとしてこのテキストが表示されます。[図 8-10](#) を参照してください。

4. 「OK」を選択します。

インターネット検索エンジンのプロパティ（URL とリンク・テキスト）を指定しない場合は、「拡張検索」または「カスタム検索」ポータルにもインターネット検索エンジンへのリンクは表示されません。

## 8.2.2 OracleAS Portal での Oracle Text オプションの構成

この項では、OracleAS Portal で次の Oracle Text 機能を構成する方法について説明します。

- OracleAS Portal での Oracle Text の有効化と無効化
- Oracle Text 検索結果オプションの設定
- Oracle Text のベース URL の設定
- Oracle Text のプロキシ設定の構成

---

---

**注意：** ページ・キャッシュが有効になっている場合でも、既存の検索ポータルに Oracle Text 設定への変更がすぐに表示されないことがあります。すべての検索ポータルのキャッシュは、24 時間ごとに自動的に消去されます。これらのキャッシュは、OracleAS Web CacheManager（「サービス」ポータルの「OracleAS Web Cache 管理」リンクからアクセスできます）を使用して、手動で消去することもできます。

---

---

### 8.2.2.1 OracleAS Portal での Oracle Text の有効化と無効化

OracleAS Portal で検索するとき Oracle Text を有効または無効にできます。詳細は、[8.3 項「Oracle Text」](#)を参照してください。

1. 「サービス」ポータルで、「検索設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポータルは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. Oracle Text を使用するには、OracleAS Portal を検索するとき「Oracle Text 検索を使用可能にする」を選択します。

Oracle Text を無効にするには、このオプションを選択解除します。

---

---

**注意：**「Oracle Text はインストールされていません」というメッセージが表示される場合は、Oracle Text がデータベースにインストールされていないので、OracleAS Portal では使用できません。Oracle Text をインストールするようデータベース管理者に依頼してください。インストールしたら、SQL\*Plus で次のコマンドを実行して、Oracle Text ロールを作成する必要があります。

inctxgrn.sql

このファイルは、ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws ディレクトリにあります。

PORTAL スキーマのユーザー名とパスワードを使用してログインします。Oracle Text 索引も作成する必要があります。8.3.4 項「Oracle Text 索引の作成および削除」を参照してください。

---

---

3. 「OK」をクリックします。

### 8.2.2.2 Oracle Text 検索結果オプションの設定

Oracle Text を有効にすると、検索結果として返されるアイテム（ドキュメントやファイル）に対する追加の情報を表示できます。返される各アイテムに対して、次のことができます。

- 主要なテーマをチャートで表示します。テーマは、最も頻繁に使用される名詞と動詞を示します。
- 内容に関する概要（要旨）を表示します。要旨は、それらの名詞と動詞の使用頻度に基づいて生成されます。
- HTML 形式で表示します。
- HTML 形式でファイルを表示し、検索文字列を特定の色またはフォントで強調します。

テーマおよび要旨はオプションであり、HTML の強調は次のようにカスタマイズできます。

1. 「サービス」ポートレットで、「検索設定」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. 「テーマと要旨を使用可能にする」を選択して、検索によってアイテムが返されるたびにテーマと要旨を作成します。

---

---

**注意：** テーマと要旨を利用できない言語があります。

---

---

3. 「テキストの色を強調」には、検索によって返されるアイテムを HTML 形式で表示するときに、検索文字列を強調する色を選択します。

4. 「テキストのスタイルを強調」には、検索によって返されるアイテムを HTML 形式で表示するときに、検索文字列に適用するスタイルを選択します。
5. 「OK」をクリックします。

### 8.2.2.3 Oracle Text のベース URL の設定

Oracle Text は、相対 URL を完全修飾された絶対 URL に解決するためにベース URL を必要とします。詳細は、[8.3.6.1 項「相対 URL」](#)を参照してください。

Oracle Text のベース URL を指定するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」ポートレットで、「検索設定」をクリックします。  
デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
2. 次の書式で Oracle Text のベース URL を入力します。  
`http://<host>:<port>/pls/<dad>`  
たとえば、次のようになります。  
`http://myportal.com:4000/pls/design`  
値を指定しない場合は、どの相対 URL にも索引が作成されないため、相対 URL が指す URL コンテンツは検索できません。
3. 「OK」をクリックします。

### 8.2.2.4 Oracle Text のプロキシ設定の構成

Oracle Text では、OracleAS Portal のプロキシ・サーバーの設定を使用して URL コンテンツにアクセスします。これは、OracleAS Portal がファイアウォールの内側にあり、かつ URL アイテムがこのファイアウォール外を指定している場合に必要となります。詳細は、[8.3.6.4 項「URL の索引のプロキシ設定」](#)を参照してください。

OracleAS Portal のグローバル・プロキシ設定を構成するには、[5.5 項「プロキシ・サーバーを使用するための OracleAS Portal の構成」](#)を参照してください。

## 8.2.3 OracleAS Portal での Oracle Ultra Search オプションの構成

この項では、OracleAS Portal で使用する Oracle Ultra Search を設定する方法について説明します。この項で説明している作業を完了してからでなければ、「Ultra Search」ポートレットを Portal ページに追加して、この機能を使用することはできません。

- [Oracle Ultra Search 管理ツールへのアクセス](#)
- [コンテンツ・ソースとしての OracleAS Portal の登録](#)
- [OracleAS Portal への Ultra Search プロバイダの登録](#)

---

**注意：** OracleAS Portal で Oracle Ultra Search 機能を使用する前に、必要なすべてのデータベースおよび中間層の構成を完了させます。詳細は、[8.4 項「Oracle Ultra Search」](#)を参照してください。

---



詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「Setting Up Oracle Ultra Search for OracleAS Portal 10g (9.0.4)」を参照してください。

### 8.2.3.1 Oracle Ultra Search 管理ツールへのアクセス

1. 「サービス」ポートレットで「Ultra Search 管理」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. ログインします。

**関連項目：**『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』

### 8.2.3.2 コンテンツ・ソースとしての OracleAS Portal の登録

1. [8.2.3.1 項「Oracle Ultra Search 管理ツールへのアクセス」](#)で説明したように、Oracle Ultra Search 管理ツールにアクセスします。

2. 「インスタンス」タブで「適用」をクリックしてインスタンスを設定します。

複数のインスタンスがある場合は、最初に管理するインスタンスを選択します。

3. 「クローラ」タブで、「キャッシュ・ディレクトリの位置」と「クローラ・ログ・ファイル・ディレクトリ」を入力します。

これらのディレクトリは、Oracle Application Server Middle-Tier がインストールされているマシン上にあります。たとえば、/tmp はキャッシュ・ディレクトリの位置用、/tmp はクローラ・ログ・ファイル・ディレクトリ用となります。

4. 「ソース」タブで、「Oracle ソース」サブタブをクリックし、「ソースの作成」ドロップダウン・リストから「Oracle Portal (クロール対応)」を選択して、「実行」をクリックします。

5. OracleAS Portal の登録の詳細を入力します。

- a. 「Portal 名」を入力します。
- b. 「URL ベース」に、Portal のベース URL を入力します。

次の書式を使用します。http://<hostname>:<port>/pls/<portal\_DAD>/<portal\_schema>

例: http://myserver.abc.com:7778/pls/portal/portal

- c. 「ポータル登録」をクリックします。

6. データ・ソースを作成するページ・グループを選択してから、「ポータル・データ・ソースの作成」をクリックします。

オプションで、処理するコンテンツ・タイプを追加するために各 Portal データ・ソースを編集することもできます。たとえば、MS Word、MS Excel、PDF ドキュメントタイプを追加できます。

---

---

**注意:** 次のいずれかの場合には、ページ・グループをクロール対応のデータ・ソースとして使用できます。

- ルート・ページ（「ページの編集: アクセス」タブ）で「パブリック・ユーザーにページを表示」オプションが設定されている。
- PUBLIC に「表示」権限が付与されている（「ページ・グループの編集: アクセス」タブ）。

詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

---

---

7. 最後に、「スケジュール」タブで、次のように Portal データ・ソースの索引の作成をスケジュールします。

- a. 「新規スケジュールの作成」をクリックして、スケジュールの名前を入力します。
- b. 「ステップ 2 に進む」をクリックし、同期化のスケジュールの詳細を指定します。
- c. 「ステップ 3 に進む」をクリックし、ドロップダウン・リストから Portal を選択して、「ソースの取得」をクリックします。
- d. ソースを「割り当てられたソース」ボックスに移動し、「完了」をクリックします。

ソースの「状態」リンクをクリックすると、オプションですぐに同期化を実行できます。

### 8.2.3.3 OracleAS Portal への Ultra Search プロバイダの登録

OracleAS Portal には、Oracle Ultra Search 用の事前に作成されたポートレットが付属しています。このポートレットにアクセスするには、まずプロバイダを OracleAS Portal に登録する必要があります。

1. 「リモート・プロバイダ」ポートレットで、「プロバイダの登録」をクリックします。

デフォルトでは、「サービス」ポートレットは、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。

2. ウィザードの最初の手順のすべてのフィールドに値を入力します。

- ポートレットが応答しない場合、「タイムアウト」の設定はページの描画に要する時間に影響するので、高く設定しすぎないようにします。
- 「実装スタイル」は「Web」のままにします。
- 「次へ」をクリックして、次に進みます。

3. Ultra Search プロバイダの「URL」を入力します。

デフォルトでは、次のようになります。

```
http://machine.domain:7778/provider/ultrasearch/servlet/soaprouter
```

4. 「サービス ID」に 'ultrasearch' を設定します。
5. 「ログイン頻度」を「ユーザー・セッションごとに 1 回」に変更し、「次へ」をクリックします。
6. 「グループをブラウズ」アイコンをクリックして、AUTHENTICATED\_USERS を選択し、「実行」権限を付与します。
7. 最後に、「完了」をクリックします。

これで、「Ultra Search」ポートレットを Portal ページに追加できます。



## 8.3 Oracle Text

Oracle Text は、Oracle データベースに強力なテキスト検索とインテリジェントなテキスト管理を追加します。OracleAS Portal は、Oracle Text の機能を使用して検索機能を拡張しています。

OracleAS Portal で Oracle Text を使用する機能はオプションであり、Portal 管理者が有効または無効にできます。8.2.2.1 項「OracleAS Portal での Oracle Text の有効化と無効化」を参照してください。

OracleAS Portal で Oracle Text を使用方法について、次の項で説明します。

- Oracle Text を有効にした場合の OracleAS Portal 検索について
- Oracle Text 前提条件
- Oracle Text 索引
- Oracle Text 索引の作成および削除
- Oracle Text 索引の管理
- URL コンテンツの索引作成と検索
- Oracle Text 索引の状態の表示
- Oracle Text の索引作成処理の監視
- 索引作成エラーの表示
- 索引作成エラーの OracleAS Portal 内のオブジェクトへの変換
- ハングまたはクラッシュする索引作成への対処方法
- Oracle Text のインストールの問題のトラブルシューティング
- Oracle Database 10g にアップグレードするときに Oracle Text 索引をアップグレードする



詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/documentation>) にある Oracle Text のドキュメントを参照してください。

### 8.3.1 Oracle Text を有効にした場合の OracleAS Portal 検索について

Oracle Text が無効のときに基本検索を実行する場合、つまり検索文字列のみを入力する場合は、アイテム属性の表示名、説明、キーワードおよび作成者、ページ属性の表示名、説明およびキーワードが検索されます。このような一般的な検索では、カスタム属性は照合されません。

選択した属性に対して条件を指定する検索、つまり拡張検索では、選択した属性が照合されます。属性がファイル属性の場合は、ファイル名が検索されます。属性が URL 属性の場合は、URL HREF、つまりリテラル文字列の `http://www.google.com` が検索されます。

基本検索を実行するときに Oracle Text が有効になっている場合は、カスタム・テキスト属性を含むすべてのテキスト・タイプの属性が検索されます。さらに、ファイルの内容も検索されます。バイナリ形式のファイルは、ファイル形式が Oracle Text で絞込み可能であれば、検索できます。

同様に、Oracle Text を有効にすると、URL が指すページの内容も検索されます。検索するには、この内容がプレーン・テキストまたは HTML である必要があります。

### 8.3.2 Oracle Text 前提条件

Oracle Text は、Oracle9i Database Server の標準コンポーネントです。OracleAS Portal で Oracle Text の機能を使用する場合は、Oracle Text コンポーネントが正しくインストールされ、正常に機能していることが不可欠です。

次のことを確認します。

- Oracle Text が OracleAS Portal リポジトリ・データベースにインストールされている。OracleAS Portal 9.0.2.2 から、および 3.0.9.8.4 パッチセットからは、OracleAS Portal リポジトリ・データベースに Oracle Text のコンポーネントがないと、OracleAS Portal リポジトリをインストールできません。これは、一部の OracleAS Portal パッケージが、Oracle Text コンポーネントがある、CTXSYS スキーマ内の `ctx_ddl` パッケージを参照するからです。
- Oracle Text のアップグレードが完了している。特に、データベースのアップグレード時には、Oracle Text に関係する手動の手順が正常に完了していることが不可欠です。
- Oracle Text INSO フィルタのライブラリ・パスが正しく設定されている。Oracle Text INSO フィルタが正常に機能するには、`ctxhx` 実行可能プログラム（索引作成時にコールされる）が適切な共有ライブラリをロードできる必要があります。
  - UNIX プラットフォームの場合、`ld` が使用するライブラリ・パスに、TNS リスナーとデータベースが起動される環境の両方に対して `ORACLE_HOME/ctx/lib` が含まれている必要があります。様々な UNIX プラットフォームに対するライブラリ・パスの環境変数は、次のとおりです。

Solaris、Tru64 UNIX、Linux -> `$LD_LIBRARY_PATH`

HP/UX -> `$SHLIB_PATH` and `$LD_LIBRARY_PATH`

IBM AIX -> \$LIBPATH

詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「Inso フィルタ処理テクノロジーについて」を参照してください。

Oracle Text の索引作成処理を機能させるには、ライブラリ・パスを変更するたびに、データベースとリスナーの両方を再起動する必要があります。どちらかまたは両方の環境変数が設定されていない場合は、予想どおりに文書に索引が作成されず、表 `ctx_user_index_errors` に、DRG-11207、ステータス 137 エラーが多数表示されることがあります。8.3.11.1 項「一般的なドキュメント索引作成エラー」も参照してください。

- Windows プラットフォームでは、適切な DLL が `ORACLE_HOME\bin` にあり、このパスが環境変数 `PATH` に含まれる、つまり Oracle サーバーが起動される環境であることを確認します。

TEXTTEST ユーティリティを使用して、Oracle Text の機能がインストールされ、正常に動作していることを確認できます。TEXTTEST ユーティリティは `ORACLE_HOME/portal/admin/texttest/texttest` にあります。詳細は、付録 H 「TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認」を参照してください。

### 8.3.3 Oracle Text 索引

OracleAS Portal で Oracle Text の機能を使用する場合は、OracleAS Portal スキーマにいくつかの Oracle Text 索引が必要になります。これらの索引の詳細は、次の項で説明します。

- Oracle Text 索引の概要
- Oracle Text 索引の設定
- データストア・プロシージャ
- OracleAS Portal スキーマへの CTXAPP ロールの付与
- 多言語機能 (マルチレクサー)
- STEM 検索

#### 8.3.3.1 Oracle Text 索引の概要

必要な Oracle Text 索引はすべて、パッケージ `www_context` に含まれるプロシージャによって OracleAS Portal のインストール時に自動的に作成されます。

**関連項目：** 付録 G 「`www_context` API の使用」

このパッケージに含まれるプロシージャは、Portal のインストール後に、索引の削除や作成を含む索引の管理のためにも使用されます。詳細は、8.3.4.3 項「`ctxdrind.sql` を使用したすべての Oracle Text 索引の削除」および 8.3.4.1 項「`ctxcrind.sql` を使用したすべての Oracle Text 索引の作成」を参照してください。

**注意：** Oracle Text 索引が存在するときでも、Oracle Text を無効にできません。8.2.2.1 項「OracleAS Portal での Oracle Text の有効化と無効化」を参照してください。

表 8-3 で、必要な Oracle Text 索引について説明します。

**表 8-3 OracleAS Portal スキーマに含まれる Oracle Text 索引**

索引	Table.column	用途	データストア・タイプ	フィルタ・タイプ
WWSBR_CORNER_CTX_INDEX	wwpob_page\$.ctxtxt	ページ・メタデータの索引作成	ユーザー・データストア	NULL
WWSBR_DOC_CTX_INDEX	wwdoc_document\$.blob_content	ドキュメント・コンテンツの索引作成	直接データストア	INSO
WWSBR_PERSP_CTX_INDEX	wwv_perspectives.ctxtxt	パースペクティブ・メタデータの索引作成	ユーザー・データストア	NULL
WWSBR_THING_CTX_INDEX	wwv_things.ctxtxt	アイテム・メタデータの索引作成	ユーザー・データストア	NULL
WWSBR_TOPIC_CTX_INDEX	wwv_topics.ctxtxt	カテゴリ・メタデータの索引作成	ユーザー・データストア	NULL
WWSBR_URL_CTX_INDEX	wwsbr_url\$.absolute_url	URL コンテンツの索引作成	URL データストア	NULL

ほとんどの Oracle Text 索引は、ユーザー・データストアを使用します。つまり、索引を作成する必要がある各行に対して、PL/SQL プロシージャがコールされ、それによりその行に対して索引が作成されたドキュメントを生成します。

例外は、索引 WWSBR\_DOC\_CTX\_INDEX (ドキュメント索引) および WWSBR\_URL\_CTX\_INDEX (URL 索引) です。

- ドキュメント索引: 直接データストアを使用します。つまり、wwdoc\_document\$ 表の BLOB タイプ blob\_content の列に直接保持されるドキュメント・コンテンツに索引を作成します。
- URL 索引: absolute\_url\$ 列が指す場所にある、wwsbr\_url\$ 表内の各行に対して索引を作成するコンテンツを取り出します。

ドキュメント索引のみがフィルタを使用します。この索引では、INSO フィルタを使用して、ドキュメントをプレーン・テキスト形式に変換します。絞込みの対象から除外されるドキュ

メントはありません。つまり、INSO フィルタでは、プレーン・テキストや HTML 形式を含む、すべてのドキュメントを処理します。



詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/documentation>) にある Oracle Text のドキュメントを参照してください。

### 8.3.3.2 Oracle Text 索引の設定

設定は、OracleAS Portal が使用する Oracle Text 索引の構成に使用されます。設定は、OracleAS Portal のスキーマによって作成され、所有されます。つまり、それらは CTXSYS スキーマに存在する `ctx_ddl` パッケージを使用して作成され、設定を表すデータは実際には CTXSYS スキーマ内のリレーショナル表に格納されます。

Oracle Text 索引の設定は、索引が作成される前に作成する必要があります。その後の設定に対する変更は、Oracle Text 索引を削除して再作成しないと、有効になりません。

Oracle Text 索引を作成するために OracleAS Portal のインストール時に使用される Oracle Text 索引の設定は、パッケージ `wwv_context` を使用して再作成できます。一部の Oracle Text 索引の設定は、Portal 管理者が構成することもできます。たとえば、グローバル OracleAS Portal のプロキシ設定値を設定すると、それらは Oracle Text が Oracle Text 索引で使用するプロキシ設定の移入に使用されます。

---

**関連項目：** [付録 G 「`wwv\_context` API の使用」](#)

---

さらに、Oracle Text 索引は、索引作成の言語面を制御するためにいくつかのレクサー・プリファレンスを使用します。レクサー・プリファレンスは、スクリプト `sbrimtlx.sql` によって作成されます。レクサー・プリファレンスを再作成するために、いつでもこのスクリプトを実行できます。スクリプトは、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリにあります。



詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/documentation>) にある Oracle Text のドキュメントを参照してください。

### 8.3.3.3 データストア・プロシージャ

ユーザー・データストアを使用する Oracle Text 索引ごとに、Oracle Text がインストールされる CTXSYS スキーマにプロシージャが作成されます。特定の索引が作成される各行に対してプロシージャがコールされます。これらのプロシージャが、次に OracleAS Portal スキーマのプロシージャをコールします。

データストア・プロシージャ名には、次のように名前を付けます。

- `WWSBR_THING_CTX_<user_id>`
- `WWSBR_CORNER_CTX_<user_id>`
- `WWSBR_PERSP_CTX_<user_id>`

- WWSBR\_TOPIC\_CTX\_<user\_id>

<user\_id> は、OracleAS Portal リポジトリのスキーマの user\_id (ALL\_USERS ビューに表示される) です。同じデータベースに複数の OracleAS Portal リポジトリが存在する場合は、プロシージャ名が重複することがないようにこの接尾辞が必要です。

なんらかの理由によりこれらのプロシージャが存在しない場合は、Oracle Text は機能しません。これは、たとえば、CTXSYS スキーマが削除され、再インストールされた場合に発生することがあります。この場合は、OracleAS Portal スキーマの所有者として、次のようにスクリプト inctxgrn.sql を実行することによりプロシージャを再インストールできます。

```
SQL> @inctxgrn.sql
```

また、このスクリプトは、CTXAPP ロールを OracleAS Portal スキーマに付与します。8.3.3.4 項「OracleAS Portal スキーマへの CTXAPP ロールの付与」を参照してください。スクリプトは、ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws ディレクトリにあります。

### 8.3.3.4 OracleAS Portal スキーマへの CTXAPP ロールの付与

Oracle Text の機能を使用するためには、CTXAPP ロールが OracleAS Portal スキーマに付与されている必要があります。これは、OracleAS Portal リポジトリのインストール時に自動的に行われ、通常それ以上何も操作する必要はありません。

なんらかの理由によりこの付与が取り消された場合は、Oracle Text は機能しません。たとえば、これは CTXSYS スキーマが再インストールされたときに CTXAPP ロールが削除されると、発生することがあります。

必要な付与を元に戻すには、OracleAS Portal スキーマの所有者として次のようにスクリプト inctxgrn.sql を実行します。

```
SQL> @inctxgrn.sql
```

このスクリプトは、CTXSYS スキーマで必要な OracleAS Portal ユーザー・データストア・プロシージャも作成します。8.3.3.3 項「データストア・プロシージャ」を参照してください。スクリプトは、ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws ディレクトリにあります。

### 8.3.3.5 多言語機能（マルチレクサー）

OracleAS Portal では、Oracle Text のマルチレクサーを使用し、OracleAS Portal で言語固有の検索ができます。マルチレクサーは、次のことを行います。

- 検索の言語面の実行方法を制御します。
- コンテンツ、アイテム、ページ、カテゴリおよびパースペクティブ、またこれらを翻訳したものが、各言語に適した方法で処理されるようにします。

レクサー・プリファレンスは、すべての Oracle Text 索引で使用されるマルチレクサーの構成に使用されます。レクサー・プリファレンスは、スクリプト sbrintlx.sql によって作成されます。必要に応じてこれらの設定を変更できますが、変更する場合は、変更を有効にするために、Oracle Text 索引を削除してから再作成する必要があります。



マルチレクサーの詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/documentation>) にある Oracle Text のドキュメントを参照してください。

### 8.3.3.6 STEM 検索

OracleAS Portal で Oracle Text が有効になっているときは、STEM 検索がデフォルトで使用されます。STEM 検索を使用すると、指定した文字列と同じ語根を持つ語を検索できます。たとえば、語幹の \$sing を入力すると、語 sang、sung、sing にまで問合せが拡張されます。

ただし、STEM 検索が使用されるのは、Oracle Text で STEM 検索がサポートされている次の言語を使用している OracleAS Portal にログインしたときだけです。

AMERICAN ENGLISH  
CANADIAN FRENCH  
DUTCH  
UK ENGLISH  
FRENCH  
GERMAN DIN  
GERMAN  
ITALIAN  
LATIN AMERICAN SPANISH  
MEXICAN SPANISH  
SPANISH

その他の言語では、STEM 演算子は使用されません。

## 8.3.4 Oracle Text 索引の作成および削除

必要なすべての Oracle Text 索引は、OracleAS Portal リポジトリのインストール時に自動的に作成されます。ただし、後で索引を削除すると、再作成する必要がある場合があります。

索引の作成および削除は大量の時間とリソースを消費する操作であるため、業務時間中を避けてこの作業を計画するようにしてください。

---

---

**注意：** Oracle Text 索引を削除して再作成すると、検索結果が変化します。さらに、送信フォームに表示される演算子、および表示される結果の属性も変わります（「スコア」、「HTML として表示」、テーマをハイライトして HTML として表示および「要旨」属性は、Oracle Text を使用した場合にのみ表示されます）。

Oracle Text 索引を削除または作成しても、OracleAS Web Cache は失効化されません。自動問合せポートレットの結果および検索送信フォームは、それらが期限切れになってキャッシュから消去されるか、ポートレットの「デフォルトの編集」画面にアクセスするまで、引き続き返されます。

---

---

次の各項で、Oracle Text 索引を作成および削除する方法について説明します。

- [ctxcrind.sql](#) を使用したすべての Oracle Text 索引の作成
- 1 つの Oracle Text 索引の作成
- [ctxdrind.sql](#) を使用したすべての Oracle Text 索引の削除
- 1 つの Oracle Text 索引の削除

### 8.3.4.1 ctxcrind.sql を使用したすべての Oracle Text 索引の作成

OracleAS Portal に付属するスクリプトおよびパッケージを使用してすべての Oracle Text 索引を再作成できます。Oracle Text 索引を作成するための主なスクリプトは `ctxcrind.sql` で、これはディレクトリ `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` にあります。

OracleAS Portal リポジトリのスキーマの所有者として、スクリプト `ctxcrind.sql` を実行すると、次のようになります。

- 必要なすべての Oracle Text 索引および設定が作成されます。詳細は、[8.3.3 項「Oracle Text 索引」](#) を参照してください。
- 既存の Oracle Text 索引がある場合は、すべての既存の設定および有効な索引が削除され、再作成されます。索引は、次の場合に有効であるとみなされます。
  - 関連する索引のビュー `user_indexes` 内の行の `index_status`、`domidx_status` および `domidx_opstatus` がすべて 'VALID' に設定されている。
  - 索引には、`ctx_user_indexes` に、`idx_status` が 'INDEXED' に設定されたエントリがある。



- 存在しない索引も作成されます。

この処理は、数時間を要することがあります。

スクリプト `ctxcrind.sql` を使用して Oracle Text 索引を作成するには、次の手順を実行します。

1. `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wvs` ディレクトリに移動します。
2. SQL\*Plus で、PORTAL スキーマのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
3. SQL\*Plus で、次のコマンドを入力します。

```
ctxcrind.sql
```

処理が正常に終了すると、すべての Oracle Text 索引および設定が OracleAS Portal リポジトリのスキーマに作成されます。処理に失敗する場合は、システムが [8.3.2 項「Oracle Text 前提条件」](#) に示したすべての要件を満たしているかどうかを確認します。

---



---

**注意：** Oracle Text 索引の作成に要する時間は、Portal 内に存在するアイテムおよびページ・グループの数によって変わります。

---



---

スクリプト `ctxcrind.sql` は、次のプロシージャをコールします。

```
wwv_context.createindex( p_message => l_message );
```

`p_message` は、完了メッセージを渡す out パラメータです。コール `wwv_context.createindex()` は、次のようになります。

```
wwv_context.drop_prefs; /* Drop all Oracle Text preferences for the indexes, except
Lexer preferences */
wwv_context.drop_invalid_indexes; /* Drop all valid indexes */
wwv_context.create_prefs; /* Create all Oracle Text preferences,except Lexer
preferences */
wwv_context.create_missing_indexes(l_indexes); /* Create missing indexes and record
them in l_indexes */
wwv_context.touch_index(l_indexes); /* Mark all rows for created indexes as
requiring synchronization */
wwv_context.sync; /* Synchronize indexes */
wwv_context.optimize; /* Optimize indexes */
```

---



---

**関連項目：** [付録 G 「wwv\\_context API の使用」](#)

---



---

### 8.3.4.2 1つの Oracle Text 索引の作成

特定の索引を作成する場合は、プロシージャ `wwv_context.create_index(p_index)` を使用します。

`p_index` を使用して、作成する索引（次のいずれか）を指定します。

```
wwv_context.PAGE_TEXT_INDEX  
wwv_context.DOC_TEXT_INDEX  
wwv_context.PERSPECTIVE_TEXT_INDEX  
wwv_context.ITEM_TEXT_INDEX  
wwv_context.CATEGORY_TEXT_INDEX  
wwv_context.URL_TEXT_INDEX
```

このプロシージャは、空の索引を作成します。つまり、内容がないので、そこから検索結果を返すことはできません。更新のために索引をマークする方法および索引を同期化する方法の詳細は、[8.3.5.4 項「すべての索引のコンテンツの同期化」](#)を参照してください。

### 8.3.4.3 ctxdrind.sql を使用したすべての Oracle Text 索引の削除

スクリプト `ctxdrind.sql` を使用して、すべての Oracle Text 索引および設定（レクサー・プリファレンスを除く）を削除できます。このスクリプトは、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリにあります。

スクリプト `ctxdrind.sql` を使用してすべての Oracle Text 索引を削除するには、次の手順を実行します。

1. `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリに移動します。
2. SQL\*Plus で、PORTAL スキーマのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
3. SQL\*Plus で、次のコマンドを入力します。

```
ctxdrind.sql
```

このスクリプトは、次のプロシージャをコールします。

```
wwv_context.dropindex(p_message =>l_message);
```

`p_message` は、完了メッセージを渡す `out` パラメータです。

---

**注意：** Oracle Text 索引を削除すると、索引が作成されていた表を参照するビューとパッケージは無効になります。

これらのビューとパッケージは、次にアクセスされたときに自動的に有効になります。ビューとパッケージは、手動で有効にすることもできます。

---

### 8.3.4.4 1つの Oracle Text 索引の削除

特定の Oracle Text 索引を削除するとします。たとえば、別のプロキシ設定で再作成できるようにするために URL 索引を削除し、その他のすべての索引は削除も再作成もしない場合などです。

これを行うには、次のコマンドを使用して索引を直接削除します。

```
SQL> drop index <index_name> force;
```

たとえば、URL 索引を削除するには、次のように入力します。

```
SQL> drop index WWSBR_URL_CTX_INDX force;
```

## 8.3.5 Oracle Text 索引の管理

検索結果が正確で効率的に返されるように、Oracle Text 索引を管理する必要があります。Oracle Text 索引を管理するには、同期化と最適化の2つの側面を考慮する必要があります。

- 同期化は、キューに基づいて Oracle Text 索引を更新します。
- 最適化は、断片化された行を圧縮し、Oracle Text 索引に含まれる古いデータを削除します。索引を同期化すると、必要以上に多くのディスク容量を消費するようになり、問合せの効率が低下します。

Oracle Text を使用すると、各索引が同期化および最適化される頻度を完全に制御できます。たとえば、テキスト変更をすぐに索引に反映させる必要がある場合は、5秒ごとに同期化するように選択できます。または、コンピュータの処理資源をより効率的に利用しながら、最適な索引を目指す場合は、1日に一度だけ同期化するように選択できます。

同期化の詳細は、次を参照してください。

- [Oracle Text 索引の同期化](#)
- [索引の同期化のスケジューリング](#)
- [Oracle Text 索引の同期化の頻度の決定](#)
- [すべての索引のコンテンツの同期化](#)

最適化の詳細は、次を参照してください。

- [Oracle Text 索引の最適化](#)
- [索引の最適化のスケジューリング](#)
- [最適化の間隔の選択](#)

### 8.3.5.1 Oracle Text 索引の同期化

新しいコンテンツが Oracle Text 索引に追加された場合は、そのコンテンツに索引を作成してからでなければ検索できません。また、索引が作成された表内の任意の行が更新されると、その行は同期化が必要であるとマークされます。それらの行は、保留状態の行と呼ばれ、索引が同期化されるまで検索結果として返されません。

OracleAS Portal では、追加または変更されたコンテンツ（アイテム、ページ、カテゴリ、パースペクティブ）は、索引が同期化されるまで検索できず、新しいコンテンツは検索結果として返されません。

ビュー `ctx_user_pending` で、どの行が保留状態であるとマークされているかを確認できます。また、スクリプト `textstat.sql` を使用して、索引ごとに同期化する必要のある行数を確認できます。詳細は、[8.3.7 項「Oracle Text 索引の状態の表示」](#)を参照してください。

新しいコンテンツを検索できるように索引を最新の状態に保つには、プロシージャ `wwv_context.sync()` を使用します。このプロシージャは、すべての Oracle Text 索引を同期化し、すべての保留状態の行の索引を作成します。

#### Oracle Text 索引の同期化

このプロシージャを Portal スキーマの所有者として SQL\*Plus から、次のコマンドを使用して実行します。

```
exec wvw_context.sync();
```

このプロシージャは、すべての仮想プライベート Portal のサブスクライバ間で動作します。

### 8.3.5.2 索引の同期化のスケジューリング

ほとんどのインストールでは、新しく追加または更新したコンテンツに定期的に索引が作成されるように、索引の同期化を一定の間隔で自動的に実行するようにスケジューリングする必要があります。 `textjsub.sql` スクリプトを使用して、ジョブをスケジューリングできます。これには、 `dbms_job` を使用して、一定の間隔で `wwv_context.sync` をコールします。

このスクリプトは、次のように 3 つのパラメータをとり、同期化ジョブの変更または削除にも使用されます。

```
start_time          - a valid date or 'START' or 'STOP'
start_time_fmt      - start time format mask.
                    Ignored if start_time is 'START' or 'STOP'
interval_minutes    - minutes between each run. Ignored if 'STOP'
```

`start_time` に 'START' を設定した場合、2 番目の引数が無視され、次のジョブがただちに実行されるようにスケジューリングされます。それ以降のジョブは、指定した間隔で実行されます。

`start_time` に 'STOP' を設定する場合は、ジョブは削除され、その他の引数は無視されません。

### Oracle Text 索引の同期化のスケジュール

textjsub.sql スクリプトを実行します。たとえば、索引の同期化を 60 分ごとにスケジュールするには、次のように入力します。

```
SQL> @textjsub.sql START NOW 60
```

### 8.3.5.3 Oracle Text 索引の同期化の頻度の決定

索引の同期化ジョブの適切な間隔は、次の条件によって決まります。

- 新しいコンテンツが Portal サイトに追加される頻度。
- 新しく追加または変更されたコンテンツがただちに検索可能にならないと問題になるかどうか。
- 追加または変更されたコンテンツが検索可能になるまでの期間はどの程度が妥当か。

要件によって、同期化の間隔は数分から数日になります。

OracleAS Portal が最初にインストールされるときには、インストール時からすぐに開始して 1 時間ごとに Oracle Text 索引を同期化するジョブが設定されます。

少数の行の同期化を繰り返すよりも、多数の行の同期化を一度に行う方が、断片化された索引が少なくなるので効率的です。断片化された索引が少ない場合は、必要な最適化の頻度も少なくなります。詳細は、[8.3.5.5 項「Oracle Text 索引の最適化」](#)を参照してください。

ただし、多数の行の索引を一度に同期化すると、サーバーに大きな負荷がかかります。同期化を頻繁に行うと、実行される作業量は増加しますが、サーバー上の負荷は分散されます。ジョブは、保留状態の行の同期化のみを行います。同期化ジョブを起動する際には、わずかでも常にオーバヘッドがある程度発生します。

### 8.3.5.4 すべての索引のコンテンツの同期化

特定の Oracle Text 索引のすべての行を同期化が必要とマークして、その索引のすべてのコンテンツを同期化できます。

たとえば、索引は最初に作成された時点では空であるため、索引のコンテンツ全体を更新する必要があります。このためには、索引が作成された列の更新を実行する必要があります。索引が作成された表内のすべての行に対して、プロシージャ `wwv_context.touch_index(p_index)` を使用して列を更新します。

このプロシージャの実行後、表 `ctx_user_index_pending` には、索引が作成された表の行ごとにエントリが作成されています。

このプロシージャは、すべての仮想プライベート Portal のサブスクリバ間で動作します。

#### 索引のすべてのコンテンツの同期化

プロシージャ `wwv_context.touch_index(p_index)` を使用します。 `p_index` を使用して、次の索引名のいずれか 1 つを指定できます。

```

wwv_context.PAGE_TEXT_INDEX
wwv_context.DOC_TEXT_INDEX
wwv_context.PERSPECTIVE_TEXT_INDEX
wwv_context.ITEM_TEXT_INDEX
wwv_context.CATEGORY_TEXT_INDEX
wwv_context.URL_TEXT_INDEX

```

### 複数の索引のすべてのコンテンツの同期化

プロシージャ `wwv_context.touch_index(p_indexes)` を使用します。 `p_indexes` を使用して、同期化する索引名の変配列 (`wwsbr_array`) を指定できます。

### 8.3.5.5 Oracle Text 索引の最適化

Oracle Text 索引を同期化すると、それらが断片化されます。各 Oracle Text 索引は逆索引であり、逆索引では検索文字列は検索が効率的に行えるような形式になっています。各検索文字列は、文字列の場所を参照します。

同期化時に新しい検索文字列が追加される場合、重複する文字列は削除されないため、索引に同じ文字列が複数含まれる場合があります。これにより索引のサイズが大きくなり、検索問合せのパフォーマンスが低下します。

これを解決するには、Oracle Text 索引を最適化します。この処理は、索引を圧縮し、必要に応じて古いデータを削除します。

#### すべての Oracle Text 索引の最適化

すべての Oracle Text 索引を最適化するには、プロシージャ `wwv_context.optimize()` を使用します。このプロシージャは、次のパラメータをとりまます。

```

wwv_context.optimize
(
  p_optlevel in varchar2 default CTX_DDL.OPTLEVEL_FULLL, -- FULL, FAST, TOKEN
  p_maxtime in number default null, -- Maximum time for full optimization, in
  minutes
  p_token in varchar2 default null -- Token to optimize (when TOKEN)
);

```

内部でこのプロシージャは、Oracle Text 索引ごとに Oracle Text プロシージャの `ctx_ddl.optimize_index` をコールし、これらのパラメータを渡します。高速またはトークンの最適化とは対照的な全索引の最適化を実行します。

詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/documentation>) にある Oracle Text のドキュメントを参照してください。

---



---

**注意：** Oracle Text 索引が存在しない場合は、プロシージャ `wwv_context.optimize` は無効です。

---



---



`wwv_optimize` は、索引がかなり断片化されて最適化が必要な場合にのみ、Oracle Text 索引を最適化します。使用される断片化の評価基準は、1つのトークンが索引に複数回現れる平均回数です。この平均が 11 以上の場合は、索引の最適化が必要とみなされます。次の断片化の間合せを使用します。

```
SELECT AVG(COUNT(*)) FROM DR$<index_name>$I
GROUP BY TOKEN_TEXT HAVING COUNT(*) > 1
```

<index\_name> は、評価される索引の名前です。

### 8.3.5.6 索引の最適化のスケジューリング

ほとんどのインストールでは、索引の最適化プロセスを一定の間隔で自動的に実行するようにスケジューリングする必要があります。スクリプト `optjsub.sql` を使用して、ジョブをスケジューリングできます。これには、`dbms_job` を使用して、一定の間隔で `wwv_context.optimize` をコールします。

このスクリプト `optjsub.sql` は、次のように 3 つのパラメータをとり、最適化ジョブの変更または削除にも使用されます。

```
start_time      - A valid date or 'START' or 'STOP'
start_time_fmt  - Start time format mask.
                 Ignored if start_time is 'START' or 'STOP'
interval_minutes - Minutes between each run. Ignored if 'STOP'
```

`start_time` に 'START' を設定した場合、2 番目の引数が無視され、次のジョブがただちに実行されるようにスケジューリングされます。それ以降のジョブは、指定した間隔で実行されません。

`start_time` に 'STOP' を設定する場合は、ジョブは削除され、その他の引数は無視されません。

#### Oracle Text 索引の最適化のスケジューリング

スクリプト `optjsub.sql` を実行します。たとえば、索引の最適化を 60 分ごとにスケジューリングするには、次のように入力します。

```
SQL> @optjsub.sql START NOW 60
```

このスクリプトは、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリにあります。この最適化ジョブの実行時に Oracle Text 索引がない場合は、このプロシージャは無効です。

### 8.3.5.7 最適化の間隔の選択

Oracle Text 索引に必要な最適化の頻度は、ロードされるコンテンツの量や種類、同期化のスケジューリングおよびその他の多くの要因によって変わるので、予測するのは難しいことです。

ただし、一定の間隔で索引の断片化を評価する場合は、索引の断片化の速度を確認できます。この情報を使用して、適切な最適化の間隔を設定できます。

プロシージャ `wwv_context.optimize` では、索引が断片化されているとみなされた場合にのみ、索引を最適化します。したがって、このジョブをコールする際の最小のオーバーヘッド以外は、必要以上にこのジョブを実行しても問題はありません。

OracleAS Portal のインストール時に、24 時間ごとにすべての Oracle Text 索引を最適化するためのジョブが設定されます。

## 8.3.6 URL コンテンツの索引作成と検索

OracleAS Portal で Oracle Text が有効な場合、アイテムまたはページにアタッチされた URL 属性のコンテンツに索引が作成されます。この URL コンテンツに索引が作成されると、検索可能になります。URL 属性の検索条件を入力すると、その URL コンテンツが検索されます。

### 8.3.6.1 相対 URL

OracleAS Portal では、URL 属性の相対 URL を入力できます。相対 URL が Portal ページでリンクとして描画されるときには、URL は Portal ページの HTML の `<head>` セクションに設定されたベース HREF に対して相対的です。ベース HREF の書式は次のとおりです。

```
<protocol>://<server>:<port>/pls/<dad>/
```

たとえば、HTML の `<head>` セクションに、次のような URL が指定されたとします。

```
<base href="http://myserver.abc.com/pls/portal/">
```

この例では、次のようになります。

- 相対 URL の `/help/index.html` は、ブラウザにより次のように解決されます。

```
http://myserver.abc.com/help/index.html
```

- 相対 URL の `!PORTAL.mypackage.proc` (先行の `/` なし) は、ブラウザにより次のように解決されます。

```
http://myserver.abc.com/pls/portal/!PORTAL.mypackage.proc
```

ページ上のベース HREF は、ページを要求するのに使用される URL によって変わります。ページにアクセスするために複数の URL を使用することが可能なので、ベース HREF はページにアクセスするために使用された URL を反映します。

### Oracle Text のベース URL の設定

URL コンテンツに索引を作成する場合、Oracle Text では相対 URL を完全修飾された絶対 URL に解決する方法を知る必要があります。Oracle Text には、正しいベース HREF を判断するための最初の要求のコンテキストがわからないため、使用するベース HREF を指定する必要があります。「検索設定」ページで「Oracle Text のベース URL」プロパティを指定して、このオプションを設定します。8.2.2.3 項「Oracle Text のベース URL の設定」を参照してください。



OracleAS Portal のインストール時に、このオプションは自動的に設定されます。

Oracle Text のベース URL の書式は次のとおりです。

```
<protocol>://<server>:<port>/pls/<dad>/
```

たとえば、次のようになります。http://myserver.abc.com/pls/portal/

---

---

**注意：** https URL には、Oracle Text で索引が作成されないのので、https で始まる Oracle Text ベース URL を指定しないでください。

---

---

Oracle Text ベース URL を変更する場合は、ただちに有効になりません。URL を編集すると、URL は同期化が必要とマークされ、Oracle Text は次回索引が同期化されたときに新しい設定が使用されます。すべての URL で新しい Oracle Text ベース URL 値をすぐに使用する場合は、次のプロシージャを使用して、URL 索引のコンテンツ全体に同期化が必要とマークできます。

```
SQL> wwv_context.touch_index(wwv_context.URL_TEXT_INDEX);
```

このプロシージャは、すべてのサブスクライバ間で有効です。1 つの仮想プライベート Portal サブスクライバでは、これは次のものに相当します。

```
SQL> update wwsbr_url$ set absolute_url = null;
...
SQL> commit;
```

### 8.3.6.2 サポートされていない URL

Oracle Text 索引は、次のプロトコルを使用する URL には作成できません。

- https
- javascript

URL アイテムがこれらのプロトコルのいずれかを指定する場合は、それには索引は作成されません。対応するエラーは、Oracle Text のエラー・ログには記録されません。

また、Oracle Text は https URL に索引を作成することができないので、「Oracle Text ベース URL」オプションに https URL を入力しないでください。入力すると、どの相対 URL にも索引は作成されません。

### 8.3.6.3 サポートされている URL

Oracle Text 索引は、次のプロトコルを使用する URL に作成できます。

- http
- file: ファイル URL は、データベース・サーバーからアクセス可能である必要があります。
- ftp: FTP URL では、匿名ユーザーでも、Oracle Text は認証を行えないので、認証を必要としない場所を指定する必要があります。

### 8.3.6.4 URL の索引のプロキシ設定

URL のコンテンツに索引を作成すると、Oracle Text ではプロキシ・サーバーを使用して URL にアクセスできます。これは、OracleAS Portal がファイアウォールの内側にあり、かつ URL アイテムがこのファイアウォールの外側を指す場合に必要となります。索引の作成は、OracleAS Portal リポジトリ・サーバーから行われるため、重要なのはこのマシンに必要なプロキシ設定です。

URL 索引では、OracleAS Portal にグローバルに使用されるものと同じプロキシ設定を使用します。これらは「プロキシ設定」ページで設定し、「サービス」ポートレットから使用できます。8.2.2.4 項「Oracle Text のプロキシ設定の構成」を参照してください。

プロキシ設定は、Oracle Text 索引が作成されるときに使用されます。したがって、プロキシ設定を変更する場合は、索引を再作成する必要があります。すべての索引を削除し、再作成する必要がある場合は、スクリプトの `ctxdrind.sql` (索引の削除) および `ctxcrind.sql` (索引の作成) を使用します。詳細は、8.3.4 項「Oracle Text 索引の作成および削除」を参照してください。

```
SQL> @ctxdrind.sql
...
SQL> @ctxcrind.sql
...
```

これらのスクリプトは、すべての索引を削除して再作成するので、索引が大きい場合はこの処理に時間がかかることがあります。または、次のようにして、Oracle Text の設定と URL 索引のみを削除および再作成することもできます。

```
begin
  -- Drop and recreate the Oracle Text preferences
  -- to pick up the new proxy settings.
  wwv_context.drop_prefs();
  wwv_context.create_prefs();
end;
/
-- Check that the proxy settings used by the index are correct
select prv_attribute attribute, prv_value value
  from ctx_user_preference_values
  where prv_attribute in ('TIMEOUT', 'HTTP_PROXY', 'NO_PROXY')
/

begin
  -- Drop and recreate the URL index
  wwv_context.drop_index(wwv_context.URL_TEXT_INDEX);
  wwv_context.create_index(wwv_context.URL_TEXT_INDEX);

  -- Mark all of the rows for the index as pending
  wwv_context.touch_index(wwv_context.URL_TEXT_INDEX);

  -- Synchronize and optimize
  wwv_context.sync();
  wwv_context.optimize();
end;
/
```

## 8.3.7 Oracle Text 索引の状態の表示

OracleAS Portal スキーマからアクセスできるいくつかの表およびビューから Oracle Text 索引の状態を確認できます。



詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/documentation>) にある Oracle Text のドキュメントを参照してください。

Oracle Text 索引の状態レポートを表示するには、スクリプト `textstat.sql` を使用します。

```
SQL> @textstat.sql
```

このスクリプトは、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリにあります。このスクリプトによって生成される情報の例を次に示します。

```
SQL> @textstat
```

Oracle Text Indexes (there should be 6):

INDEX_NAME	STATUS	DOMIDX_STATUS	DOMIDX_OPSTATUS	IDX_STATUS
WWSBR_CORNER_CTX_INDX	VALID	VALID	VALID	INDEXED
WWSBR_DOC_CTX_INDX	VALID	VALID	VALID	INDEXED
WWSBR_PERSP_CTX_INDX	VALID	VALID	VALID	INDEXED
WWSBR_THING_CTX_INDX	VALID	VALID	VALID	INDEXED
WWSBR_TOPIC_CTX_INDX	VALID	VALID	VALID	INDEXED
WWSBR_URL_CTX_INDX	VALID	VALID	VALID	INDEXED

6 rows selected.

Indexes with rows waiting to be indexed:

Index	Rows to Index
WWSBR_CORNER_CTX_INDX	2677

PL/SQL procedure successfully completed.

Scheduled Text Jobs:

LAST_DATE	LAST_SEC	NEXT_DATE	NEXT_SEC	B	FAILURES	INTERVAL	WHAT
25-MAR-03	04:57:32	26-MAR-03	04:57:32	N	0	SYSDATE + 24/24	wwsbr_stats.gather_stale;
25-MAR-03	04:57:32	26-MAR-03	04:57:32	N	0	SYSDATE + 1440/(24*60)	wwv_context.optimize(CTX_DDL.OPTLEVEL_FULL,1440,null);
25-MAR-03	06:59:30	25-MAR-03	07:59:30	N	0	SYSDATE + 60/(24*60)	wwv_context.sync;

Running Text Jobs:

no rows selected

SQL>

このスクリプトから、次の状態情報を表示できます。

- Oracle Text 索引の状態 : 状態レポートの最初のセクションには、すべての Oracle Text 索引が存在するかどうか、およびそれらの現在の状態が表示されます。この例で示したように、最初の 3 つの状態の列では、機能する有効な索引に対してはすべて 'VALID' が表示され、最後の列には 'INDEXED' が表示されています。6 つの索引がすべて表示されています。
- 索引ごとの保留中の行数 : 次のセクションには、索引作成を待機中の索引が表示されます。索引作成を待機中、または保留中の行がある索引ごとにエントリが表示されます。保留状態の行の数も表示されます。
- スケジュールされた Oracle Text のジョブの詳細 : スケジュールされたテキスト・ジョブのセクションには、Oracle Text 索引の管理のためにスケジュールされているジョブが表示されます。このレポートには、ジョブが最後に実行された日時とジョブが次回実行される予定の日が表示されます。B の列は、ジョブが壊れたかどうかを示します。つまり、壊れた場合は Y とマークされ、実行されません。INTERVAL 列は、次回ジョブが実行される時刻を示し、最後に WHAT 列は各ジョブに対して実行されるプロシージャを示します。
- アクティブな Oracle Text ジョブの詳細 : 最後のセクションには、textstat.sql レポートが実行されたときに、実行されていたジョブの詳細が表示されます。

## 8.3.8 Oracle Text の索引作成処理の監視

Oracle Text は、索引が作成され値が入力されると、ファイルにログ情報を記録します。これにより、索引作成処理の進捗状況を監視し、索引を追跡し、発生する可能性のある問題のトラブルシューティングを行うことができます。

### 8.3.8.1 start\_log を使用した索引処理の監視

ctx\_output.start\_log (filename) コマンドを使用して、索引作成プロセスからの出力をログに記録できます。次の例では、ログ・ファイルの名前は textindex.log となっています。

```
ctx_output.start_log('textindex.log');
ctx_output.add_event(ctx_output.event_index_print_rowid);
...
-- Create or synchronize the indexes
...
ctx_output.end_log;
```

ctx\_adm.set\_parameter の LOG\_DIRECTORY パラメータを使用して、ログ・ファイルの場所を確認できます。次の例では、ログ出力ディレクトリは /tmp に設定されています。

いったんディレクトリを設定すると、それ以降のすべての Oracle Text のログはこのディレクトリのログ・ファイルに出力されます。

```
ctxsys.ctx_adm.set_parameter('LOG_DIRECTORY', '/tmp');
```

### 8.3.8.2 logcrind.sql を使用した索引作成の監視

スクリプト logcrind.sql (ctxcrind.sql のかわり) を使用すると、ログを有効にして Oracle Text 索引を作成できます。このスクリプトは、ログ・ファイルの名前であるパラメータを1つとります。たとえば、次のようになります。

```
SQL> @logcrind.sql textindex.log
```

このスクリプトは、LOG\_DIRECTORY を、user\_dump\_dest 初期化パラメータで指定された、データベース udump ディレクトリと同じになるように設定します。

add\_event コール（上の例で使用されている）は、スクリプト logcrind.sql でも使用され、これは索引が作成されたすべての行の行 ID をログに出力します。このログは、索引作成処理の追跡を可能にし、各行の索引作成が正常に行われたかどうかを示します。

次に Oracle Text の索引作成ログの例を示します。

```
13:53:27 05/06/03 begin logging
13:53:27 05/06/03 event
13:53:42 05/06/03 log
13:53:42 05/06/03 event
13:53:48 05/06/03 Creating Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_CORNER_CTX_INDX$X"
13:53:48 05/06/03 Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_CORNER_CTX_INDX$X" created
13:53:49 05/06/03 Creating Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_DOC_CTX_INDX$X"
13:53:49 05/06/03 Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_DOC_CTX_INDX$X" created
13:53:49 05/06/03 Creating Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_PERSP_CTX_INDX$X"
13:53:49 05/06/03 Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_PERSP_CTX_INDX$X" created
13:53:50 05/06/03 Creating Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_THING_CTX_INDX$X"
13:53:50 05/06/03 Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_THING_CTX_INDX$X" created
13:53:51 05/06/03 Creating Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_TOPIC_CTX_INDX$X"
13:53:51 05/06/03 Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_TOPIC_CTX_INDX$X" created
13:53:51 05/06/03 Creating Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_URL_CTX_INDX$X"
13:53:51 05/06/03 Oracle index "RCLEWLEY2"."DR$WWSBR_URL_CTX_INDX$X" created
13:54:16 05/06/03 sync index: RCLEWLEY2.WWSBR_CORNER_CTX_INDX
13:54:17 05/06/03 Begin document indexing
13:54:17 05/06/03 INDEXING ROWID AAAUUCAAJAAAlhMAAA
13:54:17 05/06/03 INDEXING ROWID AAAUUCAAJAAAlhMAAI
..
13:54:18 05/06/03 INDEXING ROWID AAAUUCAAJAAAlhQAak
13:54:18 05/06/03 Errors reading documents: 0
13:54:18 05/06/03 Index data for 159 documents to be written to database
13:54:18 05/06/03     memory use: 225971
13:54:18 05/06/03 Begin sorting the inverted list.
```

```

13:54:18 05/06/03 End sorting the inverted list.
13:54:18 05/06/03 Writing index data to database.
13:54:18 05/06/03 index data written to database.
13:54:18 05/06/03 End of document indexing. 159 documents indexed.

```

### 8.3.9 索引作成エラーの表示

索引の作成時または同期化時に発生したエラーは、ビュー `CTX_USER_INDEX_ERRORS` に記録されます。次のコマンドを使用して、それらのエラーの詳細を表示できます。

```

SQL> desc ctx_user_index_errors;
Name                               Null?    Type
-----
ERR_INDEX_NAME                     NOT NULL VARCHAR2(30)
ERR_TIMESTAMP                       DATE
ERR_TEXTKEY                         VARCHAR2(18)
ERR_TEXT                            VARCHAR2(4000)

```

```
SQL>
```

このビューには、索引名、索引が作成された表内の行に対応する行 ID (`ERR_TEXTKEY` 列)、および失敗の原因を示すエラー・メッセージが表示されます。また、エラー・ログ・ファイルには、索引が作成された表内の行の行 ID と成功または失敗メッセージが表示されます。

通常、アイテム (`WWSB_THING_CTX_INDX`)、ページ (`WWSBR_CORNER_CTX_INDX`)、カテゴリ (`WWSBR_TOPIC_CTX_INDX`) またはパースペクティブ (`WWSBR_PERSP_CTX_INDX`) の索引のエラーは表示されません。これは、OracleAS Portal が生成するこれらの索引の内容に対する索引の作成が容易なためです。ドキュメントや URL コンテンツの索引を作成するときの方がエラーが頻繁に発生します。

ドキュメント索引の場合、索引作成のために、コンテンツの絞込みを行ってバイナリの文書をプレーン・テキストに変換する必要がある場合があります。これが失敗する理由がいくつかあります。たとえば、ドキュメントの書式が Oracle Text のフィルタでサポートされていない場合などです。

URL 索引の場合、URL コンテンツを取り出す必要があり、これがいくつかの理由で失敗することがあります。たとえば、OracleAS Portal サーバーがファイアウォールの内側にあるためにアクセスできない場所が URL で指定され、かつプロキシ設定が正しく設定されていない場合などです。または、URL が誤っているか、アクセス対象のサイトが停止している場合などです。

## 8.3.10 索引作成エラーの OracleAS Portal 内のオブジェクトへの変換

ビュー CTX\_USER\_INDEX\_ERRORS または Text 索引作成ログに表示される索引作成のエラーは、エラーが発生したときに索引が作成されていた表内の行 ID を示します。この情報を使用して索引作成の問題が発生している行を特定し、またこの行に対応する Portal アイテムまたはページも特定できます。

### 8.3.10.1 アイテムの索引作成エラー

行 ID は、問題が発生したアイテム表内の行を示します。直接の問合せを実行して、その行についてさらに情報を得ることができます。たとえば、次のようになります。

```
select i.name, i.title,           -- item title
       p.name page_name,        -- page name
       p.title page_title,      -- page display name
       pg.name page_group,      -- page group name
       sl.title page_group_title -- page group display name (default language)
from wwv_things i,
     wwpob_page$ p,
     wwpob_item$ pi,
     wwsbr_sites$ pg,
     wwsbr_site_languages$ sl
where i.masterthingid = pi.master_thing_id
     and i.siteid = pi.site_id
     and pi.page_id = p.id
     and sl.siteid = pg.id
     and sl.language = pg.defaultlanguage
     and pi.page_site_id = p.siteid
     and pg.id = i.siteid
     and i.rowid = 'AAAOwMAAJAAAWISAAF'
```

### 8.3.10.2 ページの索引作成エラー

行 ID は、ページ表内の行を示します。直接の問合せを実行して、索引が作成されていた行についてさらに情報を得ることができます。たとえば、次のようになります。

```
select p.name page_name,
       p.title page_title,
       pg.name page_group,
       sl.title page_group_title
from wwpob_page$ p,
     wwsbr_sites$ pg,
     wwsbr_site_languages$ sl
where sl.siteid = pg.id
     and sl.language = pg.defaultlanguage
     and pg.id = p.siteid
     and p.rowid = 'AAAOv/AAJAAAaSSAAB'
```



### 8.3.10.3 カテゴリ索引エラー

カテゴリ表に対して直接の間合せを実行して、問題のカテゴリを特定できます。結合を使用して、ページ・グループを表示することもできます。この間合せは、カテゴリ名と表示名、そしてページ・グループ名と表示名を表示します。

```
select c.title, c.name, pg.name, sl.title
  from wwv_topics c,
       wwsbr_sites$ pg,
       wwsbr_site_languages$ sl
 where sl.siteid = pg.id
       and sl.language = pg.defaultlanguage
       and pg.id = c.siteid
       and rowid='AAAOv/AAJAAAaSSAAB'
```

### 8.3.10.4 パースペクティブの索引作成のエラー

カテゴリの場合と同様です。パースペクティブ表に対して直接の間合せを実行すると、問題のパースペクティブがわかります。結合を使用して、ページ・グループを表示することもできます。

```
select p.title, p.name, pg.name, sl.title
  from wwv_perspectives p,
       wwsbr_sites$ pg,
       wwsbr_site_languages$ sl
 where sl.siteid = pg.id
       and sl.language = pg.defaultlanguage
       and pg.id = p.siteid
       and p.rowid = 'AAAOv/AAJAAAaSSAAB'
```

### 8.3.10.5 ドキュメント索引エラー

ドキュメント索引でエラーが頻繁に発生することがあります。この場合、索引はドキュメントが実際に格納された表にあります。したがって、アイテム表に結合しなおして、関連するアイテムを特定する必要があります。

次の間合せは、ドキュメントの間合せに関連するドキュメントのファイル名、アイテムの名前および表示名を返します。

```
select d.filename, i.name, i.title
  from wwv_things i,
       wwdoc_document$ d,
       wwv_docinfo di
 where
       d.name = di.name(+)
       and di.thingid = i.id(+)
       and di.masterthingid = i.masterthingid(+)
```

```
and di.siteid = i.siteid(+)  
and d.rowid = 'AAAOYyAAJAAAWAaAAF'
```

すべてのドキュメントがアイテムと関連付けられるとは限らないので、この場合同様の方法でページ表に結合するように問合せを変更する必要があります。

### 8.3.10.6 URL 索引エラー

ドキュメント索引同様、関連するアイテムを特定するためにアイテム表に結合しなおす必要があります。

次の問合せは、URL、およびアイテム名と表示名を表示します。

```
select u.url, u.absolute_url, i.name, i.title  
  from wwv_things i,  
       wwsbr_url$ u  
 where u.object_id = i.id  
       and u.object_siteid = i.siteid  
       and u.object_type = 'ITEM'  
       and u.rowid = 'AAAOYyAAKAAAWAaAAB'
```

URL はアイテムに関連付けられているとは限らず、ページに関連付けられていることもあり、その場合同様にページ表に結合するように問合せを変更する必要があります。

## 8.3.11 一般的な索引作成エラー

以下の項では、いくつかの一般的な索引作成エラーについて説明します。

### 8.3.11.1 一般的なドキュメント索引作成エラー

通常、ドキュメント索引作成エラーは次の書式になります。

```
DRG-11207: user filter command exited with status n
```

実際の終了状態が問題の原因を示します。

### 8.3.11.2 一般的な URL 索引作成エラー

ここでは、いくつかの一般的な URL 索引作成エラーを示します。このリストには、すべてのエラーが含まれているわけではなく、よく発生する一般的なエラーの一部に焦点を当てています。

DRG-11604 URL store: access to %(1)s is denied

索引作成ユーザー・エージェントがドキュメントへのアクセスを拒否されました。クローラは、サイトから返された Cookie の認証や管理を行うことができません。その URL にアクセスできるかどうかを確認します。URL が保護されている場合は、そのコンテンツに索引作成できない可能性があります。

DRG-11609 URL store: unable to open local file specified by %(1)s

DRG-11610 URL store: unable to read local file specified by %(1)s

これらは、ファイル:// URL のファイルを開いたり読み取ったりすることができない場合に発生します。OracleAS Portal リポジトリ・データベースが稼働しているマシンからファイルにアクセスする必要があります。ファイルが存在し、データベース・ユーザーとしてデータベース・マシンからアクセスできるかどうかを確認します。

DRG-11611 URL store: unknown protocol specified in %(1)s

URL に指定されたプロトコルが、Oracle Text ユーザー・エージェントが認識できるものではありません。プロトコルを指定しない場合にこれが発生します。この問題の一般的な原因は、相対 URL が指定されているが、「Oracle Text のベース URL」オプションに完全に修飾された URL が設定されていないということです。また、Oracle Text は、http、file および ftp の URL にのみ索引を作成できます。失敗した URL を調べて、有効なプロトコルが使用され、サポートされている完全に修飾された書式になっていることを確認します。

DRG-11612 URL store: unknown host specified in %(1)s

URL が、OracleAS Portal リポジトリ・データベース・サーバーから解決できないホストを URL に指定しました。OracleAS Portal リポジトリ・サーバーと URL で指定された場所の間にファイアウォールが存在する可能性があります。この場合、プロキシ・サーバーを使用して URL にアクセスする必要がある可能性があります。URL が正しく、かつホストが OracleAS Portal データベース・サーバーからアクセスできることを確認します。また、OracleAS Portal のプロキシ設定が正しく、かつ索引がそのプロキシ設定を使用していることを確認します。8.2.2.4 項「Oracle Text のプロキシ設定の構成」を参照してください。

DRG-11613 URL store: connection refused to host specified by %(1)s

これは、URL に指定されたホストが解決されたが、http リクエストが拒否されたことを意味します。URL が正しく、かつアクセス可能であることを確認します。

DRG-11614 URL store: communication with host specified in %(1)s timed out

要求がタイムアウトになりました。URL が正しく、かつアクセス可能であることを確認します。

DRG-11616 URL store: too many redirections trying to access %(1)s

1 つの URL にアクセスすると、別の URL へリダイレクトされる場合があります。これによりさらにリダイレクトが行われ、リダイレクトが続いていくことがあります。発生するリダイレクトの数が多ければ、このエラーが発生します。これは、リダイレクトのループが検出されると発生します。

DRG-11622 URL store: unknown HTTP error getting %(1)s

Oracle Text によって明示的に処理されない HTTP エラーが発生しました。この HTTP エラーは、エラー・メッセージで報告されます。

### 8.3.12 ハングまたはクラッシュする索引作成への対処方法

なんらかの理由でドキュメントまたは URL の索引が作成できない場合は、エラーがログに記録されます。この場合、索引作成処理の正常な完了が妨げられることはありません。ただし、索引作成に失敗したコンテンツは検索できません。

索引作成処理が完全に失敗になる場合があります。つまり、索引に値が適切に移入される前に、索引作成処理が終了する場合があります。ほとんどの場合、そのような問題はオラクル社カスタマ・サポート・センターに報告してください。ただし、場合によっては、一時的に問題を回避できます。つまり、索引を作成するが、失敗の原因になるコンテンツを除外するということです。詳細は、[8.3.12.2 項「索引のハングおよびクラッシュの防止」](#)を参照してください。

まれに、索引作成処理により、致命的な失敗が発生することがあります。つまり、索引作成を実行しているサーバー・プロセスが終了する場合があります。これが発生すると、次のメッセージが索引作成処理を実行しているクライアントに表示されます。

ORA-03113 通信チャンネルで end- of- file が検出されました

---



---

**注意：** 索引作成処理が正常に完了したかどうか不明な場合は、end of file エラーが明確に報告される SQL Plus から処理を繰り返します。

---



---

サーバー・プロセスが終了した場合は、このイベントがデータベース・ログにも記録されるはずですが、データベース・アラート・ログを使用し、作成されたトレース・ファイルの場所を特定します。トレース・ファイルは、ORA-0600 または ORA-7445 などのエラーを示します。たとえば、このトレース・ファイルは、スクリプト logcrind.sql を使用して Oracle Text 索引を作成するときに発生するエラーを示します。

```
ksedmp: internal or fatal error
ORA-7445: exception encountered: core dump [drsfdatam()+308] [SIGSEGV]
[Address not mapped to object] [0x0] [
] []
Current SQL statement for this session:
declare
l_dump_dest varchar2(512);
p_logfile varchar2(100) := 'sync_2012.log';
begin
dbms_output.enable(10000);
select value into l_dump_dest from v$parameter
where name = 'user_dump_dest';
ctxsys.ctx_adm.set_parameter('LOG_DIRECTORY',l_dump_dest);
```

```

ctx_output.start_log(p_logfile);
ctx_output.add_event(ctx_output.event_index_print_rowid);
dbms_output.put_line('Log file is: '||ctx_output.logfilename);
wwv_context.sync();
ctx_output.end_log;
end;
----- PL/SQL Call Stack -----
object line object
handle number name
8198f83c 244 package body CTXSYS.DRIDISP
8198f83c 377 package body CTXSYS.DRIDISP
8198f83c 334 package body CTXSYS.DRIDISP
8178acc8 403 package body CTXSYS.DRIDML
827124b0 2033 package body CTXSYS.DRIDDL
827124b0 2090 package body CTXSYS.DRIDDL
817ea0f0 1324 package body CTXSYS.CTX_DDL
8185a488 828 package body TOOLS.WWV_CONTEXT
82d83ed8 18 anonymous block
----- Call Stack Trace -----

```

### 8.3.12.1 索引処理がハングしているかどうかの特定

索引作成処理がハングしているかどうかを特定する最も簡単な方法は、Oracle Text のログを有効にして索引作成処理を実行することです。詳細は、[8.3.8 項「Oracle Text の索引作成処理の監視」](#)を参照してください。

ログを有効にすると、行に索引が作成されるときに各行の行 ID が記録されるので、同じ行で索引作成処理が長い間ハングするとわかります。行によっては正常な処理でも数分かかる場合がありますが、処理が予想以上に長くかかる場合は、問題が発生している可能性があります。

一般に、ビュー CTX\_USER\_INDEX\_ERRORS を確認しても、索引作成のプロセスがハングまたはクラッシュした理由は特定できません。これは、情報はコミットされるまでこのビューに表示されないためです。さらに、コミットは索引作成処理がハングしている間に行われず、処理がクラッシュした場合はまったく行われません。

URL の索引作成やドキュメントの絞込みなどの処理は、かなり時間がかかる場合があります。これらの処理は両方とも、プロセスをさらに長引かせないためにタイムアウト・メカニズムの対象になります。

- URL の索引作成のタイムアウト: URL コンテンツを取り出すためのデフォルトのタイムアウトは、30 秒です。URL コンテンツを 30 秒以内に取り出すことができない場合は、取出しが中止されて、失敗エラーがビュー CTX\_USER\_INDEX\_ERRORS に報告され、索引作成のプロセスは次の行に進みます。ほとんどの場合、URL コンテンツを取り出すには 30 秒で十分です。ただし、いったんコンテンツを取り出したら、それに索引を作成する必要があるため、合計時間は URL のタイムアウト値よりも少し長い場合があります。

- ドキュメント絞込みのタイムアウト：ドキュメントの絞込み処理のタイムアウトは、厳密なタイムアウト制限ではありません。タイムアウトの設定値は、デフォルトで 120 秒に設定されています。この設定値は、INSO フィルタが出力を生成するのを待機する時間です。タイムアウト値を過ぎると、現在の絞込み処理が終了し、現在のドキュメントのコンテンツには索引が作成されず、索引作成プロセスは次の文書に進みます。120 秒を経過した後、INSO フィルタの出力ファイルのサイズが増え続ける場合は、絞込み処理が継続しています。

このタイムアウト・メカニズムは、問題が発生しやすい 2 つの分野である、URL およびドキュメントの索引作成の問題の防止に役立ちます。ただし、索引作成処理が無期限にハングする状況が発生する可能性はまだあります。

### 8.3.12.2 索引のハングおよびクラッシュの防止

特定のコンテンツが索引作成処理の失敗の原因である場合は、そのコンテンツを索引作成プロセスから除外できます。最初に、問題の原因の行を特定する必要があります。この項では、この方法とそのようなコンテンツを除外するための追加の手順について説明します。

#### 手順 1：索引作成の問題の原因である行 ID を特定する

これは、`print rowid event` を有効にして、Oracle Text のログ機能を使用して行うことができます。生成されたログ・ファイルを調べると、失敗したときの（処理されていた行の）行 ID を特定できます。ほとんどの場合、この行 ID が索引作成の問題の原因です。

ただし、場合によっては、失敗したときに実際に処理されていた行の行 ID がログ・ファイルに書き込まれないことがあります。この場合、次の行 ID を確認する必要があります。

- たとえば、索引を最初に作成したときに、表全体を同期化している場合は、行 ID は表の次の行 ID になっています。行 ID を特定するには、`order by` 句なしで表から選択します。
- いくつかの保留状態の行のみ更新された場合は、ビュー `ctx_user_pending` を調べて次の行 ID を特定します。

索引作成の問題の原因である行を特定したら、それが正しい行であるかどうかを確認する必要があります。これは、その行のみを同期化して失敗を再現することにより行います。

Oracle Text 索引が存在しない場合は、次のコマンドを使用して索引を作成します（ただし、索引に値を移入しないでください）。

```
SQL> exec wwv_context.drop_prefs;
PL/SQL procedure successfully completed.
SQL> exec wwv_context.create_prefs;
PL/SQL procedure successfully completed.
SQL> declare
2     l_indexes wwsbr_array;
3 begin
4     wwv_context.create_missing_indexes(l_indexes);
5 end;
```

6 /

```
PL/SQL procedure successfully completed.
SQL>
```

これにより、すべての索引が作成され、保留状態の行はありません。

## 手順 2: 問題の行 ID を保留中としてマークする

次の手順では、索引作成の問題の原因である可能性がある行を保留中としてマークします。更新する必要がある列は、どの索引を更新するかによって決まります。それらの列の名前を次の例に示します。これらの例にでてくる行 ID を、確認対象の行 ID と置き換えます。

URL 索引 (WWSBR\_URL\_CTX\_INDX) : absolute\_url 列には、トリガーによって値が移入されるので、次のようにここでこの列に NULL を設定します。

```
update wwsbr_url$ set absolute_url=null where rowid = 'AAAOWQAAJAAAU0+AAL';
```

ドキュメント索引 (WWSBR\_DOC\_CTX\_INDX) : blob\_content 列を更新しますが、元の blob\_content 値を保持します。

```
update wwdoc_document$ set blob_content = blob_content where rowid = 'AAA0YyAAJAAWAAaAAF'
```

アイテム索引 (WWSBR\_THING\_CTX\_INDX) : この索引は、ctxtxt 列に作成されたユーザー・データストアを使用します。この列の値は、無意味であり、OracleAS Portal では常に 1 です。

```
update wwv_things set ctxtxt = '1' where rowid = 'AAAOWMAAJAAAU0eAAB'
```

ページ索引 (WWSBR\_FOLDER\_CTX\_INDX) : アイテム索引と同様です。

```
update wwpob_page$ set ctxtxt = 1 where rowid = 'AAAOWMAAJAAAWITAAA'
```

カテゴリ索引 (WWSBR\_TOPIC\_CTX\_INDX) : アイテム索引と同様です。

```
update wwv_topics set ctxtxt = 1 where rowid = 'AAAOWMAAJAAAWITAAA'
```

パースペクティブ索引 (WWSBR\_PERSP\_CTX\_INDX) : アイテム索引と同様です。

```
update wwv_perspectives set ctxtxt = 1 where rowid = 'AAAOWMAAJAAAWITAAA'
```

複数のサブスクリイバがインストールされたサイトがある場合は、サブスクリイバを切り替えてからでないと必要な行を見ることができない場合があります。サブスクリイバを変更するには、次のプロシージャを使用して軽量ユーザーのセッション・コンテキストを設定します。

```
wwctx_api.set_context
(
    p_user_name      IN varchar2,
    p_password       IN varchar2 default null,
```

```

        p_company          IN varchar2 default null
    );

```

パッケージ `wwctx_api` は、パブリック API パッケージです。

詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

列の更新後、疑いのある行が保留中のキューに入れられます。



### 手順 3: 索引を同期化する

ここで、次のコマンドを使用して、索引を同期化し、同じ問題が発生するかどうかを確認できます。

```
SQL> exec wwv_context.sync();
```

このコマンドは、疑いのある行が保留中のキュー内の唯一の行である場合にのみ同期化します。テストを繰り返すために、行を再度更新できます。

### 手順 4: 問題の原因のコンテンツを除外する

索引作成の問題の原因である行を変更または削除して、今後、索引作成処理がハングまたはクラッシュするのを防止できます。たとえば、ドキュメントの場合は、OracleAS Portal 内の関連するアイテムを編集して、そのドキュメントを削除できます。

---

**注意：** 索引作成処理中にシステムがハングまたはクラッシュした場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。問題の原因のコンテンツに関連する具体的な詳細情報を提供していただくと、問題の再現が容易になります。

---

## 8.3.12.3 ドキュメントの絞込み処理のハングの防止

INSO フィルタがなんらかの理由でハングする場合は、ドキュメントの絞込み処理がハングする原因にもなります。タイムアウト・メカニズムがこの発生を防止するはずですが、場合によっては、出力がログに記録される前に INSO フィルタがハングします。

この場合、INSO フィルタ・プロセスを終了することによって、絞込み処理がハングするのを防止できます。これを行うと、その時点で索引が作成されていたドキュメントには索引が作成されないため、このドキュメントのコンテンツは検索できません。ただし、索引作成処理を再開できます。

ドキュメントを絞り込むときには、個別に INSO フィルタ実行可能プログラム `ctxhx` が (Oracle サーバーによって) コールされ、各ドキュメントを絞り込みます。

UNIX の場合: `ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall`

Windows の場合: `ORACLE_HOME¥bin¥ctxhx`



`ORACLE_HOME` は、OracleAS Portal リポジトリがインストールされるデータベースのデータベース・ホームです。

INSO フィルタ・プロセスを終了するために使用するコマンドは、データベース・プラットフォームによって異なります。たとえば、ほとんどの UNIX プラットフォームでは、`ps` を使用して、ハングした `ctxhx` プロセスのプロセス ID を確認してから、`kill` コマンドを使用して `ctxhx` プロセスを終了します。

---



---

**注意：** これはサポートされているプロシージャではありません。索引作成の問題を調査する場合にのみこの操作を実行するようにしてください。

---



---

### 8.3.12.4 手動でのドキュメント絞込み処理の実行

INSO フィルタの `ctxhx` をオペレーティング・システムから直接コールできます。ドキュメントの絞込みで問題が発生する場合は、`ctxhx` を使用して、次のことができます。

- 問題を検証します。つまり絞込みの段階を直接切り離してテストします。
- ドキュメントの絞込み処理が異常終了しているか、またはハングしているかどうかを特定します。

これを行うために、次のようにして実行時に `ctxhx` が、依存する共有ライブラリにリンクできるようにします。

- UNIX プラットフォームの場合、`ld` が使用するライブラリ・パスに、TNS リスナーとデータベースが起動される環境の両方に対して `ORACLE_HOME/ctx/lib` が含まれている必要があります。様々な UNIX プラットフォームに対するライブラリ・パスの環境変数は、次のとおりです。

Solaris、Tru64 UNIX、Linux -> `$LD_LIBRARY_PATH`

HP/UX -> `$SHLIB_PATH` and `$LD_LIBRARY_PATH`

IBM AIX -> `$LIBPATH`

詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「Inso フィルタ処理テクノロジーについて」を参照してください。

- Windows では、`ORACLE_HOME\bin` が環境変数 `PATH` に含まれているようにします。

INSO フィルタの `ctxhx` は、次の場所にあります。

UNIX プラットフォームの場合：`ORACLE_HOME/ctx/bin/ctxhx`

Windows の場合：`ORACLE_HOME\bin\ctxhx`

引数を指定せずにこのコマンドを実行すると、ヘルプ情報が表示されます。ただし、通常は、次のようにコマンドを実行します。

```
ctxhx infile.doc outfile.out ascii8 unicode
```

最後のパラメータは、OracleAS Portal リポジトリ・データベースのキャラクタ・セット（この例では Unicode）にする必要があります。

### 8.3.13 Oracle Text のインストールの問題のトラブルシューティング

Oracle Text 関連の問題が発生する場合は、TEXTTEST ユーティリティを使用して、Oracle Text 機能がインストールされ、正しく設定されているかを確認します。付録 H 「TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認」を参照してください。

### 8.3.14 Oracle Database 10g にアップグレードするときに Oracle Text 索引をアップグレードする

OracleAS Portal リポジトリ・スキーマを含むデータベースを Oracle Database 10g にアップグレードした場合には、いくつかの変更を行わないと、Oracle Text の機能が OracleAS Portal で正しく動作しません。これは、Oracle9i データベースでは、データストア・プロシージャが CTXSYS スキーマ内に作成されるのに対し、Oracle Database 10g では、索引を所有するスキーマに作成する必要があるためです。

Oracle Database 10g に新しい OracleAS Portal リポジトリをインストールした場合には、追加の変更を行わなくてもリポジトリは正しく機能します。

必要な変更を行うには、OracleAS Portal スキーマの所有者として、アップグレードした Oracle Database 10g 内にすでに作成されている各 OracleAS Portal スキーマに対して次のコードを実行します。

```
begin
  wwv_context_util.drop_context_procs();
  wwv_context.drop_prefs();
  wwv_context.create_prefs();
  wwv_context.update_index_prefs();
end;
```

このコードは、CTXSYS スキーマからデータストア・プロシージャを削除し、OracleAS Portal で使用される Oracle Text 環境設定を再作成します。Oracle Text 索引が存在する場合には、再作成した環境設定を使用して、Oracle Text 索引が使用する設定を更新します。これで、Oracle Text の機能が正しく動作するようになります。

## 8.4 Oracle Ultra Search

この項では、Oracle Ultra Search について説明し、この機能に必要なデータベースと中間層を構成する方法について説明します。

この項の内容：

- [Oracle Ultra Search の概要](#)
- [Oracle Application Server Infrastructure の構成](#)
- [Oracle Ultra Search を使用するためのデータベースの構成](#)
- [Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントの構成](#)
- [リモート・クローラ・ホストの設定](#)
- [Oracle Ultra Search ポートレット・サンプル](#)

### 8.4.1 Oracle Ultra Search の概要

この項の内容：

- [Oracle Ultra Search について](#)
- [Oracle Ultra Search のサンプル問合せアプリケーションについて](#)
- [Oracle Ultra Search 管理ツールについて](#)

#### 8.4.1.1 Oracle Ultra Search について

Oracle Ultra Search は、Oracle データベース・サーバーと Oracle Text テクノロジー上に構築され、Oracle データベース、その他の ODBC 準拠データベース、IMAP メール・サーバー、Web サーバーが提供する HTML 文書、ディスク上のファイルなどの複数のリポジトリに対する一括検索機能を提供します。

Oracle Ultra Search は、クローラを使用してドキュメントを収集します。検索対象の Web サイトに合わせてクローラをスケジュールできます。ドキュメントはそのドキュメントのリポジトリに格納され、収集された情報を使用して、ファイアウォールの内側の指定された Oracle データベースに索引を作成します。Oracle Ultra Search は、コンテンツ管理ソリューションを作成するための API も提供します。

また、Oracle Ultra Search は次のものも提供します。

- データベース内のテキストを検索するための完全なテキスト問合せ言語
- Oracle データベース・サーバーと SQL 問合せ言語の完全な統合
- 概念検索やテーマ分析などの高度な機能
- 異なるリポジトリ間での属性検索を容易にする属性マッピング
- 使用頻度の高いすべてのファイル形式（150 以上）の索引作成

- 中国語、日本語、韓国語（CJK）、および Unicode のサポートを含む完全なグローバルセッション

Oracle Ultra Search は、次のコンポーネントから構成されています。

- Ultra Search クローラ
- Ultra Search サーバー・コンポーネント
- Ultra Search 管理ツール
- Ultra Search の API およびサンプル・アプリケーション

**関連項目：**『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』

次の場所で追加情報を参照できます。

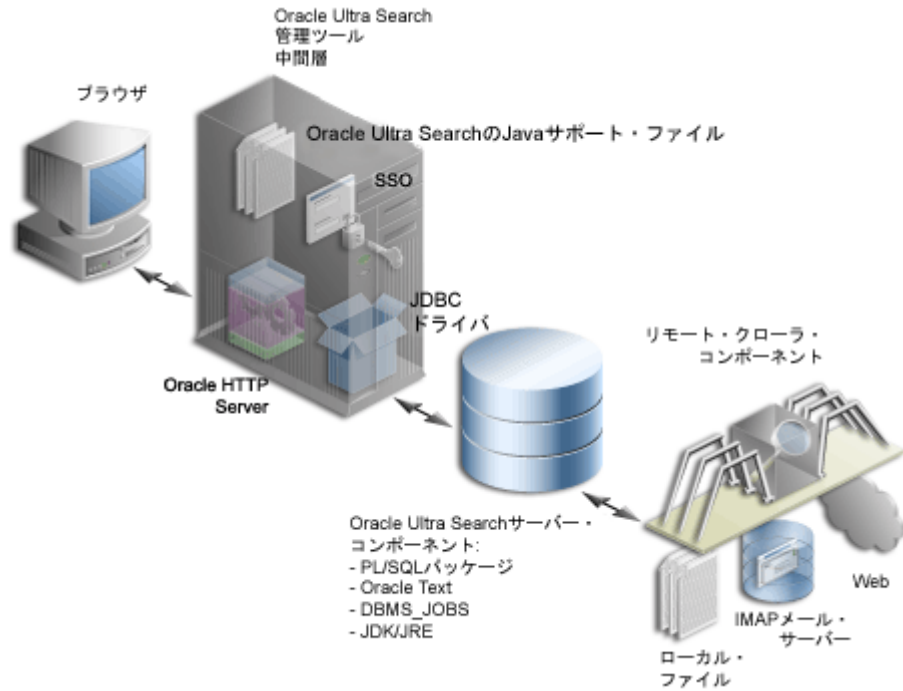


- Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「Setting Up Oracle Ultra Search for OracleAS Portal 10g (9.0.4)」
- Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/documentation>) にある Oracle Ultra Search のホワイト・ペーパーやプレゼンテーション

Oracle Ultra Search は、OracleAS Portal に統合されています。これにより、OracleAS Portal ユーザーは、強力なマルチリポジトリ検索を Portal ページに追加できます。また、OracleAS Portal の独自のリポジトリのデータ収集機能およびパブリック・コンテンツの検索機能もあります。

図 8-11 は、Oracle Ultra Search アーキテクチャの概要を示しています。

図 8-11 Oracle Ultra Search のアーキテクチャ



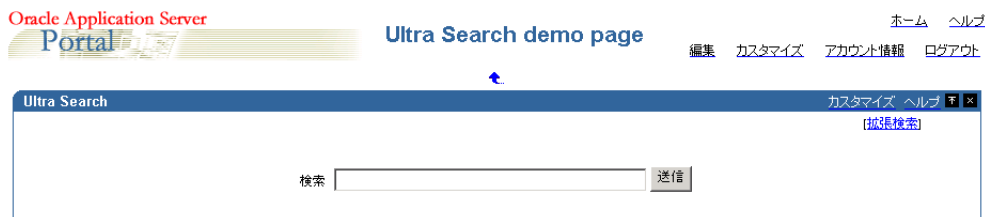
関連項目：『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』

### 8.4.1.2 Oracle Ultra Search のサンプル問合せアプリケーションについて

Oracle Ultra Search には、検索結果の問合せと表示に必要な機能を備えたサンプル問合せアプリケーションが含まれています。問合せアプリケーションは、J2EE 準拠の Web アプリケーションとして作成されています。

サンプル問合せアプリケーションには、[図 8-12](#) に示す「Ultra Search」ポートレットも含まれています。

図 8-12 Oracle Ultra Search ポートレット



Oracle Ultra Search ポートレットは、OracleAS Portal で使用する検索ポートレットの作成例を示します。

ユーザーが問合せアプリケーションで問合せを発行すると、問合せの結果を含むヒット・リストが返されます。ユーザーは、ヒット・リストから表示するドキュメントを選択できます。ヒット・リストには、[図 8-13](#) に示すように、HTML 文書、ファイル、データベース表コンテンツ、アーカイブ済電子メールなどのアイテムが含まれます。Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションには、電子メールの読取りおよび参照を行うための電子メール・ブラウザも組み込まれています。

OracleAS Portal で Oracle Ultra Search ポートレットを使用するには、[8.2.3 項「OracleAS Portal での Oracle Ultra Search オプションの構成」](#)を参照してください。

図 8-13 Oracle Ultra Search ポートレットの間合せ結果の例

[拡張検索]

<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/</a>
スコア: 3 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 22.27 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/ITEMSRESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/ITEMSRESULTS/</a>
スコア: 3 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 22.27 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/CATEGORYRESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/CATEGORYRESULTS/</a>
スコア: 3 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 22.27 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/ADVANCEDSEARCHPAGE/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/ADVANCEDSEARCHPAGE/</a>
スコア: 3 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 20.15 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/FOLDERSRESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/FOLDERSRESULTS/</a>
スコア: 3 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 22.27 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/PERSPECTIVERESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/SEARCHRESULTS/PERSPECTIVERESULTS/</a>
スコア: 3 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 22.27 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BASICSEARCHPAGE/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BASICSEARCHPAGE/</a>
スコア: 3 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 11.78 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BSEARCHRESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BSEARCHRESULTS/</a>
スコア: 2 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 14.1 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BSEARCHRESULTS/BASICITEMSRESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BSEARCHRESULTS/BASICITEMSRESULTS/</a>
スコア: 2 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 14.1 KB
<a href="http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BSEARCHRESULTS/BASICFOLDERSRESULTS/">http://sqtcnsun03.cn.oracle.com:7777/pls/portal/url/PAGE/TOPLEVELSITE/BSEARCHRESULTS/BASICFOLDERSRESULTS/</a>
スコア: 2 最終更新日: 2003-11-22 23:04:54.0 ページ・サイズ: 14.1 KB
<b>約13件中1 - 10件目。</b>
ページの移動 1 2 [次へ]

Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションを使用しない場合は、Oracle Ultra Search Java Query API を直接起動して、独自の問合せアプリケーションを作成できます。この API は Java で記述されているため、サンプル問合せアプリケーションの場合と同様に、Java サーブレットや JavaServer Pages などの任意の Java ベース・アプリケーションから API メソッドを起動できます。データ収集および索引の作成が終了している電子メールを描画する場合は、Oracle Ultra Search Java Email API メソッドを直接起動することもできます。

#### 関連項目：

- 『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』
- `ORACLE_HOME /ultrasearch/sample/sample_readme.htm` にある README ファイル

### 8.4.1.3 Oracle Ultra Search 管理ツールについて

Oracle Ultra Search 管理ツールは、Ultra Search インスタンスを管理可能にする Web アプリケーションです。このツールを使用して、データベース・ユーザーまたは SSO ユーザーに対するユーザー管理操作を実行できます。認証済の SSO ユーザーには、Oracle Ultra Search のログイン画面が表示されません。そのかわり、Oracle Ultra Search インスタンスをすぐに選択できます。

Oracle Ultra Search 管理ツールから、次の操作を実行できます。

- Oracle Ultra Search インスタンスの定義
- 管理ユーザーの管理
- データ・ソースの定義とデータ・グループへの割当て
- Oracle Ultra Search クローラの構成とスケジューリング
- 問合せオプションの構成

Oracle Ultra Search 管理ツールと Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションは、Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネント・モジュールの一部です。ただし、Oracle Ultra Search 管理ツールと Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションは依存関係にありません。このため、これらを別々のマシンでホストすれば、セキュリティや拡張性を向上させることができます。

Oracle Ultra Search 管理ツールには、OracleAS Portal からアクセスできます。「サービス」ポートレットから、「Ultra Search 管理」ページに移動します。[8.2.3.1 項「Oracle Ultra Search 管理ツールへのアクセス」](#)を参照してください。

**関連項目：**『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』



## 8.4.2 Oracle Application Server Infrastructure の構成

Oracle Ultra Search のサーバー層は、Oracle Application Server Infrastructure と一緒にインストールされます。デフォルトでは、このプロセスの中で次の動作が発生します。

- Oracle Ultra Search のサーバー・コンポーネントは、ultrasearch ディレクトリにすべてコピーされます。このディレクトリは、指定されたデータベース・インストールの `ORACLE_HOME` の直下に存在します。
- データベース・ユーザー `WKSYS` (パスワード `wksys`) が作成されます。このパスワードは、セキュリティ上の理由からすぐに変更する必要があります。Oracle Ultra Search データベース・オブジェクトは、このユーザーのスキーマにすべてインストールされます。インフラストラクチャ・データベースをインストールすると、ユーザー・スキーマのパスワードはすべて乱数になります。パスワードを変更するには、ユーザー `WKSYS` (または `WKPROXY`) としてログインし、Oracle Enterprise Manager 「Infrastructure」ページの「スキーマ・パスワードの変更」リンクから、`WKSYS` (または `WKPROXY`) スキーマ・パスワードを変更します。
- 様々な PL/SQL スクリプトが、ユーザー `WKSYS` としてデータベースに対して実行されます。これらのスクリプトによって、様々なデータベース・オブジェクトがインストールおよび作成されます。

**関連項目：** 必要な環境変数の設定については、お使いのシステムのインストール・ガイドを参照してください。

## 8.4.3 Oracle Ultra Search を使用するためのデータベースの構成

Oracle Ultra Search を使用するためにデータベースを構成するには、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の「インストール後の情報」に記載されている手順に従います。

## 8.4.4 Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントの構成

Oracle Universal Installer の構成オプション画面で「OracleAS Portal」オプションを選択すると、OracleAS Portal Configuration Assistant によって Oracle HTTP Server と Oracle Application Server Containers for J2EE が Ultra Search と一緒に自動的に構成されます。このオプションを選択しなかった場合は、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の「Oracle HTTP Server および OC4J」での Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントの構成」の手順を手動で実行して、既存の Web Server を構成する必要があります。

さらに、`data-sources.xml` を編集して、UltraSearchDS データ・ソースを追加し、WK\_TEST スキーマのロックを解除し、そのパスワードを WK\_TEST に再設定する必要があります。詳細については、[8.4.4.1 項「data-sources.xml ファイルの編集」](#)で説明します。

`ultrasearch.properties` ファイルを構成する必要はありません。このファイルには、Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントで使用される構成情報が入っています。このファイルは Oracle Installer によって自動的に構成されます。詳細は、[8.4.4.2 項「ultrasearch.properties ファイルの編集」](#)を参照してください。

### 8.4.4.1 data-sources.xml ファイルの編集

---

---

**注意：** `data-sources.xml` にクリア・テキストのパスワードを格納するのは、セキュリティ上のリスクになります。これを避けるには、パスワードを指定するためにパスワード・インダイレクションを使用します。これによって、パスワードを `jazn-data.xml` に格納することが可能になり、そこでパスワードが自動的に暗号化され、`data-sources.xml` から暗号化されたパスワードを指定することができます。詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』を参照してください。

---

---

Oracle Ultra Search 問合せ API は、J2EE コンテナのデータ・ソース機能を使用します。ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_Portal/config ディレクトリで、ファイル `data-sources.xml` を編集します。<data-sources> タグ内に次の行を追加します。

```
<data-source
  class="oracle.jdbc.pool.OracleConnectionCacheImpl"
  name="UltraSearchDS"
  location="jdbc/UltraSearchPooledDS"
  username="<username>"
  password="<password>"
  url="jdbc:oracle:thin:@<database_host>:<oracle_port>:<oracle_sid>"
/>
```

`username` と `password` は、Oracle Ultra Search インスタンス所有者のデータベース・ユーザー名とパスワード、`database_host` はバックエンド・データベース・マシンのホスト名、`oracle_port` はユーザーの Oracle データベースのポート、`oracle_sid` はユーザー

の Oracle データベースの SID です。data-sources.xml には、ユーザー名、パスワードおよび JDBC URL 以外に、接続キャッシュ・サイズとキャッシュ方式も構成できます。次のタグには、キャッシュ・サイズの上限と下限、非アクティブのタイムアウトの間隔およびキャッシュ方式を指定します。

```
<data-source
  class="oracle.jdbc.pool.OracleConnectionCacheImpl"
  name="UltraSearchDS"
  location="jdbc/UltraSearchPooledDS"
  username="wk_test"
  password="wk_test"
  url="jdbc:oracle:thin:@<database_host>:<oracle_port>:<oracle_sid>"
  min-connections="3"
  max-connections="30"
  inactivity-timeout="30">
  <property name="cacheScheme" value="1"/>
</data-source>
```

セキュリティのために、WK\_TEST はインストール後にロックされます。管理者はデータベースにログインして、WK\_TEST ユーザー・アカウントをロック解除する必要があります。これを行うには、SYSTEM または SYS データベース・ユーザーとして次の文を実行します。

```
ALTER USER WK_TEST ACCOUNT UNLOCK;
```

その後、パスワードを WK\_TEST に設定します。(パスワードはインストール後に期限切れになります。)パスワードを WK\_TEST 以外に変更した場合は、データベースでパスワードを変更後、管理ツールの「インスタンスの編集」ページを使用して、キャッシュされたスキーマ・パスワードを更新する必要があります。

---

**注意：** JDBC データ・ソースの URL は、  
 jdbc:oracle:thin:@<hostname>:<port>:<sid> の形式で、または  
 jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=  
 (LOAD\_BALANCE=yes) (ADDRESS\_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)  
 (HOST=c1s02a) (PORT=3999)) (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)  
 (HOST=c1s02b) (PORT=3999))) (CONNECT\_DATA=  
 (SERVICE\_NAME=acme.us.com))) などの TNS キーワード値構文の形式  
 で指定できます。

---

キャッシュ方式には、次の 3 つのタイプがあります。

- DYNAMIC\_SCHEME = 1
- FIXED\_WAIT\_SCHEME = 2
- FIXED\_RETURN\_NULL\_SCHEME = 3

**関連項目：**『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』

### 8.4.4.2 ultrasearch.properties ファイルの編集

`ORACLE_HOME/ultrasearch/webapp/config/ultrasearch.properties` ファイルには、Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントが使用する構成情報が含まれています。このファイルは Oracle Installer によって自動的に構成されるので、このファイルを編集する必要はありません。

次に `ultrasearch.properties` ファイルの例を示します。

```
connection.driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
connection.url=jdbc:oracle:thin:@ldap://dlsn8888.cn.oracle.com:3060/iasdb,cn=oraclecontext
oracle.net.encryption_client=REQUESTED
oracle.net.encryption_types_client=(RC4_56,DES56C,RC4_40,DES40C)
oracle.net.crypto_checksum_client=REQUESTED
oracle.net.crypto_checksum_types_client=(MD5)
oid.app_entity_cn=m16bi.sgtcnsn03.cn.oracle.com
domain=us.oracle.com
```

各項目の説明

- `connection.driver` は、使用している JDBC ドライバを指定します。
- `connection.url` は、中間層が接続するデータベースを指定します。Ultra Search は、次の書式をサポートします。
  - `host:port:SID` (`host` は Ultra Search を実行している Oracle データベース・インスタンスの完全なホスト名、`port` は Oracle データベース・インスタンスのリッスナー・ポートの番号、`SID` は Oracle データベース・インスタンスの ID)。
  - HA-aware string (TNS キーワード値構文など)。次に `connection.url` 文字列の例を示します。

```
connection.url=jdbc:oracle.thin:@ultrasearch.us.oracle.com:1521:myInstance
```

- `oracle.net.encryption_client`、`oracle.net.encryption_types_client`、`oracle.net.crypto_checksum_client` および `oracle.net.crypto_checksum_types_client` は、データベースへの保護された JDBC 接続のプロパティを制御します。
- `oid.app_entity_cn` は、Oracle Ultra Search Middle-Tier のアプリケーション・エンティティの名前を指定します。
- `domain` は、Identity Management マシンと Oracle Ultra Search Middle-Tier マシン用の共通のドメインを指定します。これにより、Internet Explorer で Oracle Delegated Administration Services (DAS) の値リストが有効になります。たとえば、Oracle Ultra Search Middle-Tier が `us.company.com` であり、Identity Management マシンが

uk.company.com である場合は、共通のドメインは company.com です。この場合、次の行を ultrasearch.properties に追加します。

```
domain=company.com
```

### 8.4.4.3 OC4J\_Portal インスタンスの再起動

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して、OC4J\_Portal インスタンスを再起動します。

OC4J\_Portal インスタンスを再起動するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールにアクセスします。詳細は、[7.2.1 項「Application Server Control コンソールへのアクセス」](#)を参照してください。  
スタンドアロンのアプリケーション・サーバー・インスタンスが複数ある場合、Application Server Control コンソールの開始ページは、Oracle Application Server ファーム・ホーム・ページです。
2. Oracle Application Server インスタンスをクリックして、ホーム・ページに移動します。
3. 「システム・コンポーネント」領域で、「OC4J\_Portal」を選択します。
4. 「再起動」をクリックします。
5. OC4J\_Portal の再起動を確認するメッセージが表示されたら、「はい」をクリックします。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』

### 8.4.4.4 Oracle Ultra Search 管理ツールのテスト

次の場所にある Oracle Ultra Search 管理ツールにログインすることで、変更内容をテストすることができます。

```
http://<hostname>.<domainname>:<port>/ultrasearch/admin/index.jsp
```

hostname.domainname は Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントをインストールしたホストの完全な名前、port はデフォルトの Web Server ポートです。

Oracle Ultra Search のサーバー・コンポーネントのインストール中に、新しい Oracle Ultra Search インスタンス所有者を作成する必要があります。Oracle Ultra Search インスタンス所有者のデータベース・ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle Ultra Search 管理ツールにログインします。

Oracle Ultra Search 管理ツールに正常にログインできた場合、Oracle Ultra Search 管理ツールの構成プロセスは完了しています。

OracleAS Portal から Oracle Ultra Search の管理インタフェースにアクセスすることもできます。「サービス」ポートレットから、「Ultra Search 管理」ページに移動します。[8.2.3.1 項「Oracle Ultra Search 管理ツールへのアクセス」](#)を参照してください。

#### 8.4.4.5 Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションのテスト

Oracle Ultra Search 管理ツールが動作していることを確認したら、Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションを実行できます。Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションの実行方法の詳細は『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の「Ultra Search のインストールと構成」、Ultra Search サンプル問合せアプリケーションのテストに関する項を参照してください。

### 8.4.5 リモート・クローラ・ホストの設定

Oracle Ultra Search リモート・クローラ機能により、複数のクローラを個別のホストで同時に実行することができます。すべてのリモート・クローラ・ホストは、共通ディレクトリや共通 Oracle Ultra Search データベースなど、共通のリソースを共有する必要があります。

**関連項目：**『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』

### 8.4.6 Oracle Ultra Search ポートレット・サンプル

Oracle Ultra Search には、OracleAS Portal ページに埋め込むことができる検索ポートレットが用意されています。この検索ポートレットは、JavaServer Pages (JSP) アプリケーションとして実装され、Oracle Ultra Search ポートレット・サンプルと呼ばれます。Oracle Ultra Search ポートレット・サンプルは、OracleAS Portal ポートレット・インタフェースに準拠した Web アプリケーションです。ポートレット・インタフェースに準拠しているため、OracleAS Portal ユーザーは、ページを作成して、そのページ内に Oracle Ultra Search ポートレットを埋め込むことができます。



Oracle Application Server Portal Developer Kit (PDK) および OracleAS Portal ポートレット・インタフェースの詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) に掲載されています。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

ポートレット・サンプルは、単一ポートレットで構成されるプロバイダを実装します。プロバイダ名は Ultra Search Provider であり、Oracle Application Server Providers プロバイダ・グループに属します。Ultra Search プロバイダに含まれるポートレットも Ultra Search と呼ばれます。

Web プロバイダは、Oracle Application Server のインストール時には OracleAS Portal に登録されません。Web プロバイダを登録するときは、Web プロバイダが稼働中でなければなりません。しかし、この状態は実際には実現できません。OC4J が起動されるのが、インストールの最後であるためです。

Ultra Search プロバイダを登録する方法については、[8.2.3.3 項「OracleAS Portal への Ultra Search プロバイダの登録」](#)を参照してください。

### 8.4.6.1 パブリック・データの検索

Oracle Ultra Search ポートレットを使用して、Oracle Ultra Search の機能を Portal ページに組み込むことができます。ただし、Oracle Ultra Search では、検索を行うエンド・ユーザーに対するセキュリティ・モデルがサポートされていません。つまり、Oracle Ultra Search によって収集され、索引が作成されたすべてのデータは、特定の Oracle Ultra Search インスタンスのすべてのユーザーからアクセスできます。Oracle Ultra Search から返された検索結果に対するアクセス権を、特定の Portal ユーザーに指定できません。

### 8.4.6.2 Oracle Ultra Search インスタンスへの接続

Oracle Ultra Search は、複数の Oracle Ultra Search インスタンスの作成をサポートしています。各 Oracle Ultra Search インスタンスには、Oracle Ultra Search ポートレットから問い合わせることができる特別な索引が含まれます。各 Oracle Ultra Search 索引にはそれぞれのデータベース・スキーマが必要であり、特定の Oracle Ultra Search インスタンス・スキーマを問い合わせるように Oracle Ultra Search ポートレットを構成する必要があります。

これを行うには、ファイル `ORACLE_HOME/j2ee/home/config/data-sources.xml` を次のように構成します。

```
<data-source
    class="oracle.jdbc.pool.OracleConnectionCacheImpl"
    name="UltraSearchDS"
    location="jdbc/UltraSearchPooledDS"
    username="<ultrasearch_instance_schema>"
    password="<ultrasearch_instance_schema_password>"
    url="jdbc:oracle:thin:@<hostname>:<port>:<sid>"
/>
```

表 8-4 にパラメータとパラメータの説明を示します。

**表 8-4 Oracle Ultra Search の接続パラメータ**

パラメータ	説明
<code>ultrasearch_instance_schema</code>	スキーマの名前
<code>ultrasearch_instance_schema_password</code>	スキーマのパスワード
<code>hostname</code>	Oracle Ultra Search データベースのホスト名
<code>port</code>	Oracle Ultra Search データベースのリッスナー・ポート
<code>sid</code>	Oracle Ultra Search データベース・インスタンスの識別子

ポートレット・サンプルは完全なサンプル・アプリケーションと同じデータ・ソース・エントリを共有します。

### 8.4.6.3 制限事項

OracleAS Portal ユーザーが埋め込めるのは、OracleAS Portal と同じ OC4J インスタンス上でホストされている Oracle Ultra Search ポートレットのみです。

OracleAS Portal がホスト A にインストールされている場合は、Oracle Ultra Search がホスト A にインストールされ、Oracle Ultra Search プロバイダも Web アプリケーションとしてホスト A にホストされます。

ホスト A で実行されている Oracle Ultra Search プロバイダは、ホスト B で実行されている別の OracleAS Portal インスタンスに登録できます。ただし、ホスト A でホストされている Oracle Ultra Search ポートレットが Portal B で作成されたページ内に埋め込まれている場合、ポップアップの値リストは正しく機能しません。これは、JavaScript に固有のセキュリティ・バグが原因です。

Portal A で作成された Portal ページには、ホスト A で実行されているプロバイダの Oracle Ultra Search ポートレットのみを埋め込んでください。ホスト B や他のホストのポートレットは埋め込まないでください。

### 8.4.6.4 ポートレット・サンプル・ファイル

ポートレット・サンプル・ファイルは、次のファイル内にあります。

`ORACLE_HOME/ultrasearch/sample.ear`

`sample.ear` がアプリケーション・サーバーによって最初に配置されたときに、このファイルの内容が次のディレクトリに展開されます。

`ORACLE_HOME/ultrasearch/sample/query`

任意のテキスト・エディタを使用して、ソース・コードを直接表示することができます。

**関連項目：** ファイル `ORACLE_HOME/ultrasearch/sample/query/portlet/README.html` (ポートレット・サンプルによって使用されるすべてのファイルのリストと詳細な説明、ポートレット・サンプルの動作の詳細)



---

## OracleAS Portal のパフォーマンスの調整

この章では、Portal システムの基本構成を設定した後で、その構成を基にして OracleAS Portal のパフォーマンスを調整する方法について説明します。

この章では、OracleAS Portal のパフォーマンスを調整する方法として、次のオプションについて説明します。

この章の内容：

- サーバー・プロセス数の設定
- アイドル・プロセス数の設定
- PPE フェッチャ数の設定
- Oracle HTTP Server の調整
- パフォーマンス・レポートの生成
- ファイル・システム・キャッシュの調整によるキャッシュのパフォーマンス向上

**関連項目：** 『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』

## 9.1 サーバー・プロセス数の設定

Oracle HTTP Server は、Web 要求を HTTP プロセスへ配布して処理します。Oracle HTTP Server は、ユーザーのブラウザから送信されるすべてのタイプの要求（静的ファイル、Java サンプルット、PL/SQL プロシージャに対する要求など）を処理できます。

MaxClients は、Oracle HTTP Server の構成ディレクティブの 1 つで、Oracle HTTP Server が常に処理可能な Web 要求の最大数を制御します。MaxClients の値を超えると、Oracle HTTP Server は、現在の負荷を処理して HTTP プロセスが解放されるまで、新しい要求の処理を拒否します。たとえば、他のブラウザが許容セッション数を超過している場合、クライアントのブラウザがロックアウトされることがあります。

MaxClients ディレクティブは、同時 Web 要求の適切なフローをサーバーに許可するスロットルとして考えることができます。この値が小さすぎると、Web Portal のパフォーマンスが低下する場合があります。より多くの通信量を迅速な応答で処理するサーバーおよびデータベース・リソースを配置しても、適切なプロセス数が MaxClients に設定されていないと、Web 要求を処理できない場合があります。

各 HTTP プロセス・サーバーは CPU 時間、メモリー、I/O などのリソースを消費するため、MaxClients の値が大きすぎると、必要以上にリソースが消費されます。その結果、パフォーマンスが低下する場合があります。なぜでしょうか。Oracle HTTP Server は PL/SQL プロシージャに対する要求を含む、あらゆる種類の要求を処理できます。Oracle HTTP Server が要求を受信すると、Portal データベースと通信するために mod\_plsql に要求を渡します。mod\_plsql 要求を実行するそれぞれのサーバー・プロセスには、データベース接続をキャッシュする必要があります。MaxClients に設定する値によって、mod\_plsql が開くことができるデータベース接続の上限が設定されます。

たとえば、MaxClients を最大数の 1024 に設定します。Oracle HTTP Server は、常に 1024（データベース接続を必要とする数を含む）の Web 要求を同時に処理できます。サーバーがこの負荷に対応できる場合でも、接続先のデータベースが対応できないことがあります。PL/SQL プロシージャの要求数が他のタイプの要求数より急激に多くなった場合は、データベースが対応できる負荷を超える可能性があります。

---

**注意：** Windows プラットフォームの場合は、Oracle HTTP Server のパラメータ ThreadsPerChild の調整を参照してください。

---

パフォーマンスを最適にするには、構成内のサーバーが処理できる Web 要求の数およびデータベースが処理できる通信量を定めることです。1 つのデータベースに接続する複数の中間層サーバーが Portal 構成に含まれている場合、処理可能な Web 要求の数は、中間層よりもデータベースの容量によって制限される可能性があります。

### 関連項目：

- 『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』
- 9.4 項「Oracle HTTP Server の調整」の「MaxClients 値の構成」

## 9.2 アイドル・プロセス数の設定

MinSpareServers は、UNIX 特有の Oracle HTTP Server ディレクティブの 1 つで、アイドル・セッションの最小数を設定します。アイドル・セッションとは、Web 要求を現在処理していないセッションのことです。アイドル・セッションの数が、MinSpareServers で指定されている数よりも少ない場合は、最大で毎秒 1 個のプロセスが新しく作成されます。

このパラメータは、アクセス頻度の高いサイトに対してのみ調整してください。デフォルトの設定は 5 です。このパラメータを大きな数に設定することはお薦めできません。原則として、Portal が通常処理する Web 要求の平均数を少し上回る値に MinSpareServers を設定します。できるだけ、新しいポートを開かずに、開いているポートによってユーザー要求が処理されるように設定します。ただし、この状態を実現するには、データベース・リソースで必要な数のポートを利用できなければなりません。

UNIX とは異なり、Windows はスレッドベースのオペレーティング・システムであり、1 つのプロセスが開始された後、その子プロセスが必要に応じてスレッド化されます。Windows NT マシンの場合は、このディレクティブは MaxThreadsPerChild と呼ばれます。これは、サーバーが同時に処理できる要求数を表します。サーバー、およびサーバーが使用することのできるシステム・リソースの応答性に従って、この値を設定してください。Windows の MaxThreadsPerChild は UNIX の MaxClients に相当します。

関連項目：『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

## 9.3 PPE フェッチャ数の設定

Portal ページに対する要求は URL の形式で開始され、ユーザーのブラウザから Oracle HTTP Server に送信されます。Portal ページに対する要求の場合、Parallel Page Engine (PPE) に転送されます。次に PPE は、ポートレットを実行してコンテンツを Portal ページに返すように、ページ上のポートレットを所有する各 Web プロバイダに要求します。

PPE における同時実行性を向上させるには、次の 2 つの方法があります。

### 方法 1: 新しい OC4J インスタンスを作成して別の PPE スレッドのセットを作成する

OC4J\_Portal プロセスの数を変更するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールにアクセスします。

通常、Application Server Control コンソールは <http://www.abc.com:1812> にあります。Application Server Control コンソールの使用方法の詳細は、[第 7 章「OracleAS Portal の監視と管理」](#) を参照してください。

2. OracleAS Portal がインストールされているアプリケーション・サーバー中間層のリンクをクリックします。
3. 「OC4J\_Portal」リンクをクリックします。

4. 「管理」リンクをクリックします。
5. 「サーバー・プロパティ」リンクをクリックします。
6. 「複数仮想マシン構成」セクションで、default\_islandの「プロセス数」を図 9-1 のように変更します。

図 9-1 「複数仮想マシン構成」セクション

### 複数仮想マシン構成

ヒント OC4Jが稼働している場合、新規に追加されたアイランドおよび関連付けられたプロセスが自動的に起動されます。

#### アイランド

アイランドID	プロセス数
default_island	2
<input type="button" value="行の追加"/>	

7. 「適用」をクリックします。
8. 「OC4J\_Portal」ホーム・ページに戻ります。
9. 「再起動」をクリックし、OC4J\_Portal インスタンスを再起動します。

または、opmn.xml ファイルを手動で編集することも可能ですが、Application Server Control コンソールを使用する方法をお勧めします。

複数の Oracle Application Server Containers for J2EE インスタンスを作成するためのパラメータは、numProcs という名前で、ORACLE\_HOME/opmn/conf/opmn.xml ファイルに構成されています。

変更されたファイルは次のようになります。

```
<oc4j instanceName="OC4J_Portal" gid="OC4J_Portal" numProcs="2">
  <config-file path="E:\Ora902\j2ee\OC4J_Portal\config\server.xml"/>
  <java-option value="-server -Xincgc -Xnoclassgc -Xmx100m "/>
  <oc4j-option value="-properties"/>
  <port ajp="3001-3100" rmi="3101-3200" jms="3201-3300"/>
  <environment>
    <prop name="PATH" value="E:/Ora902/bin"/>
    <prop name="DISPLAY" value="localhost:0"/>
  </environment>
</oc4j>
```

構成の変更内容を反映するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行します。
 

```
ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateconfig -ct opmn
```
2. Oracle Application Server Middle-Tier を次のようにして再起動します。

```
ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

## 方法 2: デフォルトのスレッド数を増やす

PPE はフェッチャのプールを使用して、要求をインターネットを介して Web プロバイダに転送し、データが返されるのを待機します。要求の処理が終わると、そのフェッチャが解放され、新しい要求を処理できるようになります。

PPE スレッドの数を調整するパラメータは、poolSize という名前で、ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_Portal/applications/portal/portal/WEB-INF/web.xml ファイルに構成されています。

デフォルトの設定は 25 で、ほとんどの Web Portal の場合、プール・サイズを変更する必要はありません。ただし、プール・サイズが小さすぎると、ピーク間隔でページの描画に時間がかかるようになります。プール・サイズが大きすぎると、リソースが不足することがあります。同時に多数の URL 要求が発生して、PPE の処理量を超える可能性があるためです。

変更されたファイルは次のようになります。

```
<web-app>
  <servlet>
    <servlet-name>page</servlet-name>
    <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>
    <init-param>
      <param-name>logpath</param-name>
      <param-value>./</param-value>
    </init-param>
    ...
    <init-param>
      <param-name>poolSize</param-name>
      <param-value>50</param-value>
    </init-param>
    ...
  </servlet>
  ...
```

構成の変更内容を反映するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateconfig -ct opmn
```

2. Oracle Application Server Middle-Tier を再起動します。

---

---

**注意：** 通信量が多いサイトの場合も、PoolSize パラメータの値は 50 から 125 の範囲内で設定します。これよりも大きい値を設定する必要がある場合は、「[方法 1: 新しい OC4J インスタンスを作成して別の PPE スレッドのセットを作成する](#)」に記載されているように、OC4J インスタンスを追加するよう考慮してください。

---

---

## 9.4 Oracle HTTP Server の調整

Oracle HTTP Server リスナーを設定することにした場合でも、Oracle HTTP Server リスナーによって同時に処理できる要求のおおよその数を設定して、パフォーマンスを最適化することができます。

特に UNIX では、Oracle HTTP Server はプロセスベースであるため、プロセスごとに、それを要求した各 DAD に対してデータベース接続を開く必要があります。その結果、要求の数がかかなり多くなる可能性があり、処理できるセッション数を超えた場合に、クライアントがロックアウトされることがあります。ただし、設定した値が大きすぎると、リソースが必要以上に消費されます。

次に、その使用例を説明します。

1. DAD からのどのサービス要求でも、ネットワーク接続が 1 つとセッションが 2 つ必要です (2 つのセッションは同じ物理接続を使用します)。

最初のセッションは portal 用で、2 番目のセッションは portal\_public 用です。

2. OracleAS Portal にログインしている場合は、OracleAS Single Sign-On DAD (SSO DAD) に対する接続を開く必要があります。この処理では、1 つのネットワーク接続と 2 つのセッションを使用します。

この場合は、最初のセッションは orasso 用となり、2 番目のセッションは orasso\_public 用となります。

3. 同時に処理される要求の最大数を決定する Oracle HTTP Server 構成の設定は、MaxClients です。デフォルトは 150 です。

すべてのユーザーが OracleAS Portal にログインおよび作業している場合は、前述の使用例 (1) と (2) により、プロセスごとにセッションが 4 つ必要になります。このような使用例では、セッションの合計数が次のように計算されます。

$$150 * 4 = 600$$

600 のセッションと約 300 のデータベース接続 (各接続に 2 つのセッション) が必要となります。

### MaxClients 値の構成

一般に、ログインの頻度は OracleAS Portal へアクセスする頻度よりも低いため、別の Oracle HTTP Server リスナーで OracleAS Single Sign-On を構成する方が適切です。目標は、

MaxClients の設定を Portal システムのニーズに影響しない程度に合理的な値に調整することです。

OracleAS Portal は、データベースへの接続プールを管理する mod\_plsql を頻繁に使用します。mod\_plsql によってプールされるデータベース接続数を直接制御するには、MaxClients パラメータを使用して、プロセス数を調整します。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』

MaxClients 設定を構成するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Single Sign-On のリスナーの場合、MaxClients パラメータに設定する近似値を一度決めた後は、次の場所にある構成ファイル httpd.conf でこれを適切な値に編集してください。

```
ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/
```

MaxClients の設定を調整して、Oracle HTTP Server リスナーで Oracle HTTP Server のサービスによって処理される要求の数を制御します。これによって、確立されるセッションの最大数が制御されます。

2. OracleAS Portal リスナーの場合は、OracleAS Single Sign-On のニーズと OracleAS Portal のニーズに従って、重複が発生しないように MaxClients パラメータを個別に調整できます。このパラメータは、確立されるセッションの数に直接対応しており、Oracle HTTP Server リスナーが Portal リスナーで処理できる最大負荷に相当します。

次の例は、httpd.conf ファイルの MaxClients セクションを表しています。

```
# Limit on total number of servers running, i.e., limit on the number
# of clients who can simultaneously connect --- if this limit is ever
# reached, clients are LOCKED OUT, so it should NOT BE SET TOO LOW.
# It is intended mainly as a brake to keep a runaway server from taking
# the system with it as it spirals down...
#
MaxClients 150
```

---

---

**注意：**

- OracleAS Single Sign-On と OracleAS Portal を個別に調整する場合は、それぞれのリスナーが個別に作成されます。OracleAS Portal は Portal データベース上のリソース（セッション）を制御し、OracleAS Single Sign-On は OracleAS Single Sign-On データベース上のリソースを制御します。
  - データベースで許可されるセッションと接続の数は、Oracle9i Database Server の `init.ora` ファイルに設定されている値によって制限されます。詳細は、Oracle9i Database Server のドキュメントを参照してください。
- 
- 

## 9.5 パフォーマンス・レポートの生成

このリリースには、OracleAS Portal のパフォーマンス・レポートを生成できる SQL スクリプトのセットが含まれています。パフォーマンスレポート用の情報を取得するには、これらのスクリプトを使用する以外の方法はありません。Portal 管理者はこれらのスクリプトを使用して、OracleAS Portal のログ・ファイルをデータベース表へロードし、その情報に基づいてレポートを作成できます。このスクリプトは次のディレクトリにあります。

```
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/perf
```

`scripts` サブディレクトリの `README.html` ファイルでは、スクリプトを使用して OracleAS Portal のパフォーマンスを監視する方法を説明しています。

たとえば、収集された統計には、要求全体が完了するまでにかかった時間、そのうちユーザーのプロシージャで経過した時間、要求を作成したユーザー、データベース接続が接続プールから取得されたかどうか、および使用されたキャッシュのタイプが示されます。OracleAS Portal の以前のリリースで使用していたパフォーマンス・スクリプトでも、これと同様の情報を抽出できます。生成できるパフォーマンス・レポートには、次のものがあります。

- 日または時間ごとの個別ログイン数
- 日または時間ごとのページ参照数
- 上位 10 個のページとポートレットおよびその応答時間
- 応答時間
- 日ごとのピークのログイン時間
- 日ごとのログイン数
- ポートレットの実行時間
- 最も低速なポートレット



- 日ごとの合計ヒット数
- 最も使用頻度の高いポートレットと低いポートレット
- 日ごとのログインした個別ユーザー数
- 日ごとのページ・ヒット数
- 日ごとのポートレット・ヒット数
- IPアドレスとホスト名による要求の分析

## 9.6 ファイル・システム・キャッシュの調整によるキャッシュのパフォーマンス向上

ファイル・システム・キャッシュを調整すると、キャッシュのパフォーマンスが向上します。ファイル・システム・キャッシュを調整するには、次の2つの方法があります。

- より高速なファイル・システムに常駐するように、ファイル・システム・キャッシュを構成する。
- セッション・キャッシュ・ディレクトリをよりパフォーマンスの高いファイル・システムへ移動する。

これらの方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』の「PL/SQL パフォーマンスの最適化」に記載されています。



---

## コンテンツのエクスポートとインポート

OracleAS Portal には、Portal インストール間でコンテンツを移動するための、エクスポート / インポート・ユーティリティのセットが用意されています。この章では、OracleAS Portal 10g (9.0.4) で提供されるエクスポート / インポート機能に関する推奨事項と最善の使用方法について概説します。

この章の内容：

- エクスポートとインポートの機能
- 最も一般的な使用事例
- 開始前に必要な確認事項
- エクスポートの機能
- インポートの機能
- トランスポート・セットの管理方法
- 移行後のオブジェクトの動作
- 推奨される最善の実施例

## 10.1 エクスポートとインポートの機能

エクスポートおよびインポートのプロセスは、次の手順から成ります。

- トランスポート・セットを作成し、コンテンツをトランスポート表に抽出します。トランスポート・セットには、ターゲットの Portal 環境にエクスポートする Portal オブジェクトが含まれています。この情報は、マニフェストに表示されます。マニフェストは、トランスポート・セットのオブジェクトを単にリストにしたもので、エクスポートを詳細に制御するために使用されます。
- Portal エクスポート / インポートのコマンドライン・スクリプトを使用してトランスポート・セットのダンプ・ファイルを作成し、一方のシステム（ソース）から他方のシステム（ターゲット）にトランスポート・セットを移動します。
- FTP または他のファイル転送ユーティリティを使用して、スクリプトとダンプ・ファイルをターゲット・システムに転送します。
- ダンプ・ファイルをターゲット・システムのトランスポート表にインポートするためのコマンドライン・スクリプトを起動します。
- トランスポート・セット・マネージャのポートレットを使用して、トランスポート表からターゲット Portal リポジトリにオブジェクトをインポートします。

## 10.2 最も一般的な使用事例

OracleAS Portal は、ソースとターゲットの Portal インスタンス間で、ページ・グループおよび Portal コンテンツをコピーまたは更新する機能をサポートしています。この項では、最も一般的な使用方法をいくつか紹介します。

## 10.2.1 事例 1: 開発インスタンスと本稼働インスタンス間のインポートとエクスポート

この事例では、Portal のページ・グループとポートレットを、OracleAS Portal の開発インスタンスと本稼働インスタンス間でコピーまたは更新する手順を説明します。

---

---

**注意：** ユーザーのカスタマイズはエクスポートされないため、ソースのページまたはポートレット上のカスタマイズは一切エクスポートまたはインポートされません。

---

---

シナリオ 1: ページとコンテンツをターゲットの Portal システムにエクスポートします。ターゲット・システムに対する最初のエクスポートでは、ページ・グループ全体を移行する必要があります。次の手順は、プロセスの概要を示しています。

1. ソース・システム上で、ページ・グループ、アプリケーションおよびコンテンツを開発します。
2. エクスポートするページ、アプリケーションおよびコンテンツを特定し、それに応じてトランスポート・セットを作成して、ターゲット・システムにエクスポートします。
3. トランスポート・セットをターゲット・システムの Portal リポジトリにインポートします。

シナリオ 2: ターゲット・インスタンスのコンテンツを更新します。OracleAS Portal は、次の場合にのみ、ターゲット・システムのアイテム、領域レベルのコンテンツの更新をサポートしています。

- ソースからターゲットのインスタンスにすべての変更をエクスポート / インポートする場合。ターゲット・システムのすべてのページ構造、コンテンツおよびユーザー設定項目が、ソース・システムのコンテンツで置き換えられます。ターゲット・システムへの最初のエクスポートでは、ソース Portal からターゲット Portal インスタンスに、ページ・グループ全体を移行する必要があります。

推奨の方法の詳細は、[10.8 項「推奨される最善の実施例」](#)を参照してください。

---

---

**注意：** 現在のリリースでは、ソースとターゲットの両方の Portal インスタンスで同じコンテンツを編集する機能はサポートされていません。

---

---

## 10.2.2 事例 2: 複数の Portal インスタンス間での同一コンテンツの配置

この事例では、複数の Portal インスタンス間で OracleAS Portal オブジェクトの同じセットを配置するプロセスについて説明します。複数の OracleAS Portal インスタンス間で同じコンテンツを配置する場合は、Oracle データベースの EXP および IMP ユーティリティを使用できます。この事例では、OracleAS Portal のオブジェクト（ポートレット、ページ・グループなど）を 1 つのインスタンスで作成し、Oracle データベースの EXP および IMP ユーティリティを使用して、それを複数のインスタンスへ伝播することができます。詳細は、[10.8.7 項「データベース間での Portal の移行」](#)を参照してください。

## 10.3 開始前に必要な確認事項

エクスポート / インポート・プロセスを開始する前に、次の情報を確認しておく必要があります。

- システム要件
- [コンテンツをエクスポートおよびインポートするための権限](#)
- Portal インスタンスの情報
  - Portal スキーマ名
  - Portal スキーマのパスワード
  - Portal 接続文字列情報
  - Portal ユーザー名
  - Portal ユーザーのパスワード
  - 会社名（ホスト Portal インストールの場合にのみ使用）。通常は空白のまま

---

---

**注意：** Portal スキーマのパスワードは、インストール時に作成された乱数のパスワードです。わかりやすいパスワードに更新することができます。

---

---

## 10.3.1 システム要件

エクスポートおよびインポートを行う前に、使用するシステムが、この項に記載されているシステムの最低条件を満たしていることを確認します。

---

---

**注意：**

- エクスポートとインポートは、OracleAS Portal の同じリリースおよび同じパッチ・リリース (9.0.4.0 と 9.0.4.0 など) でのみ機能します。リリースが異なる場合 (3.0.9 と 9.0.4、9.0.4.0 と 9.0.4.1 など) は、エクスポートおよびインポートできません。
  - オブジェクトを正しく移行するには、ターゲットとソースの Portal リポジトリのバージョンが同じである必要があります。中間層のバージョンの違いは、移行に影響しません。
- 
- 
- **エクスポートでの異なるリリースおよびバージョンの使用。** Oracle データベース・サーバーの異なるリリース間でデータを移行する場合は、次の規則を適用します。
    - Oracle IMP ユーティリティとデータをインポートするデータベース (ターゲット・データベース) は、必ず同じリリースまたはそれ以上のリリースを使用します。
    - Oracle EXP ユーティリティのリリースは、ソース・データベースまたはターゲット・データベースの低い方のリリースと同じになりますようにします。

---

---

**注意：** Oracle EXP と Oracle IMP はそれぞれエクスポートとインポートのユーティリティで、ユーザー・データをバックアップおよび転送するために、Oracle 特有の形式でデータをダンプおよび復元するために使用します。

---

---

データベースの Oracle ホームと中間層の Oracle ホームのどちらを使用するかは、ソースとターゲットの Portal インストールに使用されているデータベースのリリースによります。デフォルトでは、9.0.4 の中間層では 9.0.1.4 の Oracle ホームが使用されます。

前述の推奨事項に基づく、9.0.4 の Portal と 9.0.4 の中間層の場合は、次の条件が適用されます。

- エクスポートには常に中間層の Oracle ホームを使用します。9.0.1.4 は、9.0.4 の Portal インストールでサポートされる最も低いデータベースのリリースです。
- インポートには常にターゲット・データベースの Oracle ホームを使用します。インポート・ユーティリティとターゲット・データベースのリリースは同じである必要があります。

---

---

**注意：** 9.0.4 の中間層を使用するように 9.0.2 の Portal (9.0.2.2、9.0.2.3 または 9.0.2.6) を構成している場合は、「エクスポートでの異なるリリースおよびバージョンの使用」で説明した規則に適切に従う必要があります。

---

---

たとえば、上位のリリースのデータベースにインポートするためのエクスポート・ファイルを作成するには、ソース・データベースと同じリリースの Oracle EXP ユーティリティを使用します。下位のリリースのデータベースにインポートするためのエクスポート・ファイルを作成するには、ターゲット・データベースと同じリリースの Oracle EXP ユーティリティを使用します。

---

---

**注意：** ソースおよびターゲットの Portal インストールでは、同じリリースのデータベースを使用することを強くお勧めします。

---

---

- Oracle EXP ユーティリティは、必ずユーザー・データ (Unicode データも含む) をエクスポート・サーバーのキャラクタ・セットでエクスポートします。キャラクタ・セットは、データベースの作成時に指定します。

Oracle IMP ユーティリティは、インポート・サーバーのキャラクタ・セットにデータを自動的に変換します。

8 ビット・キャラクタ・セットのエクスポート・ファイルをインポートすると、一部の 8 ビット・キャラクタが失われる (つまり 7 ビットの対応するキャラクタに変換される) 場合があります。この現象は、クライアント・システムに固有の 7 ビット・キャラクタ・セットがある場合、またはオペレーティング・システムの環境変数 `NLS_LANG` が 7 ビット・キャラクタ・セットに設定されている場合に発生します。ほとんどの場合、アクセント記号のある文字でアクセント記号が失われます。

EXP および IMP ユーティリティでは、データをエクスポートまたはインポートする前に必要なキャラクタ・セットの変換が示されます。

---

---

**注意：** エクスポート・クライアントとエクスポート・サーバーの間でキャラクタ・セットの幅が異なる場合は、変換によってデータが拡張されるとデータが切り捨てられることがあります。切捨てが発生する場合は、警告メッセージが表示されます。

---

---

- ソースおよびターゲットの Portal インスタンスについてよく把握します。
  - ソースおよびターゲット・マシン上の対象ディレクトリにコマンドラインでアクセスできますか。エクスポート / インポート・プロセスで生成されるシェルまたはコマンド・ユーティリティを実行するには、コマンドライン・アクセスが必要です。Portal インスタンスだけでなく、コマンドライン・ユーティリティは、Oracle EXP および IMP ユーティリティにアクセスします。



- データベースはバックグラウンド・ジョブを実行できるように構成されていますか。エクスポートまたはインポートの各プロセスは、それぞれバックグラウンド・プロセスを設定します。このため、データベース・パラメータ `job_queue_processes` が正しく設定されているかどうかを確認してください。  
`job_queue_processes` パラメータの値を確認するには、SQL\*Plus から次の問合せを実行します。  

```
%select name, value from v$parameter where name='job_queue_processes'
```

  
バックグラウンド・ジョブを実行できるようにするには、`job_queue_processes` の値を 2 以上に設定します。  
また、データベースの `ORACLE_HOME` に格納されている `init.ora` ファイルを調べて、`job_queue_processes` パラメータを確認する方法もあります。
- 営業時間外にエクスポートおよびインポート・プロセスを実行して、プロセス中に OracleAS Portal にアクセスできないようにするよう計画します。他のすべてのユーザーが一時的に Portal にアクセスできないようにするには、エクスポート中はリスナーを別のポート番号に構成し、エクスポートが終了したら元のポートに戻すという方法があります。

## 10.3.2 コンテンツをエクスポートおよびインポートするための権限

この項では、コンテンツを正しくエクスポートおよびインポートするための権限について説明します。

### 10.3.2.1 コンテンツをエクスポートするための権限

共有オブジェクト（共有ページ・グループ内のオブジェクト）のエクスポートを安全に制御できるように、インフラストラクチャ・レベルで 2 つの権限が定義されています。

- 「すべてのトランスポート・セット」の「管理」は、Portal オブジェクト（共有オブジェクトを含む）のエクスポート / インポートを実行できます。この権限は、Portal のインストール・プロセスで、DBA グループにデフォルトで付与されます。
- 「すべてのトランスポート・セット」の「実行」権限は、Portal オブジェクト（共有オブジェクトを除く）をエクスポート / インポートできます。この権限は、Portal のインストール・プロセスで、PORTAL\_ADMINISTRATORS グループにデフォルトで付与されます。

表 10-1 に、エクスポート・ユーザーの権限についてまとめます。

表 10-1 エクスポート・ユーザーの権限

ユーザーの権限	非共有オブジェクトのエクスポート	共有オブジェクトのエクスポート
「すべてのトランスポート・セット」の「管理」	できる	できる

表 10-1 エクスポート・ユーザーの権限 (続き)

ユーザーの権限	非共有オブジェクトの エクスポート	共有オブジェクトの エクスポート
「すべてのトランスポート・セット」の「実行」	できる	できない
「すべてのトランスポート・セット」の「なし」	できない	できない

### 10.3.2.2 コンテンツをインポートするための権限

「すべてのトランスポート・セット」の「管理」権限の他にも、コンテンツを正常にインポートするために、特定タイプのオブジェクトに関する管理権限が必要です。

たとえば、Web プロバイダが含まれているページ・グループでは、ページ・グループをインポートするために、「すべてのプロバイダ」および「すべてのページ・グループ」に対する「すべて管理」権限が必要です。表 10-2 に、それぞれのオブジェクト・タイプおよび必要な権限レベルについて説明します。

---

**注意：** インストールまたはアップグレード時に、ORCLADMIN と Portal ユーザーには、すべてのページ・グループに対する「すべて管理」が付与されます。DBA グループのメンバーにも、すべてのページ・グループに対する「すべて管理」がデフォルトで付与されます。

---

表 10-2 インポート・ユーザーの権限

オブジェクト・タイプ	権限
すべてのページ・グループ	「すべて管理」: ページ・グループと共有オブジェクトをインポートするには、「すべてのプロバイダの管理」権限とともにこの権限が必要です。
すべてのプロバイダ	「管理」: ページ・グループ、Portal DB プロバイダ、Web プロバイダおよびその他のデータベース・プロバイダをインポートするには、この権限が必要です。
すべてのアプリケーション	「管理」: Portal DB プロバイダのオブジェクトをインポートするには、この権限が必要です。
すべての共有コンポーネント	「管理」: Portal DB プロバイダのオブジェクトが共有コンポーネントを参照している場合、共有コンポーネントをインポートするには、この権限が必要です。

---

---

**注意：** 共有オブジェクト・グループに属しているスタイルに基づくページをインポートする場合は、共有オブジェクトをインポートする権限がないと、ページのスタイルがデフォルトで「メイン・スタイル」にリセットされます（トランスポート・セット・マネージャで「警告を無視する」オプションが選択されている場合）。

---

---

## 10.4 エクスポートの機能

この項では、ソース Portal システムからコンテンツを正しく移動するために必要な以下のエクスポート・プロセスと手順について説明します。

- トランスポート・セットの作成
- データのエクスポート
- 大容量のページ・グループのエクスポート

### 10.4.1 トランスポート・セットの作成

システム要件を確認したら、次にトランスポート・セットを作成する必要があります。次の図は、そのプロセスを表しています。

---

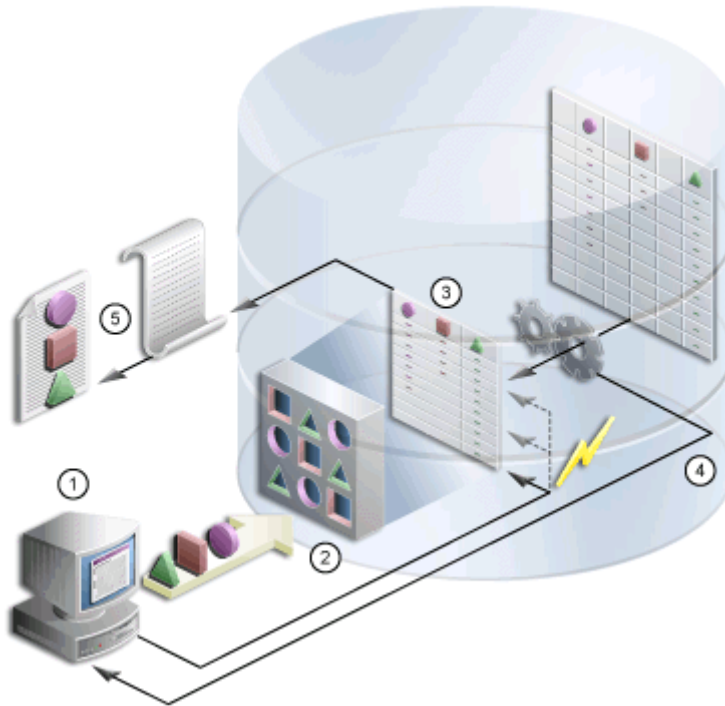
---

**注意：** 競合の問題が発生しないように、1人のユーザーが1つのトランスポート・セットを管理するようにしてください。

---

---

図 10-1 エクスポート・プロセス



1. 「ナビゲータ」または「一括操作」（一度に複数のページをエクスポート・トランスポート・セットに追加できます）から、エクスポートするオブジェクトを選択します。トランスポート・セット・マネージャが自動的に表示されます。
2. 名前を選択し、トランスポート・セットのエクスポート・オプションを選択し、トランスポート・セット・マネージャの「今すぐエクスポート」をクリックしてエクスポートを開始します。
3. この手順でデータが抽出され、トランスポート表にデータが入力されます。
4. トランスポート・セット・マネージャを使用して、移行スクリプトとログ情報を生成します。
5. スクリプトを実行してダンプ・ファイルを生成します。

エクスポート / インポートの依存性マネージャによって、トランスポート・セット内のオブジェクトのすべての依存性が正しく抽出されます。具体的には、依存性マネージャは、明示的にエクスポートされるオブジェクトとどのような関係にあるかに基づいて、各オブジェク

トを、明示的に選択、参照、外部または子に分類します。この情報は、マニフェストに表示されます。図 10-2 を参照してください。

- 「明示的に選択されたオブジェクト」: 「ナビゲータ」または「一括操作」からエクスポートの対象として明示的に選択されたオブジェクト。ページに外部プロバイダからのポートレットが含まれる場合、マニフェストには依存性として外部プロバイダが表示されます。
- 「参照しているオブジェクト」: 明示的に選択されたオブジェクトが直接または間接的に参照しているが、常に明示オブジェクトとして同じページ・グループ内にあるオブジェクト。たとえば、ページで使用されているスタイルは、それが同じページ・グループに属している場合は、参照しているオブジェクトになります。
- 「外部オブジェクト」: 外部オブジェクトによって、明示的に選択されたオブジェクトはターゲット Portal 上で機能するようになります。たとえば、外部プロバイダとデータベース・スキーマは、外部オブジェクトとみなすことができます。一般的には、共有オブジェクトおよびコンポーネントは、明示的に選択されていない場合は外部オブジェクトとなります。
- 「子オブジェクト」: 階層に含まれているオブジェクト。たとえば、サブページ、サブ・カテゴリ、サブパースペクティブは、それぞれページ、カテゴリ、パースペクティブの子オブジェクトです。

---

**注意:** 参照しているオブジェクトに子オブジェクトが含まれている場合、子オブジェクトは常に再使用モードでインポートされます。そのため、参照しているオブジェクトを明示的に選択し、トランスポート・セットに含める必要があります。これにより、インポート・モードを「インポートの置換」に設定できます。再使用モードでページ・グループをインポートする前に、ページ・グループのプロパティを書き留め、インポート後に、以前のプロパティを反映する変更を手動で更新します。

---

## インポート・モードの処理

マニフェストには、インポート・モードの制御に関する精度レベルが用意されています。マニフェストは、トランスポート・セットのオブジェクトを単にリストにしたものです。インポートでは、次の2つのモードを使用できます。

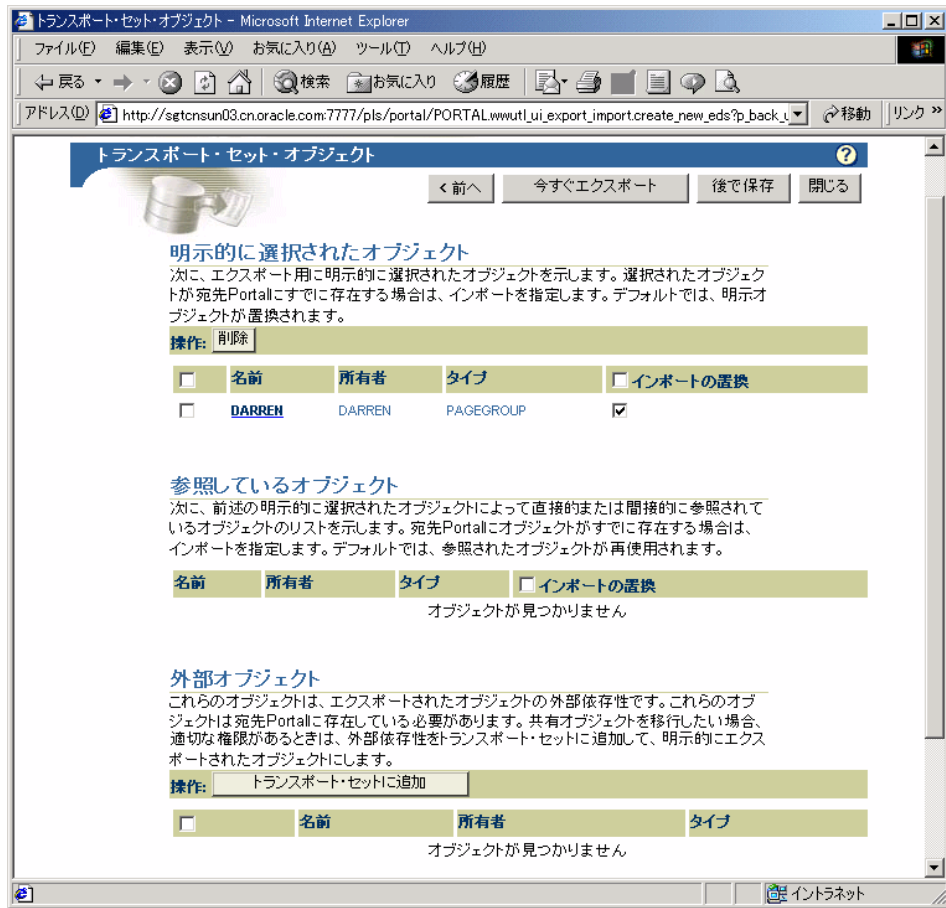
- インポートの置換: ターゲットのオブジェクトが存在する場合は、置き換えられます。オブジェクトが存在しない場合は、作成されます。このモードが選択されていなくて、オブジェクトが存在する場合は、ターゲット Portal のオブジェクトはそのまま保持されます。ただし、ターゲットにオブジェクトが存在しない場合は、オブジェクトが作成されます。
- インポートの再使用: ターゲットにオブジェクトが存在しない場合は、作成されます。すでに存在する場合は、そのまま保持されます。

次の表に、オブジェクトの分類とデフォルトのモードを示します。

**表 10-3 デフォルトのモード**

オブジェクトの分類	デフォルトのインポート・モード
明示的に選択されたオブジェクト	インポートの置換
参照しているオブジェクト	再使用
子オブジェクト	インポートの置換
外部オブジェクト	再使用

**図 10-2 トランスポート・セットの маниフェスト**



たとえば、明示的に選択されたオブジェクトの名前をクリックすると、[図 10-3](#) のように、子オブジェクト、参照しているオブジェクトおよび外部オブジェクトの読取り専用の詳細画面が表示されます。

図 10-3 マニフェストの詳細画面

The screenshot shows a web browser window with the following content:

SAMPLE_BANNER1	NEVPAGEGROUP	NAVBAR	PAGENEVPAGEGROUP/SAMPLE_BANNER1/
SAMPLE_VERTICAL_NAVBAR	NEVPAGEGROUP	NAVBAR	PAGENEVPAGEGROUP/SAMPLE_VERTICAL_NAVBAR/
NEVPAGEGROUP	NEVPAGEGROUP	PAGE	PAGENEVPAGEGROUP/
TEST1	NEVPAGEGROUP	PAGE_TEMPLATE	PAGENEVPAGEGROUP/TEST1/
NEVPAGEGROUP	NEVPAGEGROUP	STYLE	

**参照しているオブジェクト**  
次に、明示オブジェクトによって直接的または間接的に参照されるオブジェクトのリストを示します。

名前	所有者	タイプ	パス
NEVPAGEGROUPCC9D830596843927E03408002088152B		PROVIDER	

**外部オブジェクト**  
次に、外部オブジェクトのリストを示します。これらのオブジェクトは宛先Portalに存在する必要があります。

名前	所有者	タイプ	パス
ORACLE PORTAL		PROVIDER	
LOGIN SERVER		PROVIDER	
WEBCLIPPING		PROVIDER	
OMNIPORTLET		PROVIDER	
PORTAL CONTENT AREA		PROVIDER	

**注意：** マニフェストを単純にするために、生成済タイプは抽出されません。これらを抽出する場合は、既存の生成済タイプに基づいて、カスタム・タイプを「共有オブジェクト」ページ・グループに作成します。依存性マネージャはこれらをマニフェストに含めます。

## 10.4.2 データのエクスポート

ソースからターゲットのインスタンスに Portal コンテンツを移行する前に、10.7 項「移行後のオブジェクトの動作」を確認します。

**注意：** ポートレットに関連するポートレット・リポジトリ情報（セキュリティや編成など）は、エクスポート / インポート・プロセスでは移行されません。

エクスポート用にトランスポート・セットを作成するには、次の手順を実行します。

1. エクスポートするオブジェクトを選択します（「ナビゲータ」、または検索結果からページ・グループの「一括操作」を使用）。図 10-4 を参照してください。

**注意：** ポートレット（Portal フォーム、Portal レポート、チャート、動的ページ）を参照する Portal ページまたはページ・グループをエクスポートする前に、必ずこれらのポートレットをエクスポートしてください。

図 10-4 Portal ナビゲータ

The screenshot shows the Portal Navigator interface with tabs for 'ページ・グループ', 'プロバイダ', and 'データベース・オブジェクト'. Below the tabs, there is a search bar and a list of items. The list has columns for 'タイプ', '名前', '操作', '作成者', and '最終変更'.

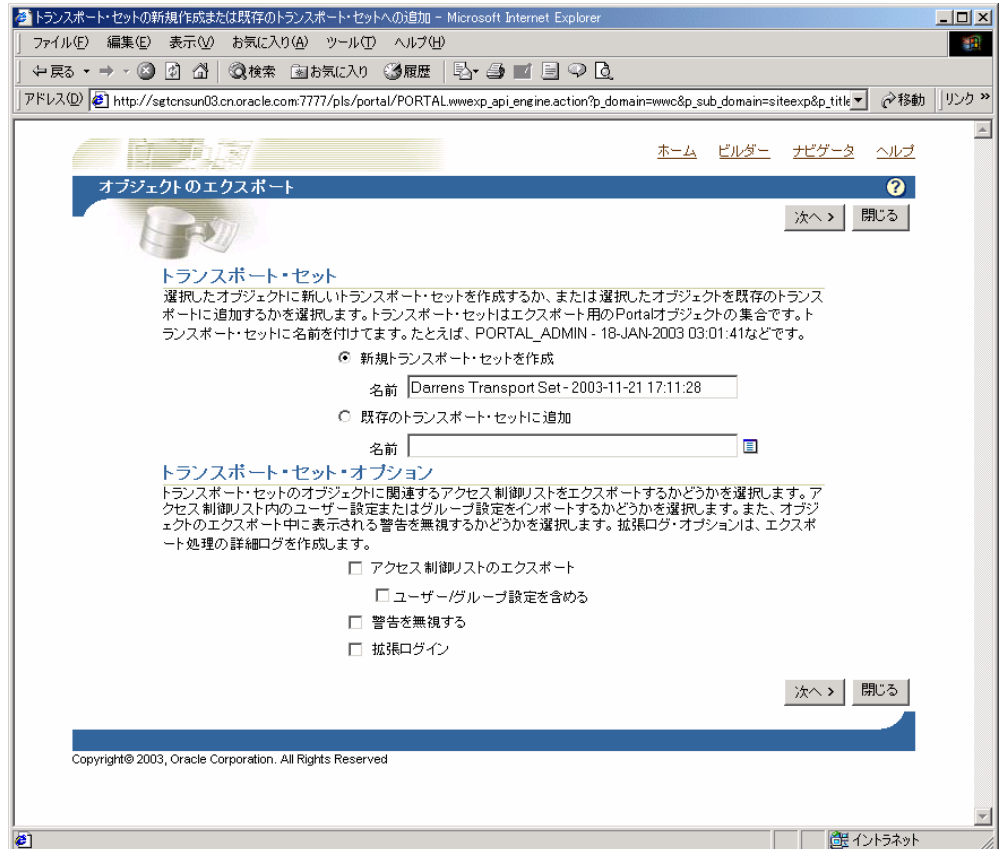
タイプ ▲ ▼	名前 ▲ ▼	操作	作成者 ▲ ▼	最終変更 ▲ ▼ ?
📁 ページ・グループ	Chris's Page Group	プロバイダ、ルート・ページの表示、ルート・ページの編集、ルート・ページのコピー、ルート・ページのテンプレートへの変換、削除、エクスポート	ORCLADMIN	2003-11-21
📁 ページ・グループ	Darren's Page Group	プロバイダ、ルート・ページの表示、ルート・ページの編集、ルート・ページのコピー、ルート・ページのテンプレートへの変換、削除、エクスポート	ORCLADMIN	2003-11-21
📁 ページ・グループ	Portal設計時ページ	プロバイダ、ルート・ページの表示、ルート・ページの編集、ルート・ページのコピー、ルート・ページのテンプレートへの変換	PORTAL	2003-11-19
📁 ページ・グループ	ポートレット・リポジトリ	プロバイダ、ルート・ページの表示、ルート・ページの編集、ルート・ページのコピー	PORTAL	2003-11-09
📁 ページ・グループ	企業ページ	プロバイダ、ルート・ページの表示、ルート・ページの編集、ルート・ページのコピー、ルート・ページのテンプレートへの変換、エクスポート	PORTAL	2003-11-09
📁 共有オブジェクト	共有オブジェクト	プロバイダ、エクスポート	PORTAL	2003-11-09

2. 「エクスポート」リンクをクリックして、図 10-5 に示すようなトランスポート・セット・マネージャを表示します。トランスポート・セットの名前はできるだけわかりやす



いものにし、名前の先頭には特殊文字を使用しないようにします。たとえば、My Company Transport Set 18-JAN-2003 のようにします。

図 10-5 トランスポート・セット・マネージャ



3. 「トランスポート・セット・オプション」の下で該当するチェック・ボックスを選択します。
  - 「アクセス制御リストのエクスポート」：トランスポート・セットのオブジェクトに関連付けられたアクセス制御リストを含めます。
  - 「ユーザー / グループ設定を含める」：オブジェクトのアクセス制御リストのエクスポートを選択した場合に、ユーザーおよびグループのグローバル権限を含めます。
  - 「警告を無視する」：警告が発生してもエクスポートを続行します。

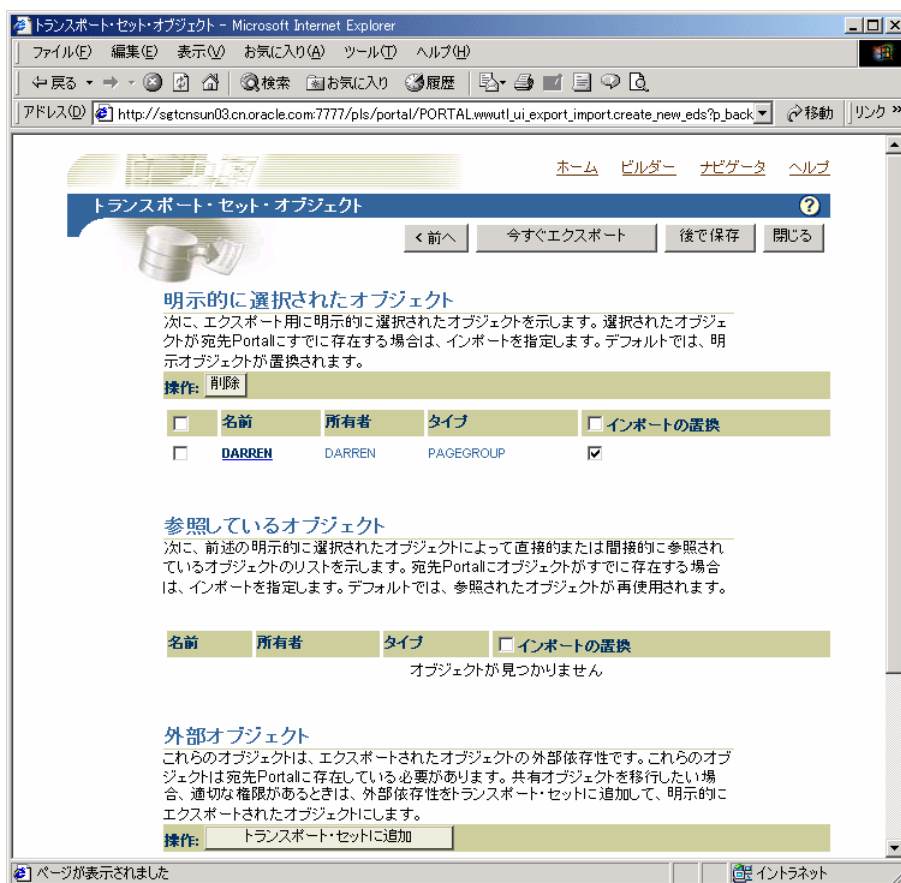
- 「拡張ログイン」：デバッグ・メッセージも含め、エクスポート・プロセスの詳細なログを提供します。
4. インポート・モードを選択し、明示的に選択されたオブジェクトを削除し、外部オブジェクトを昇格させます（明示にします）。外部オブジェクトを明示にすると、Portal ナビゲータに戻って追加しなくても、新しいオブジェクトをトランスポート・セットにその場で追加できます。外部オブジェクトは、明示的に選択されたオブジェクトに昇格されないかぎり、デフォルトではエクスポートまたはインポートされません。図 10-6 を参照してください。
  5. 終了する場合は「今すぐエクスポート」を、オブジェクトを追加する場合は「後で保存」を選択します。現在システム上にあるトランスポート・セットの編集および参照方法の詳細は、10.6 項「トランスポート・セットの管理方法」を参照してください。

---

**注意：** トランスポート・セット・オプションを選択して「後で保存」を選択した場合、オブジェクトを次にトランスポート・セットに追加するときに、以前に選択したオプションはすべてリセットされます。したがって、トランスポート・セットが完成するまで、毎回オプションを選択する必要があります。

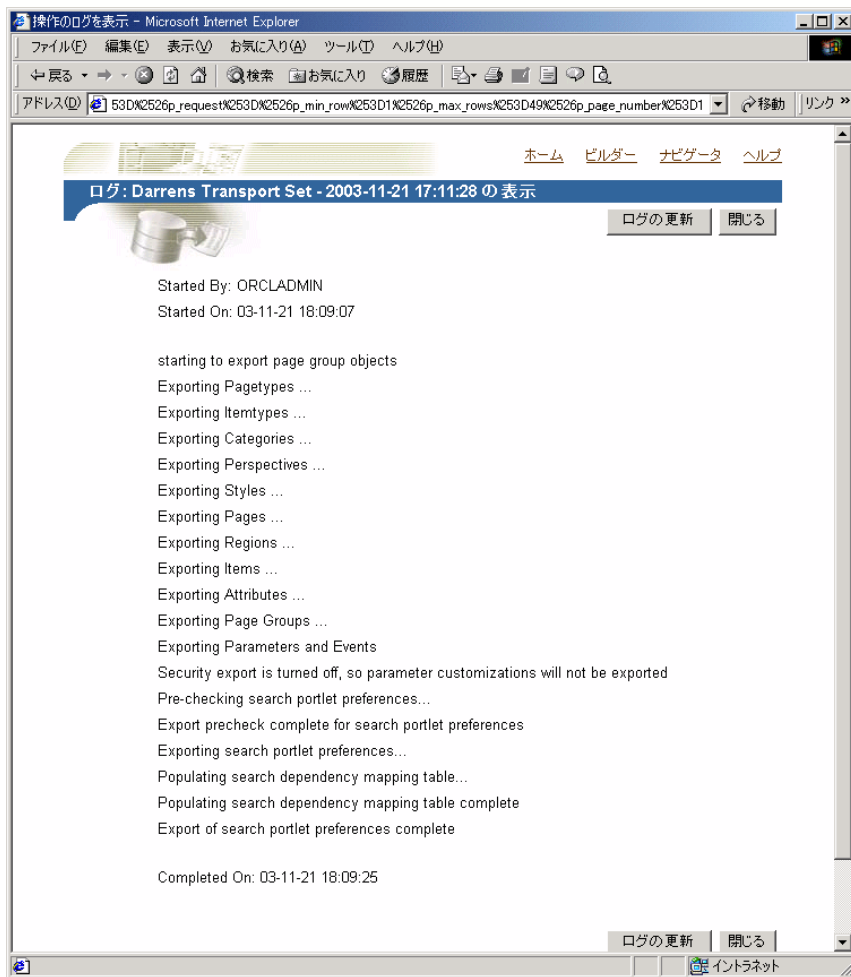
---

図 10-6 トランスポート・セット・マネージャのオブジェクト



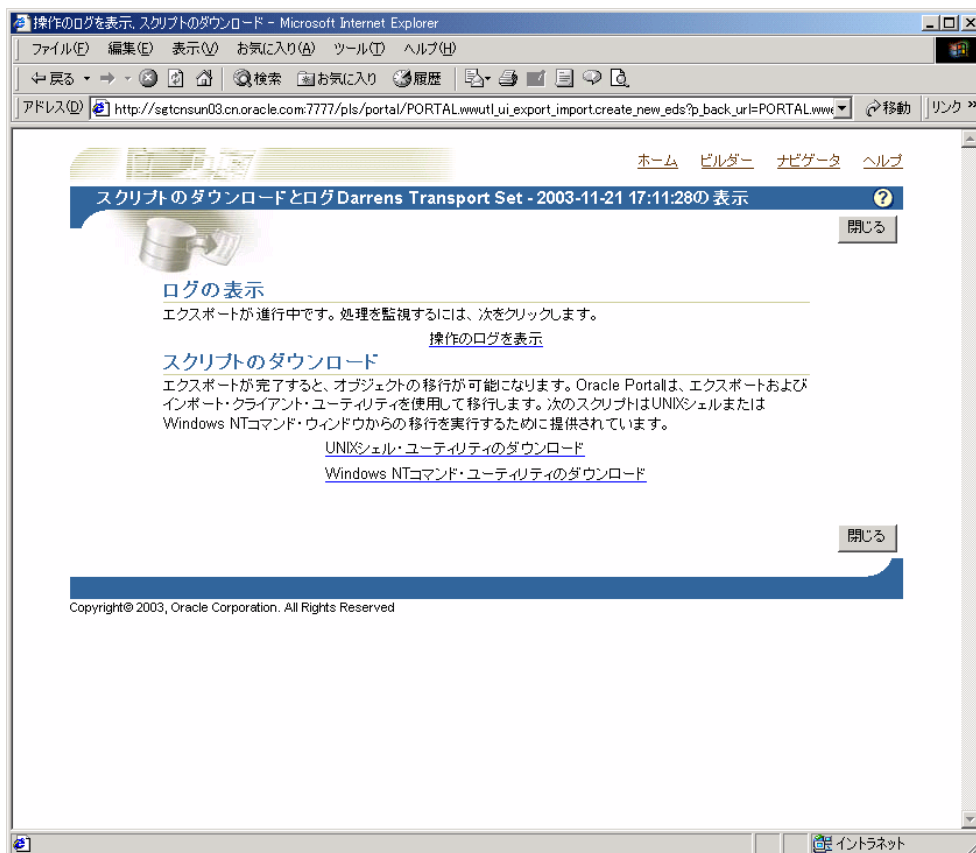
6. 「今すぐエクスポート」をクリックして、トランスポート・セットを完成させます。エクスポート用としてマークされたオブジェクトは、移行用のトランスポート表にコピーされます。これらの処理はバックグラウンドで実行されます。
7. 「操作のログを表示」リンクをクリックし、エラーが発生していないかどうかをトランスポート・セット・マネージャ内のログでチェックします。

図 10-7 トランスポート・セットのログの出力



8. オペレーティング・システムに基づいて、適切なエクスポート・スクリプトを選択します。図 10-8 を参照してください。

図 10-8 Portal 移行スクリプト



Netscape を使用している場合

1. 選択したスクリプトをクリックし、「名前を付けて保存」をクリックします。
2. 名前を変更し、正しいファイル名の拡張子（UNIX の場合は .csh、NT の場合は .cmd）を付加します（MyScript.csh など）。
3. エクスポート・スクリプトを実行するファイル・システムのディレクトリにファイルを保存します（通常このディレクトリはエクスポート Portal がある場所です）。

---

---

**注意：** UNIX ユーザーは、ローカル・ディレクトリにファイルを保存し、IMP ユーティリティがある中間層マシンにスクリプトを移動して、ダンプ・ファイルを作成する必要があります。スクリプトは編集しないでください。

---

---

Internet Explorer を使用している場合

1. 選択したスクリプトを右クリックし、「対象をファイルに保存」をクリックします。
2. 名前を変更し、正しいファイル名の拡張子（UNIX の場合は .csh、NT の場合は .cmd）を付加します（MyScript.csh など）。
3. エクスポート・スクリプトを実行するファイル・システムのディレクトリにファイルを保存します（通常このディレクトリはエクスポート Portal がある場所です）。

---

---

**注意：** この場所には、データベースへのアクセス権限が必要です。システムによっては、ダウンロードした UNIX スクリプトに対し、実行前に適切な実行権限を設定する必要があります。エクスポート・スクリプトは編集しないでください。

---

---

## スクリプトの実行によるエクスポート・ダンプ・ファイルの作成

エクスポート・プロセスの次の手順では、前の項で作成したスクリプトを使用してトランスポート・セットのダンプ・ファイルを作成し、エクスポート・データをターゲット・システムに転送します。

ダンプ・ファイルを作成するには、次の手順を実行します。

- 太字のパラメータは、エクスポートの場合にのみ適用する必須のパラメータです。次の例では、スクリプト名が MyScript.csh であると仮定しています。

```
%MyScript.csh
```

```
使用方法： MyScript.csh <-mode export_or_import> <-s portal_schema>  
<-p portal_password> <-pu portal_username> <-pp portal_userpassword>  
<-company company_name> <-c connect_string> <-d dump_file_name(s)>  
<-automatic_merge>
```

---

---

**注意：** **company\_name** パラメータの値は、ホスト Portal で作業中にログイン・ページに表示される会社名です。ホスト Portal 以外で作業している場合、このパラメータの値は none になります。対話モードでスクリプトを実行している場合、値は渡されません。エクスポート・スクリプトは編集しないでください。

---

---

次の表で、このプロセスで使用できるパラメータについて説明します。

表 10-4 パラメータの説明

パラメータ	説明
-mode	エクスポート / インポート・コマンドライン・ユーティリティを起動するモード  EXPORT モード: Oracle EXP ユーティリティを使用してコンテンツをダンプ・ファイルにエクスポートします。  IMPORT モード: Oracle IMP ユーティリティを使用してコンテンツをダンプ・ファイルからインポートします。
-s portal_schema	Portal 用の Oracle データベース・アカウント。
-p portal_password	Portal 用の Oracle データベース・パスワード。
-pu portal_username	Portal にログインするための軽量ユーザー名。
-pp portal_userpassword	Portal にログインするための軽量ユーザー・パスワード。
-company company_name	会社名 (ORACLE など)。
-c connect_string	リモート・データベースへの TNS 接続情報。
-d dump_file_name(s)	Oracle エクスポート・ユーティリティまたはインポート・ユーティリティが読み込みまたは書き込みを行うファイルの名前。複数のファイル名を使用する場合は、ファイル名をカンマで区切り、二重引用符で囲む必要があります。  たとえば、次のようになります。"FILE1.DMP,FILE2.DMP"
-automatic_merge	ダンプ・ファイルの内容を自動的にインポートします。

エクスポート・データを転送するには、次の手順を実行します。

1. オプションに `mode export` を使用してスクリプトを実行します。

```
%MyScript.csh -mode export
```

これにより、スキーマ名 (ソース)、パスワード、ダンプ・ファイル名などの情報を入力するよう要求されます。また、終了時にダンプ・ファイルが作成されます。

2. 最後に、FTP を使用して、ダンプ・ファイルとエクスポート / インポート・スクリプトをターゲットの OracleAS Portal リポジトリがあるマシンに転送します。

### 10.4.3 大容量のページ・グループのエクスポート

opeasst.csh (Oracle Portal Export Assistant) スクリプトを使用すると、ブラウザではタイムアウトになる可能性のある大容量のページ・グループについて、ページ・グループの依存性を考慮しながらエクスポートすることができます。このようなタイムアウトの問題の原因は、依存性マネージャとフォアグラウンド・プロセスとして実行される事前チェック・ルーチンにあります。実際のデータの抽出およびデータのマージは、バックグラウンドで行われます。

このスクリプトは、/portal/admin/plsql/wwu ディレクトリにあります。次に、スクリプトの例を示します。

```
%opeasst.csh
Usage: opeasst.csh <-s portal_schema> <-p portal_password> <-c connect_string> <-ts
transportset_name> <-pgrps pgrp_names> <[-export_acls [-include_prefs]]> <[-ignore_
warnings]> <[-advanced_logging]>
```

次の表で、このプロセスで使用されるパラメータについて説明します。

**表 10-5 OPEASST.CSH パラメータの説明**

パラメータ	説明
-s portal_schema	Portal 用の Oracle データベース・アカウント。
-p portal_password	Portal 用の Oracle データベース・パスワード。
-c connect_string	ソース・データベースの TNS 接続情報。
-ts transportset_name	作成するトランスポート・セットの名前。
-pgrps pgrp_names	エクスポートするページ・グループのカンマ区切りのリスト。
-export_acls	オブジェクト・レベルの権限をエクスポートします。
-include_prefs	ユーザーとグループの設定を含めます。
-ignore_warnings	データの抽出プロセス中に生成された重要でない警告やエラーをすべて無視します。
-advanced_logging	エコー・データの抽出プロセスの詳細ログを生成します。

コマンドラインからエクスポートを実行した後で、次の手順を実行します。

1. 「状態」リンクをクリックし、トランスポート・セット・マネージャ内のログで、エラーが発生していないかどうかを確認します。現在システム上にあるトランスポート・セットの編集および参照方法の詳細は、[10.6 項「トランスポート・セットの管理方法」](#)を参照してください。



2. エクスポートが完了したら、トランスポート・セットを参照し、オペレーティング・システムに適切なスクリプトを選択します。詳細は、[10.4.2 項「データのエクスポート」](#)を参照してください。

3. オプションに `mode export` を使用してスクリプトを実行します。

```
%MyScript.csh -mode export
```

これにより、スキーマ名（ソース）、パスワード、ダンプ・ファイル名などの情報を入力するよう要求されます。また、終了時にダンプ・ファイルが作成されます。

4. 最後に、FTP を使用して、ダンプ・ファイルとエクスポート / インポート・スクリプトをターゲットの OracleAS Portal リポジトリがあるマシンに転送します。
5. オブジェクトをインポートするには、最初にトランスポート・セットのダンプ・ファイルの内容をターゲット・システムのトランスポート・セット表にインポートする必要があります。[10.5.2 項「データのインポート」](#)を参照してください。

現在は、次の機能と制限があります。

- スクリプトはページ・グループのエクスポートのみをサポートしています。
- カンマで区切られた値を使用して、複数のページ・グループを一度にエクスポートできません。
- 「アクセス制御リストのエクスポート」、「ユーザー / グループ設定を含める」、「警告を無視する」および「拡張ログイン」はすべてサポートされています。
- インポート・モード・オプション（インポートの置換または再使用）は利用できません。
- データベース・プロバイダのエクスポートはサポートされていません。
- 依存性マネージャによって、ページ・グループのいくつかの外部オブジェクトをエクスポートすることになった場合は、ユーザーが処理を行わなくても、スクリプトによってすべての外部オブジェクトが自動的に昇格されます。昇格可能なこれらのオブジェクトは、トランスポート・セットの一部となるよう再帰的に昇格され、最終的にトランスポート・セットに外部オブジェクトは残りません。
- このスクリプト名は変更できません。

---

---

**注意：**

- opeasst.csh スクリプトを実行するためにデータベースに接続するときは、インフラストラクチャの Oracle ホームに設定してください。
  - Windows オペレーティング・システム上でシェル・スクリプト・ツールを実行するには、次の UNIX エミュレーション・ユーティリティのいずれかが必要です。
    - Cygwin 1.3.2.2-1 以降。 <http://sources.redhat.com> を参照してください。
    - MKS Toolkit 6.1。 <http://datafocus.com> を参照してください。
- 
- 

## 10.5 インポートの機能

この項では、ターゲット Portal システムにコンテンツを正しく移動するために必要な次のインポート・プロセスと手順について説明します。

- ターゲット・システムでのスクリプトの実行
- データのインポート

### 10.5.1 ターゲット・システムでのスクリプトの実行

オブジェクトをインポートするには、最初にトランスポート・セットのダンプ・ファイルの内容をターゲット・システムのトランスポート・セット表にインポートする必要があります。エクスポートで使用したスクリプトを、`-mode` を `import` に設定して呼び出します。太字のパラメータは、インポートの場合にのみ適用する必須のパラメータです。

```
%MyScript.csh
Usage: MyScript.csh <-mode export_or_import> <-s portal_schema>
<-p portal_password> <-pu portal_username> <-pp portal_userpassword>
<-company company_name> <-c connect_string> <-d dump_file_name(s)>
<-automatic_merge>
```

コマンドラインからインポート全体を実行するには（バックグラウンド・プロセスが開始されます）、Portal ユーザー名およびパスワードのパラメータを指定する必要があります。これは、ターゲットの Portal インスタンスでロールを検証するのに必要です。

---

---

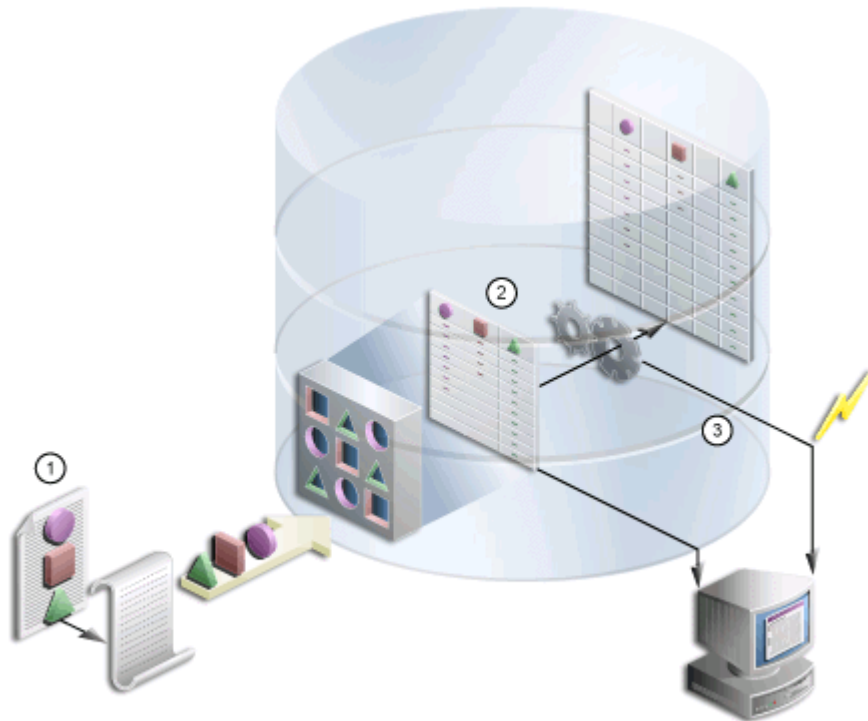
**注意：** `company_name` パラメータの値は、ホスト Portal で作業中にログイン・ページに表示される会社名です。ホスト Portal 以外で作業している場合、このパラメータの値は `none` になります。対話モードでスクリプトを実行している場合、値は渡されません。

---

---

ダンプ・ファイルの内容がインポートされると、ユーザー・インターフェースからトランスポート・セットを利用できるようになり、ターゲットの Portal システムでマージできます。  
図 10-9 は、インポート・プロセスのしくみを示しています。

図 10-9 インポート・プロセス



1. エクスポートで使用したスクリプトを使用して、トランスポート・セットのダンプ・ファイルの内容をトランスポート・セット表にインポートします。
2. インポートを開始するためにバックグラウンド・ジョブが送信され、ログ情報が生成されます。
3. インポートが終了すると、ユーザー・インターフェースからトランスポート・セットにアクセスできます。

---

---

**注意：** データ整合性を維持するために、次の処理は行わないでください。

- あるオブジェクトをインポートし、名前を変更した後で再インポートする。
  - あるオブジェクトをインポートし、昇格（共有オブジェクトに移動）した後で再インポートする。
  - オブジェクトをインポートし、ある階層から別の階層に移動する。
- 
- 

## 10.5.2 データのインポート

オブジェクトをインポートするには、最初にトランスポート・セットの内容をターゲット・システムにインポートする必要があります。インポートするトランスポート・セットを選択すると、事前チェック・プロセスによって、そのオブジェクトがターゲットに存在しているかどうか判断されます。

コンテンツをインポートするには、次の手順を実行します。

1. 「トランスポート・セットのエクスポート / インポート」ポートレットを探します。デフォルトでは「管理者」タブにインストールされています。

---

---

**注意：** トランスポート・セットをインポートするときに、「トランスポート・セットのブラウズ」リンクをクリックすると、新しくインポートされたトランスポート・セット（状態は「エクスポート完了」）とエクスポート・スクリプトへのリンクが表示されます。

ターゲットのトランスポート・セットで「再使用」を選択すると、トランスポート・セットがリセットされます。これにより、ターゲット・インスタンスからトランスポート・セットがエクスポートされず、トランスポート・セット内のオブジェクトと一致するオブジェクトが存在しないため、トランスポート・セットが使用できなくなります。

---

---

2. インポートされたトランスポート・セットを選択し、「インポート」をクリックします。インポート・マネージャが表示されます。

図 10-10 「トランスポート・セットのインポート」 ページ

ホーム ビルダー ナビゲータ ヘルプ

メイン オブジェクト

トランスポート・セットのインポート: DARRENS TRANSPORT SET - 2003-11-21 17:11:28 ?

今すぐインポート 後で保存 閉じる

### トランスポート・セット

トランスポート・セットの名前です。次の名前を変更できます。

名前

### トランスポート・セット・オプション

トランスポート・セットのオブジェクトに関連するアクセス制御リストをエクスポートするかどうかを選択します。アクセス制御リスト内のユーザー設定またはグループ設定をインポートするかどうかを選択します。また、オブジェクトのエクスポート中に表示される警告を無視するかどうかを選択します。拡張ログ・オプションは、エクスポート処理の詳細ログを作成します。

- アクセス制御リストのインポート
  - ユーザー/グループ設定を含める
- 警告を無視する
- 拡張ログイン

今すぐインポート 後で保存 閉じる

「トランスポート・セット・オプション」の下で該当するチェック・ボックスを選択します。

---

**注意：** エクスポート・プロセスで、「アクセス制御リストのインポート」とユーザー設定項目のオプションを選択しないことを指定した場合は、これらのものは選択できません。

---

- 「アクセス制御リストのインポート」：トランスポート・セットのオブジェクトに関連付けられたアクセス制御リストを含めます。
  - 「ユーザー / グループ設定を含める」：オブジェクトのアクセス制御リストのインポートを選択した場合に、ユーザーおよびグループのグローバル権限を含めます。
  - 「警告を無視する」：警告が発生してもインポートを続行します。
  - 「拡張ログイン」：デバッグ・メッセージも含め、インポート・プロセスの詳細なログを提供します。
3. 「オブジェクト」タブをクリックして、インポート対象となっているオブジェクトのリストを表示します。

- 「インポートの置換」を選択すると、オブジェクトがターゲット Portal で見つかった場合、オブジェクトが置き換えられます。

**注意：** 明示的に選択されたオブジェクトのデフォルト・モードは「インポートの置換」モードで、参照しているオブジェクトのデフォルト・モードは再使用です。明示的に選択されたオブジェクトに昇格されるまで、外部オブジェクトにはインポート・モードは適用できません。

図 10-11 トランスポート・セット・マネージャのインポート・オブジェクト

Home Builder Navigator Help

Main Objects

Import Transport Set : DARREN'S TRANSPORT SET - 16-APR-2003 07:04:21 ?

Import Now Save for Later Close

**Explicitly Selected Objects**

The following is a list of explicit objects for import. Specify the behaviour of import if the selected object already exists on the destination portal. By default, explicit objects are replaced.

Name	Owner	Type	<input type="checkbox"/> Replace on Import	Status
DARREN	DARREN	PAGEGROUP	<input checked="" type="checkbox"/>	✓

**Referenced Objects**

The following is a list of objects which are directly or indirectly referenced by the explicit objects above. Specify the behaviour of the import if the object already exists on the destination portal. By default, referenced objects are reused.

Name	Owner	Type	<input type="checkbox"/> Replace on Import	Status
No Objects Found				

- ログの出力を表示するには、「状態」のアイコンをクリックします。次の表で、状態の種類について説明します。

表 10-6 状態の説明

状態	説明
✓	正常終了。
✗	失敗。

表 10-6 状態の説明 (続き)


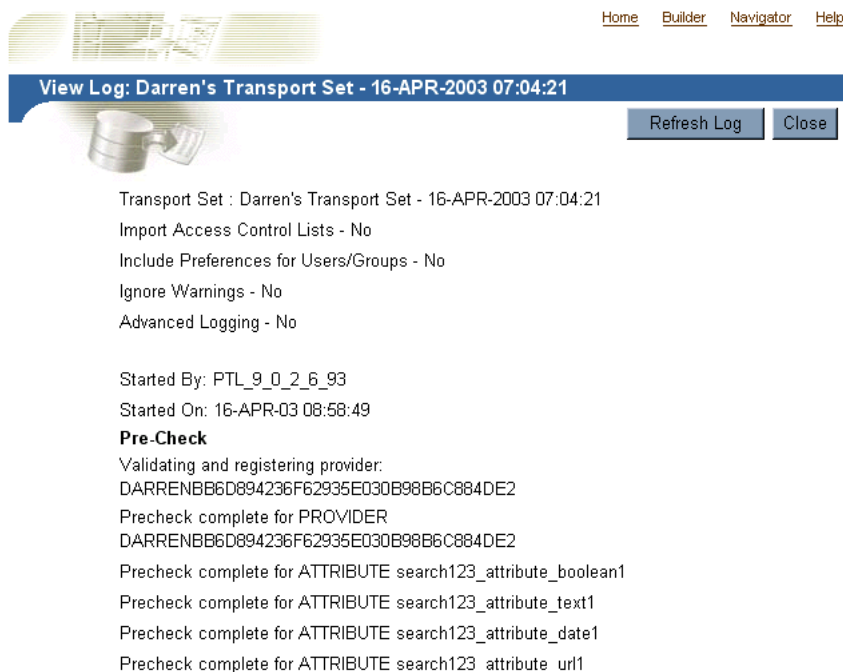
状態	説明
	警告付きで終了。警告付きで終了は、トランスポート・セットで「警告を無視する」オプションが選択されている場合にのみ表示されます。選択されていない場合、オブジェクトの状態は失敗に設定されます。

図 10-12 トランスポート・セット・マネージャのインポート・ログの出力



- 「閉じる」をクリックして「オブジェクト」ページに戻ります。
- 「今すぐインポート」（終了する場合）または「後で保存」を選択します。  
 「今すぐインポート」を選択すると、エクスポートされたオブジェクトがバックグラウンドでインポートされます。「後で保存」をクリックすると、トランスポート・セットに対する変更が保存され、後で解決してインポートできます。
- エラーがあるかどうか、ログを調べます。「警告を無視する」を選択した場合は、生成された警告は無視され、インポートが続行されます。ただし、「警告を無視する」オプションを選択しなかった場合は、警告が発生すると、インポートは失敗します。  
 すべてが正しくインポートされていることを確認するには、次の事項を調べます。

- 「ナビゲータ」で、インポートした各 Portal ページ・グループのコンテンツが正しくインポートされているかどうかを確認します。特に、各 Portal ページで、適切なポートレットが Portal ページの各領域にすべて表示されるかどうかを確認します。これらのポートレット（ナビゲーション・ページ、ポートレットとして公開されているページ、DB プロバイダのコンポーネントまたは Web ポートレット）が外部の依存性として表示され、「警告を無視する」が有効な場合、これらがターゲットに存在しないときは、ポートレット・エントリがページから削除されます。

---

**注意：** インポート中に、2段階の事前チェックが実行されます。最初の「ログの表示」をクリックすると、プロセスの最初の段階と、完全な事前チェックの両方が表示されます。これは、実際にインポートされる前、および Portal 表にデータが入力される前に行われます。

「ログの更新」をクリックすると、プロセスの第2段階およびタイムスタンプの異なる事前チェックの両方が表示されます。

---

### 「警告を無視する」の選択時の動作

インポートされるオブジェクトは、2つのタイプに分類できます。

- 警告のタイプ: 失敗時に、明示的に選択されたオブジェクトに警告が連鎖するオブジェクト。
- 失敗のタイプ: 失敗時に、明示的に選択されたオブジェクトに失敗が連鎖するオブジェクト。

「警告を無視する」オプションを選択すると、警告のタイプでは警告が発生し、明示的に選択されたオブジェクトはインポートされます。ただし、失敗のタイプのオブジェクトがあり、それが失敗すると、「警告を無視する」の値に関係なく、明示的に選択されたオブジェクトも失敗します。

明示的に選択されたオブジェクトに警告のタイプと失敗のタイプの2つの依存性があり、両方の依存性が事前チェック・プロセスに失敗した場合は、失敗のタイプが優先され、「警告を無視する」が選択されていても、明示的に選択されたオブジェクトも失敗します。

「警告を無視する」が選択されていない場合、警告のタイプのオブジェクトは失敗します。つまり、明示的に選択されたオブジェクトは失敗します。

「警告を無視する」は、他の種類のオブジェクトよりも、明示的に選択されたオブジェクトに影響します。参照しているオブジェクトと外部オブジェクトは、そのタイプ、および「警告を無視する」オプションが設定されているかどうかに基づいて、明示的に選択されているオブジェクトの失敗または警告を発生させます。図 10-7 に、「警告を無視する」オプションが選択されているときの各オブジェクトの予期される動作を示します。



表 10-7 警告または失敗のタイプ

オブジェクト	タイプ	予期される動作
属性	失敗	依存する属性が失敗すると、明示的に選択されたオブジェクトは失敗します。
アイテム・タイプ	失敗	依存するアイテム・タイプが失敗すると、明示的に選択されたオブジェクトは失敗します。
ページ・タイプ	失敗	依存するページ・タイプが失敗すると、明示的に選択されたオブジェクトは失敗します。
スタイル	警告	スタイルのデフォルトは、それが属するページ・グループのメイン・スタイルになります。
カテゴリ	警告	カテゴリは <code>none</code> に設定されます。
パースペクティブ	警告	アイテムまたはページに関連付けられたパースペクティブは削除されます。
ページ・テンプレート	失敗	依存するテンプレートが失敗すると、明示的に選択されたオブジェクトは失敗します。
ページ	警告	<p>ページが別のオブジェクトに依存しているときは、3つの結果が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ポートレットとして公開されているページ</b>: ページ・ポートレットが含まれる領域からポートレット・エントリが削除されます。</li> <li>■ <b>ページを指すページ・リンク</b>: リンクが指すページが失敗したため、ページ・リンク・アイテムが領域から削除されます。</li> <li>■ <b>プロント依存性</b>: 失敗したページを指していたリンクは、プロント・リンクが配置されている同じページを指すようにリセットされます。</li> </ul>
ナビゲーション・ページ	警告	ナビゲーション・ページ・ポートレットはページから削除されます。インポート後、ページを別のナビゲーション・ページに関連付けることができます。
色、フォント、JavaScript、アプリケーション・テンプレート、イメージ	警告	実行時にデフォルトに設定されます。
DB プロバイダのコンポーネント	警告	コンポーネントが配置されているポートレット・エントリはページから削除されます。

次に示すコンテナ・オブジェクトの子オブジェクトをエクスポートするよう選択したために、これらが外部の依存性として表示される場合、これらがターゲットには存在しないときは、「警告を無視する」の値に関係なく、明示的に選択されたオブジェクト（コンテナ・オブジェクトの子オブジェクト）は常に失敗します。

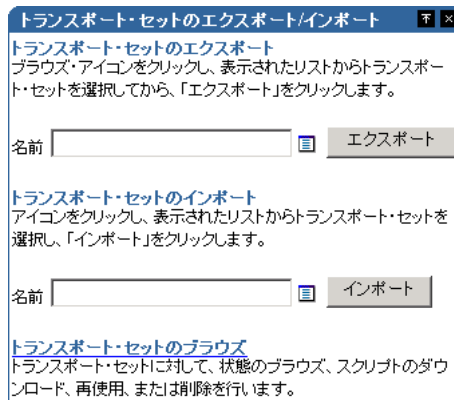
- ページ・グループ
- Portal DB プロバイダ
- カテゴリ
- パースペクティブ
- ページ

## 10.6 トランスポート・セットの管理方法

図 10-13 に示されている「トランスポート・セットのエクスポート / インポート」ポートレットは、デフォルトでは「管理者」タブにインストールされます。これを使用して、現在システムにあるトランスポート・セットをエクスポート、インポート、編集および参照できます。この項では、次の内容について説明します。

- [トランスポート・セットの編集](#)
- [トランスポート・セットの参照](#)

図 10-13 「トランスポート・セットのエクスポート / インポート」ポートレット



## 10.6.1 トランスポート・セットの編集

トランスポート・セットに対して選択されているオブジェクトのリストを表示および編集できます。新しいトランスポート・セットを作成して、「後で保存」オプションを選択した後は、次の手順を実行します。

- 「トランスポート・セットのエクスポート / インポート」 ポートレットに移動します。
- エクスポート・リストから対象となるトランスポート・セットを選択します。
- 設定を編集します。

## 10.6.2 トランスポート・セットの参照

システム上のすべてのトランスポート・セットおよびそれらの現在の状態を表示できます。また、操作のログ、参照しているオブジェクトおよびダウンロードしたエクスポート / インポート・スクリプトも表示できます。システムからトランスポート・セットを削除することもできます。トランスポート・セットを再使用するには、トランスポート・セットを選択し、「再使用」をクリックします。

---

---

**注意：**「再使用」オプションは、ソース Portal のトランスポート・セットの状態が「エクスポート完了」または「エクスポート失敗」の場合にのみ有効です。

---

---

図 10-14 トランスポート・セットのブラウズ

ホーム [ビルダー](#) [ナビゲータ](#) [ヘルプ](#)

トランスポート・セットのブラウズ ? 閉じる

### トランスポート・セットのブラウズ

以下のリストには、システムおよび現在の状態上のすべてのトランスポート・セットが表示されます。名前リンクをクリックして関連するオブジェクトを表示します。トランスポート・セットのログを表示するには、状態リンクをクリックします。トランスポート・セットのスクリプトをダウンロードするには、対応するスクリプトのリンクをクリックします。トランスポート・セットを削除するには、トランスポート・セットを選択して、「削除」をクリックします。最近エクスポートしたトランスポート・セットを再使用するには、たとえば、オブジェクトを追加または削除する場合、トランスポート・セットは「エクスポートの完了」または「エクスポートの失敗」状態である必要があります。トランスポート・セットを選択して、「再使用」をクリックします。

操作: 削除 再使用

<input type="checkbox"/>	名前	所有者	状態	最終更新	Unixスクリプト	NTスクリプト
<input type="checkbox"/>	<a href="#">exp407set</a>	ORCLADMIN	<a href="#">エクスポート完了</a>	03-11-21	<a href="#">exp407set</a>	<a href="#">exp407set</a>
<input type="checkbox"/>	<a href="#">exp407set</a>	ORCLADMIN	<a href="#">エクスポート完了</a>	03-11-21	<a href="#">exp407set</a>	<a href="#">exp407set</a>

閉じる

Copyright© 2003, Oracle Corporation. All Rights Reserved

## 10.7 移行後のオブジェクトの動作

OracleAS Portal エクスポート / インポートを使用してソースからターゲットに Portal のコンテンツを移行する前に次に示す事項を考慮する必要があります。この項では、移行後の Portal オブジェクトの動作について説明します。

**表 10-8 オブジェクトの動作**

オブジェクト・タイプ	動作
ページ・グループ	<p>最初のエクスポート / インポートでは、ページ・グループが存在しない場合は、ターゲット・システムにページ・グループが作成されず。ページ・グループ・レベルのすべての設定が、ターゲット・システムにレプリケートされます。2 回目のインポートでは、選択したモードによって次のように動作します。</p> <p>インポートの置換モード: ソースのページ・グループのプロパティによって、ターゲットのプロパティが置き換えられます。ページ・グループ内のオブジェクトはすべて、それらが存在するかどうかに応じて作成または更新されます。</p> <p>再使用モード: ターゲットにページ・グループがすでに存在する場合は、そのプロパティが再使用され、更新されません。ページ・グループ内の新しいオブジェクトは作成され、既存のオブジェクトは再使用されます。</p> <p><b>注意:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 現時点では、再使用モードを使用してページ・グループをインポートする場合、新しいページは作成されません。</li> <li>■ 「構成」タブに表示されるオブジェクトの順序は、ソース Portal とターゲット Portal とで異なることがあります。この場合、アイテムやカテゴリなどの選択時に、ターゲット Portal でドロップダウン・リストが異なっているように見えます。ターゲットで表示されるオブジェクトは手動で順序変更できます。</li> </ul>

**表 10-8 オブジェクトの動作 (続き)**

オブジェクト・タイプ	動作
属性	<p>最初のエクスポート / インポートでは、ターゲット・システムに属性が作成されます。2 回目のインポートでは、ターゲットで選択したモードによって次のように動作します。</p> <p>インポートの置換モード: 属性のプロパティが更新されます。</p> <p>再使用モード: 属性がすでにターゲットに存在する場合は、それが再使用され、更新されません。</p> <p><b>注意:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 外部としてマークされている属性は、「すべてのトランスポート・セット」の「管理」権限を持っている場合でも、ターゲットに作成できません。</li> <li>■ ソースとターゲットの属性は、名前、タイプおよび一意の内部識別子が同じである場合にのみ、同じであるとみなされます。2 つの属性の一意の内部識別子が同じで、名前が異なる場合は、インポートの置換モードでのみインポートすることが可能です。名前とタイプが同じで一意の内部識別子が異なる場合は、属性のインポートは失敗し、関連する他のすべてのオブジェクトでも失敗します。</li> </ul>
承認	<p>承認者を表示するには、アクセス制御リストと、そこで承認が定義されているページ・グループまたはページを、エクスポートおよびインポートする必要があります。</p> <p>インポートの置換モード: 承認プロセスは、ページまたはページ・グループに対して設定されます。ページ・グループまたはページが挿入または更新としてマークされている場合、承認オブジェクトは、インポートの置換モードで処理されます。ターゲットの情報はすべて削除され、再作成されます。</p> <p>再使用モード: 何も処理は行われません。</p>

表 10-8 オブジェクトの動作 (続き)

オブジェクト・タイプ	動作
アイテム	<p data-bbox="615 300 1289 352">アイテム情報は、ページ・エクスポートの一部になります。これらは、ページのインポート・モードに従います。</p> <p data-bbox="615 366 1315 493">インポートの置換モード: ページがインポートの置換モードでインポートされた場合は、ソースのページ領域のアイテムがターゲットにコピーされます。ターゲットのみにあるアイテムは削除され、ソースとターゲットの両方にあるアイテムは更新され、ソースのみにあるターゲットは作成されます。</p> <p data-bbox="615 506 1315 585">再使用モード: ソースからいずれのアイテムもインポートされません。ソースのページは参照としてのみ使用され、アイテムのインポート・モードを判別します。</p> <p data-bbox="615 598 672 621"><b>注意:</b></p> <ul data-bbox="615 638 1315 1156" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="615 638 1315 803">■ エクスポートされるページに PL/SQL アイテムがある場合、依存性マネージャは、PL/SQL 実行スキーマを外部の依存性としてマークしません。このため、PL/SQL アイテムが参照するスキーマがターゲットのデータベース・インスタンスにすでにあることを確認するか、またはアイテムをインポートする前にそれらを手動で移行します。</li> <li data-bbox="615 817 1315 1043">■ オブジェクト・アイテムのリストは、それらが参照しているオブジェクト (ページ、カテゴリおよびパースペクティブ) をオブジェクトのリストと同じトランスポート・セットに移行しないかぎり、ソースとターゲットとで異なって表示されます。依存性マネージャは、オブジェクトのリストで参照されているオブジェクトをエクスポート対象としてマークしません。このため、それらの参照されているオブジェクトをエクスポート対象として明示的にマークするか、またはそれらがトランスポート・セットにすでに含まれていることを確認する必要があります。</li> <li data-bbox="615 1057 1315 1156">■ 同じページの続いて実行されるインポートの間に、ポートレット・インスタンス・アイテムがある領域から別の領域に移動された場合、ユーザーがそのポートレット・インスタンスに行ったカスタマイズは削除されます。</li> </ul>

**表 10-8 オブジェクトの動作 (続き)**

オブジェクト・タイプ	動作
ページ	<p>ページとそれが参照するページ・タイプ、テンプレートおよびスタイルに加え、コンテンツ (アイテムとポートレット) をエクスポートします。</p> <p>インポートの置換モード: ページのプロパティが置き換えられます。領域のインポートの動作については、「領域」を参照してください。アイテムの動作については、「アイテム」を参照してください。</p> <p>再使用モード: ターゲットの元のページが再使用されます。</p> <p><b>注意:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 現在のリリースでは、WebDAV を使用したコンテンツのロックとロック解除はサポートされていません。コンテンツ作成者はファイルをロックできます。ファイルをロックすると、アイテムがチェックアウトされます。インポート時、所有されているロックは表示されません。</li> <li>■ 現時点では、Web ポートレットのデフォルトの編集とカスタマイズは移行されません。</li> <li>■ ポートレットとして公開されているページが外部オブジェクト・リストに表示されている場合は、そのページが必ずトランスポート・セットに含まれるようにします。</li> </ul>
領域	<p>領域情報は、ページ・エクスポートの一部になります。これらは、ページのインポート・モードに従います。</p> <p>インポートの置換モード: ページがインポートの置換モードでインポートされる場合は、ソースのページ領域がターゲットにコピーされます。ターゲットでのみ検出された領域は、その領域内のすべてのコンテンツも含め、すべて削除されます。</p> <p>再使用モード: ソースからは領域もアイテムもインポートされません。ソースのページは参照としてのみ使用され、領域のインポート・モードを判別します。</p>



表 10-8 オブジェクトの動作（続き）

オブジェクト・タイプ	動作
テンプレート	<p data-bbox="615 302 1315 401">テンプレートとそれが参照するスタイル、およびテンプレートのすべてのコンテンツをエクスポートします。テンプレートに依存するページのレイアウトとコンテンツは、ターゲット上の変更されたテンプレートと同期化されます。</p> <p data-bbox="615 418 1315 470">インポートの置換モード: テンプレートのプロパティがインポート時に置き換えられます。</p> <p data-bbox="615 487 1315 539">再使用モード: ターゲットのテンプレート情報が再使用され、ソース・システムの設定によっては更新されません。</p> <p data-bbox="615 557 672 579"><b>注意:</b></p> <ul data-bbox="615 597 1315 1098" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="615 597 1315 765">■ 現時点では、テンプレートとともにページをインポートしないと、ターゲットでそのテンプレートを使用するページにテンプレートの変更がレプリケートされません。常に、テンプレートとそのテンプレートを使用するページと一緒にエクスポートする必要があります。ターゲット上で直接、インポートしたテンプレートを使用するページを作成するのは避けてください。これらは、更新されたテンプレートと正しく同期化されません。</li> <li data-bbox="615 782 1315 904">■ 次の共有オブジェクトやページ・グループ内のテンプレート（これらは、そのページ・グループにカテゴリまたはパースpekティブが作成されている場合のみ存在します）、カテゴリ・ページのテンプレートまたはパースpekティブ・ページのテンプレートは、エクスポートまたはインポートしないでください。</li> <li data-bbox="615 921 1315 1098">■ テンプレートは、そのテンプレートに基づくすべてのページでテンプレートのスタイルを必ず使用するようにするか、またはテンプレートに基づくページで独自のスタイルを使用できるようにすることができます。スタイルが変更されたテンプレートをインポートするときに、ページでテンプレートのスタイルを必ず使用するようになっている場合は、そのテンプレートに基づいたページに変更が伝播されるのみになります。</li> </ul>
カテゴリ	<p data-bbox="615 1121 1225 1147">カテゴリとそのサブカテゴリをエクスポートします。</p> <p data-bbox="615 1164 1225 1190">再使用モード: ターゲットの元のカテゴリが再使用されます。</p> <p data-bbox="615 1208 672 1230"><b>注意:</b></p> <ul data-bbox="615 1248 1315 1489" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="615 1248 1315 1433">■ カテゴリ・ページ（カテゴリをクリックすると表示されるページ）とカテゴリ・テンプレートはエクスポートされません。これらは、インポート時に毎回作成されます。カテゴリは常に再使用されるので、ターゲットで1回なんらかの変更を行うと、その後のインポート時に失われることはありません。これは、カテゴリ、カテゴリ・ページおよびカテゴリ・テンプレートに当てはまります。</li> <li data-bbox="615 1451 1315 1489">■ インポートの置換モードはありません。「インポートの置換」オプションは適用されず、カテゴリは常に再使用されます。</li> </ul>

**表 10-8 オブジェクトの動作 (続き)**

オブジェクト・タイプ	動作
パースペクティブ	<p data-bbox="568 293 1243 343">パースペクティブとそのサブパースペクティブをエクスポートします。</p> <p data-bbox="568 357 1243 407">再使用モード: ターゲットの元のパースペクティブが再使用されません。</p> <p data-bbox="568 427 625 451"><b>注意:</b></p> <ul data-bbox="568 470 1243 736" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="568 470 1243 519">■ インポートの置換モードはありません。「インポートの置換」オプションは適用されず、カテゴリは常に再使用されます。</li> <li data-bbox="568 534 1243 736">■ パースペクティブ・ページ (パースペクティブをクリックすると表示されるページ) とパースペクティブ・テンプレートはエクスポートされません。これらは、インポート時に毎回作成されます。パースペクティブは常に再使用されるので、ターゲットで1回なんらかの変更を行うと、その後のインポート時に失われることはありません。これは、パースペクティブ、パースペクティブ・ページおよびパースペクティブ・テンプレートに当てはまりません。</li> </ul>
ナビゲーション・ページ	<p data-bbox="568 755 1265 805">ナビゲーション・ページとそれが参照するスタイル、およびナビゲーション・ページ上のすべてのリンクをエクスポートします。</p> <p data-bbox="568 821 1265 871">インポートの置換モード: ナビゲーション・ページのプロパティが置き換えられます。</p> <p data-bbox="568 887 1265 939">再使用モード: ターゲットの元のナビゲーション・ページが再使用されます。</p>
スタイル	<p data-bbox="568 958 892 982">スタイルをエクスポートします。</p> <p data-bbox="568 998 1236 1048">インポートの置換モード: スタイルのプロパティが置き換えられます。</p> <p data-bbox="568 1064 1132 1088">再使用モード: ターゲットのスタイルが再使用されます。</p> <p data-bbox="568 1107 1265 1220"><b>注意:</b> ソースとターゲットのスタイルは、名前と一意の内部識別子が同じである場合にのみ、同じであるとみなされます。2つのスタイルの一意の内部識別子が同じで、名前が異なる場合は、インポートの置換モードでのみインポートすることが可能です。</p>

表 10-8 オブジェクトの動作（続き）

オブジェクト・タイプ	動作
アイテム・タイプ	<p data-bbox="615 300 1253 326">アイテム・タイプとそれが参照する属性をエクスポートします。</p> <p data-bbox="615 340 1315 392">生成済アイテム・タイプ（ファイル・アイテムなど）は修正できますが、これらの修正はターゲットには反映されません。</p> <p data-bbox="615 406 672 432"><b>注意：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="615 446 1315 498">■ 生成済アイテム・タイプを修正する場合は、生成済アイテム・タイプをコピーし、コピーの属性を修正することをお勧めします。</li> <li data-bbox="615 512 1315 633">■ ソースとターゲットのアイテム・タイプは、名前、タイプおよび一意の内部識別子が同じである場合にのみ、同じであるとみなされます。ソースとターゲットのアイテム・タイプの一意の内部識別子が同じで、名前が異なる場合は、インポートの置換モードでのみインポートすることが可能です。</li> <li data-bbox="615 647 1315 826">■ 現時点では、インポートとインポートの間に、カスタム・タイプ（アイテム・タイプ、ページ・タイプ）に関連付けられた属性を変更するか、カスタム・タイプに関連付けられた機能を変更すると、その変更が正しく移行されないことがあります。ターゲットでカスタム・タイプを削除および再作成する必要があります。この結果、カスタム・タイプに基づくアイテムまたはページはすべて削除されます。</li> </ul>
ページ・タイプ	<p data-bbox="615 847 1229 873">ページ・タイプとそれが参照する属性をエクスポートします。</p> <p data-bbox="615 887 1315 1019"><b>注意：</b>ソースとターゲットのページ・タイプは、名前、タイプおよび一意の内部識別子が同じである場合にのみ、同じであるとみなされず。ソースとターゲットのページ・タイプの一意の内部識別子が同じで、名前が異なる場合は、インポートの置換モードでのみインポートすることが可能です。</p>

**表 10-9 Portal DB プロバイダ・オブジェクトの動作**

オブジェクト・タイプ	動作
Portal DB プロバイダ	<p data-bbox="572 305 1265 357">最初のエクスポート / インポートでは、Portal DB プロバイダが存在しない場合は、ターゲット・システムに作成されます。</p> <ul data-bbox="572 374 1265 493" style="list-style-type: none"><li data-bbox="572 374 1265 427">■ Portal DB プロバイダのプロパティは、ターゲットで作成されません。</li><li data-bbox="572 444 1265 493">■ 新しく作成された Portal DB プロバイダについては、プロバイダ登録が行われます。</li></ul> <p data-bbox="572 510 1265 562">2 回目のインポートでは、ターゲットで選択したモードによって次のように動作します。</p> <p data-bbox="572 579 1265 687">インポートの置換モード：ソースの Portal DB プロバイダのプロパティによって、ターゲットのプロパティが置き換えられます。Portal DB プロバイダ内のコンポーネントはすべて、それらが存在するかどうかに応じて作成または更新されます。</p> <p data-bbox="572 704 1265 802">再使用モード：ターゲットに Portal DB プロバイダがすでに存在する場合は、そのプロパティが再使用され、更新されません。Portal DB プロバイダ内の新しいコンポーネントは作成され、既存のコンポーネントは再使用されます。</p>

表 10-9 Portal DB プロバイダ・オブジェクトの動作（続き）

オブジェクト・タイプ	動作
Portal DB プロバイダのコンポーネント	<p>最初のエクスポート / インポートでは、ターゲット・システムにコンポーネントが作成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ メニュー</li> <li>■ フォーム</li> <li>■ レポート</li> <li>■ チャート</li> <li>■ カレンダ</li> <li>■ 値リスト</li> <li>■ リンク</li> <li>■ 階層</li> <li>■ 動的ページ</li> <li>■ XML/URL コンポーネント</li> <li>■ データ・コンポーネント</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 指定された Portal DB プロバイダの下に最初のコンポーネントが作成され、これが本稼働バージョンになります。</li> <li>■ Portal DB プロバイダに関連付けられているスキーマの下に、コンポーネントと同じ名前のパッケージが作成されます。</li> </ul> <p>2 回目のインポートでは、ターゲットで選択したモードによって次のように動作します。</p> <p>インポートの置換モード：既存のコンポーネントの上位に新しいコンポーネントが作成され、これが本稼働バージョンになります。ターゲットに既存のバージョンがある場合は、それらがアーカイブされます。本稼働バージョンから取得された情報を使用して、パッケージが再生成されます。</p> <p>再使用モード：ターゲットにコンポーネントが存在しない場合は、作成されます。</p> <p><b>注意：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コンポーネントの値リストおよびリンクには、それらに関連付けられたバージョンまたはパッケージはありません。そのため、上書きモードでは、これらのコンポーネントは常にターゲットで削除および再作成されます。</li> <li>■ 値リストおよびリンクのコンポーネントは、それ自体ではレンダリングできないか、またはポートレット・フォームに含まれないため、これらのコンポーネントに付加されるカスタマイズはありません。</li> </ul>
共有コンポーネント	<p>最初のエクスポート / インポートでは、共有コンポーネントが存在しない場合は、ターゲット・システムに作成されます。</p> <p>2 回目のインポートでは、ターゲットで選択したモードによって次のように動作します。</p> <p>インポートの置換モード：共有コンポーネントは、常に削除され、ソースの情報を使用して再作成されます。</p> <p>再使用モード：ターゲットに共有コンポーネントがすでに存在する場合は、そのプロパティが再使用され、更新されません。新しい共有コンポーネントは作成され、既存のコンポーネントは再使用されます。</p> <p><b>注意：</b>システムの色、フォント、テンプレートは、常にターゲットで再使用され、エクスポートおよびインポートされることはありません。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 色</li> <li>■ フォント</li> <li>■ イメージ</li> <li>■ JavaScript</li> <li>■ UI テンプレート (構成済、非構成済)</li> </ul>

**表 10-10 Oracle Reports のオブジェクト・タイプの動作**

オブジェクト・タイプ	動作
Report Security Access コンポーネント	<p>Report Security Access オブジェクトは常に、Portal DB プロバイダのエクスポート / インポートの一部としてエクスポートまたはインポートされます。</p> <p><b>注意:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Report Security Access コンポーネントの詳細なエクスポート / インポートはサポートされていません。</li> <li>■ バージョン管理については、Report Security Access コンポーネントは DB プロバイダのコンポーネントと同じ動作をします。</li> <li>■ DB プロバイダのコンポーネントと同様に、レポート定義ファイル (RDF) アクセス・コンポーネントのパッケージが作成または再生成されます。</li> </ul>

**表 10-11 Web プロバイダの動作**

オブジェクト・タイプ	動作
Web プロバイダ	<p>トランスポート・セットが参照するすべての Web プロバイダが、ターゲット・システムにすでに存在しているか、またはターゲット・システムへのインポート時に正常に登録できることが必要です。</p> <p>再使用モード: プロバイダは常に再使用されます。</p> <p><b>注意:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ プロバイダの登録時に権限の不足によってエラーが発生した場合は、プロバイダ・オブジェクトの事前チェックが失敗します。これは、明示的に選択されたオブジェクトにも連鎖します。「警告を無視する」の値に関係なく、プロバイダが失敗すると常に、明示的に選択されたオブジェクトは失敗します。</li> <li>■ デフォルトの編集とカスタマイズは移行されません。</li> <li>■ ポートレットは、別の場所 (OmniPortlet または Web クリップングの場合は保護データ・リポジトリなど) に格納された追加情報がある場合は移行されません。</li> </ul>

## 10.8 推奨される最善の実施例

次に、OracleAS Portal エクスポート / インポートを使用して、開発またはテスト環境から本稼働インスタンスに Portal コンテンツを移行する際の、重要な推奨事項と最善の実施例について概説します。

- ユーザーおよびグループの移行
- ページ・グループおよびコンポーネントの移行
- Web プロバイダの移行
- Portal DB プロバイダとコンポーネントの移行
- 検索コンポーネントの移行
- 外部アプリケーションの移行
- データベース間での Portal の移行

### 10.8.1 ユーザーおよびグループの移行

エクスポート / インポートは、次の手順で実行することをお勧めします。

- ソース / 開発システムで、Portal オブジェクト（ページ・グループ、コンテンツ、ポートレットなど）を開発します。
- エクスポート / インポートの処理を簡単にするために、ユーザー、グループおよび権限は本稼働システムでのみ割り当てます。
- エクスポート / インポートを使用して、Portal オブジェクトをターゲット / 本稼働システムに移行します。
- 必要な場合は、インポートされた Portal オブジェクトにユーザーおよび権限を適用します。

ユーザーとグループは Oracle Internet Directory で定義されます。Portal のエクスポート時に、アクセス制御リストおよびユーザーとグループの設定を含めるよう選択した場合は、Portal スキーマに保持されているユーザーとグループのプロファイルがトランスポート・セットに含まれます。ただし、Oracle Internet Directory に保持されているユーザーおよびグループの定義は移行されません。

ユーザーおよびグループのプロファイルをターゲット Portal に正しくインポートするには、それらが参照しているユーザーとグループが、ターゲット Portal の関連する Oracle Internet Directory に存在している必要があります。

テストまたは開発サーバーに Portal コンテンツを作成しており、後でコンテンツを本稼働サーバーに移動する予定がある場合は、テスト・サーバー上でセキュリティ権限を割り当てておいて、コンテンツとともにその権限を本稼働サーバーに移行することもできます。

この方法では、テストと本稼働のインフラストラクチャ間でユーザー数を一貫させなくても済むように、グループに対して権限を割り当てます。

本稼働サーバーとテスト・サーバーの両方でユーザー数を厳密に一致させる場合は、Oracle Internet Directory の Directory Integration Platform のディレクトリ同期機能を使用して、本稼働ディレクトリ・サーバーからテスト・サーバーに対してデータを同期化する方法が最も優れています。本稼働データからテスト・データに対して同期化すると、本稼働サーバーに影響を与えずに、テスト用のユーザーとグループをテスト用 Oracle Internet Directory Server に追加することもできます。

---

**注意：** ディレクトリ同期の設定の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。本稼働環境からテスト環境にデータを自動的に同期化することは有効ですが、逆方向の同期化はお薦めできません。

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』には、ユーザーとグループの移行の詳細も記載されています。

---

本稼働グループがテスト・サーバーにも存在している場合は、テスト・サーバーのすべてのアクセス権限を一致させてテストしてから、Portal のアクセス制御リストおよびエクスポートされたオブジェクトを本稼働システムに安全に移行することもできます。

テスト・システムで、新しいグループおよびそのグループのアクセス権限を導入する場合は、Portal のコンテンツとアクセス制御リストを本稼働環境に移動する前に、まずグループ定義を移行してください。実際には、まず本稼働環境でグループを作成し、テスト用のアクセス制御エントリを適用する前に、同期プロセスをテスト・システムの新しいグループに反映させることができます。実際にテスト・インスタンスに最初にグループを作成する必要がある場合は、テスト環境でグループを生成したときと同じ方法によって、本稼働環境にグループを作成することができます。これをすでに手動で行っており、本稼働環境でこの手順を手動で行うのは避けたい場合は、テスト・インスタンスで LDAP の問合せを実行して LDIF ファイルを作成し、これを本稼働インスタンスにロードできます。たとえば、次のようになります。

```
%ldapsearch -h testoid.domain.com -p 389 -D cn=orcladmin -w password123 -b
'cn=portal.iasdb.domain.com,cn=groups,dc=domain,dc=com' -s sub -L 'cn=groupname' >
newgroup.ldif
```

---

**注意：** グループ情報が含まれている LDIF ファイルを本稼働用 Oracle Internet Directory インスタンスにロードする前に、ファイルを編集して、Portal インスタンス名が本稼働用 Oracle Internet Directory インスタンスの Portal インスタンス名と一致するように変更しなければならない場合があります。通常、この名前はテスト・インスタンスと本稼働インスタンスでは異なり、名前がグループ DN の一部になっているため、ファイルをロードする前に修正する必要があります。

---



この例では、`cn=portal.iasdb.dbserver.domain.dcom`, `cn=groups`, `dc=us`, `dc=oracle`, `dc=com` が、Portal グループがある場所になります。Oracle Internet Directory におけるディレクトリ情報ツリーのエン트리編成の詳細は、「セキュリティ」の章を参照してください。これによって、グループ定義が含まれた `newgroup.ldif` というファイルが作成されます。このファイルは、次のように `ldapadd` を使用して、本稼働 Oracle Internet Directory インスタンスにロードできます。

```
%ldapadd -h prodoid.domain.com -p 389 -D cn=orcladmin -w password123 -v -f
newgroup.ldif
```

生成済 Portal グループの一部に付与されているデフォルトの権限のみを配置する必要がある場合もあれば、権限をまったく配置しない場合もあります。権限を配置しない場合は、インポートを実行するユーザーがオブジェクトを所有します。特定の配置で、必要に応じて、ターゲット・システム上で追加の権限を付与することができます。

Porta の生成済グループに権限が付与されており、これらの生成済グループがターゲット・システムにまだ存在している場合は、権限がこれらの生成済グループに正しく関連付けられると仮定し、生成済のグループまたはユーザーを同期化する必要はありません。

ソースからターゲットにグループ・プロファイルを移行するときに、エクスポートされたプロファイルがソース上のローカル・グループのものであった場合は、インポートによって、グループの DN がターゲット・システムのローカル・グループ・ベースに再マップされます。ローカル・グループは、Portal グループ・コンテナ（グループ・インストール・ベース）の下にあります。グループ・インストール・ベースの下にないグループに関しては、DN は変更されずにそのまま保持されます。

---

---

**注意：** `wwu` ディレクトリの `ssoexp` スクリプトおよび `ssoimp` スクリプトは、9.0.x では廃止されたため、9.0.x ログイン・サーバーとは互換性がありません。これらのスクリプトを使用しないでください。

---

---

## 10.8.2 ページ・グループおよびコンポーネントの移行

ページ・グループおよびそれに関連付けられたコンポーネントは、このドキュメントで説明しているエクスポート/インポート・ユーティリティを使用して、開発環境から本稼働環境に移行できます。ターゲット・システムにページ・グループ全体がすでにインポートされている場合のみ、ページ・グループ全体だけでなく、ページ・グループ内の個々のコンポーネント（サブページ、カテゴリ、パースペクティブ、ページ・スタイルなど）をターゲット・システムに個別に移動できます。

---

---

**注意：** 現在のリリースでは、循環参照はサポートされていません。循環参照が含まれているページ・グループをインポートすると、ORA-00001: unique constraint エラーが発生しますが、インポートは正常に終了します。

---

---

- 考慮すべき事項と最善の実施例は次のとおりです。
  - ターゲット・システムへの最初のエクスポートでは、ソース Portal からターゲット Portal インスタンスに、ページ・グループ全体を移行する必要があります。以降のトランスポート・セットでは、個別のページをエクスポートすることも、ターゲット Portal インストールの他のページ・グループ・コンポーネントをエクスポートすることもできます。

---

---

**注意：** ページ・グループがターゲットに存在していない場合は、オブジェクトの事前チェック・プロセスに失敗します。ページ・グループ・オブジェクトがエクスポートされるときは、必ずそのオブジェクトを所有しているページ・グループが外部の依存性として含められます。ページ・グループがターゲットに存在しているかどうかは不明で、事前チェックに失敗する可能性がある場合は、ページ・グループを昇格することを選択できます。

これは、階層に含まれている他のオブジェクトにも当てはまります。カテゴリ、パースペクティブおよびページには、エクスポートされると、それらが所属するページ・グループだけでなく、親のカテゴリ、パースペクティブまたはページが外部の依存性として表示されます。データベース・プロバイダ・コンポーネントには、それ自体が単独でエクスポートされると、外部の依存性としてプロバイダが表示されます。

ページ・グループのデフォルトの設定（デフォルトのテンプレート、スタイル、ナビゲーション・ページなど）も依存性マネージャによって抽出され、参照または外部（ローカルまたは共有）として分類されます。

---

---

- 同じ名前のページがターゲットに再インポートされた場合は、そのページの新規および既存のすべてのコンテンツが置き換えられます。

- ページ・グループ内のオブジェクトは、ターゲット Portal 上で同じ名前を持つ同じページ・グループにしか移動できません。
- ページは、サブページとともに移行されます。
- ターゲット・システムへの最初のインポートの終了後に、ターゲット・システムでページ・グループの名前を変更した場合は、以降に同じページ・グループをインポートしようとするとう失敗します。
- ソースで構成されているカテゴリ、アイテム・タイプ、パースペクティブおよびページ・タイプは、ターゲットでは自動的に構成されません。ページ・グループをエクスポートしていない場合は、これらのオブジェクトを明示的に構成する必要があります。
- ページ URL の動作 : Portal ページへのリンクを作成する場合は、必ずページ・リンクのアイテム・タイプまたはダイレクト・アクセス URL を使用します。Portal ページの URL はそのまま使用しないでください。

デフォルトでは、OracleAS Portal で生成された Portal ページの URL にはインストール固有の ID 番号が含まれ、これらの番号はオブジェクトがエクスポートされると変更されます。このため、ページが他のサイトにインポートされるとリンクが壊れます。

ページに対して生成された URL の例を次に示します。ページが他のサイトにインポートされると、この PAGEID が変わります。

```
http://my.portal.com/servlet/page?_pageid=47,49&_dad=portalr2&_schema=portal
```

このような URL を手動入力のリンクとして使用している場合は、ダイレクト・アクセス URL またはページ・リンクのアイテム・タイプを使用することをお勧めします。

同じページのダイレクト・アクセス URL は次のようになります。

```
http://my.portal.com/pls/portal/url/PAGE/HRPAGEGROUP/HRHOME/HRBENEFITS
```

ページのダイレクト・アクセス URL を検索するには、ページのプロパティ・シートを調べます。プロパティ・シートへのリンクを表示するには、ページにプロパティ・シートのスマート・リンク・アイテムを追加します。

「ページ・リンク」アイテム・タイプを使用して、ページへのリンクを作成することもできます。「ページ・リンク」アイテム・タイプは、実行時に正しいリンクを動的に生成します。

- ページ・ポートレット : ページを置き換えると、ターゲットのコンテンツと構造が置き換えられます。

---

**注意：** このリリースでは、OracleAS Portal のサーバイ・コンポーネントまたは「お気に入り」ポートレットのインポートとエクスポートはサポートされていません。

---

ターゲットのページのコンテンツ（アイテム、ポートレット）はそのまま保持し、ソースのスタイル、レイアウト、またはレンダリングの変更内容をインポートするには、連携型 Portal アダプタ・ポートレットを介してコンテンツを公開します。ここでは、ページ構造からコンテンツを2つの異なるページ・グループに分けることが重要です。一方はコンテンツのみのページ・グループで、連携型 Portal アダプタを介して公開され、もう一方は表示用のページ・グループです。ユーザーはこれを使用して、Portal のアクセス、表示およびカスタマイズを行うことができます。次の手順を実行します。

1. ソース・システムで、後で他のページに公開する単一の領域があるページのみを含むページ・グループを作成します。この領域には、ポートレットまたはアイテムのいずれかが挿入されます。ページ・グループの名前は "コンテンツ・ページ・グループ" とします。
2. このコンテンツ・ページ・グループをターゲット・システムにエクスポートします。
3. ターゲット・システムで、連携型 Portal アダプタを介してコンテンツ・ページ・グループを登録します。ターゲット・システムの連携型 Portal アダプタ・プロバイダを介して、これらのページをポートレットとして公開します。
4. ソース・システムで、連携型 Portal アダプタ・プロバイダと同じ名前を使用して、同じプロバイダを登録します。
5. ソース・システムで、"表示ページ" という別のページ・グループを作成します。このページ・グループには、連携型 Portal アダプタ・プロバイダからポートレットを公開する領域が含まれるページを作成します。必要に応じて、このページ・グループにタブおよび他のポートレット領域を含めることもできます。
6. "表示ページ" グループをターゲット・システムにエクスポートします。
7. ターゲット・システムから、連携型 Portal アダプタ・プロバイダを介して公開されたコンテンツ・ページ・グループのページに対して、更新、削除、修正および領域への新しいアイテムの追加を行います。
8. ソース・システムで、"表示ページ" ページ・グループに対して、ページ構造（タブ、新しい領域など）の変更を行います。
9. 最新の "表示ページ" ページ・グループをターゲット・システムにエクスポートします。
10. 手順7でソースとターゲットの両方の環境で行った変更が、"コンテンツ・ページ・グループ" に反映されていることを確認します。
11. ターゲット・システムに、最後に変更した "表示ページ" ページ・グループのページに対する最新の変更が反映されていることを確認します。

---

---

**注意：** アダプタ・レンダリング・プロバイダ（ループバックの場合）からのポートレットが含まれているページがインポートされており、プロバイダが新しい Portal に自動的に登録されている場合は、URL が古く、以前の Portal を参照しています。

新しい Portal で、ループバック・プロバイダが必要な場合は、新しく作成するか、またはデフォルトのプロバイダを更新する必要があります。

---

---

- ページとポートレットのカスタマイズおよびデフォルトの移行の編集：ターゲット・システム上のページまたはポートレットにユーザーが加えたカスタマイズは、そのページまたはポートレットのプロパティの編集やデフォルトの編集を置換または再使用する場合でも、保持しておくことができます。

---

---

**注意：** 現時点では、Web ポートレットのデフォルトの編集とカスタマイズは保持されません。

---

---

ソース Portal のページ上に存在しないベース・オブジェクトは、その後のインポートが終了した後でターゲット・ページから削除されます。これによって、ベース・ポートレット領域のすべてのカスタマイズも必ず削除されます。ベース・オブジェクトとは、ページの中核となる定義の一部としてインポートされる領域、ポートレット / アイテムおよびタブのことで、ページの構造とコンテンツを定義します。

ページにすでに存在しているポートレットは、そのページがインポートの置換モードでインポートされると、次のように動作します。

- デフォルトの編集は置き換えられます。
- ユーザーのカスタマイズは保持されます。

ページのプロパティは、そのページがインポートの置換モードでインポートされると、次のように動作します。

- プロパティの編集は置き換えられます。
- ユーザーのカスタマイズは保持されます（ユーザーのカスタマイズが有効であることが前提）。

---

---

**注意：** ポートレットとタブはカスタマイズ、追加、非表示 / 表示、削除および移動できます。ページには、少なくとも1つのポートレット領域とその領域内の1つのタブ（カスタマイズに関連するタブ）を定義する必要があります。カスタマイズされたオブジェクトは、ページのプロパティを継承します。領域を削除すると（2回目のインポートでページから領域またはタブを削除する場合など）、カスタマイズされたオブジェクトも削除されます。

---

---

ページのポートレット数を増やしてページをインポートするときは、ターゲットのページをカスタマイズしてポートレットを削除した場合でも、ソースの内容が優先されます。次に同じページをインポートするとき、削除されたポートレットは、ターゲットの構造に追加される新しいポートレットとみなされます。これはタブにも当てはまりません。

これらのポートレット（カスタマイズ）およびページのコンテンツを構成するポートレットの表示順序は、ソースおよびインポートのモードによって決まります。

- インポートの置換モード: ソースのポートレットはソース内と同じ順序で配置され、その後ターゲットのポートレット（カスタマイズ）が配置されます。
- 再使用モード: カスタマイズが保持され、ターゲット・ページは変更されません。

### 10.8.3 Web プロバイダの移行

ターゲット・システムにインポートする前に、トランスポート・セットが参照するすべてのプロバイダがターゲット・システム上にすでに存在するか、またはターゲット・システムへのインポート中に正しく登録できることが必要です。プロバイダの事前チェック・プロセスでは、同じ名前のプロバイダがターゲットにすでに存在しているかどうかを判断します。プロバイダが存在しない場合は、事前チェックでプロバイダが登録されます。

正しく登録するために、プロバイダがターゲット・システムで次の条件を満たすことを確認します。

- Web プロバイダを登録するために十分な権利を持っていることを確認します。
- インポートの処理中に、プロバイダへの接続を確保できることを確認します。または、インポート処理中に接続または利用できない可能性のあるプロバイダのポートレットを、エクスポート前にページから削除します。インポート後、ターゲット・システムで、これらをページに手動で追加して戻します。
- インポートまたはエクスポートの Portal インストールでプロキシを使用している場合は、インポート前にインポート先でプロキシが正しく構成されていることを確認してください。
- インポートの処理がスムーズに行われるように、ターゲット・システムでインポートを行う前にプロバイダを手動で登録することも検討します。

---



---

**注意：** インポート・プロセスを開始した後で中止すると、事前チェック・プロセスでプロバイダが登録されているため、ターゲット Portal に不明なプロバイダが残ることがあります。

---



---

- プロバイダを手動で登録する場合は、ソース・システム上の対応するプロバイダと同じ名前を付ける必要があります。

---



---

**注意：** 開発（ソース）と本稼働（ターゲット）のプロバイダに、別の URL を使用できます。ソース Portal サーバー上の開発用プロバイダと同じ名前を持ち、本稼働用プロバイダの適切な URL を指す本稼働用プロバイダを、ターゲット Portal サーバーで事前に登録します。プロバイダを参照するページがソースからターゲットにインポートされると、それらは開発用プロバイダではなく本稼働用プロバイダを指すようになります。

---



---

## 10.8.4 Portal DB プロバイダとコンポーネントの移行

Portal DB プロバイダおよびそれに関連付けられたコンポーネントは、この章で説明しているエクスポート / インポート・ユーティリティを使用して、開発環境から本稼働環境に移動できます。Portal DB プロバイダ全体だけでなく、Portal DB プロバイダ内の個々のコンポーネント（フォーム、レポート、チャート、カレンダーなど）をターゲット・システムに個別に移動することができます。これは、ターゲット・システムに Portal DB プロバイダ全体がすでにインポートされている場合にのみ可能です。

Portal DB プロバイダのコンポーネントの移行において考慮すべき事項と最善の実施例は次のとおりです。

- Portal DB プロバイダのコンポーネントまたはコンポーネントが参照するデータベース・オブジェクトを格納するために Portal スキーマを使用するのを避けます。
  - ソース環境で、Portal DB プロバイダのコンポーネントの別個のスキーマ（ポートレット・スキーマと呼ばれます）を作成します。これは、Portal DB プロバイダが作成されるときに登録情報で参照されるスキーマです。

詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) にあるドキュメント『Using the Portlet Builder』の「Creating a Schema in Portal AS」の項を参照してください。

- ソース環境で、コンポーネントが参照するデータベース・オブジェクトの別個のスキーマ（データベース・オブジェクト・スキーマと呼ばれます）を作成します。データベース・オブジェクトが特定のスキーマにすでに存在する場合は、Portal DB プロバイダの作成時にこのスキーマが参照されないことを確認します。これは、Portal DB プロバイダのコンポーネントの作成に使用されるデータベース・オブジェクト（テーブル、ビュー、プロシージャなど）を保持するスキーマです。たとえば、テーブル、ビューまたはプロシージャに基づくフォームを構築するときは、



そのテーブル、ビューまたはプロシージャがデータベース・オブジェクト・スキーマに格納されます。

- Portal DB プロバイダとそのコンポーネントをインポートする前に、コンポーネントが参照するデータベース・オブジェクト・スキーマがターゲット環境で利用できることを確認します。データベース・オブジェクト・スキーマは、ソース環境のものと同じ名前である必要があります。データベース・オブジェクトとデータベース・オブジェクト・スキーマが、ソース環境のものと同じ権限付与および権限を持っていることを確認します。また、すべてのデータベース・オブジェクトの状態が有効であることを確認します。データベース・オブジェクト・スキーマは、データベースのエクスポートまたはインポート・ユーティリティを使用してエクスポートまたはインポートできます。
- Portal DB プロバイダとそのコンポーネントをインポートする前に、ターゲット環境に、ソース環境と同じ名前で作成されたポートレット・スキーマを作成します。
- Portal DB プロバイダに、編集モードまたはアーカイブ・モードのコンポーネントが含まれていないことを確認します。インポート後にターゲット環境に有効なコンポーネントが含まれるようにするために、エクスポートする各コンポーネントには、1つの有効な本稼働バージョンのみが格納されている必要があります。
- ページ・グループに、Portal DB プロバイダからのポートレットが含まれている場合は、エクスポートするトランスポート・セット内にそのプロバイダを明示的に含める必要があります。かわりに、プロバイダをあらかじめエクスポートまたはインポートしておくこともできます。

## 10.8.5 検索コンポーネントの移行

ページに検索コンポーネントを追加する場合は、いくつかの選択肢があります。「検索」フィールドに入力された検索条件と照合するための簡単な基本検索、拡張検索、および自動実行される検索を作成するためのカスタム検索を追加できます。

### 10.8.5.1 「基本検索」および「拡張検索」ポートレット

「基本検索」ポートレットおよび「拡張検索」ポートレットは、エクスポートおよびインポートできます。インポート後、ポートレットは、ユーザー設定項目を含め、ソース Portal で表示されていたとおりに表示されます（ユーザー設定項目がインポートされた場合）。

### 10.8.5.2 「カスタム検索」ポートレット

「カスタム検索」ポートレットには、Portal の他のオブジェクトを参照する多数のカスタマイズ（検索するページ・グループ、検索する属性、送信フォームの図、結果のスタイル、結果のページ、結果の属性、カテゴリのデフォルト値、パースペクティブおよびアイテム・タイプの属性など）を定義できます。これらは依存性とみなすことができます。「カスタム検索」ポートレットがエクスポートおよびインポートされても、依存性は自動的にエクスポートおよびインポートされません。したがって、「カスタム検索」ポートレットがソース



でカスタマイズされているのにターゲットに依存性がないという状況になることもあります。

また、ソースの「カスタム検索」ポートレットがカスタマイズされており、その後、依存性が Portal から削除され、「カスタム検索」ポートレットのカスタマイズが更新されていないという状況も考えられます。このような場合、検索で「カスタム検索」ポートレットを使用すると、見つからない参照は無視されます。「カスタム検索」ポートレットが再度カスタマイズされ、カスタマイズが保存されると、見つからない参照は削除されます。

エクスポート時には、エクスポート用に選択されたすべての「カスタム検索」ポートレットがチェックされ、見つからない参照はすべて削除されます。その後、カスタマイズがトランスポート・セットに含まれます。

インポート時には、事前チェックによって、インポート後にターゲットで依存性が欠落していないかどうか判断されます。依存性が欠落している「カスタム検索」ポートレットでは、ログにメッセージが書き込まれます。ログには、「カスタム検索」ポートレットの参照パス、欠落している依存性、およびインポート時に何が発生したかが示されます。

「カスタム検索」ポートレットがあるページには、警告のフラグが設定されます。実際のインポートでは、ターゲット内の同じ依存性の ID がすべて正しくなるように「カスタム検索」ポートレットのカスタマイズが修正され、カスタマイズがターゲットにコピーされます。

---

---

**注意：**「保存された検索」ポートレットを使用して保存された検索結果は、インポートまたはエクスポートされません。新しいターゲットで同じ検索を送信し、検索結果の最新セットを保存する必要があります。

---

---

## 10.8.6 外部アプリケーションの移行

Portal エクスポート / インポートでは、Single Sign-On スキーマ (ORASSO) のデータは移行されません。ただし、移行される Portal ページには、ORASSO スキーマで定義された外部アプリケーションを参照している外部アプリケーション・ポートレットのインスタンス、およびそれらのアプリケーションのユーザー証明書が含まれている場合があります。

ページには、プロバイダと統合される外部アプリケーションを自動的に認証するために、関連する外部アプリケーションを含めるように定義されているプロバイダからのポートレットが含まれていることもあります。このような場合は、参照されている外部アプリケーションをプロバイダ情報とともに移行する必要があります。

外部アプリケーションの情報は、Portal エクスポート / インポート・ユーティリティによって外部の依存性として処理されます。オブジェクト・タイプの詳細は、[10.4.1 項「トランスポート・セットの作成」](#)を参照してください。外部アプリケーションを参照している Portal コンテンツを移行する場合は、インポート中に参照がターゲット Portal に存在していることが求められます。このため、ターゲット Portal へのインポートが完了する前に、参照されている可能性のある外部アプリケーションをすべて移行する必要があります。

Portal エクスポート / インポート・ユーティリティは、ソース Portal とターゲット Portal で外部アプリケーションの識別子が同じであるとは想定しません。

---

**注意：** Portal エクスポート / インポート・ユーティリティでは、ターゲット Portal の SSO Server の外部アプリケーションが、ソース Portal の SSO Server で定義されている外部アプリケーションと同じ名前であるかどうかを確認することにより、外部アプリケーションを照合します。

---

この名前による関連付けによって、ソース Portal とターゲット Portal の SSO Server 間で外部アプリケーションの定義を手動で同期化することもできます。

### 10.8.6.1 ユーザー数

ソース Portal とターゲット Portal でユーザー数が異なり、ssomig ユーティリティを使用して、外部アプリケーションの定義および証明書を手動で移行しない場合は、[10.8.6.2 項「SSO エクスポートおよびインポート・ユーティリティ」](#)を参照してください。

ソースとターゲットでユーザー数が同じ場合は、証明書を転送できます。ページはセキュリティを含めて移行する必要があります。セキュリティも設定も含めずにエクスポートすると、外部アプリケーションのポートレットは移行され、弱い関連付けが保たれますが、カスタマイズ内容は移行されません。詳細は、[表 10-12](#)を参照してください。

**表 10-12 データセット・オプション**

データセット・オプションの基準	外部アプリケーション・ポートレットの移行	外部アプリケーションの弱い統合	外部アプリケーションのカスタマイズ
セキュリティなし、設定なし	あり	あり	なし

表 10-12 データセット・オプション (続き)

データセット・オプションの基準	外部アプリケーション・ポートレットの移行	外部アプリケーションの弱い統合	外部アプリケーションのカスタマイズ
セキュリティあり、設定なし	あり	あり	あり
セキュリティあり、設定あり	あり	あり	あり

### 10.8.6.2 SSO エクスポートおよびインポート・ユーティリティ

ユーティリティ `ssomig` (Windows の `ssomig.bat`) では、Perl、Oracle SQL\*Plus、EXP および IMP ツールを使用して、リリース 9.0.4 の 2 つのサーバー間でデータを移行できます。エクスポートとインポートの 2 つの処理モードは、別々に実行する必要があります。

SSO エクスポート / インポート・ユーティリティ (`ssomig`) の詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』を参照してください。

## 10.8.7 データベース間での Portal の移行

OracleAS Portal インスタンス間で Portal インスタンス全体をコピーする場合は、Oracle データベースの EXP および IMP ユーティリティを使用できます。

---

**注意：** 次の手順で、`ORACLE_HOME` は、Oracle Application Server の Oracle ホームではなく、データベースの Oracle ホームを参照します。データベース・スクリプトを実行するときは、Portal がインポートされる実際のデータベース・インスタンスに対応する適切な Oracle ホームから正しいリリースが使用されることが重要です。

---

移行は次のような複数段階のプロセスです。

1. **OID からユーザーとグループを移行する。** 移行プロセスを開始する前に、OID からユーザーとグループを移行する必要があります。この手順は、ターゲット Portal で同じ OID サーバーを共有しない場合に必要です。詳細は、10.8.1 項「ユーザーおよびグループの移行」および『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。
2. **エクスポートされるスキーマのリストを表示する。** これは、エクスポートする必要があるすべてのスキーマ (Portal スキーマ、Portal パブリック・スキーマ、データベース・プロバイダまたはポートレット・ビルダー・コンポーネントで使用されるすべてのスキーマを含む) を特定するために必要です。すべてのスキーマのリストを表示するには、SQL\*Plus から Portal スキーマの所有者として次の問合せを実行します。

```
SELECT USERNAME, DEFAULT_TABLESPACE, TEMPORARY_TABLESPACE FROM DBA_USERS
WHERE USERNAME IN (user, user||'_PUBLIC', user||'_DEMO', user||'_APP')
OR USERNAME IN (SELECT DISTINCT OWNER
FROM WWAPP_APPLICATIONS$
WHERE NAME != 'WWW_SYSTEM');
```

---

---

**注意：** これは、Portal に登録されているデータベース・プロバイダまたはポートレット・ビルダー・コンポーネントに直接関連するスキーマのリストのみを表示します。他のスキーマのオブジェクトも参照しているスキーマがある場合は、エクスポートされるスキーマのリストにそれらを追加します。

---

---

3. ソース・データベースの表領域のリストを表示する。ソース・データベースで使用する表領域のリストを表示するには、SQL\*Plus から SYS ユーザーとして次の問合せを実行します。

```
SELECT DISTINCT TABLESPACE_NAME FROM DBA_SEGMENTS WHERE OWNER IN (<list of
schemas>)
UNION
SELECT DISTINCT DEFAULT_TABLESPACE FROM DBA_USERS WHERE USERNAME IN (<list of
schemas>)
UNION
SELECT DISTINCT TEMPORARY_TABLESPACE FROM DBA_USERS WHERE USERNAME IN (<list of
schemas>)
```

4. Oracle EXP ユーティリティを実行する。

```
EXP \'sys/<password of sys user>@<Connect String> as sysdba\'
FILE=portal.dmp OWNER=<List of Schemas> LOG=portal.log
```

エクスポートはエラーなしで終了する必要があります。この手順でなんらかのORA- 00942 エラーが発生した場合は、SQL\*Plus から SYS ユーザーとして次のスクリプトを実行します。

```
ORACLE_HOME/rdbms/admin/catexp.sql
```

---

---

**注意：** UNIX と NT プラットフォームの構文は、\'\' を省略する点が異なります。たとえば、  
'sys/<password of sys user>@<Connect String> as sysdba  
のようにします。

---

---

5. ターゲット・データベースのバックアップを作成する。次の手順に進む前に、ターゲット・データベースをバックアップします。
6. インポート用のターゲット・データベースを準備する。Portal スキーマをターゲット・データベースへインポートする前に、前提条件のパッケージがインストールされていることを確認する必要があります。

---



---

**注意：** ターゲット・データベースは、Oracle Application Server Metadata Repository のデータベースと同じ最低条件を満たしている必要があります。

---



---

- PTLASST を SYSOBJECTS モードで実行します。
- `ORACLE_HOME/rdbms/admin/catldap.sql` を実行します。
- `ORACLE_HOME/rdbms/admin/utlrlp.sql` を実行して、無効なオブジェクトをすべて再コンパイルします。
- Portal のログイン・トリガーをインポート用に初期化します。SYS として実行します。
- `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost/instttrig.sql` SYS

7. ターゲット・データベースの表領域を作成または変更する。ターゲット・データベースに、必要な表領域が存在しているかどうか確認します。ターゲット・データベースの表領域は、ソースの表領域と同じ名前である必要があります。

- 手順 2 で特定した表領域のリストがターゲット・データベースに存在することを確認します。ターゲットですべての表領域のリストを表示するには、SQL\*Plus から SYS ユーザーとして次のスクリプトを実行します。

```
SELECT TABLESPACE_NAME FROM DBA_TABLESPACES;
```

- 新しい表領域を作成するには、CREATE TABLESPACE または CREATE TEMPORARY TABLESPACE コマンドを使用します。たとえば、次のようになります。

```
CREATE TABLESPACE <tablespace_name>
DATAFILE '<datafile_location>' SIZE 20M
DEFAULT STORAGE (INITIAL 1M NEXT 2M MINEXTENTS 2) AUTOEXTEND ON;
```

<datafile\_location> は、dbf ファイルの場所です。UNIX の場合、場所は /u02/oracle/data/tbsa01.dbf のようになります。

ターゲット・データベースにすでに存在しているすべての表領域を、autoextend に設定するか、またはインポートする Portal スキーマを保持できるよう十分なサイズに設定することをお勧めします。すべてのデータ・ファイルで autoextend を有効にするには、次のスクリプトを使用します。

```
SET DEF1 OFF
SPOOL DATAFILES.SQL
SELECT 'ALTER DATABASE DATAFILE '''||FILE_NAME||''' AUTOEXTEND ON;'
FROM DBA_DATA_FILES ;
SPOOL OFF
@DATAFILES.SQL
```

- 8. Portal スキーマを作成する。** *ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wwv* ディレクトリに移動して、SQL\*Plus から SYS ユーザーとして次のスクリプトを実行します。

```
@wdbisys.sql <Portal Schema> <Portal Default Tablespace> <Portal Temporary Tablespace> WDBISYS.LOG
```

これによって Portal スキーマが作成され、必要なすべての権限が付与されます。手順 1 の問合せの結果を使用して、Portal スキーマのデフォルト表領域および一時表領域の名前を検索します。

- 9. portal\_public スキーマを作成する。** *ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wws* ディレクトリに移動して、SYS ユーザーとして次のスクリプトを実行します。

```
@cruser.sql <Portal Schema> <Portal Default Tablespace> <Portal Temporary Tablespace>
```

これにより、PORTAL\_PUBLIC スキーマが作成されます。

- 10. スキーマのプレースホルダを作成する。** 手順 1 からインポートされるスキーマのリストを確認します。スキーマがすでにターゲット・データベースに存在する場合は、それを削除しておくことをお勧めします。スキーマを削除する前に、それらのスキーマが他のアプリケーションで使用されていないことを確認します。新しいユーザーを作成するには、次の構文を使用します。

```
GRANT CONNECT, RESOURCE TO <user> IDENTIFIED BY <password>;
```

手順 1 のリスト内の各ユーザーに対して 1 人のユーザーを作成します。必要に応じて、ALTER USER コマンドを使用してユーザー数を調整します。たとえば、デフォルト表領域および一時表領域は、手順 1 の問合せの結果で指定されているものに設定する必要があります。

- 11. Oracle IMP ユーティリティを実行する。**

```
IMP \'sys/<password of sys user>@<Connect String> as sysdba\' FROMUSER=<LIST OF SCHEMAS> TOUSER=<LIST OF SCHEMAS> FILE=PORTAL.DMP LOG=PORTAL_IMP.LOG
```

次のインポート・エラーは予測できるものであるため、無視してもかまいません。

IMP-00041: 警告 : オブジェクト作成の際、コンパイル・エラーが発生しました。

- 12. 無効なオブジェクトをすべてコンパイルする。** インポートされたすべてのスキーマで、無効なオブジェクトをすべてコンパイルします。SYS ユーザーとして *ORACLE\_HOME/rdbms/admin/utlrp.sql* を実行します。

- 13. 一時ログイン・トリガーを削除する。** *ORACLE\_HOME/portal/plsql/admin/wwhost* ディレクトリに移動して、SQL\*Plus から SYS ユーザーとして次のスクリプトを実行します。

```
@droptrig.sql.
```

14. Portal からの接続を許可する。SQL\*Plus から Portal ユーザーとして次のコマンドを実行します。

```
SET HEAD OFF
SET LINES 4000
SPOOL DBUSERS.SQL
SELECT DISTINCT 'ALTER USER '||DB_USER ||' GRANT CONNECT THROUGH '|| WWCTX_
API.GET_PRODUCT_SCHEMA||';'
FROM WWSEC_PERSON$;
SPOOL OFF
```

ターゲット Portal インスタンスで DBUSERS.SQL を実行し、Portal ユーザーに関連付けられたデータベース・ユーザーへの権限によって接続を許可します。





---

---

## OracleAS Portal へのコンテンツのシンジケート

外部のコンテンツ・ソースは、シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットを使用して Portal 管理者がシンジケートしたチャンネル（サブスクリプション）として、Oracle Application Server Syndication Services によって OracleAS Portal へシンジケートされます。シンジケーション・チャンネルとは、シンジケーションのオファーを使用して構成されたコンテンツをサブスクライブし、Oracle Application Server Metadata Repository 内の Portal フォルダに配信するための手段です。（この場合のフォルダとは、タイプ・アイテムのデフォルト領域を含む Portal ページのことです。）チャンネルが確立された後は、その後の管理ブールまたは自動プッシュの操作を通じて受信された更新内容によって、宛先の Portal フォルダとオファー・コンテンツとの同期が保たれます。Portal 管理者は、シンジケートされたコンテンツを含む Portal フォルダへのアクセス権をページ設計者に与えることができます。

この章の内容：

- [シンジケーション・ポートレット・プロバイダの登録](#)
- [コンテンツ・シンジケーションのための Portal の構成](#)
- [シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットの使用](#)
- [拡張構成パラメータ](#)
- [シンジケーション・チャンネルの管理のエラー・メッセージ](#)

シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットを使用して、Portal 管理者は次のタスクを実行できます。

- オファーのリストから選択したサブスクライブするコンテンツ用の新しいシンジケーション・チャンネルを作成します。
- 既存のシンジケーション・チャンネルのプロパティを編集します。
- シンジケーション・チャンネルを削除します。
- シンジケーション・チャンネルを通じて利用可能なコンテンツの完全更新を行います。
- 特定のシンジケーション・チャンネルの更新リストを表示します。

- 
- 特定のシンジケーション・チャンネルに対する単一の更新イベントのサマリー・レポートを表示します。

シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットを作成する前に、**Oracle Enterprise Manager Syndication Services** の管理ページを使用してコンテンツ・プロバイダのオファーを作成しておく必要があります。詳細は、『**Oracle Application Server Syndication Services 開発者および管理者ガイド**』を参照してください。

## 11.1 シンジケーション・ポートレット・プロバイダの登録

Oracle Application Server にはいくつかのプロバイダ・グループが付属しており、その中の 1 つがシンジケーション・ポートレット・プロバイダです。シンジケーション・チャネルの管理ポートレットを使用するには、シンジケーション・ポートレット・プロバイダが登録されている必要があります。

シンジケーション・ポートレット・プロバイダを登録するには、次の手順を実行します。

1. 管理者として OracleAS Portal にログインします。
2. Portal の「ナビゲータ」に移動します。
3. 「プロバイダ」タブを選択します。
4. 「プロバイダ・グループ」へ移動し、その後「OracleAS Providers」へ移動します。
5. Syndication Services Web プロバイダの「登録」をクリックします。

## 11.2 コンテンツ・シンジケーションのための Portal の構成

次の項で、シンジケーション・チャネルの管理ページの作成方法および宛先フォルダへの Portal 権限の設定方法を説明します。

### 11.2.1 シンジケーション・チャネルの管理ホーム・ページの作成

シンジケーション・チャネルの管理ホーム・ページを作成するには、次の手順を実行します。

1. 新しいページを作成するか、シンジケーション・チャネルの管理ポートレットをインストールするページを決定します。

---

---

**注意：** Portal インストールごとに、1 つのシンジケーション・チャネルの管理ポートレット・インスタンスのみが使用できます。

---

---

2. 管理者として、選択したページを編集し、ポートレット・リポジトリ内でシンジケーション・プロバイダを参照して、シンジケーション・チャネルの管理ポートレットを希望する領域へ追加します（詳細は、[11.1 項](#)を参照）。

## 11.2.2 宛先フォルダへの Portal 権限の設定

シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットを使用して作成されたチャンネルを通じて、外部ソースから Portal ページへ、シンジケートされたコンテンツが転送されます。そのためには、チャンネル・アプリケーションの Portal ユーザーになんらかの権限を与える必要があります。管理者として、チャンネルで使用される宛先ページまたはページ・グループのシンジケーション・チャンネルの管理ポートレットのユーザーに、「すべて管理」の権限を追加する必要があります（11.3 項「シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットの使用」の手順 1 を参照）。

## 11.3 シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットの使用

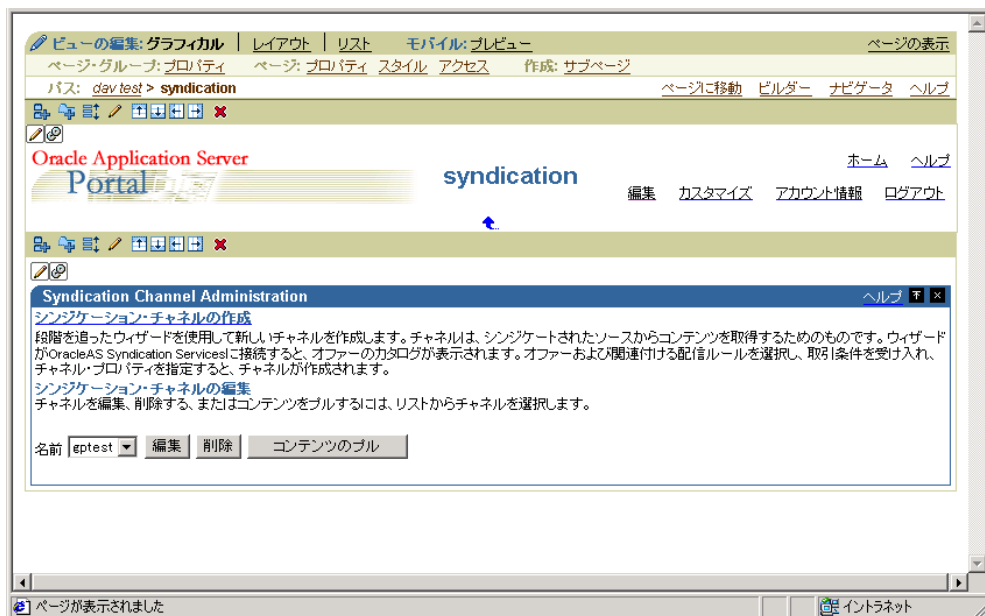
シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットにアクセスして使用するには、次の手順を実行します。

1. シンジケーション・チャンネルの管理ホーム・ページへ移動します。

次に示すシンジケーション・チャンネルの管理ホーム・ページで、次のタスクを実行できます。

- シンジケーション・チャンネルの管理ポートレット用のユーザー設定値の設定（「デフォルトの編集」アイコンをクリック）
- シンジケーション・チャンネルの作成（「シンジケーション・チャンネルの作成」をクリック）
- 既存のシンジケーション・チャンネルのプロパティの編集（表示されるリストからチャンネルを選択し、「編集」をクリック）
- シンジケーション・チャンネルの削除（表示されるリストからチャンネルを選択し、「削除」をクリック）
- 指定したシンジケーション・チャンネルのコンテンツの即時取得（増分更新）（表示されるリストからチャンネルを選択し、「コンテンツのプル」をクリック）

図 11-1 シンジケーション・チャンネルの管理ホーム・ページ



2. ユーザー設定値を設定するには、「デフォルトの編集」アイコンをクリックします。次のように、シンジケーション・チャンネルの管理の構成ページが表示されます。

図 11-2 シンジケーション・チャンネルの管理の構成ページ（上半分）

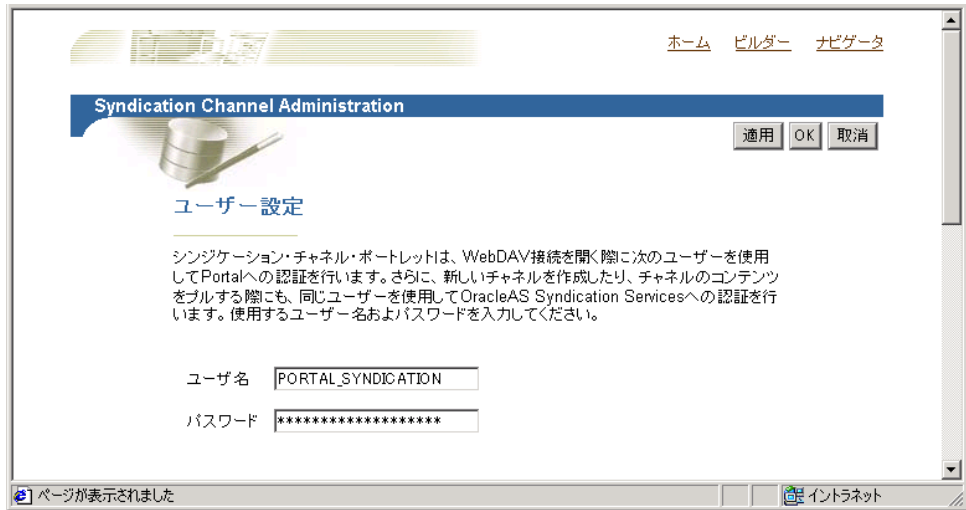
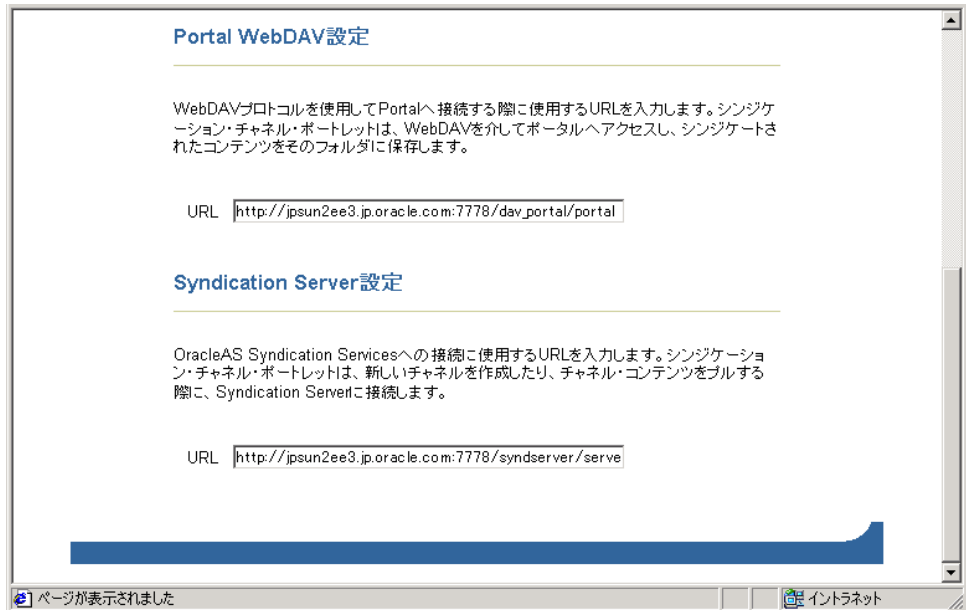


図 11-3 シンジケーション・チャンネルの管理の構成ページ（下半分）



このページで、次の手順を実行します。

- 「ユーザー設定」セクションで、WebDAV 接続を開くときに Portal への認証を行うユーザー名とパスワードを指定することができます。新しいチャネルを作成するとき、またはチャネルのコンテンツをプルするときに、このポータルレットでは同じユーザー名を使用して OracleAS Syndication Services への認証を行います。
- 「Portal WebDAV 設定」セクションでは、WebDAV プロトコルを使用して Portal に接続するために使用される URL を指定できます。
- 「Syndication Server 設定」セクションでは、新しいチャネルを作成するとき、またはチャネルのコンテンツをプルするときに OracleAS Syndication Services に接続するために使用される URL を指定できます。
  - WebDAV 接続を開くときに Portal への認証を行うユーザー名とパスワードを入力します。
  - WebDAV プロトコルを使用して Portal に接続するために使用される URL を入力します。
  - 新しいチャネルを作成するとき、またはチャネルのコンテンツをプルするときに OracleAS Syndication Services に接続するために使用される URL を入力します。
  - 入力した後に「OK」をクリックし、この情報を保存します。シンジケーション・チャネルの管理ホーム・ページが再び表示されます。

3. 新しいシンジケーション・チャネルを作成するには、「シンジケーション・チャネルの作成」をクリックして、5つの手順からなるシンジケーション・チャネルの作成ウィザードを起動します。

このウィザードの最初の手順で、「オファー」ページが表示されます。

---

**注意：** シンジケーション・チャネルの作成ウィザードのページ内を移動したり、シンジケーション・チャネルの管理ポータルレットに戻ったりする際には、このウィザードの「戻る」、「次へ」、「取消」、「完了」または「ホーム」ボタンのみを使用してください。ウィザード内の移動には、Web ブラウザの「進む」ボタンや「戻る」ボタンなどを使用しないでください。このようなボタンを使用すると、ウィザードのセッションの状態が検証されず、次の送信操作で内部エラーが発生します。

---

- a. 次に示す「オファー」ページで、ラジオ・ボタンをクリックして利用可能なオファーの1つを選択し、「次へ」をクリックして次の手順へ進みます。

図 11-4 シンジケーション・チャンネルの管理のオファー・ページ（上半分）



- b. 次に示す「取引条件」ページの「取引条件への同意」セクション内で、選択したオファーの取引条件を検討します。

取引条件に同意できる場合は、「内容を読んだ上、同意します」ラジオ・ボタンをクリックし、「次へ」をクリックして次の手順へ進みます。取引条件に同意できない場合は、「戻る」をクリックして「オファー」ページに戻り、取引条件に同意できる別のオファーを探します。



図 11-5 シンジケーション・チャネルの管理の取引条件ページ



- c. 「配信ルール」ページの「有効期限ポリシー」セクションに、有効期限の優先順位と有効期限日の情報が表示されます。「プル」および「プッシュ」セクションで、このオファーを配信するために OracleAS Syndication Services が使用するプルまたはプッシュあるいはその両方の配信ルールのチェック・ボックスをクリックして選択し、「次へ」をクリックして次の段階へ進みます。

図 11-6 シンジケーション・チャンネルの管理の配信ルール・ページ（上半分）



図 11-7 シンジケーション・チャンネルの管理の配信ルール・ページ（下半分）

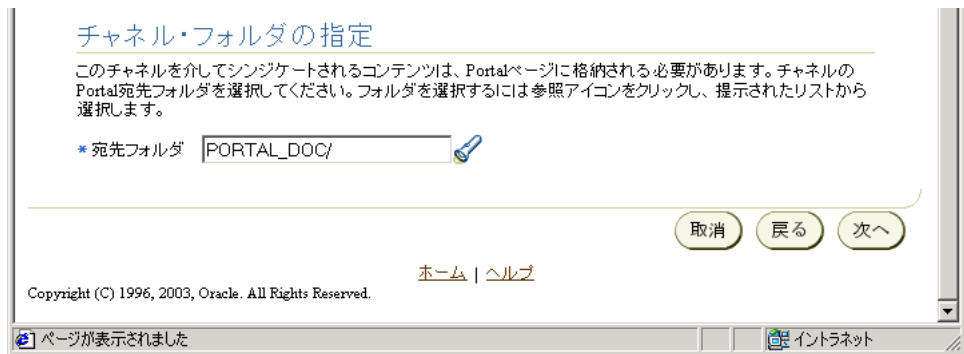


- d. 「チャンネル・プロパティ」ページの「チャンネル・プロパティの指定」セクションで、「名前」フィールドと「説明」フィールドにシンジケーション・チャンネルの名前と説明を入力し、シンジケーション・チャンネルのプロパティを指定します。次に、「チャンネル・フォルダの指定」セクションの「宛先フォルダ」フィールドに、宛先となる Portal フォルダの名前を指定するか、懐中電灯のアイコンをクリックして、目的の Portal フォルダを参照して選択し、その後「次へ」をクリックして次の手順へ進みます。

図 11-8 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル・プロパティ・ページ（上半分）



図 11-9 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル・プロパティ・ページ（下半分）



- e. 「チャンネル・サマリー」 ページで、チャンネル情報を見直し、確認します。情報が正しい場合は「完了」をクリックして、シンジケーション・チャンネルの作成プロセスを終わります。シンジケーション・チャンネルの管理ホーム・ページが再び表示され、シンジケーション・チャンネルの管理ポータルレットの一番下にあるドロップダウン・リストに、新しく作成されたチャンネルが表示されます。

情報が正しくない場合は「戻る」をクリックして該当するシンジケーション・チャンネルの作成ページまで戻り、そこで必要な変更を行った後、「次へ」をクリックしてこの「チャンネル・サマリー」ページに戻って、シンジケーション・チャンネルの情報サマリーを再び確認します。

図 11-10 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル・サマリー・ページ（上半分）



図 11-11 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル・サマリー・ページ（下半分）



4. シンジケーション・チャンネルの管理ホーム・ページで既存のシンジケーション・チャンネルのプロパティを編集するには、「プロパティ」タブをクリックして、「チャンネルの編集：<チャンネル名>」ページを表示します。

「チャンネル・プロパティ」セクションで、シンジケーション・チャンネルの名前と説明を編集することができます。「宛先フォルダ」セクションで、宛先フォルダとして別の

Portal の宛先フォルダを選択できます。変更が必要ない場合は「取消」をクリックし、変更が必要な場合は変更を行ってから「OK」をクリックします。

図 11-12 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル・プロパティ編集ページ（上半分）

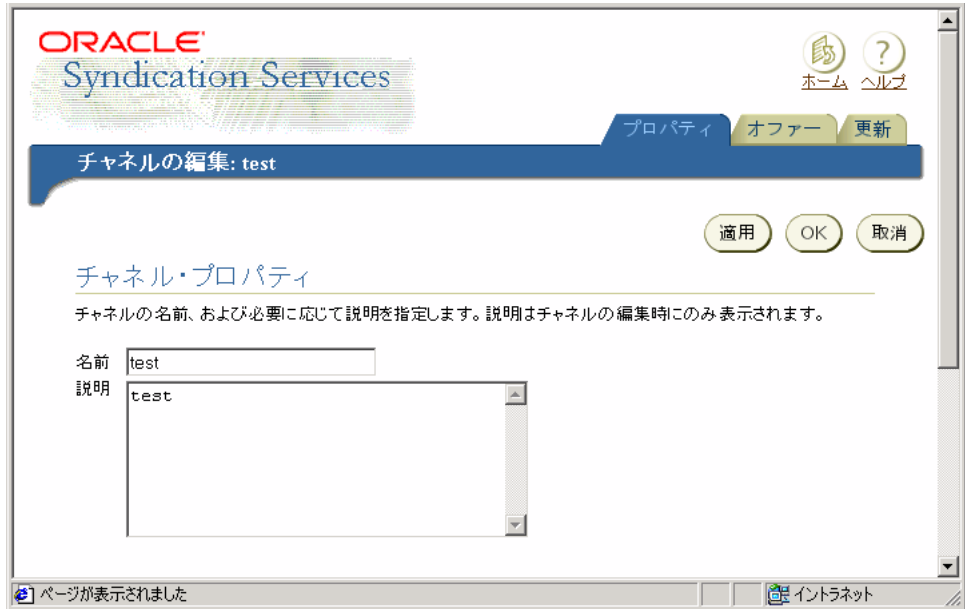
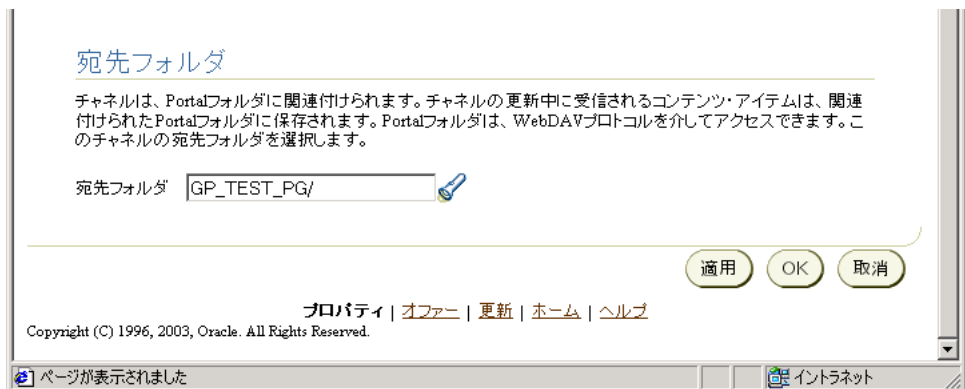


図 11-13 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル・プロパティ編集ページ（下半分）



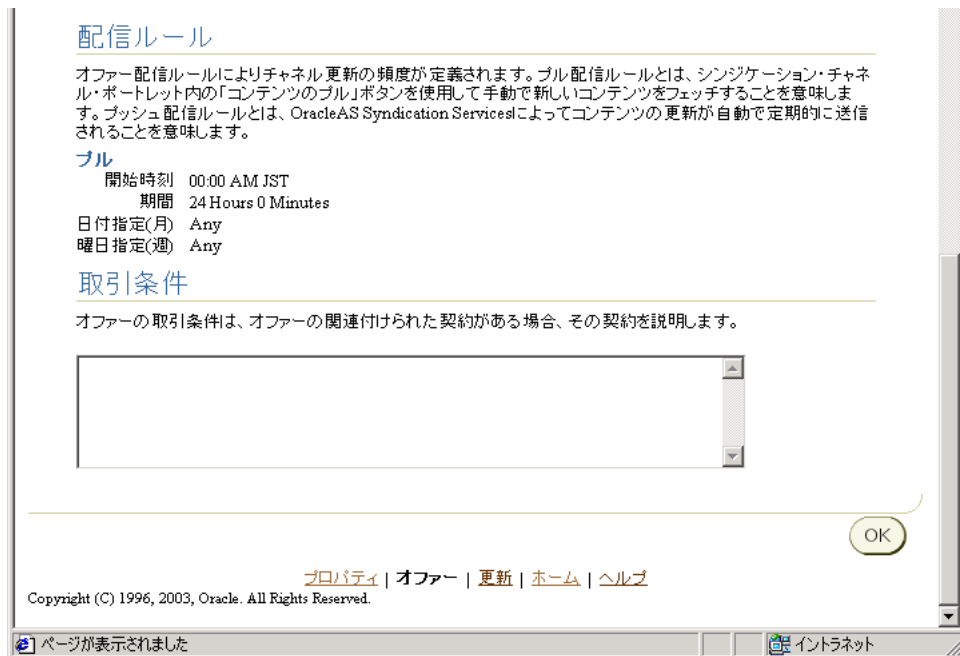
5. シンジケーション・チャネルの管理ホーム・ページでオファーの詳細を表示するには、「オファー」タブをクリックして、「チャネルの編集:<チャネル名>」ページを表示します。

「チャネルの編集:<チャネル名>」ページには、「オファーの詳細」セクション、「配信ルール」セクションおよび「取引条件」セクションがあります。このシンジケーション・チャネルを使用して構成されたオファーのプロパティのサマリーを確認します。サブスクリプション ID は、サブスクリプションの作成時に割り当てられる一意の識別子です。Oracle Enterprise Manager Syndication Services の「管理」から「サブスクリプション」ページに移動して、サブスクリプション ID とサブスクリプション・リストの相互参照を行うことができます。確認が完了したら、「OK」をクリックします。

図 11-14 シンジケーション・チャネルの管理のオファーの詳細編集ページ（上半分）



図 11-15 シンジケーション・チャンネルの管理のオファーの詳細編集ページ（下半分）



6. シンジケーション・チャンネルの管理ホーム・ページでこのシンジケーション・チャンネルに対するチャンネルの完全更新情報を表示するには、「更新」タブをクリックして、次に示す「チャンネルの編集:<チャンネル名>」ページを表示します。このページには、「チャンネル更新ログ」セクションと「完全チャンネル更新」セクションが表示されます。



図 11-16 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル更新ログ編集ページ

ORACLE  
Syndication Services

ホーム ヘルプ

プロパティ オファー 更新

チャンネルの編集: test

OK

### チャンネル更新ログ

次の表は、このチャンネルで実行された更新のリストです。

更新レポートを選択します... 詳細の表示 確認の送信 レポートの消去

選択	日付	応答コード	フォルダ	確認
<input checked="" type="radio"/>	2003-12-02 17:44:35 JST	OK	GP_TEST_PG/	不要

すべてのレポートの消去

### 完全チャンネル更新

コンテンツのPULLおよびPUSHは、最終の配信以降に変更されたすべてのコンテンツ・アイテムをシンジケートして、増分更新を行います。「すべて更新」をクリックすると、増分だけでなく、使用可能なすべてのコンテンツのプルをリクエストできます。この機能により、ローカル・リポジトリの状態を復元し、リモート・サーバーで使用可能なコンテンツと同期させることができます。

完全更新の実行

OK

ページが表示されました

イントラネット

- このシンジケーション・チャンネルに実行された更新のリストを表示するには、「チャンネル更新ログ」セクションに表示される実行済の更新のリストを参照します。
- このシンジケーション・チャンネルを通じて利用可能なコンテンツの完全なシンジケーション・チャンネルの更新を実行する場合は、「完全更新の実行」をクリックします。

---

---

**注意：** Syndication Services には、削除されたアイテムの伝播に関する既知の問題があります。コンテンツ・プロバイダがコンテンツ・コネクタを使用して登録されているときに、削除されたアイテムをそのコンテンツ・コネクタが検出できない場合には、コンテンツ・ソースのアイテムが削除されたことをサブスクライバが認識できないため、そのようなアイテムはサブスクライバ・サイトにそのまま残ることになります。詳細は、『Oracle Application Server Syndication Services 開発者および管理者ガイド』の構築されたコンテンツ・パッケージに関する項を参照してください。

2 番目の既知の問題として、宛先フォルダでソースにまだ存在しているアイテムを削除すると、そのアイテムは通常のプルまたはプッシュ操作を実行しても、再作成されないという問題があります。そのアイテムを宛先フォルダ内に作成するには、「完全更新の実行」操作が必要になります。

3 番目の既知の問題として、OracleAS Portal を (WebDAV コンテンツ・コネクタを使用して Portal ページ上に構成された) コンテンツ・プロバイダのコンテンツ・ソースとして使用すると、Portal のアイテム属性が保持されないという問題があります。たとえば、アイテム・レベルのセキュリティ情報、アイテムのバージョン管理、有効期限の変更、時間の削除およびアイテムの非表示は、プル操作を実行しても変わりません。

---

---

- c. 更新内容が正常に配信されたことを確認するには、レポートを選択して「確認の送信」をクリックします。更新内容が確認されると、「確認」の状態が「確認されました」に変更されます。「確認」の状態が「不要」の場合は、確認の送信操作は不要であり、無視されます。確認が必要なパッケージの配信にエラーが発生した場合は、レポートによってエラーの説明が報告されます。コードが Error の更新レポートに対して確認の送信を行うと、更新は確認されないままで、状態もそのままになります。つまり、パッケージの受信にエラーがあったので、次のパッケージの配信で同じ更新内容が再び送信されることになります。
- d. 特定の更新レポートの詳細を表示するには、対応するラジオ・ボタンを選択し、「詳細の表示」をクリックします。次に示す「チャンネルの更新:<チャンネル名>」ページが表示されます。このページの上半分は「更新のサマリー」セクション、下半分は「更新の詳細」セクションになっています。このページの内容を確認しているときに、「レポート・リストに戻る」をクリックすると、「チャンネルの編集:<チャンネル名>」の更新ページに戻ります。

更新レポートは、「レポートの消去」をクリックすると一度に1つずつ消去できます。「すべてのレポートの消去」をクリックすると、すべてのレポートが消去されます。

---

---

**注意：** レポートの削除は、そのレポートに関連する確認が保留中でない場合にのみ可能です。

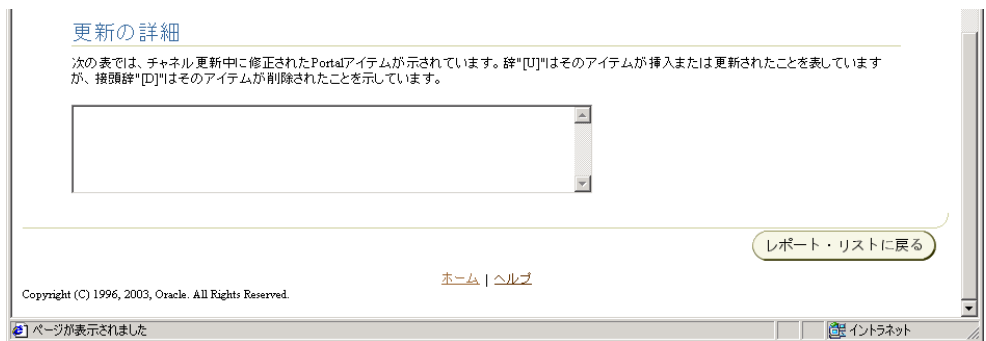
---

---

図 11-17 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル更新編集のサマリー詳細表示ページ（上半分）



図 11-18 シンジケーション・チャンネルの管理のチャンネル更新編集のサマリー詳細表示ページ（下半分）



これらが、Portal 管理者がシンジケーション・チャンネルの管理ポータルレットを使用して実行できるタスクのすべてです。

## 11.4 拡張構成パラメータ

この項では、OracleAS Syndication Services や Portal 分散オーサリングおよびバージョン管理 (DAV) のエントリ・ポイントとのチャンネル通信で、SSL (Secure Socket Layer) 暗号化をサポートするために使用できる、拡張構成パラメータについて説明します。

表 11-1 に、初期化パラメータ (<init-params>) を示します。これらのパラメータは、チャンネルの Web アプリケーションの web.xml ファイル (UNIX の場合は syndprovider アプリケーション内の channel/WEB-INF/web.xml、Windows の場合は syndprovider アプリケーション内の channel\WEB-INF\web.xml) に設定できます。「パラメータ」の値は、<param-name> の値です。

表 11-1 初期化パラメータ

パラメータ	説明	サンプル値
oracle.syndicate.ui.provider.ProviderSyndDelegator.walletLocation	DAV エントリ・ポイントまたは OracleAS Syndication Services への HTTPS 接続を確立するためのすべての SSL 証明書が含まれたファイルの場所を指定します。	/tmp/mycert.db (UNIX) または \tmp\mycert.db (Windows)
oracle.syndicate.ui.provider.ProviderSyndDelegator.davPoolSize	DAV コンテキスト・プールのサイズを指定します。	5
oracle.syndicate.ui.provider.ProviderSyndDelegator.syncPoolSize	シンジケーション接続プールのサイズを指定します。	5
oracle.syndicate.ui.provider.ProviderSyndDelegator.timeout	シンジケーション・プロバイダによって OracleAS Syndication Services へ送信される要求のタイムアウトをミリ秒単位で指定します。また、シンジケーション・プロバイダがコンテンツを Portal コンテンツ・リポジトリに書き出すときのタイムアウトも制御します。	60000

表 11-2 に、コンテンツのプッシュ配信を着信する役割のあるリスナー Web アプリケーション用の web.xml ファイル (UNIX の場合は syndprovider アプリケーション内の listener/WEB-INF/web.xml、Windows の場合は syndprovider アプリケーション内の listener\WEB-INF\web.xml) に設定できるパラメータを示します。「パラメータ」の値は、<param-name> の値です。

表 11-2 リスナー Web アプリケーションのパラメータ

パラメータ	説明	サンプル値
<code>oracle.syndicate.ui.provider.ProviderSyndRequestHandler.walletLocation</code>	DAV エントリ・ポイントへ接続するために使用されるすべての SSL 証明書が含まれたファイルの場所を指定します。	<code>/tmp/mycert.db</code> (UNIX) または <code>¥tmp¥mycert.db</code> (Windows)
<code>oracle.syndicate.ui.provider.ProviderSyndRequestHandler.davPoolSize</code>	DAV コンテキスト・プールのサイズを指定します。	5
<code>oracle.syndicate.ui.provider.ProviderSyndRequestHandler.timeout</code>	シンジケーション・プロバイダによる Portal コンテンツ・リポジトリへのアクセスを制御するタイムアウトをミリ秒単位で指定します。	60000

## 11.5 シンジケーション・チャネルの管理のエラー・メッセージ

参照：『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』



---

## 連携型 Portal アダプタの使用

この章では、PL/SQL HTTP アダプタとして知られている連携型 Portal アダプタについて説明します。このアダプタを使用して、他の OracleAS Portal インスタンスとポートレットを共有する方法についても説明しています。

この章の内容：

- [連携型 Portal アダプタについて](#)
- [連携型 Portal アダプタを使用する環境の設定](#)
- [連携型 Portal アダプタを使用したプロバイダの登録](#)
- [連携型 Portal アダプタを使用したカスタム・ポートレットの作成](#)
- [連携型 Portal アダプタのトラブルシューティング](#)

## 12.1 連携型 Portal アダプタについて

この項の内容：

- [概要](#)
- [データベース・プロバイダと Web プロバイダの違い](#)
- [連携型 Portal アダプタの使用](#)
- [セキュリティの問題](#)
- [連携型 Portal アダプタに関連するポートレットの変更](#)

### 12.1.1 概要

連携型 Portal アダプタは、OracleAS Portal のコンポーネントで、OracleAS Portal インスタンスが Web ポートレット・インタフェースを介してデータベース・ポートレットを共有できるようにするために使用します。これは、SOAP および HTTP を使用してデータベース・プロバイダを複数のデータベース・サーバーに分散するツールです。連携型 Portal アダプタを使用すると、Web プロバイダと同様にデータベース・プロバイダにアクセスできます。

以前のリリースの Oracle Portal では、Portal インスタンスからアクセスされるすべてのデータベース・プロバイダは、Portal インスタンスを格納する同じ物理データベース・サーバー上に存在する必要がありました。

Oracle Portal リリース 3.0.9 で、データベース・ポートレットを複数のデータベース・サーバーに分散できるようになりました。これを実現するには、ユーザーは各 Portal ノードを相互に登録して、ノード間のデータベース・リンクを作成する必要がありました。これらの Portal ノードはファイアウォールを越えて機能しませんでした。さらに、Portal ノードの登録は対称型で、複数ノードの登録の管理が困難でした。

Portal には、Web プロバイダの概念が取り込まれています。つまり、Portal とプロバイダ間の通信は、オープン・プロトコル HTTP と SOAP を使用して行われます。PDK-Java サービスにより、ユーザーは、SOAP メッセージを受信してそれに応答するプロバイダを Java で簡単に開発できます。

連携型 Portal アダプタは、Portal インスタンスに（Java と PL/SQL の両方で）書き込まれるモジュールで、Web プロバイダの SOAP メッセージを受信し、SOAP を解析して、メッセージを PL/SQL プロシージャ・コールとしてデータベース・プロバイダに送信します。つまり、連携型 Portal アダプタによってデータベース・プロバイダは Web プロバイダとまったく同じように機能します。これにより、ユーザーはデータベース・プロバイダを複数のデータベース・サーバーに分散できます。すべてのリモート・プロバイダは、Web プロバイダとして利用できます。ユーザーはリモート・プロバイダの実装を意識する必要がなく、分散型 Portal インストールを効果的に置き換えることができます。



## 12.1.2 データベース・プロバイダと Web プロバイダの違い

データベース・プロバイダと Web プロバイダの最も大きな違いは、標準的なデータベース・プロバイダでは、コード内の Portal セッションを使用し、Portal セッションが連携型 Portal アダプタの一部としてリモート Portal インスタンス上に作成されることです。SOAP メッセージは、リモート Portal インスタンス上にセッションを作成するために必要な情報を格納できるように拡張されます。つまり、リモート Portal のユーザーは、ローカル Portal と同じユーザーである必要があります。たとえば、ユーザー A が Portal A で実行中で、連携型 Portal アダプタを介して Portal B のプロバイダを使用している場合は、ユーザー A のセッションが Portal B に作成されます。通常、これは Portal A と Portal B がパートナ・アプリケーションと同じ Oracle Application Server Single Sign-On を共有することを意味します。ただし、別個の OracleAS Single Sign-On を使用して、各 OracleAS Single Sign-On が同じネーム・サーバーを共有することもできます。たとえば、2 台の OracleAS Single Sign-On が同じ Oracle Internet Directory インスタンスを共有します。

## 12.1.3 連携型 Portal アダプタの使用

連携型 Portal アダプタの使用は、次の 3 つのカテゴリに分類できます。

**表 12-1 連携型 Portal アダプタの使用**

カテゴリ	説明
OracleAS Portal データベース・プロバイダ	OracleAS Portal 内に作成される Portal データベース・プロバイダには、連携型 Portal アダプタの使用に必要なコードが含まれます。つまり、フォーム、チャート、レポートなどを含むアプリケーションを他の Portal インスタンスで表示できます。
ページ	ポートレットとして公開されるページは、連携型 Portal アダプタを通じて実行することもできます。ページ内の領域には、ポートレットまたはアイテムを含めることができます。連携型 Portal アダプタを使用すると、どの Portal インスタンスからでもこれらのページにアクセスできます。
ユーザーが作成したプロバイダ	ユーザーが独自の PL/SQL プロバイダを作成する必要がある場合があります。この章で説明するガイドラインに従ってコード化されている場合は、連携型 Portal アダプタを使用してこれらのプロバイダを公開できます。

## 12.1.4 セキュリティの問題

連携型 Portal アダプタは、initSession SOAP メッセージに渡された情報に基づいて、リモート Portal に Portal セッションを作成します。これにより、セキュリティの問題が生じます。これらの SOAP メッセージをレプリケートし、Portal 上の任意のユーザーに対してセッションを作成すれば、そのユーザーとして Portal にアクセスできるためです。この問題を回避するため、2つの Portal 間で暗号鍵が共有され、SOAP メッセージの一部はその鍵を使用して暗号化されます。要求されたプライベート Portal セッションは、すでに共有されている鍵で復号化できる場合にのみ作成されます。それ以外の場合は、PUBLIC セッションが作成されます。ポートレットの表示要求は、Show メッセージによって行われます。このメッセージは、initSession SOAP メッセージによって作成される暗号化 Cookie によって保護されます。暗号鍵を使用することにより、連携型 Portal アダプタは安全に着信 SOAP メッセージを信頼でき、Portal がハッカーに公開されることなく Portal インスタンスに Portal セッションを作成できます。

**関連項目：** [12.2.2 項「HMAC を使用した連携型 Portal アダプタ・ユーザー認証」](#)

他の Portal インスタンスからその Portal インスタンスへのアクセスが、連携型 Portal アダプタを介したアクセスのみであることがわかっている場合は、既知の Portal インスタンス以外のマシンからのアクセスを制限するようにリスナーを構成することにより、セキュリティを強化することができます。これは、httpd.conf ファイルの Allow ディレクティブを使用して設定します。

## 12.1.5 連携型 Portal アダプタに関連するポートレットの変更

次の条件に該当する場合、Oracle Application Server がリリースされる前に作成されたデータベース・プロバイダは、連携型 Portal アダプタを使用してアクセスする際に機能しないことに注意してください。

- ポートレットに相対リンクが含まれている場合
- ポートレットがカスタマイズ可能な場合

連携型 Portal アダプタを使用する場合は、ポートレット内のすべてのリンクが絶対リンクである必要があります（つまり、/images/foo.gif のような相対リンクではなく、http://host:port/images/foo.gif）。これは、ローカル Portal インスタンス上の Parallel Page Engine によって要求が処理されるためです。したがって、相対リンクはポートレットを含む Portal ではなく、ローカル Portal を基準にして解釈されます。

カスタマイズの処理はデータベース・プロバイダと Web プロバイダで異なるため、カスタマイズは問題の原因となります。Web プロバイダの場合、カスタマイズ・フォームはローカル Portal の Parallel Page Engine に送信されます。Parallel Page Engine がポートレットを次にコールしたときに、カスタマイズが保存され、ページが適切にリダイレクトされます。連携型 Portal アダプタを介してアクセスされるデータベース・プロバイダは、Web プロバイダでもあるため、Web プロバイダのカスタマイズ方式に対応する必要があります。これを実現するために、パブリック API (WWPRO\_API\_ADAPTER) が提供されています。

以前のリリースの OracleAS Portal で開発した Portal データベースのポートレット・プロバイダは、連携型 Portal アダプタで機能するように自動的にアップグレードされます。プロバイダとして公開されるページに連携型 Portal アダプタを介してアクセスすることもできます。

## 12.2 連携型 Portal アダプタを使用する環境の設定

連携型 Portal アダプタを使用するには、管理手順をいくつか実行する必要があります。これらの手順は、次のとおりです。

- [PlsqlSessionCookieName 値の確認](#)
- [HMAC を使用した連携型 Portal アダプタ・ユーザー認証](#)
- [Cookie ドメインの設定](#)
- [OracleAS Single Sign-On および Oracle Internet Directory Server の共有](#)

### 12.2.1 PlsqlSessionCookieName 値の確認

DAD には、連携型 Portal アダプタがアクセスするすべての Portal に対する一意の PlsqlSessionCookieName 値が必要です。

たとえば、次のようになります。

- portal1 には、スキーマ名 portal、DAD 名 portal および PlsqlSessionCookieName 値 portal1 を指定できます。
- portal2 には、スキーマ名 portal、DAD 名 portal を指定できますが、PlsqlSessionCookieName 値には portal2 などの異なる値を指定する必要があります。

---

**注意：** OracleAS Portal の以前のリリースでは、DAD 名はスキーマ名と同じである必要があり、DAD 名は常に作成されたセッション Cookie の名前と同じでした。このリリースでは状況が変わりました。現在では、Portal が DAD によってアクセスされるときに作成される Cookie の名前を指定することが可能になり、スキーマ名を DAD 名と同じにする必要がなくなりました。

---

Oracle Enterprise Manager 10g を使用して、セッション Cookie 名を更新できます。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールに移動します。  
通常は、[http://<host>.<domain.com>:1812](#) です。詳細は、[7.2 項「Application Server Control コンソールの使用」](#)を参照してください。
2. DAD を追加する Application Server インスタンスに移動します。

3. 「システム・コンポーネント」表から「HTTP Server」を選択します。
4. 「管理」をクリックします。
5. 「PL/SQL のプロパティ」をクリックします。
6. 既存の DAD を編集するには、「DAD」セクションで DAD 名をクリックします。
7. 左のナビゲーション領域で、「文書、別名およびセッション」をクリックします。
8. ページ内の「セッション・クッキー名」に新しい値を入力し、「OK」をクリックします。
9. Oracle HTTP Server を再起動します。

また、`dads.conf` ファイルで、`PlsqlSessionCookieName` 値を手動で変更することもできます。このファイルは次の場所にあります。

```
ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/dads.conf
```

このファイルの一般的なエントリは、次のようになります。

```
<Location /pls/portal>
  SetHandler pls_handler
  Order allow,deny
  Allow from All
  AllowOverride None
  PlsqlDatabaseUsername portal
  PlsqlDatabasePassword SomePassword
  PlsqlDatabaseConnectString myhost.domain.com:1521:mySID
  PlsqlDefaultPage portal.home
  PlsqlAuthenticationMode SingleSignOn
  PlsqlSessionCookieName portal
  PlsqlMaxRequestsPerSession 500
  PlsqlDocumentTablename portal.wwdoc_document
  PlsqlDocumentPath docs
  PlsqlDocumentProcedure portal.wwdoc_process.process_download
  PlsqlPathAlias url
  PlsqlPathAliasProcedure portal.wwpth_api_alias.process_download
  PlsqlFetchBufferSize 128
</Location>
```

DAD エントリを編集するには、`PlsqlSessionCookieName` 値を、たとえば `portal2` のように変更します。ファイルを保存したら、次のように Oracle HTTP Server 構成を更新し、中間層を再起動します。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateconfig -ct ohs
MID_TIER_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc type=ohs
```

**関連項目：** Application Server Control コンソールを使用して DAD を構成する方法については、[4.5.3 項「Portal DAD の構成」](#)を参照してください。

## 12.2.2 HMAC を使用した連携型 Portal アダプタ・ユーザー認証

連携型 Portal アダプタ機能は、分散した Portal 間のリモート・データベース・プロバイダの登録をサポートします。データベース・プロバイダは、リモート Portal 上の特別な URL に常駐する Web プロバイダのように登録されます。

---

**注意：** リモート・ポートレットでパブリック・コンテンツをレンダリングするのみの場合は、この項を無視できます。

---

パブリック・コンテンツをリモート Portal に提供できるようにするだけでなく、ある Portal のユーザー A が別の Portal のユーザー A と同じであることを保証する必要があります。通常、これは共有 Oracle Application Server Single Sign-On でパートナ・アプリケーション機能を使用して実現されますが、共有ネーム・サーバー (Oracle Internet Directory など)、同期化されたネーム・サーバーまたは手動プロセスを使用して実現される場合もあります。

この環境を実現できる場合は、Hash Message Authentication Code (HMAC) 認証メカニズムを使用して、プライベート・セッションをリモート Portal で開始し、リモート・ポートレットのプライベート・コンテンツをレンダリングすることができます。

### HMAC キーの設定

Portal A の管理者が Portal B のユーザーによる Portal A 上のセッションの作成を許可する場合は、秘密鍵を各 Portal 上に格納する必要があります。この鍵は、Portal A と Portal B 間で送信される SOAP 要求の一部の暗号化と復号化に使用されます。鍵が見つからない場合や各 Portal で鍵が異なる場合は、PUBLIC セッションのみが作成されます。

鍵は 10 文字以上の長さにする必要があります。また、管理者は安全で適切な方法を使用して、他の管理者に鍵の値を通知する必要があります。

キー・ストアの管理タスクを実行するために、SQL スクリプトが提供されています。これらのスクリプトはすべて `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc` ディレクトリにあります。

**表 12-2 キー・ストアの管理用 SQL スクリプト**

スクリプト	説明
<code>proadsss.sql</code>	送信の終了時にキーを設定します (リモート・ポートレットを含むページが作成される Portal インスタンス)。
<code>proadssr.sql</code>	受信の終了時にキーを設定します (ポートレットが作成される Portal インスタンス)。

**表 12-2 キー・ストアの管理用 SQL スクリプト (続き)**

スクリプト	説明
proadsds.sql	送信の終了時にキーを削除します (リモート・ポートレットを含むページが作成される Portal インスタンス)。
proadsdr.sql	受信の終了時にキーを削除します (ポートレットが作成される Portal インスタンス)。

ここでの送信と受信は、SOAP メッセージの送信および受信のことです。

**例 12-1 HMAC キーの設定 :**

前述の例では、Portal B が SOAP 要求および表示要求の送信者、Portal A がそれらの要求の受信者です。Portal B の Portal 管理者は SQL\*Plus に Portal 所有者として接続し、次のコマンドを実行する必要があります。

```
SQL> @proadsss
Enter provider portal PL/SQL Adapter URL:
http://<portalA_hostname>:<port>/adapter/<portalA_DAD>
Enter shared key:<shared key>
exit;
```

Portal A の Portal 管理者は SQL\*Plus に Portal 所有者として接続し、次のコマンドを実行する必要があります。

```
SQL> @proadsr
Enter provider portal PL/SQL Adapter URL:
http://<portalB_hostname>:<port>/adapter/<portalB_DAD>
Enter shared key:<shared key>
exit;
```

双方向のプロバイダ共有が必要な場合は、別の共有キーを使用して、前述と逆の手順を実行する必要があります。また、Portal は他の Portal インスタンスにプロバイダを公開する (たとえば、Portal A が Portal B と Portal C にプロバイダを公開する) ことができ、別個のキーを各 Portal インスタンス間で設定することができます。

## 12.2.3 Cookie ドメインの設定

通常、Cookie ドメインは1台のマシンに制限されます。各 Portal 上でスクリプトを実行して、プロバイダの登録ページで「Portal と同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ」オプションを選択することにより、この範囲を拡張することができます。これを実行すると、深いリンク機能を実現できます。つまり、連携型 Portal アダプタによってレンダリングされたポートレット内のリンクをクリックすると、ブラウザは、参照先（通常はリモート Portal 内）のページをレンダリングします。すでに確立されているセッション・コンテキストも維持されます。

ブラウザまたは他の HTTP クライアントが受け取った Cookie は、Cookie のドメインがサーバーのホスト名と一致する場合はサーバーに送信されます。このため、ドメインが .co.uk および mycompany.co.uk の Cookie は、要求と一緒に `http://mycompany.co.uk/pls/etc/etc` に送信されます。デフォルトでは、Portal によって作成される Cookie の範囲は、中間層マシンのホスト名に制限されます。

ポートレットとの通信は、ブラウザではなく Parallel Page Engine (PPE) によって中間層で行われます。このため、ポートレット内にリンクがある場合、リモート Portal のセッション Cookie は、デフォルトではリモート Portal に送信されません。

この問題は、Portal によって作成された Cookie の範囲を拡張し、PPE が受信した Cookie がブラウザに必ず返信されるようにすることで解決できます。Portal によって作成された Cookie の範囲を拡張するには、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc` ディレクトリにある SQL スクリプト `ctxckupd.sql` を実行します。

たとえば、次の2つの Portal があります。

- `http://myhost1.mycompany.co.uk:3000/pls/portalA`
- `http://myhost2.mycompany.co.uk:4000/pls/portalB`

プロバイダは、Portal B から Portal A に登録されます。

Portal B のポートレットを含むページを Portal A に表示すると、デフォルトでは、Portal B（ドメインは `myhost2.mycompany.co.uk:4000`）の Portal セッション Cookie が作成され、PPE に送信されます。プロバイダの登録ページで「Portal と同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ」プロパティを選択すると、この Cookie はブラウザに返信されます。このとき、Cookie のドメインは、送信元である `myhost1.mycompany.co.uk:3000` になります（これは、PPE が `myhost1.mycompany.co.uk:3000` に存在するためです）。

ポートレット内にリンクがある場合は、Cookie のドメインが要求のホストのドメインと一致しないため、Cookie は要求と一緒に送信されません。

この問題を解決するには、各 Portal の Portal 所有者として `SQL*Plus` に接続し、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc/ctxckupd.sql` を実行して、各 Portal が同じドメインになるように、OracleAS Portal によって作成されるドメインの Cookie の範囲を拡張します。これを実行すると、Portal によって作成される Cookie ドメインの範囲はブラウザに返信できるようにすべて拡張されます。これで、Portal 内のリンクは正常に機能します。

**関連項目：** [C.5 項「Portal セッション Cookie の構成」](#)

## 12.2.4 OracleAS Single Sign-On および Oracle Internet Directory Server の共有

共通の Identity Management サーバーを利用して、シングル・サインオンを最大限に活用できます。Portal セッション情報はリモート Portal に渡され、連携型 Portal アダプタを使用してセッションが作成されます。プライベート・セッションが作成されるすべての Portal が同じ Oracle Internet Directory Server と同じ OracleAS Single Sign-On を共有するようにすることをお勧めします。

たとえば、ユーザー JSMITH がある Portal でページを表示し、そのページのポートレットがリモート Portal の連携型 Portal アダプタから提供されている場合、JSMITH に対するセッションはリモート Portal 上に作成されます。2つの Portal が OracleAS Single Sign-On を共有しない場合、JSMITH は、ある Portal では John Smith のユーザー名、また別の Portal では Jane Smith のユーザー名になることがあります。このような問題を回避するには、連携型 Portal に参加するすべての Portal が単一の Oracle Identity Management を使用するように構成します。認証には、それらはすべて同じ OracleAS Single Sign-On を使用する必要があります。ただし、表示中のポートレットがパブリックの場合は、OracleAS Single Sign-On を共有する必要はありません。パブリック Portal セッションがリモート Portal インスタンスに作成されます。

個別の OracleAS Single Sign-On Server を使用する 2つの Portal がある場合は、先にそれらの OracleAS Single Sign-On Server を統合する必要があります。これを行うには、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「複数サーバーの統合」を参照してください。

サーバーの統合とは、1つのサーバーの使用を停止し、もう1つのサーバーを両方の Portal が使用する共通のサーバーにすることを意味します。次に、使用が停止された OracleAS Single Sign-On を使用するように構成された Portal を、統合されたサーバーを使用するように構成する必要があります。これを行うには、`-mode MIDTIER` および `-type SSO` を指定して MIDTIER モードで OracleAS Portal Configuration Assistant を実行する必要があります。

### 例 12-2 OracleAS Single Sign-On および Oracle Internet Directory Server の共有

SSO スキーマ `portal1_sso` を使用する、中間層 `portal1.domain.com:7777` のデータベース `portal1DB.domain.com:1521:portal1` にある Portal、**portal1** と、SSO スキーマ `portal2_sso` を使用する、中間層 `portal2.domain.com:7778` のデータベース `portal2DB.domain.com:1521:portal2` にある Portal、**portal2** の 2つがあるとします。`portal2` の SSO サーバーの使用を停止し、`portal1` の SSO サーバーを使用するように `portal2` を構成する場合は、次のようになります。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type SSO -host portal2.domain.com -port 7778 -i custom -s
portal2 -sp portal2 -sdad portal2 -c portal2DB.domain.com:1521:portal2 -o portal1_
sso -op portal1_sso -odad portal1_sso -sso_c portal1DB.domain.com:1521:portal1 -pa
portal1_sso_pa -pap portal1_sso_pa -ps portal1_sso_pp -pp portal1_sso_pp
```

---

**注意：** `-mode MIDTIER` および `-type SSO` を指定して OPCA を使用する  
方法については、[B.2.2.2 項「SSO タイプ」](#)を参照してください。

---



## 12.3 連携型 Portal アダプタを使用したプロバイダの登録

連携型 Portal アダプタを使用したプロバイダの登録は、Web プロバイダの登録と似ています。次の手順を実行する必要があります。

1. 「プロバイダの登録」画面の最初のページで、「名前」、「表示名」、「タイムアウト」および「タイムアウト・メッセージ」を通常どおり入力します。「実装スタイル」が「Web」に設定されていることを確認します。プロバイダは実際には PL/SQL で記述されていますが、プロバイダとのすべての通信はデータベース・プロバイダではなく、Web プロバイダとして行われます。このため、「実装スタイル」を「Web」に設定する必要があります。

2. 2 番目のページで、アダプタ・サービスの URL を入力します。URL の構文は、次の形式で入力する必要があります。

```
http://<host:port>/adapter/<dad>/<schema>
```

DAD とスキーマが同じ場合は、次の形式も使用できます。

```
http://<host>:<port>/adapter/<dad>
```

host、port、dad および schema はリモート Portal インスタンスの場所を示します。URL をブラウザに貼り付けることにより、URL が正しいかどうかを確認できます。

URL が正しい場合は、アダプタ・テスト・ページに接続できたというメッセージが記載されたページに移動します。

3. 「Portal と同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ」オプションを選択します。これにより、プロバイダから生成される Cookie がブラウザに返信されるようになります。前述のように、Portal によって作成される Cookie の範囲を拡張しなければならない場合があります。
4. 「サービス ID」を入力します。これは、`urn:<provider name>` という形式で入力する必要があります。`<provider name>` は、リモート Portal インスタンス上のプロバイダの名前です。これは大文字で入力します（大文字・小文字は区別されます）。連携型 Portal アダプタがリモート Portal の特定のプロバイダを見つけるために使用する情報です。

プロバイダとして公開されているページの場合、プロバイダの名前は MYPAGE970D272EBE9D2D0FE034080020F7DA4B のようになります。「表示名」ではなく、この「名前」を指定してください。名前と表示名は、Portal の「管理」タブにある「ポートレット」サブタブの「リモート・プロバイダ」ポートレットで確認できます。「プロバイダをブラウズ」アイコンをクリックすると、すべてのプロバイダの名前が表示されます。

5. 「ユーザー / セッション情報」セクションで、「ユーザー」ラジオ・ボタンを選択し、「ログイン頻度」を「ユーザー・セッションごとに 1 回」に設定します。これらの設定により、リモート Portal インスタンス上に Portal セッションを作成できるように、要求と一緒に情報が送信されます。

## 12.4 連携型 Portal アダプタを使用したカスタム・ポートレットの作成

連携型 Portal アダプタを通じてアクセスされるデータベース・プロバイダを記述する場合は、次の2つのコードについて特別な注意が必要です。

- [相対リンク](#)
- [カスタマイズ](#)

### 12.4.1 相対リンク

連携型 Portal アダプタを通じてアクセスされる Portal 内のすべてのリンクには、相対リンクではなく、絶対リンクを使用する必要があります。相対リンクは、リモート中間層ではなく、ローカル中間層を基準にするため、機能しません。たとえば、`/etc/etc`ではなく、`http://myhost.mycompany/etc/etc`という形式でリンクを作成する必要があります。

### 12.4.2 カスタマイズ

連携型 Portal アダプタを通じてポートレットにアクセスするときのカスタマイズの適用方法は、JPKD ポートレットの場合と似ています。連携型 Portal アダプタを通じてカスタマイズが機能するようにするには、主に次の2つの領域でポートレット・コードを変更する必要があります。

- `edit_defaults` モードまたは `customize` モード（パラメータ `p_mode` が NULL の場合）でポートレットを表示するように、ポートレットの表示コールにロジックを追加する必要があります。`p_mode` が、OK、APPLY または RESET の場合、カスタマイズは適切に保存される必要があります。
- カスタマイズ・ページ用として生成される `<FORM>` HTML タグは、プロシージャ `wwpro_api_adapter.open_form` を使用して作成する必要があります。これにより、フォームの動作が保証され、ページの送信時に正しいパラメータが渡されるようになります。カスタマイズ・フォームの送信時に発生するイベントの順序は、次のとおりです。
  1. ページがローカル PPE に送信されます。この送信と一緒に送信される必要がある標準パラメータ (`_providerid`、`_dad`、`p_action` など) およびカスタマイズされるパラメータがいくつかあります。プロシージャ `wwpro_api_adapter.open_form` は、この送信の生成をできるだけ単純にするために提供されています。
  2. PPE はカスタマイズ・ページを再び表示します。ただし、ポートレットの `show_portlet` コール中に次のいずれかの設定になるように、`p_action` パラメータが設定されます。

'OK': この場合、カスタマイズは保存され、ポートレットを含むページにリダイレクトされます。

'APPLY': この場合、カスタマイズは保存され、カスタマイズ・ページが表示されません。

'RESET': この場合、パラメータのデフォルト値の問合せが行われ、カスタマイズ・ページが表示されます。



データベース・サービス・プロバイダは、Oracle Application Server Portal Developer Kit (PDK) に含まれるサンプル・プロバイダであり、連携型 Portal アダプタと連携して機能します。詳細は、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) で Portal Developer Kit を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

## 12.5 連携型 Portal アダプタのトラブルシューティング

連携型 Portal アダプタに関連する問題については、[13.9 項「連携型 Portal アダプタのトラブルシューティング」](#)を参照してください。



---

## OracleAS Portal のトラブルシューティング

この章では、問題を診断するための各種ツールの使用方法を示し、OracleAS Portal のインストールまたは使用時に発生する可能性があるエラーの原因と解決方法を示します。



最新のトラブルシューティング情報については、Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) を参照してください。「Portal Center」ページの右上端で「Search」アイコンから検索できます。

この章の内容：

- 共通の問題
- その他の問題
- Portal 依存性設定ファイルの確認
- OracleAS Portal の問題の診断
- OracleAS Portal Diagnostics Assistant の使用
- Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用
- エクスポートおよびインポートのトラブルシューティング
- 検索機能のトラブルシューティング
- 携帯型 Portal アダプタのトラブルシューティング
- OracleAS Portal のエラー

## 13.1 共通の問題

この項には、OracleAS Portal の実行中に発生する可能性のある共通の問題のトラブルシューティング情報が含まれています。次のものがあります。

- [OracleAS Portal にアクセスできない](#)
- [OracleAS Single Sign-On にアクセスできない](#)
- [カテゴリ / パースペクティブ・ページの作成の問題](#)
- [ヘルプの複数言語サポート](#)

### 13.1.1 OracleAS Portal にアクセスできない

インターネットまたはイントラネット経由で OracleAS Portal インスタンスにアクセスできない場合は、次の手順に従って問題を診断します。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールで Portal のターゲット・ページを表示します。

[7.2 項「Application Server Control コンソールの使用」](#)を参照してください。

2. Web Cache が稼働しているかどうかを確認します。

Web Cache の状態が Portal の「コンポーネント・ステータス」表に表示されます。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールまたはコマンドラインを使用して Web Cache を起動します。

Application Server Control コンソールで Web Cache の監視および管理のページにアクセスするには、次の場所で「Web Cache」リンクをクリックします。

- Portal の「コンポーネント・ステータス」表

- Application Server の「コンポーネント」表

Web Cache が正常に起動した場合は、Portal にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

Web Cache の起動に失敗した場合は、Web Cache のエラー・ログ・ファイルを調べて問題の特定を試みてください。[13.6 項「Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用」](#)を参照してください。Log Viewer を使用していない場合は、`ORACLE_HOME/opmn/logs` 内の関連するエラー・ログ・ファイルを調べてください。

3. HTTP Server が稼働しているかどうかを確認します。

HTTP Server の状態が Portal の「コンポーネント・ステータス」表に表示されます。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。

- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールまたはコマンドラインを用いて HTTP Server を起動します。

Application Server Control コンソールで HTTP Server の監視および管理のページにアクセスするには、次の場所で「HTTP\_Server」リンクをクリックします。

- Portal の「コンポーネント・ステータス」表

- Application Server の「コンポーネント」表

HTTP Server が正常に起動した場合は、Portal にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

HTTP Server の起動に失敗した場合は、HTTP Server のエラー・ログ・ファイルを調べて問題の特定を試みてください。13.6 項「Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用」を参照してください。Log Viewer を使用していない場合は、次のディレクトリ内の関連するエラー・ログ・ファイルを調べてください。

- ORACLE\_HOME/opmn/logs

- ORACLE\_HOME/Apache/Apache/logs/error\_log

#### 4. Portal DAD の状態および構成を確認します。

「mod\_plsql サービス」ページに表示された「DAD」表を使用して DAD の状態を確認します。このページにアクセスするには、Portal の「コンポーネント・ステータス」表内の「mod\_plsql サービス」リンクをクリックします。4.5.3 項「Portal DAD の構成」も参照してください。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、「DAD」表内の DAD の名前をクリックし、すべてのプロパティが正しく設定されているかどうかを確認します。変更を保存し、HTTP Server を再起動して変更を有効にします。

Portal にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

#### 5. Portal の Metadata Repository データベースが稼働しているかどうかを確認します。

状態は、Enterprise Manager Application Server Control コンソールで Portal のターゲット・ページに表示されます。「Portal によって使用される OracleAS Metadata Repository」セクションを参照してください。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールを使用して（この機能が使用可能な場合）データベースを起動するか、または SQL\*Plus を使用します。

データベースが正常に起動した場合は、Portal にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

データベースが起動しない場合は、このコンポーネントの問題の原因を特定するためにさらに調査します。

6. OC4J\_Portal サービスが稼働しているかどうかを確認します。

OC4J\_Portal の状態が Portal の「コンポーネント・ステータス」表に表示されます。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールまたはコマンドラインを使用して OC4J\_Portal を起動します。

Application Server Control コンソールで OC4J\_Portal の監視および管理のページにアクセスするには、次の場所で「OC4J\_Portal」リンクをクリックします。

- 「Parallel Page Engine サービス」ページ (Portal の「コンポーネント・ステータス」表からアクセス可能)

- Application Server の「コンポーネント」表

OC4J\_Portal が正常に起動した場合は、Portal にアクセスできるようになったかどうかを確認します。Log Viewer を使用していない場合は、ORACLE\_HOME/opmn/logs 内の関連するエラー・ログ・ファイルを調べてください。

OC4J\_Portal の起動に失敗した場合は、OC4J\_Portal のエラー・ログ・ファイルを調べて問題の特定を試みてください。13.6 項「Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用」を参照してください。

7. Portal、そのホストおよびその他の関連コンポーネントのメトリック情報を確認します。

OracleAS Portal に必要なすべてのコンポーネントが予想どおりに稼働している場合は、次の手順として Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールでメトリック情報を確認します。この情報を確認すると、問題の特定に役立ちます。

Portal のターゲット・ページの「すべてのメトリック」リンクをクリックし、メトリック情報を確認します。ターゲット・ページ上で他の関連コンポーネント (Web キャッシュ、HTTP Server、OC4J、mod\_plsql など) についてこれを繰り返します。

8. OracleAS Portal Diagnostic Assistant を実行します。

OracleAS Portal Diagnostic Assistant から生成されたレポートを調べて、Portal 関連の問題を診断できます。13.5 項「OracleAS Portal Diagnostics Assistant の使用」も参照してください。

9. オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせます。

Portal にアクセスできない原因が特定できない場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせます。オラクル社カスタマ・サポート・センターが問題のトラブルシューティングを行う際に役立つ、次の情報を用意してください。

- OracleAS Portal Diagnostic Assistant が生成した ZIP ファイル
- 実行したコマンドライン・スクリプト (ptlasst.csh、orasso.cfg、ossoref.jar など) および使用したすべてのパラメータの詳細



- Oracle Application Server コンポーネントがどのように構成されているかを示す、おおまかなネットワーク図

## 13.1.2 OracleAS Single Sign-On にアクセスできない

OracleAS Single Sign-On (SSO) にアクセスできない場合は、OracleAS Portal にログインできません。次の手順に従って、この問題の原因を診断します。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールで SSO のターゲット・ページを表示します。

[7.2 項「Application Server Control コンソールの使用」](#)を参照してください。

2. HTTP Server が稼働しているかどうかを確認します。

「関連リンク」セクション内で「HTTP\_Server」リンクをクリックします。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールまたはコマンドラインを使用して HTTP Server を起動します。

Application Server Control コンソールで HTTP Server の監視および管理のページにアクセスするには、次の場所で「HTTP\_Server」リンクをクリックします。

- OracleAS Single Sign-On のターゲット・ページ

- Application Server の「コンポーネント」表

HTTP Server が正常に起動した場合は、OracleAS Single Sign-On にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

HTTP Server の起動に失敗した場合は、HTTP Server のエラー・ログ・ファイルを調べて問題の特定を試みてください。[13.6 項「Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用」](#)を参照してください。Log Viewer を使用していない場合は、次のディレクトリ内の関連するエラー・ログ・ファイルを調べてください。

- `ORACLE_HOME/opmn/logs`

- `ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs/error_log`

3. SSO の DAD の状態および構成を確認します。

「mod\_plsql サービス」ページに表示された「DAD」表を使用して DAD の状態を確認します。このページにアクセスするには、Portal の「コンポーネント・ステータス」表内の「mod\_plsql サービス」リンクをクリックします。[4.5.3 項「Portal DAD の構成」](#)も参照してください。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。

- 「停止中」の場合は、「DAD」表内の DAD の名前をクリックし、すべてのプロパティが正しく設定されているかどうかを確認します。変更を保存し、HTTP Server を再起動して変更を有効にします。

OracleAS Single Sign-On にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

4. SSO スキーマを含むデータベースが稼働しているかどうかを確認します。

データベース情報が、Enterprise Manager Application Server Control コンソールで OracleAS Single Sign-On のターゲット・ページに表示されます。さらに詳しい情報を表示するには、ドリルダウンします。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールを使用して（この機能が使用可能な場合）データベースを起動するか、または SQL\*Plus を使用します。

データベースが正常に起動した場合は、OracleAS Single Sign-On にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

データベースが起動しない場合は、このコンポーネントの問題の原因を特定するためにさらに調査します。

5. OC4J\_Security サービスが稼働しているかどうかを確認します。

OC4J\_Security の状態が Application Server のページに表示されます。また、次のコマンドラインを使用して OC4J\_Security の状態を確立できます。

```
ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl getstate
```

**関連項目：** Distributed Configuration Management (DCM) ユーティリティの dcmctl の詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールまたはコマンドラインを使用して OC4J\_Security を起動します。

Application Server Control コンソールで OC4J\_Security の監視および管理のページにアクセスするには、Application Server の「コンポーネント」表内の「OC4J\_Security」リンクをクリックします。

OC4J\_Security が正常に起動した場合は、OracleAS Single Sign-On にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

OC4J\_Security の起動に失敗した場合は、OC4J\_Security のエラー・ログ・ファイルを調べて問題の特定を試みてください。13.6 項「Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用」を参照してください。Log Viewer を使用していない場合は、ORACLE\_HOME/opmn/logs 内の関連するエラー・ログ・ファイルを調べてください。

6. Oracle Internet Directory サービスが稼働しているかどうかを確認します。

Oracle Internet Directory の状態が Application Server のページに表示されます。

- 「稼働中」の場合は、次の手順に進みます。
- 「停止中」の場合は、Application Server Control コンソールまたはコマンドラインを使用して Oracle Internet Directory を起動します。

Application Server Control コンソールで Oracle Internet Directory の監視および管理のページにアクセスするには、Application Server の「コンポーネント」表内の「Oracle Internet Directory」リンクをクリックします。

Oracle Internet Directory が正常に起動した場合は、OracleAS Single Sign-On にアクセスできるようになったかどうかを確認します。

Oracle Internet Directory を起動できない場合は、Oracle Internet Directory のエラー・ログ・ファイルを調べて問題の特定を試みてください。13.6 項「Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用」を参照してください。

7. SSO、そのホストおよびその他の関連コンポーネントのメトリック情報を確認します。

OracleAS Single Sign-On に必要なすべてのコンポーネントが予想どおりに稼働している場合は、次の手順として Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control コンソールでメトリック情報を確認します。この情報を確認すると、問題の特定に役立ちます。

OracleAS Single Sign-On のターゲット・ページの「すべてのメトリック」リンクをクリックし、メトリック情報を確認します。ターゲット・ページ上で他の関連コンポーネント (HTTP Server、OC4J\_Security、OID、mod\_plsql など) についてこれを繰り返します。

8. OracleAS Portal Diagnostic Assistant を実行します。

OracleAS Portal Diagnostic Assistant から生成されたレポートを調べて、OracleAS Single Sign-On および Portal 関連の問題を診断できます。13.5 項「OracleAS Portal Diagnostics Assistant の使用」も参照してください。

9. オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせます。

OracleAS Portal にログインできない原因が特定できない場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。オラクル社カスタマ・サポート・センターが問題のトラブルシューティングを行う際に役立つ、次の情報を用意してください。

- OracleAS Portal Diagnostic Assistant が生成した ZIP ファイル
- 実行したコマンドライン・スクリプト (ptlasst.csh、orasso.cfg、ossoref.jar など) および使用したすべてのパラメータの詳細
- Oracle Application Server コンポーネントがどのように構成されているかを示す、おおまかなネットワーク図

### 13.1.3 カテゴリ / パースペクティブ・ページの作成の問題

ページ・グループにカテゴリを作成すると、カテゴリ・テンプレートに基づいてカテゴリ・ページが作成されます。同様に、パースペクティブを作成すると、パースペクティブ・テンプレートに基づいてパースペクティブ・ページが作成されます。

これらの基になるカテゴリ / パースペクティブ・テンプレートを変更した場合は、新しいカテゴリ / パースペクティブを作成すると、次のいずれかのメッセージが表示されることがあります。

- **32022:catpagecreationerror** カテゴリは作成されていますが、検索ポートレットをカテゴリ・ページに配置できませんでした。カテゴリ・ページには、このカテゴリのアイテムまたはページは表示されません。
- **32023:persppagecreationerror** パースペクティブは作成されていますが、検索ポートレットをパースペクティブ・ページに配置できませんでした。パースペクティブ・ページには、このパースペクティブのアイテムまたはページは表示されません。

これらのエラーのいずれかが表示された場合は、現在のカテゴリ / パースペクティブのテンプレートを削除してから、スクリプトを実行して次のようにします。

- 現在のカテゴリ / パースペクティブのテンプレートを元の出荷時のテンプレートで置き換えます。
- 現在のテンプレートに基づいたカテゴリ / パースペクティブ・ページを再作成します。すべてのページ・グループに対してでも、特定のページ・グループに対してでもこれを実行できます。

これにより、すべての新しいカテゴリ / パースペクティブ・ページがエラーなしで作成され、すべての既存のカテゴリ / パースペクティブ・ページに、関連するアイテムおよびページが予想どおりに表示されるようになります。

必要なスクリプトは、次の場所から入手できます。

```
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstdefin.sql
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstpgshw.sql
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstundef.sql
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstpgcre.sql
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstprcpg.sql
```

これらのスクリプトを実行するには、次の手順を実行します。

1. 現在のカテゴリまたはパースペクティブのテンプレートを削除します。
2. Portal スキーマ・ユーザーとして SQL\*Plus を使用して、OracleAS Portal に接続します。
3. pstdefin.sql ファイルを次の情報を使用して構成します。
  - ページ・グループ情報。単一のページ・グループ、複数のページ・グループ、またはすべてのページ・グループのページを再作成できます。

- ページ情報。カテゴリ・ページまたはパースペクティブ・ページのみ、あるいはその両方を再作成できます。

これらの設定の説明は、ファイル `pstdefin.sql` にあります。

4. 必要に応じて、スクリプト `pstpgshw.sql` を使用して情報を OracleAS Portal から取得し、`pstdefin.sql` ファイルを構成します。
5. スクリプト `pstpgcre.sql` を実行して変更内容を適用します。たとえば、次のようになります。

```
SQL> @pstpgcre.sql
```

### 13.1.4 ヘルプの複数言語サポート

OracleAS Portal では、オンライン・ヘルプで複数言語を使用できます。ただし、翻訳されているのは状況依存ヘルプ・トピックのみです。

## 13.2 その他の問題

この項には、OracleAS Portal の実行中に発生する可能性のあるその他の問題のトラブルシューティング情報が含まれています。次のものがあります。

- [動的 DNS 環境でのリモート Web プロバイダのタイムアウト](#)
- [メモリーの使用量が多い操作が原因となる問題](#)

## 13.2.1 動的 DNS 環境でのリモート Web プロバイダのタイムアウト

OracleAS Portal 中間層とは異なるマシン上にあるリモート Web プロバイダは、OC4J\_Portal サービスが最初に起動されたときに稼働しますが、しばらくすると停止します。長いタイムアウトの後、同じプロバイダからの各ポートレットのかわりに「エラー: ポートレットに接続できませんでした。」というメッセージが表示されます。ポートレットのタイムアウト・エラーは、OC4J\_Portal の `application.log` にも記録されます。OC4J\_Portal を再起動すると、Web プロバイダは再び稼働しますが、限られた時間のみ稼働します。

Web プロバイダがドメイン名から IP アドレスへのマッピングに動的 DNS (DDNS) を使用していることがこの問題の原因である可能性があります。つまり、Web プロバイダのドメイン名の解決先の IP アドレスが、時間が経つと変わることです。Java のデフォルトのキャッシュ・ポリシーでは、IP アドレスを解決した後、それを永久にキャッシュします。つまり、DDNS を使用しているために、Web プロバイダが IP アドレスを変更した後も Web プロバイダの古い IP アドレスを使用し続けます。

この問題を解決するには、リモート Web プロバイダのタイムアウトを防止するために OC4J\_Portal で追加設定を行う必要があります。OC4J\_Portal の `sun.net.inetaddr.ttl` システム・プロパティを変更する必要があります。JDK 1.3 以降では、`sun.net.inetaddr.ttl` システム・プロパティを使用して、キャッシュされた IP アドレスに対する "time to live" (TTL) を秒単位で指定できます。

---

---

**注意:** このシステム・プロパティをコマンドライン・オプションとして Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) に渡すことが重要です。OC4J がこのファイルを読み取る前に、システム・プロパティを読み取るので、このプロパティを `oc4j.properties` に設定しても意味がありません。したがって、`ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml` の OC4J\_Portal セクション内の `<java-option>` の行を変更するのが一番よい方法です。

---

---

### 使用例

1. 次のように `opmn.xml` を編集します。

```
<java-option value="-server -Xincgc -Xnoclassgc -Xms256m -Xmx512m  
-Dsun.net.inetaddr.ttl=120"/>
```

2. `opmn` およびそのすべてのサブプロセスを停止し、最新の構成の変更が有効になるように再起動します。

これを行うには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall  
ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

## 13.2.2 メモリーの使用量が多い操作が原因となる問題

デフォルトでは、Oracle Application Server の `shared_pool_size` の値は 32 MB です。次のようなメモリーの使用量が多い操作を実行する場合は、これが問題になることがあります。

- エクスポートまたはインポート
- Portal のフォームまたはレポートの作成

よく表示されるのは、「ORA-04031: 共有メモリーの 30192 バイトを割当てできません」というエラーです。メモリーの使用量が多い操作を問題なく実行できるようにするには、`shared_pool_size` パラメータの値を大きくする必要があります。

`shared_pool_size` パラメータの値を変更するには、次の手順を実行します。

1. データベース・インスタンスの `init.ora` ファイル内の `shared_pool_size` パラメータを編集します。`init.ora` ファイルは、データベース内の `ORACLE_HOME` にあります。

---

---

**注意：** これは、インフラストラクチャ・データベースのインストール後にのみ行うことができます。

---

---

2. 構成にあわせて値を大きくします。
3. 変更が反映されるようにデータベースを再起動します。

## 13.3 Portal 依存性設定ファイルの確認

OracleAS Portal のトラブルシューティングを行うときには、最初に Portal 依存性設定ファイルの `iasconfig.xml` の内容を確認します。このファイルには、依存するすべてのコンポーネントからの構成データが集中的に格納され、構成が変更されるとファイルの内容が更新されます。したがって、このファイルは OracleAS Portal の OracleAS Web Cache、Oracle Internet Directory および Oracle Enterprise Manager 10g の現在の構成を反映しています。このファイルが構成の設定を正確に反映していない場合は、ファイルを更新して Portal 依存性設定ツールの `ptlconfig` を実行し、Oracle Application Server Metadata Repository を更新します。

MIDTIER モードで OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を使用して構成を変更すると (WEBCACHE、OHS または OID タイプを使用)、`iasconfig.xml` ファイルは変更を反映するように更新されません。これによりサイトが誤って構成されることがあるので、お薦めしません。そのかわりに、可能であれば、Portal 依存性設定ファイルおよびツールを使用して構成を更新します。Portal 依存性設定ファイルの詳細、および `iasconfig.xml` ファイルの例については、付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」を参照してください。

## 13.4 OracleAS Portal の問題の診断

OracleAS Portal は、中間層とデータベース層から構成され、各層は多数のコンポーネントから構成されています。コンポーネントは多数のマシンに分散可能であるだけでなく、同時に多数の要求も処理できます。

診断を容易にするために、コンポーネントは受信した要求に関連する情報をログ・ファイルに記録できます。この項では、問題の診断のために様々なログ・ファイルを構成および使用する方法を詳しく説明します。また、個々の要求を実行コンテキスト識別子 (ECID) を使用して、始めから終わりまで追跡する方法についても説明します。

### 実行コンテキスト識別子

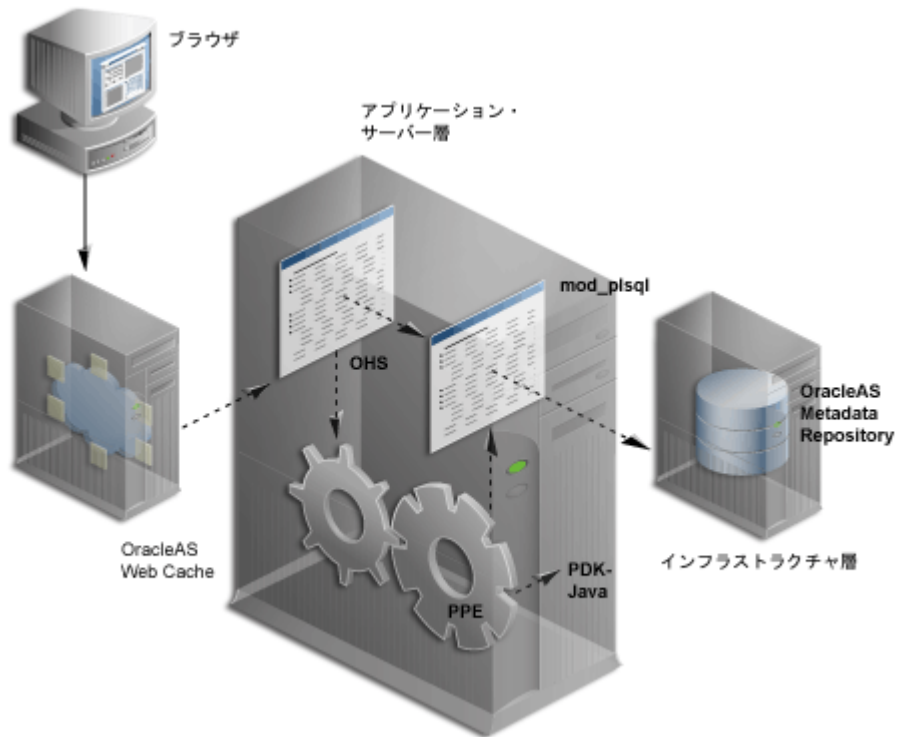
OracleAS Portal は同時に多数の要求に対応できるため、様々な OracleAS Portal コンポーネントを通して 1 つの要求を追跡するのは、これらの要求に関連する情報が混ざってしまうために難しい場合があります。

OracleAS Portal では、要求に割り当てられ、その要求について記録された情報に付加される一意の番号である ECID を利用します。要求が 1 つのコンポーネントから別のコンポーネントに渡されるときに、ECID を増分して、順序を付けることができます。この ECID の順序をたどれば、任意の数のコンポーネントを通る個々の要求を追跡できます。

ECID は、ECID なしの最初の要求を受信する Oracle Application Server コンポーネントが生成します。図 13-1 は、ECID の生成と伝播を示しています。この図では、実線は ECID の要求を示しています。



図 13-1 ECID の生成と伝播を伴う要求のフロー



ECID の生成は、Web Cache、Oracle HTTP Server (OHS) および Parallel Page Engine (PPE) で行われます。ECID は、まだ存在しない場合にのみ生成されます。

### ECID ロギングの有効化

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) では、書き込む各ログ・エントリに ECID を含めることができます。これはデバッグを行う場合に便利です。ECID およびこれを利用してアプリケーション・サーバー・コンポーネントからのメッセージの関係を調べる方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

ECID の情報を OC4J のログに記録する場合は、ファイル `opmn.xml` を次のように編集します。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールで、中間層の Oracle Application Server ターゲット・ホーム・ページに移動します。
2. 「プロセス管理」リンクをクリックし、ファイル `opmn.xml` を表示します。
3. "OC4J\_Portal" エントリを見つけます。

4. "-Doracle.dms.transtrace.ecidenabled=true" エントリを "start-parameters" カテゴリの "java-options" プロパティに追加します。

次に例を示します。

```
<process-type id="OC4J_Portal" module-id="OC4J">
  <environment>
    <variable id="DISPLAY" value="localhost:0"/>
    <variable id="LD_LIBRARY_PATH" value="/export/home/ias/pwhome/lib"/>
  </environment>
  <module-data>
    <category id="start-parameters">
      <data id="java-options" value="-server
-Djava.security.policy=/export/home/ias/pwhome/j2ee/OC4J_Portal/conf
ig/java2.policy -Djava.awt.headless=true
-Doracle.dms.transtrace.ecidenabled=true -Xmx256m "/>
      <data id="oc4j-options" value="-properties"/>
    </category>
    <category id="stop-parameters">
      <data id="java-options"
value="-Djava.security.policy=/export/home/ias/pwhome/j2ee/OC4J_Port
al/config/java2.policy -Djava.awt.headless=true"/>
    </category>
  </module-data>
  <start timeout="900" retry="2"/>
  <stop timeout="120"/>
  <restart timeout="720" retry="2"/>
  <port id="ajp" range="3301-3400"/>
  <port id="rmi" range="3201-3300"/>
  <port id="jms" range="3701-3800"/>
  <process-set id="default_island" numprocs="1"/>
</process-type>
```

5. 「適用」をクリックします。
6. Oracle Application Server のターゲット・ホーム・ページに戻ります。
7. OC4J\_Portal のターゲット・チェック・ボックスを選択します。
8. 「再起動」ボタンをクリックします。

## 13.4.1 コンポーネントと診断出力

様々な OracleAS Portal コンポーネントの診断出力を構成できます。次のコンポーネントが該当します。

- [Java Portal Developers Kit](#)
- [mod\\_plsql](#)
- [Parallel Page Engine](#)
- [Oracle Application Server Portal Developer Kit](#)
- [OracleAS Metadata Repository](#)
- [OracleAS Web Cache](#)

### 13.4.1.1 Java Portal Developers Kit

Java Portal Developer Kit (JPDK) は、Java ベースのポートレットとポートレット・プロバイダを構築するためのフレームワークを提供します。Java ベースのプロバイダ、つまり Web プロバイダとは、Web アプリケーションとして作成されたアプリケーションのことで、JPDK には、プロバイダ・アダプタごとに制御されるロギング機能も含まれます。

ログ・レベルの値の許容範囲は 1～7 で、累積的です。たとえば、ログ・レベル 3 を指定すると、ログ・レベル 1 および 2 の出力も記録されます。

**表 13-1 ログ・レベル**

ログ・レベル	説明
1	構成
2	重大なエラー
3	警告
4	例外
5	パフォーマンス
6	情報
7	デバッグ

#### 13.4.1.1.1 JPDK ログ・ファイルの内容

プロバイダ・アダプタの診断情報は、`application.log` というサーブレットのコンテキスト・ログ・ファイルに記録されます。

JPDK メッセージには、次の 2 種類があります。

- 標準 JPDK メッセージ

- パフォーマンス JPDK メッセージ

### 標準 JPDK メッセージ

プロバイダ・アダプタの application.log ファイルに記録される標準 JPDK メッセージの例を次に示します。

```
03/12/31 02:58:59 jpdk: [instance=1926_EXPIRESSAMPLE_886361,
id=1024597399815ApplicationServerThread-12,4] Beginning rendering of portlet: 1926_
EXPIRESSAMPLE_886361
```

この内容は、次のとおりです。

**03/12/31 02:58:59** - 日時

**jpdk:** - Web アプリケーション

**id=1024597399815ApplicationServerThread-12.4:** - ECID、順序番号

**instance=1926\_EXPIRESSAMPLE\_886361:** - ポートレット・インスタンス識別子

**Beginning rendering of portlet:1926\_EXPIRESSAMPLE\_886361:** - メッセージ

ポートレット・インスタンス識別子は、特定のページの特定のポートレット・インスタンスを識別し、次のように分類されます。

**1926:** - 内部順序番号

**EXPIRESSAMPLE:** - ポートレット名

**886361:** - プロバイダ識別子

これらの値の一部についてのさらに詳しい情報を表 13-2 に示します。

**表 13-2 JPDK 標準メッセージの属性**

値	詳細
ECID	一部のメッセージでは、ECID およびポートレット・インスタンス識別子の値が NULL になっています。通常それらは、リポジトリからの SOAP メッセージです。
ポートレット・インスタンス識別子	一部のメッセージでは、ECID およびポートレット・インスタンス識別子の値が NULL になっています。通常それらは、リポジトリからの SOAP メッセージです。この場合、メッセージは特定のポートレット・インスタンスに関連付けられていないので、ポートレット・インスタンス識別子は NULL になります。

### 13.4.1.2 mod\_plsql

mod\_plsql は、HTTP を介して PL/SQL アプリケーションを起動できるようにする Oracle HTTP Server モジュールです。mod\_plsql は Oracle HTTP Server モジュールであるため、そのログ記録は Oracle HTTP Server によって実行されます。

ログは、構成ファイルの httpd.conf 内の LogLevel パラメータによって制御されます。このファイルは、通常次の場所にあります。

`ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf`

LogLevel の値は、次のとおりです。

- emerg
- alert
- crit
- error
- warn
- notice
- info
- debug

値は、累積的です。たとえば、LogLevel に notice を設定した場合は、notice、warn、error、crit、alert および emerg のメッセージが記録されます。

LogLevel の値を変更する場合は、変更を有効にするために Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。

#### 13.4.1.2.1 mod\_plsql ログ・ファイルの内容

mod\_plsql の診断情報の場所は、httpd.conf ファイル内の Oracle HTTP Server パラメータの ErrorLog によって指示されます。このパラメータは ErrorLog と呼ばれますが、これによって生成されるファイルにはエラー・メッセージ以外のものも含まれます。Oracle HTTP Server パラメータの ErrorLog の標準的な値は、次のとおりです。

`ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs/error_log`

Oracle HTTP Server エラー・ログに記録される mod\_plsql メッセージには、次の 2 種類があります。

- 標準 mod\_plsql メッセージ
- パフォーマンス mod\_plsql メッセージ

### 標準 mod\_plsql メッセージ

Oracle HTTP Server エラー・ログに記録される標準 mod\_plsql メッセージの例を次に示します。

```
[Thu Aug 22 08:34:20 2002] [warn] mod_plsql: 'PlsqlCacheCleanupSize' is deprecated.
```

この内容は、次のとおりです。

**Thu Aug 22 08:34:20 2002:** - 日時

**warn:** - メッセージ・レベル

**mod\_plsql:** - このメッセージが mod\_plsql からのものであることを示します。

**'PlsqlCacheCleanupSize' is deprecated.:** - メッセージ・テキスト

### 13.4.1.3 Parallel Page Engine

Parallel Page Engine (PPE) は、ページ・レイアウトを表すデータを受け入れて、このデータをポートレットを含むページに変換する共有サーバー・プロセス・サブレットです。

PPE のログは、サブレットおよび要求レベルで制御できます。要求のログ・レベルを指定しない場合は、要求に対してサブレット・レベルが使用されます。サブレットと要求の両方のログ・レベルを指定する場合は、この 2 つの高いほうのレベルが要求に使用されます。

### サブレット・レベルのログ

PPE サブレット・レベルのログは、サブレット logmode 初期化引数で制御されます。logmode の値は、次のとおりです。

- none
- perf
- debug
- request
- content
- parsing
- all

値は、累積的です。たとえば、logmode に content を設定した場合、content、request、debug および perf のメッセージも記録されます。デフォルト値は、none です。値 all を指定すると、すべてのログ・メッセージが含まれます。

PPE はサブレットであるため、構成は PPE が配置されるサブレット・コンテナによって異なります。OracleAS Portal 下では、サブレット・コンテナは OC4J であり、logmode は Portal の web.xml ファイルにあります。この XML ファイルには、PPE 以外の

プロパティも含まれるので、logmode が複数回表示される場合があります。正しい logmode 値を変更することが重要です。

```
<init-param>
  <param-name>logmode</param-name>
  <param-value>perf</param-value>
</init-param>
```

この値は、**page** サブレット句内にあります。

```
<servlet>
  <servlet-name>page</servlet-name>
  <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>
  .
  .
  <init-param>
    <param-name>logmode</param-name>
    <param-value>perf</param-value>
  </init-param>
  .
  .
</servlet>
```

logmode の値を変更する場合は、変更を有効にするために OC4J を再起動する必要があります。web.xml ファイルは、次の場所にあります。

```
ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portal/portal/WEB-INF
```

## 要求レベルのログ

PPE 要求レベルのログは、\_debug URL パラメータで制御されます。たとえば、次の URL に対して要求レベルのログを指定するには、次のようにします。

```
http://myserver.myplace.com:3000/portal/page?_pageid=111&_dad=myDAD&_schema=mySchema
```

手動で次のパラメータを挿入する必要があります。

```
&_debug=3
```

次のようになります。

```
http://myserver.myplace.com:3000/portal/page?_pageid=111&_dad=myDAD&_schema=mySchema&_debug=3
```

`_debug` の値は、表 13-3 のようになります。

**表 13-3 PPE 要求ログのレベル**

値	詳細
0	ページのデバッグ情報を有効にします。
1	ページのデバッグ情報を有効にします。
2	ページにログを記録し、要求の logmode に debug を設定します。
3	ページにログを記録し、要求の logmode に request を設定します。
4	ページにログを記録し、要求の logmode に content を設定します。
5	ページにログを記録し、要求の logmode に parsing を設定します。

### ページのログ

`_debug` を 2、3、4 または 5 に設定すると、ページのログが有効になります。つまり、要求に対して記録されたメッセージが PPE のログ・ファイルのみでなく返されるページにも記録されます。

ページのログは、要求に関連する詳細情報を取得するための簡単な方法です。この結果、これはセキュリティの問題ともなるため、`urlDebugMode` サーブレット初期化引数が用意されています。

`urlDebugMode` は、Portal の `web.xml` ファイル内の `logmode` のそばにあります。

```
<init-param>
  <param-name>urlDebugMode</param-name>
  <param-value>4</param-value>
</init-param>
```

`urlDebugMode` も `logmode` も、`page` サーブレット句に含まれています。

```
<servlet>
  <servlet-name>page</servlet-name>
  <servlet-class>oracle.webdb.page.ParallelServlet</servlet-class>
  .
  .
  <init-param>
    <param-name>urlDebugMode</param-name>
    <param-value>4</param-value>
  </init-param>
  .
  .
</servlet>
```



urlDebugMode の値は、表 13-4 のとおりです。

**表 13-4 PPE の urlDebugMode レベル**

値	詳細
なし	_debug URL パラメータを無視します。
0	_debug に 0 のみを指定できます。
1	_debug に 0 または 1 のみを指定できます。
2	_debug に 0、1 または 2 のみを指定できます。
3	_debug に 0、1、2 または 3 のみを指定できます。
4	_debug に 0、1、2、3 または 4 のみを指定できます。
5	_debug に 0、1、2、3、4 または 5 のみを指定できます。

#### 13.4.1.3.1 PPE ログ・ファイルの内容

PPE 診断メッセージは、サーブレット・コンテキストの application.log ファイルに記録されます。このファイルは、次の場所にあります。

`ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/application-deployments/portal/<island>/application.log`

PPE メッセージには、次の 2 種類があります。

- 標準 PPE メッセージ
- パフォーマンス PPE メッセージ

#### 標準 PPE メッセージ

ログ・ファイルに記録される標準 PPE メッセージの例を次に示します。

```
03/12/31 11:54:35 portal: id=22020914339,0 DEBUG: active=53 ContentFetcher
Unexpected Exception Request Failed:java.lang.IllegalArgumentException
name=content-fetcher52 label=dbPortlet url=https://abc.company.com:5001/pls/ptl_9_0_
4_0_87/!PTL_9_0_4_0_87.wvpro_app_provider.execute_portlet/391497559/4 time=38975ms
timeout=15000ms process=ResponseHeaders
```

この内容は、次のとおりです。

**03/12/31 11:54:35:** - 日時

**portal:** - Web アプリケーション

**DEBUG:** - logmode フラグ

**active=53:** - アクティブな数

`id=22020914339, 0: - ECID`

**ContentFetcher Unexpected Exception Request Failed: - メッセージ**

これらの値の一部についてのさらに詳しい情報を表 13-5 に示します。

**表 13-5 PPE の標準メッセージの属性**

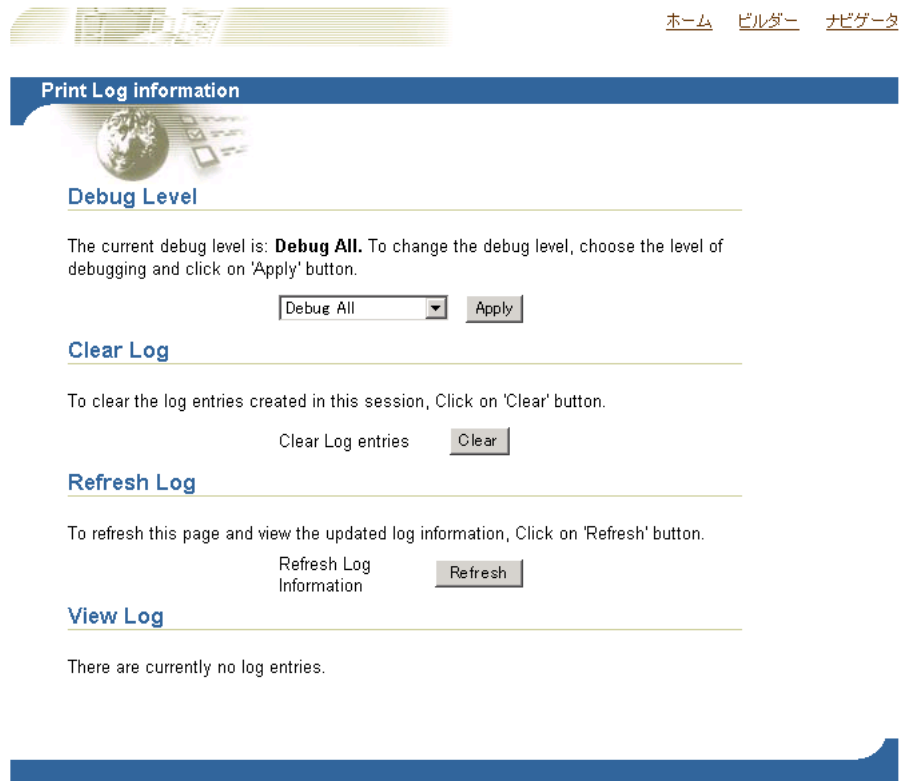
値	詳細
logmode フラグ	logmode が debug 以上であることを示します。logmode が perf に設定されているため、debug よりもレベルが低い場合は、logmode フラグはメッセージに含まれません。
アクティブな数	PPE のスレッド・グループに含まれているスレッドの数。logmode が perf に設定されているため、debug よりもレベルが低い場合は、アクティブな数はメッセージに含まれません。
ECID	ECID 値は、NULL であることがあります。そのような値が含まれるメッセージは、PPE バックグラウンド・タスク（プールされたオブジェクトの消去などの）に関連しています。バックグラウンド・タスクは要求とは関連していないので、ECID を指定しません。

#### 13.4.1.4 Oracle Application Server Portal Developer Kit

Oracle Application Server Portal Developer Kit (PDK) は、Java、Web Services、XML、ASP、PERL、PL/SQL などの様々な Web 言語でポートレットおよびポートレット・プロバイダを構築するためのフレームワークを提供します。したがって、PDK には JPDK も含まれています。

PDK は、中核となるロギング機能を提供し、特定の Developer Kit でログ記録を行うことによってこの機能を拡張します。PDK ログは、図 13-2 に示してあるような Web ベースのユーザー・インターフェースを通して制御されます。

図 13-2 PDK ログ・ページ



Copyright© 2003, Oracle Corporation. All Rights Reserved

次の場所にあります。

`http://<host>:<port>/pls/<dad>/<schema>.wwpro_log.render`

たとえば、次のようになります。

`http://myserver.myplace.com:3000/pls/portal/PORTAL.wwpro_log.render`

このページから、次のログ・レベルを適用できます。

表 13-6 PDK ログ・レベル

レベル	詳細
No debugging	ログ記録を行いません。

表 13-6 PDK ログ・レベル (続き)

レベル	詳細
PROHTTPJ	プロバイダ・フレームワークのログのみ。
PROGRP	プロバイダのログのみ。
ADAPTER	連携型 Portal アダプタのログのみ。
CACHE	キャッシュのログのみ。
FORCE	Oracle 内部
INVAL	無効なログのみ。
PROREG	プロバイダ登録のログのみ。
PROLOGIN	ページ・メタデータの生成、ログインおよびセッション初期化ログのみ。
PROPROV	プロバイダ通信のログのみ。
PROPMR	ポートレット・リポジトリのメタデータのログのみ。
PROHTTP	Web プロバイダ・フレームワークのログのみ。
All	すべてのログ・レベルが有効になります。

#### 13.4.1.4.1 PDK ログ・ファイルの内容

図 13-3 に示したように、PDK ログの設定に使用したものと同一ページで、PDK ログ・エントリを表示できます。

### 図 13-3 PDK ログ・ページのログ・エントリ

#### View Log

The following table lists the log entries that were created.

Log ID	Start Time	Name	Information	key_1	key_2
12165	09-SEP-2003 04:25:52	wwpro_app_provider.execute_portlet	[ msec] <u>Portlet Title</u> : SSO Server Administration <u>Reference path</u> : 34_LOGINSERVERADMIN_604753661 <b>Before Show</b> <u>Caching Level</u> : <u>Caching Key</u> : <u>Caching Period</u> :	604753661	4
12166	09-SEP-2003 04:26:06	wwpro_app_provider.execute_portlet	[ msec] <u>Portlet Title</u> : SSO Server Administration <u>Reference path</u> : 34_LOGINSERVERADMIN_604753661 <b>Before Show</b> <u>Caching Level</u> : <u>Caching Key</u> : <u>Caching Period</u> :	604753661	4

#### 13.4.1.5 OracleAS Metadata Repository

OracleAS Metadata Repository は、OracleAS Portal データベース・スキーマに存在するすべてのメタデータ、Portal コンテンツおよび PL/SQL コードから構成されています。

OracleAS Portal スキーマで実行される PL/SQL コードは、OracleAS Portal の他のコンポーネントから生成される診断出力と相互に関係付けることができる診断出力も生成します。

ログ・ファイルは OracleAS Metadata Repository から出力されるため、OracleAS Portal を実行するデータベースは、これが可能なように構成されている必要があります。このためには、次の行を追加して、データベースの `init.ora` ファイルを更新する必要があります。

```
UTL_FILE_DIR=<directory where you want to write the log file>
```

多数の `UTL_FILE_DIR` エントリがある場合があるため、書き込むディレクトリがすでに定義されている場合は、このファイルを変更する必要はありません。

**注意：**

- OracleAS Metadata Repository のインストールでは、インストール先のデータベースに UTL\_FILE\_DIR パラメータ・セットがある場合は、OracleAS Portal インストーラは、OracleAS Metadata Repository ログ・ファイルの場所としてデータベース・パラメータに最初に定義されたディレクトリを使用するように OracleAS Metadata Repository を構成します。UTL\_FILE\_DIR が構成されていない場合は、インストール時に OracleAS Metadata Repository ログは設定されません。
- init.ora ファイルを更新する場合は、SPFILE も作成して、データベースを再起動する必要があります。詳細は、Oracle9i Database Server のドキュメントを参照してください。

OracleAS Metadata Repository のログは、ログ・パッケージによって実行されます。このログ・パッケージは、SQL\*Plus から実行する必要がある logcfg.sql スクリプトによって制御されます。

logcfg.sql スクリプトは、次の場所にあります。

`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wvc`

logcfg.sql スクリプトには、log\_level、log\_state\_level、log\_format、log\_file および log\_directory の順序で 5 つのパラメータを指定できます。指定したパラメータが 5 つより少ない場合は、1 つ以上の値が要求されます。この要求に対する応答として値を受け取らない場合は、現在の値が維持されます。

表 13-7 は、logcfg.sql パラメータの詳細を示しています。

**表 13-7 リポジトリのログ・パッケージのパラメータ**

パラメータ	詳細
log_level	<p>記録されたメッセージのレベルを示します。値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 0: なし</li> <li>■ 1: エラー</li> <li>■ 2: 警告</li> <li>■ 3: 情報</li> <li>■ 4: 追跡</li> <li>■ 5: デバッグ</li> </ul> <p>値は、累積的です。デフォルト値は、1 です。</p>

表 13-7 リポジトリのログ・パッケージのパラメータ (続き)

パラメータ	詳細
log_state_level	<p>状態情報が自動的にログに記録されるメッセージのレベルを示します。値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 0: なし</li> <li>■ 1: エラー</li> <li>■ 2: 警告</li> <li>■ 3: 情報</li> <li>■ 4: 追跡</li> <li>■ 5: デバッグ</li> </ul> <p>値は、累積的です。</p>
log_format	<p>状態情報の書式とは異なる、自動的に記録されたコンテキスト情報がとる書式を示します。値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 0: シンプル</li> <li>■ 1: 詳細</li> </ul>
log_file	<p>書き込むログ・ファイルの名前。このファイルがまだ存在しない場合は、作成を試みます。</p>
log_directory	<p>log_file が存在するディレクトリ。このディレクトリは、init.ora データベース・ファイル内で UTL_FILE_DIR プロパティに定義する必要があります。たとえば、次のようになります。</p> <pre>utl_file_dir=/export/home/oracle/IAS904/dblogs</pre> <p>init.ora ファイルを変更する場合は、変更を有効にするためにデータベースを再起動する必要があります。</p>

たとえば、スクリプト logcfg.sql を SQL\*Plus から次のようにして実行できます。

```
@logcfg.sql 3 3 1 portal.log /export/home/oracle/IAS904/logs
```

logcfg.sql を実行すると、使用方法が表示されます。

```
Configure Portal diagnostics
```

```
usage:
```

```
logcfg.sql <log_level> <log_state_level> <log_format> <log_file> <log_directory>
```

```
If for any of the params a null value is specified the existing value will be maintained.
```

```
Log levels:
```

```
0 - None (turn diagnostics off)
```

```
1 - Error
```

```
2 - Warning
```

```

3 - Information
4 - Trace
5 - Debug
Log formats:
0 - Simple
1 - Detailed

```

現在の値も表示されます。

```

Current settings:
Log level:      3
Log state level: 3
Log format:    1
Log file:      portal.log
Log directory: /export/home/oracle/iAS904/dblogs

```

OracleAS Metadata Repository 診断ログ・ファイルを制限するには、次の場所にある SQL スクリプトの `logtrunc.sql` を実行します。

```
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc
```

#### 13.4.1.5.1 リポジトリ・ログ・ファイルの内容

OracleAS Metadata Repository の診断情報の場所は、リポジトリ診断パッケージ・パラメータの `log_file` および `log_directory` によって指示されます。

OracleAS Metadata Repository のログ・ファイルに記録されるメッセージの例を次に示します。

```

[06-AUG-2002 15:02:15] [ERROR] id=(null) ctx=wwsrc_simple_edit.render_simple_edit_
prefs user=PORTAL subscriberId=1 language=us userAgent="Mozilla/5.0" ip=192.0.0.1
ORA-30625:method dispatch on NULL SELF
[START-CALL-STACK]
----- PL/SQL Call Stack -----
object      line      object
handle      number   name
81b35e6c    350      package body PORTAL.WWLOG_API_DIAG
81b35e6c    443      package body PORTAL.WWLOG_API_DIAG
81b35e6c    526      package body PORTAL.WWLOG_API_DIAG
86765ac8    259      package body PORTAL.WWSRC_SIMPLE_EDIT
86765ac8    334      package body PORTAL.WWSRC_SIMPLE_EDIT
84317130    19       package body PORTAL.WWSBR_BASIC_SEARCH
88857980    713      package body PORTAL.WWSBR_SITEBUILDER_PROVIDER
8323ad18    1        anonymous block
87e53d5c    648      package body PORTAL.WWPRO_API_PROVIDER
81ae1e50    2644     package body PORTAL.WWPOB_PAGE
877a0d9c    12       anonymous block
[END-CALL-STACK]

```



```

[START-ERROR-STACK]
ORA-30625:method dispatch on NULL SELF
[END-ERROR-STACK]
[START-QUERY-STRING]
_providerid=102274117
_portletid=14
_mode=5
_title=Basic%20Search
_referencepath=1875_BASICSEARCH_102274117
_back_url=http%3A%2F%2Fmyserver.myplace.com%3A3000%2Fpls%2Fportal%
_portlet_reference=33_31293_33_1_1
[END-QUERY-STRING]

```

この内容は、次のとおりです。

**ORA-30625:method dispatch on NULL SELF:** - メッセージ自体

および、そのコンテキスト情報と状態情報。

**コンテキスト情報** コンテキスト情報は、詳細またはシンプルないずれかの書式で生成されます。これは、`log_format` で指定します。次の例は、書式の詳細を示しています。

**06-AUG-2002 15:02:15:** - 日時

**ERROR:** - メッセージ・レベル

**id=(102733434, 1):** - ECID

**ctx=wwsrc\_simple\_edit.render\_simple\_edit\_prefs:** - メッセージ・コンテキスト

**user=PORTAL:** - データベース・ユーザー

**subscriberId=1:** - サブスクライバ識別子

**language=us:** - グローバリゼーション・サポート言語

**userAgent="Mozilla/5.0":** - ユーザー・エージェント

**ip=192.0.0.1:** - クライアント IP アドレス

シンプルな書式は、詳細な書式の一部であり、次の情報が含まれます。

**06-AUG-2002 15:02:15:** - 日時

**ERROR:** - メッセージ・レベル

**ctx=wwsrc\_simple\_edit.render\_simple\_edit\_prefs:** - メッセージ・コンテキスト

これらの値の一部についてのさらに詳しい情報を [表 13-8](#) に示します。

表 13-8 リポジトリ・コンテキストの属性

値	詳細
クライアント IP アドレス	通常、これは使用しているクライアントのブラウザまたは HTTP プロキシの IP アドレスです。Portal ページ・アセンブリ・プロセスはループバック・コールを使用しているため、IP アドレスは中間層そのものを表すこともできます。
サブスライバ識別子	アクセスされたサブスライバを識別します。
ユーザー・エージェント	使用しているブラウザの説明。

**状態情報** 状態情報は、次のコール・スタックから構成されています。

```
[START-CALL-STACK]
----- PL/SQL Call Stack -----
object      line      object
handle      number    name
81b35e6c    350      package body PORTAL.WWLOG_API_DIAG
81b35e6c    443      package body PORTAL.WWLOG_API_DIAG
81b35e6c    526      package body PORTAL.WWLOG_API_DIAG
86765ac8    259      package body PORTAL.WWSRC_SIMPLE_EDIT
86765ac8    334      package body PORTAL.WWSRC_SIMPLE_EDIT
84317130    19       package body PORTAL.WWSBR_BASIC_SEARCH
88857980    713      package body PORTAL.WWSBR_SITEBUILDER_PROVIDER
8323ad18    1        anonymous block
87e53d5c    648      package body PORTAL.WWPRO_API_PROVIDER
81ae1e50    2644     package body PORTAL.WWPOB_PAGE
877a0d9c    12       anonymous block
[END-CALL-STACK]
```

エラー・スタックを次に示します。

```
[START-ERROR-STACK]
ORA-30625:method dispatch on NULL SELF
[END-ERROR-STACK]
```

次に問合せ文字列を示します。

```
[START-QUERY-STRING]
_providerid=102274117
_portletid=14
_mode=5
_title=Basic%20Search
_referencepath=1875_BASICSEARCH_102274117
_back_url=http%3A%2F%2Fmyserver.myplace.com%3A3000%2Fpls%2Fportal%
_portlet_reference=33_31293_33_1_1
[END-QUERY-STRING]
```

### 13.4.1.5.2 リポジトリ診断ログ・ファイルの登録

Oracle Enterprise Manager 10g には、Log Reader と Log Viewer があります。Log Reader を使用すると、管理者はログ・ファイルをファイル・ベースのログ・リポジトリにアップロードできます。Log Viewer を使用すると管理者はリポジトリにロードされたログ・エントリの表示や問合せを行うことができます。詳細は、13.6 項「Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用」を参照してください。

リポジトリ診断ログ・ファイルのエントリのロードや表示を行うためには、先にログ・ファイルを Oracle Enterprise Manager 10g に登録する必要があります。これを行うには、次のファイルを編集します。

```
ORACLE_HOME/diagnostics/config/registration/PORTAL.xml
```

このファイルには、ログ・ファイルの詳細を反映するようにコピーして拡張できるテンプレート・エントリがあります。テンプレートは、次のとおりです。

```
<logs xmlns="http://www.oracle.com/iAS/EMComponent/ojdl" helpIDLogs="psm_cs_xml_log_info">

  <!--
  <log path="<PATH>" componentId="PORTAL">
  <logreader type="SimpleTextLog">
    <property name="ComponentId" value="PORTAL"/>
    <property name="ModuleId" value="Portal:<INSTANCE>"/>
    <property name="TimestampFormat" value=" [dd-MMM-yyyy HH:mm:ss] "/>
    <property name="TimestampLocale" value="en_US"/>
  </logreader>
  <logviewer ComponentName="ID_VLOGS_PORTAL_REP@ResourceBundle"
    LogType="ERROR"
    LogName="Diagnostics for Portal instance <INSTANCE>"/>
  </log>
  -->

</logs>
```

コピーしたテンプレート・エントリに含まれる情報を次のように変更します。

<PATH>: ログ・ファイルの絶対パスとファイル名。

<INSTANCE>: 定義されている場合、Oracle Enterprise Manager 10g での OracleAS Portal ターゲットの名前。Oracle Enterprise Manager 10g に対応する OracleAS Portal ターゲットがない場合は、OracleAS Portal インスタンスの名前とデータベースの詳細を使用します。たとえば、<portal schema name>-<db service name> のようにします。この値は、Log Viewer でこのログ・エントリを他の OracleAS Portal インスタンスのログ・エントリと区別するために使用します。

新しい PORTAL.xml エントリを保存すると、Log Reader はログ・ファイルの定期的なアップロードを開始し、Log Viewer を使用してログ・ファイルの表示や問合せを行うことができるようになります。

OracleAS Metadata Repository には多数の中間層を通してアクセスするので、次の手順を実行する必要があります。

- リポジトリ診断ログ・ファイルを OracleAS Portal 中間層を監視しているいずれかの Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールのインスタンスに登録します。
- OracleAS Portal データベースが OracleAS Portal 中間層以外のマシンにある場合は、ネットワーク・ファイル・システムからログ・ファイルにアクセスできるようにします。
- 複数の中間層環境でログの相関を作成するには、OracleAS Portal 中間層を監視する各 Oracle Enterprise Manager 10g インスタンスにリポジトリ診断ログ・ファイルに登録する必要があります。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager 10g を使用して、使用しているインフラストラクチャ・サービスを変更する場合は、`ORACLE_HOME/diagnostics/config/registration/`にある `PORTAL.xml` ファイル内のリポジトリ診断ログ・ファイルの場所を更新する必要があります。

---

---

### 13.4.1.6 OracleAS Web Cache

Oracle Application Server Web Cache のイベントとエラーは、イベント・ログに格納されます。イベント・ログは、どのドキュメントまたはオブジェクトがキャッシュに挿入されたかを確認するのに役立ちます。リスニング・ポートの競合または起動や停止の問題を特定することもできます。デフォルトでは、イベント・ログのファイル名は `event_log` であり、UNIX では `ORACLE_HOME/webcache/logs` に、Windows では `ORACLE_HOME¥webcache¥logs` に格納されています。

**関連項目：** 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』

## 13.5 OracleAS Portal Diagnostics Assistant の使用

OracleAS Portal のインストール後に問題のトラブルシューティングを行う場合は、OracleAS Portal Diagnostic Assistant を使用します。Portal へのアクセスの問題から、Portal 内の異なるレベルでユーザーがエラーに直面するなどの様々な問題があります。

OracleAS Portal Diagnostic Assistant からの結果を調べて、問題を診断できます。また、結果をオラクル社カスタマ・サポート・センターにアップロードして、問題のトラブルシューティングを頼むこともできます。

生成されるレポートには、次のものが含まれます。

- OracleAS Portal リポジトリのデータベース情報
- OracleAS Single Sign-On のデータベース情報
- Oracle Internet Directory の診断レポート
- Oracle Text の診断レポート
- Apache のエラー・ログ・ファイル分析

また、利便性のために、すべての OracleAS Portal 関連の構成ファイルおよびログ・ファイルが収集され、圧縮されます。収集されたすべての情報の詳細説明は、ディレクトリ `ORACLE_HOME/portal/admin/utills/tshoot` 内の `README` ファイルを参照してください。

OracleAS Portal Diagnostic Assistant を実行するたびに、生成されたファイル用の新しいディレクトリが `ORACLE_HOME/portal/admin/utills/tshoot` 下に作成されます。ディレクトリ名は、たとえば、`20030623132344` のように、タイムスタンプ書式をとります。これには次のような意味があります。

年:2003

月:06

日:23

時:13

分:23

秒:44

OracleAS PortalDiagnostic Assistant の実行後、該当するディレクトリに移動して、ブラウザのウィンドウで `pda.htm` という名前の HTML レポートを開きます。用意されているリンクを使用してレポート内を移動し、診断情報を確認します。

オラクル社カスタマ・サポート・センターに問題のトラブルシューティングを頼む場合は、生成された ZIP ファイルに `PDA<directory_name>.zip` (例 `PDA20030623132344.zip`) という名前を付けてアップロードします。

OracleAS Portal Diagnostic Assistant の使用方法の詳細は、  
`ORACLE_HOME/portal/admin/utils/tshoot` ディレクトリ内の `readme.htm` を参照し  
てください。

## OracleAS Portal Diagnostic Assistant の実行

OracleAS Portal Diagnostic Assistant を使用して診断情報を生成するには、次の手順を実行  
します。

1. Portal Center (<http://portalcenter.oracle.com>) の「Support/Upgrade」セク  
ションで、OracleAS Portal Diagnostic Assistant の最新の更新およびパッチ情報を確認  
します。

最新の OracleAS Portal Diagnostic Assistant スクリプトをダウンロードします。  
「Support/Upgrade」リンクは、「Product Information」セクションにあります。

2. 環境変数 `ORACLE_HOME` を正しい OracleAS Portal 中間層の Oracle ホーム・ディレク  
トりに設定します。

OracleAS Portal Diagnostic Assistant を `ORACLE_HOME` データベースから実行しようと  
すると、失敗し、診断情報は収集されません。

3. `ORACLE_HOME/portal/admin/utils/tshoot` ディレクトリに移動し、  
`ptshoot.pl` スクリプトを実行します。

```
ORACLE_HOME/perl/bin/perl ptshoot.pl
```

ヘルプ情報を得るには、引数を指定しないで `ptshoot.pl` を実行します。

4. ブラウザのウィンドウで最新の HTML レポート (`pda.htm`) を開き、OracleAS Portal  
の問題点の診断に役立てます。

## 13.6 Application Server Control コンソールの Log Viewer の使用

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して、次の Oracle Application Server ログ・ファイルからのエントリの表示や問合せを行い、OracleAS Portal に関連する問題を診断します。関連する Oracle Application Server のコンポーネントのログ・ファイルには、次のものがあります。

- Portal: `<instance>`; `<customer_specified_log_name>` という名前の付いた、Portal インスタンスごとに 1 つ診断エラー・ログ・ファイルを表示します。このログ・ファイルは、関連する OracleAS Metadata Repository によって生成されます。
- HTTP\_Server: `error_log` および `access_log` という名前の複数のエラーおよびアクセス・ログ・ファイルを表示します。このログ・ファイルには、すべての関連する `mod_plsql` ログ情報が含まれています。
- OC4J\_Portal: `application.log` という名前の複数のアプリケーション・ログ・ファイルを表示します。このログ・ファイルには、すべての関連する PPE ログ情報が含まれています。
- JPDK: スタンドアロン OC4J 内の JPDK サンプル・プロバイダの場合、場所は `j2ee/home/application-deployments/jpdk/application.log` になります。Oracle Application Server の中間層では、場所は似ていますが、デフォルトのアイランド用の追加のディレクトリがあります。
- Web Cache: `event_log` および `access_log` という名前のエラーおよびアクセスのログ・ファイルを表示します。

登録手順を完了してからでなければ、OracleAS Metadata Repository ログ・ファイルを Application Server Control コンソールの Log Viewer での使用することはできません。詳細は、[13.4.1.5.2 項「リポジトリ診断ログ・ファイルの登録」](#)を参照してください。

JPDK OC4J インスタンスが OracleAS Portal の中間層の Oracle ホームにない場合は、そのログ・ファイルはローカルの Application Server Control コンソールのインスタンスを使用しないと表示できません。診断の相関（後述）を作成する必要がある場合は、OracleAS Metadata Repository ログ・ファイルをリモートに配置する場合の手順と同様のリモート登録手順に従う必要があります。

Application Server Control コンソールの Log Viewer でログ・ファイル・エントリを表示することに加えて、[13.4 項「OracleAS Portal の問題の診断」](#)で説明されている ECID 値を使用してログ・ファイル間でエントリの相関を作成することによって、詳細な診断を行うこともできます。このドリルダウンの相関は、Application Server Control コンソールの Log Viewer に自動的に表示されます。

ログ・ファイル・エントリを表示するには、Application Server Control コンソールで「ログ」リンクをクリックします。各 Application Server Control コンソールのコンポーネントのホーム・ページの一番上と一番下にこのリンクがあります。

**関連項目：** Log Viewer の使用方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「診断ログ・ファイルの管理」を参照してください。この章では、診断ログ・ファイル情報に対する高度な問合せ、ログ・リポジトリ内での診断メッセージ（Oracle Application Server コンポーネントから収集）の検索、およびログ・ファイルおよびコンポーネント間でのメッセージの相関作成の方法についても説明します。

図 13-4 に、「ログの表示」ページで選択した Oracle Application Server コンポーネントの例を示します。

図 13-4 Application Server Control コンソールの「ログの表示」ページ





## 13.7 エクスポートおよびインポートのトラブルシューティング

インポートおよびエクスポートについての説明は、Oracle Technology Network のディスカッション・フォーラム・サイトにアクセスし、同じ URL からエクスポート / インポートを検索してください。

詳細なエラー・メッセージの説明、原因と対処については、『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』の「エクスポート / インポートのエラー・メッセージ」を参照してください。

---

---

**注意：** OracleAS Portal の将来のリリースと以前のリリースの手順と最善の使用方法は異なるため、OracleAS Portal 10g (9.0.4) 固有のドキュメントを参照してください。

---

---

## 13.8 検索機能のトラブルシューティング

この項では、OracleAS Portal または Oracle Text の検索機能を使用しているときに発生する共通の問題についての情報を提供します。

### 13.8.1 多くのページ・グループまたは検索属性が選択されている場合の問題

検索条件に多数の属性が含まれ、ユーザーが検索するページ・グループを選択でき、選択可能なページ・グループのリストが多すぎる場合、検索機能の一貫性がなくなる可能性があります。この問題は、URL のサイズ制限のために発生します。

次に発生する可能性がある問題の例を示します。

- 「保存された検索」、「一括操作」、「編集」などのリンクが機能しません。これらのリンクは、選択する属性またはページ・グループが少ないと機能しないことに注意してください。
- 別のタブを選択したときに、検索結果ページの検索条件が失われることがあります。
- 検索の保存中に検索結果の一部が失われることがあります。さらに、検索を再実行したときに一部の属性が失われることもあります。

これに対処するには、ユーザーが選択できる属性、ページ・グループまたは両方の数を減らします。

## 13.8.2 PL/SQL 属性を検索できない

PL/SQL 属性の検索条件を定義した場合でも、それが無視され、予想どおりの検索結果が返されません。

## 13.8.3 Oracle Text のインストールの問題のトラブルシューティング

Oracle Text 関連の問題が発生する場合は、TEXTTEST ユーティリティを使用して、Oracle Text 機能がインストールされ、正しく設定されているかを確認します。付録 H「TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認」を参照してください。

## 13.9 連携型 Portal アダプタのトラブルシューティング

この項では、連携型 Portal アダプタの使用中に発生する可能性がある問題とその対処方法について説明します。

### 連携型 Portal アダプタを介してページ・ポートレットを表示する場合の既知の制限事項

- 詳細の表示モードは機能しません。つまり、ポートレットに関する詳細情報を表示するリンクとしてポートレット名を表示できません。
- ページ・ポートレットに複数のタブが含まれている場合は、タブをクリックすると、深いリンクになり、描画されるページはページ全体に表示されます。つまり、元のページ内にポートレットとして表示されません。
- 連携型 Portal アダプタを介してページを表示した場合、ページのバナーを含むナビゲーション・ページは正しく描画されません。たとえば、通常のページ・ポートレットでは「カスタマイズ」リンクによって、コンテンツ・ページのカスタマイズ・オプションが表示されますが、リモートのページ・ポートレットでは表示されません。さらに、連携型 Portal アダプタを介して表示されたページ・ポートレットには、コンテンツ・ページのバナーが表示されませんが、通常のページ・ポートレットの場合はバナーが表示されません。
- ページ・ポートレットにナビゲーション・ページ・ポートレットが含まれ、そこにサブ・ページ領域が含まれている場合、連携型 Portal アダプタを介して表示されたページ・ポートレットにはサブ・ページ領域は表示されません。リモート以外のページ・ポートレットの場合は、その領域に、ポートレットを含むコンテンツ・ページのサブページが表示されます。

## 13.10 OracleAS Portal のエラー

エラー・メッセージの詳細は、『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』を参照してください。このガイドには、次の項があります。

- インストールのエラー・メッセージ
- Oracle Application Server Web Cache のエラー・メッセージ
- セキュリティのエラー・メッセージ
- ポートレット開発のエラー・メッセージ
- アップグレードのエラー・メッセージ
- エクスポート / インポートのエラー・メッセージ
- その他のエラー・メッセージ



# 第IV部

---

## 付録

第4部の内容：

- 付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」
- 付録 B 「OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用」
- 付録 C 「OracleAS Portal のインストールおよび 構成スクリプトの使用」
- 付録 D 「Parallel Page Engine の構成」
- 付録 E 「Oracle Application Server 構成ファイルの使用」
- 付録 F 「JavaServer Pages と OracleAS Portal との統合」
- 付録 G 「`wwv_context` API の使用」
- 付録 H 「TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認」
- 付録 I 「Web クリップिंगの管理」
- 付録 J 「仮想プライベート Portal の設定と管理」



---

## Portal 依存性設定ファイルの使用

OracleAS Portal は、コンポーネントの Oracle Application Server Web Cache および Oracle Internet Directory に依存します。Oracle Application Server のインストール後に、これらのコンポーネントの微調整や構成を行う必要がある場合があるため、この依存性を理解することが重要です。

Portal 依存性設定ファイルの使用このファイルには、依存するすべてのコンポーネントからの構成データが集中的に格納され、構成が変更されるとファイルの内容が更新されます。

次の目的に Portal 依存性設定ファイルを使用できます。

- OracleAS Portal インスタンスが使用する設定値の確認
- Oracle Application Server Metadata Repository 内の設定の更新

この付録では、次の 2 つの項で Portal 依存性設定および Portal 依存性設定ツールについて説明します。

- [Portal 依存性設定ファイルの詳細](#)
- [構成ツール](#)

## A.1 Portal 依存性設定ファイルの詳細

次の各項で Portal 依存性設定ファイルの詳細を説明します。

- [名前と場所](#)
- [Portal 依存性設定ファイルの更新](#)
- [構成要素](#)
- [Portal 依存性設定ファイルのサンプル](#)
- [Portal 依存性設定ファイル内でのインストール後のマッピング](#)
- [Portal 依存性設定ファイルでの一般的な構成のマッピング](#)

### A.1.1 名前と場所

Portal 依存性設定ファイルの名前は、`iasconfig.xml` で、デフォルトで `ORACLE_HOME/portal/conf` にあります。この `ORACLE_HOME` は、OracleAS Portal および Oracle Application Server Wireless の中間層のホームです。

Portal 依存性設定ファイルにアクセスするツールを使用するときには、環境変数 `IASCONFIG_LOC` に、たとえば次のような、ファイルが格納されているディレクトリを設定して、デフォルトの場所を上書きすることができます。

```
set IASCONFIG_LOC=/usr/local/ias904
```

### A.1.2 Portal 依存性設定ファイルの更新

ネットワーク・ファイル・システムを介して Portal 依存性設定ファイルにアクセスできる場合は、複数のホスト間でファイルを共有できるので、ファイルを変更するたびに手動でレプリケートする必要はありません。シンボリック・リンクをサポートするオペレーティング・システムでインストールを実行する場合は、環境変数 `IASCONFIG_LOC` を設定するのではなく、共有ファイルを参照するこのメカニズムを使用することをお勧めします。

ただし、ネットワークを介して Portal 依存性設定ファイルにアクセスできない場合は、サイトのトポロジの変更を反映してファイルを最新の状態に保つ必要があります。Portal 依存性設定ファイルは、使用する OracleAS Web Cache、Oracle Internet Directory および Oracle Enterprise Manager の詳細で Portal リポジトリを構成するのに使用します。このファイルをサイトの個々の中間層にコピーする必要はありませんが、このファイルでモデル化された OracleAS Portal の構成に影響するコンポーネントへの変更は、ファイルにも反映されている必要があります。

Portal 依存性設定ファイルを最新の状態に保つには、[5.3 項「ロード・バランス・ルーターを使用する複数の中間層の構成」](#)に定義された構成を使用します。



1. Portal 依存性設定ファイルは、インストール時の 5.3.1 項「手順 1: 単一の Portal および Wireless 中間層 (M1) のインストール」で最初に作成されます。例 5-1「最初の中間層インストール後の `iasconfig.xml`」のようになります。

このファイルは、マシン `m1.abc.com` 上の、通常、インストールされた中間層の `ORACLE_HOME/portal/conf` に置かれます。

2. 手順 1: 単一の Portal および Wireless 中間層 (M1) のインストールで、Portal 依存性設定ファイルは例 5-2「ファーム要素を含むように編集された `iasconfig.xml` ファイル」に示すように手動で変更されます。

このファイルは、マシン `m1.abc.com` 上の、通常、手順 1 でインストールした中間層の `ORACLE_HOME/portal/conf` に置かれます。このファイルを変更した後は、A.2.1 項「Portal 依存性設定ツール」に示すように `ptlconfig` ツールを使用します。

`iasconfig.xml` の OracleAS Web Cache、Oracle Internet Directory または Oracle Enterprise Manager 10g の設定を今後変更する場合は、Application Server Control コンソールを使用するか、`m1.abc.com` 上で手動で行う必要があります。変更後、再度 `ptlconfig` ツールを使用する必要もあります。

---

**注意：** OracleAS Portal の OracleAS Web Cache の設定への変更は、7.3.3 項「Portal の Web Cache 設定」で説明したように、「Portal の Web Cache 設定」ページでも行うことができます。

通常、OracleAS Portal によって処理されるホスト名とポート番号は、OracleAS Web Cache のホスト名とポート番号です。これは、単純な構成では、ブラウザの要求が OracleAS Web Cache へ直接送られるためです。ただし、ロード・バランス・ルーター (LBR)、または OracleAS Web Cache のフロントエンドに設定された逆プロキシ・サーバーがある構成では、このページに定義されたホスト名とポート番号は、LBR または逆プロキシ・サーバーのものを反映している必要があります。

この構成で、OracleAS Web Cache の失効メッセージが、LBR または逆プロキシ・サーバーではなく、OracleAS Web Cache ホストに直接送信されるようにできます。公開されたホスト名が OracleAS Web Cache の失効化で使用されるホスト名と異なる場合は、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール内の「Portal の Web Cache 設定」ページ、または Portal 依存性設定ファイル `iasconfig.xml` を使用して、これらの設定を行うことはできません。そのかわりに、MIDTIER モードで `-type OHS` を指定し、`host` パラメータを使用して LBR または逆プロキシ・サーバーのホスト名を指定し、`-chost` パラメータで OracleAS Web Cache のホスト名を定義して、OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を使用する必要があります。

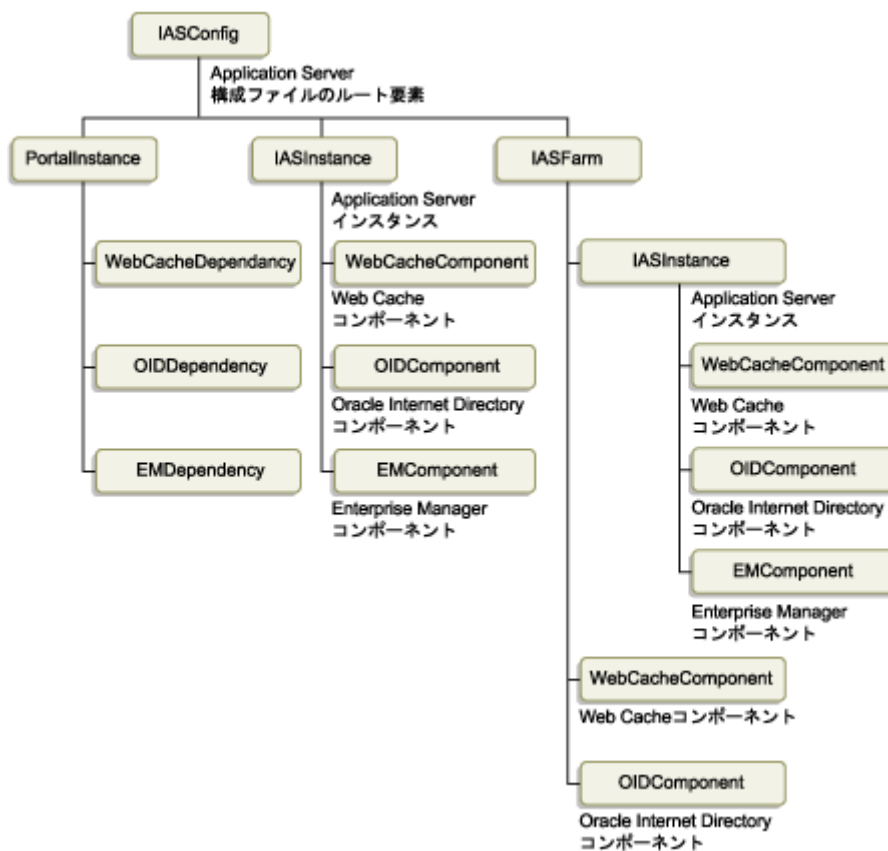
---

- 手順 5: 既存の Portal を実行するための新しい中間層 (M2) の構成で、m2.abc.com 上の Portal 依存性設定ファイルを、m2.abc.com 上の iasconfig.xml ファイルに定義された設定値を使用して手動で更新する必要があります。

### A.1.3 構成要素

Portal 依存性設定ファイルは XML ファイルであり、Oracle Application Server の特定のコンポーネントの設定および Portal インスタンスのそれらのコンポーネントに対する依存性を記述する多くの要素から構成されます。図 A-1 は、Portal 依存性設定ファイルでモデル化できるすべての要素を示しています。Portal 依存性設定ファイルの定義は、`ORACLE_HOME/portal/conf` にあるスキーマ・ファイルの `iasconfig.xsd` でモデル化されています。

図 A-1 Portal 依存性設定ファイルの要素



個々の要素を次に示します。

- [IASFarm](#)
- [IASInstance](#)
- [PortalInstance](#)
- [WebCacheComponent](#)
- [OIDComponent](#)
- [EMComponent](#)
- [WebCacheDependency](#)
- [OIDDependency](#)
- [EMDependency](#)

## IASFarm

IASFarm 要素は、Oracle Application Server インスタンスの論理ファームを表します。

**表 A-1 要素 IASFarm**

属性名	タイプ	説明
Name	文字列	一意のファーム名。
Host	文字列	論理ホスト・マシン。

## IASInstance

IASInstance 要素は、Oracle Application Server インスタンスの論理ファームを表します。

**表 A-2 要素 IASInstance**

属性名	タイプ	説明
Name	文字列	Oracle Application Server インスタンス名 (ias904.host.domain など)。
Host	文字列	ホスト・マシン。
Version	文字列	Oracle Application Server のリリース。

## PortallInstance

これらは、OracleAS Portal インスタンスの設定です。

**表 A-3 要素 PortallInstance**

属性名	タイプ	説明
DADLocation	文字列	OracleAS Portal DAD の名前と場所 (/pls/portal など)。
ConnectString	文字列	OracleAS Metadata Repository 接続文字列。
SchemaUsername	整数	OracleAS Portal スキーマのユーザー名。
SchemaPassword	文字列	OracleAS Portal スキーマのパスワード。

## WebCacheComponent

これらは、OracleAS Web Cache の設定です。

**表 A-4 要素 WebCacheComponent**

属性名	タイプ	説明
ListenPort	整数	リスニング・ポート。
AdminPort	整数	管理用ポート。
InvalidationPort	整数	失効ポート。
InvalidationUsername	文字列	失効ユーザー名。
InvalidationPassword	文字列	失効パスワード。
SSLEnabled	文字列	リスニング・ポートが SSL 対応かどうかを示すフラグ。この値は、TRUE または FALSE のいずれかになります。

## OIDComponent

これらは、Oracle Internet Directory の設定です。

**表 A-5 要素 OIDComponent**

属性名	タイプ	説明
AdminPassword	文字列	Oracle Internet Directory の管理パスワード。
PortSSLEnabled	文字列	HTTP ポートで SSL 対応かどうかを示すフラグ。この値は、TRUE または FALSE のいずれかになります。

表 A-5 要素 OIDComponent (続き)

属性名	タイプ	説明
LDAPPort	整数	Oracle Internet Directory が稼働している LDAP ポート。
AdminDN	文字列	Oracle Internet Directory 管理識別名。

## EMComponent

これらは、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの設定です。

表 A-6 要素 EMComponent

属性名	タイプ	説明
ConsoleHTTPPort	整数	リスニング・ポート。
SSLEnabled	文字列	リスニング・ポートが SSL 対応かどうかを示すフラグ。この値は、TRUE または FALSE のいずれかになります。

## WebCacheDependency

これは、使用している OracleAS Web Cache への OracleAS Portal インスタンスの参照です。

表 A-7 要素 WebCacheDependency

属性名	タイプ	説明
ContainerType	文字列	OracleAS Web Cache コンポーネントが稼働しているコンテナのタイプ。これは、IASInstance または IASFarm のいずれかです。
Name	文字列	ContainerType に応じた IASInstance 名または一意の IASFarm 名

## OIDDependency

これは、使用している Oracle Internet Directory への OracleAS Portal インスタンスの参照です。

**表 A-8 要素 OIDDependency**

属性名	タイプ	説明
ContainerType	文字列	Oracle Internet Directory コンポーネントが稼働しているコンテナのタイプ。これは、IASInstance または IASFarm のいずれかです。
Name	文字列	ContainerType に応じた IASInstance 名または一意の IASFarm 名

## EMDependency

この OracleAS Portal インスタンスを管理する Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールです。

**表 A-9 要素 EMDependency**

属性名	タイプ	説明
ContainerType	文字列	Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールのコンポーネントを管理しているコンテナのタイプ。これは、IASInstance に設定する必要があります。
Name	文字列	IASInstance 名。

## A.1.4 Portal 依存性設定ファイルのサンプル

次のXMLは、サンプルのPortal 依存性設定ファイルの内容を表しています。

```
<IASConfig XSDVersion="1.0">

  <IASInstance Name="ias-1" Host="abc.company.com" Version="9.0.4">
    <WebCacheComponent AdminPort="3001" ListenPort="3002" InvalidationPort="3003"
      InvalidationUsername="orcladm" InvalidationPassword="orcladm" SSLEnabled="false"/>
  </IASInstance>

  <IASInstance Name="ias-2" Host="xyz.company.com" Version="9.0.4">
    <OIDComponent AdminPassword="orcladm" PortSSLEnabled="false" LDAPPort="3002"
      AdminDN="cn=orcladmin"/>
    <EMComponent ConsoleHTTPPort="1814" SSLEnabled="false"/>
  </IASInstance>

  <PortalInstance DADLocation="/pls/portal" SchemaUsername="portal"
    SchemaPassword="welcome1" ConnectString="xyz.company.com:1521:s901dev3">
    <WebCacheDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-1"/>
    <OIDDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-2"/>
    <EMDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-2"/>
  </PortalInstance>

</IASConfig>
```

この例では、OracleAS Portal インスタンスは、次のようになります。

- データベース・アクセス記述子 (DAD) の /pls/portal からアクセスされます。
- 次のものに依存します。
  - Oracle Application Server インスタンスの iAS-1 で実行されている OracleAS Web Cache コンポーネント
  - Oracle Application Server インスタンスの iAS-2 で実行されている Oracle Internet Directory コンポーネント
  - Oracle Application Server インスタンスの iAS-2 で実行されている Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールのコンポーネント

## A.1.5 Portal 依存性設定ファイル内でのインストール後のマッピング

OracleAS Portal をインストールすると、インストールされたものに基づいて、OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) は、適切なエントリを Portal 依存性設定ファイルに作成します。

Application Server のインストールでは、OracleAS Portal の Oracle Application Server Web Cache および Oracle Internet Directory に対する依存性が Portal 依存性設定ファイルに追加されます。インストール時に重複するエントリが検出された場合は、既存の情報は更新されません。そのかわりに、すでにエントリが存在することを示す警告がインストール・ログ・ファイルに出力されます。

**関連項目：** 異なるインストール・タイプの詳細は、第 3 章「OracleAS Portal のインストール」を参照してください。

---

**注意：** デフォルトでは、Portal 依存性設定ファイルは `ORACLE_HOME/portal/conf` からアクセスされます。この `ORACLE_HOME` は、OracleAS Portal および Oracle Application Server Wireless の中間層のホームです。ただし、環境変数 `IASCONFIG_LOC` が設定されている場合は、この変数に定義された場所が使用されます。

---

- 1 台のマシンに OracleAS Portal と OracleAS Wireless がインストールされており、OracleAS Web Cache と Oracle Internet Directory のインスタンスがすでにそのマシンに存在する場合、Portal 依存性設定ファイルに対するエントリは次のように作成されます。

```
<IASConfig XSDVersion="1.0">
  <IASInstance Name="ias-1" Host="abc.company.com" Version="9.0.4">
    <OIDComponent AdminPassword="orcladm" PortSSLEnabled="false"
LDAPPort="3002" AdminDN="cn=orcladmin"/>
  </IASInstance>
  <IASInstance Name="ias-2" Host="abc.company.com" Version="9.0.4">
    <WebCacheComponent AdminPort="3001" ListenPort="3002"
InvalidationPort="3003" InvalidationUsername="orcadm"
InvalidationPassword="orcladm" SSLEnabled="false"/>
  </IASInstance>
  <PortalInstance DADLocation="/pls/portal" SchemaUsername="portal"
SchemaPassword="welcome1" ConnectString="xyz.company.com:1521:s901dev3">
    <WebCacheDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-2"/>
    <OIDDependency ContainerType="IASInstance" Name="ias-1"/>
  </PortalInstance>
```



```
</IASConfig>
```

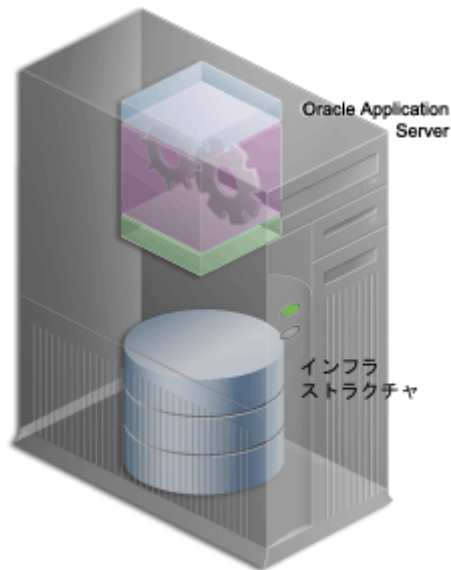
## A.1.6 Portal 依存性設定ファイルでの一般的な構成のマッピング

この項では、推奨するトポロジで Portal 依存性設定ファイルがどのようになるかを示します。

### OracleAS Portal および OracleAS Wireless の開発者の構成：中型マシン

この一般的な構成のトポロジを図 A-2 に示します。

図 A-2 OracleAS Portal および OracleAS Wireless の開発者の構成



この構成では、アプリケーション・サーバーとインフラストラクチャの両方が、Host 1 という同じマシンにインストールされていると仮定しています。

Infrastructure を Oracle ホーム OH\_2 の Host 1 にインストールするときには、Portal 依存性設定ファイルは変更されません。

Oracle ホームの OH\_1 の Host 1 に OracleAS Portal および OracleAS Wireless をインストールし、OH\_2 にある Oracle Internet Directory インスタンスを参照するときには、Portal 依存性設定ファイルは次のようになります。

```
<IASConfig XSDVersion="1.0">
```

```
<IASInstance Name="host1.OH_1" Host="host1.us.oracle.com" Version="9.0.4">
  <WebCacheComponent AdminPort="3001" ListenPort="7778" InvalidationPort="3003"
  InvalidationUsername="orcadm" InvalidationPassword="orcladm" SSLEnabled="false"/>
</IASInstance>

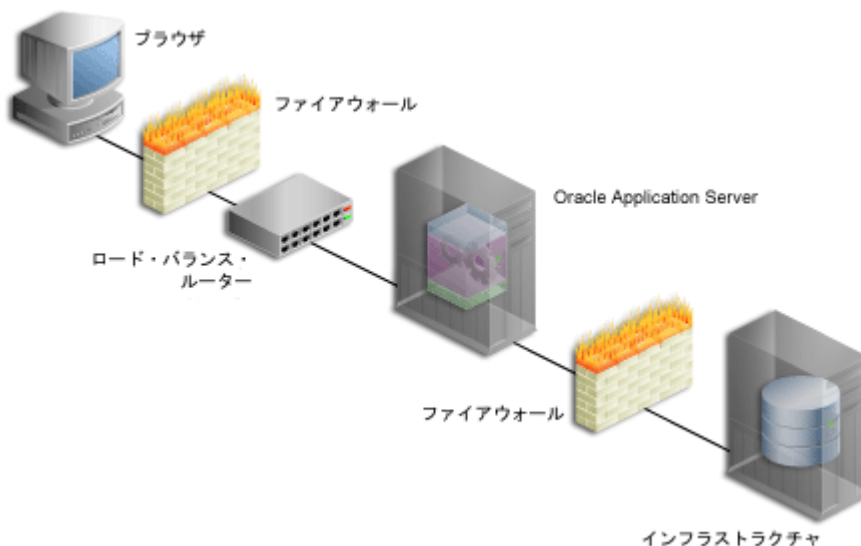
<IASInstance Name="host1.OH_2" Host="host1.us.oracle.com" Version="9.0.4">
  <OIDComponent AdminPassword="orcladm" PortSSLEnabled="false" LDAPPort="3002"
  AdminDN="cn=orcladmin"/>
</IASInstance>

<PortalInstance DADLocation="/pls/portal" SchemaUsername="portal"
  SchemaPassword="welcome1" ConnectString="host1.us.oracle.com:1521:iasdb">
  <WebCacheDependency ContainerType="IASInstance" Name="host1.OH_1"/>
  <OIDDependency ContainerType="IASInstance" Name="host1.OH_2"/>
</PortalInstance>

</IASConfig>
```

**企業データ・センターの構成：複数の部門が同じデータ・センターを共有**  
この一般的な構成のトポロジを [図 A-3](#) に示します。

**図 A-3 企業データ・センターの構成**



この構成では、アプリケーション・サーバーとインフラストラクチャが異なるマシンにインストールされていると仮定しています。

インフラストラクチャ全体をインストールするときには、Portal 依存性設定ファイルは変更されません。

図 A-3 に示すように、OracleAS Portal のフロントエンドに設定する OracleAS Web Cache クラスタはまだ認識されていません。アプリケーション・サーバー (Portal および Wireless インストール) を Oracle ホーム OH\_1 のホスト Host 1 にインストールし、ホスト Host 2 の Oracle Internet Directory を参照するときには、構成は次のようになります。

```
<IASConfig XSDVersion="1.0">
  <IASInstance Name="host2.OH_2" Host="host2.us.oracle.com" Version="9.0.4">
    <OIDComponent AdminPassword="orcladm" PortSSLEnabled="false" LDAPPort="3002"
AdminDN="cn=orcladmin"/>
  </IASInstance>

  <IASInstance Name="host1.OH_1" Host="host3.us.oracle.com" Version="9.0.4">
    <WebCacheComponent AdminPort="3001" ListenPort="7778" InvalidationPort="3003"
InvalidationUsername="orcladm" InvalidationPassword="orcladm" SSLEnabled="false"/>
  </IASInstance>

  <PortalInstance DADLocation="/pls/portal" SchemaUsername="portal"
SchemaPassword="welcome1" ConnectString="host1.us.oracle.com:1521:iasdb">
    <WebCacheDependency ContainerType="IASInstance" Name="host1.OH_1"/>
    <OIDDependency ContainerType="IASInstance" Name="host2.OH_2"/>
  </PortalInstance>
</IASConfig>
```

OracleAS Web Cache を Host 1 上のアプリケーション・サーバーのフロントエンドに設定する場合は、手動で Portal 依存性設定ファイルを編集する必要があります。まず、既存の OracleAS Web Cache エントリを削除し、ファームに属する OracleAS Web Cache エントリを作成します。変更した Portal 依存性設定ファイルは、次のようになります。

```
<IASConfig xmlns="http://www.oracle.com/ias/iasConfigFile" XSDVersion="1.0">
  <IASInstance Name="host2.OH_2" Host="host2.us.oracle.com" Version="9.0.4">
    <OIDComponent AdminPassword="orcladm" PortSSLEnabled="false" LDAPPort="3002"
AdminDN="cn=orcladmin"/>
  </IASInstance>

  <IASFarm name="Farm_1" host="frontend.us.oracle.com">
    <WebCacheComponent AdminPort="3001" ListenPort="7778" InvalidationPort="3003"
InvalidationUsername="orcladm" InvalidationPassword="orcladm" SSLEnabled="false"/>
  </IASFarm>
</IASConfig>
```

```
<PortalInstance DADLocation="/pls/portal" SchemaUsername="portal"
SchemaPassword="welcome1" ConnectString="host1.us.oracle.com:1521:iasdb">
  <WebCacheDependency ContainerType="IASFarm" Name="Farm_1"/>
  <OIDDependency ContainerType="IASInstance" Name="host2.OH_2"/>
</PortalInstance>

</IASConfig>
```

これで OracleAS Portal インスタンスは、このインスタンスのフロントエンドに設定された仮想 OracleAS Web Cache を参照するようになりました。

最後に、次のように `ptlconfig` を実行して、OracleAS Metadata Repository に格納された設定を変更します。

```
ptlconfig -encrypt
ptlconfig -all
```

## A.2 構成ツール

次の各項では、利用可能な構成ツールについて、また様々なトポロジでの Portal 依存性設定ファイルの状態についてさらに詳しく説明します。

- [Portal 依存性設定ツール](#)
- [Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール](#)

### A.2.1 Portal 依存性設定ツール

`iasconfig.xml` 内の構成の設定で OracleAS Metadata Repository を更新するには、スクリプト `ptlconfig` を使用する必要があります。このスクリプトで次のことを実行できます。

- Portal 依存性設定ファイルで定義された特定の Portal インスタンスに対して OracleAS Metadata Repository を更新する。
- Portal 依存性設定ファイルに定義されたすべての Portal インスタンスに対して OracleAS Metadata Repository を更新する。
- Portal 依存性設定ファイル内の平文のパスワードをすべて暗号化する。
- Portal 依存性設定ファイルに定義されたとおりに、OracleAS Web Cache、Oracle Internet Directory、Oracle Enterprise Manager 10g および OracleAS Portal サイトのデータを更新する。

構成スクリプト・ファイルの名前は、`ptlconfig` (UNIX) および `ptlconfig.bat` (Windows) です。このファイルは、`ORACLE_HOME /portal/conf` にあります。この `ORACLE_HOME` は、OracleAS Portal および OracleAS Wireless の中間層のホームです。

このスクリプトは、次のように使用できます。

```
ptlconfig (-all | -dad <dad>) [-wc] [-oid] [-site] [-em] | -encrypt
```

表 A-10 ptlconfig パラメータ

パラメータ	説明	例
-all	Portal 依存性設定ファイルからすべての OracleAS Portal インスタンスを更新します。	ptlconfig -all
-dad	Portal の DAD 名。Portal 依存性設定ファイルから特定の OracleAS Portal インスタンスを更新するために使用します。	ptlconfig -dad portal
-encrypt	Portal 依存性設定ファイル内の任意の平文のパスワードを暗号化します。	ptlconfig -encrypt
-wc	Portal 依存性設定ファイルに定義されたとおりに OracleAS Web Cache データを更新します。	ptlconfig -dad portal -wc
-oid	Portal 依存性設定ファイルに定義されたとおりに Oracle Internet Directory データを更新します。	ptlconfig -all -oid
-site	Portal 依存性設定ファイルに定義されたとおりに OracleAS Portal を OracleAS Single Sign-On のためのパートナー・アプリケーションとして構成します。	ptlconfig -dad portal -site
-em	Portal 依存性設定ファイルに定義されたとおりに Oracle Enterprise Manager 10g データを更新します。	ptlconfig -dad portal -em

このスクリプトを実行すると、ログ・ファイルの ptlconfig.log がディレクトリの `ORACLE_HOME /portal/logs` に作成され、ここに OracleAS Metadata Repository 上で実行された操作が記録されます。

## A.2.2 Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールでは、OracleAS Portal インスタンスとこのインスタンスが依存するコンポーネントをどのように統合するかも設定できます。Portal Web Cache 設定を構成するために Application Server Control コンソールを使用すると、ログ・ファイル `ptlemcfg.log` が `ORACLE_HOME/portal/logs` ディレクトリに作成されます。このログ・ファイルには、OracleAS Metadata Repository で実行された操作についての情報が含まれています。詳細は、[第7章「OracleAS Portal の監視と管理」](#)を参照してください。

---

# OracleAS Portal Configuration Assistant の コマンドライン・ユーティリティの使用

OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) は、Oracle Application Server Metadata Repository の OracleAS Portal スキーマのインストールおよび構成に使用する Java ベースの構成ツールです。

標準の Oracle Application Server インストールでは、Oracle Universal Installer (OUI) がインストール後のフェーズで OPCA を自動的に起動します。OPCA をスタンドアロンで起動することもできます。

Oracle Application Server のインストールでは、次の 2 つのフェーズで OracleAS Portal のインストールが実行されます。

- Oracle Application Server Infrastructure インストール・タイプの場合、OracleAS Metadata Repository インストール・オプションには、OracleAS Portal スキーマが格納されているデータベースがあります。OracleAS Portal スキーマは、Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) を通じて既存のデータベースにインストールすることもできます。

**関連項目：** OracleAS Portal のインストール方法や Portal リポジトリを既存のデータベースにインストールする方法については、[3.1 項「インストール・プロセスの機能」](#)を参照してください。

- Oracle Application Server (中間層) のインストール・タイプでは、中間層コンポーネントに必要な構成が行われるため、OracleAS Metadata Repository が使用されます。

OracleAS Portal には、スタンドアロン・モードで OPCA を起動するコマンドライン・スクリプト `ptlasst` が用意されています。この付録では、`ptlasst` の使用方法と、スタンドアロン・モードで利用できる構成オプションについて説明します。

この章の内容：

- [ptlasst の使用](#)
- [ptlasst モード](#)

## B.1 ptlasst の使用

スクリプト `ptlasst.csh` (UNIX) および `ptlasst.bat` (Windows NT/2000) は `ORACLE_HOME/assistants` ディレクトリに配置されます。これらは、OPCA スタンドアロンを異なるモードで実行するときに使用できます。ptlasst を使用するには、次の手順を実行します。

### Windows NT/2000 の場合 :

まず、環境変数 `ORACLE_HOME` を Oracle Application Server ホームに設定します。次に、`ORACLE_HOME/assistants/opca` ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用して、コマンドラインから OPCA を起動します。

```
ptlasst.bat -mode {PORTAL | SSO | MIDTIER | LANGUAGE | SYSOBJECTS | DEINSTALL }  
{mode-dependent-parameters}
```

### UNIX の場合 :

まず、環境変数 `ORACLE_HOME` をデータベースの Oracle Application Server ホームに設定します。次に、`ORACLE_HOME/assistants/opca` ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用して、コマンドラインから OPCA を起動します。

```
ptlasst.csh -mode {PORTAL | SSO | MIDTIER | LANGUAGE | SYSOBJECTS | DEINSTALL }  
{mode-dependent-parameters}
```

### 使用上の注意 :

- モード名 (MIDTIER、LANGUAGE など) は、大文字で ptlasst に渡す必要があります。
- ptlasst を実行するたびにログ・ファイルが生成されます。生成されたログ・ファイルは、`portal_schema_name.log` という名前で、`ORACLE_HOME/assistants/opca` ディレクトリに格納されます。
- `ORACLE_HOME/assistants/opca` ディレクトリには `ptlasst.README` ファイルがあり、この付録にも記載されている ptlasst の使用方法に関する情報が含まれています。
- Portal や OracleAS Single Sign-On パートナ・アプリケーションのスキーマのパスワードなど、ptlasst コマンドの実行に必要なスキーマのパスワード情報を取得するには、次の LDAP コマンドを実行します。

```
ldapsearch -h directory_host_name -p directory_port -D directory_bind_dn -w  
directory_bind_dn_password -b "orclReferenceName=infrastructure_database"  
"orclresourcename=<schema_name>" orclpasswordattribute
```

ここでの `<schema_name>` は、スキーマの名前です。たとえば、例 B-1 に示す `PORTAL`、`ORASSO_PA`、`ORASSO_PS` などです。



**例 B-1 PORTAL スキーマのパスワードの取得**

```
ldapsearch -h ml.abc.com -p 389 -D "cn=orcladmin" -w welcome1 -b
"orclReferenceName=portal.abc.com,cn=IAS Infrastructure
Databases,cn=IAS,cn=Products,cn=oraclecontext" "orclresourcename=PORTAL"
orclpasswordattribute
```

また、Oracle Directory Manager を使用してパスワード情報を取得することもできます。orclResourceName=schema\_name までドリルダウンします。schema\_name は、パスワードを取得するスキーマの名前です。このエントリをクリックし、右のパネルで orclpasswordattribute 属性値を探します。この値が、選択したスキーマのパスワードです。

**関連項目：** Oracle Directory Manager の使用方法については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

## B.2 ptlasst モード

次の表で、それぞれのモードについて説明します。

**表 B-1 ptlasst モード**

モード	説明
PORTAL	OracleAS Portal スキーマをターゲット・データベースにインストールします。このモードは、Oracle Application Server Repository Creation Assistant の CD から実行する必要があります。
MIDTIER	OracleAS Portal の中間層で既存の OracleAS Portal スキーマまたは新しくインストールした OracleAS Portal スキーマを使用できるように構成します。
LANGUAGE	特定の言語の文字列を OracleAS Metadata Repository にインストールします。
SYSOBJECTS	OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On に必要な SYS スキーマの依存性をインストールします。このモードは各データベースで一度だけ実行する必要があります。
DEINSTALL	OracleAS Portal スキーマと OracleAS Portal Oracle Internet Directory エントリを削除します。

---

---

**使用上の注意：** この付録では、次の表記規則を使用します。

[ ] は、オプションのパラメータを示します。

{ オプション1 | オプション2 } は、オプション1 またはオプション2 を選択できることを示します。

---

---

## B.2.1 PORTAL

### 処理

OracleAS Metadata Repository をターゲット・データベースにインストールします。中間層からの情報は必要ありません。OracleAS Portal シード・データベースを作成する場合は、このモードを使用する必要があります。

### 環境

- リポジトリのインストールに必要な OracleAS Portal のソースは、Oracle Application Server Repository Creation Assistant (RepCA) の CD からのみ利用できます。
- PORTAL モードは、OracleAS RepCA の CD からのみ実行でき、OracleAS Portal がインストールされている `MID_TIER_ORACLE_HOME` からは実行できません。
- 環境変数 `ORACLE_HOME` をデータベースの Oracle ホームに設定します。

---

---

**注意：** ptlasst スクリプトを使用して OracleAS Metadata Repository のインストールを実行するための前提条件は、次のとおりです。

- PL/SQL LDAP パッケージがデータベースにインストールされている。
- データベースの JVM オプションが構成されている。
- データベースの *interMedia* オプションが構成されている。
- データベースのブロック・サイズが 8KB 以上である。
- 共有プールのサイズが 100MB 以上である。
- Java プールのサイズが 64MB 以上である。

インストール時に前提条件が自動的に確認されるため、OracleAS RepCA ツールを使用して OracleAS Metadata Repository をインストールすることをお勧めします。

---

---

## 使用方法

```
ptlasst.csh -mode PORTAL -c connect_string -p sys_password -voh source_home -oh
oracle_home -log log_dir [-s portal_schema] [-u user_tablespace] [-t temp_
tablespace] [-d doc_tablespace] [-l logging_tablespace] [-in index_tablespace]
[-demo] [-owa]
```

表 B-2 は、PORTAL モードでサポートされているパラメータの一覧とその説明です。

表 B-2 PORTAL モードでサポートされているパラメータ

パラメータ	説明
-s	Portal スキーマ名 (OracleAS Metadata Repository 内)。 デフォルト: portal
-c	ターゲット・データベースへの接続文字列。書式は、 DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName です。
-p	ターゲット・データベースの SYS パスワード。
-u	ユーザー表領域。 選択したユーザー表領域には 75MB 以上の空き領域が必要で、 autoextend が有効になっている必要があります。 デフォルト: users
-t	一時表領域。 選択した一時表領域には 20MB 以上の空き領域が必要で、 autoextend が有効になっている必要があります。 デフォルト: temp
-d	ドキュメント表領域。 選択したドキュメント表領域には 4MB 以上の空き領域が必要で、 autoextend が有効になっている必要があります。 デフォルト: ユーザー表領域用に選択した表領域
-l	ロギング表領域。 選択したロギング表領域には 4MB 以上の空き領域が必要で、 autoextend が有効になっている必要があります。 デフォルト: ユーザー表領域用に選択した表領域
-in	索引表領域。 選択した索引表領域には 20MB 以上の空き領域が必要で、 autoextend が有効になっている必要があります。 デフォルト: ユーザー表領域用に選択した表領域

表 B-2 PORTAL モードでサポートされているパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-demo	ポータル・ビルダーのデモ・コンポーネントをインストールします。
-voh	OracleAS Portal ソースの Oracle ホーム (OracleAS RepCA のホーム)。
-oh	データベースの Oracle ホーム。
-log	ログ・ディレクトリの場所。このディレクトリには書き込み権限が必要です。
-owa	このパラメータは、PL/SQL Web Toolkit とその他の SYS スキーマ・パッケージをインストールします。これらはデータベースに一度だけインストールされます。

### 使用例

```
ptlasst.csh -mode PORTAL -s portal -c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -p
change_on_install -u users -t temp -d users -l users -in users -demo -owa -voh
/privatel/repca -log /privatel/log -oh /privatel/dbhome
```

---

**注意：** Oracle Application Server リリース 10g (9.0.4) から、リポジトリのインストールに必要な OracleAS Portal のソースは Oracle Application Server Repository Creation Assistant (RepCA) の CD から利用できます。PORTAL OPCA モードは、OracleAS RepCA の CD からのみ直接実行できます。

---

## B.2.2 MIDTIER

### 処理

OracleAS Portal の中間層で既存の OracleAS Portal スキーマを使用できるように構成します。

MIDTIER モードでは、オプション `-type` を使用してどのコンポーネントを構成するかを決めます。MIDTIER モードでサポートされている各種タイプは次のとおりです。

- **OIDタイプ**: OracleAS Portal で Oracle Internet Directory を使用するための構成を行います。このタイプは、Oracle Internet Directory コンポーネントへの変更が原因で OracleAS Portal の構成変更が必要となった場合に使用します。たとえば、Oracle Internet Directory のホスト、ポートまたはプロトコルへの変更が行われた場合です。
- **SSOタイプ**: OracleAS Portal で OracleAS Single Sign-On を使用するための構成を行います。このタイプは、Oracle Application Server Single Sign-On に登録されている OracleAS Portal の公開されたホスト、ポートまたはプロトコルへの変更のために OracleAS Portal の構成の変更が必要となった場合に使用します。一般に、公開されたホスト、ポートおよびプロトコルは、OracleAS Web Cache のものです。ただし、ロード・バランス・ルーターまたは逆プロキシ・サーバーが OracleAS Web Cache のフロントエンドに設定されている構成の場合、または仮想ホストを使用している場合を除きません。
- **WEBCACHEタイプ**: OracleAS Portal で Oracle Application Server Web Cache を使用するための構成を行います。このタイプは、OracleAS Web Cache コンポーネントへの変更が原因で OracleAS Portal の構成変更が必要となった場合に使用します。たとえば、OracleAS Web Cache のホスト名、リスニング・ポート、失効ポート、失効パスワード、管理用ポートへの変更が行われた場合です。
- **OHSタイプ**: OHS タイプは、SSO および WEBCACHE タイプのスーパーセットです。このタイプは、OracleAS Portal で Oracle HTTP Server を使用するための構成を行い、プロバイダのユーザー・インタフェースやプロバイダ・グループを使用できるようにします。このタイプは、Oracle HTTP Server コンポーネントへの変更が原因で OracleAS Portal の構成変更が必要となった場合に使用します。たとえば、HTTP Server ホスト、ポートまたはプロトコルへの変更が行われた場合です。
- **ALLタイプ**: すべての中間層コンポーネントで OracleAS Portal スキーマを使用できるように構成します。ALL タイプは、OID、SSO、WEBCACHE、OHS の各タイプのスーパーセットです。このタイプは、一般に OracleAS Portal の中間層で新しい OracleAS Metadata Repository を使用するための構成を行うときに使用します。
- **DIPREGタイプ**: Oracle Internet Directory でプロビジョニング・プロファイルを作成します。
- **DIPUNREGタイプ**: Oracle Internet Directory でプロビジョニング・プロファイルを削除します。

---

---

**注意：** 可能であれば、Portal 依存性設定ファイルおよびツールを使用して、中間層の構成を行ってください。ptlasst を使用する場合は、Portal 依存性設定ファイル (iasconfig.xml) が更新されないため、その後の構成に iasconfig.xml を使用すると、サイトの構成が正しく行われない可能性があります。

iasconfig.xml を更新した後は、Portal 依存性設定ツール (ptlconfig) を実行して、iasconfig.xml の構成設定で OracleAS Metadata Repository を更新する必要があります。

次に、ptlasst の各種 MIDTIER タイプと Portal 依存性設定ツール (ptlconfig) での対応するタイプを示します。

- WEBCACHE タイプのかわりに、ptlconfig -dad <dad> -wc を使用できます。
- OID タイプのかわりに、ptlconfig -dad <dad> -oid を使用できます。
- OHS タイプのかわりに、ptlconfig -dad <dad> -site を使用できます。

ただし、MIDTIER モードで OPCA を使用する必要がある場合もあります。たとえば、公開ホスト名が OracleAS Web Cache の失効化に使用されたホスト名と異なる場合は、Portal 依存性設定ファイルを使用して、この構成を確立できません。

Portal 依存性設定ファイルおよびツールの詳細は、[付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」](#) を参照してください。

---

---

## 環境

- 環境変数 ORACLE\_HOME を OracleAS Portal がインストールされている MID\_TIER\_ORACLE\_HOME に設定します。
- MIDTIER モードは、OracleAS Portal がインストールされている MID\_TIER\_ORACLE\_HOME から実行する必要があります。

## 前提条件

- OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On Server がインストール済であること。
- Oracle Internet Directory、OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server が稼働中であること。

**注意：** MIDTIER モードは、OracleAS Portal のユーザーおよびグループを Oracle Internet Directory と同期化または再同期化する場合にも使用します。

## 使用方法

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER [ -type {ALL | OID | SSO | OHS | WEBCACHE | DIPREG | DIPUNREG} ] {type-dependent-parameters}
```

表 B-3 は、MIDTIER モードでサポートされているパラメータの一覧とその説明です。

**表 B-3 MIDTIER モードでサポートされているパラメータ**

パラメータ	説明
-i	<p>インストール・タイプ。</p> <p>このパラメータは、<i>typical</i> および <i>custom</i> に設定できます。標準モードでは、リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On、および構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。</p> <p>リポジトリ・アクセス API では、中間層の構成に必要なインフラストラクチャのアクセスの詳細を中間層コンポーネントに提供します。</p> <p>カスタム・モードでは、コマンドラインに入力したものが構成に使用されます。</p> <p>デフォルト: <i>typical</i></p>
-type	<p>中間層のタイプ。使用できるオプションは、ALL、OID、SSO、WEBCACHE、DIPREG および DIPUNREG です。</p> <p>デフォルト: ALL</p>
-s	<p>OracleAS Portal スキーマ名。</p> <p>デフォルト: <i>portal</i></p>
-sp	<p>OracleAS Portal スキーマのパスワード。</p>
-c	<p>ターゲットの OracleAS Portal データベースへの接続文字列。書式は、DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName です。</p>
-sdad	<p>OracleAS Portal スキーマ (OracleAS Metadata Repository 内) の DAD 名。</p> <p>デフォルト: <i>portal</i></p>

表 B-3 MIDTIER モードでサポートされているパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-o	OracleAS Single Sign-On スキーマ名。 デフォルト: orasso
-op	OracleAS Single Sign-On のパスワード。 デフォルト: orasso
-odad	OracleAS Single Sign-On の DAD 名。 デフォルト: orasso
-host	OracleAS Portal に使用する HTTP Server のホスト名。
-port	OracleAS Portal に使用する HTTP Server のポート番号。
-chost	OracleAS Web Cache のホスト。 デフォルト: HTTP Server のホスト名
-cport_i	OracleAS Web Cache の失効ポート。
-cport_a	OracleAS Web Cache の管理用ポート。
-wc	OracleAS Portal 内の Web Cache を有効または無効にするための OracleAS Web Cache の ON/OFF フラグ。 デフォルト: ON OFF に設定した場合は、OracleAS Web Cache が稼働中であっても、OracleAS Portal で Web Cache は使用されません。
-ldap_h	Oracle Internet Directory Server のホスト名。
-ldap_p	Oracle Internet Directory Server のポート番号。
-ldap_d	管理 DN。 デフォルト: cn=orcladmin
-ldap_w	DN のパスワード。
-pwd	Oracle Internet Directory 内の OracleAS Portal の生成済のユーザー (PORTAL および PORTAL_ADMIN) の初期パスワード。
-sso_c	OracleAS Single Sign-On データベースへの接続文字列。書式は、DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName です。
-ps	パスワード・ストアのスキーマ名。 デフォルト: orasso_ps
-pp	パスワード・ストア・スキーマのパスワード。



表 B-3 MIDTIER モードでサポートされているパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-pa	パートナ・アプリケーションのスキーマ名。 デフォルト: orasso_pa
-pap	パートナ・アプリケーションのパスワード。
-wc_i_pwd	OracleAS Web Cache の invalidator のパスワード。 デフォルト: Oracle Application Server インスタンスのパスワード (ias_admin パスワード)
-ldaps	Oracle Internet Directory で SSL が使用できるかどうかを示すフラグ。
-ultraSearch	Oracle Ultra Search の構成。
-syndication	Syndication Server と UDDI の構成。
-ssl	OracleAS Portal で SSL が使用できる必要があることを示すフラグ。
-emport	Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールのポート。
-iasname	Oracle Application Server インスタンス名。

### B.2.2.1 OID タイプ

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type OID -ldap_w orcladmin_password -pwd ias_admin_
password [-i install_type] [-s portal_schema] [-sp portal_schema_password] [-c
portal_db_connect_string] [-ldap_h oid_host_name] [-ldap_p oid_port_number] [-ldap_d
oid_admin_user] [-ldaps]
```

#### 使用例

##### 標準インストール (-i typical)

リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory と、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type OID -ldap_w welcome1 -pwd welcome1
```

## 使用例

### カスタム・インストール (-i custom)

この例では、コマンドラインに入力したものが使用されます。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type ALL -i custom -ldap_w welcome1 -pwd welcome1 -s
portal -sp portal -c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -ldap_h myOID.domain.com
-ldap_p 389
```

---

---

**注意：** 標準またはカスタムのどちらを使用したらいかわからない場合は、カスタムのインストール・タイプを使用してください。

---

---

### B.2.2.2 SSO タイプ

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type SSO -host portal_site_name -port portal_site_port
[-i install_type] [-s portal_schema] [-sp portal_schema_password]
[-sdad portal_dad] [-c portal_db_connect_string] [-sso_c sso_db_connect_string]
[-pap partner_application_password] [-pp password_store_password]
```

OracleAS Portal は、Oracle Application Server Single Sign-On のパートナ・アプリケーションです。このため、OracleAS Single Sign-On で認証サービスを使用できるように構成する必要があります。OracleAS Portal をインストールすると、インフラストラクチャのインストール時にインストールされた OracleAS Single Sign-On を使用するように自動的に構成されます。

---

---

**注意：** リリースの異なる OracleAS Single Sign-On と OracleAS Portal 間の操作はできません。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、OracleAS Single Sign-On と OracleAS Portal に Oracle Internet Directory との相互依存性があります。このため、OracleAS Portal 10g (9.0.4) で Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2) 以前の OracleAS Single Sign-On Server (Login Server) を使用するように構成しないでください。同様に、リリース 1 ベースの OracleAS Portal で OracleAS Single Sign-On の現行のリリースを使用するように構成しないでください。ただし、この規則の例外として、Portal リリース 3.0.9.8.4 以降で 9.0.x の SSO Server を使用するように構成することはできます。

---

---

#### 関連項目：

- Portal Center  
(<http://portalcenter.oracle.com/upgrades/>) にあるアップグレードのページ
- 『Oracle Application Server 10g Oracle Application Server からの移行』

リリース 3.0.x の OracleAS Portal で `ssodatan` と呼ばれていたスクリプトは廃止されました。かわりに、OracleAS Portal Configuration Assistant が `-mode MIDTIER -type SSO` で実行されるようになりました。以前のリリースで `ssodatan` によって実行されていた手順は、OracleAS Portal をインストールする際に自動的に実行されます。ただし、インストール後に、様々な理由で別の OracleAS Single Sign-On を使用するように OracleAS Portal を構成したり、Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名、ポートまたはプロトコルを変更したために構成を再実行しなければならない場合があります。

以前の `ssodatx` では、SSO Server でパートナ・アプリケーション・エントリを設定してから、パートナ・アプリケーション登録から取得した `site_id`、`site_token` および `encryption_key` を使用してスクリプトを起動する必要がありました。`ptlasst.csh` (OPCA) の `-mode MIDTIER -type SSO` モードでは、パートナ・アプリケーションを1つの手順で登録できるようになりました。

OracleAS Single Sign-On には、パートナ・アプリケーションの登録手続きにアクセスするためのスキーマとして、`orasso_pa` (デフォルト) が用意されています。OracleAS Portal エントリを登録するには、このスキーマのパスワードと、OracleAS Single Sign-On インスタンスへの適切な接続文字列を取得する必要があります。

**関連項目：**『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』

## 使用例

### 標準インストール (-i typical)

リポジトリ・アクセス API を使用して、OracleAS Single Sign-On と、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type SSO -host mySite.domain.com -port 7777 -sdad portal
```

## 使用例

### カスタム・インストール (-i custom)

この例では、コマンドラインに入力したものが使用されます。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type SSO -i custom -host mySite.domain.com -port 7777 -s portal -sp portal -sdad portal -c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -sso_c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -pap orasso_pa -pp orasso_ps
```

---

---

**注意：** 標準またはカスタムのどちらを使用したらよいかわからない場合は、カスタムのインストール・タイプを使用してください。

---

---

### B.2.2.3 WEBCACHE タイプ

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type WEBCACHE -host portal_site_name -port
portal_site_port -cport_i webcache_invalidation_port -cport_a
webcache_administration_port -wc_i_pwd webcache_invalidator_password
[-chost webcache_hostname] [-i install_type] [-s portal_schema]
[-sp portal_schema_password] [-sdad portal_dad] [-c portal_db_connect_string]
[-wc webcache_on_off_flag]
```

#### 使用例

##### 標準インストール (-i typical)

リポジトリ・アクセス API を使用して、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type WEBCACHE -host mySite.domain.com -port 7777 -cport_i
4001 -cport_a 4001 -wc_i_pwd webcache_invalidator_password
```

#### 使用例

##### カスタム・インストール (-i custom)

この例では、コマンドラインに入力したものが使用されます。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type WEBCACHE -i custom -host mySite.domain.com -port
7777 -cport_i 4001 -cport_a 4001 -s portal -sp portal -sdad portal -c
myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -wc_i_pwd webcache_invalidator_password
```

---

---

**注意：** 標準 / カスタムのどちらにしたらよいかわからない場合は、カスタムのインストール・タイプを使用してください。

---

---

### B.2.2.4 OHS タイプ

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type OHS -host portal_site_name -port portal_site_port
-cport_i webcache_invalidation_port -cport_a webcache_administration_port -wc_i_pwd
webcache_invalidator_password [-chost webcache_hostname] [-i install_type]
[-s portal_schema] [-sp portal_schema_password] [-sdad portal_dad]
[-c portal_db_connect_string] [-sso_c sso_db_connect_string]
[-pap partner_application_password] [-pp password_store_password]
[-wc webcache_on_off_flag] [-ssl]
```

## 使用例

### 標準インストール (-i typical)

リポジトリ・アクセス API を使用して、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type OHS -host mySite.domain.com -port 7777 -cport_i 4001
-cport_a 4001 -wc_i_pwd webcache_invalidator_password
```

## 使用例

### カスタム・インストール (-i custom)

この例では、コマンドラインに入力したものが使用されます。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type OHS -i custom -host mySite.domain.com -port 7777
-cport_i 4001 -cport_a 4001 -s portal -sp portal -sdad portal -c
myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -sso_c
myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -pap orasso_pa -pp orasso_ps -wc_i_pwd
webcache_invalidator_password
```

---

**注意:** 標準またはカスタムのどちらを使用したらよいかわからない場合は、カスタムのインストール・タイプを使用してください。

---

## B.2.2.5 ALL タイプ

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type ALL -host portal_site_name -port portal_site_port
-cport_i webcache_invalidation_port -cport_a webcache_administration_port -ldap_w
orcladmin_password -pwd ias_admin_password -emport em_port_number -wc_i_pwd
webcache_invalidator_password -iasname ias_instance [-chost webcache_hostname]
[-i install_type] [-s portal_schema] [-sp portal_schema_password]
[-sdad portal_dad] [-c portal_db_connect_string] [-sso_c sso_db_connect_string]
[-pap partner_application_password] [-pp password_store_password]
[-wc webcache_on_off_flag] [-ldap_h oid_host_name] [-ldap_p oid_port_number]
[-ldap_d oid_admin_user] [-ldaps] [-ultrasearch] [-syndication] [-ssl]
```

---

**注意:** -ultrasearch および -syndication オプションは、標準インストール・オプション (-i typical) との組合せでのみ使用できます。

---

## 使用例

### 標準インストール (-i typical)

リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On および構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type ALL -host mySite.domain.com -port 7777 -cport_i 4001
-cport_a 4001 -ldap_w welcome1 -pwd welcome1 -wc_i_pwd webcache_invalidator_password
-empport 1812 -iasname as_midtier
```

## 使用例

### カスタム・インストール (-i custom)

この例では、コマンドラインに入力したものがすべて使用されます。このタイプは、アウト・オブ・ボックスのインストール以外の OracleAS Portal インスタンスで構成を実行する場合に使用します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type ALL -i custom -host mySite.domain.com -port 7777
-cport_i 4001 -cport_a 4001 -ldap_w welcome1 -pwd welcome1 -s portal -sp portal
-sdad portal -c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -sso_c
myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -pap orasso_pa -pp orasso_ps -wc_i_pwd
webcache_invalidator_password -ldap_h myOID.domain.com -ldap_p 389 -empport 1812
-iasname as_midtier
```

---

---

**注意：** 標準またはカスタムのどちらを使用したらよいかわからない場合は、カスタムのインストール・タイプを使用してください。

---

---

## B.2.2.6 DIPREG タイプ

このタイプは、Oracle Internet Directory でプロビジョニング・プロファイルを作成する場合に使用します。プロビジョニング・プロファイルの詳細は、[6.1.6.3 項「OracleAS Portal と Oracle Directory Integration Platform の関係」](#)を参照してください。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPREG -ldap_w orcladmin_password [-i install_type]
[-s portal_schema] [-sp portal_schema_password] [-c portal_db_connect_string]
[-ldap_h oid_host_name] [-ldap_p oid_port_number] [-ldap_d oid_admin_user]
```

**使用例****標準インストール (-i typical)**

リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory と、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPREG -ldap_w welcome1
```

**使用例****カスタム・インストール (-i custom)**

この例では、コマンドラインに入力したものが使用されます。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPREG -i custom -ldap_w welcome1 -s portal -sp
portal -c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -ldap_h myOID.domain.com -ldap_p
389
```

**注意：**

- 標準またはカスタムのどちらを使用したらよいかわからない場合は、カスタムのインストール・タイプを使用してください。
- DIPREG インストール・タイプは、9.0.2 リポジトリ用のプロビジョニング・プロファイルの作成にも使用できます。

**B.2.2.7 DIPUNREG タイプ**

このタイプは、OracleAS Portal インスタンスの Oracle Internet Directory でプロビジョニング・プロファイルを削除する場合に使用します。プロビジョニング・プロファイルの詳細は、6.1.6.3 項「OracleAS Portal と Oracle Directory Integration Platform の関係」を参照してください。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPUNREG -ldap_w orcladmin_password
[-i install_type] [-s portal_schema] [-sp portal_schema_password]
[-c portal_db_connect_string] [-ldap_h oid_host_name] [-ldap_p oid_port_number]
[-ldap_d oid_admin_user]
```

**使用例****標準インストール (-i typical)**

リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory と、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPUNREG -ldap_w welcome1
```

**使用例****カスタム・インストール (-i custom)**

この例では、コマンドラインに入力したものが使用されます。

```
ptlasst.csh -mode MIDTIER -type DIPUNREG -i custom -ldap_w welcome1 -s portal -sp
portal -c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -ldap_h myOID.domain.com -ldap_p
389
```

---



---

**注意：** 標準またはカスタムのどちらを使用したらいかがわからない場合は、カスタムのインストール・タイプを使用してください。

---



---

**関連項目：** 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』

**B.2.3 LANGUAGE****処理**

特定の言語の文字列を OracleAS Portal スキーマにインストールします。

OracleAS Portal は、様々な言語でアプリケーションの開発や配置が行えるように設計されています。このため、開発者は Portal を構築する際に自国語で作業できます。また、エンド・ユーザーがドキュメントおよびその他のコンテンツを様々な言語で使用できるように、セルフサービス・コンテンツ管理では複数の言語をサポートしています。

OracleAS Portal は、Oracle Application Server Middle-Tier のインストール時に Oracle Universal Installer (OUI) で選択された言語で構成されます。構成される言語は、「言語の設定」ポートレットに表示されます。ブラウザの言語設定に対応する言語、または「言語の設定」ポートレットで選択した言語に対応する言語で OracleAS Portal を使用できます。インストール後に別の言語を構成する場合は、OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を LANGUAGE モードで使用する必要があります。

表 B-4 に、OracleAS Portal で利用できる言語を示します。

**表 B-4 OracleAS Portal で利用できる言語**

言語	言語の略称
アラビア語	ar (ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256)



表 B-4 OracleAS Portal で利用できる言語 (続き)

言語	言語の略称
チェコ語	cs (CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250)
ドイツ語	d (GERMAN_GERMANY.WE8MSWIN1252)
デンマーク語	dk (DANISH_DENMARK.WE8MSWIN1252)
スペイン語	e (SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252)
ギリシア語	el (GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253)
南米スペイン語	esa (SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252)
フランス語	f (FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252)
フランス語 (カナダ)	frc (FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252)
ヘブライ語	iw (HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255)
ハンガリー語	hu (HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250)
イタリア語	i (ITALIAN_ITALY.WE8MSWIN1252)
日本語	ja (JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS)
韓国語	ko (KOREAN_KOREA.KO16KSC5601)
ノルウェー語	n (NORWEGIAN_NORWAY.WE8MSWIN1252)

表 B-4 OracleAS Portal で利用できる言語 (続き)

言語	言語の略称
オランダ語	nl (DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8MSWIN1252)
ポーランド語	pl (POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250)
ポルトガル語	pt (PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8MSWIN1252)
ポルトガル語 (ブラジル)	ptb (BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8MSWIN1252)
ルーマニア語	ro (ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250)
ロシア語	ru (RUSSIAN_CIS.CL8MSWIN1251)
スウェーデン語	s (SWEDISH_SWEDEN.WE8MSWIN1252)
フィンランド語	sf (FINNISH_FINLAND.WE8MSWIN1252)
スロバキア語	sk (SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250)
トルコ語	tr (TURKISH_TURKEY.TR8MSWIN1254)
タイ語	th (THAI_THAILAND.TH8TISASCII)
中国語 (簡体字)	zhs (SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK)
中国語 (繁体字)	zht (TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16BIG5)

OracleAS Portal をインストールした後で言語をインストールするには、LANGUAGE モードで ptlasst を実行します。OracleAS Portal で使用する言語ごとに、-mode LANGUAGE を指定して ptlasst を実行する必要があります。

---

---

**注意：** ログイン操作時に、情報が OracleAS Single Sign-On に送信されます。認証要求に使用された言語は、OracleAS Portal に送り返されます。選択した言語が認識されるように、OracleAS Single Sign-On には、OracleAS Portal に存在するすべての言語がインストールされている必要があります。選択した言語が OracleAS Single Sign-On にインストールされていない場合は、デフォルトでアメリカ英語が設定されます。これは、OracleAS Single Sign-On Server で利用できない言語による認証を要求した OracleAS Portal にアサートされる言語です。

OracleAS Portal の「言語の設定」ポートレットでは、OracleAS Single Sign-On Server と OracleAS Portal の言語および永続言語 Cookie を設定します。

同じ OracleAS Single Sign-On を使用するよう構成されている Portal が複数存在し、それらの Portal に別々の言語がインストールされている場合は、どの Portal からの「言語の設定」要求にも対応できるように、これらのすべての言語が OracleAS Single Sign-On に存在している必要があります。

---

---

## 環境

- 環境変数 ORACLE\_HOME を OracleAS Portal がインストールされている MID\_TIER\_ORACLE\_HOME に設定します。
- LANGUAGE モードは、OracleAS Portal がインストールされている MID\_TIER\_ORACLE\_HOME から実行する必要があります。

## 前提条件

OracleAS Metadata Repository がインストール済で、それぞれのデータベースが起動していること。

## 使用方法

```
ptlasst.csh -mode LANGUAGE -lang lang_code [-i install_type] [ -s portal_schema]
[-sp portal_schema_password] [-c portal_db_connect_string] [-available]
```

表 B-5 は、LANGUAGE モードでサポートされているパラメータの一覧とその説明です。

**表 B-5 LANGUAGE モードでサポートされているパラメータ**

パラメータ	定義
-i	<p>インストール・タイプ。</p> <p>このパラメータは、<code>typical</code> および <code>custom</code> に設定できます。標準モードでは、リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On、および構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。</p> <p>リポジトリ・アクセス API では、中間層の構成に必要なインフラストラクチャのアクセスの詳細を中間層コンポーネントに提供します。</p> <p>カスタム・モードでは、コマンドラインに入力したものが構成に使用されます。</p> <p>デフォルト: <code>typical</code></p>
-s	<p>OracleAS Portal スキーマ名。</p> <p>デフォルト: <code>portal</code></p>
-sp	<p>OracleAS Portal スキーマのパスワード。</p>
-c	<p>OracleAS Metadata Repository がインストールされているターゲット・データベースへの接続文字列。書式は、<code>DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName</code> です。</p>
-lang	<p>インストールする言語の略称。サポートされているすべての略称の一覧については、表 B-4 「OracleAS Portal で利用できる言語」を参照してください。</p> <p>デフォルト: <code>f</code></p>
-available	<p>その言語をユーザー翻訳に利用するかどうかを設定します。</p>

## 使用例

### 標準インストール (-i typical)

リポジトリ・アクセス API を使用して、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。次の例では、オランダ語の文字列を OracleAS Metadata Repository にロードします。

```
ptlasst.csh -mode LANGUAGE -lang nl -available
```

## 使用例

### カスタム・インストール (-i custom)

この例では、コマンドラインで入力したものを渡します。この例では、オランダ語の文字列を OracleAS Metadata Repository にロードします。

```
ptlasst.csh -mode LANGUAGE -i custom -s portal -sp portal -c  
myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -lang nl -available
```

---

---

**注意：** mod\_plsql のキャラクタ・セットは、顧客データベースのキャラクタ・セットと同じにする必要があります。詳細は、『Oracle Application Server 10g mod\_plsql ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

---

---

**関連項目：** Oracle Application Server 10g グローバリゼーション・ガイド』

## B.2.4 SYSOBJECTS

### 処理

OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On に必要な、次の SYS スキーマ依存ツールをインストールします。

- PL/SQL Web Toolkit (OWA) パッケージ
- VPD Context パッケージ

---

---

**注意：**

- このモードは各データベースで一度だけ実行する必要があります。
  - PORTAL および SSO モードの -owa オプションは、これと同じ機能を提供します。
  - OWA パッケージの入手方法については、『Oracle Application Server 10g mod\_plsql ユーザーズ・ガイド』の「よくある質問」を参照してください。
- 
-

## 環境

- SYSOBJECTS モードのソースは、OracleAS RepCA の CD からのみ利用できます。
- SYSOBJECTS モードは、OracleAS RepCA の CD からのみ実行できます。このモードを OracleAS Portal がインストールされている `MID_TIER_ORACLE_HOME` からは実行できません。
- 環境変数 `ORACLE_HOME` をデータベースの `ORACLE_HOME` に設定します。

## 使用方法

```
ptlasst.csh -mode SYSOBJECTS -c connect_string -p sys_password -voh source_home
```

表 B-6 は、SYSOBJECTS モードでサポートされているパラメータの一覧とその説明です。

表 B-6 SYSOBJECTS モードでサポートされているパラメータ

パラメータ	説明
-c	ターゲット・データベースへの接続文字列。書式は、 <code>DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName</code> です。
-p	ターゲット・データベースの SYS スキーマのパスワード。
-voh	ソースの Oracle ホーム (OracleAS RepCA のホーム)。

## 使用例

```
ptlasst.csh -mode SYSOBJECTS -c myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -p change_on_install -voh /private1/repca
```

## B.2.5 DEINSTALL

### 処理

OracleAS Portal スキーマと OracleAS Portal Oracle Internet Directory エントリを削除します。

### 環境

- 環境変数 ORACLE\_HOME を OracleAS Portal がインストールされている MID\_TIER\_ORACLE\_HOME に設定します。
- DEINSTALL モードは、OracleAS Portal がインストールされている MID\_TIER\_ORACLE\_HOME から実行する必要があります。
- OracleAS Metadata Repository がすでに存在し、それぞれのデータベースが起動している必要があります。
- Oracle Internet Directory が稼働中である必要があります。

### 使用方法

```
ptlasst.csh -mode DEINSTALL -ldap_w orcladmin_password [-i install_type]
[-s portal_schema] [-p portal_schema_password] [-c portal_db_connect_string]
[-ldap_h oid_host_name] [-ldap_p oid_port_number] [-ldap_d oid_admin_user]
```

表 B-7 は、DEINSTALL モードでサポートされているパラメータの一覧とその説明です。

表 B-7 DEINSTALL モードでサポートされているパラメータ

パラメータ	説明
-i	<p>インストール・タイプ。</p> <p>このパラメータは、typical および custom に設定できます。標準モードでは、リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On、および構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。</p> <p>リポジトリ・アクセス API では、中間層の構成に必要なインフラストラクチャのアクセスの詳細を中間層コンポーネントに提供します。</p> <p>カスタム・モードでは、コマンドラインに入力したものが構成に使用されます。</p> <p>デフォルト: typical</p>
-s	<p>OracleAS Portal スキーマ名。</p> <p>デフォルト: portal</p>

表 B-7 DEINSTALL モードでサポートされているパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-c	ターゲット・データベースへの接続文字列。書式は、DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName です。
-p	ターゲット・データベースの SYS スキーマのパスワード。
-ldap_h	Oracle Internet Directory Server のホスト名。
-ldap_p	Oracle Internet Directory Server のポート番号。
-ldap_w	管理 DN のパスワード。

## 使用例

### 標準削除 (-i typical)

リポジトリ・アクセス API を使用して、Oracle Internet Directory と、構成済 OracleAS Metadata Repository にある OracleAS Portal スキーマの詳細を取得します。

```
ptlasst.csh -mode DEINSTALL -ldap_w welcome1
```

## 使用例

### カスタム削除 (-i custom)

この例では、コマンドラインに入力したものが使用されます。

```
ptlasst.csh -mode DEINSTALL -i custom -s portal -p change_on_install -c  
myDBhost.domain.com:1521:dbServiceName -ldap_h myOID.domain.com -ldap_p 389 -ldap_w  
welcome1
```



---

# OracleAS Portal のインストールおよび構成スクリプトの使用

Oracle Application Server の一部として OracleAS Portal をインストールした後は、いくつかのスクリプトがインストール後の構成を行うために使用できるようになります。

この付録の内容：

- OracleAS Web Cache 構成スクリプト
- Cookie 妥当性チェックの IP チェックの無効化
- secupoid.sql スクリプトの使用
- secjsdom.sql スクリプトの使用
- Portal セッション Cookie の構成
- セッション・クリーン・アップ・ジョブの管理
- 実行時間とキャッシュの統計
- cfgiasw スクリプトを使用したモバイルの構成
- ptlinvsw.sql スクリプトを使用した Portal コンテナのページの無効化

## C.1 OracleAS Web Cache 構成スクリプト

この項では、OracleAS Web Cache の構成スクリプトを実行して、OracleAS Portal が OracleAS Web Cache と連携して機能するようにするには、どのように構成すればよいかを説明します。OPCA を MIDTIER モードで実行するかわりにこの方法を使用して、OracleAS Web Cache ホストや OracleAS Web Cache の失効ポートなど、OracleAS Web Cache 固有の設定を調整することができます。また、この項では、OracleAS Web Cache を失効化する方法と、スクリプト `cachjsub.sql` を使用して失効メッセージの処理ジョブを管理する方法についても説明します。

この項の内容：

- [cachset.sql の使用](#)
- [cachjsub.sql を使用した失効メッセージの処理ジョブの管理](#)

### C.1.1 cachset.sql の使用

スクリプト `cachset.sql` は、OracleAS Web Cache の使用のオンとオフを切り替えるときに使用します。このスクリプトは、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc` ディレクトリにあります。

`cachset.sql` を使用するには、スキーマ所有者として `SQL*Plus` に接続し、次のように `cachset.sql` を実行します。

```
SQL>@cachset.sql
```

OracleAS Web Cache の使用を有効にする場合は「on」、無効にする場合は「off」をプロンプトに入力します。

### C.1.2 cachjsub.sql を使用した失効メッセージの処理ジョブの管理

OracleAS Portal は、パフォーマンスを向上させるためにキャッシュを使用します。使用されるキャッシュのタイプの 1 つに、失効化ベースのキャッシュがあります。失効化ベースのキャッシュでは、OracleAS Portal は様々なオブジェクト（ページ、ポートレットなど）を一定期間キャッシュします。これらのオブジェクトが要求されると、オブジェクトがキャッシュされている場合はキャッシュから取得され、キャッシュされていない場合は Oracle Application Server Metadata Repository から再生成されます。これらのオブジェクトのキャッシュは、最大キャッシュ時間に達したとき、または失効メッセージによってオブジェクトが明示的に失効したときに期限切れになります。

OracleAS Portal は、キャッシュ内のオブジェクトを期限切れにするときに、失効メッセージを使用します。失効メッセージは、強い失効化と弱い失効化に分類されます。強い失効化はすぐに有効になります。つまり、失効化するオブジェクトはすぐにキャッシュから期限切れになります。弱い失効化は、失効化処理ジョブによって処理されたときに有効になります。失効化ジョブの実行頻度は構成可能です。これは、`cachjsub.sql` スクリプトを使用しています。

失効化処理ジョブの実行頻度を変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc
```

2. Portal スキーマがインストールされているデータベースで、そのスキーマの適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL\*Plus にログインします。

たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal/portal
```

3. 次のコマンドを入力して、失効化処理ジョブの実行頻度を更新します。

```
SQL> @cachjsub.sql <start_time> <start_time_fmt> <interval_mins>
```

`cachjsub.sql` は、3つのパラメータをとります。

- `start_time` には、最初のジョブが実行される時間または `START` を指定します。
- `start_time_fmt` には、`start_time` の値に適用する日付書式を指定します。
- `interval_mins` には、実行の間隔を分単位で指定します。

---

---

**注意：** 最初のパラメータに `START` を指定すると、2番目のパラメータは無視され、デフォルトで現在の時刻が開始時刻になります。

---

---

例 1

```
SQL> @cachjsub.sql START null 120
```

例 2

```
SQL> @cachjsub.sql '02-22-2003 7:30' 'MM-DD-YYYY HH:MI' 1440
```

## C.2 Cookie 妥当性チェックの IP チェックの無効化

Oracle Portal は、ユーザー要求（PUBLIC ユーザーを含む）のセッション Cookie を検証するときに、Cookie に格納されている IP アドレスと現在のクライアントの IP アドレスを比較します。OracleAS Portal は、2つの値が同じ場合にのみ、要求が適正であるとみなします。

ユーザーのクライアントと Portal 間にプロキシが存在する場合、セッション Cookie に格納される IP アドレスは、クライアントの IP アドレスではなく、プロキシの IP アドレスです。

プロキシ・システムによっては、IP アドレスが異なる複数のサーバーを使用します。こうした環境では、ユーザーのクライアントから送信された元の要求（セッション Cookie が作成される要求）に使用されるプロキシ・サーバーと、後続の要求のルーティングに使用されるプロキシ・サーバーが異なる可能性があります。この場合、OracleAS Portal によって比較される 2つの IP アドレスは一致せず、IP のチェック中に要求のセキュリティ違反が発生し、ページへのアクセスが拒否されます。

Oracle Application Server がインストールされているネットワーク構成によっては、Cookie の妥当性をチェックするときに IP チェックを無効にしなければならない場合があります。

Cookie の妥当性をチェックしたときの IP チェックの状態を変更するには、表 C-1 に示すように、SQL\*Plus を使用して Portal スキーマおよび SSO スキーマのデータを更新する必要があります。

**表 C-1 IP チェックの有効化と無効化**

	Portal スキーマ	SSO スキーマ
IP チェックの有効化	<pre>update wwsec_enabler_config_ info\$  set url_cookie_ip_check = 'Y';  commit;</pre>	<pre>update wwsec_enabler_config_ info\$  set url_cookie_ip_check = 'Y';  update wwsso_ls_ configuration_info\$  set cookie_ip_check = 'Y';  commit;</pre>
IP チェックの無効化	<pre>update wwsec_enabler_config_ info\$  set url_cookie_ip_check = 'N';  commit;</pre>	<pre>update wwsec_enabler_config_ info\$  set url_cookie_ip_check = 'N';  update wwsso_ls_ configuration_info\$  set cookie_ip_check = 'N';  commit;</pre>

## C.3 secupoid.sql スクリプトの使用

デフォルトでは、OracleAS Portal は、Oracle Internet Directory に接続するときに、SSL を使用しない LDAP を使用します。Oracle Internet Directory Server が SSL ポートに対応している場合は、LDAP over SSL (LDAPS) を使用するように OracleAS Portal を構成できます。

**関連項目：**『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するように OracleAS Portal を構成するには、secupoid.sql スクリプトを実行する必要があります。このスクリプトにより、Oracle Internet Directory に関連する次の OracleAS Portal 構成パラメータを変更できます。

- Oracle Internet Directory ホスト名
- Oracle Internet Directory ポート
- アプリケーション Oracle Internet Directory パスワード
- SSL 設定

OracleAS Portal をインストールすると、Oracle Internet Directory Server を使用できるように自動的に構成されます。ただし、SSL を使用するかどうかなど、インストール後に一部の設定を変更することができます。Oracle Internet Directory の SSL 接続に変更するには、PORTAL スキーマの secupoid.sql スクリプトを実行して LDAP ポートのかわりに LDAPS ポートを指定すると、SSL を使用するように指定されます。

### secupoid.sql スクリプトの実行

この項では、SQL\*Plus から secupoid.sql を実行した例を示します。

この例では、LDAP をポート 389 で実行するように Oracle Internet Directory を初期設定します。次に LDAPS ポートを 636 で有効にします。サーバー名は変わらないため、以前の値を保持したままポートを更新し、SSL を使用することを指定するために「Use SSL?」に対して「Y」を設定します。このスクリプトを実行すると、現在の構成が表示され、変更可能な構成を置き換えることができます。スクリプトの実行後に、OracleAS Portal の Oracle Internet Directory キャッシュを更新することもできます。SSL を有効にしても、OracleAS Portal によってキャッシュされた Oracle Internet Directory 情報は変更されません。このため、通常はこうした状況でキャッシュを更新する必要はありません。

```
SQL> @secupoid
Current Configuration
-----
OID Host: oid.domain.com
OID Port: 389
Application DN:
orclApplicationCommonName=PORTAL,cn=Portal,cn=Products,cn=OracleContext
Application Password: 3E8C2D1B87CB61011757239C5AA9B390
Use SSL? N
```

```
PL/SQL procedure successfully completed.
```

```
Updating OID Configuration Entries
```

```
Press [Enter] to retain the current value for each parameter
```

```
For SSL Connection to LDAP, specify "Y"es or "N"o
```

```
-----  
Enter value for oid_host:
```

```
Enter value for oid_port: 636
```

```
Enter value for app_password:
```

```
Enter value for use_ssl_to_connect_to_ldap: Y
```

```
Enter value for refresh_with_new_settings: N
```

```
PL/SQL procedure successfully completed.
```

```
No errors.
```

このスクリプトの実行後に、OracleAS Portal は Oracle Internet Directory が LDAPS を使用するよう構成されます。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g セキュリティ・ガイド』

## C.4 secjsdom.sql スクリプトの使用

Oracle Internet Directory と OracleAS Portal のサーバーが異なるドメインに存在する場合は、ユーザーとグループの値リストを解決できるように、OracleAS Portal の JavaScript ドメインを明示的に構成する必要があります。これを行うには、ディレクトリ `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wvc` にある `secjsdom.sql` スクリプトを使用する必要があります。

OracleAS Portal をインストールしたときに、DAS とは異なる Oracle HTTP Server を使用するよう構成したと仮定します。この場合、共通のドメインを使用して、DAS によって表示される値リストの値を、OracleAS Portal によって表示されるページに転送できるようにする必要があります。

この状況で単一ドメインを作成するには、次の手順を実行します。

1. PORTAL として SQL\*Plus にログインします。
2. 次の SQL スクリプトを実行します。

```
SQL> @secjsdom.sql <domain_name>
```

前述の例で、DAS サーブレットが `infra.acme.com` というマシンで実行されており、OracleAS Portal が `portal.acme.com` というマシンで実行されている場合は、`secjsdom.sql` スクリプトを次のように起動します。

```
@ SQL> @secjsdom.sql acme.com
```

これらの手順を実行することにより、OracleAS Portal の Oracle Internet Directory 値リストを Netscape または Microsoft Internet Explorer で実行できるようになります。値リストを使用するときは、値リスト以外に転送ウィンドウが表示されます。転送ウィンドウは、ページのドメインをリセットしないで、OracleAS Portal に値を渡すときに必要です。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g セキュリティ・ガイド』

## C.5 Portal セッション Cookie の構成

OracleAS Portal は、セッション Cookie を使用して、Portal アプリケーションのセッション状態を保持します。Portal が正常に機能するよう、クライアントのブラウザはサーバーの Cookie を受け取るように構成しておく必要があります。インストール時には、Portal セッション Cookie に、ほとんどのインストールで適用できるように設定されているデフォルトの名前、適用範囲およびセキュリティが定義されます。この項ではこれらのデフォルトについて説明し、必要な場合にこれらの値を変更する方法について説明します。

### C.5.1 Cookie の名前の構成

デフォルトでは、Portal のセッション Cookie に、Portal スキーマへのアクセスに使用されるデフォルトのデータベース・アクセス記述子 (DAD) に従って portal という名前が設定されます。明示的に別の設定をする必要がある場合は、Oracle Enterprise Manager を使用して Cookie 名を変更することができます。これを行うには、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールの「DAD の編集」ページにアクセスする必要があります。このページは、Portal の中間層コンポーネントの mod\_plsql サービスにあります。Cookie 名は、「文書、別名およびセッション」ページで設定できます。Cookie 名を変更するには、「セッション・クッキー」セクションの「セッション・クッキー名」フィールドに名前を指定します。

## C.5.2 Cookie の適用範囲の構成

2つの中間層から同じ Portal に同時にアクセスする場合や、PL/SQL アダプタ機能に必要な Portal Cookie ドメインを開く場合は、そのアーキテクチャが使用するすべての中間層サーバーに OracleAS Portal セッション Cookie が送信されるように、Cookie の適用範囲を定義する必要があります。デフォルトでは、セッション Cookie のドメインは、その生成元のホストに適用されます。Cookie のパスは「/」に設定されます。

---

---

**注意：** これらの変更は Portal 上で通信量が発生していないときに行ってください。そのようにしないと、セッション Cookie 名を変更した後、既存のセッションでセッション・エラー (ORA-20000) が発生します。

---

---

たとえば、Cookie が `www.oracle.com` から生成された場合は、その Cookie のドメインは `www.oracle.com` となります。しかし、たとえば別のサーバー `portal.oracle.com` も、このセッション Cookie にアクセスする必要がある中間層のサーバーである場合があります。この場合は、Cookie ドメインを広げて、`portal.oracle.com` サーバーもこの Cookie を参照できるようにする必要があります。

Portal セッション Cookie の適用範囲を変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc
```

2. 作成した OracleAS Portal スキーマがインストールされているデータベースで、Portal スキーマとして SQL\*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal/portal_pwd
```

3. 次のコマンドを入力します。

```
SQL> @ctxckupd
OracleAS Portal
Current Settings for Portal Session Cookie:
Cookie Domain : Only send cookie back to originating host:port
Set Cookie as Secure: Y
Enter the domain for the session cookie: .oracle.com
Should cookie be flagged as secure for HTTPS sessions? (Y/N): N
Settings changed to
Cookie Domain : .oracle.com
Do not set cookie as secure. (N)
SQL>
```

このコマンドを使用すると、セッション Cookie の Cookie ドメインを設定できます。この例では、Cookie ドメインは `.oracle.com` に設定されます。



---

---

**注意:** 各種のリスナーを使用したり、複数のドメイン間でセッション Cookie を保持している場合は、Cookie ドメインがホスト名のみになるように指定します。たとえば、2 台のマシンから OracleAS Portal にアクセスする場合は、次のように指定します。

- machine1.us.oracle.com:3000
- machine2.us.oracle.com:4000

ctxckupd.sql を実行するときは、Cookie ドメインを .us.oracle.com に設定します。

---

---

**注意:** Cookie のドメインは、ユーザーの優先言語を判断する永続的な Cookie である、NLS\_LANGUAGE Cookie の有効範囲も特定します。この NLS\_LANGUAGE Cookie は、「言語の設定」ポートレットで言語を選択するときに設定されます。

---

---

### C.5.3 Cookie の保護

OracleAS Portal のこのリリースでは、スクリプト ctxckupd.sql に付加的なオプション Set Cookie as Secure が含まれています。

このスクリプトは、デフォルトでは ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wwc にあります。このスクリプトを実行すると、次のように出力されます。

```
SQL> @ctxckupd
OracleAS Portal
Current Settings for Portal Session Cookie:
Cookie Domain : Only send cookie back to originating host:port
Set Cookie as Secure: Y
Enter the domain for the session cookie...
Leave blank to scope to originating host:
Should cookie be flagged as secure for HTTPS sessions? (Y/N): N
Settings changed to
Cookie Domain : Only send cookie back to originating host:port
Do not set cookie as secure. (N)
SQL>
```

Set Cookie as Secure は、要求が HTTPS 接続を介してのみ渡される場合は、Cookie をサーバーへ返信しなければならないことを意味します。この設定では、セッション Cookie を保護する必要がある場合には、必ず保護された接続を介して転送されるようになります。デフォルトでは、このオプションは Yes に設定されており、ほとんどの配置においてこれで問題ありません。

ただし場合によっては、Set Cookie as Secure オプションを No に設定しなければならないことがあります。たとえば、HTTP と HTTPS の両方を介して Portal にアクセスし、両方のプロトコルでセッション Cookie を共有する場合があります（これは、両者ともデフォルトのポート、つまり HTTP では 80、HTTPS では 443 で実行されている場合に可能です）。このような場合には、Set Cookie as Secure が No に設定されている場合は、HTTPS リクエストを介して生成された同じ Cookie が、後続のどの HTTP リクエストにも送信されます。

## C.6 セッション・クリーン・アップ・ジョブの管理

OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On は、他の Web ベース・アプリケーションと同様に、セッション管理を行います。セッションは Cookie を使用して管理されます。セッション情報は、Portal スキーマおよび OracleAS Single Sign-On スキーマの表に格納されます。ユーザーがログアウトすると、セッション情報は非アクティブのマークが設定されます。DBMS ジョブは、非アクティブな行をクリーン・アップします。

セッション表には、アクティブのマークが設定された行の数が累計されます。ユーザーがログアウトするかわりにブラウザをシャットダウンしたときは、実際に使用されていない場合でも、その行はアクティブになります。クリーン・アップ・ジョブは、指定された期間を経過したアクティブな行をクリーン・アップします。

OracleAS Portal をインストールすると、セッション表 (WWCTX\_SSO\_SESSION\$) のセッション・クリーン・アップを実行する DBMS ジョブがインストールされます。クリーン・アップ・ジョブは、24 時間ごとに実行されるように設定されます。最初にスケジュールされたクリーン・アップは、ジョブのインストールから 24 時間後に発生します。

ジョブが実行されると、非アクティブなセッションがすべて削除され、さらにアクティブのマークが設定されたセッション (WWCTX\_SSO\_SESSION\$.ACTIVE = 1) のうち、7 日間を経過したもの (WWCTX\_SSO\_SESSION\$.SESSION\_START\_TIME < sysdate - 7) がすべて削除されます。

これらのデフォルト設定を変更するには、Portal セッションを管理する Portal スキーマまたは OracleAS Single Sign-On セッションを管理する OracleAS Single Sign-On スキーマに入っているいくつかのジョブ管理スクリプトを実行します。これらのジョブ管理スクリプトは、同じセッション管理インフラストラクチャを利用します。

現在のクリーン・アップ・ジョブ情報を取得するには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc
```

2. Portal スキーマまたは OracleAS Single Sign-On スキーマがインストールされているデータベースで、そのスキーマの適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL\*Plus にログインします。

たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal/portal
```

3. 次のコマンドを入力して、現在のジョブ情報を取得します。

```
SQL> @ctxjget
```

現在インストールされているジョブ情報が、DBMS\_JOB パッケージから返されて表示されます。

```
The session cleanup job is job ID 7381
dbms_job.isubmit(job=>7381,what=>'begin execute immediate' 'begin
wwctx_sso.cleanup_sessions(p_hours_old => 168); end;''; exception when
others then null; end;',next_date=>to_date('2001-04-17:14:07:20',
'YYYY-MM-DD:HH24:MI:SS'),interval=>'SYSDATE + 24/24',no_parse=>TRUE);
```

PL/SQL procedure successfully completed.

たとえば、実行されたプロシージャ、渡されたパラメータおよび次のクリーン・アップが発生する時間が表示されます。この例では、1 週間（168 時間）が経過したアクティブ・セッションをクリーン・アップします。また、次にスケジュールされているジョブは、2001 年 4 月 17 日の午後 5 時 14 分実行され、その後は 24 時間ごとにジョブが実行されることを示しています。

削除の対象とするセッションの有効期間を調整したり、クリーン・アップの頻度を変更したりするなど、ジョブの実行を変更する必要がある場合は、ctxjsub.sql スクリプトを実行し、変更した実行パラメータを送信します。

変更済の実行パラメータを送信するには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwc
```

2. Portal スキーマまたは OracleAS Single Sign-On スキーマがインストールされているデータベースで、そのスキーマの適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL\*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal/portal
```

3. 次のコマンドを入力して、新しいクリーン・アップ・ジョブ情報を送信します。

```
@ctxjsub <hours_old> <start_time> <time_format> <interval_hours>
```

表 C-2 は、ctxjsub のパラメータの一覧です。

**表 C-2 ctxjsub のパラメータ**

パラメータ	説明
hours_old	削除の対象とするアクティブ・セッションの有効期間

表 C-2 ctxjsub のパラメータ (続き)

パラメータ	説明
start_time	次のジョブを実行する時刻
time_format	start_time の書式を指定するための時刻書式
interval_hours	クリーン・アップ・ジョブの実行間隔 (時間)

たとえば、次のようになります。

```
SQL> @ctxjsub 200 '04/17/2001 10:00' 'MM/DD/YYYY HH24:MI' 12
```

ジョブの情報が、次のように表示されます。

```
Created path for job id.
DBMS_JOB id = 7381
Cleanup job updated. Job ID = 7381
```

```
PL/SQL procedure successfully completed.
```

実行パラメータを変更するためのクリーン・アップ・ジョブ送信スクリプトは、何度でも実行できます。スクリプトを起動するたびに、クリーン・アップ・ジョブのジョブ ID に関連付けられているジョブ情報が更新されます。このジョブ ID は、環境設定ストアで管理され、ジョブ情報が更新されます。このため、複数のジョブが送信されることがありません。

start\_time に START を指定することもできます。この場合、time\_format パラメータは無視されます。ただし、NOW などの値は渡す必要があります。この場合、現在時刻から <interval\_hours> 時間の間隔でジョブが実行されます。

```
SQL> @ctxjsub 168 START NOW 24
```

これにより、インストール時と同じ設定で、ジョブが送信されます。

クリーン・アップ・ジョブをすぐに実行する場合は、ctxjget.sql をコールして、ジョブ ID を取得します。ジョブ ID を取得したら、製品スキーマに入っている次のコマンドを発行して、そのジョブを実行できます。

```
SQL> exec dbms_job.run(7381);
```

この例では、7381 が ctxjget.sql をコールして返されたジョブ ID です。この方法でジョブを実行すると、この手動起動の interval\_hours 時間後に、次のジョブが自動的に起動されます。このジョブを元のスケジュールで実行するには、ctxjsub.sql を使用して目的の start\_time を再送信します。

## C.7 実行時間とキャッシュの統計

すべての OracleAS Portal ページは、実行時間とキャッシュの情報が表示される特殊なモードで実行できます。このデバッグ情報をすべてのページに表示する場合は、web.xml ファイルで Parallel Page Engine の showPageDebug パラメータに true を設定します。

**関連項目：** [付録 D 「Parallel Page Engine の構成」](#)

選択したいくつかのページとポートレットに関するデバッグ情報を表示する場合は、`_debug` URL パラメータによってログ・レベルを制御することができます。たとえば、次の OracleAS Portal ページの実行時間の統計を参照するには、次のようにします。

```
http://abc.com/servlet/page?_pageid=21
```

これに手動で `&_debug=3` を挿入します。

次のようになります。

```
http://abc.com/servlet/page?_pageid=21&_debug=3
```

`_debug` の有効な値は 0、1、2、3、4 および 5 です。

1 より大きい値を使用すると、要求の間に `logmode` の値が増え、すべての要求のログ・メッセージが、ページ・レスポンスへエコーされるようトリガーされることがあります。

---

**注意：** 0 より大きい値を指定すると、`_debug=1` がバック・エンドの要求で伝播されます。

---

表 C-3 は、`_debug` の結果の値を表しています。

**表 C-3 実行時間とキャッシュの `_debug` 値の統計**

値	実行時間とキャッシュの統計	プロバイダへのフラグの転送 (値 1 として)	最小値まで増える logmode	ページ・レスポンスへのログ・メッセージの書き込み
0	行う	-	-	-
1	行う	行う	-	-
2	行う	行う	debug	行う
3	行う	行う	request	行う
4	行う	行う	content	行う
5	行う	行う	parsing	行う

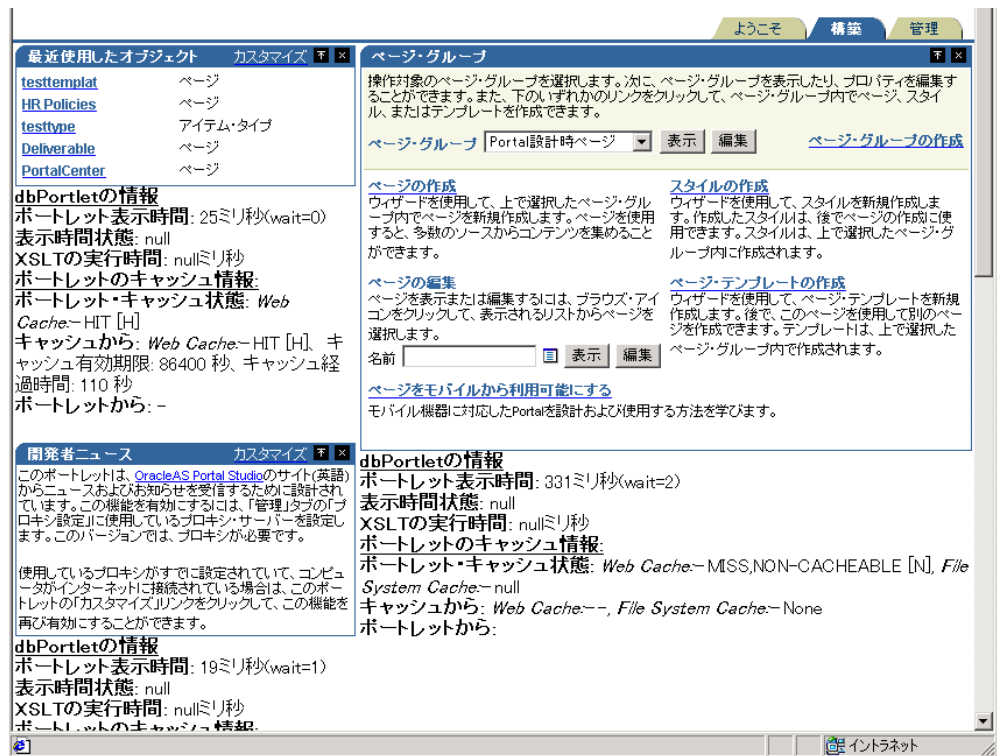
urlDebugMode および urlDebugUsers は付加的なパラメータで、これを使用して URL における \_debug の使用を制限することができます。詳細は、付録 D 「Parallel Page Engine の構成」を参照してください。

Portal ページをデバッグ・モードで実行すると、次の統計を表示できます。

- ポートレット統計
- ページ統計
- その他のサマリー統計

次の図は、\_debug=0 モードで実行されているページを表しています。

図 C-1 デバッグ・モードで実行されている Portal ページ



## C.7.1 ポートレット統計

図 C-1 は、ポートレットに関連する様々な統計をポートレットごとに示しています。各ポートレットは、固有の内部参照識別番号を持ちます。この番号は「ポートレットの情報」サマリーで使用されます。図 C-1 の左上端のポートレットでは、この番号が 6256 になっています。

ポートレットごとに次の統計が表示されます。

### C.7.1.1 ポートレットの実行時間情報

- **ポートレットの表示時間** (ミリ秒) (ミリ秒間待機)

ポートレットの取得に要する時間と要求がキューに入っている時間 (ミリ秒) が表示されます。

- **表示時間状態**

この統計は使用されていません。

- **XSLT の実行時間** (ミリ秒)

XSL スタイル・シートの取得に必要な時間 (ミリ秒) が表示されます (XML ポートレットの場合)。

### C.7.1.2 ポートレットのキャッシュ情報

- **ポートレット・キャッシュ状態** Web Cache (値) ファイル・システム・キャッシュ (値)

OracleAS Web Cache および mod\_plsql ファイル・キャッシュのキャッシュ状態です。

OracleAS Web Cache の有効な値は、次のとおりです。

- 「MISS, or NEW [M]」は、OracleAS Web Cache にキャッシュ・ミスが発生していることを示します。ポートレットによって新しいコンテンツが生成されています。
- 「MISS, or STALE [G]」は、OracleAS Web Cache にキャッシュ・ミスが発生していることを示します。キャッシュ内のコンテンツが失効しています。
- 「HIT [H]」は、OracleAS Web Cache がヒットしたことを示します。

ファイル・システム・キャッシュの有効な値は、次のとおりです。

- 「HIT\_PING」は、妥当性チェック・ベースのポートレットのキャッシュ・ヒットを示します。
- 「HIT\_EXPIRES」は、有効期限ベースのポートレットのキャッシュ・ヒットを示します。

- 「MISS\_STALE」は、キャッシュ・ミスが発生していることを示します。キャッシュ内のコンテンツが失効しています。これは、有効期限ベースおよび妥当性チェック・ベースのポートレットに適用されます。
- 「MISS\_NEW」は、キャッシュ・ミスが発生していることを示します。ポートレットによって新しいコンテンツが生成されています。これは、有効期限ベースおよび妥当性チェック・ベースのポートレットに適用されます。

ポートレットがファイル・システム・キャッシュを使用する場合は、前述の情報が表示されます。そうでない場合は、NULL になります。

OracleAS Web Cache がヒットした場合は、コンテンツが OracleAS Web Cache から直接提供されるため、ファイル・システム・キャッシュに関する詳細は表示されません。また、ポートレットが OracleAS Web Cache を使用しない場合、Web Cache 情報は出力されません。

- **キャッシュから : Web Cache** キャッシュ有効期限 (秒)、キャッシュ経過時間 (秒)、ファイル・システム・キャッシュ (値)

ポートレットが使用するキャッシュのタイプに基づいて、OracleAS Web Cache とファイル・システム・キャッシュの情報がここに出力されます。

**関連項目：**『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』

「キャッシュ有効期限」には、OracleAS Web Cache のポートレット・コンテンツの有効期間 (秒) が表示されます。

「キャッシュ経過時間」には、ポートレット・コンテンツが OracleAS Web Cache にキャッシュされている時間 (秒) が表示されます。

「File System Cache」には、ファイル・システム・キャッシュから取得された情報が表示されます。つまり、キャッシュ・キーとキャッシュ有効期限が表示されます。キャッシュがヒットした場合は、キャッシュ・レベルと、「HIT\_PING」または「HIT\_EXPIRES」のキャッシュ状態が表示されます。

キャッシュがヒットしたときは、妥当性チェック・ベースのポートレットの場合はキャッシュ・キー、キャッシュ・レベルおよび「HIT\_PING」の「キャッシュ状態」値が表示され、有効期限ベースのポートレットの場合はキャッシュ有効期限、キャッシュ・レベルおよび「HIT\_EXPIRES」のキャッシュ状態値が表示されます。

妥当性チェック・ベースおよび有効期限ベースのポートレットの場合、新しいポートレット・コンテンツが生成されたためにキャッシュ・ミスが発生したときは、「なし」が出力されます。ポートレットには、新しいキャッシュ・キー、キャッシュ有効期限およびキャッシュ・レベルを取得するように通知されます (「キャッシュ状態」: 「MISS\_NEW」)。

妥当性チェック・ベースのポートレットの場合、キャッシュ内のコンテンツが失効したためにキャッシュ・ミスが発生したときは、キャッシュに現在入っているキャッシュ・キーとキャッシュ・レベルの値が表示されます。この場合、ポートレットに対して、更



新済のキャッシュ・キーとキャッシュ・レベルを取得するように通知されます  
 (「キャッシュ状態」: 「MISS\_STALE」)。

有効期限ベースのポートレットの場合、キャッシュ内のコンテンツが失効したために  
 キャッシュ・ミスが発生したときは、「キャッシュ有効期限」フィールドが  
 「INVALID」になり、キャッシュ・レベルが表示されます。この場合、ポートレットに  
 対して、更新済のキャッシュ有効期限とキャッシュ・レベルを取得するように通知され  
 ます (「キャッシュ状態」: 「MISS\_STALE」)。

- **ポートレットから: (キャッシュ・キー) (キャッシュ・レベル)**

ファイル・システムのキャッシュ・キー、キャッシュ有効期限およびキャッシュ・レベ  
 ルについて、ポートレットから取得された情報です。キャッシュ・ミスが発生し、更新  
 済または新規の値を取得するようにポートレットに通知があると表示されます  
 (「キャッシュ状態」: 「MISS\_NEW」または「MISS\_STALE」)。OracleAS Web Cache  
 に関連する情報は、このセクションに表示されません。

妥当性チェック・ベースのポートレットの場合、キャッシュがヒットして ping が正常  
 に終了したとき (キャッシュ内のコンテンツが引き続き有効な場合)、ポートレットは  
 新しいキャッシュ・キーとキャッシュ・レベルを返しません。つまり、キャッシュは引  
 き続き有効であることを示します。この場合、ping 成功と表示されます (「キャッシュ  
 状態」: 「HIT\_PING」)。

有効期限ベースのポートレットの場合、キャッシュがヒットしてコンテンツが失効して  
 いないときは、ポートレットに対してコンテンツの要求は通知されません。この場合、  
 「Not contacted」が表示されます (「キャッシュ状態」: 「HIT\_EXPIRES」)。

次に、様々なキャッシュ・シナリオとその出力例をいくつか示します。ここでは、ペー  
 ジおよびポートレット関連の出力例はあげません。

#### キャッシュ情報のデバッグ出力例 1

- **ポートレット・キャッシュ: ファイル・システム・キャッシュ、キャッシュ・タイ  
 プ: 妥当性チェック・ベース、状態: MISS, STALE**

```
Caching information for portlet:
Portlet Cache status: File System Cache:- MISS,STALE
From Cache: File System Cache:- Cache Key: 42, Cache Level: USER
From Portlet: Cache Key: 44, Cache Level: USER
```

#### キャッシュ情報のデバッグ出力例 2

- **ポートレット・キャッシュ: ファイル・システム・キャッシュ、キャッシュ・タイ  
 プ: 有効期限ベース、状態: MISS, NEW**

```
Caching information for portlet:
Portlet Cache status:File System Cache:- MISS,NEW
From Cache: File System Cache:-None
From Portlet: Cache Expires: 1, Cache Level: USER
```

### キャッシュ情報のデバッグ出力例 3

- ポートレット・キャッシュ:ファイル・システム・キャッシュ、Web Cache、  
キャッシュ・タイプ:妥当性チェック・ベースおよび失効化ベース、状態:MISS,  
NEW (ファイル・システム・キャッシュおよび Web Cache 内)

**Caching information for portlet:**

**Portlet Cache status:** Web Cache:- MISS,NEW [M], File System Cache:- MISS,NEW  
**From Cache:** Web Cache:- Cache Expires: 86400 secs, Age in Cache: 0 secs ,  
File System Cache:- None  
**From Portlet:** Cache Key: 9.0.2.2.1502:04:18:09:19:56, Cache Level: SYSTEM

### キャッシュ情報のデバッグ出力例 4

- ポートレット・キャッシュ:Web Cache、キャッシュ・タイプ:失効化ベース、状  
態:HIT (Web Cache 内)

**Caching information for portlet:**

**Portlet Cache status:** Web Cache:- HIT [H]  
**From Cache:** Web Cache:- Cache Expires: 86400 secs, Age in Cache: 58 secs  
**From Portlet:** -

## C.7.2 ページ統計

図 C-1 に示したページ上のポートレットと同様に、すべてのページには一意の内部参照識別番号があります。

ページの場合は、次の統計が表示されます。

- **経過時間** (ミリ秒)

Parallel Page Engine (PPE) で計算されたページを生成するために必要な時間の合計です。ネットワーク・オーバーヘッドによって、ブラウザで実際に生成される時間は、これより長くなる可能性があります。

経過時間は、ページ・メタ待機時間とストリーム時間で構成されます。ページ・メタ待機時間は、HTTP 接続でコンテンツを待機した時間です。ストリーム時間は、コンテンツの要素をストリーム化および収集した時間です。ストリーム時間は、次の要素で構成されます。

- ページ・メタ時間
- ポートレットの完了を待機した時間
- コンテンツをストリーム化してブラウザに書き込んだ時間

経過時間は、ページを収集 (要求を受信してから最後のバイトをブラウザに書き込むまで) するためにかかった時間 (ミリ秒) です。

- **ページ・メタ時間** (ミリ秒) ミリ秒間待機

ページ・メタ・データの取得にかかった時間が表示されます。待機時間（ミリ秒）は、要求がキューに入っていた時間です。

- **ページ・メタ・キャッシュ・ステータス**（Web Cache の値）、（キャッシュ有効期限：秒）、（キャッシュ経過時間：ミリ秒）、（ファイル・システム・キャッシュの値）  
OracleAS Web Cache と mod\_plsql ファイル・キャッシュのキャッシュ状態を表します。OracleAS Web Cache の有効な値は、「MISS, or NEW」および「HIT」です。ファイル・キャッシュの有効な値は、「HIT, or PING」および「MISS, or STALE」です。Web キャッシュ有効期限と「キャッシュ経過時間」の値は、ミリ秒単位です。
- **ログイン・メタ時間**（ミリ秒）  
ログイン・メタ・データの取得にかかった時間（ミリ秒）が表示されます。待機時間は、要求キュー内に要求が入っていた時間（ミリ秒）が表示されます。
- **ログイン・メタ・キャッシュ・ステータス**  
前述のページ・メタ・キャッシュ・ステータスと同様に、Web Cache と mod\_plsql ファイル・キャッシュのログイン・メタ・データのキャッシュ状態を表します。

### C.7.3 その他のサマリー統計

- **Stream info** (msecs)  
ページをストリーム化してブラウザに書き込んだ時間（ミリ秒）を表します。
- **processing** (msecs)  
ストリーム化にかかった時間（ミリ秒）。
- **write** (msecs)  
write 行は、複数回繰り返されることがあります。write 行は、ストリームに対して各物理バッファが書き込んだことを表します。各バッファが書き込むたびに、1 write 行が記録されます。
- **flush** (msecs)  
flush ログは、書込みストリームがフラッシュされたことを示します。flush ログは、ネットワーク・ラウンドトリップの数を追跡するために記録されます。

## C.8 cfgiasw スクリプトを使用したモバイルの構成

OracleAS Portal または OracleAS Portal の Portal サービス URL に対する Portal の参照を変更する場合は、スクリプト `cfgiasw.csh` Oracle Application Server Wireless (UNIX の場合) または `cfgiasw.cmd` (Windows の場合) を使用して参照を手動で更新する必要があります。このスクリプト・ファイルは次の場所にあります。

`ORACLE_HOME/assistants/opca/`

パラメータを指定せずにスクリプトを実行すると、次のような使用方法が画面に表示されます。

使用方法:

```
cfgiasw.csh -s portal_schema -sp portal_schema_password
             -w ias wireless url
             -h portal_home page url
             -c connect_string
```

**表 C-4 Oracle Application Server Wireless 構成パラメータ**

パラメータ	説明
-s	OracleAS Portal データベース・オブジェクトの Oracle データベース・スキーマ。 デフォルトは PORTAL。
-sp	OracleAS Portal スキーマのパスワード。 デフォルトは portal_schema。
-w	OracleAS Portal に対するモバイル要求用の Oracle Application Server Wireless ゲートウェイの URL。このパラメータは必須ではありません (デフォルトはなし)。
-h	OracleAS Portal ホーム・ページの URL。これは、Portal の中間層のキャラクタ・セットを特定するために Portal 内で使用されます。この情報は、Oracle Application Server Wireless サービスを作成するときに必要です。このパラメータは必須ではありません (デフォルトはなし)。
-c	データベースに対する接続文字列 (デフォルトはなし)。

ホストされていない Portal では、Oracle Application Server Wireless の Portal サービスの URL 参照を、「グローバル設定」ページの「モバイル」タブで設定できます。ただし、OracleAS Portal ホーム・ページの URL は例外で、これは `cfgiasw` スクリプトでしか設定できません。

このスクリプトは、OracleAS Portal で、Oracle Application Server Wireless の Portal サービスの URL および OracleAS Portal ホーム・ページの URL の両方に対する参照を設定する場

合に使用します。これは、ホストされた環境で URL 参照の設定に使用でき、すべてのサブスクリバに影響を与えます。この情報はサブスクリバごとに個別に構成されないためです。

たとえば、次のようになります。

```
cfgiasw.csh -s portal -c portal_db -w 'http://iaswhost:port/ptg/rm?PAoid=%wireless_service_id%'
```

この例では、モバイル・デバイスが、Oracle Application Server Wireless サーバーの仲介なしで OracleAS Portal に対して要求を直接作成すると、OracleAS Portal によってクライアントがここで指定された URL にリダイレクトされます。この URL は、Oracle Application Server Wireless サーバーの OracleAS Portal のサービスの URL で、次の書式になります。

```
http://<host>:<port>/ptg/rm?PAoid=<service_id>
```

この設定が空白の場合は、OracleAS Portal に対して直接作成されたモバイル・クライアントの要求は、要求がサポートされていないことを示す HTTP ステータスを受け取ります。

OracleAS Portal で他のモバイルを構成する場合は、[4.6 項「OracleAS Portal でのモバイル・サポートの構成」](#)を参照してください。

## C.9 ptlinvsw.sql スクリプトを使用した Portal コンテナのページの無効化

ユーザーがページ・ポートレット内のサブページに移動してそれを編集しても、ポートレットが含まれているページが他の方法によって無効化されないかぎり、変更内容はすぐには表示されせん。

この問題を解決するには、セッション・ストアの検索が役に立ちます。あるページが編集されると、セッション・ストアが最初に検索され、編集されたページを表示しているポートレットが含まれているすべてのページを特定し、それらのページが無効化されます。

セッション・ストアの検索はパフォーマンスに影響を与えるため、この機能はデフォルトでは有効になっていません。

Portal コンテナのページを無効にするには、次の手順を実行します。

1. Portal スキーマがインストールされているデータベースで、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリに移動します。
2. Portal スキーマに対する適切なユーザー名とパスワードを使用して、SQL\*Plus にログインします。

たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal/portal
```

3. 次のコマンドを入力します。

```
SQL> @ptlinvsw.sql TRUE
```

この無効化オプションを無効にするには、次のコマンドを入力します。

```
SQL> @ptlinvsw.sql FALSE
```

---

## Parallel Page Engine の構成

Oracle Application Server Portal アーキテクチャは、3層アーキテクチャで設計されており、任意のブラウザから接続できます。この柔軟なアーキテクチャにより、各構成要素（ブラウザ、Oracle HTTP Server リスナー、Oracle9i Database Server および OracleAS Portal）を必要に応じて個別にアップグレードできます。

OracleAS Portal の中間層の一部である PPE（Parallel Page Engine）は、Oracle Application Server Containers for J2EE およびサービス・ページの要求内で実行される、共有サーバー・プロセス・サーブレット・エンジンです。PPE によって、ページ・メタデータの読み込み、ポートレット・コンテンツに対応するプロバイダのコール、プロバイダの応答の受入れ、指定されたページ・レイアウトに従った要求されたページの作成が行われます。

## D.1 Parallel Page Engine のパラメータの構成

OracleAS Portal からページが要求されると、ブラウザで要求が作成され、Oracle HTTP Server リスナーに送信されます。返されるページは、様々なタイプのポートレットから構成されます。ポートレットは、特定のデータ・ソースのデータを含む、Portal ページ上の特定の領域です。

Parallel Page Engine (PPE) は、Oracle Application Server Metadata Repository からページ・メタデータを取得し、ページ上にポートレットを収集します。

### D.1.1 PPE 構成パラメータの設定

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 以上では、すべてのサブレットは、アプリケーションの配置に基づいて OC4J の下にインストールされます。PPE のすべての構成パラメータは、web.xml ファイルの PPE 配置に関連するセクションに入力されます。デフォルトのインストールでは、このファイルは次の場所にあります。

```
MID_TIER_ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/portal/portal/WEB-INF/
```

### D.1.2 Parallel Page Engine 構成の設定

次の表で、Parallel Page Engine (PPE) で使用できる様々な構成パラメータについて説明します。各パラメータは、様々な方法で PPE の操作を設定します。たとえば、ログの記録方法を設定するパラメータ、エンジンのパフォーマンスを操作するパラメータ、OracleAS Portal 自体を操作するパラメータなどがあります。ほとんどのパラメータはデフォルト値のまま使用できますが、構成によってはデフォルト値を変更する必要があります。各パラメータについて、構文、説明およびデフォルト値を示します。



表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
<b>poolSize</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;poolSize&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;25&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>このパラメータは、Parallel Page Engine が一度に作成できる接続の数を表します。この値は、パフォーマンス要件に基づいて調整できます。値を大きくすると、より多くのスレッドおよび接続を使用できますが、使用するリソースが増加します。</p>	25
<b>requesttime</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;requesttime&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;30&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>タイムアウト値が指定されていないポートレット要求に割り当てられるデフォルトのタイムアウト値です。この値は、サーバーからレスポンス・ヘッダーが返されるまでの時間（秒）として適用されます。タイムアウト値は、タイムアウトが発生した場所の値が優先されます。ポートレットにタイムアウト値が設定されている場合は、そのタイムアウトが使用されます。ポートレットにタイムアウトが設定されていない場合は、プロバイダに登録されたタイムアウトが使用されます。どちらの値も設定されていない場合は、requesttime が使用されます。</p> <p>このパラメータの上限値は、Web ユーザーが納得できる応答時間（通常は数秒）に設定する必要があります。</p>	30 秒
<b>minTimeout</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;minTimeout&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;5&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>ポートレットで使用できるタイムアウトの最小値です。minTimeout が 5 に設定されている場合、ポートレットからタイムアウトとして 2 が送信されても、minTimeout 値の 5 がそのポートレットに適用されます。</p>	5 秒

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
<b>stall</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;stall&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;120&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>レスポンス・ヘッダーは返されたが、データ自体が返されていない場合は、<b>stall</b> が有効になります。この値により、Parallel Page Engine と接続が持続的に結合されないようにします。PPE は、レスポンス・ヘッダーを受信すると、すべてのデータが取得できるまで待機しようとしません。要求されたポートレットが大きい場合や、低速のネットワークを使用している場合は、この値を適切に設定してください。</p> <p>このパラメータの上限値は、Web ユーザーが納得できる応答時間 (通常は数秒) に設定する必要があります。</p>	120 秒
<b>prefix</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;prefix&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;/pls&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p><b>mod_plsql</b> が存在する場所を指定するために使用される文字列。デフォルトの Oracle Application Server インストール構成が、デフォルト値になります。ただし、Oracle Application Server の構成を変更した場合は、この値を変更する必要があります。</p>	/pls
<b>proxyHost</b> <b>proxyPort</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;proxyHost&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;ph.comp.com&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt; &lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;proxyPort&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;8888&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>Oracle Application Server のデータを要求するときに必要なプロキシ・サーバーの、ホスト名とポート番号です。これらのパラメータは、PPE と Oracle Application Server リスナーの間でプロキシ・サーバーが使用されている場合にのみ必要です。</p>	該当なし

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
offlinePathHtml offlinePathMxml	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;offlinePath&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;/path/offline.html&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt; &lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;offlinePathMxml&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;/path/offline.xml&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	設定したパラメータに応じて、オフライン・メッセージが表示されます。HTML ブラウザまたはモバイル対応デバイスのメッセージを表示できます。	null
showError	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;showError&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;true&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	ポートレットがタイムアウトになった場合や Parallel Page Engine が特定のポートレット要求の処理に失敗した場合は、ユーザーにエラーが表示されます。詳細なメッセージは表示できませんが、予期したページが表示されなかったことを示す説明が簡単に表示されます。このパラメータを false に設定すると、ユーザーにメッセージは表示されません。	true
cacheBuffer	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;cacheBuffer&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;32768&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	このパラメータで、完了したページをキャッシュから読み込むときにバッファに使用されるバイト数を設定します。Portal で通常使用するページのサイズを決定し、その Portal の構成に合わせて、この値を調整します。大きい値を設定すると、大きなページをすばやく読み込むことができますが、使用されるリソースが増加します。小さい値を設定すると、キャッシュ・ファイルの読み込みが遅くなります。	32768 バイト

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
<b>cacheEncryptionKey</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;cacheEncryptionKey&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;KEY&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	このキーを指定すると、OracleAS Web Cache に キャッシュされるヘッダーが暗号化されます。これにより、キャッシュ・キーのセキュリティが向上し、不正な要求がキャッシュされたオブジェクトを取得する可能性が低くなります。	サーバーのコンテキスト情報
<b>enableWebCacheStaticRules</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;enableWebCacheStaticRules&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;&gt;false&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>false に設定すると、PPE は、収集されたページのサロゲート制御レスポンス・ヘッダーに no-store ディレクティブを格納します。これは OracleAS Web Cache で定義されたどの静的なキャッシュ可能性ルールよりも優先し、収集されたページが Web Cache にキャッシュされないことが保証されます。</p> <p>true に設定すると、収集されたページのサロゲート制御レスポンス・ヘッダーに no-store ディレクティブは格納されません。これにより、収集されたページを静的なキャッシュ可能性ルールを使用して OracleAS Web Cache にキャッシュすることが可能になります。</p>	false
<b>showPageDebug</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;showPageDebug&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;&gt;false&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>showPageDebug を true に設定すると、すべての要求に対してページのタイミング情報が表示されます。</p> <p>実行時間とキャッシュの統計については、<a href="#">C.7 項「実行時間とキャッシュの統計」</a>を参照してください。</p>	false
<b>dmsLogging</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;dmsLogging&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;&gt;false&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	dmsLogging を true に設定すると、PPE は DMS ログを出力します。	true

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
queueTimeout	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;queueTimeout&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;10&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	タイムアウトになる前に要求がキューに格納される期間。このパラメータは、Portal に対する要求がタイムアウトになっている場合に使用されません。ただし、要求は送信されません。このパラメータを指定すると、他のパラメータと異なり、パフォーマンスの問題を考慮する必要があります。このパラメータは、要求がキューに格納される期間を調節するときに使用します。	10 秒

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
cacheDir	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;cacheDir&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;c:\ias904\Apache\modpl sql\cache&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>cacheDir パラメータには、キャッシュ・ファイルの格納および取得に使用されるファイル・システム内のディレクトリを指定します。PPE は、ポートレット・コンテンツと、収集が完了したページ・コンテンツをこのディレクトリにキャッシュします。</p> <p>このパラメータを指定しない場合は、次の配置場所がデフォルトになります。</p> <p><code>ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cache</code></p> <p>値を指定する場合は、相対パスでなく、絶対パスにする必要があります。</p> <p>このディレクトリは <code>mod_plsql</code> と PPE によって共有されるため、ディレクトリに、OHS および OC4J プロセスがディレクトリに書き込むことができるような適切な権限があることを確認してください。</p> <p>キャッシュ・ファイルの場所を変更する場合は、キャッシュ・ディレクトリの場所が引き続き <code>ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cache</code> 内にあるように、シンボリック・リンクを使用することをお勧めします。使用中のオペレーティング・システムでシンボリック・リンクがサポートされない場合は、対応する変更が <code>mod_plsql</code> キャッシュ構成ファイル (<code>ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/cache.conf</code>) に対して必ず行われるようにします。</p>	デフォルトの配置場所

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
<b>jspRoot</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;jspRoot&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;/JSP PATH&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	JSP ページの JSP ファイルが配置されている場所の相対パス。	jsp
<b>jspSrcAlias</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;jspSrcAlias&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;/PATH&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	JSP Engine の別名 (/portal/jsp などのパス)。	/jsp/
<b>urlDebugMode</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;urlDebugMode&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;1&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>PPE が対応する <code>_debug URL</code> パラメータの最大値を指定します。<code>_debug</code> に指定できる値は、次のとおりです。</p> <p>none、0、1、2、3、4 および 5。</p> <p>指定した値よりも大きい値を PPE が受信すると、指定可能な最大値に設定されるか、または、値なしが許可されている場合は、元の値が無視されます。</p> <p>値は、累積的です。たとえば、デバッグ値 2 を指定すると、デバッグ・レベル 1 および 0 の出力も記録されます。</p>	1

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
<b>urlDebugUsers</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;urlDebugUsers&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;fred,bill,ben&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>このパラメータは、<code>_debug URL</code> パラメータを使用できるユーザーのリストを示すために指定され、<code>urlDebugMode</code> パラメータ内の値の制限に依存しています。このパラメータを指定しないと、すべてのユーザーが値の制限を条件として <code>_debug URL</code> パラメータを使用できます。このパラメータを指定しないと、すべてのユーザーが値の制限を条件として <code>_debug URL</code> パラメータを使用できます。</p> <p>形式は、Portal ユーザー名のカンマ区切りのリストであり、前後の空白は無視されます。</p>	none 必須
<b>useWebCache</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;useWebCache&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;true&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>Web Cache が PPE とともに使用されるかどうかを示します。指定できる値は、<code>true</code> と <code>false</code> です。</p>	true
<b>dadFilePath</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;dadFilePath&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;c:\iAS904\Apache\modplsql\conf\dads.conf&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p><code>mod_plsql</code> に使用され、PPE に読み込まれる <code>dads.conf</code> ファイルの絶対ファイル名およびパス。指定しない場合のデフォルトは、次のとおりです。</p> <p><code>ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/dads.conf</code></p>	<code>ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/dads.conf</code>



表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
logmode	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;logmode&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;debug&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>Parallel Page Engine のデバッグ・モードを有効にします。デバッグ・モードを有効にすると、デバッグ情報が Parallel Page Engine のログ・ファイルに書き込まれます。デバッグ・モードでは、大量の情報がディスクに書き込まれるため、パフォーマンスが低下する可能性があります。デフォルトでは、Parallel Page Engine のログ・ファイル (application.log) は次の場所にあります。</p> <pre>ORACLE_HOME/j2ee/ OC4J_Portal/ application-deployments/portal/</pre> <p>指定できる値は次のとおりです。</p> <p>none: デバッグ・メッセージなし</p> <p>perf: パフォーマンス・メッセージのみ</p> <p>debug: 一般的なデバッグ・メッセージ</p> <p>request: PPE に作成された要求の詳細</p> <p>content: PPE に作成された要求のコンテンツの詳細</p> <p>parsing: メタデータ解析の詳細</p> <p>all: すべてのデバッグ・メッセージ</p> <p>値は、累積的です。たとえば、ログ・レベルの request を指定すると、ログ・レベルの debug および perf の出力も記録されます。</p>	none: デバッグ・メッセージなし

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
<b>maxParallelPortlets</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;maxParallelPortlets&lt;/pa ram-name&gt; &lt;param-value&gt;20&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>指定したページで同時に実行できるポートレット要求の最大数を指定するために使用されます。指定できる値は次のとおりです。</p> <p>0: 制限なしを示します (利用可能なフェッチャ数以上)。</p> <p>任意の正の整数: 同時に処理できる要求の制限数を示します。</p>	20
<b>httpsports</b>	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;httpsports&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;433:444&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>コロン (:) 区切り形式のポートのリスト。PPE が SSL を使用してポートレット・リポジトリと通信するときに使用します。</p> <p>同じように web.xml を通じて構成される Event サブレットでは、httpsports を PPE 内の httpsports パラメータと同じ値に設定する必要があります。これは Event サブレットに対する唯一の構成であり、SSL が使用されているときのみ適用可能です。</p> <p>PPE 設定内のパラメータを変更すると、Event サブレットの httpsports 設定にも同じ変更を行う必要があります。</p>	null

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
useScheme	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;useScheme&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;http&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>PPE が Portal へ要求を行うときに使用されるスキーマ (HTTP または HTTPS) よりも優先されます。指定しない場合のデフォルトでは、ページ要求のスキーマを常に使用します。useScheme および usePort パラメータを設定する必要があることに注意してください。</p> <p>パブリック・アクセスが port A 上で https を経由し、port B 上ではより高速な http 接続を使用するために PPE 要求を設定する場合は、これらのパラメータを指定する必要があります。</p>	ページ要求のスキーマを使用
usePort	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;usePort&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;8888&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>PPE が Portal へ要求を行うときに使用されるポートよりも優先されます。指定しない場合のデフォルトでは、ページ要求のポートを常に使用します。useScheme および usePort パラメータを設定する必要があることに注意してください。</p> <p>パブリック・アクセスが port A 上で https を経由し、port B 上ではより高速な https 接続を使用するために PPE 要求を設定する場合は、これらのパラメータを指定する必要があります。</p>	ページ要求のポートを使用

表 D-1 Parallel Page Engine (PPE) のパラメータ (続き)

PPE 設定	構文	説明	デフォルト値
x509certfile	<pre>&lt;init-param&gt; &lt;param-name&gt;x509certfile&lt;/param-name&gt; &lt;param-value&gt;c:\certificates\trustedcerts.txt&lt;/param-value&gt; &lt;/init-param&gt;</pre>	<p>HTTPClient に暗黙的に信頼される証明書のリストが含まれたファイルを指定します。これらの証明書は、SSL を使用する HTTPClient によって行われたすべての接続に対するトラスト・ポイントとして追加されます。この設定がいったん使用されると、すべての SSL 接続が信頼されるようになります。信頼されない場合、HTTPClient によって PPE 内で例外がスローされます。</p> <p>SSL 接続は 2 つの理由で PPE から行われ、この構成が次の両方に影響を与えることに注意してください。</p> <p>たとえば、PMD などに対する、Portal へのループバック要求</p> <p>プロバイダへのコールの表示</p> <p>ここで指定したファイルは、すべての信頼できる証明書をエクスポートすることにより Wallet から取得できますが、取得したファイル内のコメントは削除する必要があります。また、手動で信頼できる証明書ファイルを作成することもできます。</p>	トラスト・ポイントは不使用

---

---

# Oracle Application Server 構成ファイルの使用

この付録では、Oracle Application Server や中間層にあるそのコンポーネントの接続や動作に影響を及ぼす可能性のある構成ファイルと構成表およびその接続先にある他のマシンについて説明します。

この章の内容：

- [Oracle HTTP Server 構成ファイル \(httpd.conf\)](#)
- [Oracle データベース接続ファイル \(tnsnames.ora\)](#)
- [Web Cache 構成ファイル](#)
- [OracleAS Single Sign-On 構成表](#)
- [OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーション表](#)
- [ローカルの HOSTS ファイル](#)
- [Oracle Enterprise Manager 10g の使用](#)

## E.1 Oracle HTTP Server 構成ファイル (httpd.conf)

Oracle HTTP Server の構成ファイル `httpd.conf` には、Oracle HTTP Server を実行するための構成情報が入っています。このファイルの内容は、リスニング・ポート、サーバー名、仮想ホスト、プロキシ構成などに関する情報です。また、SSL (Secure Sockets Layer) サポートの構成もこのファイルで行います。その場合は、証明書や他の HTTPS 構成ディレクトティブなどの情報を定義します。

`ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf`

## E.2 Oracle データベース接続ファイル (tnsnames.ora)

`tnsnames.ora` ファイルでは、DAD で接続文字列として使用されるエントリを定義します。

また、Oracle Application Server がインストールされている Oracle ホームの `tnsnames.ora` ファイルには、Oracle Portal のインストール・コードが格納されているデータベースを指す接続文字列を指定しておく必要があります。

たとえば、C シェルでは、コマンドライン・プロンプトで次のように入力します。

```
setenv TNS_ADMIN path
```

`path` は、`tnsnames.ora` ファイルへのパスを示します。このコマンドは使用するシェルによって異なります。

## E.3 Web Cache 構成ファイル

次の OracleAS Web Cache 構成ファイルは、`ORACLE_HOME/webcache` ディレクトリにあります。

- `webcache.xml`
- `internal.xml`
- `internal_admin.xml`

**関連項目：** 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』

## E.4 OracleAS Single Sign-On 構成表

WWSEC\_ENABLER\_CONFIG\_INFO\$ 表は、Single Sign-On の有効なスタックの構成表です。通常この表の変更は、Portal 依存性設定ツールを実行することで、または拡張構成の場合は OracleAS Portal Configuration Assistant (OPCA) を実行することで、処理されます。この項では、SSO 構成表の詳細を説明します。変更は直接行わず、そのかわりに、付録 A 「Portal 依存性設定ファイルの使用」で説明した Portal 依存性設定ツール (ptlconfig) または付録 B 「OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用」で説明した OracleAS Portal Configuration Assistant を使用して行います。

OracleAS Single Sign-On に関連付けられている各パートナー・アプリケーションには、構成情報を格納するためにこのような表があります。このような表は OracleAS Portal のスキーマのみでなく OracleAS Single Sign-On のスキーマにもあります。OracleAS Single Sign-On アプリケーションもパートナー・アプリケーションの 1 つであるためです。この表で、このパートナー・アプリケーションが構成されている OracleAS Single Sign-On のログイン URL を定義します。

作成した構成に応じてどのエントリが必要になるかを計画する上で役立つように、有効な構成表での LSNR\_TOKEN の使用方法を理解しておくことが重要です。

この表には、複数のエントリを入力できます。アプリケーションのサーバーがアドレス指定される各方法に対してエントリを 1 つ指定します。この仕組みを理解するには、認証順序を再確認する必要があります。認証処理は、次の 4 つのフローに大きく分けられます。

- 要求された URL に最初の要求を送ります。
- 認証のため、OracleAS Single Sign-On にリダイレクトします。
- OracleAS Portal の成功 URL (wwsec\_app\_priv.process\_signon) にリダイレクトします。
- 要求された URL に戻ります。

OracleAS Single Sign-On (SSO) のパートナーの有効な API では、WWSEC\_ENABLER\_CONFIG\_INFO\$ 表を読み取って構成情報を入手します。同様に、OracleAS Single Sign-On では、OracleAS Single Sign-On のプライベート API で WWSO\_PAPP\_CONFIGURATION\_INFO\$ 表を読み取ります。後者の表には、各パートナー・アプリケーションにリダイレクトされる URL が指定されています。

各パートナー・アプリケーションの成功 URL は、OracleAS Single Sign-On のパートナー・アプリケーション構成表に格納されるため、パートナー・アプリケーションのホスト名を複数サポートするには、OracleAS Single Sign-On で各ホスト名に専用のパートナー・アプリケーション・エントリを作成する必要があります。各エントリにはパートナー・アプリケーションと同じホスト名を持つ成功 URL を指定できるため、セッション Cookie の適用範囲を正しく設定できます。さらに、Cookie が適用されるドメインには、サーバー名 (ServerName) やポートも含まれるため、server.domain.com:80 と server.domain.com:8080 は別々の Cookie ドメインとみなされます。

有効な構成表の各エント리는、パートナー・アプリケーションによって使用されたホスト名とポートに基づいて選択されます。

たとえば、`http://www.xyz.com`と`http://www.abc.com`から OracleAS Portal にアクセスできるようにするとします。この場合は、2つのパートナー・アプリケーションを OracleAS Single Sign-On に登録しておく必要があります。一方を `www.xyz.com` ホスト用に、もう一方を `www.abc.com` ホスト用に定義します。それぞれのパートナー・アプリケーションで適切な成功 URL を指定します。

- `http://www.xyz.com/pls/portal/portal.wwsec_app_priv.process_signon` (`www.xyz.com` パートナ・アプリケーション用)
- `http://www.abc.com/pls/portal/portal.wwsec_app_priv.process_signon` (`www.abc.com` パートナ・アプリケーション用)

OracleAS Single Sign-On で指定されたこれらのパートナー・アプリケーションの各エント리는、個別のサイト ID、トークンおよび暗号鍵があります。OracleAS Portal の有効な構成表には、パートナー・アプリケーションごとに行が1つ用意されています。たとえば、次のようになっています。

LSNR_TOKEN	SITE_ID	LS_LOGIN_URL...
<code>www.xyz.com</code>	1321	<code>https://www.login.com/pls/...</code>
<code>www.abc.com</code>	1322	<code>https://www.login.com/pls/...</code>

**関連項目：**『Oracle Application Server Single Sign-On Application 開発者ガイド』

## E.5 OracleAS Single Sign-On のパートナー・アプリケーション表

OracleAS Single Sign-On 側にある構成表は、パートナー・アプリケーション表 `WSSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO$` です。この表の管理は通常、OracleAS Single Sign-On アプリケーションのユーザー・インタフェース（パートナー・アプリケーションの追加または編集用）を使用して行います。

単一データベース・インスタンスでの最初のインストールの場合は、`-mode MIDTIER -type SSO` または `-type OHS` を指定して `OPCA` を実行すると、OracleAS Single Sign-On のパートナー構成表と OracleAS Portal の有効な構成表の両方が生成されます。



## E.6 ローカルの HOSTS ファイル

ネットワーク・ホストにある HOSTS ファイルでは、IP 名と IP アドレスとのマッピングを定義します。通常、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) が IP 名と IP アドレスのマッピングを行います。第 4 章「基本的な構成および管理の実行」に説明されている一部の構成では、内部のネットワーク内に定義されていないドメイン名を使用して、内部のネットワークでホストをアドレス指定することが必要な場合もあります。このような場合は、サーバーの HOSTS ファイルを使用して必要な名前解決を行うことができます。

## E.7 Oracle Enterprise Manager 10g の使用

OracleAS Portal を管理するために Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用することができます。Application Server Control コンソールは、このガイドで説明する管理タスクの一部を実行するための Web ベース・ツールです。Oracle Enterprise Manager の使用方法の詳細は、第 7 章「OracleAS Portal の監視と管理」を参照してください。

**関連項目：**『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』



---

---

# JavaServer Pages と OracleAS Portal との統合

OracleAS Portal には、様々な種類の Web ページを作成する機能があります。この機能を JavaServer Pages (JSP) で補足することができます。

この付録では、承認された JSP にのみアクセスを許可し、JSP によるポートレット・コンテンツへの認可されていないアクセスを防ぐことにより、OracleAS Portal を保護する方法を説明します。また、ログインが必要な保護された外部 JSP にアクセスできるようにするために必要な手順も説明します。

この付録の内容：

- [JavaServer Pages 構成ファイルの使用](#)
- [外部通信のための JAZN ファイルの設定](#)

## F.1 JavaServer Pages 構成ファイルの使用

ほとんどすべての JSP は、タグ・ライブラリを使用して OracleAS Portal のポータルレット・コンテンツを要求できるので、承認された JSP のみがアクセス可能であることが保証されるような安全な方法が必要です。これは、次の 2 つのメカニズムで制御できます。

- JSP 内の <portal:usePortal> タグ
- 外部 JSP 構成ファイル

構成ファイルによって、OracleAS Portal インスタンスとインスタンス内のページ・グループが識別され、外部 JSP のそれらへアクセスが許可されます。

構成ファイル固有のコーディング要件については、[F.1.1 項「JavaServer Pages 構成ファイルの内容」](#)で説明しています。

完成した構成ファイルは、OracleAS Portal に識別される必要があります。この手順は、[F.1.3 項「JavaServer Pages 構成ファイルの場所」](#)で説明しています。

この項の内容：

- [JavaServer Pages 構成ファイルの内容](#)
- [JavaServer Pages 構成ファイルの例](#)
- [JavaServer Pages 構成ファイルの場所](#)
- [外部 JavaServer Pages のログイン](#)

### F.1.1 JavaServer Pages 構成ファイルの内容

必要なタグは次のとおりです。

- <jps>
- <portal>
- <database>
- <url>
- <cookie>
- <pageGroups>
- <pageGroup>

### F.1.1.1 <jps> タグ

<jps> タグは、外部 JSP がアクセスできる OracleAS Portal インスタンスのリストを提供するためのコンテナ・タグです。

#### 開始タグ

```
<jps version="1.0">
```

現行の OracleAS Portal リリース用にバージョン番号を 1.0 に設定する必要があります。

#### 終了タグ

```
</jps>
```

### F.1.1.2 <portal> タグ

<portal> タグで、個々の OracleAS Portal インスタンスを記述します。

#### 開始タグ

```
<portal name="MyPortal" default="true">
```

#### 終了タグ

```
</portal>
```

表 F-1 <portal> タグの属性

属性	値
name	OracleAS Portal インスタンスに付ける記述名。名前は、構成ファイル内で一意である必要があります。
default	usePortal タグで Portal 名を指定しない場合に、この Portal がデフォルトのインスタンスかどうかを示す true または false のフラグ。値を指定しない場合は、false に設定されます。

デフォルトの Portal は、構成ファイルごとに 1 つのみです。

### F.1.1.3 <database> タグ

<database> タグで、指定された OracleAS Portal インスタンスについてのデータベース接続情報を提供します。たとえば、次のようになります。

```
<database data-source="jdbc/MyPortal"/>
```

data-source 属性値はデータ・ソースの名前であり、`J2EE_HOME/config` ディレクトリ内の `data-sources.xml` ファイルに指定されている必要があります。

次に、data-source 定義の例を示します。

```
<data-source
  class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
  name="MyPortal"
  location="jdbc/MyPortal"
  xa-location="jdbc/xa/MyPortal"
  ejb-location="jdbc/MyPortal"
  connection-driver="oracle.jdbc.driver.OracleDriver"
  username="portal_app"
  password="portal_app"
  url="jdbc:oracle:thin:@xyz.oracle.com:1521:orcl"
  inactivity-timeout="30"
/>
```

username および password 属性は、OracleAS Portal アプリケーション・スキーマのユーザー名とパスワードに設定する必要があります。

### F.1.1.4 <url> タグ

<url> タグで、OracleAS Portal インスタンスへの接続情報を提供します。たとえば、次のようになります。

```
<url protocol="http" host="defg.oracle.com" port="7500" path="/pls/portal"/>
```

表 F-2 <url> タグの属性

属性	値
protocol	OracleAS Portal インスタンスへの接続に使用されるプロトコルの名前。現在、HTTP および HTTPS プロトコルのみがサポートされています。protocol 属性を指定しない場合のデフォルトは http です。
host	OracleAS Portal の中間層のマシン名。
port	ポート番号。port を指定しない場合のデフォルトは 80 です。

表 F-2 &lt;url&gt; タグの属性 (続き)

属性	値
path	今回のリリースでは、path を /pls/<PORTAL-DAD-NAME> に設定する必要があります。

### F.1.1.5 <cookie> タグ

<cookie> タグで、OracleAS Portal の Cookie を記述します。たとえば、次のようになります。

```
<cookie name="portal" maxAge="-1" path="/" domain=".oracle.com"/>
```

表 F-3 &lt;cookie&gt; タグの属性

属性	値
name	Cookie の名前。これは、OracleAS Portal インスタンスの Cookie 名と同じにする必要があります。name は、cookie タグにとって必須の属性です。
maxAge	Cookie の最長保存期間。秒単位で指定します。ブラウザがシャットダウンされるまで Cookie の保存を希望する場合は、-1 を指定します。maxAge は、cookie タグにとって必須の属性です。
path	ブラウザがこの Cookie を返すサーバーのパス。path は、cookie タグにとって必須の属性です。
domain	この属性は、SSO ポートレットの Cookie 構成に変更が行われた場合にのみ指定する必要があります。SSO のドキュメントを参照してください。

### F.1.1.6 <pageGroups> タグ

<pageGroups> タグで、pageGroup タグのコンテナを形成します。このタグには属性がありません。

#### 開始タグ

```
<pageGroups>
```

#### 終了タグ

```
</pageGroups>
```

### F.1.1.7 <pageGroup> タグ

<pageGroup> タグで、それぞれのページ・グループのプロパティを記述します。たとえば、次のようになります。

```
<pageGroup name="JPSSDemo" key="welcome" default="true"/>
```

表 F-4 <pageGroup> タグの属性

属性	値
name	ページ・グループ名。この名前は、ページ・グループが OracleAS Portal 内で作成されたときに付けられた名前にする必要があります。
key	ページ・グループのキー。この値は、OracleAS Portal 内でページ・グループに割り当てられたアクセス・キーの値と一致している必要があります。(ここで識別されるページ・グループは、JSP アクセスに対応できる必要があります。)
default	このページ・グループがこの OracleAS Portal インスタンス内のデフォルトのページ・グループかどうかを示すフラグ。true または false に設定されます。ページ・グループ名が指定されていない場合、デフォルトのページ・グループは、usePortal タグ内で使用されたものになります。この pageGroup タグの default 属性に値が指定されない場合は、false に設定されます。

デフォルトのページ・グループは、Portal インスタンスごとに 1 つのみです。



## F.1.2 JavaServer Pages 構成ファイルの例

次に、JSP 構成ファイルの例を示します。

### 例 F-1 JavaServer Pages 構成ファイルの例

```
<jps version="1.0">
  <portal name="MyPortal" default="true">
    <database data-source="jdbc/MyPortal"/>
    <url host="xyz.oracle.com" port="7500" path="/pls/portal"/>
    <cookie name="portal" maxAge="-1" path="/" />
    <pageGroups>
      <pageGroup name="JPSDemo" key="welcome" default="true"/>
      <pageGroup name="JPSDemo2" key="welcome" default="false"/>
    </pageGroups>
  </portal>
  <portal name="AnotherPortal">
    <database data-source="jdbc/AnotherPortal"/>
    <url protocol="http" host="abc.oracle.com" port="8888"
      path="/pls/portal90"/>
    <cookie name="portal90" maxAge="-1" path="/" />
    <pageGroups>
      <pageGroup name="JPSDemo" key="welcome"/>
      <pageGroup name="JPSDemo1" key="welcome1"/>
      <pageGroup name="JPSDemo2" key="welcome2"/>
      <pageGroup name="JPSDemo3" key="welcome3"/>
      <pageGroup name="JPSDemo4" key="welcome4"/>
    </pageGroups>
  </portal>
</jps>
```

### F.1.3 JavaServer Pages 構成ファイルの場所

デフォルトの構成ファイルの名前は `wwjps.xml` であり、ファイルのデフォルトの場所は次のとおりです。

```
J2EE_HOME/applications/portal/portal/WEB-INF
```

ただし、使用する構成ファイルは他の任意の名前にすることも可能であり、ファイル・システム内の任意の場所に配置することができます。

`J2EE_HOME/applications/portal/portal/WEB-INF` ディレクトリにある `web.xml` ファイル内のコンテキスト・パラメータを使用して、構成ファイルの場所を指定します。

`web.xml` ファイル内のコンテキスト・パラメータは、次のとおりです。

```
<context-param>
  <param-name>oracle.webdb.service.ConfigLoader</param-name>
  <param-value>/WEB-INF/wwjps.xml</param-value>
  <description>This parameter specifies the location of the JPS
    configuration file</description>
</context-param>
```

### F.1.4 外部 JavaServer Pages のログイン

外部 JSP は、そのログイン要件によって次のように分類されます。

- ログインが不要な、または OracleAS Portal のログイン・リンクを通じてユーザーがログインするパブリック JSP
- ログインが必要な保護された JSP

保護された外部 JSP には追加の設定要件があります。そのような要件については、次の項で説明します。

## F.2 外部通信のための JAZN ファイルの設定

次の手順は、保護された外部 JSP に対してのみ必要です。つまり、ログインが必要な外部 JSP に対する手順です。

外部 JSP 内で Portal へのログインが必要な場合は、次のタグ構文を使用する必要があります。

```
<portal:usePortal id="AnyPortal" pagegroup="AnyPageGroup" login="true" />
```

この JSP を実行すると、まだログインしていない場合は、OracleAS Single Sign-On Server へリダイレクトされます。これを正常に機能させるために、次の項を参照してください。

- [mod\\_osso の設定](#) (まだ設定されていない場合)
- [JAZN の LDAP による設定](#)

### F.2.1 mod\_osso の設定

デフォルトでは、使用中の Oracle HTTP Server は、OracleAS Single Sign-On Server に登録されています。変更されて再登録が必要な場合にのみ、次の手順を実行します。

#### F.2.1.1 OracleAS Single Sign-On Server への Oracle HTTP Server の登録

使用する Oracle HTTP Server を、パートナ・アプリケーションとして OracleAS Single Sign-On Server に登録する必要があります。次の手順を実行してください。

1. たとえば次のようにして、OracleAS Single Sign-On Server のホーム・ページに移動してログインします。

```
http://abc.company.com:3000/pls/portal_sso/
```

2. 「SSO Server 管理」 > 「パートナ・アプリケーションの管理」 > 「パートナ・アプリケーションの追加」 へと進みます。
3. プロンプトに対して次のデータを入力します。
  - 名前: Oracle HTTP Server (任意の名前)
  - ホーム URL: `http://abc.company.com:3000/`
  - 成功 URL: `http://abc.company.com:3000/osso_login_success`
  - ログアウト URL: `http://abc.company.com:3000/osso_logout_success`
4. 「適用」をクリックします。表示されているレコードの値を記録しておきます。これらの値は、次の手順で必要になります。

### F.2.1.2 ディレクトリ・ファイルの作成

例 F-2 に基づいて、ファイル (portal.clr など) を作成します。この例のファイルの値を前の手順 (アプリケーションを登録したとき) での値に置き換えます。

#### 例 F-2 ディレクトリ・ファイルの例

```
sso_server_version=v1.2
cipher_key=95CFC0004E594CB3
site_id=1325
site_token=NCZ4UZMV1325
login_url=http://abc.company.com:3000/pls/portal_sso/portal_sso.wvssso_admin.ls_login
logout_url=http://abc.company.com:3000/pls/portal_sso/portal_sso.wvssso_admin.ls_logout
cancel_url=http://abc.company.com:3000/pls/portal_sso/
```

ファイルに必要な変更を行った後に、次のディレクトリにファイルを配置します。

```
<Oracle HTTPHome>/Oracle HTTP/Oracle HTTP/conf/osso/
```

### F.2.1.3 Oracle HTTP osso.conf の実行

<Oracle HTTPHome>/Oracle HTTP/Oracle HTTP/conf/osso/ に移動して、次のように実行します。

```
<Oracle HTTPHome>/Oracle HTTP/Oracle HTTP/bin/apobfuscate portal.clr osso.conf
```

### F.2.1.4 httpd.conf ファイルからのコメントの削除

httpd.conf ファイル内で次の行がコメントでないことを確認します。

```
include "<Oracle HTTPHome>/Oracle HTTP/Oracle HTTP/conf/mod_osso.conf"
```

**関連項目：**『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』

### F.2.1.5 Oracle HTTP Server の再起動

前述の手順を完了した後に、Oracle HTTP Server を再起動します。

## F.2.2 JAZN の LDAP による設定

JAZN とは、Java Authentication および Authorization Service (JAAS) プロバイダの内部名です。JAAS は、アプリケーションがユーザーのアクセス制御を認証および適用できるようにする Java パッケージです。OracleAS Portal 内での JAZN の使用は、外部 JSP の認証に制限されています。

JAZN が LDAP と連携していることを確認します。(JAZN に提供されるデモを使用することができます。)

次の追加手順を実行します。

- `J2EE_HOME/application-deployments/portal/orion-application.xml` に移動し、次の行を追加します。

```
<jazn provider="LDAP" location="ldap://<OIDHOST>:389" default-realm="oracle">  
<jazn-web-app auth-method="SSO" />  
</jazn>
```

ポート番号 389 は、LDAP サーバーのデフォルトのポートです。ただし、他のどのようなポートでも割り当てることができます。<host> および <port> の情報を入手するためには、Oracle Internet Directory 管理者に連絡してください。

**関連項目：** 詳細は、次を参照してください。

- [F.2 項「外部通信のための JAZN ファイルの設定」](#)
- 『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』



---

## wwv\_context API の使用

wwv\_context パッケージには、OracleAS Portal で使用する Oracle Text 索引を作成および管理するプロシージャが含まれています。この付録では、このパッケージの内容について次の項で説明します。

- [プロシージャ](#)
- [定数](#)
- [例外](#)

---

**注意：** Oracle Text 索引について、および OracleAS Portal での使用方法については、[第 8 章「OracleAS Portal の検索機能の構成」](#)を参照してください。

---

## G.1 プロシージャ

wwv\_context パッケージには、次のプロシージャが含まれています。

[add\\_attribute\\_section](#)  
[create\\_index](#)  
[create\\_missing\\_indexes](#)  
[create\\_prefs](#)  
[createindex](#)  
[drop\\_all\\_indexes](#)  
[drop\\_index](#)  
[drop\\_invalid\\_indexes](#)  
[drop\\_prefs](#)  
[dropindex](#)  
[optimize](#)  
[sync](#)  
[touch\\_index\(p\\_indexes wwsbr\\_array\)](#)  
[touch\\_index](#)

### G.1.1 add\_attribute\_section

```

procedure add_attribute_section(
    p_attributeid      in number,
    p_attributesiteid in number
)

```

アイテムおよびページ索引で使用されるセクション・グループに、新しいセクションを追加します。このセクション・グループは1つの属性と対応します。これによって、索引のメタデータのみが変更され、索引データそのものは変更されません。新しいセクションは検索できますが、索引そのものは変更されません。

索引は、存在する場合のみ変更されます。つまり索引が存在しない場合は、このプロシージャでは何も処理しません。

#### パラメータ

p\_attributeId: 追加する属性セクションの ID

p\_attributeSiteId: 追加する属性セクションのサイト ID



## G.1.2 create\_index

```
procedure create_index(  
    p_index in varchar2  
)
```

特定の Oracle Text 索引を作成します。詳細は、[8.3.3 項「Oracle Text 索引」](#)を参照してください。

このプロシージャは、トラブルシューティングの目的でのみ使用します。正常な場合には、[create\\_missing\\_indexes](#) を使用して、不足しているすべての索引を作成するか、または [createindex](#) を使用して無効な索引を削除し、プリファレンスおよび不足している索引を再作成します。

このプロシージャでは、次の [定数](#)のいずれかを使用して索引を指定します。

- ページ索引 : `wwv_context.PAGE_TEXT_INDEX`
- ドキュメント索引 : `wwv_context.DOC_TEXT_INDEX`
- パースペクティブ索引 : `wwv_context.PERSPECTIVE_TEXT_INDEX`
- アイテム索引 : `wwv_context.ITEM_TEXT_INDEX`
- カテゴリ索引 : `wwv_context.CATEGORY_TEXT_INDEX`
- URL コンテンツ索引 : `wwv_context.URL_TEXT_INDEX`

### パラメータ

`p_index`: 作成する索引（前述の定数のいずれか）の名前。

### 例外

`INVALID_INDEX`: 索引の名前が認識されませんでした。

### G.1.3 create\_missing\_indexes

```
procedure create_missing_indexes (
    p_indexes out wwsbr_array
)
```

不足している Oracle Text 索引をすべて作成します。ビュー `ctx_user_indexes` に基づいて存在している索引は、存在しているとみなされます。

このプロシージャは、既存の索引が有効かどうかは調べません。有効でない部分がある索引を削除するには、プロシージャ [drop\\_invalid\\_indexes](#) を使用します。

このプロシージャは、空の索引を作成します。索引に値を移入するには、最初に対象の索引について索引の再作成が必要であることをマークし、その後に索引と同期化する必要があります。これを行うには、プロシージャ [touch\\_index\(p\\_indexes wwsbr\\_array\)](#) を使用します。

Oracle Text のプリファレンスはすでに存在しているため、このプロシージャでは作成しません。プリファレンスがない場合に作成するには、プロシージャ [create\\_prefs](#) を使用します。

#### パラメータ

`p_indexes`: 作成した索引のリストが含まれている配列を返します。

### G.1.4 create\_prefs

```
procedure create_prefs
```

Oracle Text 索引を作成するときに使用する、Oracle Text のプリファレンス（データストアやフィルタのプリファレンスなど）を作成します。詳細は、[8.3.3.2 項「Oracle Text 索引の設定」](#)を参照してください。

このプロシージャは、レクサー・プリファレンスは作成しません。レクサー・プリファレンスを作成するには、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリに格納されている `sbriamt1x.sql` スクリプトを使用します。詳細は、[8.3.3.5 項「多言語機能（マルチレクサー）」](#)を参照してください。

## G.1.5 createindex

```
procedure createindex(  
    p_language in varchar2 default wwmls_api.nls_default_language,  
    p_message out varchar2  
)
```

OracleAS Portal で使用する Oracle Text 索引を作成します。詳細は、[8.3.3 項「Oracle Text 索引」](#)を参照してください。

この高水準プロシージャは、次のタスクを実行します。

- 既存のプリファレンス・オブジェクトをすべて削除する。
- 無効な索引をすべて削除する。
- Oracle Text のプリファレンスを再作成する。
- 不足している索引を作成する（最初は空）。
- 新しい索引の場合は、索引付けが可能なすべての OracleAS Portal コンテンツに、索引の再作成が必要であることをマークする。
- 索引を同期化する（最初に値を移入し、次に索引を最適化する）。

このプロシージャは、論理的には次のものと同じように機能します。

```
wwv_context.drop_prefs;  
wwv_context.drop_invalid_indexes;  
wwv_context.create_prefs;  
wwv_context.create_missing_indexes(l_indexes);  
wwv_context.touch_index(l_indexes);  
wwv_context.sync;  
wwv_context.optimize;
```

## G.1.6 drop\_all\_indexes

```
procedure drop_all_indexes
```

OracleAS Portal で使用する Oracle Text 索引をすべて削除します。

このプロシージャは、Oracle Text のプリファレンスは削除しません。これを削除するには、プロシージャ [drop\\_prefs](#) を使用します。

## G.1.7 drop\_index

```
procedure drop_index(  
    p_index in varchar2  
)
```

特定の Oracle Text 索引を削除します。このプロシージャでは、索引が存在するかどうかは検証しません。

次の [定数](#)のいずれかを使用して、索引を指定します。

- ページ索引 : `wwv_context.PAGE_TEXT_INDEX`
- ドキュメント索引 : `wwv_context.DOC_TEXT_INDEX`
- パースペクティブ索引 : `wwv_context.PERSPECTIVE_TEXT_INDEX`
- アイテム索引 : `wwv_context.ITEM_TEXT_INDEX`
- カテゴリ索引 : `wwv_context.CATEGORY_TEXT_INDEX`
- URL コンテンツ索引 : `wwv_context.URL_TEXT_INDEX`

### パラメータ

`p_index`: 削除する索引（前述の定数のいずれか）の名前。

### 例外

`INVALID_INDEX`: 索引の名前が認識されませんでした。

## G.1.8 drop\_invalid\_indexes

```
procedure drop_invalid_indexes
```

無効な Oracle Text 索引のみを削除します。有効な Oracle Text 索引は削除されません。

次のビューで次の status 列がすべて VALID に設定されている場合は、索引が有効であるとみなされます。

- user\_indexes.status
- user\_indexes.domidx\_status
- user\_indexes.domidx\_optstatus
- ctx\_user\_indexes.idx\_status

いずれかの status 列が有効でない場合、または索引が両方のビューのエントリを持っていない場合は、その索引は無効とみなされて削除されます。詳細は、[8.3.7 項「Oracle Text 索引の状態の表示」](#)を参照してください。

## G.1.9 drop\_prefs

```
procedure drop_prefs
```

Oracle Text のデータストアおよびフィルタのプリファレンスを削除します。詳細は、[8.3.3.2 項「Oracle Text 索引の設定」](#)を参照してください。

データストアおよびフィルタのプリファレンスは、Oracle Text 索引を作成するときに使用します。このプロシージャは、スクリプト `sbriamt1x.sql` を使用して作成されたレクサー・プリファレンスは削除しません。スクリプトは、`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws` ディレクトリにあります。

## G.1.10 dropindex

```
procedure dropindex(
    p_language in varchar2 default wwnls_api.nls_default_language,
    p_message out varchar2
)
;
```

OracleAS Portal で使用される既存の Oracle Text 索引をすべて削除します。詳細は、[8.3.3 項「Oracle Text 索引」](#)を参照してください。

このプロシージャは、次のものと同じように機能します。

```
wwv_context.drop_prefs;
wwv_context.drop_all_indexes;
```

## G.1.11 optimize

```
procedure optimize(
    p_optlevel in varchar2 default ctx_ddl.optlevel_full,
    p_maxtime in number default null,
    p_token in varchar2 default null
)
;
```

OracleAS Portal で使用する既存の Oracle Text 索引をすべて最適化します。それぞれの索引は、Oracle Text プロシージャ `ctx_ddl.optimize_index()` をコールすることによって最適化されます。

索引は、最適化が必要な程度に断片化されている場合にのみ、最適化されます。これは、トークンが 2 回以上発生した場合の平均回数によって判断されます。この値が 11 以上の場合は、索引が最適化されます。詳細は、[8.3.5.5 項「Oracle Text 索引の最適化」](#)を参照してください。

このプロシージャのパラメータは、Oracle Text プロシージャ `ctx_ddl.optimize_index` で必要なパラメータと同じです。

### パラメータ

`p_optlevel`: 最適化のレベル。'FULL'、'FAST' または 'TOKEN' のいずれか。

`p_maxtime`: 完全な最適化を行うための最大時間 (分)。

`p_token`: 最適化するトークン (レベル TOKEN で最適化を実行する場合)。

### Oracle Technology Network

(<http://otn.oracle.com/products/text/content.html>) で、Oracle Text の参照ドキュメントも参照してください。



## G.1.12 sync

```
procedure sync
```

OracleAS Portal で使用する Oracle Text 索引をすべて同期化します。それぞれの索引は、Oracle Text プロシージャ `ctx_ddl.sync_index()` をコールすることによって同期化されます。このプロシージャは、最後に同期化された後に更新された行の索引をすべて再作成します。同期化が終了すると、新しく追加または更新されたコンテンツを検索することができます。詳細は、8.3.5.1 項「Oracle Text 索引の同期化」を参照してください。

同期化する前に、保留状態のキューが、表 `wwsbr_url$` の内容で更新されます。この表には、OracleAS Portal に格納されている URL 属性の値がすべて含まれています。URL の値が定数 `wwv_context_util.g_noindex` の値と同じ場合は、このキューの行が削除されます。これらの行は、元の URL が Oracle Text によって索引付けされていなかったことを示すために、この値が設定されます。たとえば、`https://` または `javascript:` で始まる URL などが、これに該当します。



`ctx_ddl.sync_index` の詳細は、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/products/text/content.html>) の Oracle Text の参照ドキュメントを参照してください。

## G.1.13 touch\_index(p\_indexes wwsbr\_array)

```
procedure touch_index(  
    p_indexes in wwsbr_array  
)
```

1 つ以上の索引のコンテンツにアクセスします。つまり、表内のすべての行において索引が作成される列を更新することにより、すべての索引のコンテンツ（または索引）に同期化が必要であることをマークします。詳細は、8.3.5.4 項「すべての索引のコンテンツの同期化」を参照してください。

索引のコンテンツがこの方法でマークされると、プロシージャ `sync` を使用して、マークされたコンテンツの索引を再作成します。

このプロシージャは、現行のサブスクライバのみでなく、複数の仮想プライベート Portal のサブスクライバ間で動作します。このプロシージャは、それぞれのサブスクライバに順に切り替えて、終了すると元のサブスクライバに戻ります。

### パラメータ

`p_indexes`: アクセスする索引名が含まれている配列。

## G.1.14 touch\_index

```
procedure touch_index(  
    p_index in varchar2 default null  
)
```

1つの索引またはすべての索引のコンテンツにアクセスします。このプロシージャは、指定された1つの索引にアクセスするのに便利です。また、このプロシージャは、NULL値を渡すことによってすべての索引にアクセスすることができます。

このプロシージャは、前述の `touch_index(p_indexes wwsbr_array)` をコールします。

詳細は、[8.3.5.4 項「すべての索引のコンテンツの同期化」](#)を参照してください。

### パラメータ

`p_index`: アクセスする索引の名前。すべての索引にアクセスする場合は NULL。

詳細は、[G.1.13 項](#)で説明している `touch_index(p_indexes wwsbr_array)` を参照してください。

## G.2 定数

次の項では、定数について説明します。

### G.2.1 索引名の定数

次の定数を使用して、OracleAS Portal で使用される Oracle Text の6つの索引を指定することができます。

- ページ索引 : `wwv_context.PAGE_TEXT_INDEX`
- ドキュメント索引 : `wwv_context.DOC_TEXT_INDEX`
- パースペクティブ索引 : `wwv_context.PERSPECTIVE_TEXT_INDEX`
- アイテム索引 : `wwv_context.ITEM_TEXT_INDEX`
- カテゴリ索引 : `wwv_context.CATEGORY_TEXT_INDEX`
- URL コンテンツ索引 : `wwv_context.URL_TEXT_INDEX`

#### PAGE\_TEXT\_INDEX

```
PAGE_TEXT_INDEX constant varchar2(30) := 'WWSBR_CORNER_CTX_INDX'
```

#### DOC\_TEXT\_INDEX

```
DOC_TEXT_INDEX constant varchar2(30) := 'WWSBR_DOC_CTX_INDX'
```



### PERSPECTIVE\_TEXT\_INDEX

```
PERSPECTIVE_TEXT_INDEX constant varchar2(30) := 'WWSBR_PERSP_CTX_INDX'
```

### ITEM\_TEXT\_INDEX

```
ITEM_TEXT_INDEX constant varchar2(30) := 'WWSBR_THING_CTX_INDX'
```

### CATEGORY\_TEXT\_INDEX

```
CATEGORY_TEXT_INDEX constant varchar2(30) := 'WWSBR_TOPIC_CTX_INDX'
```

### URL\_TEXT\_INDEX

```
URL_TEXT_INDEX constant varchar2(30) := 'WWSBR_URL_CTX_INDX'
```

## G.2.2 索引作成に適さない URL の定数

行に索引を作成できないことを表すための絶対 URL。URL の索引は、`wwsbr_url.absolute_url` の列に作成されます。この列は、トリガーによって値が移入されます。

`javascript:` で始まる URL など、索引作成には不適切な URL の場合には、この定数値が使用されます。詳細は、[8.3.6.2 項「サポートされていない URL」](#)を参照してください。

### G\_NOINDEX

```
G_NOINDEX constant varchar2(15) := 'wwsbr_noindex'
```

## G.3 例外

### **INVALID\_INDEX**

索引の名前が認識されませんでした。

`INVALID_INDEX exception`

---

---

# TEXTTEST を使用した Oracle Text インストールの確認

OracleAS Portal は、Oracle Text の機能を使用して検索機能を拡張しています。Oracle Text の機能が正常に動作していることを確認する場合は、ユーティリティ TEXTTEST を使用することができます。このユーティリティは、`MID_TIER_ORACLE_HOME/portal/admin/texttest/texttest` にあります。

この付録の内容：

- [TEXTTEST を使用するケース](#)
- [TEXTTEST の実行準備](#)
- [TEXTTEST の実行](#)
- [TEXTTEST 結果の詳細](#)
- [TEXTTEST の構成](#)
- [TEXTTEST テストの説明](#)

---

---

**注意：** このユーティリティは、OracleAS Portal によって明確に必要なとされる Oracle Text の機能のみを確認します。

---

---

## H.1 TEXTTEST を使用するケース

現在、Oracle Text の機能は、OracleAS Portal ではデフォルトで有効になります。このため、新しい OracleAS Portal のすべてのインストールにおいて、Oracle Text が存在し、正常に機能するものとみなされます。TEXTTEST ユーティリティは、次の場合に有効です。

- Oracle Text が有効化された Portal をインストールする前に、Oracle Text の機能が正しく動作しているかどうか確認する場合
- OracleAS Portal における Oracle Text の検索機能の問題の原因が、Oracle Text のインストールの問題であるかどうかを判断する場合

OracleAS Portal において、Oracle Text の検索機能を無効にするよう選択した場合は、このユーティリティを実行する必要はありません。

## H.2 TEXTTEST の実行準備

1. TEXTTEST ユーティリティは、Oracle Application Server の Oracle ホームから実行する必要があります。ここで、次の場所にアクセスする必要があります。

- 正常に動作している Perl インストール(TEXTTEST は Perl 5.6.1 でテストされています)。
- Perl DBI および DBD::Oracle モジュール。DBD::Oracle モジュール自身は、Oracle データベースのクライアント・ライブラリが必要です。

アクセスを保証するには、パス `PATH $ORACLE_HOME/perl/bin:$PATH` を設定し、Perl ライブラリ・パス `setenv PATH $ORACLE_HOME/perl/lib/5.6.1:$PATH` を設定します。

これらは、すべて Oracle Application Server の Oracle ホームに格納されています。

2. 正しい Oracle ホームが選択されていることを確認します。

- UNIX プラットフォームの場合は、環境変数 `ORACLE_HOME` が設定されており、`ld` で使用するライブラリ・パスに `ORACLE_HOME/ctx/lib` が含まれるようにします。様々な UNIX プラットフォームに対するライブラリ・パスの環境変数は、次のとおりです。

Solaris、Tru64 UNIX、Linux: `$LD_LIBRARY_PATH`

HP/UX: `$SHLIB_PATH` および `$LD_LIBRARY_PATH`

IBM AIX: `$LIBPATH`

詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「Inso フィルタ処理テクノロジーについて」を参照してください。

- Windows の場合は、Oracle Home Selector を使用して正しい Oracle ホームを選択します。

これは、Perl DBD::Oracle モジュールが正しい Oracle クライアント・ライブラリを検索できるようにするために必要です。TEXTTEST は、Oracle ホームの環境変数も参照します。選択された Oracle ホームは、Oracle Application Server の Oracle ホームで、この Oracle ホームから TEXTTEST ユーティリティを実行するものとします。

3. Perl で、Perl モジュール Portal::Text::Test を解決できることを確認します。

このモジュールは、次の場所にあります。

```
ORACLE_HOME/perl/lib/site_perl/5.6.1/Portal/Text/Test.pm
```

Oracle Application Server の Oracle ホームから Perl インストールを使用している場合は、これが @INC パスに自動的に含まれるため、特別な処理は必要ありません。ただし、ユーティリティを実行するために他の Perl インストールを使用している場合は、TEXTTEST を実行する前にこの手順を実行して、この場所が必ず @INC パスに含まれるようにします。これを行う 1 つの方法は、環境変数 PERL5LIB に次の内容が含まれるようにすることです。

```
ORACLE_HOME/perl/lib/site_perl/5.6.1  
ORACLE_HOME/perl/lib/5.6.1:$PERL5LIB
```

4. 必要に応じて、いくつかのテストを行って、TEXTTEST が機能することを確認します。

たとえば、Oracle Application Server のインストールがファイアウォールの内側にある場合は、インターネットのコンテンツにアクセスする URL テストを実行します。[H.5 項「TEXTTEST の構成」](#)を参照してください。

## H.3 TEXTTEST の実行

TEXTTEST ユーティリティは

MID\_TIER\_ORACLE\_HOME/portal/admin/textttest/texttest にあります。デフォルトのドキュメント・ディレクトリは、ORACLE\_HOME/Portal/admin/textttest/doc にあります。

TEXTTEST ユーティリティは、コマンドラインまたは DOS プロンプトから実行できます。引数を指定せずにユーティリティを実行すると、使用情報が表示されます。次に、コマンドラインの引数について詳しく説明します。

```
ORACLE_HOME/perl/bin/perl textttest -c sys_connect_string [-v] [-k]
[-d document_directory] [-t textcase_schema] [-p proxy] [-n noproxy]
```

**表 H-1 TEXTTEST のパラメータ**

パラメータ	説明
-c	DBA 権限で接続してテスト・スキーマを作成するための、スキーマに対する接続文字列。たとえば、「sys/change_on_install@orcl as sysdba」のように指定します。
-v	冗長出力を表示します。
-k	テスト後にテスト・スキーマを保持します。
-d	アップロードするドキュメントが含まれているドキュメント・ディレクトリ。ドキュメントの索引作成テストでは、これらのアップロードされたドキュメントを使用します。このパラメータを指定しないと、TEXTTEST は、このスクリプトと同じ場所で、「doc」という名前のディレクトリを検索します。
-t	テスト・スキーマの名前。これは作成されるスキーマで、ここでテストが実行されます。デフォルトは TEXTCASE です。パスワードは、スキーマ名と同じです。スキーマがすでに存在する場合は、既存のスキーマが使用されます。ただし、-k オプションを指定しない場合は、テストの後にスキーマが削除されるため、注意が必要です。
-p	URL の索引作成テストで使用するプロキシ (global.uk.mycompany.com:80 など)。ポートはオプションです。HTTP および FTP の URL で同じプロキシを使用します。
-n	プロキシを使用しないドメイン。カンマ区切りの最大 16 個のドメインのリストであり、このドメインに対してはプロキシは使用されません。たとえば、uk.mycompany.com,us.mycompany.com のように指定します。
-u	URL の索引作成テスト用のデータファイルの場所。

必須の引数は `-c` (データベースの接続情報) のみで、これは SQL\*Plus スタイルの接続文字列である必要があります。指定するスキーマは、データベースへ接続するために使用されるものです。テストの実行時には、別のスキーマが作成されます。

引数 `-c` で指定するスキーマは、テストの実行で使用されるスキーマではありません。このスキーマには、DBA 権限が必要です。SYSDBA など、特別なロールで接続する必要がある場合は、SYS スキーマに接続するときに、通常の SQL\*Plus の書式でこれを指定します。

引数 `-c` に空白が含まれている場合は、引用符で囲む必要があります。たとえば、次のようになります。

```
texttest -c 'sys/change_on_install@orcl as sysdba'
```

引数 `-t` は、テストを実行するスキーマ名を指定します。デフォルトのスキーマ名は TEXTCASE です。このスキーマは、テストの早い段階で作成され、通常はテスト終了時に削除されます。このスキーマが、データベース内にすでに存在していないことを確認する必要があります。テスト・スキーマがすでに存在している場合は、そのスキーマが使用されますが、テスト終了時には削除されます。

## H.4 TEXTTEST 結果の詳細

デフォルトでは、TEXTTEST の出力として、それぞれのテストが成功したか、または失敗したかを表す簡潔な文 (OK または Not OK) が示されます。テストの情報およびテストが失敗した原因の詳細を表示するには、TEXTTEST を冗長モードで実行します (`-v` コマンドライン・フラグを指定します)。冗長モードが有効になっていると、詳細な情報が表示されません。

テストが失敗する原因の詳細は、[H.6 項「TEXTTEST テストの説明」](#)を参照してください。いくつかのテストが失敗した場合には、その後の他のテストも失敗する可能性があります。たとえば、データベースに対する最初の接続が失敗した場合は、その後のすべてのテストも失敗します。したがって、失敗が起こった順にその内容を調査することをお勧めします。

## H.5 TEXTTEST の構成

ファイル `ORACLE_HOME/perl/lib/site_perl/5.6.1/Portal/Text/Config.pm` を使用して、TEXTTEST のデフォルトの動作をカスタマイズします。このファイルには Perl のハッシュ定義が含まれており、その定義には、様々なデフォルト値の定義が含まれています。

ほとんどの場合、これらの値は、[H.3 項「TEXTTEST の実行」](#)に示されているようなコマンドライン引数を指定することによって上書きすることができます。Config.pm に定義されているデフォルト値があり、コマンドラインで値が指定されていない場合は、Config.pm の値が使用されます。

デフォルト値を永続的に変更する場合は、Config.pm を編集します。これは、プロキシの設定を毎回定義する必要があるが、その度にコマンドラインで設定するのは避けたい場合などには便利です。ただし、この構成ファイルを変更しなくても、TEXTTEST を正常に実行できます。

### H.5.1 ドキュメント・テストの構成

OracleAS Portal は、Oracle Text の機能を使用して、Portal にアップロードするドキュメントのコンテンツを検索します。コンテンツがアップロードされると、コンテンツは OracleAS Portal データベース表に格納されます。コンテンツを検索できるようにするには、事前に索引作成を行う必要があります。索引作成のプロセスで、Oracle Text によって、アップロードされたそれぞれのドキュメントが順に処理されます。ドキュメントが、バイナリ形式 (Word や Powerpoint のドキュメントなど) の場合は、索引作成を行う前に絞込みで、プレーン・テキストに変換する必要があります。

この機能をテストするために、TEXTTEST によってドキュメント表を作成し、多数のファイルをアップロードして、それらを絞込みます。アップロードされるファイルは、ドキュメント・ディレクトリから取得されます。デフォルトの場所は、`ORACLE_HOME/Portal/admin/texttest/doc` として Config.pm に構成されています。

Oracle Text では、すべてのドキュメントを絞込みすることはできません。このため、索引作成テストが失敗すると予想されるいくつかのドキュメントをドキュメント・ディレクトリに配置して、特定のエラーが報告されるようにします。このエラーは予想されたものであるため、エラーが発生してもテストは成功となります。

この動作をテストするには、予想される例外のリストを例外ファイルに構成することができます。このファイルには、ファイル名および予想されるエラーを示します。ファイルには、1 行ごとに、1 つのファイル名および予想されるエラーを指定します。ファイル名とエラーの間は 1 つの空白で区切ります。ファイル名に空白が含まれている場合は、エスケープ文字として \ を使用してエスケープします。

エラーは Perl の正規表現として処理されるため、完全なエラー・メッセージが含まれている必要はありません。最も簡潔なレベルでは、エラー文字列の一部を指定して、これで照合させることができます。この方法では、エラー・コードのみを指定することも可能です。もう少し複雑な Perl の正規表現も使用できます。Perl の正規表現の詳細は、[perlre](#) ページにある



perldoc を参照してください。予想されるエラーが単に \* である場合は、あらゆる例外が予想されているため、ドキュメントの索引作成が失敗しても、テストは失敗しません。

たとえば、ファイルに次の 4 行が含まれているとします。

```
searchnotes.zip DRG-11207: user filter command exited with status 1
# The following PDF has security and cannot be filtered
my\ secured\ pdf.pdf DRG-11207
search.jar *
```

最初の行には、エラー全体が含まれています。2 行目はコメントで、無視されます。3 行目は、DRG-11207 エラーを、予想されたエラーとみなしています。4 行目は、なんらかのエラーで失敗する可能性があります。テストは成功となります。

デフォルトでは、ドキュメント索引作成の例外ファイルは `index_exceptions` と呼ばれ、(Config.pm 内に構成されている) ドキュメントの索引作成ディレクトリに格納されます。この場所を相対パスとして指定する場合は、ドキュメント・ディレクトリが基準となります。

Perl DBD::Oracle モジュールの制約により、ファイル・システムからデータベースへドキュメントをストリーム化することはできないことに注意してください。かわりに、ドキュメントをデータベースにアップロードする前に、ドキュメント全体をメモリーへロードすることができます。このことは、ドキュメント全体を格納できるだけの十分なメモリーが必要であることを意味しています。一度に 1 つのドキュメント分の領域のみが必要です。

## H.5.2 URL テストの構成

OracleAS Portal は Oracle Text の機能を使用して、URL アイテム、他のアイテム、またはページのいずれかで URL 属性としてリストされている URL を取り出します。取り出されたコンテンツは索引作成され、検索可能になります。

TEXTTEST は、類似の URL 索引を作成することによって、この機能をテストします。URL テスト用のテスト・データには、いくつかの URL が列挙されています。TEXTTEST は、URL データファイルから URL をロードします。データ・ファイルの各行には、索引作成の対象となる 1 つの URL が含まれています。オプションとして、エラー・メッセージが含まれている場合もあります。対応する URL の索引作成でそのエラーが検出された場合は、予想されたエラーとみなされ、テストの失敗にはなりません。

予想されるエラー・メッセージは Perl の正規表現として取得され、索引作成から取得したエラーと照合されます。予想されるエラーと URL は、空白文字によって区切る必要があります。予想されるエラーが \* として指定されている場合は、すべてのエラーが予想されたエラーとみなされ、テストが失敗することはありません。たとえば、次のようになります。

```
http://www.oracle.com
http://www.google.com DRG-11614: URL store: communication with host specified in
http://www.google.com timed out
http://www.notarealurl.com DRG-11612: URL store: unknown host specified in
http://www.notarealurl.com
```

```
http://www.anotherimaginaryurl.com DRG-11612
http://www.expectederror.com *
```

最初の URL は検出されるはずですが、これが索引作成できない場合には、エラーが報告されます。

`http://www.google.com` は、タイムアウトになると予想されます (Portal がファイアウォールの内側にあり、プロキシが指定されていないため)。この失敗が発生しても、テストは成功となります。

`http://www.notarealurl.com` は、ホストが不明であるというエラーで失敗すると予想されます。

`http://www.anotherimaginaryurl.com` も、ホストが不明であるというエラーで失敗すると予想されます。完全なエラー文字列を指定する必要はありません。これは、エラー・コードが一致する正規表現として処理されるためです。このエラーで失敗しても、テストは成功となります。

`http://www.expectederror.com` では、テストは失敗しません。これについては、すでに説明したように、どのようなエラーが発生しても、テストは成功となります。

**8.3.9 項「索引作成エラーの表示」**で、最も一般的な Oracle Text URL のエラー・メッセージについて説明しています。

TEXTTEST を冗長モード (`-v` のコマンドライン・フラグ) で実行した場合には、予想されたエラーと予想されていないエラーが報告されます。TEXTTEST を実行すると、URL データ・ファイルが開き、それを使用して URL テスト表に値が移入されます。このようにして、ファイルの内容を変更することによって、テストで使用する URL のリストを修正および拡張することができます。

URL データファイルのデフォルトの場所は、`Config.pm` ファイルで指定します。TEXTTEST の実行時にコマンドライン引数に `-u` を使用して、URL テスト・データファイルを指定することもできます。たとえば、次のようになります。

```
texttest -c 'sys/change_on_install@orcl as sysdba' -u ORACLE_HOME/Portal/textttest/
url
```

`ORACLE_HOME/Portal/textttest/url` は、Oracle Application Server の Oracle ホーム内の、URL データ・ファイルのデフォルトの場所です。

特定の URL が、Portal インストール内の問題の原因と思われる場合は、URL の詳細を変更できます。また、Oracle Application Server インストールはファイアウォールの内側にあるため、インターネット上のパブリック URL ではなくイントラネットのローカルな URL が含まれるように、URL テスト・データを変更する場合があります。

### H.5.3 URL テストとプロキシ

Portal インストールがファイアウォールの内側にある場合は、ファイアウォールの内側にある URL を取り出す前に、プロキシを使用できるように Oracle Text を構成しておく必要があります。

プロキシを設定せずに、このような環境で TEXTTEST を実行すると、URL の索引作成テストは失敗します。このような場合には、次の 3 つの方法があります。

- テスト・データセットから、失敗する URL を削除します。URL データ・ファイルから、単純に行を削除します。
- 問題のテストを、失敗が予想されるものとしてマークします。このようにするには、URL データ・ファイル内に、URL を予想されるエラー・メッセージと合せて定義します。
- 使用するプロキシを指定します。H.5.4 項「URL の索引作成テストで使用するプロキシの指定」を参照してください。

### H.5.4 URL の索引作成テストで使用するプロキシの指定

プロキシを指定して、次の 2 つの場所で使用することができます。

- ファイル Config.pm。このファイルには、ftp\_proxy と http\_proxy に対して個別の設定が含まれています。
- TEXTTEST スクリプトの -p パラメータ。この場合には、HTTP および FTP のプロキシの両方で同じプロキシを使用します。

いずれの場合にも、プロキシは <hostname>.<domain>:<port> という書式になります。ポートはオプションです。たとえば、次のようになります。

```
www-proxy.us.abc.com:80  
emeacache.abc.com
```

-n のコマンドライン引数および no\_proxy Config.pm の設定を使用して、プロキシを使用しないドメインのリストを指定することができます。このリストでは、ドメインをカンマで区切って指定します。たとえば、次のようになります。

```
uk.abc.com,us.abc.com,abc.com
```

## H.6 TEXTTEST テストの説明

この項では、TEXTTEST によって実行されるそれぞれのテストについて説明し、各テストの失敗の一般的な原因のいくつかを概説します。

### H.6.1 sys ユーザーとしてのデータベースへの接続

#### 説明

テスト・スキーマを作成するための権限を持つユーザーとして、データベースに接続します。これは、`sys` ユーザーまたは `sys` スキーマのことを指します。ただし、`sys` ユーザーでなくても、適切な権限を持っているユーザーであれば十分です。

#### 考えられる失敗の原因

- 不正なスキーマ名またはパスワード。
- `sys` などのユーザーが特定のロールに接続する必要がある場合は、そのロールは、`sys/change_on_install as sysdba` などの通常の書式で接続文字列に指定する必要があります。

このテストが失敗すると、他のテストも失敗します。

### H.6.2 textcase スキーマの作成

#### 説明

テスト・オブジェクトがインストールされるスキーマを作成します。デフォルトでは、このスキーマは `textcase` という名称で、テスト・スキーマと呼ばれます。

#### 考えられる失敗の原因

- TEXTTEST に接続しているユーザーが、他のユーザーを作成する権限を持っていません。
- 新しいスキーマを作成できない他の理由として、データベースに十分な領域がないことなどが考えられます。

このテストが失敗すると、他のテストも失敗します。

### H.6.3 textcase スキーマへの DBA ロールの付与

#### 説明

テスト・スキーマに DBA ロールを付与します。これにより、ctxsys スキーマからオブジェクトを直接作成および削除することができます。

#### 考えられる失敗の原因

- TEXTTEST に接続しているユーザーが、他のユーザーに DBA ロールを付与するための権限を持っていません。このためには、ユーザー自身が DBA ロールを持っていることが必須です。

### H.6.4 textcase スキーマへの CTXAPP ロールの付与

#### 説明

テスト・スキーマに CTXAPP ロールを付与します。これは、Oracle Text の機能を使用するときに必要です。

#### 考えられる失敗の原因

- TEXTTEST に接続しているユーザーが、他のユーザーに CTXAPP を付与するための権限を持っていません。このためには、ユーザー自身が DBA ロールを持っていることが必須です。
- CTXAPP ロールが見つかりません。これは、Oracle Text のインストールが不完全であるか、破損または欠落していることを表します。

## H.6.5 sys からの切断

### 説明

TEXTTEST によって sys スキーマを切断し、テスト・スキーマへ再接続します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.6 textcase スキーマへの接続

### 説明

TEXTTEST によってテスト・スキーマへ再接続し、スキーマ・オブジェクトの作成および Oracle Text テストの実行を開始します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.7 textcase アイテムの関連表の作成

### 説明

ユーザー・データストアでアイテムの索引作成テストに使用する表を作成します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- 操作を完了するだけの空き表領域が不足しているなど、一般的なデータベースの問題です。

## H.6.8 アイテム表へのデータの移入

### 説明

アイテムの索引作成テストで使用する表にデータを移入します。これらの表は、TEXTTEST スクリプトに保持されているデータを使用して移入されます。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.9 ドキュメント表の作成

### 説明

ドキュメントの絞込みおよび索引作成テストで使用する表を作成します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.10 ドキュメント表へのデータの移入

### 説明

指定されたドキュメント・ディレクトリのデータをドキュメント表に移入します。

### 考えられる失敗の原因

- 指定されたドキュメント・ディレクトリが見つからないか、または読み込めません。ドキュメント・ディレクトリ内のファイルは読み込み可能である必要があります。
- TEXTTEST を実行しているマシンでメモリーが不足しており、いずれのドキュメントもメモリーに保持できません。

## H.6.11 URL 表の作成

### 説明

URL の索引作成テストで使用する表を作成します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.12 URL 表へのデータの移入

### 説明

URL の索引作成テストで使用する表にデータを移入します。これらの表には、URL データ・ファイルからデータが移入されます。[H.6.11 項「URL 表の作成」](#)を参照してください。

### 考えられる失敗の原因

- URL の索引作成データ・ファイルが見つからないか、または読み込めません。
- URL データ・ファイルのデータが不正な書式になっています。

## H.6.13 Oracle Text データストア・プロシージャの作成

### 説明

ctxsys スキーマにデータストア・プロシージャを作成します。テスト・ユーザーが DBA 権限を持ち、このプロシージャを作成または置き換えます。そのため、ctxsys スキーマがインストールされても、問題は発生しません。

### 考えられる失敗の原因

- ctxsys スキーマが存在しません。これは、Oracle Text がデータベースにインストールされていないことも意味しています。



## H.6.14 Oracle Text プリファレンスの作成

### 説明

Oracle Text プリファレンス（レクサー・プリファレンスは除く）を作成します。競合が発生しないよう、既存のプリファレンスはすべて削除されます。

### 考えられる失敗の原因

- Oracle Text インストールの問題。
- TEXTTEST が、この Oracle Text バージョンで作成しようとしているプリファレンスの互換性の問題（プリファレンスのバージョンが予想していたものと違う、など）。

## H.6.15 レクサー・プリファレンスの作成

### 説明

Oracle Text レクサー・プリファレンスを作成します。競合が発生しないよう、既存のプリファレンスはすべて削除されます。

### 考えられる失敗の原因

- Oracle Text インストールの問題。
- TEXTTEST が、この Oracle Text バージョンで作成しようとしているプリファレンスの互換性の問題（プリファレンスのバージョンが予想していたものと違う、など）。

## H.6.16 セクション・グループおよびゾーン・セクションの作成

### 説明

アイテムの索引作成テスト用に、セクション・グループおよびゾーン・セクションを作成します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- Oracle Text インストールの問題、または以前のいずれかのテストの失敗。

## H.6.17 Oracle Text アイテム索引の作成

### 説明

ユーザー・データストアを利用したアイテムの索引作成テストで使用する Oracle Text 索引を作成します。このテストでは、索引にデータは移入されません。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- Oracle Text インストールの問題、または以前のいずれかのテストの失敗。

## H.6.18 Oracle Text ドキュメント索引の作成

### 説明

ドキュメントの索引作成テストで使用する Oracle Text 索引を作成します。このテストでは、索引にデータは移入されません。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- Oracle Text インストールの問題、または以前のいずれかのテストの失敗。

## H.6.19 Oracle Text URL 索引の作成

### 説明

URL の索引作成テストで使用する Oracle Text 索引を作成します。このテストでは、索引にデータは移入されません。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- Oracle Text インストールの問題、または以前のいずれかのテストの失敗。

## H.6.20 保留状態にするためのすべてのアイテム・コンテンツへのアクセス

### 説明

アイテムのテスト表のすべての行を更新し、Oracle Text の保留状態のキューに格納されるようにします。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- Oracle Text インストールの問題、または以前のいずれかのテストの失敗。

## H.6.21 保留状態にするためのすべてのドキュメント・コンテンツへのアクセス

### 説明

ドキュメントのテスト表のすべての行を更新し、Oracle Text の保留状態のキューに格納されるようにします。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- Oracle Text インストールの問題、または以前のいずれかのテストの失敗。

## H.6.22 保留状態にするためのすべての URL コンテンツへのアクセス

### 説明

URL のテスト表のすべての行を更新し、Oracle Text の保留状態のキューに格納されるようにします。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。
- Oracle Text インストールの問題、または以前のいずれかのテストの失敗。

## H.6.23 アイテム索引の同期化

### 説明

アイテムの索引作成テスト表の Oracle Text 索引を同期化します。これによって、コンテンツの索引が作成されます。

アイテムの索引作成で使用するデータセットは制御されており、TEXTTEST スクリプト内部のものであるため、このテストは必ず成功すると予想されます。

### 考えられる失敗の原因

- 以前のテストの失敗。
- Oracle Text インストールの問題。Oracle Text インストールを確認し、必要に応じて再インストールします。いずれかのデータベースをアップグレードするためのすべての手順の手順が終了していることを確認します。これらの手順の中に、Oracle Text に関連する手順が含まれていることが多いためです。

## H.6.24 ドキュメント索引の同期化

### 説明

ドキュメントの索引作成テスト表の Oracle Text 索引を同期化します。これによって、コンテンツの索引が作成されます。

### 考えられる失敗の原因

- テスト用にアップロードされたいずれかのドキュメントの絞込みができません。Oracle Text で絞り込むことができない書式のドキュメントもあるため、これは必ずしも問題ではありません。

『Oracle Text リファレンス』を参照してください（サポートされている書式の章を参照）。ドキュメントを削除するか、または失敗が予想されるものとしてマークします（H.5.1 項「ドキュメント・テストの構成」を参照）。

- 絞込みのソフトウェアのバグまたは不正な構成による、索引作成の予想できない失敗。

『Oracle Text リファレンス』および第 8 章「OracleAS Portal の検索機能の構成」を参照してください。Oracle Text インストールが正しく構成されており、ドキュメントの書式がサポートされていても、絞込みができない場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

## H.6.25 URL 索引の同期化

### 説明

URL の索引作成テスト表の Oracle Text 索引を同期化します。これによって、コンテンツの索引が作成されます。

### 考えられる失敗の原因

- URL の索引作成テスト・データで指定されているいずれかの URL が、Oracle Text によって索引作成が可能な HTML またはプレーン・テキストを返していません。この問題は、様々な理由で発生します。URL が不正であるか、またはサイトが無効になっている可能性があります。
- データベース・インスタンスがファイアウォールの内側にあり、URL がファイアウォールの内側にある場合は、プロキシ・サーバーを使用できるようにテストを構成することが必要になります。H.5.2 項「URL テストの構成」を参照してください。URL が失敗すると予想される場合は、URL テスト・データにそのようにマークしてテストが成功するようにします。

## H.6.26 ctxsys からのデータストア・プロシージャの削除

### 説明

ctxsys スキーマに作成されているデータストア・プロシージャを削除します。

-k オプションが指定されており、テストの終了後もテスト・スキーマが保持される場合は、このテストは実行されません。H.3 項「TEXTTEST の実行」を参照してください。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.27 textcase スキーマからの切断

### 説明

テスト・スキーマから切断します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.28 sys ユーザーとしての接続

### 説明

テスト・スキーマを削除するために、sys スキーマに再接続します。

-k オプションが指定されており、テストの終了後もテスト・スキーマが保持される場合は、このテストは実行されません。H.3 項「TEXTTEST の実行」を参照してください。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.29 textcase スキーマの削除

### 説明

テスト・スキーマを削除します。

-k オプションが指定されており、テストの終了後もテスト・スキーマが保持される場合は、このテストは実行されません。H.3 項「TEXTTEST の実行」を参照してください。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。

## H.6.30 データベースからの切断

### 説明

sys スキーマから切断します。

### 考えられる失敗の原因

- 明白な失敗の原因はありません。





# Web クリップिंगの管理

Web クリップング・プロバイダは、Oracle Application Server Portal へのプロバイダの 1 つです。このプロバイダによって、ポートレットとしてクリップされた Web コンテンツを描画する「Web クリップング」ポートレットが提供されます。「Web クリップング」ポートレットを使用することで、Web コンテンツを収集して単一のポートレットに集約することができます。このポートレットを使用して、大きな組織全体に散在している多数の Web サイトのコンテンツを統合することができます。

「Web クリップング」ポートレットを使用する前に、次のような管理タスクを実行する必要があります。

- Web クリップング・リポジトリの構成
- HTTP または HTTPS のプロキシ設定の構成
- キャッシュの構成

この項では、キャッシュの構成方法と OracleAS Web Cache の使用方法を説明します。キャッシュの詳細は、1.3 項「OracleAS Portal のキャッシュについて」および 5.7 項「OracleAS Portal 内での OracleAS Web Cache のキャッシュ構成」を参照してください。

- 信頼できるサイトの証明書の追加

第 6 章「OracleAS Portal の保護」のこの項では、信頼できる証明書ファイルを構成または拡張する方法について説明します。Oracle Wallet Manager から生成された信頼できるサーバー証明書ファイルである `ca-bundle.txt` は、「Web クリップング」ポートレット機能とともに出荷されます。UNIX の場合は `ORACLE_HOME/portal/conf`、Windows の場合は `ORACLE_HOME\portal\conf` にあるこのファイルには、HTTPS を使用して安全なサーバーに移動するために使用できる、信頼できるサーバー証明書の初期リストが含まれています。ただしこれは、Web 上に存在するすべてのサーバーの証明書の完全なリストではありません。したがって、新しい信頼できるサイトを参照する場合は、追加の信頼できるサーバー証明書が認識されるように、このファイルを構成または拡張する必要があります。この信頼できる証明書ファイルの構成または拡張の方法の詳細は、6.1.9 項「Web クリップング・プロバイダの保護」を参照してください。

- Web クリップング・プロバイダの Oracle Advanced Security の構成

---

第6章「OracleAS Portal の保護」のこの項では、中間層のプロバイダ自体と Web クリップング・リポジトリのホストであるデータベース間のチャンネルを保護し、暗号化する、Oracle Advanced Security Option (ASO) の構成について説明します。

## I.1 Web クリップング・リポジトリの構成

Web クリップングの定義は、Oracle9i Database Server にホストされている Web クリップング・リポジトリ内に永続的に保存される必要があります。Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページによって、Web クリップング・プロバイダがデータベースにアクセスするように構成されているかどうか自動的に検出されます。データベースにアクセスするように構成されていない場合は、データベース接続パラメータを構成または再構成できるように、「Web クリップング・リポジトリ」フィールドの状態の横に編集リンクが表示されます。

### Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用した Web クリップング・リポジトリの構成

Portal 管理者として、次の場所にある Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用して、Web クリップング・リポジトリを構成することができます。

`http://<host>:<port>/portalTools/webClipping/providers/webClipping`

Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページによって、Web クリップング・プロバイダがデータベースにアクセスするように構成されているかどうか、最初に自動的に検出されます。構成されていない場合は、「Web クリップング・リポジトリ」の「状態」の横に「編集」リンクが表示されます。これによって、「プロバイダの編集」ページのデータベース接続パラメータを再構成できるようになります。

Web クリップング・プロバイダを初めてインストールする場合は、構成を行う前に、データベース管理者にデータベース・ユーザー・アカウントを要求する必要があります。詳細は、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページにある「プロバイダ構成」セクションで「詳細」をクリックし、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページに関する項を参照してください。

「プロバイダ構成」セクションの「設定」列の下に、「Web クリップング・リポジトリ」フィールドがあります。「操作」列内の対応する「編集」リンクをクリックします。プロバイダの編集: Web クリップング・ページの「リポジトリ設定」セクションで、Web クリップング・プロバイダのデータベース接続情報を指定することができます。次に「OK」をクリックして設定を保存し、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページに戻ります。

データベース接続情報は、最初に選択するリポジトリ・ターゲットのデータベースから成り、「OracleAS Infrastructure データベース (デフォルト)」または「その他の Oracle9i (以上の) データベース」を選択できます。「Oracle Application Server Infrastructure データベース (デフォルト)」オプションを選択した場合は、その他の接続パラメータを指定する必要はありません。

別の Oracle9i Database Server に接続する必要がある場合は、「リポジトリ・ターゲット」フィールド内でその他の Oracle9i (以上の) データベースのオプションを選択し、「サーバー・ホスト」、「リスナー・ポート」、「SID」、「ユーザー名」および「パスワード」の各フィールドの接続パラメータを指定します。

PDK アップグレードの一部として以前インストールした PDK 9.0.2.4.0 で使用されるのと同じデータベースを「リポジトリ・ターゲット」に指定した場合は、リポジトリのアップグ

レードも実行する必要があることが通知されます。Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページでの入力の際に、「アップグレード (9.0.2.4.0 から)」リンクが表示されます。このリンクを 1 回クリックするだけで、新しい表のインストールと既存のクリッピング定義の最新状態への移行の両方のアップグレードが可能です。

---

**注意：** アップグレード後は、Web クリップング・リポジトリに格納されたクリッピング定義は、PDK 9.0.2.4.0 では機能しません。

---

最後に、安全なデータベース接続が必要な場合は、「詳細セキュリティ・オプション」フィールドで有効化（保護されたデータベース接続）オプションを選択します。詳細セキュリティ・オプションの構成の詳細は、6.1.9.2 項「Web クリップング・プロバイダの Oracle Advanced Security の構成」を参照してください。

詳細は、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページにある「プロバイダ構成」セクションで「詳細」をクリックしてください。

## I.2 HTTP または HTTPS のプロキシ設定の構成

使用中の HTTP または HTTPS のプロキシ設定は、Web クリップング・スタジオが HTTP リクエストのためにファイアウォールを通過できるように設定する必要があります。

### I.2.1 Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用したプロキシ設定の構成

Portal 管理者として、次の場所にある Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用して、プロキシの設定を構成することができます。

`http://<host>:<port>/portalTools/webClipping/providers/webClipping`

「プロバイダ構成」セクションの「設定」列の下に、「HTTP プロキシ」フィールドがあります。「操作」列内の対応する「編集」リンクをクリックします。プロバイダの編集: Web クリップング・ページの「プロキシ設定」セクションで、Web クリップング・プロバイダのプロキシ設定を入力します。次に「OK」をクリックして設定を保存し、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページに戻ります。詳細は、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページにある「プロバイダ構成」セクションで「詳細」をクリックしてください。

## 1.2.2 手動でのプロキシの設定

Portal 管理者として、使用中の HTTP または HTTPS 構成に従って、手動でプロキシを設定することもできます。UNIX および Windows の次のディレクトリにある、`provider.xml` ファイル内の適切なエントリを編集します。

UNIX の場合：

```
ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/  
portalTools/webClipping/WEB-INF/providers/webClipping
```

Windows の場合：

```
ORACLE_HOME\j2ee\OC4J_Portal\applications\  
portalTools\webClipping\WEB-INF\providers\webClipping
```

プロキシの設定を手動で変更した後に、プロキシの変更が有効になるように、`opmnctl` を使用して OC4J インスタンスを再起動します。このインスタンスには、OC4J\_Portal インスタンスが含まれています。

## 1.2.3 認可されていない外部 Web サイトからのコンテンツのクリッピングの制限

Web クリッピング・プロバイダには、「プロキシ例外リスト」を使用して、ユーザーが認可されていない外部 Web サイトからコンテンツをクリッピングしないようにする基本的なメカニズムがあります。このメカニズムは、外部 Web サイトへ到達するためにプロキシ・サーバーを利用している環境でのみ利用可能です。「プロキシ例外リスト」は、「プロバイダ編集」ページの「プロキシ設定」の下に表示され、Web クリッピング・プロバイダ・テスト・ページへリンクされています。以前と同じようにプロキシのホストとポートを設定することで、ユーザーにクリッピングを制限する「プロキシ例外」フィールドにドメインのリストを含めることができます。ユーザーがリストにあるドメイン内の Web サイトを Web クリッピング・スタジオから参照しようとすると、HTTP タイムアウト・エラーが発生します。

## I.3 キャッシュの構成

デフォルトでは、すべての「Web クリップング」ポートレット用の妥当性チェック・ベースのキャッシュは、OracleAS Portal 経由で使用されます。妥当性チェック・ベースのキャッシュを使用すると、キャッシュされたアイテムがまだ有効であるかどうかを判断するために、PPE が Portal プロバイダに連絡します。

Oracle Application Server Web Cache がインストールされている場合は、失効化ベースのキャッシュを Web Cache 経由で使用することを選択できます。それぞれのキャッシュのタイプは排他的であることに注意してください。つまり、どちらか1つのみを選択でき、両方は選択できません。

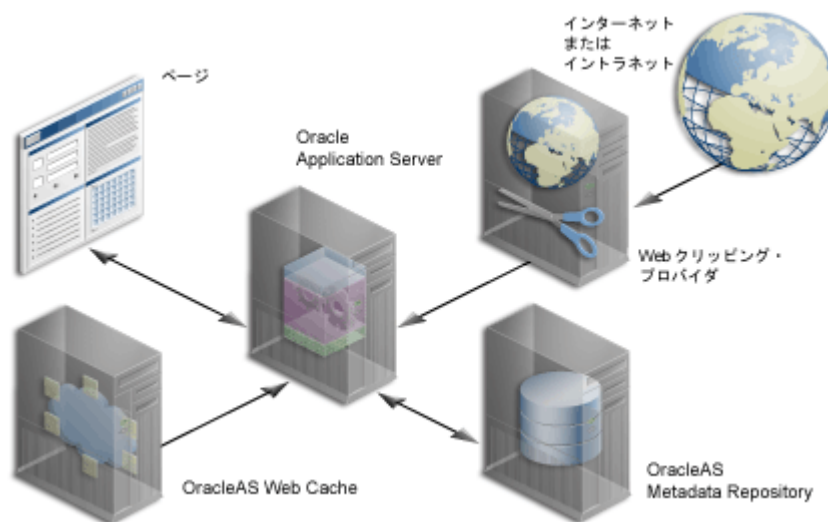
失効化ベースのキャッシュでは、アイテムの更新が必要であるという通知をキャッシュが受け取るまで、アイテムはキャッシュに残ります。たとえば、「Web クリップング」ポートレットに定期的に更新されるコンテンツが含まれていると、キャッシュは失効化されます。図 I-1 に示す失効化ベースのキャッシュは、PPE に関連するラウンド・トリップごとに同じネットワーク通信量を保ちながら、Web クリップング・プロバイダが受け入れる必要がある要求の数を減らします。設定シナリオに応じて、必要なキャッシュ方法を採用することができます。キャッシュの詳細は、1.3 項「OracleAS Portal のキャッシュについて」を参照してください。

I.3.1 項「Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用したキャッシュの構成」および I.3.2 項「手動での Web Cache の構成」で、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用してキャッシュを構成する方法と Web Cache を手動で有効化してキャッシュを構成する方法を説明します。デフォルトでは、Web クリップング・プロバイダには Portal キャッシュ（妥当性チェック・ベースのキャッシュ）が使用されます。Web Cache（失効化ベースのキャッシュ）を使用する場合は、I.3.1 項または I.3.2 項を参照してください。

Web クリップング・コンテンツをキャッシュに入れるために Web Cache を使用することに決定した場合は、最終手順として、Portal ナビゲータを使用し、プロバイダ URL の接続文字列を Web Cache のポート (`portalTools/builder/providerui/Navigator?event=init`) のある URL を指定するように変更します。通常、Web Cache のポートは 7778 です。この値を確認するために、Oracle Application Server のポート使用状況ページを確認します。OracleAS のコンポーネントとサービスに使用されるデフォルトのポート番号のリストは、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

この構成では、Web Cache が、OracleAS Portal インスタンスと Web クリップング・プロバイダ間の Web クリップング・コンテンツをキャッシュに入れます。

図 I-1 Oracle Web Cache によって提供される失効化ベースのキャッシュ



### I.3.1 Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用したキャッシュの構成

Portal 管理者として、次の場所にある Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページを使用して、キャッシュを構成することができます。

`http://<host>:<port>/portalTools/webClipping/providers/webClipping`

「プロバイダ構成」セクションの下に、ポートレット・キャッシュの設定エントリがあります。「操作」列内の対応する「編集」リンクをクリックします。「Web クリップング・ポートレット」ページの「キャッシュ・パラメータ」セクション内で、「キャッシュ・スキーマ」フィールド内のプルダウン・メニューからキャッシュ・スキーマを選択し（妥当性チェックまたは失効化（Web Cache が必要））、「キャッシュ有効期限」フィールドにキャッシュの有効期限の値を指定します。キャッシュ有効期限のデフォルト値は 30 分です。Web クリップング・プロバイダのキャッシュを構成したら、「OK」を選択して設定を保存し、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページに戻ります。詳細は、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページにある「プロバイダ構成」セクションで「詳細」をクリックしてください。

## I.3.2 手動での Web Cache の構成

Web Cache を有効にするには、最初に UNIX および Windows の次のディレクトリ内で `cache.xml` ファイルを確認し、失効化ホストおよびポート番号の正確な値を確認してください。

UNIX の場合：

```
ORACLE_HOME/portal/conf
```

Windows の場合：

```
ORACLE_HOME\portal\conf
```

次に、UNIX および Windows の次のディレクトリにある `provider.xml` ファイルを手動で更新する必要があります。

UNIX の場合：

```
ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/  
portalTools/webClipping/WEB-INF/providers/webClipping
```

Windows の場合：

```
ORACLE_HOME\j2ee\OC4J_Portal\applications\  
portalTools\webClipping\WEB-INF\providers\webClipping
```

次の手順を実行します。

1. `useInvalidationCaching` タグを検索し、Web Cache の失効化ベースのキャッシュを有効にするためにその値を `true` に設定します。
2. `cacheExpires` タグを検索し、その値を変更する場合は使用するデフォルト値に設定します。この値は分単位です。



---

# 仮想プライベート Portal の設定と管理

この付録では、仮想プライベート Portal (VPP) を設定し、管理する手順について説明します。仮想プライベート Portal (ホストされる Portal) の設定と管理に関連する様々なタスクについては、事例を通じて示します。

この付録の内容：

- [ホスティングの概要](#)
- [仮想プライベート Portal で実行する手順の概要](#)
- [アウト・オブ・ボックスの Portal でのホスティングの有効化](#)
- [ASP のユーザーおよびグループ](#)
- [サブスクリバの追加](#)
- [仮想プライベート Portal での詳細操作](#)
- [制限事項](#)
- [スクリプトのパラメータ](#)

## J.1 ホスティングの概要

タスクを調べる前に、ホスティング機能の利点と既知の制約について説明します。

### J.1.1 ホスティングを使用する理由

顧客に Portal サービスを提供したいと考えているアプリケーション・サービス・プロバイダ (ASP) の Acme という会社を想定します。Acme では、費用対効果が高く安全な Portal を作成およびカスタマイズできる柔軟性を顧客に提供したいと考えています。顧客が独自のユーザー、情報および Portal ページを安全に作成し、管理できるようにしたいと考えています。

各顧客専用の Portal またはデータベース・インスタンスがあれば、顧客が必要とするセキュリティを提供できます。従来は、一企業内の複数の組織に対して完全に孤立化した Portal 環境を実装するには、組織ごとに専用のデータベース・インスタンスが必要でした。これは、特に組織数が多い場合にはハードウェアと人件費の面で費用がかかります。顧客数が増加すると、人件費とハードウェアのコストが急速に増大していました。単一の共有インスタンスの方が管理しやすいのは明らかですが、複数の組織を安全にホストするのに必要なレベルの孤立性は得られません。

単一のインスタンスはコストが低く、管理も簡単ですが、従来の Portal ソリューションでは、アプリケーション内に組み入れる複雑なセキュリティ・ルールが必要でした。Acme で必要なのは、コストとセキュリティの両方の点で最善の方法です。VPP は、ASP 向けプラットフォームに、大企業の IT 部門で部門単位のイントラネットまたはエクストラネット Portal サイトをホストできる、管理しやすい方法を提供します。Oracle Application Server Portal には、複数の組織をホストするための費用対効果がより高く、しかも管理しやすいソリューションがあります。そのため、完全なセキュリティ機能を伴う共有インスタンス・モデルの利点が提供されます。

## J.1.2 既知の制約

共有インスタンス・モデルには多くの利点がありますが、VPP 環境を実装する前にいくつか考慮すべき点があります。

ホストされるテクノロジーは、各サブスクリバ、つまり認証レムを完全に切り離します。VPP は、Portal でコンテンツを取得する前に、各ユーザーに対して、会社の ID および名前の入力や特定のコンテキストの設定を要求します。コンテンツとデータの範囲は、サブスクリバのコンテキストに制限されています。Portal はサブスクリバ・レベルで保護されるので、サブスクリバ間でのデータ共有は一切できません。データ共有はセキュリティ上の理由で許可されません。たとえば、A 社と B 社でドキュメントを共有する場合は、VPP を使用しないでください。

すべてのサブスクリバに繰り返し変更を行う作業もより複雑です。管理上の観点からは、Portal の UI 操作はサブスクリバごとに行う必要があります。

### 例 J-1

A 社、B 社および C 社に同一の Portal ページ 1、2 および 3 があるとします。管理者が A 社にログインしてページ 1 のレイアウトを変更すると、その特定のサブスクリバにのみ影響します。B 社のページ 1 を変更するには、B 社の管理者が Portal UI を使用して同じ変更を実行する必要があります。サブスクリバの数が少ない間は、各サブスクリバへのログインは容易です。多数のサブスクリバを管理する場合、多数の Portal サイトを管理する最善の方法は、Portal API を使用するか、各サイトに変更を加える自動テスト・ツールを使用してページを更新することです。これにより、多数のサブスクリバの管理は非常に複雑になります。

### 例 J-2

アップグレードについても考慮する必要があります。Portal リポジトリをアップグレードするときには、各サブスクリバのデータをアップグレードする必要があります。Acme で 1000 サブスクリバをホストする場合、Portal リポジトリのアップグレードは、すべてのサブスクリバのデータを処理するまで完了しません。

1 つのリポジトリのアップグレードに平均で 10 分かかるとします。単一インスタンス上でアップグレード処理を分割することは不可能なため、VPP による Portal リポジトリ・アップグレードでは既存のすべてのサブスクリバをループします。この例では、1 つのアップグレードに 10 分、それにサブスクリバの数をかけただけかかるため、 $10 \times 1000$  で 10000 分になります。これでは停止時間が長すぎます。

このため、小規模で管理しやすい VPP の配置としては、1 インスタンス当たり 50 サブスクリバ程度にすることをお勧めします。どうしてもこの推奨最大数を超過してしまうときは、複数の VPP インスタンスを配置することを検討します。変更やアップグレードを行うための妥当な停止時間帯を選択するため、タイム・ゾーン・ベースで区分化することもお勧めします。個別にアップグレード可能な複数の Portal リポジトリを構成できます。つまり、同時に 1000 サブスクリバすべてに影響を与えることなく、1 つのインスタンス上で 50 サブスクリバをアップグレードすることができます。

---

---

**注意：** このドキュメントでは、「サブスクライバ」と「認証レルム」を同じ意味で使用しています。

---

---

## J.2 仮想プライベート Portal で実行する手順の概要

次の項で、ホスト・インストールの設定と管理に関連するタスクの概要を説明します。

- [ホスティングの有効化](#)
- [ユーザーおよびグループの設定](#)
- [サブスクライバの追加](#)
- [サブスクライバの削除](#)
- [拡張機能](#)
- [インストール前のチェックリスト](#)
- [Oracle Directory Manager の使用](#)

### J.2.1 ホスティングの有効化

- OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On (SSO) Server 上でホスティングを有効にします。
- ASP ユーザーおよびグループのサポート用に Oracle Internet Directory (OID) 上に基本構造を作成します。

### J.2.2 ユーザーおよびグループの設定

- サポートと管理のインフラストラクチャおよびユーザーによって、仮想プライベート Portal を設定します。ASP では、これらを使用して、顧客に代わって仮想プライベート Portal を管理します。

### J.2.3 サブスクライバの追加

- OracleAS Portal および SSO スキーマ内に新しいサブスクライバ・ストライプを作成します。この手順にはページ、ページ・グループ、ポートレットおよびプロバイダの情報のようなオブジェクトのコピーも含まれるので、デフォルトの環境とページを事前に定義しておくことができます。
- 新しい OID サブスクライバ・ツリーを作成し、OID 内に必要な Portal エントリ（生成済みのグループ、ユーザー、権限など）を確立します。
- OID 内の新しいサブスクライバ用に ASP グループおよびユーザーをコピーします（ミラー・エントリの作成、権限の割当てなど）。

### J.2.4 サブスクライバの削除

- OracleAS Portal および SSO スキーマ内のサブスクライバのデータを削除します。
- OID 内のサブスクライバ・サブ・ツリー全体を削除します。

### J.2.5 拡張機能

- WebDAV を使用すると、URL アドレスを透過的な読み込みおよび書き込みメディアとして利用することができます。つまり、コンテンツをチェックアウトし、編集してからチェックインすることができます。
- Oracle UltraSearch には、Oracle データベース、IMAP サーバー、Web ページ、ディスク・ファイル、Portal ページ・グループなどの複数のリポジトリの一括検索機能が用意されています。

## J.2.6 インストール前のチェックリスト

仮想プライベート Portal を有効にするスクリプトを実行する前に、最初に、このようなスクリプトを実行するための情報を収集します。

表 J-1 パラメータ

パラメータ	説明
-pc	<host>:<port>:<sid> の書式の Portal スキーマのデータベース接続文字列。 <host> は、絶対ドメイン名です。これは、必須のパラメータです。
-ps	Portal スキーマ名。デフォルトでは、portal です。
-pw	Portal スキーマのパスワード。デフォルトでは、-ps パラメータの値です。このパラメータのヘルプは、 <a href="#">J.2.7 項「Oracle Directory Manager の使用」</a> を参照してください。
-sc	<host>:<port>:<sid> の書式の SSO スキーマのデータベース接続文字列。 <host> は、絶対ドメイン名です。デフォルトでは、-pc パラメータの値です。
-ss	SSO スキーマ名。デフォルトでは、orasso です。
-sw	SSO スキーマのパスワード。デフォルトでは、-ss パラメータの値です。このパラメータのヘルプは、 <a href="#">J.2.7 項「Oracle Directory Manager の使用」</a> を参照してください。
-h	OID サーバーのホスト名。これは、必須のパラメータです。
-p	OID サーバーのポート番号。デフォルトでは、389 または 4032 です。
-d	OID バインド DN。デフォルトでは、cn=orcladmin です。この DN には、新しいサブスクリイパを作成するための権限など、OID 管理権限がある必要があります。
-w	OID バインド DN のパスワード。デフォルトでは、welcome1 です。

## J.2.7 Oracle Directory Manager の使用

プロセスを開始するには、Oracle Directory Manager (ODM) を使用します。ODM は、Oracle Internet Directory を管理する上で役立つ GUI ツールです。Portal および orasso ユーザーのパスワードを入手するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Directory Manager を起動します。
  - 最初のフィールドで、OID バインド DN (パラメータの **-d**) を指定します。デフォルトでは、`cn=orcladmin` です。この DN には、新しいサブスクライバを作成するための権限など、OID 管理権限がある必要があります。
  - 2 番目のフィールドで、OID バインド DN のパスワード (パラメータの **-w**) を指定します。デフォルトでは、`welcome1` です。
  - 3 番目のフィールドで、OID インスタンスを選択します。OID インスタンスを定義していない場合は、このフィールドの右にあるアイコンをクリックし、OID が実行されているサーバーのホスト名 (パラメータの **-h**) とポート番号 (パラメータの **-p**) を指定します。デフォルトでは、ポート番号は 389 または 4032 です。
2. OID にログインした後は、メニュー・ツリーに沿って次のように移動します。「エントリ管理」>`cn=OracleContext>cn=Products>cn=IAS`。  
`cn= IAS InfrastructureDatabase>orclReferenceName=OID` データベースの名前。
3. ツリーの移動を続けます。
4. orasso ユーザー名をクリックします。
5. 右側のパネルで、「`orclpasswordattribute`」というセクションを探します。これは、orasso ユーザーのパスワードです (パラメータの **-sw**)。
6. Portal ユーザー名をクリックします。
7. 右側のパネルに「`orclpasswordattribute`」というセクションがあります。これは、Portal ユーザーのパスワードです (パラメータの **-pw**)。

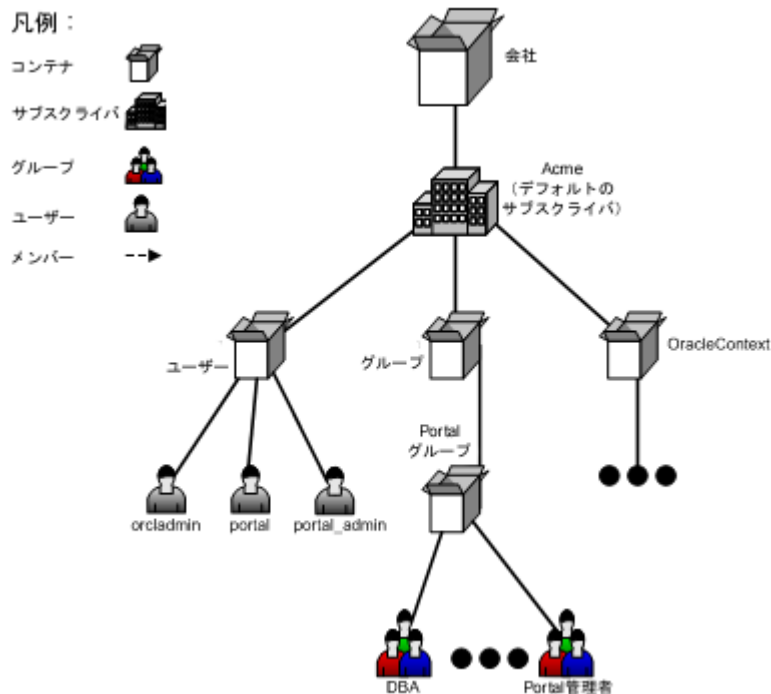
## J.3 アウト・オブ・ボックスの Portal でのホスティングの有効化

アウト・オブ・ボックスの OracleAS Portal のインストールを開始するには、Portal 上でホスティングを有効にします。C シェル・スクリプトによって、次のタスクが実行されます。

- OracleAS Portal と OracleAS Single Sign-On (SSO) Server 上でホスティングを有効にします。
- ASP ユーザーおよびグループのサポート用に OID (Oracle Internet Directory) 上に基本構造を作成します。

スクリプトがどのように動作するかを示すために、スクリプトを実行する前の OID ツリーの図を次に示します。

図 J-1 スクリプト実行前の OID ツリー



スクリプトを実行するには、UNIX のコマンドラインで次のように入力します。

```
cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost
./enblhstg.csh -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb -ps portal -pw ky8T5sr3 -sc
portaldb.acme.com:1521:portaldb -ss orasso -sw hA6fHjE2 -h oid.acme.com -p 389 -d
```



```
"cn=orcladmin" -w welcome1
```

ORACLE\_HOME/j2ee/OC4J\_SECURITY/applications/ss0/web/jsp にある login.jsp ページを編集して、サンプル・ログイン・ページを複数レルムのページに更新します。

---

---

**注意：** 分散配置では、このファイルは Single Sign-On の中間層に置かれます。

---

---

ファイルをバックアップしてから、次のセクションをコメント解除します。

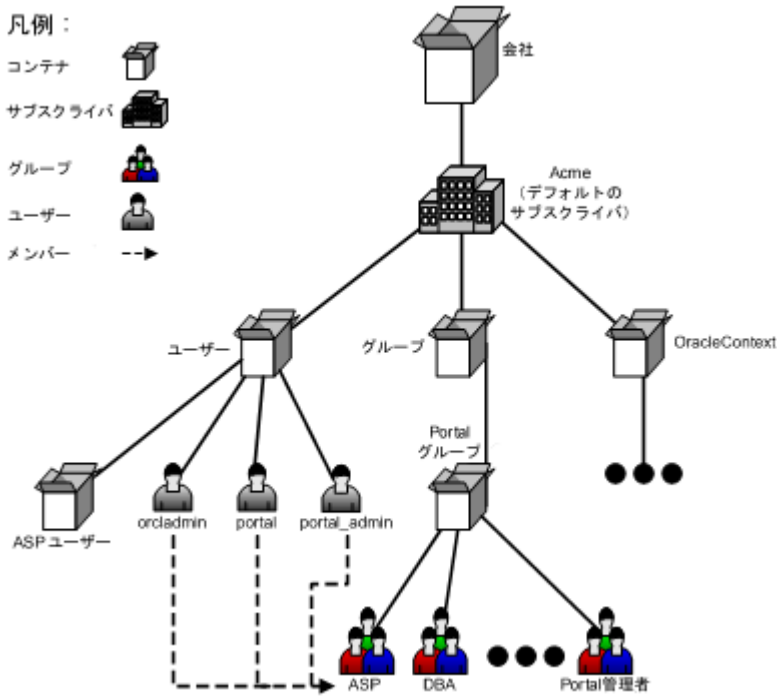
```
<!-- UNCOMMENT TO ENABLE MULTIPLE REALM SUPPORT
<tr>
<label>
<th id="c6"><font
class="OraFieldText"><%=msgBundle.getString(ServerMsgID.COMPANY_
LBL) %></font></th>
<td headers="c6"> <INPUT TYPE="text" SIZE="30" MAXLENGTH="50"
NAME="subscribername" value=""></td>
</label>
</tr>
-->
```

Single Sign-On の中間層を停止し、起動します。

パラメータの詳細な説明は、[J.8 項「スクリプトのパラメータ」](#)を参照してください。

スクリプトを実行した後、OID ツリーは図 J-2 のようになります。

図 J-2 スクリプト実行後の OID ツリー



これで、Portal インスタンスのホスティングが有効になりました。Portal のログイン画面に進むと、「ユーザー名」、「パスワード」および「企業」の3つの入力フィールドが表示されます。デフォルトのサブスクリイバとしてログインする場合は、「企業」フィールドに「acme」と入力するか、または空白のままにしておきます。

デフォルトのサブスクリイバは、管理上の目的で ASP のために保存されています。それぞれの顧客に対しては、顧客がログインして使用できるようになる前に新しいサブスクリイバを作成しておく必要があります。

## J.4 ASP のユーザーおよびグループ

Acme は ASP であるため、顧客に代わって仮想プライベート Portal を管理するためのサポートと管理のインフラストラクチャが必要です。仮想プライベート Portal には、複数のサブスライバ Portal の管理が容易になるような、ASP のユーザーとグループに対するサポート機能が用意されています。

ASP のユーザーとグループは、Acme のサブスライバ（顧客）の仮想プライベート Portal に対する様々なレベルの管理アクセス権を持つことができます。ASP ユーザーは、必要な権限に応じて複数のグループに分割することができます。たとえば、Alice にはユーザー・アカウントを管理する権限、Bob と Joe にはページ・コンテンツを管理する権限が必要だとします。これらの権限グループは、ASP グループです。

このような ASP ユーザーとグループによって、1 人の ASP ユーザーが単一の証明書のセット（ユーザー名およびパスワード）を使用して複数のサブスライバにログインすることができ、すべてのサブスライバに事前に定義された権限と同じ権限のセットを持つことができるようになります。このことは、すべてのサブスライバを網羅する ASP ユーザーおよびグループのミラー・エントリを作成することによって行われます。ユーザーおよびグループのエントリは、事前に提供されるスクリプトによって同期が保たれます（ASP 同期化スクリプトに関する項を参照）。**注意:** この同期化（スクリプトまたは自動で）は、ユーザーとグループを同期化するだけで、Portal 権限は同期化しません。

次の各項で、Acme 用に ASP ユーザーおよびグループのサポートによって仮想プライベート Portal を設定する方法と、その他実行することが望ましい場合があるタスクについて説明します。

- [ASP ユーザーおよびグループの設定](#)
- [制限事項](#)

## J.4.1 ASP ユーザーおよびグループの設定

ASP ユーザーおよびグループのためのマスター・エントリは、デフォルトのサブスクリバに存在します。ユーザーとグループは追加のアクセス権を持つことができるので（デフォルトのサブスクリバ内のすべてのユーザーがすべてのサブスクリバにログインできるわけではありません）、ASP のユーザーおよびグループを明示的に設定する必要があります。

Portal 上でホスティングを有効にすると、スクリプトによって、デフォルトのサブスクリバの OID サブツリーの下に ASP という名前のグループが作成されます。これは、ASP ユーザーおよびグループのサポートのためのプレースホルダです。ASP ユーザーおよびグループを設定するために、このプレースホルダが必要です。この時点から、このプレースホルダのグループは ASP グループとして参照されます。Acme が ASP のユーザーとグループを使用できるいくつかの例をあげます。

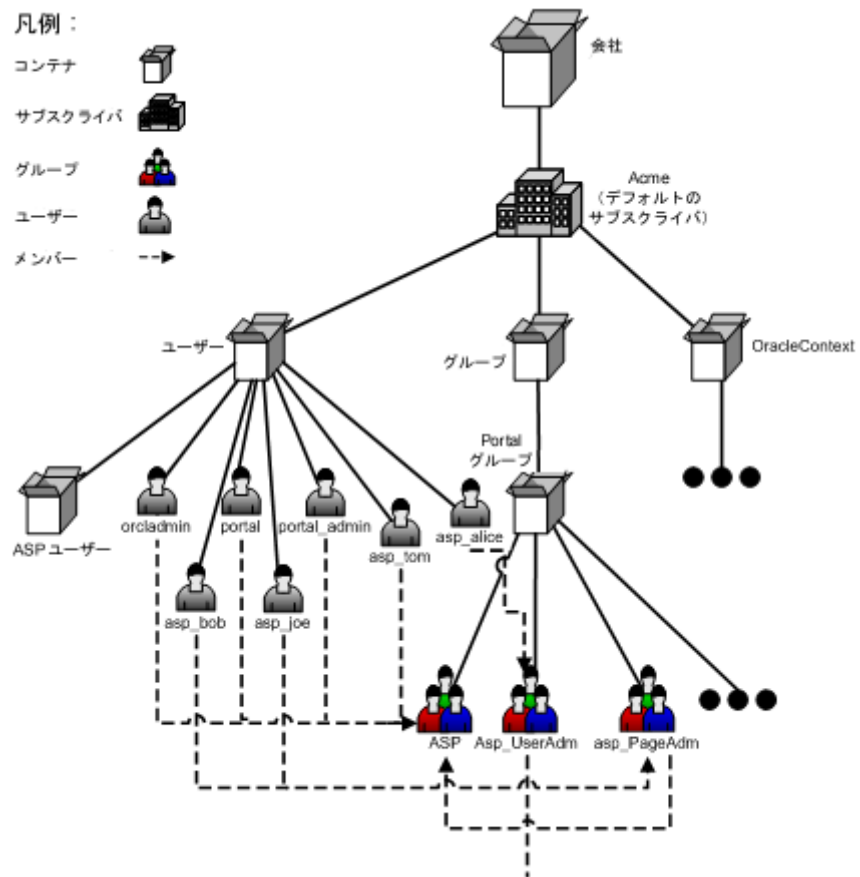
- Alice は、すべてのサブスクリバのユーザー・アカウントを管理する必要があります。
- Bob と Joe は、すべてのサブスクリバのページを管理する必要があります。
- Tom は、すべてのサブスクリバにログインする必要がありますが、標準の認証されたユーザー権限しか持っていません。

これを行うには、次の手順を実行します。

- デフォルトのサブスクリバ内に、ユーザーの `asp_alice`、`asp_bob`、`asp_joe` および `asp_tom` を作成します。
- デフォルトのサブスクリバ内に `asp_UserAdm` というグループを作成し、そのグループにユーザー・アカウントを管理する権限を割り当てます。また、同じデフォルトのサブスクリバ内に `asp_PageAdm` というグループを作成し、そのグループにページを管理する権限を割り当てます。
- `asp_UserAdm` グループのメンバーとして `asp_alice` を加えます。
- `asp_PageAdm` グループのメンバーとして `asp_bob` と `asp_joe` を加えます。
- ASP グループのメンバーとして `asp_UserAdm` と `asp_PageAdm` を加えます。
- ASP グループのメンバーとしてユーザー `asp_tom` を加えます。

これで、ASP のユーザーとグループを設定しました。OID ツリーは、[図 J-3](#) のようになります。

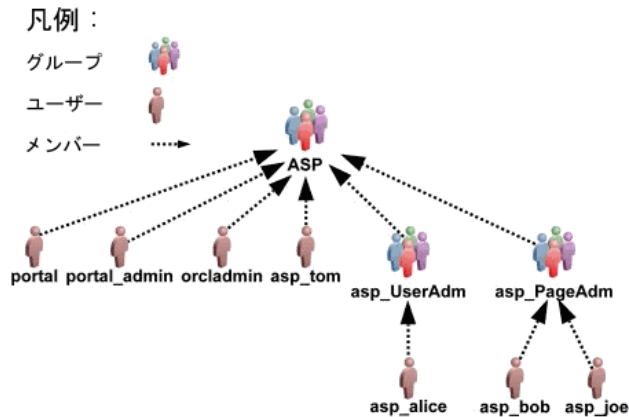
図 J-3 ユーザーおよびグループのある OID ツリー



さらに正確に説明すると、ASP ユーザーおよびグループは、次のように定義されています。

- ASP グループは、ASP グループそのもの、またはその直接のグループ・メンバーのどちらかです。
- ASP ユーザーは、ASP グループの直接のユーザー・メンバーです。

図 J-4 Acme のユーザーおよびグループのメンバーシップ構造



デフォルトでは、Portal ブートストラップ・ユーザーは ASP グループのメンバーです。つまり、このようなユーザーは、デフォルトでは ASP ユーザーです。Portal のブートストラップ・ユーザーである `portal`、`portal_admin` および `orcladmin` の詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』および『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

新しいサブスライバを追加すると、Portal のサブスライバ追加のスクリプトによって、新しいサブスライバ内に ASP ユーザーおよびグループのためのミラー・エントリが自動的に作成されます。したがって、ASP ユーザーは新しいサブスライバにログインすることができ、対応する権限を持つことができます。

## J.4.2 制限事項

ASP ユーザー / グループの設定には、制限事項がいくつかあります。

- ASP ユーザーおよびグループは、2 レベルより多くレベルを設定できません。つまり、ASP グループの直接のメンバーでない ASP グループ、またはどの ASP グループの直接のメンバーでもないユーザーは、ミラー・エントリの作成中に無視されます。
- OID では、ユーザー名は各サブスクリバ内で ASP ユーザーも含めて一意である（大文字と小文字の区別なし） が必要です。たとえば、サブスクリバである CompanyA 内に Bob と bob の二人のユーザーがあってはなりません。ASP ユーザーは各サブスクリバ内にミラー・エントリを持つので、ユーザー名の重複を防ぐために ASP ユーザーには特別な名前を付けてください。これに対応して、このガイド全体で、asp\_bob、asp\_joe のような名前を使用しています。
- 同じ理由で、ASP グループにも asp\_PageAdmin、asp\_UserAdmin のような特別な名前を使用します。ホスティング・スクリプトでは ASP グループが動的に処理されるので、ASP グループ内に Portal の生成済のグループを作成しないでください。同じ権限の ASP グループが必要な場合は、新しいグループを作成し、そのグループを生成済のグループのメンバーにします。
- デフォルト以外のサブスクリバの ASP ユーザーおよびグループは、ホスティング・スクリプトでのみ管理します。これらのユーザー、グループまたはその両方を手動で変更しないでください。
- ASP グループはすべての ASP ユーザーおよびグループの唯一のプレースホルダーであり、権限のために設計されているではありません。ASP グループに権限を割り当てないでください。これらの権限は他のサブスクリバにコピーされません。

## J.5 サブスクリイバの追加

これで、Acme によって ASP ユーザーとグループが設定され、Portal のホスティングが有効になりました。次の手順は、顧客を仮想プライベート Portal のサブスクリイバとして追加することです。CompanyA、CompanyB などの Acme の各顧客用に、Portal 内に新しいサブスクリイバを作成します。C シェル・スクリプトによって、次のタスクが実行されます。

- OracleAS Portal および SSO のスキーマ内に新しいストライプを作成します。この段階で、ページ・グループ、ページ、ポートレットおよびプロバイダ情報などのオブジェクトがコピーされます。
- 新しい OID サブスクリイバ・ツリーを作成し、OID 内に必要な Portal エントリ（生成済みのグループ、ユーザー、権限など）を確立します。
- OID 内の新しいサブスクリイバへ ASP グループおよびユーザーをコピーします（ミラー・エントリの作成、権限の割当てなど）。

サブスクリイバの CompanyA を追加するには、UNIX のコマンドラインで次のコマンドを入力します。

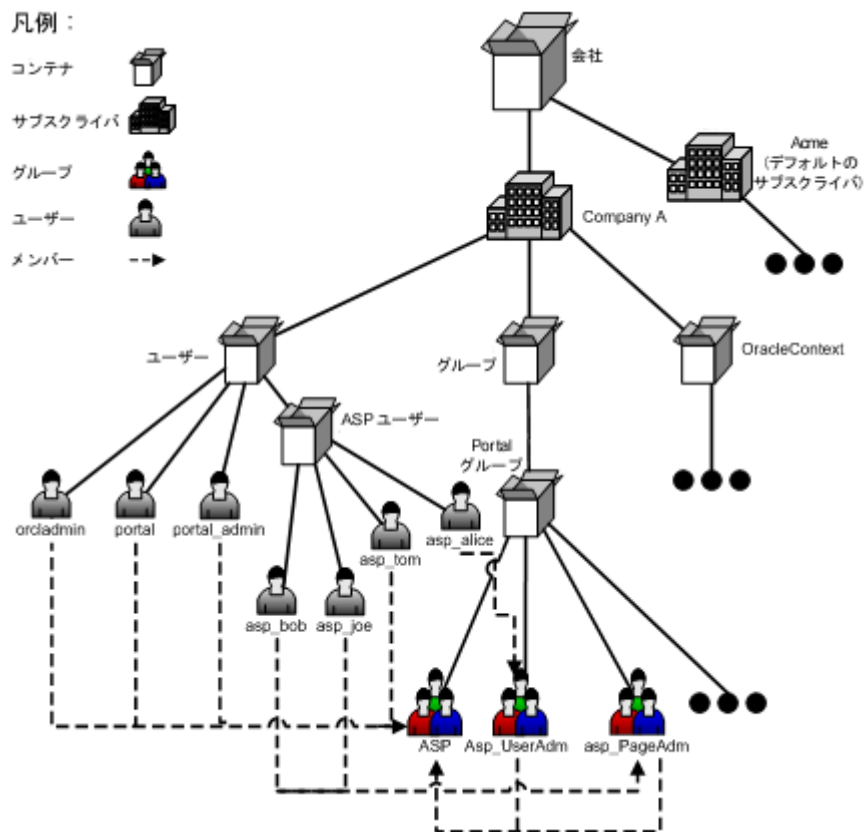
```
> cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost
> ./addsub.csh -name CompanyA -id 1001 -type all -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb
-pp change_on_install -ps portal -pw ky8T5sr3 -sc portaldb.acme.com:1521:portaldb
-sp change_on_install -ss orasso -sw hA6fHjE2 -a portal.portaldb.portaldb.acme.com
-h oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome1 -rc "cn=OracleContext" -sd acme
-tp ORACLE_HOME/ldap/schema/oid/
```

パラメータの説明は、[J.8 項「スクリプトのパラメータ」](#)を参照してください。

出力を確認し、エラーがあった場合はオラクル社のテクニカル・サポートに連絡してください。スクリプトを実行すると、サブスクリイバである CompanyA は、Portal と OID の両方に存在します。OID ツリーは、[図 J-5](#) のようになります。



図 J-5 Portal および OID 内の CompanyA



同じスクリプトを実行してサブスクリバの CompanyB を作成します。

これで、2つのサブスクリバがある仮想プライベート Portal を設定しました。ASP ユーザーを試行するには、デフォルトのサブスクリバ内に作成したのと同じパスワードを使用して、ユーザーの `asp_alice` として CompanyA にログインしてください。Alice は、ユーザー管理タスクを行うための権限を持っている必要があります。

## J.6 仮想プライベート Portal での詳細操作

この項の内容：

- ASP ユーザーおよびグループの管理
- サブスクライバの削除
- 仮想プライベート Portal 内での WebDAV の使用
- 仮想プライベート Portal による UltraSearch の使用
- 仮想プライベート Portal 用の Directory Integration Platform の設定
- 部分的に準備（下処理）されたサブスクライバ

### J.6.1 ASP ユーザーおよびグループの管理

すべてのサブスクライバを設定した後に、ASP ユーザーおよびグループの構造に対していくつかの変更を行う場合があります。たとえば、次のようになります。

- Bob がデフォルトのサブスクライバ内の自分のパスワードを変更したので、他のすべてのサブスクライバ内でも新しいパスワードと同期化する必要があります。
- Joe は、Acme を辞めたので、ASP ユーザーとして以後ログインできないようにする必要があります。
- サービス契約が変更され、ASP ではユーザー・アカウントの問題に以後責任を持ちません。そのため、asp\_UserAdm グループは必要なくなります。
- ASP ユーザーおよびグループがデフォルトのサブスクライバ内で変更される場合は、その他のすべてのサブスクライバ内で変更を同期化するために、提供されたスクリプトを使用する必要があります。

この同期化スクリプトには、次の 3 つのオプションがあります。

- パスワード同期
- デルタ（構造の変更）同期
- 完全同期

### J.6.1.1 パスワード同期

パスワード同期を使用すると、このスクリプトによって、デフォルトのサブスクリバ内のパスワードが使用され、すべての ASP ユーザーのミラー・エントリのパスワードが更新されます。

上の最初の例の場合、UNIX コマンドラインで次のコマンドを使用して、Bob の新しいパスワードとの同期をとることができます。

```
> cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost  
  
> ./syncasp.csh -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb -ps portal -pw ky8T5sr3 -h  
oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome1 -type pwd -u asp_bob
```

Directory Integration Platform (DIP) を有効にしている場合は、ASP ユーザーのパスワード変更の同期化が自動的に行われるので、このスクリプトを実行する必要はありません。

### J.6.1.2 デルタ（構造の変更）同期

デルタ同期を使用する場合は、このスクリプトによって、デフォルトのサブスクリバ内で変更されたユーザーおよびグループが検索され、他のすべてのサブスクリバにも変更内容が適用されます。

従業員の退職またはサービス契約の変更の場合、UNIX コマンドラインで次のコマンドを使用して、新しい ASP 構造との同期をとることができます。

```
> cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost  
  
> ./syncasp.csh -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb -ps portal -pw ky8T5sr3 -h  
oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome1 -type dif
```

デルタ同期では、古い ASP 構造との一貫性および整合性を前提としています。つまり、各サブスクリバ内の古い ASP 構造が一貫性のある正しいものであれば、デルタ同期は正しく動作します。そうでない場合は、デルタ同期よりも低速の完全同期のオプションを使用します。

### J.6.1.3 完全同期

スクリプトによってデフォルトのサブスライバの ASP 構造が取得され、他のすべてのサブスライバの構造へ上書きされます。デルタ同期による ASP 構造の同期化に失敗した場合は、このオプションの使用を考慮してください。

従業員の退職またはサービス契約の変更の場合、UNIX コマンドラインで次のコマンドを使用して、新しい ASP 構造との同期をとることができます。

```
> cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost

> ./syncasp.csh -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb -ps portal -pw ky8T5sr3 -h
oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome1 -type all
```

完全同期はデルタ同期よりも速度が遅いため、必要な場合にのみ使用してください。

## J.6.2 サブスライバの削除

Portal 内のサブスライバが不要になった場合、またはサブスライバの作成中にエラーが発生した場合は、提供されているスクリプトを使用して、そのサブスライバを永久に削除することができます。このスクリプトにより、次のことが実行されます。

- Oracle Portal および SSO スキーマ内のサブスライバのデータを削除します。
- OID 内のサブスライバ・サブ・ツリー全体を削除します。

たとえば、サブスライバの **nowhere** を削除するには、UNIX のコマンドラインで次のコマンドを入力します。ただし、いったんサブスライバを削除すると、仮想プライベート Portal のインスタンスがインストールされた Oracle データベースのバックアップがないかぎり、それを復元する方法はありません。

```
> cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost

> ./rmsub.csh -name nowhere -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb -pp change_on_install
-ps portal -sc portaldb.acme.com:1521:portaldb -sp change_on_install -ss orasso -a
portal.portaldb.portaldb.acme.com -h oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w
welcome1 -cs 1000
```

パラメータの説明は、[J.8 項「スクリプトのパラメータ」](#)を参照してください。

### J.6.3 仮想プライベート Portal 内での WebDAV の使用

WebDAV は、分散オーサリングおよびバージョン管理をサポートするプロトコルです。WebDAV を使用すると、インターネットを透過的な読み込みおよび書き込みメディアとして利用することができます。つまり、URL アドレスに基づいて、コンテンツをチェックアウトし、編集してからチェックインすることができます。OracleAS Portal での WebDAV の動作および WebDAV の設定方法の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

仮想プライベート Portal 内での WebDAV の設定方法は、アウト・オブ・ボックスの Portal での WebDAV の設定方法と同じです。

仮想プライベート Portal 内での WebDAV への接続方法は、アウト・オブ・ボックスの Portal 内での接続方法と同じです。唯一の違いは、仮想プライベート Portal 内で WebDAV へ接続するときに、次の行が使用されることです。

```
"<username>@<subscriber_name>" as the username, instead of just ...  
"<username>" as required in an out-of-the-box portal.
```

たとえば、サブスクリバである CompanyA 内のユーザー Joe を使用して WebDAV に接続するには、ユーザー名として joe@CompanyA、パスワードとして Joe のパスワードを使用します。

別のサブスクリバが WebDAV 接続のために同じ URL を使用すると、クライアント側のオペレーティング・システムがその接続をキャッシュに入れる可能性があります。たとえば、Windows 2000 PC でユーザー portal\_admin@acme を使用して WebDAV に接続すると、オペレーティング・システムのキャッシュが原因で、サブスクリバである CompanyA 内でユーザー joe@CompanyA として WebDAV に接続できません。オペレーティング・システムのキャッシュや格納されたユーザー名およびパスワードの消去方法の詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

## J.6.4 仮想プライベート Portal による UltraSearch の使用

Oracle UltraSearch には、複数のリポジトリ（Oracle データベース、IMAP サーバー、Web ページ、ディスク・ファイル、Portal ページ・グループなど）に対する一括検索機能が用意されています。仮想プライベート Portal 内で UltraSearch を使用するには、次の手順を実行します。

- 様々なサブスクリバ用にブランド名入り URL を設定します。
- 使用する UltraSearch インスタンスでホスティングを有効にします。

使用する UltraSearch インスタンスでホスティングを有効にするには、UNIX のコマンドラインで次のコマンドを実行します。

```
> cd ORACLE_HOME/ultrasearch/admin
> sqlplus /nolog @wk0host.sql [schema_name] [schema_password] [connect_string] E
```

各項目の説明

[schema\_name] : UltraSearch のスキーマ名。

[schema\_password] : UltraSearch スキーマのパスワード。

[connect\_string] : 使用する UltraSearch インスタンスのデータベース接続文字列。

E : UltraSearch インスタンスでホスティングを有効にします。

現在、UltraSearch では ASP ユーザーおよびグループはサポートされません。

## J.6.5 仮想プライベート Portal 用の Directory Integration Platform の設定

Directory Integration Platform (DIP) とは、様々なディレクトリとディレクトリ対応アプリケーション間の同期化を実行する包括的なフレームワークです。このフレームワークによって提供されるサービスの 1 つが Provisioning Integration であり、このサービスで、ディレクトリ・イベントについての通知をディレクトリ対応アプリケーションへ送信することができます。

**関連項目：**『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

アウト・オブ・ボックスの Oracle Portal のインストールにおいては、DIP は無効化されています。仮想プライベート Portal 内で DIP を有効にするには、次の手順を実行します。

1. 既存のサブスクリバで DIP を有効にするための、提供されているスクリプトを実行します。

たとえば、UNIX 環境では次のように実行します。

```
enbldip.csh -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb -pp change_on_install -ps portal  
-h oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome -enable
```

2. addsub.csh と rmsub.csh 内の oidprovtool へのコールをコメント解除して、サブスクリバを追加または削除するときにこれらの 2 つのスクリプトが DIP プロファイル・エントリに適用されるようにします。

これを行うには、次の手順を実行します。

- a. エディタ内に前述の 2 つのファイルを開きます。
- b. oidprovtool 文字列のある行を検索します。
- c. 検索された行をコメント解除します。

また、次を実行して、Portal 内のすべてのサブスクリバにある DIP を無効にすることもできます。

1. 次のようにして、提供されているスクリプトを UNIX のコマンドラインで実行します。

```
enbldip.csh -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb -pp change_on_install -ps portal  
-h oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome -disable
```

2. addsub.csh と rmsub.csh 内の oidprovtool へのコールをコメント化して、サブスクリバを追加または削除するときにこれらの 2 つのスクリプトが DIP プロファイル・エントリを無視するようにします。

これを行うには、次の手順を実行します。

- a. エディタ内に前述の 2 つのファイルを開きます。
- b. oidprovtool のある行を検索します。
- c. 検索された行をコメント化します。

## J.6.6 部分的に準備（下処理）されたサブスライバ

addsub.csh スクリプトを実行して新しいサブスライバを作成する場合、Oracle Portal、OID および SSO がインストールされているマシンがどのように構成されているかに応じて、数分かかることがあります。新しいサブスライバが作成されるときに発生するデータ操作に加えて、ほとんどの ASP は、サブスライバ作成時に、管理プロビジョニングとサブスライバ固有のカスタマイズを実行します。

サブスライバの登録をすばやく行うために、仮想プライベート Portal では、ASP がサブスライバを部分的に準備できるようになっています。このようにすると、ASP が登録されるときに、サブスライバでは登録後のカスタマイズのみを実行する必要があり、仮想プライベート Portal のストライプをそのサブスライバに直接割り当てます。仮想プライベート Portal には、addsub.csh スクリプト内にデータベース専用モードが用意されています。そのモードでは、Portal および SSO データベースでデータのコピーが実行されます。ASP がサブスライバにストライプを割り当てる準備ができると、LDAP モードを使用して addsub.csh スクリプトを実行することで、サブスライバの作成が終了します。

Portal および SSO データベース内でサブスライバを部分的に準備する場合は、addsub.csh 内で `-type` パラメータを使用します。たとえば、UNIX のコマンドラインで次のように入力します。

```
> cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost
> ./addsub.csh -name TEMP_COMPANY -id 1003 -type db -pc
portaldb.acme.com:1521:portaldb -pp change_on_install -ps portal -pw ky8T5sr3 -sc
portaldb.acme.com:1521:portaldb -sp change_on_install -ss orasso -sw hA6fHjE2 -h
oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome1 -rc "cn=OracleContext" -sd acme
```

この例で使用されているように、会社名に TEMP\_COMPANY のような一時的な名前を使用することができます。後で顧客（CompanyC など）が実際に追加されるとき、UNIX コマンドラインで次のコマンドを実行することができます。

```
> cd ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwhost
> ./addsub.csh -name CompanyC -id 1003 -type ldap -pc portaldb.acme.com:1521:portaldb
-pp change_on_install -ps portal -pw ky8T5sr3 -sc portaldb.acme.com:1521:portaldb
-sp change_on_install -ss orasso -sw hA6fHjE2 -a portal.portaldb.portaldb.acme.com
-h oid.acme.com -p 389 -d "cn=orcladmin" -w welcome1 -rc "cn=OracleContext" -sd acme
-tp ORACLE_HOME/ldap/schema/oid/
```

部分的にサブスライバを準備するときと同じサブスライバ ID を使用して、顧客の本来の名前（CompanyC）を付ける必要があります。これまでの名前（上の例では、TEMP\_COMPANY）が新しい名前に置き換えられます。スクリプトによって CompanyC のための OID サブスライバ・ツリーが作成され、OID の設定と Portal スキーマが同期化されます。このプロセスは、最初からサブスライバを作成するよりも時間がかかりません。

`-type ldap` オプションを使用して addsub.csh を実行する前に、`-type db` オプションを使用して、サブスライバを部分的に準備する必要があります。



## 仮想プライベート Portal での Portal 中間層のインストール

OPCA を使用して Portal 中間層インストールを実行し、Portal 中間層の設定を再構成することができます。MIDTIER モードで OPCA を実行する方法の詳細は、[B.2.2 項「MIDTIER」](#)を参照してください。

Portal 中間層インストールは、仮想プライベート Portal に対して実行することができます。

## J.7 制限事項

次の項に、様々な仮想プライベート Portal のスクリプトと操作に対する制限事項をまとめています。

- スクリプト
- ASP ユーザーおよびグループのサポート
- サブスクリイバの追加
- サブスクリイバの削除

### J.7.1 スクリプト

仮想プライベート Portal の構成およびプロビジョニングのスクリプトは、現在のところ、UNIX C シェル環境でのみ実行できます。

### J.7.2 ASP ユーザーおよびグループのサポート

- トップ・レベルの ASP グループには、どの OID 権限も割り当てないでください。権限は、サブスクリイバ間でコピーまたは同期化されません。ASP グループのサブグループの権限は、同期化され、コピーされます。
- デフォルトのサブスクリイバ以外のその他のサブスクリイバで実行される OID 内の ASP ユーザーおよびグループの構造に対する変更は、サブスクリイバの同期化のスクリプトが実行されるときは保存されません。
- Portal の生成済のグループは、ASP グループにはできません。

### J.7.3 サブスクリイバの追加

- 新しいサブスクリイバの名前は、OID 内で一意である必要があります。

### J.7.4 サブスクリイバの削除

- このスクリプトは、デフォルトのサブスクリイバを削除するためには使用できません。デフォルトのサブスクリイバの削除には、OPCA を使用します。OPCA の実行方法の詳細は、付録 B 「OracleAS Portal Configuration Assistant のコマンドライン・ユーティリティの使用」を参照してください。

## J.8 スクリプトのパラメータ

表 J-2 から表 J-6 に、仮想プライベート Portal を管理するために提供されているスクリプト用のすべてのパラメータを一覧表示し、説明します。これらのスクリプトは、ORACLE\_HOME/portal/admin/plsql/wwhost ディレクトリにあります。

---

**注意：** 任意のスクリプトのパラメータのリストを作成するには、UNIX シェル内でパラメータなしでそのスクリプトを実行します。スクリプトの出力をログ・ファイルに保存する場合は、<log\_filename> を使用するログ・ファイルの名前で置き換えて、コマンドの最後に |& tee <log\_filename> を入力します。

---

表 J-2 enblhstg.csh

パラメータ	説明
-pc	<host>:<port>:<sid> の書式の Portal スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。これは、必須のパラメータです。
-ps	Portal スキーマ名。デフォルトでは、portal です。
-pw	Portal スキーマのパスワード。デフォルトでは、-ps パラメータの値です。
-sc	<host>:<port>:<sid> の書式の SSO スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。デフォルトでは、-pc パラメータの値です。
-ss	SSO スキーマ名。デフォルトでは、orasso です。
-sw	SSO スキーマのパスワード。デフォルトでは、-ss パラメータの値です。
-h	OID サーバーのホスト名。これは、必須のパラメータです。
-p	OID サーバーのポート番号。デフォルトでは、389 です。

表 J-2 enblhstg.csh (続き)

パラメータ	説明
-d	OID バインド DN。デフォルトでは、cn=orcladmin です。この DN には、新しいサブスクリバを作成するための権限など、OID 管理権限がある必要があります。
-w	OID バインド DN のパスワード。デフォルトでは、welcome1 です。

表 J-3 addsub.csh

パラメータ	説明
-name	新しいサブスクリバの OID ニックネーム。これは、必須のパラメータです。この名前は、他のどのサブスクリバによっても使用されていないものにします。
-id	新しいサブスクリバの内部の ID で、Portal および SSO 内で使用されます。これは、必須のパラメータです。この名前は、Portal または SSO スキーマ内で、他のどのサブスクリバによっても使用されていないものにします。
-type	有効な値は、次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ db: Portal および SSO スキーマ内でシード・データのみをコピーします。</li> <li>■ ldap: Portal および SSO のために OID エントリを作成します。-type db オプションを使用して一時的なサブスクリバを追加した後に、-type ldap オプションのみを使用してスクリプトを実行することができます。</li> <li>■ all: デフォルト値であり、db と ldap タイプのジョブを両方とも実行します。</li> </ul>
-pc	<host>:<port>:<sid> の書式の Portal スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。これは、必須のパラメータです。
-pp	Portal インスタンスの SYS ユーザーのパスワード。デフォルトでは、change_on_install です。
-ps	Portal スキーマ名。デフォルトでは、portal です。
-pw	Portal スキーマのパスワード。デフォルトでは、-ps パラメータの値です。
-sc	<host>:<port>:<sid> の書式の SSO スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。デフォルトでは、-pc パラメータの値です。

**表 J-3 addsub.csh (続き)**

パラメータ	説明
-sp	SSO インスタンスの SYS ユーザーのパスワード。デフォルトでは、SSO と Portal が別のデータベース・インスタンスにある場合は change_on_install であり、SSO と Portal が同じデータベース・インスタンスを使用する場合は -pp パラメータの値です。
-ss	SSO スキーマ名。デフォルトでは、orasso です。
-sw	SSO スキーマのパスワード。デフォルトでは、-ss パラメータの値です。
-a	Portal アプリケーション名。デフォルトでは、<portal_schema>.<sid>.<dbhost> です。
-h	OID サーバーのホスト名。これは、必須のパラメータです。
-p	OID サーバーのポート番号。デフォルトでは、389 です。
-d	OID バインド DN。デフォルトでは、cn=orcladmin です。この DN には、新しいサブスクリイバを作成するための権限など、OID 管理権限がある必要があります。
-w	OID バインド DN のパスワード。デフォルトでは、welcome1 です。
-rc	OID ルート・コンテキスト DN。デフォルトでは、cn=OracleContext です。
-sd	テンプレート・サブスクリイバの OID ニックネーム。デフォルトでは、Portal のデフォルト・サブスクリイバのニックネームです。
-tp	OID サブスクリイバ作成のためのテンプレート・ファイルのファイル・システムのパス。デフォルトでは、ORACLE_HOME/ldap/schema/oid/ です。

**表 J-4 rmsub.csh**

パラメータ	説明
-name	削除される既存の非デフォルト・サブスクリイバの OID ニックネーム。これは、必須のパラメータです。デフォルトのサブスクリイバは、このスクリプトで削除できません。かわりに OPCA を使用してください。
-pc	<host>:<port>:<sid> の書式の Portal スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。これは、必須のパラメータです。
-pp	Portal インスタンスの SYS ユーザーのパスワード。デフォルトでは、change_on_install です。
-ps	Portal スキーマ名。デフォルトでは、portal です。

表 J-4 rmsub.csh (続き)

パラメータ	説明
-sc	<host>:<port>:<sid> の書式の SSO スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。デフォルトでは、-pc パラメータの値です。
-sp	SSO インスタンスの SYS ユーザーのパスワード。デフォルトでは、SSO と Portal が別のデータベース・インスタンスにある場合は change_on_install であり、SSO と Portal が同じデータベース・インスタンスを使用する場合は -pp パラメータの値です。
-ss	SSO スキーマ名。デフォルトでは、orasso です。
-a	Portal アプリケーション名。デフォルトでは、<portal_schema>.<sid>.<dbhost> です。
-h	OID サーバーのホスト名。これは、必須のパラメータです。
-p	OID サーバーのポート番号。デフォルトでは、389 です。
-d	OID バインド DN。デフォルトでは、cn=orcladmin です。この DN には、新しいサブスクライバを作成するための権限など、OID 管理権限がある必要があります。
-w	OID バインド DN のパスワード。デフォルトでは、welcome1 です。
-cs	コミット・サイズ。必須のデータベースのコミット前に削除できる行数を指定します。デフォルトでは、1000 です。

表 J-5 syncasp.csh

パラメータ	説明
-mode	これは、必須のパラメータです。有効な値は、次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ pwd: 一人の ASP ユーザーのためにパスワードを同期化します。</li> <li>■ dif: 最後の同期化以後の ASP 構造の変更を同期化します。</li> <li>■ all: ASP 構造の完全な同期化を行います。</li> </ul>
-pc	<host>:<port>:<sid> の書式の Portal スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。これは、必須のパラメータです。
-ps	Portal スキーマ名。デフォルトでは、portal です。
-pw	Portal スキーマのパスワード。デフォルトでは、-ps パラメータの値です。
-h	OID サーバーのホスト名。これは、必須のパラメータです。
-p	OID サーバーのポート番号。デフォルトでは、389 です。

**表 J-5 syncasp.csh (続き)**

パラメータ	説明
-d	OID バインド DN。デフォルトでは、cn=orcladmin です。この DN には、新しいサブスクリイバを作成するための権限など、OID 管理権限がある必要があります。
-w	OID バインド DN のパスワード。デフォルトでは、welcome1 です。
-u	このパラメータは、パスワードを同期化させる必要があるユーザー名を指定するために、パスワード同期のパラメータ (pwd) とともに使用されません。
-l	ログ・ファイル名。

**表 J-6 embdip.csh**

パラメータ	説明
-pc	<host>:<port>:<sid>t の書式の Portal スキーマのデータベース接続文字列。<host> は、絶対ドメイン名です。これは、必須のパラメータです。
-pp	Portal インスタンスの SYS ユーザーのパスワード。デフォルトでは、change_on_install です。
-ps	Portal スキーマ名。デフォルトでは、portal です。
-h	OID サーバーのホスト名。これは、必須のパラメータです。
-p	OID サーバーのポート番号。デフォルトでは、389 です。
-d	OID バインド DN。デフォルトでは、cn=orcladmin です。この DN には、新しいサブスクリイバを作成するための権限など、OID 管理権限がある必要があります。
-w	OID バインド DN のパスワード。デフォルトでは、welcome です。
-enable	Portal 内のすべてのサブスクリイバで DIP を有効化します。このパラメータは、-disable パラメータに優先します。
-disable	Portal 内のすべてのサブスクリイバで DIP を無効化します。

## A

ACL, 6-70  
addsub.csh, J-27  
Application Server Control  
  OracleAS Portal からのアクセス, 7-12  
  OracleAS Portal の監視, 7-10  
  OracleAS Portal の構成, 7-11  
  アクセス, 7-10  
  使用, 7-10  
  ポート情報の表示, 7-32  
  ログイン, 7-4  
  ログ・ファイルの表示, 13-35  
application.log, 13-15  
ASP, J-2  
  ユーザーとグループ, J-11  
AUTHENTICATED\_USERS グループ, 6-7

## C

cache.conf, 1-24  
cachsub.sql, C-2  
Cookie  
  OraDAV の有効期限, 6-80  
Cookie ドメイン  
  すべての中間層サーバーに送信するための適用範囲  
  の変更, C-8  
ctxcrind.sql, 8-28, 8-29  
ctxdrind.sql, 8-30  
CTXSYS スキーマ, 8-22

## D

DAD  
  DAD 情報の管理, 7-19

  構成, 4-26  
dads.conf  
  DAD 名の更新, 12-6  
DAD エントリ  
  新規作成, 12-6  
DAS, 6-48  
  mod\_osso や OracleAS Single Sign-On との関係,  
  6-48  
  OracleAS Portal 中間層上に構成, 6-41  
  secdaslc.sql, 6-44  
  値リスト, 6-40  
  権限, 6-48  
  中間層への手動での配置と構成, 6-42  
  パブリック・ロール, 6-55  
Database Access Descriptor (DAD)  
  「DAD」を参照, 7-19  
  データベースとの関係, 9-6  
data-sources.xml ファイル, 8-62  
DBA グループ, 6-7  
DEINSTALL モード  
  OPCA, B-25  
Delegated Administration Services, 6-48  
DIP, J-23  
Directory Integration Platform, J-23  
  仮想プライベート Portal, J-23  
  グローバル設定, 6-117  
Directory Synchronized Provisioning, 6-45  
DIT 構造  
  グループ用, 6-38  
  ニックネーム属性, 6-81  
  ユーザー用, 6-32

## E

ECID

「実行コンテキスト識別子」を参照, 13-12  
ECID ログイン, 13-13  
emblldip.csh, J-30  
enblhstg.csh, J-26  
Enterprise Manager  
「Oracle Enterprise Manager」を参照, 7-1  
event\_log, 13-32

## G

---

Grid Control コンソール  
アプリケーション・パフォーマンスの監視, 7-9  
Portal メトリックの比較, 7-7  
アラートの表示, 7-9  
使用, 7-2  
メトリックしきい値の設定, 7-8  
メトリック通知の設定, 7-7  
履歴傾向の監視, 7-5  
groupofNames  
グループのサブスクリプション・プロファイル,  
6-47  
groupOfNames オブジェクト・クラス  
属性, 6-38  
groupOfUniqueNames オブジェクト・クラス, 6-37  
属性, 6-38

## H

---

HMAC キー  
設定, 12-7  
HTTP Server  
「Oracle HTTP Server」を参照, 7-17  
httpd.conf, 9-7, 13-17  
組み込まれた oradav.conf ファイル, 4-42  
定義, E-2  
HTTPS  
LDAP, 6-123  
Oracle Internet Directory のネットワーク接続,  
6-116  
OracleAS Single Sign-On, 6-86  
OracleAS Web Cache, 6-90  
Wallet の作成, 6-90  
イベント・サーブレット, 6-106  
完全, 6-99  
構成の概要, 6-85  
証明書要求, 6-90  
プロバイダとの通信, 6-74

連携型 Portal アダプタ, 6-107  
ロード・バランサ, 6-109  
ロード・バランサによる構成, 6-110

## I

---

ias\_admin  
パスワード, 3-6  
ias\_admin パスワード, 3-6  
IASCONFIG\_LOC, A-2  
iasconfig.xml, 5-49, 7-14, A-1  
portal.conf, 6-107  
IETF (RFC 2798), 6-33, 6-37  
inctxgrn.sql, 8-26  
inetOrgPerson オブジェクト・クラス, 6-33  
属性, 6-34  
INFRA\_ORACLE\_HOME, 1-12  
init.ora, 3-8, 13-25  
INSO フィルタ, 8-22, 8-25  
ハングの防止, 8-52

## J

---

Java Portal Developer Kit (JPDK), 13-15  
JavaScript  
単一ドメイン, 6-41  
JAZN, 6-28  
JDBC, 8-63

## L

---

LANGUAGE モード  
OPCA, B-18  
LDAP  
Oracle Internet Directory, 6-123  
logcfg.sql, 13-26  
login.jsp, J-9  
LSNR\_TOKEN, E-3

## M

---

max cache, C-2  
MaxClients, 9-7  
METADATA\_REP\_ORACLE\_HOME, 1-12  
MID\_TIER\_ORACLE\_HOME, 1-12  
MIDTIER モード  
OPCA, B-7



mod\_osso  
DAS や OracleAS Single Sign-On との関係, 6-48  
パートナ・アプリケーション用, 6-66

mod\_plsql サービス  
DAD, 7-19  
監視と管理, 7-17  
キャッシュ設定, 7-18  
状態情報, 7-18  
パフォーマンス・ログ, 7-27  
ログ, 13-17

mod\_plsql 設定  
セキュリティのための構成, 6-119

mod\_dav, 4-42

mod\_oradav モジュール, 4-42

## N

---

Network Address Translation (NAT) バウンス・  
バック, 5-9

N 層認証, 6-84

## O

---

ODM, J-7  
使用, J-7

OmniPortlet  
エクスポートとインポート, 10-44  
構成, 5-45  
セキュリティ, 6-76

OPCA  
DEINSTALL モード, B-25  
LANGUAGE モード, B-18  
MIDTIER モード, B-7  
PORTAL モード, B-4  
SYSOBJECTS モード, B-23  
スタンドアロンで使用, B-1

OPCA モード, B-3

opmn.xml, 13-10

Oracle Application Server  
構成ファイル, E-1 ~ E-5  
ポート情報の表示, 7-32

Oracle Application Server Repository Creation  
Assistant  
PORTAL OPCA モード, B-6

Oracle Application Server Repository Creation  
Assistant ツール  
カスタマ・データベースへのインストールに使用,  
3-3

Oracle Directory Integration Platform, 6-45  
要件, 6-47

Oracle Directory Manager, J-7  
使用, J-7

Oracle Enterprise Manager, 7-1  
Application Server Control の使用, 7-10  
Grid Control コンソールの使用, 7-2  
OracleAS Portal の問題のトラブルシューティング,  
13-2

Oracle Help for the Web, 3-3

Oracle HTTP Server  
SSL, 6-100  
SSL の起動モード, 6-101  
監視と管理, 7-17  
ログ, 13-17

Oracle Internet Directory, 6-30  
groupOfUniqueNames, 6-37  
inetOrgPerson, 6-33  
LDAPS, 6-123  
orclGroup, 6-37  
orclUser, 6-34  
orclUserV2, 6-34  
アプリケーション・エンティティ, 6-32  
エントリ, 6-30  
キャッシュ, 6-40  
キャッシュされたパラメータの更新, 6-117  
グループ, 6-31  
グループ・コンテナ, 6-30  
グループ属性, 6-37  
グループの DIT 構造, 6-38  
情報を更新するための権限, 6-48  
ディレクトリ同期サブスクリプション・エントリ,  
6-32  
デフォルト・ユーザー・アカウント, 6-30  
ニックネーム属性, 6-81  
ネットワーク接続での SSL の構成, 6-116  
ユーザー属性, 6-33  
ユーザーとグループの値リスト, 6-40  
ユーザーの DIT 構造, 6-32

Oracle Text  
TEXTTEST を使用したトラブルシューティング,  
H-1  
www\_context API, G-1  
概要, 8-21  
結果オプションの設定, 8-16  
索引, 8-28, 8-36, 8-40, 8-41, 8-43

- 前提条件, 8-22
- テーマと要旨, 8-16
- トラブルシューティング, 8-54, 13-38
- プロキシ設定の構成, 8-17
- ベース URL の構成, 8-17
- 有効化と無効化, 8-15
- Oracle Text 索引
  - URL コンテンツの検索, 8-36
  - エラー, 8-43, 8-44, 8-46
  - 監視, 8-41
  - 管理 API, G-1
  - 最適化, 8-34
  - 作成と削除, 8-28
  - 状態, 8-40
  - 同期化, 8-32
  - トラブルシューティング, 8-48
- Oracle Text の要旨, 8-16
- Oracle Ultra Search
  - OracleAS Portal での構成, 8-18
  - 概要, 8-55
  - 管理ツール, 8-60
  - 管理ツールへのアクセス, 7-23
  - 制限事項, 8-68
  - 接続, 8-67
  - パブリック・データの検索, 8-67
  - ポートレット, 8-58, 8-66
  - ポートレット・サンプル・ファイル, 8-68
- Oracle Wallet Manager, 6-90
- ORACLE\_HOME, 1-12
  - 区別, 1-12
  - 表記規則, 1-12
- OracleAS Metadata Repository
  - logcfg.sql, 13-26
  - ログ, 13-25
- OracleAS Metadata Repository の情報, 7-14
- OracleAS Portal
  - Enterprise Manager による監視, 7-1
  - OracleAS Portal ユーザー・プロパティの Oracle Internet Directory へのマッピング, 6-35
  - PlsqlExclusionList ディレクティブ, 6-122
  - Web Cache の設定, 7-14
  - 開始, 4-2
  - 情報の検索, 4-9
  - トラブルシューティング, 13-1
  - パフォーマンスのレポート, 7-27
  - ブラウザでのアクセス, 4-9
  - ユーザーおよびグループの作成, 6-28
  - ユーザーとグループの値リスト, 6-40
- OracleAS Portal Developer Kit
  - ログ, 13-22
- OracleAS Portal Diagnostic Assistant
  - インストール後に実行, 3-7
  - 使用, 13-33
  - レポート, 13-33
- OracleAS Portal に関する情報の検索, 4-9
- OracleAS Portal のログ・レジストリ, 7-28
- OracleAS Single Sign-On, 6-29
  - DAS や mod\_osso との関係, 6-48
  - ossoreg, 6-89, 6-97, 6-107, 6-115
  - SSL, 6-86
  - 以前のリリースの相互運用性, 6-29
  - 構成, 6-29
  - トラブルシューティング, 13-2
- OracleAS Single Sign-On, 対応する言語のインストール, 3-3
- OracleAS Syndication Services
  - 監視と管理, 7-23
- OracleAS Web Cache
  - OracleAS Portal のための設定, 7-14
  - SSL, 6-90
  - SSL の Site-to-Server Mapping, 6-96
  - SSL ポートの構成, 6-94, 6-102
  - SSL 用の公開アドレスとプロトコルの指定, 6-97, 6-106
  - サイトの定義, 6-94
  - パフォーマンスの監視, 7-20
  - 別のホストで使用するための OracleAS Portal の構成, 7-16
  - ログ, 13-32
- OracleAS Web Cache 構成スクリプト, 5-53
- OraDAV
  - SSL, 6-81
  - セキュリティ, 6-80
  - セッション Cookie の有効期限, 6-80
- oradav.conf
  - DAV 構成ファイル, 4-43
- OraDAV の実装, 4-42
- ORCLADMIN ユーザー, 6-6
- orclGroup オブジェクト・クラス, 6-37
  - 属性, 6-39
- orclUserV2 オブジェクト・クラス, 6-34
  - 属性, 6-35
- orclUser オブジェクト・クラス, 6-34
- ossoreg, 6-89, 6-97, 6-107, 6-115

OUI, B-1  
OWA パッケージ, B-23

## P

---

### Parallel Page Engine

SSL を部分的に構成, 6-96  
完全 SSL, 6-104  
パフォーマンスの監視, 7-20  
ログ, 13-18

### PDA

インストールの確認, 3-7

### PDK

「OracleAS Portal Developer Kit」を参照, 13-22

### PL/SQL HTTP アダプタ, 12-1, 12-2

概要, 12-2

### PlsqlExclusionList ディレクティブ, 6-122

### PlsqlSessionCookieName

値の変更, 12-6

### PORTAL

Single Sign-On の管理権限, 6-82  
スキーマのパスワード, 6-61

### Portal

アウト・オブ・ボックス, J-8  
パスワード, 3-6  
ログイン, 3-6

### Portal DB プロバイダ

移行, 10-53  
グローバル権限, 6-14

### Portal DB プロバイダの移行, 10-53

### PORTAL\_ADMINISTRATORS グループ, 6-8

### PORTAL\_ADMIN ユーザー, 6-6

### PORTAL\_APP スキーマ, 6-83

### PORTAL\_DEMO スキーマ, 6-83

### PORTAL\_DEVELOPERS グループ, 6-9

### PORTAL\_PUBLIC スキーマ, 6-83

### Portal 依存性設定

Web Cache, 5-49, 7-14

### Portal 依存性設定ツール, A-14

### Portal 依存性設定ファイル, A-2

### Portal キャッシュ

コンテンツ・キャッシュ, 1-24  
セッション・キャッシュ, 1-24  
パフォーマンスの向上, 1-24  
理解, 1-24

### Portal サービスの監視, 7-12

### PORTAL スキーマ, 6-83

### Portal スキーマ

OracleAS Metadata Repository, B-1

### Portal パスワード, 3-6

### Portal へのコンテンツのシンジケート

#### Portal の構成

宛先フォルダへの Portal 権限の付与, 11-4  
シンジケーション・チャンネルの管理ホーム・  
ページの作成, 11-3

#### 概要, 11-1

拡張構成パラメータ, 11-20

シンジケーション・チャンネルの管理ポートレットの  
使用, 11-4

シンジケーション・ポートレット・プロバイダの登  
録, 11-3

### PORTAL モード

OPCA, B-4

### PORTAL ユーザー, 6-6

### PORTLET\_PUBLISHERS グループ, 6-8

### PPE

「Parallel Page Engine」を参照, 7-20

### provideruiacIs.xml, 6-22

### ptlasst, B-1

### ptshoot.pl スクリプト, 13-34

### PUBLIC ユーザー, 6-6

## R

---

### RepCA, 3-3

### rmsub.csh, J-28

### RW\_ADMINISTRATOR グループ, 6-9

### RW\_BASIC\_USER グループ, 6-9

### RW\_DEVELOPER グループ, 6-9

### RW\_POWER\_USER グループ, 6-9

## S

---

### secdaslc.sql, 6-44

### secjsdom.sql, 6-41

### secupoid.sql, 6-123, 6-125, C-5

Oracle Internet Directory に接続するための SSL の  
構成, C-5

実行, 6-124

### ServerName, E-3

### shared\_pool\_size パラメータ, 13-11

### Single Sign-On, 6-29

SDK, 6-67

アプリケーションの認証, 6-64

## SSL

- LDAPS, 6-123
  - Oracle HTTP Server, 6-100
  - Oracle Internet Directory のネットワーク接続, 6-116
  - OracleAS Single Sign-On, 6-86
  - OracleAS Web Cache, 6-90
  - OracleAS Web Cache の SSL ポートの構成, 6-94
  - OraDAV, 6-81
  - Parallel Page Engine, 部分的, 6-96
  - SSL ポートの構成, 6-102
  - Wallet の作成, 6-90
  - 暗号化, 6-28
  - イベント・サブレット, 6-106
  - オリジナル・サーバー, 6-102
  - 完全, 6-99
  - 公開アドレスとプロトコルの指定, 6-97, 6-106
  - 構成の概要, 6-85
  - 証明書要求, 6-90
  - プロバイダ, 6-74
  - プロバイダ用, 6-75
  - 連携型 Portal アダプタ, 6-107
  - ロード・バランサ, 6-109
  - ロード・バランサによる構成, 6-110
- ssl.conf, 6-100
- Wallet エントリ, 6-101
- SSL の構成, 6-85
- ssodatan, B-13
- ssodatan スクリプト, B-13
- STEM 検索, 8-27
- syncasp.csh, J-29
- Syndication Services
- 「OracleAS Syndication Services」を参照, 7-23

## T

---

- targets.xml, 7-24
- TCP/IP, 5-35
- TEXTTEST ユーティリティ, 8-54, 13-38, H-1
- tnsnames.ora, E-2

## U

---

### Ultra Search

- 「Oracle Ultra Search」を参照, 8-55
- 概要, 8-55
- コンポーネント, 8-56

### UltraSearch

- 仮想プライベート Portal, J-22

### UNIX

- エミュレーション・ユーティリティ, 10-24

### URL

- Login Server に格納されているパートナ・アプリケーション, E-3

### URL の検索, 8-36

### UTL\_FILE\_DIR パラメータ, 13-25

## V

---

### VPP, J-1

## W

---

### Wallet

- Oracle Wallet Manager, 6-90
- ssl.conf のエントリ, 6-101
- 作成, 6-90
- 保存, 6-93

### Web Cache

- OracleAS Portal のための設定, 7-14
- 「OracleAS Web Cache」を参照, 7-14, 7-20

### WebClipping

- 構成, 5-45

### WebDAV

- Portal アクセスのパラメータ, 4-43
- 仮想プライベート Portal, J-21

### web.xml

- logmode, 13-18

### Web クリップिंग

- エクスポートとインポート, 10-44

### Web クリップिंग管理

- Web Cache の構成, I-6
- Web クリップिंग・プロバイダ・テスト・ページの使用
- Web クリップिंग・リポジトリの構成, I-3
- キャッシュの構成, I-7
- 詳細セキュリティ・オプション (ASO), 6-78
- プロキシ設定の構成, I-4
- 「Web クリップिंग」ポートレットの使用前に実行するタスク, I-1

### Web クリップिंग・リポジトリの構成, I-3

### 手動での Web Cache の構成, I-8

### 手動でのプロキシの設定, I-5

### 詳細セキュリティ・オプション (ASO) パラメータ

- の設定, 6-78
- セキュリティの構成
  - 詳細セキュリティ・オプション (ASO), 6-78
  - 信頼できるサイトの証明書の追加, 6-77
- 認可されていない外部 Web サイトからのクリッピングの制限, I-5
- プロキシ設定の構成, I-4
- Web クリッピングの管理
- Web Cache の構成, I-6
- Web クリッピング・プロバイダ・テスト・ページの使用
  - Web クリッピング・リポジトリの構成, I-3
  - キャッシュの構成, I-7
  - 詳細セキュリティ・オプション (ASO), 6-78
  - プロキシ設定の構成, I-4
- 「Web クリッピング」ポートレットの使用前に実行するタスク, I-1
- Web クリッピング・リポジトリの構成, I-3
- 手動での Web Cache の構成, I-8
- 手動でのプロキシの設定, I-5
- 詳細セキュリティ・オプション (ASO) パラメータの設定, 6-78
- セキュリティの構成
  - 詳細セキュリティ・オプション (ASO), 6-78
  - 信頼できるサイトの証明書の追加, 6-77
- 認可されていない外部 Web サイトからのクリッピングの制限, I-5
- プロキシ設定の構成, I-4
- Web プロバイダ, 12-3
  - 権限, 6-22
  - タイムアウト・エラーの回避, 13-10
  - パフォーマンスの監視, 7-21
- wwsec\_app\_priv.process\_signon, E-3
- WWSEC\_ENABLER\_CONFIG\_INFO\$, E-3
- WWSO\_PAPP\_CONFIGURATION\_INFO\$, E-4
- www\_context API
  - Oracle Text 索引の管理, G-1
  - 定数, G-10
  - プロシージャ, G-2
  - 例外, G-12

## あ

---

- アーキテクチャ
  - セキュリティ, 6-3, 6-28
- アウト・オブ・ボックスの Portal, J-8
- アクセス

- 適用, 6-27
- ポート情報, 7-32
- モデル, 6-27
- アクセス制御リスト, 6-63, 6-70
- 値リスト
  - ユーザーとグループ, 6-40
- アップロード・ファイル
  - 割り当てる総容量, 4-16
  - アップロード・ファイルに割り当てる総容量, 4-16
  - アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズ, 4-17
- アプリケーション
  - mod\_osso, 6-66
  - Single Sign-On SDK, 6-67
  - 外部に対するセキュリティ, 6-68
  - セキュリティ, 6-64
- アプリケーション・エンティティ, 6-32
  - パスワード, 6-125
- アプリケーション・サービス・プロバイダ, J-2

## い

---

- イベント
  - ディレクトリ同期, 6-46
- イベント・サブレット
  - SSL, 6-106
- イベントのログ記録, 7-28
- インストール
  - デフォルト・グループ, 6-7
  - デフォルト・スキーマ, 6-83
  - デフォルト・ユーザー, 6-6
- インストール後
  - セキュリティのチェックリスト, 6-119
- インターネット検索エンジン・リンク, 8-14

## え

---

- エージェント
  - ディレクトリ同期プロビジョニング, 6-40
- エクスポートとインポート
  - opeasst.csh, 10-22, 10-24
  - エクスポートとインポートの機能, 10-2
  - 中間層のバージョン, 10-5
  - トランスポート・セット, 10-2
  - 保護データ・リポジトリ, 10-44
  - マニフェスト, 10-2
- エミュレーション・ユーティリティ, 10-24

エラー

Oracle Text 索引, 8-43

Oracle Text はインストールされていません, 8-16  
トラブルシューティング, 13-1

エラー・メッセージ・ページ

指定, 4-19

エラー・メッセージ・ページの指定, 4-19

## お

---

オブジェクト権限, 6-17

オリジナル・サーバー

SSL, 6-102

オンライン・ヘルプ・システム, 3-3

## か

---

開始

OracleAS Portal, 4-2

概要

仮想プライベート Portal, J-4

「拡張検索」ポートレット, 8-2

インターネット検索エンジン・リンク, 8-14

検索結果ページ, 8-10

「拡張検索」リンク, 8-12

カスタム・データベース

OracleAS Metadata Repository のインストール,  
3-3

「カスタム検索」ポートレット, 8-2

インターネット検索エンジン・リンク, 8-14

「拡張検索」リンク, 8-12

検索結果ページ, 8-10

仮想プライベート Portal, J-1

Directory Integration Platform, J-23

UltraSearch, J-22

WebDAV, J-21

概要, J-4

拡張機能, J-5

詳細操作, J-18

事例, J-1

スクリプト, J-26

仮想プライベート Portal の有効化

インストール前のチェックリスト, J-6

仮想ホスト

OracleAS Single Sign-On への OracleAS Portal の登  
録, 5-36

OracleAS Web Cache の構成, 5-36

エントリの作成, 5-32

構成, 5-29

カテゴリ・ページ, 13-8

監視

OracleAS Portal のコンポーネント, 7-1

パッケージの保護, 6-122

完全

同期, J-20

管理, 7-1

ASP のユーザーおよびグループ, J-18

Single Sign-On の権限, 6-82

グローバル権限, 6-15

へのアクセス, 6-121

管理者ロール

例, 6-56

管理ツール, 4-7

## き

---

キー・ストア, 12-7

管理用 SQL スクリプト, 12-7

既存のデータベース

OracleAS Metadata Repository のインストール,  
3-3

「基本検索」ポートレット, 8-2

「拡張検索」リンク, 8-12

検索結果ページ, 8-10

基本検索ボックス

検索結果ページ, 8-10

基本的なページ管理

アップロード・ファイルに割り当てる総容量の設  
定, 4-16

アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズの  
設定, 4-17

エラー・メッセージ・ページの指定, 4-19

個人用ページの作成, 4-14

システムのデフォルト・スタイルの設定, 4-13

状況依存ヘルプ・リンクの削除, 4-21

デフォルト・ホーム・ページの設定, 4-10

ページ・グループ割当ての変更, 4-18

ユーザーのログアウト時に表示されるページの設  
定, 4-20

逆プロキシ・サーバー

SSL の構成, 6-110

構成, 5-40

キャッシュ

mod\_plsql, 7-18

Oracle Internet Directory, 6-40  
OracleAS Web Cache, 7-14  
パフォーマンスの向上, C-2  
共有コンポーネント  
グローバル権限, 6-14

## く

### グループ

AUTHENTICATED\_USERS, 6-7  
DBA, 6-7  
DIT 構造, 6-38  
Oracle Internet Directory, 6-31  
Oracle Internet Directory のコンテナ, 6-30  
Oracle Internet Directory の属性, 6-37  
PORTAL\_ADMINISTRATORS, 6-8  
PORTAL\_DEVELOPERS, 6-9  
Portal グループ・プロファイル, 6-54  
PORTLET\_PUBLISHERS, 6-8  
RW\_ADMINISTRATOR, 6-9  
RW\_BASIC\_USER, 6-9  
RW\_DEVELOPER, 6-9  
RW\_POWER\_USER, 6-9  
値リスト, 6-40  
「グループ」ポータルレット, 6-53  
権限の割当て, 6-58  
検索ベースの DN, 6-118  
作成, 6-56  
作成ベースの DN, 6-118  
サブスクリプション・プロファイルの更新, 6-47  
生成済, 6-7  
デフォルト, 6-7  
デフォルト・ホーム・ページ, 4-11  
同期化, B-9  
パブリック, 6-55  
変更イベント, 6-45  
ポータルレットへのアクセス, 6-48  
ロールとして有効にする, 6-59  
グループ権限  
グローバル権限, 6-15  
グループのデフォルト・ホーム・ページ, 4-11  
設定, 4-11  
グローバル権限, 6-10  
グローバル設定, 6-117  
Directory Integration Platform の同期化, 6-117  
Oracle Internet Directory のキャッシュの更新,  
6-117

グループ検索ベースの DN, 6-118  
グループ作成ベースの DN, 6-118

## け

### 権限

OmniPortlet, 6-76  
Single Sign-On の管理用, 6-82  
オブジェクトの制御, 6-17  
グループへの割当て, 6-58  
グローバル, 6-10  
グローバル管理, 6-15  
グローバル・ページ・グループ, 6-11  
シンプル・パラメータ・フォーム, 6-76  
すべてのアプリケーション, 6-14  
すべての共有コンポーネント, 6-14  
すべてのグループ権限, 6-15  
すべてのスキーマ, 6-16  
すべてのスタイル, 6-13  
すべてのトランスポート・セット, 6-17  
すべてのプロバイダ, 6-13  
すべてのページ, 6-12  
すべてのページ・グループ, 6-11  
すべてのポータルレット, 6-13  
すべてのユーザー・プロファイル, 6-15  
すべてのログ, 6-16  
生成済, 6-120  
プロバイダ, 6-22  
「ユーザーの作成」ページの割当てセクションを非  
表示にする, 6-60

### 言語

Oracle Text のマルチレクサー, 8-26  
検索オプション, 8-1  
Oracle Text, 8-3  
Oracle Text 検索ポータルレットの構成, 8-15  
Oracle Ultra Search, 8-3  
Oracle Ultra Search の構成, 8-18  
OracleAS Portal 検索ポータルレットの構成, 8-10  
OracleAS Portal の検索, 8-2  
構成方法の決定, 8-7  
デフォルトの機能, 8-4  
検索結果  
検索結果ページの選択, 8-10  
すべてのページの結果の制限, 8-11

## リ

### 構成

- OracleAS Single Sign-On, 6-29
- SSL, 6-85

### 個人用ページ, 4-14

- 新しいユーザー用に作成, 4-15
- 新しいユーザー用に自動作成, 4-14
- 作成, 4-14

### コンテナ

- グループ, 6-30

### コンテンツ・キャッシュ, 1-24

### コンポーネント

- 移行, 10-53

### コンポーネントの構成

- Application Server Control, 7-11

### コンポーネントの選択

- Application Server Control, 7-11

## そ

### サーバー

- プロキシ, 5-40

### サーバー認証

- プロバイダのセキュリティ用, 6-72

### 最適化

- Oracle Text 索引, 8-31

### サイト

- SSL 環境の OracleAS Web Cache のサイトの定義, 6-94

- SSL の Site-to-Server Mapping, 6-96

- SSL ホスト名およびポートの定義, 6-103

- サーバー・マッピングへの, 6-104

- 別名, 6-95

### 索引

- Oracle Text, 8-28, 8-36, 8-40, 8-41, 8-43

### 削除

- サブスクライバ, J-5, J-20

- 状況依存ヘルプ・リンク, 4-21

### 作成

- カテゴリ・ページ, 13-8

- 既存ユーザーの個人用ページ, 4-15

- 個人用ページ, 4-14

- 自動で新しいユーザーの個人用ページを, 4-14

- パースペクティブ・ページ, 13-8

### サブスクライバ, J-5

- 削除, J-5, J-20

- 下処理, J-24

- 追加, J-5, J-16

### サブスクリプション・プロファイル

- 更新, 6-47

## し

### シェル・スクリプト

- ツール, 10-24

### システム

- デフォルト・ホーム・ページ, 4-11

### システムのデフォルト・スタイル, 4-13

- 設定, 4-13

### システムのデフォルト・ホーム・ページ, 4-11

- 設定, 4-11

### 下処理

- サブスクライバ, J-24

### 失効化

- 強い失効化と弱い失効化, C-2

### 失効化ジョブ

- 構成, C-2

### 失効化ベースのキャッシュ, C-2

### 実行コンテキスト識別子 (ECID), 13-12

### 失効メッセージ, C-2

### 指定

- エラー・メッセージ・ページ, 4-19

### 使用

- ODM, J-7

- Oracle Directory Manager, J-7

### 状況依存ヘルプ・リンク, 4-21

- 削除, 4-21

### 状態情報, 7-13, 7-17

- 重大度レベルのしきい値, 7-24

### 証明書

- Oracle Wallet Manager, 6-90

- Wallet の作成, 6-90

- サーバーのユーザー証明書のインポート, 6-93

- 信頼できる, 6-92

- 信頼できる証明書のインポート, 6-92

- 信頼できる証明書の変更, 6-92

- 要求, 6-90

- 要求のエクスポート, 6-92

### 事例

- 仮想プライベート Portal, J-1

### 診断レポート, 13-33

### シンプル・パラメータ・フォーム

- セキュリティ, 6-76



信頼できる証明書  
インポート, 6-92  
管理, 6-92  
変更, 6-92

## す

---

スキーマ  
PORTAL, 6-83  
PORTAL\_APP, 6-83  
PORTAL\_DEMO, 6-83  
PORTAL\_PUBLIC, 6-83  
グローバル権限, 6-16  
デフォルト, 6-83  
パスワード, 6-61  
スキーマ・パスワード  
変更, 5-55  
スクリプト  
仮想プライベート Portal, J-26  
スタイル  
グローバル権限, 6-13

## せ

---

生成済プロバイダ  
構成, 5-45  
セキュリティ, 6-1  
AUTHENTICATED\_USERS グループ, 6-7  
DBA グループ, 6-7  
Delegated Administration Service, 6-48  
Directory Synchronized Provisioning, 6-45  
DIT 構造, 6-32  
GROUP DELETE イベント, 6-46  
GROUP MODIFY イベント, 6-46  
groupOfUniqueNames オブジェクト・クラス,  
6-37  
inetOrgPerson オブジェクト・クラス, 6-33  
mod\_plsql 設定, 6-119  
mod\_osso、DAS および OracleAS Single Sign-On  
の関係, 6-48  
OmniPortlet, 6-76  
Oracle Directory Integration Platform, 6-45  
Oracle Internet Directory, 6-30  
Oracle Internet Directory のキャッシュ, 6-40  
Oracle Internet Directory のグループ属性, 6-37  
Oracle Internet Directory のユーザー属性, 6-33  
Oracle Internet Directory パラメータのキャッシュ

の更新, 6-117  
OracleAS Single Sign-On, 6-29  
OracleAS のセキュリティ・サービスの利用, 6-28  
OraDAV のセキュリティ, 6-80  
OraDAV のセッション Cookie の有効期限, 6-80  
ORCLADMIN ユーザー, 6-6  
orclGroup オブジェクト・クラス, 6-37  
orclUserV2 オブジェクト・クラス, 6-34  
orclUser オブジェクト・クラス, 6-34  
PORTAL ADMINISTRATORS グループ, 6-8  
PORTAL\_ADMIN ユーザー, 6-6  
PORTAL\_DEVELOPERS グループ, 6-9  
「Portal グループ・プロファイル」ポートレット,  
6-54  
PORTAL ユーザー, 6-6  
「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレット,  
6-52  
PORTLET\_PUBLISHERS グループ, 6-8  
PUBLIC ユーザー, 6-6  
RW\_ADMINISTRATOR グループ, 6-9  
RW\_BASIC\_USER グループ, 6-9  
RW\_DEVELOPER グループ, 6-9  
RW\_POWER\_USER グループ, 6-9  
Single Sign-On SDK, 6-67  
USER DELETE イベント, 6-46  
USER MODIFY イベント, 6-46  
WWSEC\_FLAT\$ 表, 6-46  
アーキテクチャ, 6-3, 6-28  
アクセス制御リスト, 6-70  
アクセスの適用, 6-27  
アプリケーション・エンティティのパスワード,  
6-125  
以前のリリースからのユーザー・プロパティのマッ  
ピング, 6-35  
以前のリリースとの比較, 6-5  
以前のリリースのグループ・プロパティのマッピ  
ング, 6-39  
インストール後のチェックリスト, 6-119  
オブジェクト権限, 6-17  
外部アプリケーション, 6-68  
概要, 6-2  
監視パッケージ, 6-122  
管理ページへのアクセス, 6-121  
「グループ」ポートレット, 6-53  
グローバル管理権限, 6-15  
グローバル権限, 6-10  
グローバル設定, 6-117

グローバル・ページ・グループ権限, 6-11  
権限, 6-6  
サーバー認証, 6-72  
シンプル・パラメータ・フォーム, 6-76  
生成済の権限, 6-120  
単一ドメインの作成方法, 6-41  
ディレクトリ同期イベント, 6-46  
ディレクトリ同期プロビジョニング・エージェン  
ト, 6-40  
デフォルト・グループ, 6-7  
デフォルト・ユーザー・アカウント, 6-6  
同期化, B-9  
認可, 6-27  
パートナー・アプリケーション, 6-64  
パスワードの保護, 6-120  
不要なオブジェクトの削除, 6-120  
プロバイダとの HTTPS 通信, 6-74  
プロバイダのコンポーネントへのパブリック・アク  
セス, 6-121  
プロバイダの通信, 6-63  
プロバイダのメッセージ認証, 6-73  
プロバイダ用の SSL, 6-75  
ポートレット, 6-62  
ポートレットのためのプログラム, 6-71  
保護されているリソース, 6-10  
モデル, 6-2  
ユーザー, 6-6  
「ユーザー」ポートレット, 6-51  
連携型 Portal アダプタ, 6-79  
「ログイン」ポートレット, 6-123  
セッション  
Cookie, C-8  
OraDAV の有効期限, 6-80  
数の決定, 9-6  
セッション・キャッシュ, 1-24  
セッション・バインド  
OracleAS Web Cache での有効化, 5-27  
設定  
ASP のユーザーおよびグループ, J-12  
アップロード・ファイルに割り当てる総容量, 4-16  
アップロード・ファイルの最大ファイル・サイズ,  
4-17  
グループのデフォルト・ホーム・ページ, 4-11  
システムのデフォルト・スタイル, 4-13  
システムのデフォルト・ホーム・ページ, 4-11  
デフォルト・ホーム・ページ, 4-10  
ユーザーとグループ, J-4

ユーザーのデフォルト・ホーム・ページ, 4-12  
ユーザーのログアウト時に表示されるページ, 4-20

## ち

---

地域, 4-39  
使用の有効化, 4-39  
中間層  
追加, 3-9

## つ

---

追加  
サブスクライバ, J-5, J-16  
通信セキュリティ  
プロバイダ用, 6-63  
ツール, 4-7  
シェル・スクリプト, 10-24

## て

---

ディレクトリ同期サブスクリプション  
Oracle Internet Directory エントリ, 6-32  
ディレクトリ同期プロビジョニング  
エージェント, 6-40  
データベース・オブジェクト・スキーマ, 10-54  
データベース・プロバイダ, 12-3  
パフォーマンスの監視, 7-21  
テーマと要旨  
Oracle Text の有効化, 8-16  
デフォルト・スキーマ, 6-83  
PORTAL, 6-83  
PORTAL\_APP, 6-83  
PORTAL\_DEMO, 6-83  
PORTAL\_PUBLIC, 6-83  
デフォルト・ホーム・ページ, 4-10  
グループ, 4-11  
システム, 4-11  
設定, 4-10  
ユーザー, 4-12  
デルタ  
同期, J-19

## と

---

同期  
完全, J-20

デルタ, J-19  
パスワード, J-19  
同期化, 8-31, B-9  
Oracle Internet Directory のエントリ, 6-32  
ディレクトリ同期プロビジョニング・エージェン  
ト, 6-40  
ユーザーやグループの変更イベント, 6-45  
動作レポート, 7-28  
動作ログのビュー, 7-31  
ドメイン  
ユーザーとグループの値リスト用, 6-41  
トラブルシューティング, 13-1  
Oracle Text, 13-38  
検索機能, 13-37  
携帯型 Portal アダプタ, 13-38  
トランスポート・セット  
グローバル権限, 6-17

## に

---

ニックネーム属性, 6-81  
認可, 6-27  
モデル, 6-27

## ね

---

ネットワーク接続  
Oracle Internet Directory, 6-116

## は

---

パースペクティブ・ページ, 13-8  
パートナー・アプリケーション  
Login Server の構成表, E-3  
mod\_osso によって保護される, 6-66  
Single Sign-On SDK, 6-67  
成功 URL, E-3  
セキュリティ, 6-64  
パスワード  
ias\_admin, 3-6  
Portal, 3-6  
アプリケーション・エンティティ, 6-125  
スキーマ, 6-61  
同期, J-19  
変更, 5-55  
保護, 6-120  
パフォーマンスのレポート, 7-27

パブリック・ロール, 6-55  
例, 6-56

## ひ

---

表示  
ポート情報, 7-32

## ふ

---

ブラウザ  
OracleAS Portal へのアクセス, 4-9  
プロキシ・サーバー, 5-40, 5-43  
Oracle Text で使用, 8-17  
使用するための OracleAS Portal の構成, 5-38  
ドメイン, 5-39  
プロバイダ  
HTTPS 通信, 6-74  
SSL, 6-75  
オブジェクト権限コード, 6-25  
グローバル権限, 6-13  
グローバル権限コード, 6-24  
権限, 6-22  
コンポーネントへのパブリック・アクセスの取消  
し, 6-121  
サーバー認証, 6-72  
通信セキュリティ, 6-63  
データベース・プロバイダと Web プロバイダ,  
12-3  
パフォーマンスの監視, 7-21  
メッセージ認証, 6-73  
メッセージの暗号化, 6-64  
プロバイダ・グループ  
オブジェクト権限コード, 6-25  
グローバル権限コード, 6-24  
権限, 6-22  
プロビジョニング  
Oracle Internet Directory のプロファイル・エン  
トリ, 6-32  
イベント, 6-46  
ユーザーやグループの変更イベント, 6-45

## へ

---

ページ  
グローバル権限, 6-12  
ページ・グループ

- グローバル権限, 6-11
- ページ・グループ割当て, 4-18
  - 変更, 4-18
- 別名
  - OracleAS Web Cache と SSL のサイト, 6-95
- 変更
  - ページ・グループ割当て, 4-18

## ほ

---

- ポート
  - OracleAS Portal へのアクセスに使用, 4-9
  - サイトの SSL の定義, 6-103
  - 情報の表示, 7-32
  - デフォルトの変更, 5-2
- ポートレット
  - Portal グループ・プロファイル, 6-54
  - Portal ユーザー・プロファイル, 6-52
  - アプリケーションのセキュリティ, 6-64
  - グループ, 6-53
  - 権限, 6-13
  - セキュリティ, 6-62
  - プログラムによるセキュリティ, 6-71
  - プロバイダ権限, 6-22
  - ユーザー, 6-51
  - ログイン, 6-123
- ポートレット・スキーマ, 10-53
- 保護されているリソース, 6-10
- 保護データ・リポジトリ, 10-44
- ホスティング
  - 有効化, J-4
- ホスト名
  - サイトの定義, 6-103
- 「保存された検索」ポートレット, 8-2

## ま

---

- マルチレクサー
  - Oracle Text でサポートされる, 8-26

## め

---

- メッセージ認証
  - プロバイダのセキュリティ用, 6-73
- メッセージの暗号化
  - プロバイダのセキュリティ用, 6-64

## も

---

- モバイル・サポート
  - 応答のログ, 4-34
  - 構成, 4-32
  - 手動による再構成, 4-36
  - デフォルトでインストール, 4-31
  - モバイル・アクセスの有効化, 4-32
  - モバイル・ページ・デザインの有効化, 4-34

## ゆ

---

- 有効化
  - 地域, 4-39
  - ホスティング, J-4, J-8
  - ロケール, 4-39
- ユーザー
  - Oracle Internet Directory の属性, 6-33
  - ORCLADMIN, 6-6
  - PORTAL, 6-6
  - PORTAL\_ADMIN, 6-6
  - 「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレット, 6-52
  - PUBLIC, 6-6
  - 値リスト, 6-40
  - デフォルト, 6-6
  - デフォルト・ホーム・ページ, 4-12
  - 同期化, B-9
  - パスワードの保護, 6-120
  - 変更イベント, 6-45
  - ポートレットへのアクセス, 6-48
  - 「ユーザーの作成」ページの割当てセクションを非表示にする, 6-60
  - 「ユーザー」ポートレット, 6-51
- ユーザー・アカウント
  - 生成済, 6-6
- ユーザー証明書
  - インポート, 6-93
- ユーザーとグループ
  - ASP, J-11
  - 設定, J-4
- ユーザーのデフォルト・ホーム・ページ, 4-12
  - 設定, 4-12
- ユーザーのログアウト時に表示されるページの設定, 4-20
- ユーザー・プロファイル
  - グローバル権限, 6-15

## り

---

### リソース

保護されている, 6-10

### リダイレクト

OracleAS Portal URL の簡略化, 4-24

### リポジットリ

「OracleAS Metadata Repository」を参照, 7-14

### リモート・クローラ・ホスト, 8-66

OracleAS Web Cache, 13-32

Parallel Page Engine, 13-18

Portal の動作ログ・ファイル, 7-28

グローバル権限, 6-16

診断ログ・ファイル, 7-24

「ログイン」ポートレット

SSL, 6-123

ロケール, 4-39

使用の有効化, 4-39

## る

---

### ルーター

ロード・バランスの構成, 5-3

## れ

---

### レポート

Portal の動作, 7-28

パフォーマンス, 7-27

### 携帯型 Portal アダプタ

SSL の構成, 6-107

セキュリティ, 6-79

## ろ

---

### ローカルでホストされた Web プロバイダ

構成, 5-45

### ロード・バランス・ルーター

Network Address Translation バウンス・バックの  
構成, 5-9

SSL, 6-109

SSL の構成, 6-110

アクセスされる OracleAS Portal の構成, 5-7

失効化要求の処理, 5-10

複数の中間層の設定, 5-3

要求の受取りと転送, 5-7

### ロール

グループをロールとして有効にする, 6-59

パブリック, 6-55

例, 6-56

### ログ

Java Portal Developer Kit (JPDK), 13-15

Log Viewer の使用, 13-35

mod\_plsql, 13-17

OracleAS Metadata Repository, 13-25

OracleAS Portal Developer Kit, 13-22

